茨城県行方郡北浦村

古屋敷遺跡
調査報告書

1990年3月

山田地区遺跡発掘調査会

例　言

1．本報告書は、茨城県行方郡北浦村大字山田2434番地他に所在する古屋敷遺跡の調査報告である。

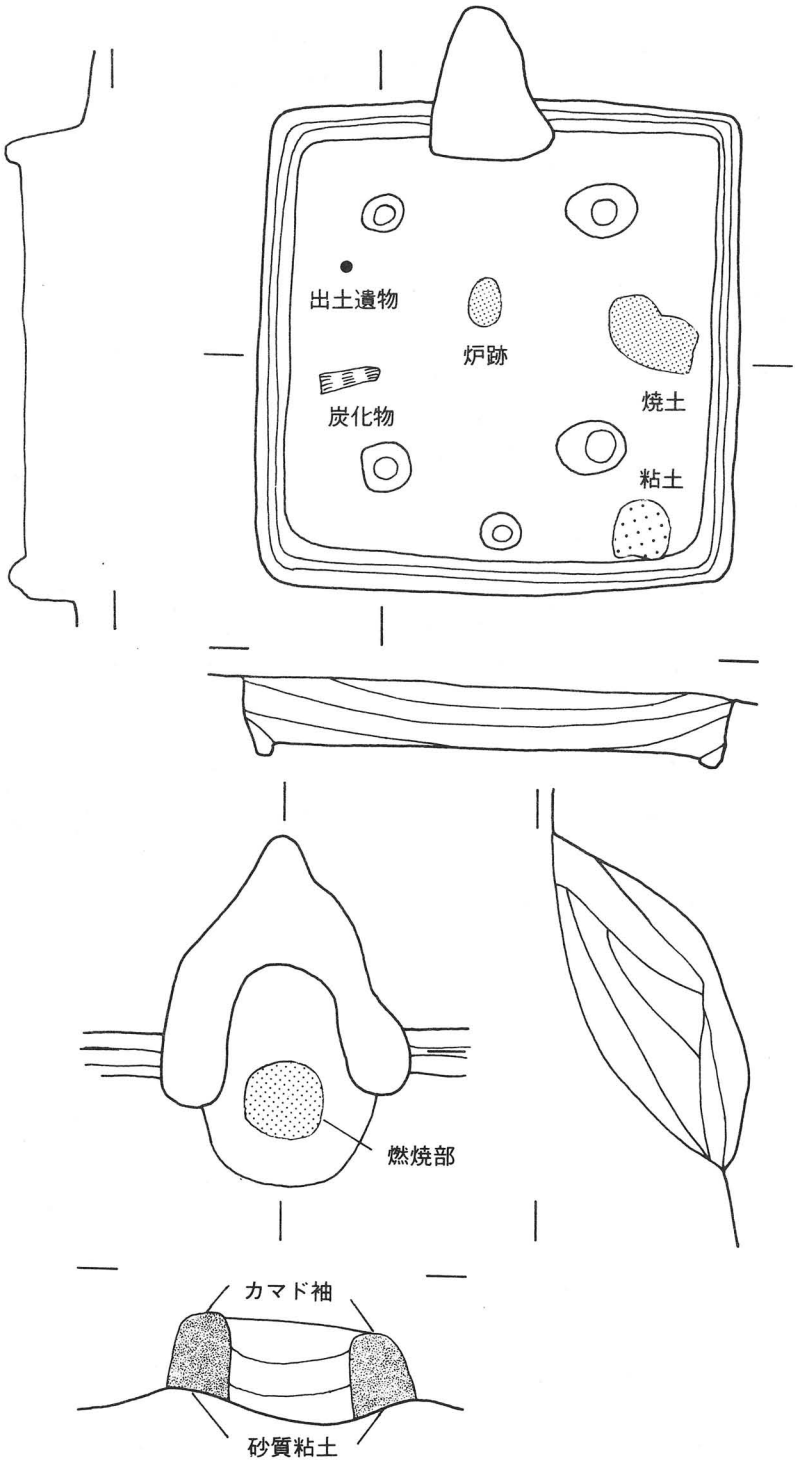
1．本遺跡の調査は、ゴルフ場の造成工事に先行する埋蔵文化財の発掘調査である。

1．本遺跡の調査は、前後２回に分けて行なった。前回は、昭和63年２月～平成元年２月まで行ない後回は平成元年10月～平成２年３月まで断続的に行なった。

1．現地調査及び整理作業は、藤原　均（日本考古学研究所、日本考古学協会員）と石井明憲（日本考古学研究所）が行ない、藤原が担当した。整理作業は、現地調査終了後行ない藤原が中心となった。

1．本遺跡の調査に際し、山田地区遺跡調査を組織して現地調査と整理作業を行なった。調査会の組織に関しては別項で一括して述べることとする。

1．本報告書の縮尺は、遺構に関しては1／20、1／40、1／50、1／100を基準とし、遺物は1／1、1／2、1／3、1／4 を基準とた。水糸レベルは、Ｌ＝で表示し統一に留意した。遺物法量及びスクリーントンは各々表示した。


出土遺物
炉跡
炭化物
焼土
粘土
燃焼部
カマド袖
砂質粘土

目　　次

例　　言
目　　次
付図目次（封筒）
挿図目次
挿表目次
図版目次
Ⅰ　位置と環境…… 1
Ⅱ　調査経過…… 1
Ⅲ　調査の概要…… 4
1．古屋敷遺跡の概要…… 4
2．調査結果の概要…… 11
Ⅳ　中世の遺構と遺物……18
1　Ⅰ郭の遺構……18
1）掘立柱建物址…… 18
2）土　　塁 …… 130
3）堀 …… 132
4）溝 …… 147
5）虎　　口 …… 151
6）製 鉄 址 …… 160
7）池　　跡 …… 165
8）竪穴遺構 …… 165
9）炉　　址 …… 170
10）貝　　層 …… 177
11）土　　壙 …… 178
12）地下式倉庫 …… 233
2　中世の出土遺物…… 233
1）陶 磁 器 …… 233
2）瓦質土器 …… 249
3）内耳，外耳土器 …… 249
4）火舎，瓦質土器 …… 256
5）擂鉢，内耳土器 …… 257
6）鉄 製 品 …… 258
7）カワラケ …… 267
8）砥　　石 …… 280
9）土 製 品 …… 280
10）その他の土器 …… 289
11）石 造 物 …… 289
12）古　　銭 …… 304
3　中世以降の遺構…… 311
Ⅴ　中世以前の遺構…… 314
1　住居址…… 314
2　その他の遺物…… 413
1）縄文式土器 …… 413
2）右　　器 …… 414
Ⅵ　結　　び…… 420

付　図　目　次（封　筒）

付図１　第３図古屋敷見取図

付図２　第４図古屋敷遺構全測図１

付図３　第５図古屋敷遺構全測図２

付図４　第６図古屋敷遺跡Ｉ郭土層図

付図５　第10図掘立柱建物址配置図４

付図６　第54図第49号掘立柱建物址実測図

付図７　第62図南側虎口（虎口１）
第3・25号建物址実測図

付図８　第63図Ｉ郭東側外堀（第１号堀）
実測図

付図９　第64図Ｉ郭北側外堀（第１号堀）
実測図

付図10　第65図Ｉ郭南側外堀（第１号堀）
実測図

付図11　第66図第４号堀（虎口5・6・7・8）
実測図

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　古屋敷遺跡地形図
第３図　古屋敷見取図　（付図１）
第４図　古屋敷遺構全測図１　（付図２）
第５図　古屋敷遺構全測図２　（付図３）
第６図　古屋敷遺跡Ⅰ郭土層図（付図４）
第７図　掘立柱建物址配置図１
第８図　掘立柱建物址配置図２
第９図　掘立柱建物址配置図３
第10図　掘立柱建物址配置図４（付図５）
第11図　掘立柱建物址配置図５
第12図　第１号掘立柱建物址実測図
第13図　第２号掘立柱建物址実測図
第14図　第４号掘立柱建物址実測図
第15図　第５号掘立柱建物址実測図
第16図　第６号掘立柱建物址実測図
第17図　第７号掘立柱建物址実測図
第18図　第８号掘立柱建物址実測図
第19図　第９号掘立柱建物址実測図
第20図　第10号掘立柱建物址実測図
第21図　第11号掘立柱建物址実測図
第22図　第12号掘立柱建物址実測図
第23図　第13号掘立柱建物址実測図
第24図　第14号掘立柱建物址実測図
第25図　第15号掘立柱建物址実測図
第26図　第16号掘立柱建物址実測図
第27図　第17号掘立柱建物址実測図
第28図　第18・39号掘立柱建物址実測図
第29図　第19・37号掘立柱建物址実測図
第30図　第20号掘立柱建物址実測図
第31図　第21号掘立柱建物址実測図
第32図　第22・42号掘立柱建物址実測図
第33図　第23号掘立柱建物址実測図
第34図　第26号掘立柱建物址実測図
第35図　第27号掘立柱建物址実測図
第36図　第28号掘立柱建物址実測図
第37図　第29号掘立柱建物址実測図
第38図　第30号掘立柱建物址実測図
第39図　第31号掘立柱建物址実測図
第40図　第32号掘立柱建物址実測図
第41図　第33号掘立柱建物址実測図
第42図　第34号掘立柱建物址実測図
第43図　第35・51号掘立柱建物址実測図
第44図　第36号掘立柱建物址実測図
第45図　第38号掘立柱建物址実測図
第46図　第40号掘立柱建物址実測図
第47図　第41号掘立柱建物址実測図
第48図　第43号掘立柱建物址実測図
第49図　第44号掘立柱建物址実測図
第50図　第45号掘立柱建物址実測図
第51図　第46号掘立柱建物址実測図
第52図　第47号掘立柱建物址実測図
第53図　第48号掘立柱建物址実測図
第54図　第49号掘立柱建物址実測図（付図６）
第55図　第50号掘立柱建物址実測図
第56図　第52号掘立柱建物址実測図
第57図　第53号掘立柱建物址実測図
第58図　第54号掘立柱建物址実測図
第59図　第55号掘立柱建物址実測図
第60図　第56・57号掘立柱建物址実測図

第61図　第58号掘立柱建物址実測図
第62図　南側虎口（虎口１）第３・25号建物址実測図（付図７）
第63図　Ｉ郭東側外堀（第１号堀）実測図（付図８）
第64図　Ｉ郭北側外堀（第１号堀）実測図（付図９）
第65図　Ｉ郭南側外堀（第１号堀）実測図（付図10）
第66図　第４号堀（虎口５・６・７・８）実測図（付図11）
第67図　第７号堀実測図
第68図　第８号堀（虎口10）実測図
第69図　第９～11号堀・虎口11実測図
第70図　第12号堀北西部実測図
第71図　第１号、14号溝実測図
第72図　Ｉ郭柵列実測図
第73図　第４号堀北側中央虎口（虎口６）実測図
第74図　第４号堀北側虎口（虎口７）実測図
第75図　東南谷頭部（虎口８）遺物出土状況実測図
第76図　第24号掘立柱建物址及東南虎口（虎口８）実測図
第77図　東側斜面虎口東側階段遺構（虎口４）実測図
第78図　第12号堀実測図
第79図　Ｉ郭池跡実測図
第80図　第１号竪穴実測図
第81図　第２・３号竪穴実測図
第82図　第１号製鉄址実測図
第83図　第２号製鉄址実測図
第84図　第１号炉址実測図
第85図　第２・３号炉址実測図
第86図　第４・５号炉址実測図
第87図　第６・７号炉址実測図
第88図　第８号炉址実測図
第89図　貝層１・２、土橋、土壙（落とし穴状遺構）実測図
第90図　貝層３実測図
第91図　貝層４・５実測図
第92図　貝層６・７実測図
第93図　第１・２号土壙実測図
第94図　第３・４・５・６・７号土壙実測図
第95図　第８・９号土壙実測図
第96図　第10・11号土壙実測図
第97図　第12・13号土壙実測図
第98図　第14・15号土壙実測図
第99図　第16・17・18・19号土壙実測図
第100図　第20・21号土壙実測図
第101図　第22号土壙実測図
第102図　第23・24号土壙実測図
第103図　第25・26号土壙実測図
第104図　第27・28号土壙実測図
第105図　第29・30号土壙実測図
第106図　第31号土壙実測図
第107図　第32・33号土壙実測図
第108図　第34・35号土壙実測図
第109図　第36・37・38号土壙実測図
第110図　第39・40号土壙実測図
第111図　第41・42・43号土壙実測図
第112図　第44・45号土壙実測図
第113図　第46・47号土壙実測図

第114図　第48・49号土壙実測図
第115図　第50・54号土壙実測図
第116図　第51・52・53・56号土壙実測図
第117図　第55号土壙実測図
第118図　第58・59号土壙実測図
第119図　Ⅱ郭土壙・ピット実測図
第120図　第１号地下式倉庫実測図
第121図　城址関係出土遺物実測図１
第122図　城址関係出土遺物実測図２
第123図　城址関係出土遺物実測図３
第124図　城址関係出土遺物実測図４
第125図　城址関係出土遺物実測図５
第126図　城址関係出土遺物実測図６
第127図　城址関係出土遺物実測図７
第128図　城址関係出土遺物実測図８
第129図　城址関係出土遺物実測図９
第130図　城址関係出土遺物実測図10
第131図　城址関係出土遺物実測図11
第132図　城址関係出土遺物実測図12
第133図　城址関係出土遺物実測図13
第134図　城址関係出土遺物実測図14
第135図　城址関係出土遺物実測図15
第136図　城址関係出土遺物実測図16
第137図　城址関係出土遺物実測図17
第138図　城址関係出土遺物実測図18
第139図　城址関係出土遺物実測図19
第140図　城址関係出土遺物実測図20
第141図　城址関係出土遺物実測図21
第142図　城址関係出土遺物実測図22
第143図　城址関係出土遺物実測図23
第144図　五輪塔実測図１
第145図　五輪塔実測図２
第146図　五輪塔実測図３
第147図　五輪塔実測図４
第148図　五輪塔実測図５
第149図　五輪塔実測図６
第150図　五輪塔実測図７
第151図　五輪塔実測図８
第152図　五輪塔実測図９
第153図　五輪塔実測図10
第154図　五輪塔、宝篋印塔実測図
（五輪塔11）
第155図　五輪塔、宝篋印塔、その他実測図
（五輪塔12）
第156図　古銭拓影図
第157図　第１・２号道路状遺構実測図
第158図　第１号住居址実測図
第159図　第２号住居址実測図
第160図　第２号住居址出土遺物実測図
第161図　第３号住居址実測図
第162図　第４号住居址実測図
第163図　第５号住居址実測図
第164図　第４・５号住居址出土遺物実測図
第165図　第５号住居址出土遺物実測図
第166図　第６号住居址実測図
第167図　第７号住居址実測図
第168図　第７号住居址出土遺物実測図
第169図　第８号住居址実測図
第170図　第９号住居址実測図
第171図　第８・９号住居址出土遺物実測図
第172図　第10号住居址実測図
第173図　第10号住居址出土遺物実測図
第174図　第11号住居址実測図
第175図　第11号住居址出土遺物実測図

第176図　第12・13号住居址実測図
第177図　第14号住居址実測図
第178図　第12号住居址出土遺物実測図
第179図　第13・14号住居址出土遺物実測図
第180図　第15号住居址実測図
第181図　第16号住居址実測図
第182図　第17号住居址実測図
第183図　第18号住居址実測図
第184図　第15・16・17・18号住居址出土遺物実測図
第185図　第18号住居址出土遺物実測図
第186図　第19号住居址実測図
第187図　第19号住居址出土遺物実測図
第188図　第20号住居址実測図
第189図　第21号住居址実測図
第190図　第21号住居址出土遺物実測図
第191図　第22号住居址実測図
第192図　第23号住居址実測図
第193図　第22・23号住居址出土遺物実測図
第194図　第23号住居址出土遺物実測図1
第195図　第23号住居址出土遺物実測図2
第196図　第24号住居址実測図
第197図　第25号住居址実測図
第198図　第24・25号住居址出土遺物実測図
第199図　第26号住居址実測図
第200図　第27号住居址実測図
第201図　第28号住居址実測図
第202図　第26・27・28号住居址出土遺物実測図
第203図　第27号住居址出土遺物実測図
第204図　第29号住居址実測図
第205図　第29号住居址出土遺物実測図
第206図　第30号住居址実測図
第207図　第31号住居址実測図
第208図　第30・31号住居址出土遺物実測図
第209図　第32号住居址実測図
第210図　第33号住居址実測図
第211図　第32・33号住居址出土遺物実測図
第212図　第34号住居址実測図
第213図　縄文式土器拓影図
第214図　石器実測図1
第215図　石器実測図2
第216図　石器実測図3

挿　表　目　次

第１表　掘立柱建物址一覧表１．２
第２表　第１号掘立柱建物址柱穴一覧表
第３表　第２号掘立柱建物址柱穴一覧表
第４表　第３号掘立柱建物址柱穴一覧表
第５表　第４号掘立柱建物址柱穴一覧表
第６表　第５号掘立柱建物址柱穴一覧表
第７表　第６号掘立柱建物址柱穴一覧表
第８表　第７号掘立柱建物址柱穴一覧表
第９表　第８号掘立柱建物址柱穴一覧表
第10表　第９号掘立柱建物址柱穴一覧表
第11表　第10号掘立柱建物址柱穴一覧表
第12表　第11号掘立柱建物址柱穴一覧表
第13表　第12号掘立柱建物址柱穴一覧表
第14表　第13号掘立柱建物址柱穴一覧表
第15表　第14号掘立柱建物址柱穴一覧表
第16表　第15号掘立柱建物址柱穴一覧表
第17表　第16号掘立柱建物址柱穴一覧表
第18表　第17号掘立柱建物址柱穴一覧表
第19表　第18号掘立柱建物址柱穴一覧表
第20表　第19号掘立柱建物址柱穴一覧表
第21表　第20号掘立柱建物址柱穴一覧表
第22表　第21号掘立柱建物址柱穴一覧表
第23表　第22号掘立柱建物址柱穴一覧表
第24表　第23号掘立柱建物址柱穴一覧表
第25表　第24号掘立柱建物址柱穴一覧表
第26表　第25号掘立柱建物址柱穴一覧表
第27表　第26号掘立柱建物址柱穴一覧表
第28表　第27号掘立柱建物址柱穴一覧表
第29表　第25号掘立柱建物址柱穴一覧表
第30表　第29号掘立柱建物址柱穴一覧表
第31表　第30号掘立柱建物址柱穴一覧表
第32表　第31号掘立柱建物址柱穴一覧表
第33表　第32号掘立柱建物址柱穴一覧表
第34表　第33号掘立柱建物址柱穴一覧表
第35表　第34号掘立柱建物址柱穴一覧表
第36表　第35号掘立柱建物址柱穴一覧表
第37表　第36号掘立柱建物址柱穴一覧表
第38表　第37号掘立柱建物址柱穴一覧表
第39表　第38号掘立柱建物址柱穴一覧表
第40表　第39号掘立柱建物址柱穴一覧表
第41表　第40号掘立柱建物址柱穴一覧表
第42表　第41号掘立柱建物址柱穴一覧表
第43表　第42号掘立柱建物址柱穴一覧表
第44表　第43号掘立柱建物址柱穴一覧表
第45表　第44号掘立柱建物址柱穴一覧表
第46表　第45号掘立柱建物址柱穴一覧表
第47表　第46号掘立柱建物址柱穴一覧表
第48表　第47号掘立柱建物址柱穴一覧表
第49表　第48号掘立柱建物址柱穴一覧表
第50表　第49号掘立柱建物址柱穴一覧表
第51表　第50号掘立柱建物址柱穴一覧表
第52表　第51号掘立柱建物址柱穴一覧表
第53表　第52号掘立柱建物址柱穴一覧表
第54表　第53号掘立柱建物址柱穴一覧表
第55表　第54号掘立柱建物址柱穴一覧表
第56表　第55号掘立柱建物址柱穴一覧表
第57表　第56号掘立柱建物址柱穴一覧表
第58表　第57号掘立柱建物址柱穴一覧表
第59表　第58号掘立柱建物址柱穴一覧表
第60表　土壙一覧表１．２

第61表　城址関係出土遺物一覧表１
第62表　城址関係出土遺物一覧表２
第63表　城址関係出土遺物一覧表３
第64表　城址関係出土遺物一覧表４
第65表　城址関係出土遺物一覧表５
第66表　城址関係出土遺物一覧表６
第67表　城址関係出土遺物一覧表７
第68表　城址関係出土遺物一覧表８
第69表　城址関係出土遺物一覧表９
第70表　城址関係出土遺物一覧表10
第71表　城址関係出土遺物一覧表11
第72表　城址関係出土遺物一覧表12
第73表　城址関係出土遺物一覧表13
第74表　城址関係出土遺物一覧表14
第75表　城址関係出土遺物一覧表15
第76表　城址関係出土遺物一覧表16
第77表　城址関係出土遺物一覧表17
第78表　城址関係出土遺物一覧表18
第79表　城址関係出土遺物一覧表19
第80表　城址関係出土遺物一覧表20
第81表　城址関係出土遺物一覧表21
第82表　城址関係出土遺物一覧表22
第83表　城址関係出土遺物一覧表23
第84表　城址関係出土遺物一覧表24
第85表　城址関係出土遺物一覧表25
第86表　五輪塔一覧表（地輪）
第87表　五輪塔一覧表（水輪）
第88表　五輪塔一覧表（火輪）
第89表　五輪塔一覧表（空風輪１）
第90表　五輪塔一覧表（空風輪２）
第91表　方篋印塔一覧表
第92表　その他の石造物一覧表
第93表　古銭一覧表
第94表　住居址一覧表１．２
第95表　第２号住居址出土遺物一覧表１．２
第96表　第４．５号住居址出土遺物一覧表１．２
第97表　第５号住居址出土遺物一覧表
第98表　第７号住居址出土遺物一覧表
第99表　第８．９号住居址出土遺物一覧表
第100表　第10号住居址出土遺物一覧表
第101表　第11号住居址出土遺物一覧表
第102表　第12号住居址出土遺物一覧表
第103表　第13．14号住居址出土遺物一覧表
第104表　第15～18号住居址出土遺物一覧表１～４
第105表　第19号住居址出土遺物一覧表
第106表　第21号住居址出土遺物一覧表１．２
第107表　第22．23号住居址出土遺物一覧表
第108表　第23号住居址出土遺物一覧表１～３
第109表　第24．25号住居址出土遺物一覧表
第110表　第26～28号住居址出土遺物一覧表
第111表　第27号住居址出土遺物一覧表１．２
第112表　第29号住居址出土遺物一覧表
第113表　第30．31号住居址出土遺物一覧表１．２
第114表　第32 33号住居址出土遺物一覧表

図　版　目　次

図版１　遺跡全景
図版２　遺跡現況（Ｉ郭土塁）
図版３　遺跡現況
図版４　遺跡現況（Ｉ郭北側）
図版５　遺跡現況
図版６　遺跡現況
図版７　遺構近景
図版８　遺構近景
図版９　建物址１
図版10　建物址２他
図版11　建物址３虎口
図版12　虎口
図版13　土塁土層１
図版14　土塁土層２
図版15　堀１
図版16　堀２
図版17　堀３
図版18　堀４　溝１
図版19　堀５（全景）
図版20　堀６（全景土層１）
図版21　堀７（土層２）
図版22　堀８溝２（土層３）
図版23　堀９（土層）
図版24　貝層
図版25　竪穴製鉄池址
図版26　炉址
図版27　土壙１
図版28　土壙２
図版29　土壙３
図版30　土壙４
図版31　土壙５
図版32　土壙６
図版33　土壙７
図版34　土壙８
図版35　遺物出土状況１
図版36　遺物出土状況２
図版37　住居址１
図版38　住居址２
図版39　住居址３
図版40　住居址４
図版41　住居址５
図版42　住居址６
図版43　住居址７
図版44　住居址８
図版45　住居址９
図版46　住居址10
図版47　Ⅱ郭pt群
図版48　出土遺物１　陶磁器
図版49　出土遺物２　陶磁器　内耳
図版50　出土遺物３　外耳　瓦質土器　鉄製品
図版51　出土遺物４　カワラケ　古銭　砥石　玉
図版52　出土遺物５　瓦質土器　石製品
図版53　出土遺物６　石製品
図版54　出土遺物７　住居址１
図版55　出土遺物８　住居址２
図版56　出土遺物９　埴輪　石器

Ⅰ. 位置と環境

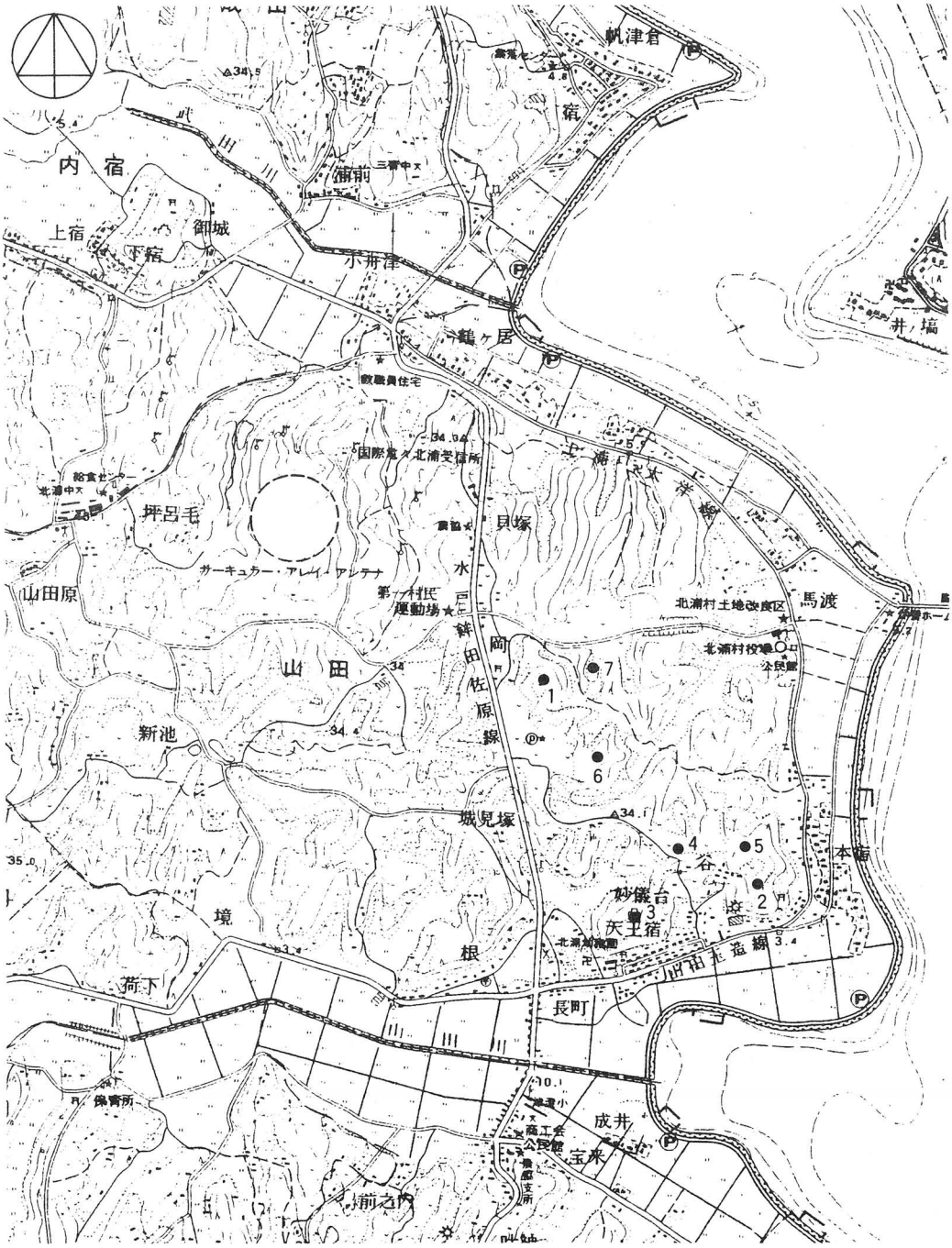
当遺跡は、北浦村の中央東側で南東方向に細長く突出した舌状台地から、北側に小さく突出した台地の先端部に位置している。当遺跡が所在する北浦村は、茨城県の南部で行方台地の中央部に位置し、東側は北浦に面している。当遺跡が所在する行方台地は、広く深い開析谷が台地内部まで樹枝状に入り込んでいるため、複雑な地形を形成している。当遺跡は、このような開析谷によって形成された台地上に位置するため、遺跡の東側と西側には広く深い開析谷あり、当遺跡の北側で合流し、北浦へ到る開析谷となっている。

開析谷によって形成された台地には、多くの遺跡が所在している。当遺跡の北側で、開析谷を狭んだ北側の台地には、縄文時代から15.6世紀までの遺跡である今山遺跡（第１図７）が、当遺跡の南東で開析谷を狭むが当遺跡とは地続の台地には、縄文～奈良・平安期までの六台遺跡（第１図６）がある。また、当遺跡の南東方向には中世城館址である古館遺跡（第１図２）があり、前館遺跡の西方で当遺跡からは南西方向に相当する台地には、山田城址（第１図３）、古墳時代～中世までの遺跡である平遺跡（第１図５）などが所在している。

Ⅱ. 調 査 経 過

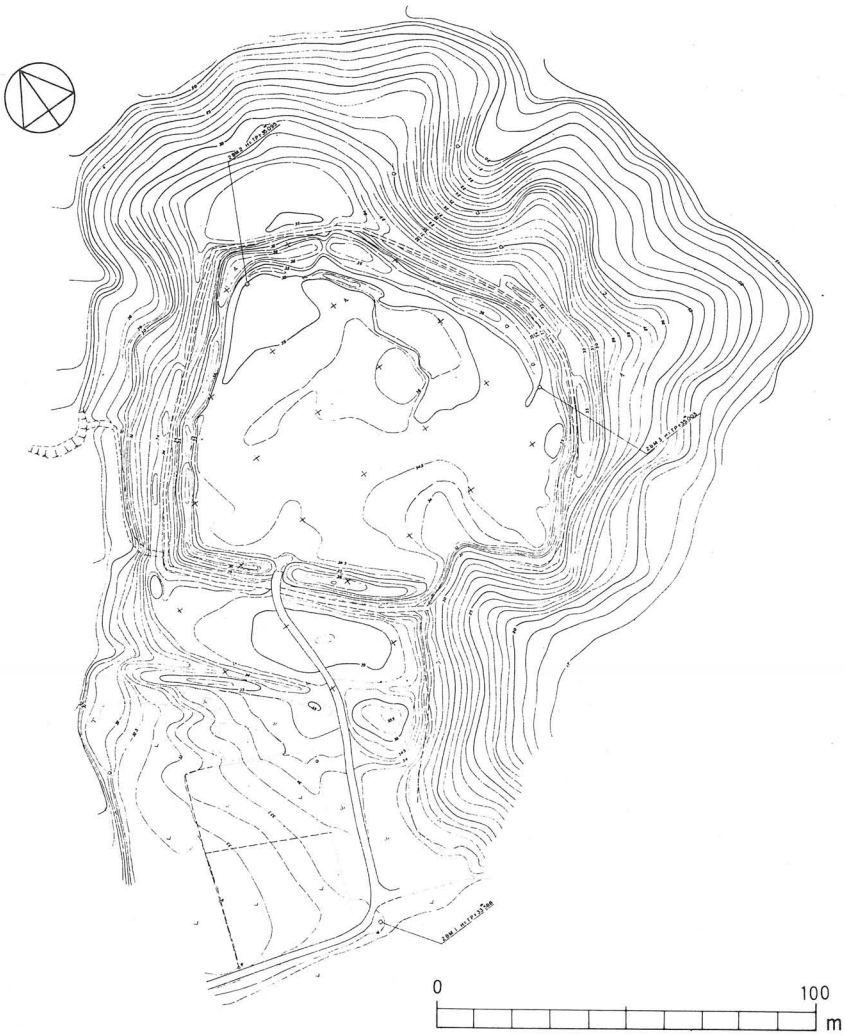
当遺跡の調査は、昭和63年２月より開始し地形測量とトレンチ（以下Ｔとす）による遺構確認作業を行ない２月下旬に終了した。表土の除去作業と、遺構のプラン確認作業は、Ⅰ郭より開始し３月中旬まで行なった。

Ⅰ郭の調査は、この作業終了後継続して行ない、堀、建物址、土壙、住居址等、多数の遺構を確認したが、雨等により予定より１ヶ月以上も遅れ８月下旬に終了した。この後、Ⅰ郭外堀とⅡ郭の調査を併行し、９月下旬に終了した。Ⅳ郭以降の各郭は、９月下旬より開始し10月下旬まで調査を行なった。また、10月からは一部古館遺跡と調査を併行した。当遺跡の調査は、10月下旬で一応終了したが、Ⅱ郭南側に駐車場を造ることが、平成１年に決定し、同Ⅰ郭西側で保存区域の変更等により、同年10月より断続的に調査を行なうこととなり、第２班の汀　安衛氏に依頼した。駐車場予定地は、Ｔによる遺構確認調査（一部拡張）となったが、Ⅱ郭南側にⅠ郭所在したことが明らかとなった。これに関する報告は、別項で報告するため本報告書からは除外した。



1）古屋敷遺跡　3）山田城址　5）平遺跡　7）今山遺跡
2）古館遺跡　4）中ノ館址　6）六台遺跡

第１図　遺跡位置図



第２図　古屋敷遺跡地形図

Ⅲ. 遺跡の概要

1．古屋敷の概要

当遺跡は、前項でも述べたように北東方向へ細長く伸びた台地から、北西方向へ短く突出した台地に所在しており、遺跡名と現状の遺構が示すように、中世の城館址である。

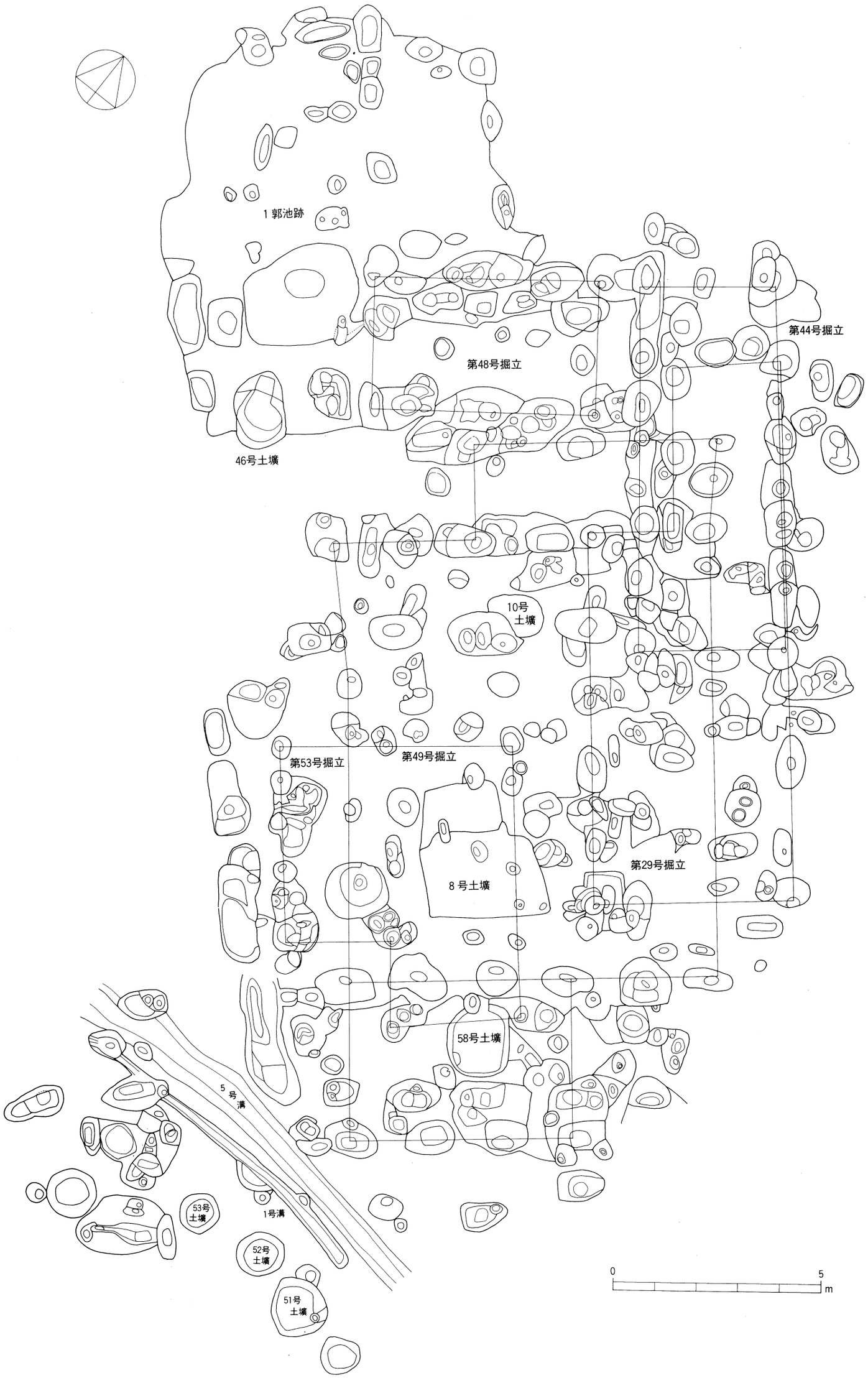
当遺跡は、北西に突出した台地上に所在するために、台地先端部に主郭（Ⅰ郭）を配置し、これの南側にⅡ郭を配置している。Ⅱ郭南側には、郭が配置された痕跡を認め得ないが、地理的条件から1郭必要である。この部分は、今後の調査予定も存在するため後述する予定である。Ⅰ郭とⅡ郭以外では、Ⅰ郭の北側に曲輪と推定される平場（Ⅲ郭）があり、Ⅰ郭とⅡ郭の西側には掘を供なった曲輪（Ⅳ郭）が配置されている。Ⅰ郭の東側は、尾根部に5段の平場（Ⅴ郭）と斜面下に2段の平場（Ⅵ、Ⅶ郭）が認められる。

Ⅰ郭は、土塁と堀で防護されており、Ⅰ郭北側は二重土塁の状況を呈しており、Ⅰ郭の北側、東側、西側の3方向では、堀の外側に土塁を築いている。Ⅱ郭は、南側と西側に土塁を築いているが、土塁の外側に堀は認められずⅡ郭南側土塁の内側（北側）と西側土塁の外側に堀が認められる。Ⅳ郭には、土塁と判断される部分が存在するものの、土塁であるかは不明である。Ⅳ郭からⅦ郭では、土塁や堀等は認められなかった。

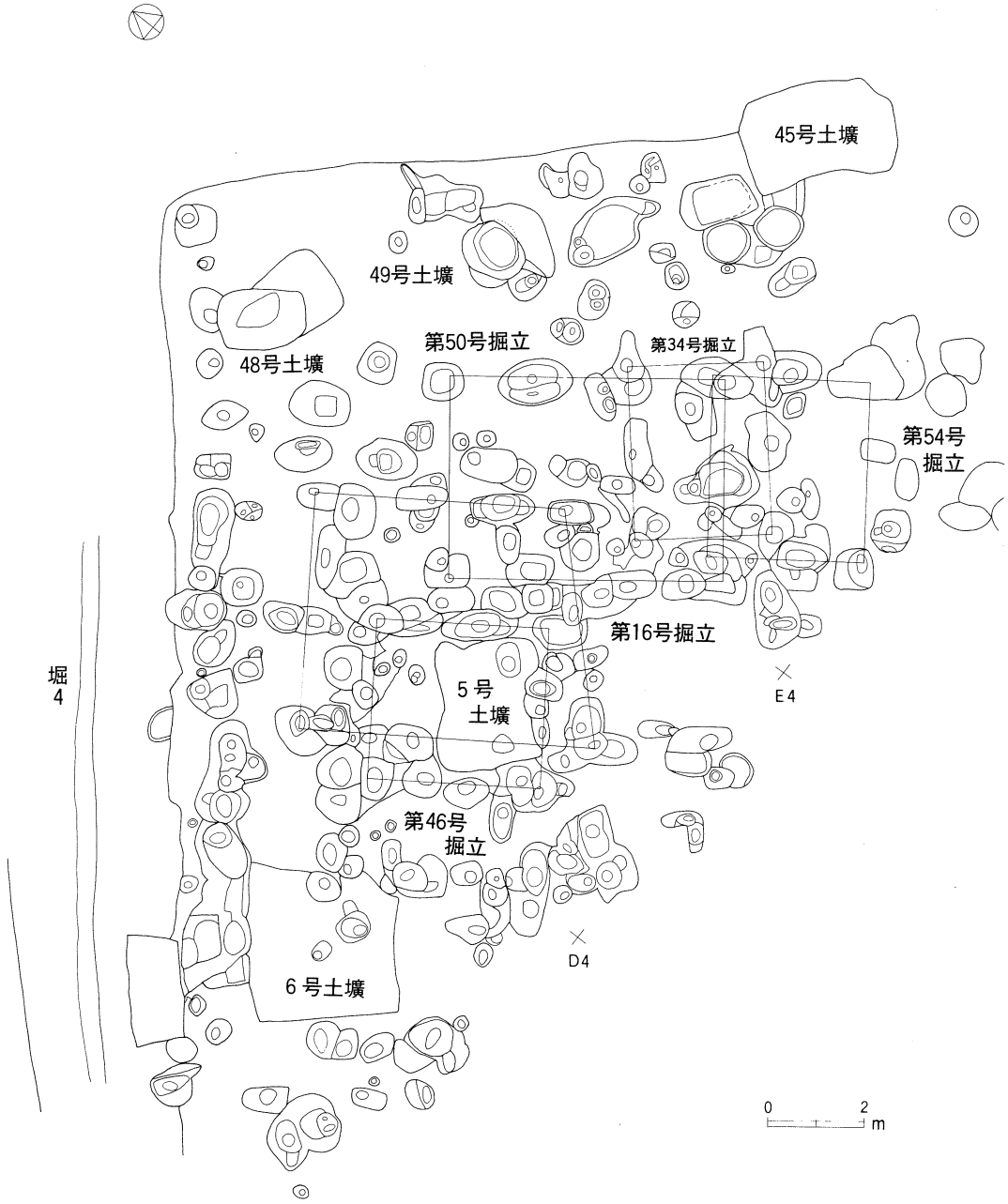
Ⅰ郭は、東西径160.0m、南北径99.0m（外堀まで）を計測し、東西に長い長方形をなしており、約9.000㎡の面積を有している。Ⅰ郭は、土塁（A）と堀（B）とで防護されている。土塁は、北側、南側、西側では大きくしっかりした土塁であるが、東側は低い土塁となっている。また、北側では土塁（A）の南側に土塁（C）と堀（D）があり二重土塁の状況を呈している。土塁（C）の南側には、堀（E）が存在するものの堀であるかは断定出来ない。虎口は、南側（G1）北側（G2）、東側（G3）に設けられている。南側虎口が、良くその形態を残している。北側と東側の虎口は、土塁の上を通るようになっている虎口である。櫓台等は、認められない。土橋は、虎口の前で認められている。

土塁（A）の規模は、東側で下幅2.30m、上幅1.00m、高さ0.50～1.00mを計測し、西側では下幅4.50m、上幅1.50m、高さ1.50mを計測する。北側では、下幅6.50m～9.00m、上幅1.50m～3.00m、高さ1.00mを計測し、南側では下幅6.50m、上幅1.50m、高さ2.00mを計測する。また土塁（C）は、下幅2.50m、上幅1.00m、高さ1.00mを計測する。

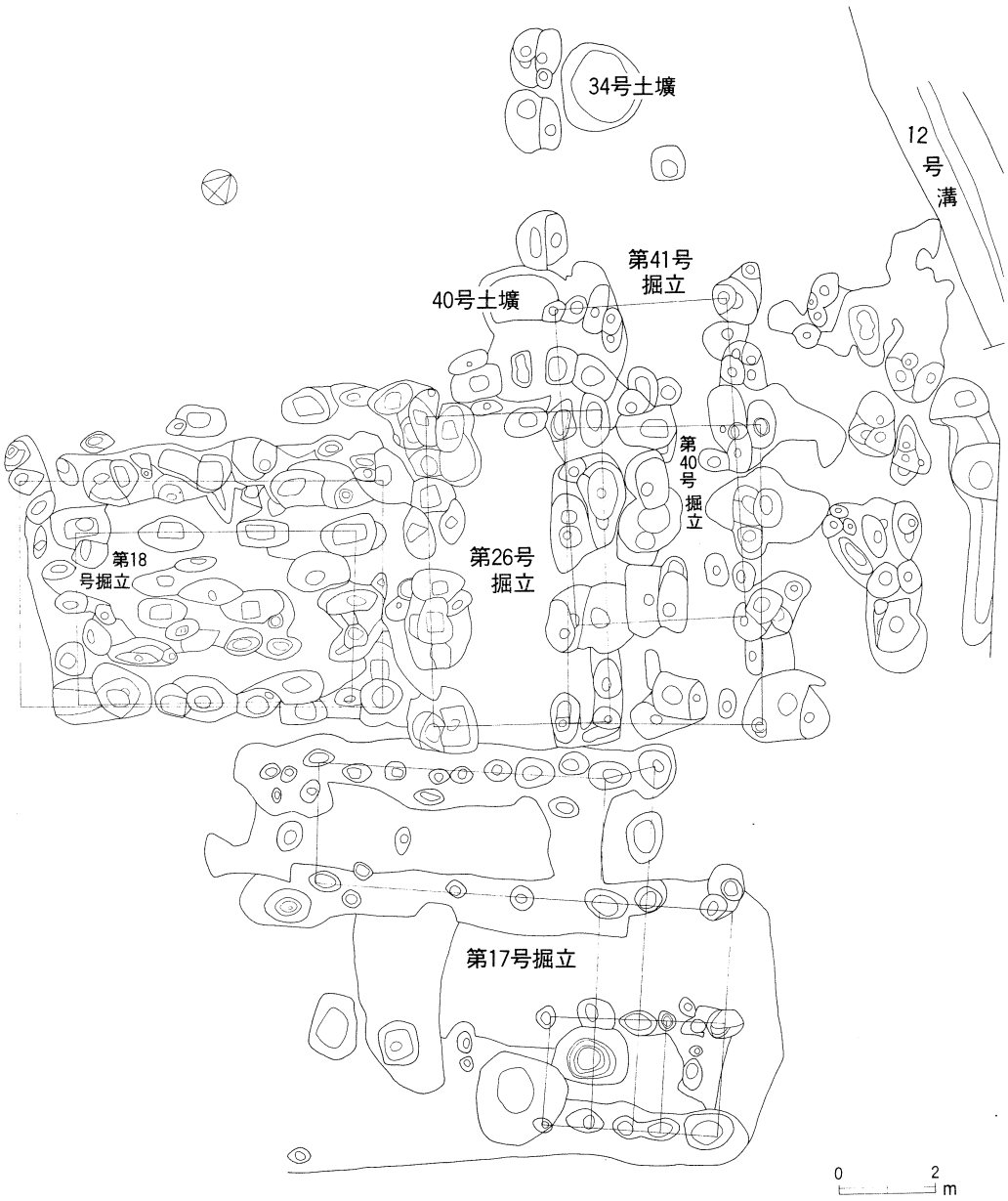
堀（B）の規模、幅が東側と西側で2.00mであるのに対して、北側が2.00mで南側が4.00mを計測する。堀（D）は、幅が1.00m～3.00mを計測し、溝（E）は幅が1.50m～2.50mを計測す



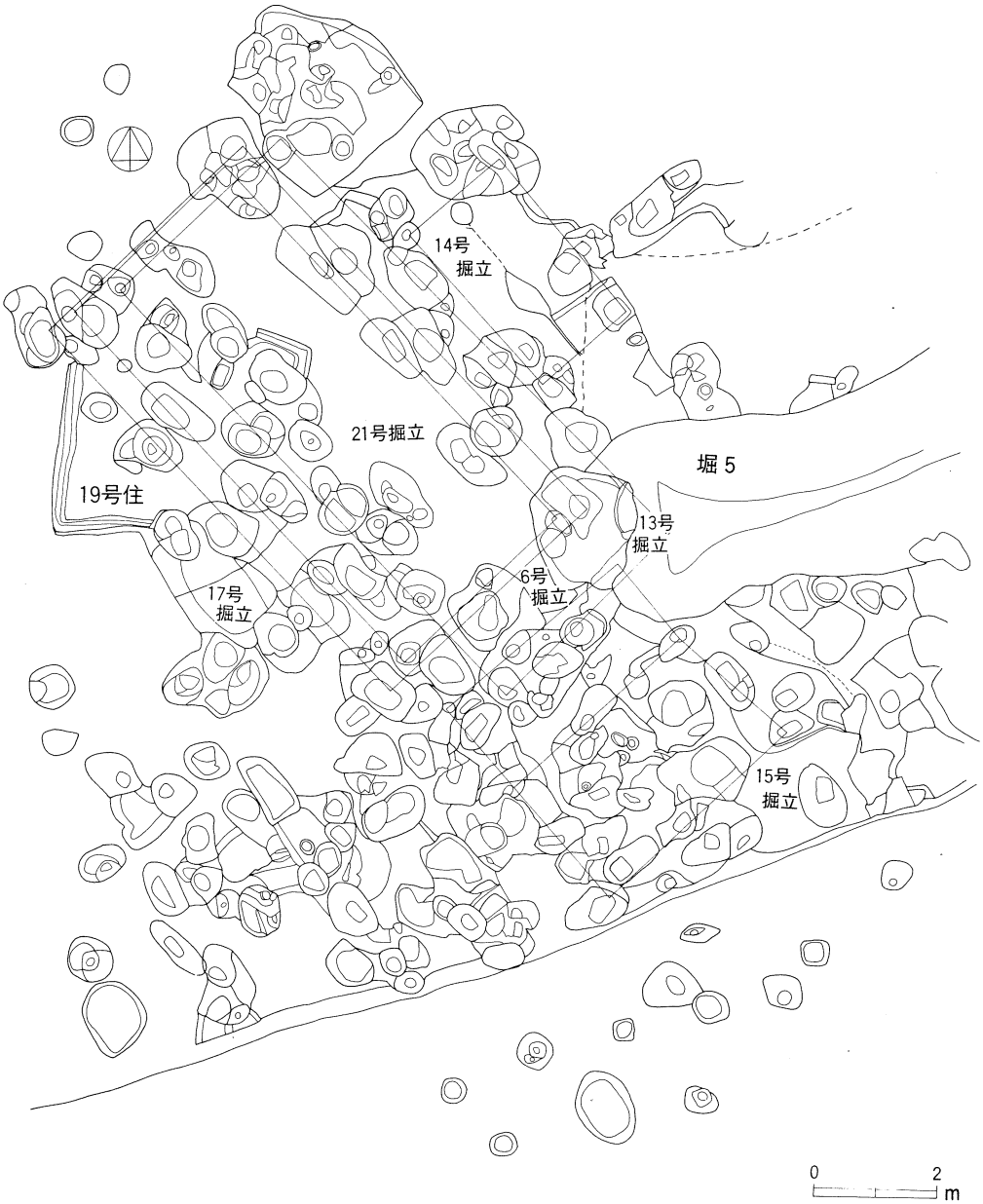
第７図　掘立柱建物址配置図１（第29・44・48・49・53号掘立）



第8図　掘立柱建物址配置図2（第16・34・46・50・54号掘立）



第９図　掘立柱建物址配置図３（第17・18・26・40・41号掘立）



第11図　掘立柱建物址配置図 5（第6・13・14・15・21号掘立）

る。この結果、土塁は西側と南側が大きな土塁となり、堀では南側の堀が広くなっている。北側土塁は、幅に対し低く造られているが、同土塁外側の堀と土塁及び地形等から広く低い土塁となったようであり、防護の主力は南側と西側に有ったことと推察される。土塁（F）は、Ⅰ郭の外堀（B）の外側（北側、東側、西側）に配置され、Ⅱ郭西側中央部からⅠ郭東側中央部まで築かれている。下幅は、1.00m～2.00m程度で上幅が0.50～1.00mあり、高さは1.00m程度であるが、外堀（B）の底から土塁（F）の上面まで2.00～2.50m程度の比高差を有している。土塁としてはきわめて低い土塁である。

Ⅱ郭は、Ⅰ郭の南側で東西に長い長方形をなしており、東西径70.0m、南北径27.0mを計測し約1.900㎡の面積を有している。Ⅱ郭は、南側に土塁（H）を配置しているが、土塁（H）は中央東側から西側谷地まで現存しているものの、南東部では認められず古墳々丘状の遺構が現存しているのみである。また、土塁（H）の内側（北側）には堀（Ⅰ）が配置されている。この堀（Ⅰ.J.K）の（Ⅰ）は、Ⅱ郭西側で堀（J）に接触するが、東側では墳丘状の遺構付近で不明となっている。Ⅱ郭西側では、Ⅰ郭外土塁（F）が西側中央部まで配置されており、この土塁（F）が切れた所から堀（J）が始まり、堀（Ⅰ）との合流部分で西へ直角に折れ曲り西側谷地まで続いている。また、南側土塁（H）の外側（南側）に浅い溝（K）が掘り込まれているものの、根切り溝と推定される溝である。

土塁と堀の規模は、土塁（H）は下幅4.00m、上幅1.00m、高さ1.50～2.00mを計測する。長さは、現存する部分で58.0mである。堀（Ⅰ）は、幅3.00m、長さ6.00mを計測する。西側土塁（F）は、長さ12.0m、下幅3.00m、上幅2.00m、高さ0.50mを計測する。堀（J）は、幅3.00m、長さ7.0m＋10.0mである。

Ⅲ郭は、Ⅰ郭の北西部で北側虎口（G２）を守るように配置されている。規模は、東西径26.0m、南北径16.0mを計測し、長方形をなしている。面積は、約410㎡である。Ⅲ郭では、北側と東側に土塁又は土塁状の痕跡がなく、西側と南側に土塁の痕跡を有している。南側の土塁は、Ⅰ郭外土塁（F）であり、西側の土塁（L）は土塁（F）と接触している。この２土塁は、高さが0.50m程度と低くなっている。幅は、西側で0.50～1.00m程度であり、南側は下幅3.00m、上幅1.50mを各々計測する。

Ⅳ郭は、Ⅰ郭とⅡ郭の西側に位置し堀（M）で構成された郭（曲輪）であり、土塁としてはⅣ郭北側に土塁状の部分（M１）が認められる程度で、しっかりした土塁は認められない。Ⅳ郭はⅠ郭中央西側から、Ⅱ郭西側堀（J）までの範囲である。堀（M）は、Ⅰ郭外堀の南西コーナー西側で土塁（F）の外側から、Ⅰ郭西側谷地まで掘り込まれており、Ｂ４杭と土塁（M１）で各々折れ曲っている。堀（M）は、Ⅱ郭西側堀（J）と接触するようであるし、虎口的性格を有する堀と推定される。

Ⅳ郭の規模は、東西径2.0m、南北径30.0mで、60.0㎡の面積を有している。堀（M）は、堀幅2.0mを計測する。また、堀（M）は、土塁（F）と接点（M2）で、虎口状となっている。

Ⅴ郭は、Ⅰ郭から東側に小さく突出した台地の尾根部で、Ⅰ郭北東虎口（G3）の前面に位置し5段の平場（N1～N5）を形成しているが、N1と4は平場というよりは緩斜面に近い地形である。N2、3、5は、人為的に削平された部分である。この部分には、土塁や堀の痕跡は認められない。N1は、Ⅰ郭北東虎口（G3）からN2にかけ緩斜面であり、N3はN2より1.50m程度下位に位置しほぼ平坦な部分である。N4は、N1，2と同様に緩斜面に近い地形である。N5は、N3より1.00m程度の下位に位置している。各々の大きさは、N2が東西径6.00m、南北8.00m程度であり、N3は東西径10.00m程度を計測する。

Ⅵ郭とⅦ郭は、N5の下位に位置しⅠ郭東側谷より立ち上がった最初の平場であり、Ⅰ郭とⅡ郭の東側斜面下に位置している。Ⅵ郭とⅦ郭には、土塁や堀等の痕跡を認めることは出来ないが「根古屋」の可能性を有している。

以上が、当古屋敷の概要である。Ⅰ郭を中心として、Ⅱ郭、Ⅲ郭を直線的に配置した構成の城館址である。Ⅳ郭～Ⅶ郭までは、Ⅰ郭～Ⅳ郭を守るように地形を利用して直線的に配置している。また、Ⅱ郭南側は、この南方に反し1m程度低くなっていることから、Ⅱ郭の南側に1郭存在するものと考えられる。駐車場の予定も所在するため、今後の課題としておくが、この部分に1郭確認出来れば直線的に中心となる郭を配置したこととなる。この点に関し、調査結果等も加えながら後述する予定である。

2．調査結果の概要（第4図、図版1～8）

当遺跡の調査結果としては、第4、5図（付図2、3　）、図版1、7、8、第1、61、89表の各表に示したように中世城館址としての遺構、中世城館址以前で奈良、平安時代の遺構、中世城館址以後の遺構、などの諸遺構が確認されている。これらの遺構で、中心となるのは中世城館址の諸遺構である。

1）中世城館址の遺構と遺物

当遺跡が、中世の城館址であることは、前項で述べている。これを証明するように、Ⅰ郭とⅡ郭より中世城館址の遺構が、多数確認されている。特に、Ⅰ郭での調査結果は、当遺跡が3～4回造改築されたことを明確に示している。

Ⅰ郭での調査結果は、Ⅰ郭内部で堀、溝、掘立柱建物址、粘土貼り土壙、墓壙、土壙、地下式

土壙、井戸、虎口（土橋、階段状遺構、四脚門等を含む）などの諸遺構が確認され、Ⅱ郭からは堀、虎口等が確認されている。Ⅳ郭では、堀が確認され、Ⅴ郭からは階段状遺構が、確認されている。このように、各郭から多数の遺構を確認したが、これら諸遺構で中心となるものはⅠ郭内部で確認された掘立柱建物址と堀である。これに土塁と外堀（堀１）を加えることによって、当遺跡が造改修されていった状況を知ることが出来る。また、旧堀であるが再使用もある。重複関係では、堀と掘立柱建物址、掘立柱建物址と掘立柱建物址などのように、複雑に重複しており、特に、堀と掘立柱建物址や堀と堀の重複関係は、当遺跡の造改築を知る上で重要な遺構である。

Ⅰ郭の堀は、外堀と旧堀（第４～８、13）等とがある。外堀は、Ⅰ郭の土塁に沿って全周しているが、旧堀はⅠ郭内部で埋められている。旧堀は、中央部の堀４が重要な位置を占めている。つまり、堀４はⅠ郭内部の中央部に掘り込まれており、Ⅰ郭内部を分割するような位置にある。また堀の壁には、多数の掘立柱建物址が接しており、西側、北側、東側には虎口が設けられている。この堀４の範囲が、当城館址最初の範囲である。この範囲中には、掘立柱建物址、粘土貼り土壙、柵列などの諸遺構が確認されている。

堀４の次は、Ⅰ郭の土塁（内側）に沿って掘り込まれた堀で、第６，７，13号堀等が、相当する。この堀等は、堀４北西コーナーから地形に沿うように掘り込まれ、Ⅰ郭南東部まで配置されている。虎口は、東側と西側に確認され、北側では第13号堀に供う土塁があり、この土塁により、Ⅰ郭北側では２重土塁の様相を呈している。この部分の遺構としては、掘立柱建物址、粘土貼り土壙、井戸、地下式倉庫などの諸遺構が確認されている。

この次に来るのが、Ⅰ郭の土塁である。土塁は、ほぼ全域で１度造改築され外側に拡張されている。これは、中央部から土塁の盛土状況が異なることから明らかである。この部分で、土塁下中央部の溝が境となり、この上面で土塁の外側に向って盛土されていることから、外側に向い造改築したことを示している。

このように、Ⅰ郭は４回造改築されたこととなる。第１期は、堀が外郭線をなす範囲であり南側は、Ⅰ郭南側土塁と同一のようである。このことは第１期の土塁が、Ⅰ郭南側旧土塁ということとなる。第Ⅱ期は、堀の北側で13溝までの間となる。この時期の土塁は、Ⅰ郭北側で２重土塁状をなす部分の内側土塁が、これに相当するようである。第Ⅲ期より北側、東側、西側に拡張した時期で、内部はⅡ期より北東部と東部で広くなり、台地辺縁部に土塁を築いている。第Ⅳ期は、第Ⅲ期の土塁を外側に盛土して大きくした時期である。第Ⅳ期の内部は、第Ⅲ期と同様である。

以上の結果から、掘立柱建物址はⅠ期～Ⅳ期までに区分される。第Ⅰ期は、堀の内部に位置する建物址であり、第Ⅱ期は13溝までの範囲で第Ⅰ期も含む建物址である。第Ⅲ期と第Ⅳ期は、Ⅰ郭土塁までの範囲で、第Ⅰ期、Ⅱ期の建物址から新しい建物址に移行した時期で、堀８や堀４等が埋められ、内部を広く使用した時期である。

この第Ⅰ期と第Ⅱ期は、堀4と堀2，3が堀の役目を成していたことと推定され、堀に沿い土塁も築かれていたであろうことは、容易に推定されることである。したがって、この土塁の大きさを除外した範囲中の建物址が、各時期の建物ということとなる。また、粘土貼り土壙、井戸、地下式倉庫等の諸遺構は、前述の各時期に含まれるものと推定される。

Ⅱ郭では、Ⅱ郭西側と南側に中世城館址の遺構である堀、土塁、虎口が確認された。堀は、Ⅰ郭外堀に沿うように、Ⅰ郭虎口付近よりⅡ郭西側土塁までの堀7と、堀7の南側でⅡ郭中央部に一見土橋状の部分を供なうようにずれながら西側外堀まで掘り込まれた堀8と、Ⅱ郭南側土塁に沿い同土塁の北側で、台地を掘り切るように掘り込まれた堀9の3堀が、Ⅱ郭で確認された。しかし、この3堀とも埋められている堀である。また堀3は、Ⅱ郭南側中央部で2方向に分かれ、未調査区であるⅡ郭南東部塚状部分に沿うように掘り込まれているようである。

Ⅱ郭の土塁は、Ⅱ郭南側の土塁と西側に築かれている。南側土塁は、Ⅱ郭南側中央部（C1杭）付近より西側谷頭部まで築かれてるが、C1杭付近より塚状の部分が所在するのみで明確な土塁の痕跡は確認出来なかったが、塚状の部分が土塁である可能性を有していることから今後の調査結果を待ちたい。西側土塁は、Ⅰ郭外堀の南西コーナー部からⅡ郭南側土塁にかけて築かれているが、堀3の付近は空間となっている。また、西側土塁はⅠ郭西側外堀に接して築かれた西側土塁と接続し、同一土塁を形成している。

虎口としては、Ⅱ郭西側で堀2が西側外堀に接続する部分で確認され、階段状を呈する通路が確認されている。この部分は、西側土塁が切れた空間部分である。南側は、土塁が崩れ低くなった部分（C1杭北西部）に虎口と推定される遺構が確認された。しかしこの虎口は、土塁との関係から検討せねばならない点である。南側の虎口は、C1杭付近に所在するのではなかろうか。また、Ⅱ郭西側外堀は、Ⅱ郭西側土塁と同じ方向で堀　と接しながら堀　と接続している。

Ⅱ郭西側では、調査前に確認された堀が、Ⅰ郭外堀南西コーナー付近まで掘り込まれている。土塁は、Ⅰ郭やⅡ郭の土塁で見られるようなしっかりした土塁ではなく、掘った土を盛土した程度である。土塁としては、Ⅱ郭西側堀がC5付近で西方に曲り、西側谷地に接している部分の北側に認められる。なお、当郭は現状保存区域であるためトレンチによる調査を、その基本とした。その後の設計変更で、進入路の部分がⅠ郭西側からⅡ郭西側に設定されたため、この部分の調査を、調査終了後Ⅱ郭南側（駐車場予定地）と合わせ調査することとなった。

Ⅲ郭は、Ⅰ郭北側虎口の北側に位置し、低い土塁を供なっている。この地区は、Ⅰ郭西側と同じく現状保存区であるため、トレンチ調査とし確認された遺構を拡張し調査としたが、城館址関係の遺構は確認されず、竪穴住居址が確認されたのみである。

斜面部では、北東部（N1～5）と東側斜面（O1～4）とがある。北東部では、中世城館址に結び付く遺構はなく自然地形であるが、東側斜面ではⅠ郭東側虎口の北東方向で、階段状の遺構が

1ヶ所確認されている。この遺構以外は、YやZ地区でも何ら確認されなかった。特に、Z地区は、湧水が著しい所である。Y地区では、2ヶ所井戸状の部分が存在したが、これは中世ではなく近現代の遺構と判断された。

これらの遺構以外では、I郭から粘土貼り土壙、井戸、地下式倉庫、土壙、炉址、貝層などが確認され、II郭からは土壙、Pit郡が確認されている。粘土貼り土壙は、I郭のほぼ全域から確認されており、大型と小型などに分かれる。井戸は、I郭と北側外堀から確認されている。土壙としては、墓壙、土壙（捨場？）などがあり、墓壙では人骨と馬骨が埋葬されている。炉址は、I郭内に所在し、主として掘立柱建物址と重複している。地下式倉庫は、堀4の北西コーナー部に位置している。

I郭から東側斜面までの出土遺物では、天目茶碗、摺鉢、甕（常滑、備前）、皿（志野、瀬戸）など陶磁器類、土師質土器、カワラケなどの土器、五輪塔、宝篋印塔などの石塔類、などが多く出土している。また、古銭、煙管、内耳なども検出されている。II郭からは、五輪塔、宝篋印塔カワラケなどが出土している。これらの中では、天目茶碗、皿、甕等の陶磁器類は、時期的な変遷を知る上で重要な遺物であり、カワラケも型式等から分類されるため、時期的な変遷と一致しているものと推定している。

2）中世以前の概要

当遺跡に、中世の城館址が築かれる以前の遺構としては、奈良、平安時代の住居址がある。I郭から東側斜面部まで、合計34基の住居址が確認されている。

I郭では、合計21基の住居址が、ほぼ全域で確認されている。II郭では、6基の住居址がII郭中央部で確認されている。III郭では、5基の住居址が中央部で確認されている。斜面部では、北東部で1基（W1）が確認され、東側斜面部では1基（N3）が確認されている。特に、東側斜面部で確認された住居址は、I郭より10m程度下がった所で砂層中に掘り込まれた住居址であり山田遺跡郡内の各遺跡を見てもこのような所から確認された住居址は、当遺跡の住居址のみである。また、I郭の住居址は、中世の遺構に著しく破壊されているものが多い。

これらの住居は、鬼高期以降の住居址であり、古館遺跡や平遺跡、六台及び今山遺跡と類似した時期と判断されるが、当遺跡からは五領と和泉期に入る住居址は確認されなかった。

出土遺物としては、土師器坏、甕、高坏、甑、須恵器坏、甕などの土器と、滑石製紡錘車、砥石などの石製品、土製紡錘車、土玉などの土製品、鉄鏃、刀子などの鉄製品、などの諸遺物が検出している。最も多いのは、土師器坏、甕、土玉であり、須恵器は比較的少量である。

3）中世以降の遺構と遺物

中世以降とは、当遺跡が中世城館址としての機能を失った（天正19年）以降を、その時期としており、遺構としては道路状の遺構がある。これは、Ⅰ区の中央部から南側にかけて確認されたもので、遺跡覆土の第3層下位暗灰褐色土を用い、固く歩み固められた部分が、これに相当する。Ⅰ郭の北側、東側では、これに類似した遺構は認められなかった。

この道路状の遺構は、全部で3本確認されている。また、これに関連するものと判断される遺物は、検出されなかった。

なお、確認された遺構に関しては、以下に記述するが、第1表に示した。

第1表　掘立柱建物址一覧表1

建物址番号	方位	形状	柱穴数			桁行径		梁行径		備考
			総数	桁行	梁行	m径	尺径	m径	尺径	
第1号掘立柱建物址	N－41°－W	長方形	17	5×2	＋3	8.19 (6.30)	27.3 (21.0)	3.99 (1.68)	13.3 (5.6)	廂有
第2号掘立柱建物址		長方形	35			8.10 (8.09)	27.0 (26.9)	5.79 (1.65)	19.3 (5.5)	廂有
第3号掘立柱建物址	N－52°－E	長方形	7	3	3	5.25	17.5	1.65	5.5	
第4号掘立柱建物址	N－62°－E	長方形	14	5×2	＋4	8.61	28.7	4.83	16.1	
第5号掘立柱建物址	N－70°－E	長方形	16	8	8	13.23	44.1	4.38	14.6	
第6号掘立柱建物址	N－42°－W	長方形	14	5×2	＋4	8.20	27.3	4.53	15.1	
第7号掘立柱建物址	N－40°－W	長方形	(15		)	(9.00)	30.0	(4.68)	15.6	
第8号掘立柱建物址	N－39°－E	長方形	7			4.00 (1.50)		3.10 (1.94)		
第9号掘立柱建物址	N－23°－W	長方形	15	6×2	＋4	13.00	43.3	4.56	15.2	
第10号掘立柱建物址	N－65°－E	長方形	8	4	4	5.96	18	3.18	10.6	
第11号掘立柱建物址	N－29°－W	正方形	9	3×2	＋3	4.02 (3.72)	13.4 (12.4)	3.60	12.0	
第12号掘立柱建物址	N－41°－W	長方形	11			4.65	15.5	5.55	18.5	
第13号掘立柱建物址	N－42°－W	長方形	8	4	4	7.02	23.4	3.66	12.2	
第14号掘立柱建物址	N－40°－W	長方形	3	2	2	3.30	11.0	1.83	6.1	
第15号掘立柱建物址	N－42°－W	正方形	6	4	4	3.96 (3.66)	13.2 (12.2)	4.02	13.4	
第16号掘立柱建物址	N－35°－W	正方形	11	4×2	＋3	4.14	13.8	4.95	16.5	
第17号掘立柱建物址	N－53°－E	長方形	21							3木束より構成されている。
第18号掘立柱建物址	N－50°－E	長方形	13			7.60	25.0	4.77	15.9	
第19号掘立柱建物址	N－34°－E	長方形	21			8.28	27.6	6.30		第29図第37掘立を切る
第20号掘立柱建物址	N－64°－E	長方形	10	5	5	7.26	24.2	3.90	13.0	
第21号掘立柱建物址	N－44°－W	長方形	10	5	5	7.92	26.4	3.42	11.4	
第22号掘立柱建物址	N－45°－E	長方形	12	6	6	10.20	34.0	7.23	24.1	
第23号掘立柱建物址	N－44°－W	長方形	10	5	5	8.04	26.8	4.02	13.4	
第24号掘立柱建物址	N－55°－E	長方形	4	2	2	2.40	8.0	2.10	7.0	
第25号掘立柱建物址	N－52°－E	長方形	10	4	4	4.68	15.6	2.10	7.0	
第26号掘立柱建物址	N－43°－W	長方形	8	4	4	6.60	22.0	3.54	11.8	
第27号掘立柱建物址	N－23°－W	長方形	10	4×2	＋3	6.00	20.0	4.41	14.7	
第28号掘立柱建物址	N－65°－E	長方形	10	5	5	7.95	25.5	3.00	10.0	
第29号掘立柱建物址	N－45°－E	長方形	22			12.84 11.01	42.8 36.7	4.56	15.2	

第1表　掘立柱建物址一覧表2

建物址番号	方位	形状	柱穴数			桁行径		梁行径		備考
			総数	桁行	梁行	m径	尺径	m径	尺径	
第30号掘立柱建物址	N－47°－W	長方形	10			7.38	24.6	3.60	12	
第31号掘立柱建物址	N－50°－W	長方形	12	4×2	＋4	6.15	20.5	3.36	11.2	
第32号掘立柱建物址	N－47°－E	長方形	10	4×2	＋2	6.33	21.1	2.91	9.9	
第33号掘立柱建物址	N－51°－W	長方形	6	3	3	3.78	12.6	2.10	7.0	
第34号掘立柱建物址	N－47°－E	長方形	6	3	3	3.60	12.0	2.85	9.5	
第35号掘立柱建物址	N－46°－E	長方形	8	4	4	5.82	19.4	3.36	11.2	
第36号掘立柱建物址	N－47°－W	長方形	10	5	5	7.38	246	3.60	12.0	
第37号掘立柱建物址	N－42°－E	長方形	8	4	5	6.54	21.8	5.16	17.2	第29図第19号掘立に切られる
第38号掘立柱建物址	N－50°－W	長方形	9	3	3	4.16	13.7	1.80	6.0	
第39号掘立柱建物址	N－50°－E	長方形	8	4×2	＋4	5.67	18.9	3.45	11.5	
第40号掘立柱建物址	N－36°－W	長方形	12	4×2	＋5	6.27	20.7	4.08	13.6	
第41号掘立柱建物址	N－49°－W	長方形	8	4	4	6.69	22.3	3.60	12.0	
第42号掘立柱建物址	N－45°－E	長方形	11			7.56	25.2	3.60 (4.50)	12.0 (15.0)	廂有
第43号掘立柱建物址	N－24°－W	長方形	6	3	3	4.02	13.4	3.00	10.0	
第44号掘立柱建物址	N－43°－W	長方形	10	5	5	8.67	15.6	3.30	11.0	
第45号掘立柱建物址	N－63°－E	長方形	15			8.22	27.4	3.03	10.1	
第46号掘立柱建物址	N－62°－E	正方形	8	3×2	＋2	3.60	12.0	3.36	11.2	
第47号掘立柱建物址	N－41°－W	正方形	6	3	2	3.93	13.1	3.36	11.2	
第48号掘立柱建物址	N－48°－E	長方形	8	4	4	5.37	19.7	3.18	10.6	
第49号掘立柱建物址	N－38°－W	長方形	32			10.50	35.0	5.61	18.7	
第50号掘立柱建物址	N－47°－W	長方形	8	4	4	5.85 (5.55)	19.5 18.5	4.20	14.0	
第51号掘立柱建物址	N－47°－W	長方形	8	3	3	5.88 5.58	19.6 18.6	4.20	14.0	
第52号掘立柱建物址	N－45°－E	長方形	6	4	4	4.41	14.7	3.60	12.0	
第53号掘立柱建物址	N－45°－E	長方形	8	4	4	5.43	18.1	3.54	11.8	
第54号掘立柱建物址	N－36°－W	長方形	6	3	3	3.30	11.0	3.75	12.5	
第55号掘立柱建物址	N－41°－W	長方形	9	3×2	＋3	6.30	21.0	3.45	10.5	
第56号掘立柱建物址	N－44°－W	長方形	16			8.61	28.7	5.85	19.5	
第57号掘立柱建物址	N－40°－W	正方形	16	3	3	8.61	28.7	3.51	11.7	
第58号掘立柱建物址	N－44°－W	正方形	6	3	3	4.02	13.4	3.81	12.7	

Ⅳ. 中世の遺構と遺物

中世の遺構としては、調査開始前に確認されていた土塁、堀、虎口と、調査によって確認された堀、掘立柱建物址、粘土貼り土壙、土壙、墓壙、地下式倉庫、虎口、溝、井戸、などの諸遺構が確認されている。これら諸遺構は、Ⅰ郭に集中していることと、当遺跡が3回造改築されていることは前項で述べている。また、この前後関係は土塁と堀の関係が明確に示している。この土塁と堀を除くと、当遺跡の中心を占めるものは掘立柱建物址である。

以下に、各遺構に関し各郭ごとに記述していくが、遺構順は掘立柱建物址から順に記述する。なお、中世城館址関連遺物は、一括して述べる。

1．Ⅰ郭の遺構

1）掘立柱建物址

第1号掘立柱建物址　（第12図、第2表、図版9）

本建物址は、Ⅰ郭の北西部に位置しており、南面に廂を有する建物址である。身舎は、P1～P5とP11～P13までの部分と判断される。よって、本建物址は、桁行が4間で梁行は3間の長方形をなし、N－41°－Wに方位を有する長方形の建物址である。

本建物址の大きさは、身舎桁行が4間で8.19m（27.3尺）あり、梁行は2間で3.99m（13.3尺）を計測する。桁行4間の柱間径は、P1，2とP6，7間が1.89m（6.3尺）あり、P2，3とP7，8間が2.22m（7.4尺）あり、P3，4とP8，9間は2.22m（7.4尺）あり、P4，5とP9，10間は1.86m（6.2尺）を各々計測する。梁行2間の柱間径は、P1～5とP6～10間が2.73m（9.1尺）あり、P6～10とP11～13間が1.26m（4.2尺）を、各々計測する。また、桁行であるP11～12間は3.84m（12.8尺）で、P12～13間は4.35m（14.5尺）を計測する。廂は、桁行（P14～16間）が6.30m（21.0尺）で、梁行（P11～14間）は1.68m（5.6尺）を計測する。

この計測値から本建物址は、身舎が6尺×7.5尺×7.5尺×6尺（桁行）×9尺×4尺（梁行）を意識した建物址で、廂が21尺×5.5尺を意識したようである。P6～10とP11～13及び、P11～16までの部分は、廂と孫廂の可能性を有している。

柱穴は、円形で比較的小さな柱穴であり、深さは各柱穴により数値は異なっている。柱根は、柱穴内の土層から8寸（24cm）程度の柱を使用したようである。個々の柱穴径は、第2表に示した。

このように、柱穴の深さに差異を有するものの、平面プラン等から本建物址は比較的しっかりした建物址と判断される。なお、遺物は何ら出土しなかった。また、P11には根石を置いている。

第2表　第1号掘立柱建物址柱穴一覧表

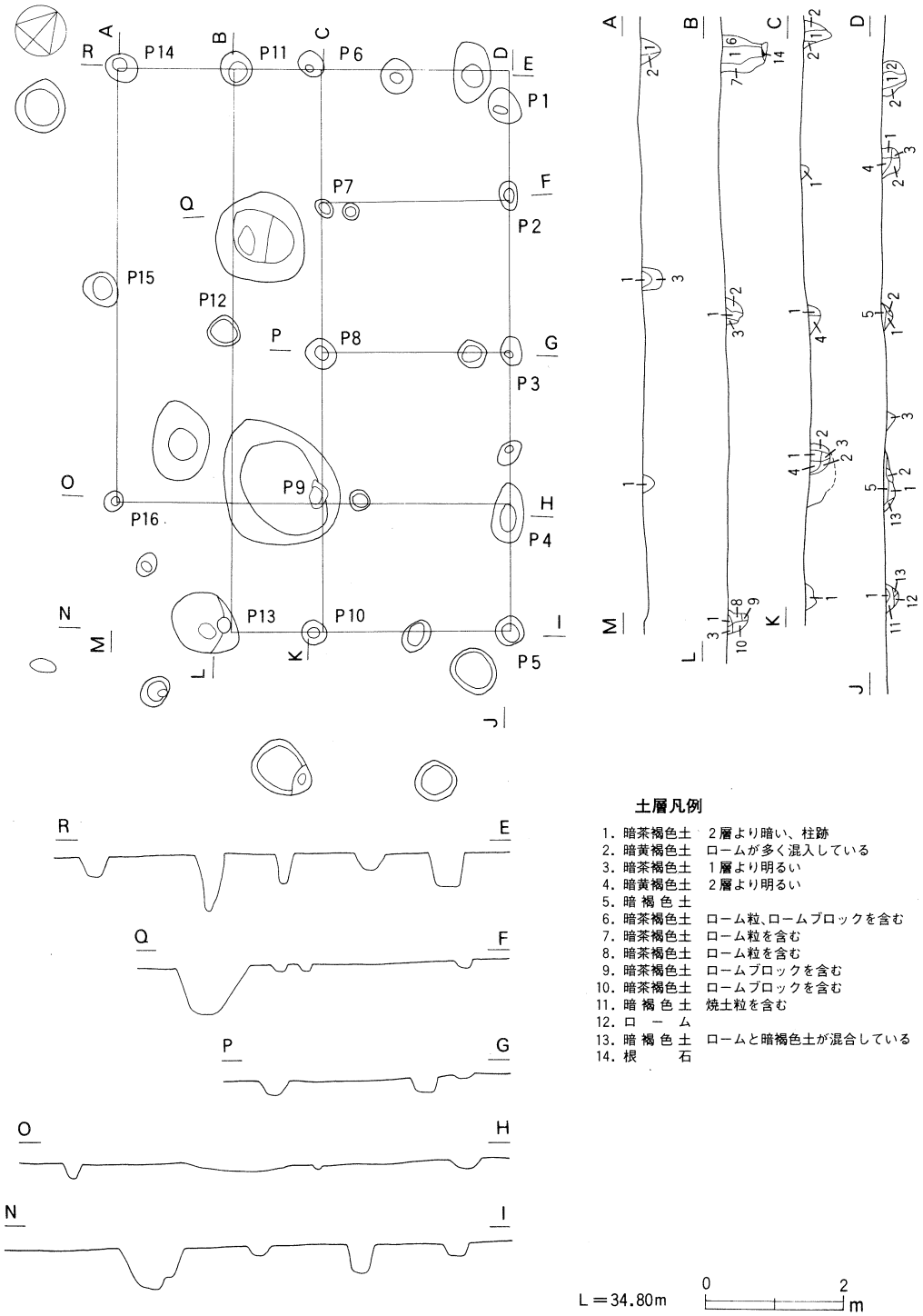
PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	0.52	0.48	0.34	楕円形		P10	0.38	0.36	0.14	楕円形	
2	0.44	0.28	0.20	楕円形		11	0.50	0.48	0.73	楕円形	
3	0.42	0.30	0.11	楕円形		12	0.48	0.46	0.24	楕円形	
4	0.90	0.48	0.14	楕円形		13	0.24	0.20	0.35	楕円形	
5	0.43	0.42	0.18	楕円形		14	0.48	0.42	0.28	楕円形	
6	0.40	0.38	0.41	楕円形		15	0.52	0.50	0.30	楕円形	
7	0.30	0.26	0.13	楕円形		16	0.30	0.28	0.20	楕円形	
8	0.46	0.42	0.19	楕円形		17	0.88	0.54	0.48	楕円形	
9	0.42	0.26	0.18	楕円形							

第2号掘立柱建物址　（第13図、第3表、図版9・11）

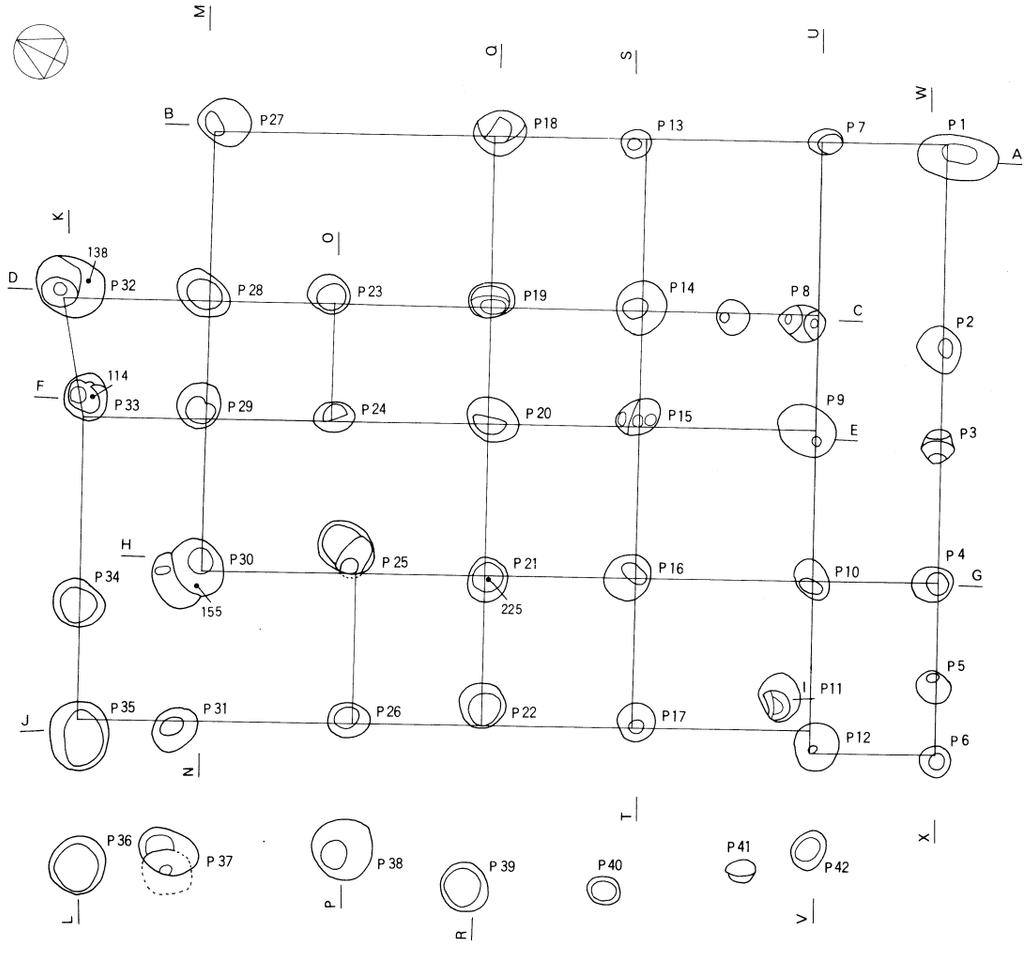
本建物址は、I郭北東部に位置し新しい時期の建物址で、身舎と廂とから構成されている。身舎は、桁行が3間（一部4間）で梁行3間の長方形をなす部分である。廂は、東、西、南の3面廂である。東側は、桁行が4間で梁行は1間となり、西側は桁行が3間で梁行は1間となり、南側1間部分は南側廂と接続している。南側は、桁行が5間で梁行は1間となる。この3面廂は、南側で各々接続している。身舎径は、8.10m（27.0尺）×5.79m（19.3尺）である。

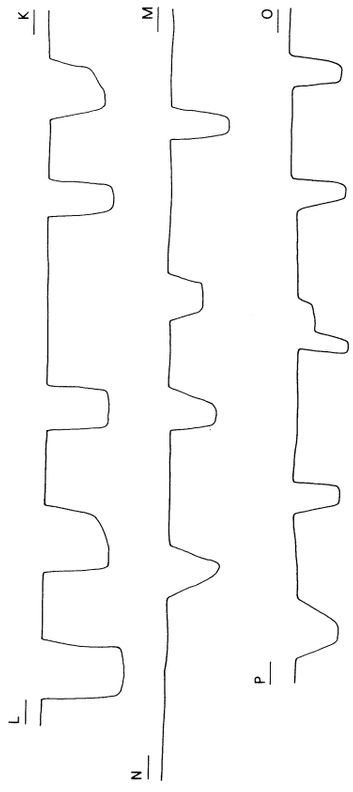
廂部分を加えると、本建物址の桁行は6間で梁行が4間となり、大型で長方形をなす建物址となる。全体での大きさは、桁行が6間で11.40m（38.0尺）あり、梁行は4間で7.77m（25.9尺）となるが東側廂が0.30m（1.0尺）突出している。方位としては、N－　°－Wである。

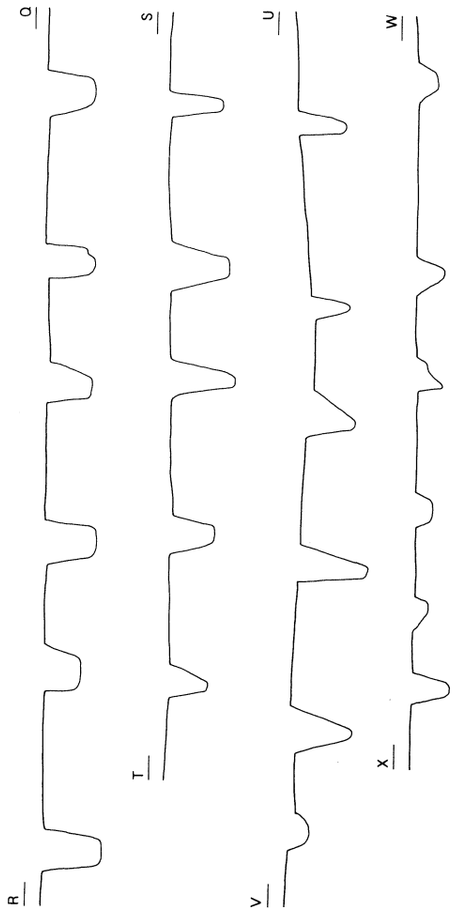
身舎の柱間径は桁行3間はP7,13とP12,17間が2.34m（7.8尺）あり、P13,18とP17,22間が2.01m（6.7尺）あり、P18,27とP21,30間が3.75m（12.5尺）を、各々計測する。桁行4間部分は、中央部にあり、P8,14とP9,15間が2.34m（7.8尺）あり、P14,19とP15,20間が2.01m（6.7尺）あり、P19,23とP20,24間が2.10m（7.0尺）あり、P23,28とP24,29間では1.65m（5.5尺）を、各々計測する。梁行は、3間でP7～27とP8～28間が2.28m（7.6尺）ありP8～



第12図　第1号掘立柱建物址実測図







土層凡例

1. 柱　　痕　灰土
2. 暗褐色土　炭化粒を含む
3. 暗褐色土　炭化粒を含む
4. 褐　色　土
5. 暗褐色土　ローム粒子を含む
6. 暗褐色土　5より暗い
7. 暗茶褐色土　ロームブロック、ローム粒子を含む
8. 暗茶褐色土　ローム粒子を含む
9. 暗褐色土　ロームブロックと焼土粒、ローム粒を含む

第13図　第２号掘立柱建物址実測図

L＝34.90m　0　2 m

第3表　第2号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ		
P1	1.07	0.60	0.37	楕円形	
2	0.66	0.58	0.28	楕円形	
3	0.48	0.46	0.30	楕円形	
4	0.56	0.48	0.24	楕円形	
5	0.46	0.44	0.18	楕円形	
6	0.42	0.42	0.38	円形	
7	0.46	0.36	0.65	楕円形	
8	0.64	0.50	0.50	楕円形	
9	0.76	0.70	0.59	楕円形	
10	0.58	0.44	0.78	楕円形	
11	0.64	0.54	0.54	楕円形	
12	0.64	0.60	0.70	円形	
13	0.40	0.38	0.72	円形	
14	0.72	0.68	0.78	楕円形	
15	0.58	0.50	0.68	楕円形	
16	0.62	0.60	0.54	楕円形	
17	0.52	0.50	0.58	円形	
18	0.70	0.60	0.60	楕円形	
19	0.62	0.46	0.62	楕円形	
20	0.66	0.58	0.66	楕円形	
21	0.60	0.52	0.62	楕円形	

PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ		
P22	0.60	0.60	0.47	楕円形	
23	0.58	0.54	0.65	楕円形	
24	0.54	0.40	0.67	楕円形	
25	0.74	0.74	0.68	楕円形	
26	0.56	0.46	0.60	楕円形	
27	0.70	0.64	0.70	楕円形	
28	0.68	0.60	0.48	楕円形	
29	0.62	0.58	0.60	楕円形	
30	0.78	0.66	0.61	楕円形	
31	0.60	0.58	0.64	楕円形	
32	0.90	0.80	0.63	楕円形	
33	0.64	0.58	0.78	楕円形	
34	0.68	0.66	0.82	楕円形	
35	0.92	0.78	0.72	楕円形	
36	0.78	0.76	1.10	楕円形	
37	0.78	0.60		楕円形	
38	0.80	0.72	0.56	楕円形	
39	0.66	0.64	0.80	楕円形	
40	0.44	0.40		楕円形	
41	0.40	0.32		楕円形	
42	0.56	0.46	0.26	楕円形	

28とP9～29間が1.50m（5.0尺）あり、P9～29とP10～30間が2.01m（6.7尺）を、各々計測する。このことから、身舎は7.5尺×6.5尺×12.5尺＋7.5尺×5.0尺×6.5尺を意識したようである。

東側の廂は、梁行が4間で8.09m（26.9尺）あり、桁行は1間で1.65m（5.5尺）を、各々計測する。柱穴は、P1列とP4列が身舎桁行と一致しているものの、中間の2柱穴は少しずれている。P1～2間は、2.70mで9.0尺あり、P2～3間が1.50mで5.0尺あり、P3～4間が1.62mの5.4尺であり、P4～6間が2.28mで7.6尺を、各々計測する。南側廂は、桁行が5間で9.75m（32.5尺）あり、梁行は1間で1.98m（6.6尺）を各々計測する。桁行の柱穴間は、P10～21までの2間は桁行径と同じ7.8尺と6.7尺であるが、P21以西は異なっている。P22～P26間は、1.80m（6.0尺）あり、P26～P31間が2.40m（8.0尺）あり、P31～35間が1.26m（4.2尺）を各々計測する。西側は、桁行が1間で1.62m（5.4尺）あり、梁行が3間で5.55m（18.5尺）を、各々計測する。北側のP32，33は、梁行中央部と同じ5尺でありこれの南側は2.40m（8.0尺）＋1.62m

（5.4尺）を、各々計測する。

柱穴は、ほぼ円形をなす柱穴が大部分で、楕円形をなす柱穴が5本認められる。柱穴内の土層は、暗褐色土を中心とする土層で、柱根は0.18mの6寸程度であることから5～6寸の柱が使用されていたようである。出土遺物としては、擂鉢（№114）、金具（№138）、カワラケ（№155）火舎片、土師器片などが出土している。なお、個々の柱穴径は第3表に示した。

第3号掘立柱建物址（第62図、第4表、図版11）

本建物址は、I郭の南側中央部で虎口部に相当する建物址で、桁行が2間で梁行は1間の規模を有している。建物址の南方には、橋を掛けたと推定される遺構があり、建物址内は良く踏み固められている。方位としては、N－52°－Eで、長方形をなしている。

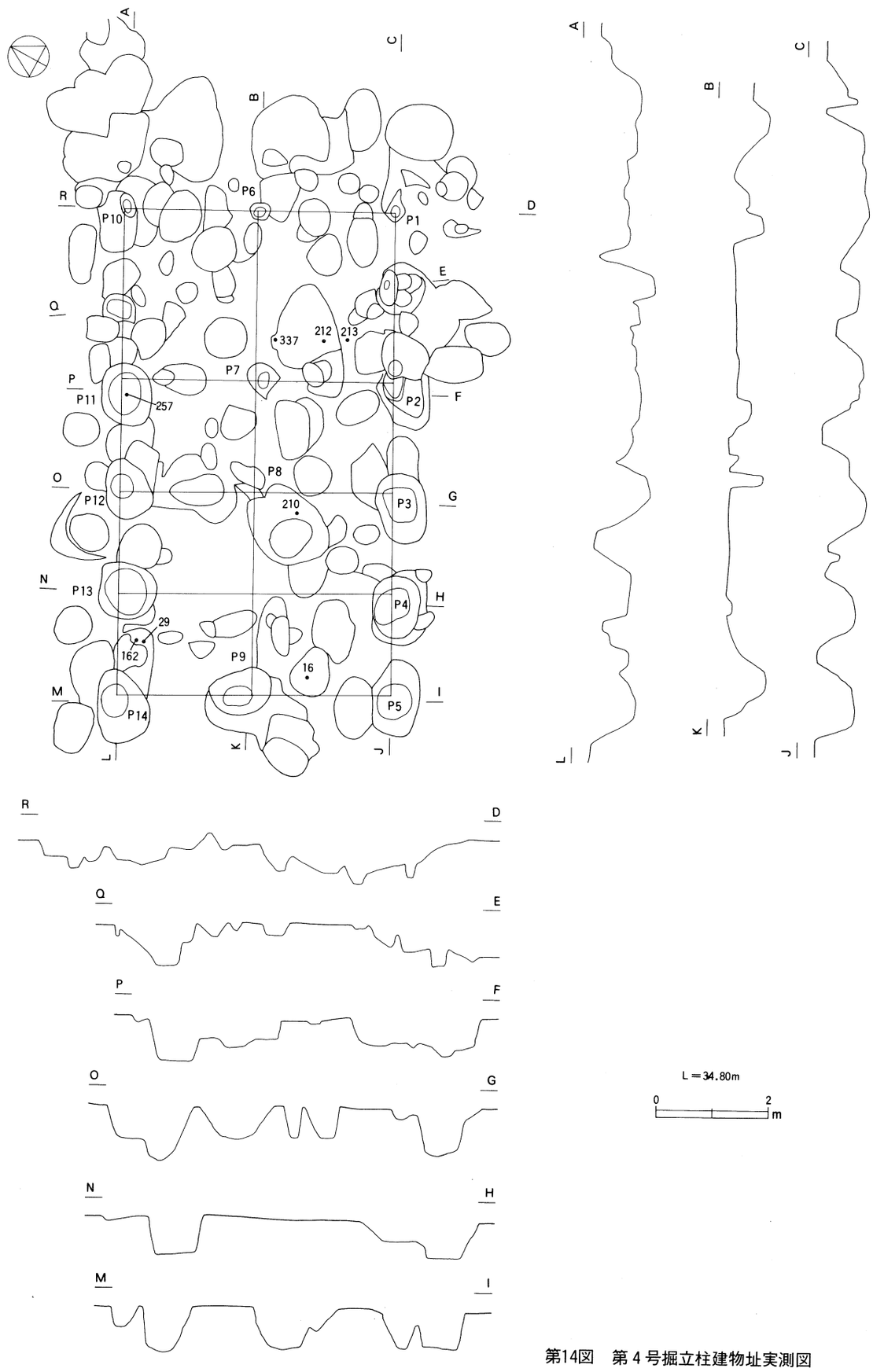
本建物址の大きさは、桁行が2間で5.25m（17.5尺）あり、梁行は1間で2.49m（8.3尺）を各々計測することから、17.5尺×8尺の建物址であったと判断される。桁行2間の柱間は、北側では（P1，2とP5，6間）3.60m（12.0尺）あり、南側（P2，3とP6，7間）が1.65mで5.5尺を、各々計測する。このため、本建物址は12尺×5.5尺の2部屋構成であり、その位置から櫓門と判断される。また、本址は第25号建物址と重複している。

本建物址南側の遺構は、長さ6.42m（21.4尺）、幅2.46m（8.2尺）で、堀1上に掛けられたもので、建物址と接続していることから橋と判断される。橋としては、長さが約2.5間で幅が1.5間程度と判断される。

建物址と橋の柱穴は円形をなす柱穴で、しっかりと掘り込まれている。柱穴の大きさは、第4表に示した。出土遺物としては、堀内より検出されているが、柱穴や建物址部分からは何ら検出されなかった。また、橋の西側には一部踏み固められた部分があるため、西方への通路が有ったものと判断される。

第4表　第3号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ（m）			形状	備考	PNO	大きさ（m）			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	1.10	1.10	0.30	楕円形		P5	1.15	0.60	0.64	楕円形	
2	0.60	0.52	0.80	楕円形		6	0.50	0.40	0.83	楕円形	（25号掘立と共有）
3	0.50	0.30	0.54	楕円形		7	0.50	0.38	0.67	楕円形	
4	0.30	0.30	0.42	楕円形		8	0.35	0.20	0.52	楕円形	



第14図　第４号掘立柱建物址実測図

第4号掘立柱建物址（第14図、第5表）

本建物址は、I郭の北東部に位置し、桁行4間、梁行2間の建物址で長方形をなしている。方位は、N－62°－Eである。

本建物址の大きさは、桁行が4間で8.61m（28.7尺）あり、梁行は2間で4.83m（16.1尺）を各々計測する。よって、桁行と梁行は、28.7尺×16尺を意識したようである。桁行と梁行の柱間径は、桁行のP1，2とP10,11 間が3.03m(10.1尺）あり、P2，3とP11,12間が1.95m（6.5尺）あり、P3，4とP12,13間が1.80m（6.0尺）あり、P4，5とP13,14間が1.80m（6.0尺）を、各々計測する。梁行の2間は、P1,6～P5,9間が2.46m（8.6尺）であり、P6，10～P9，14間が2.40m（8.0尺）を各々計測する。この計測値から、桁行は10尺×6.5尺×6尺×6尺で、梁行が8.5尺×8尺の各柱間を意識したようである。また、中央のP7と8の位置から本建物址は、三部屋構成の建物と判断される。つまり、P7の東側でP1，2，6，7，10,11 で区切られた部屋（10尺×16尺）と、P7，8間でP2，3，7，8，11,12 で区切られた中央の部屋（6.5尺×16尺）と、P8の西側でP3，4，5，8，9，12,13,14で区切られた部屋（12尺×16尺）とに分かれる構成と判断される。

柱穴は、重複関係が著しいためその一部しか確認出来なかった柱穴も所在しているが、大型の柱穴で楕円形をなす柱穴が中心であり、桁行方向に柱穴の長軸を有するものがほとんどで、梁行方向に長軸を有する柱穴はP9のみである。深さは、各柱穴により異なっているが、大型の柱穴は比較的深く掘り込まれていることから、本建物址は大型でしっかりした建物址と判断される。

出土遺物としては、志野小皿（№29)、古銭（永楽銭、№337)、カワラケ（№157、162、163）砥石（№212）が検出されている。

第5表　第4号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	0.60	0.35	0.69	楕円形		P8	0.70	0.32	0.52	楕円形	
2	0.40	0.38	0.54	楕円形		9	1.10	0.80	0.75	楕円形	
3	1.26	0.90	0.77	楕円形		10	0.40	0.26	0.42	楕円形	
4	1.10	0.86	0.59	楕円形		11	1.12	0.90	0.77	楕円形	
5	1.36	0.84	0.67	楕円形		12	1.08	0.80	1.00	楕円形	
6	0.38	0.30	0.30	楕円形		13	1.04	1.00	0.58	楕円形	
7	0.62	0.50	0.25	楕円形		14	1.30	0.94	0.75	楕円形	

第５号掘立柱建物址（第15図、第６表、図版10・11）

本建物址は、Ｉ郭の北東部で第８号溝（旧堀）の北東虎口北側に位置し、第２、20、28号建物址と重複しており、桁行７間、梁行１間の建物址で長方形をなしており、Ｎ－70°－Ｅに方位を有している。

大きさは、桁行が７間で13.23m（44.1尺）あり、梁行は4.38m（14.6尺）を各々計測することから、本建物址は44尺×14.5尺を意識したようである。桁行と梁行の柱間径は、桁行ではＰ１，２とＰ９，10間が1.35m（4.5尺）あり、Ｐ２，３とＰ10，11間が1.80m（6.0尺）あり、Ｐ３，４とＰ11，12間が1.95m（6.5尺）あり、Ｐ４，５とＰ12，13間が2.10m（7.0尺）あり、Ｐ５，６とＰ13，14間が1.80m（6.0尺）あり、Ｐ６，７とＰ14，15間が2.10m（7.0尺）あり、Ｐ７，８とＰ15，16間が2.13m（7.1尺）を各々計測する。この計測値から桁行は、4.5尺×６尺×6.5尺×７尺×６尺×７尺×７尺の柱間径となる。梁行の14.6尺は、14.5尺を意識したようである。こうすると東側の柱間が他の柱間に対し非常に狭くなっているため、廂的用途が考えられ、この部分以外はほぼ同程度の構成であることから、しっかりした構成の建物址と判断される。

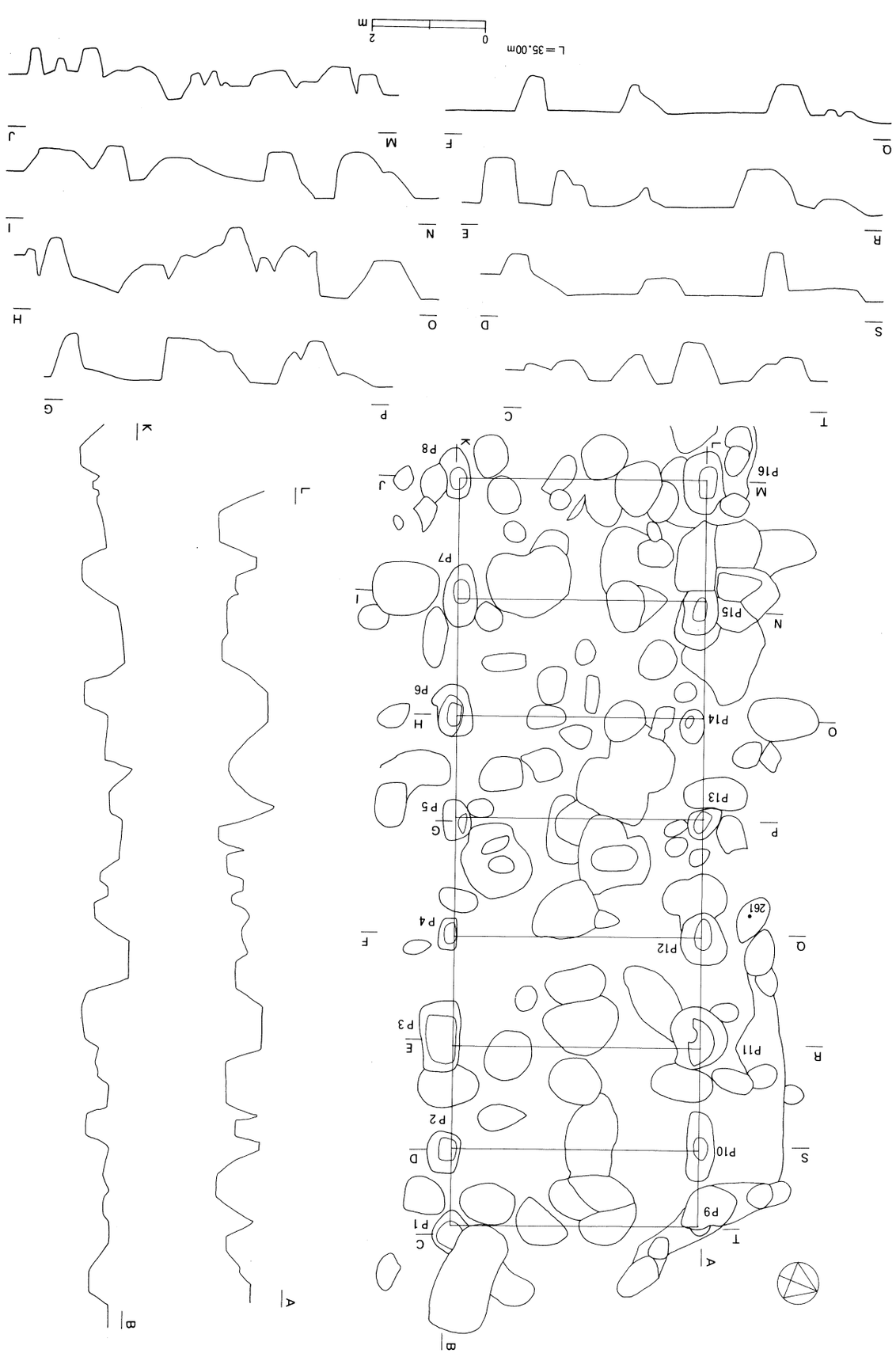
柱穴は、Ｐ３のみが大きく掘り込まれているのみで、他の柱穴は0.50m～1.00m前後の柱穴で楕円形をなす柱穴がほとんどある。楕円形以外では、Ｐ３が長方形でＰ１が方形状をなす程度である。深さは、個々の柱穴により異なっている。個々の柱穴径に関しては、第６表に示した。

出土遺物としては、Ｐ３，７，11，12，16より各々少量のカワラケ小片が出土している程度で図示可能な遺物は検出されなかった。

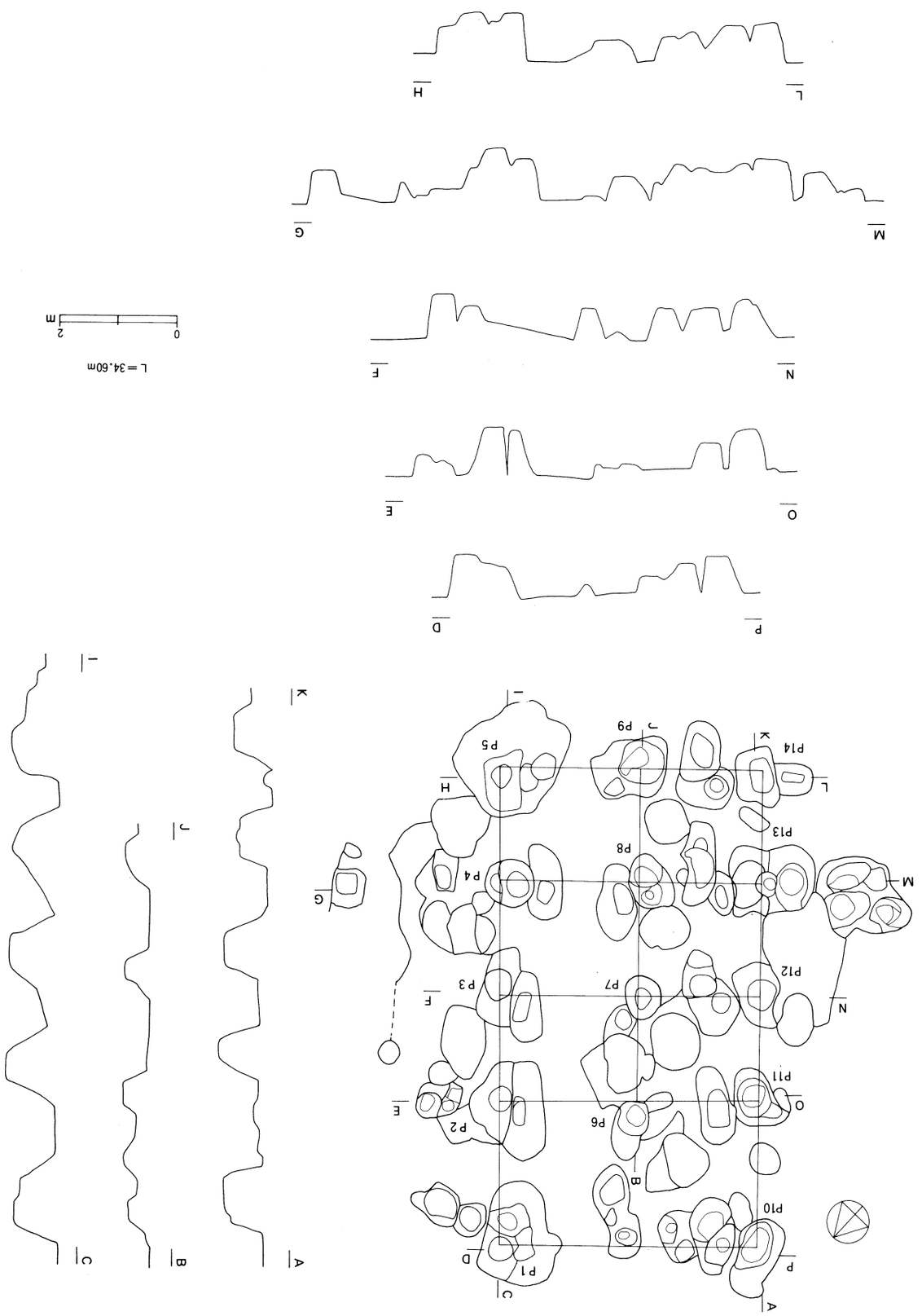
第６表　第５号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.78	0.60	0.18	楕円形	
2	0.74	0.60	0.58	楕円形	
3	1.24	0.68	0.75	長方形	
4	0.56	0.32	0.63	長方形	
5	0.72	0.50	0.56	楕円形	
6	0.90	0.60	0.85	楕円形	
7	1.10	0.58	0.64	楕円形	
8	0.90	0.42	0.60	楕円形	

PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ		
Ｐ９	0.90	0.74	0.36	楕円形	
10	1.24	0.48	0.75	長方形	
11	1.08	1.00	0.65	楕円形	
12	0.94	0.78	0.54	楕円形	
13	0.58	0.54	0.75	楕円形	
14	0.62	0.44	0.72	楕円形	
15	0.80	0.60	0.82	楕円形	
16	1.10	0.70	0.66	楕円形	



第15図　第５号掘立柱建物址実測図



第16図　第６号掘立柱建物址実測図(付図10)

第６号掘立柱建物址（第16図、第７表、図版９）

本建物址は、Ｉ郭の北東部で第８号溝（旧堀）と第13号溝が終止する部分との間に位置し、桁行４間、梁行２間で長方形をなす建物址である。方位を、Ｎ－42°－Ｗに有し、第13～15、21号建物址と重複している。

本建物址の大きさは、桁行が４間で8.20m（27.3尺）あり、梁行は２間で4.53m（15.1尺）を計測することから、桁行と梁行は27尺×15尺を意識したものと判断される。桁行と梁行の柱間径は、桁行がＰ１，２とＰ10,11間が2.46m（8.2尺）あり、Ｐ２，３とＰ11,12 間が1.83m（6.1尺）あり、Ｐ３，４とＰ12,13間が1.98m（6.6尺）あり、Ｐ４，５とＰ13,14間が1.95m（6.5尺）を各々計測する。梁行は、北側（Ｐ１，２とＰ10,11 ）のみが１間で、他の部分は２間である。北側は、4.53mで15.1尺となり、Ｐ２，６からＰ５，９間が2.40m（8.0尺）あり、Ｐ６，11とＰ９，14間が2.10m（7.0尺）を、各々計測することから梁行は、北側が15尺で他の部分が８尺×７尺の柱間径となる。

以上の計測値から、本建物址は桁行が８尺×６尺×6.5尺×6.5尺で、梁行が15尺で８尺×７尺の柱間径を意識した建物址で、しっかりした建物址と判断される。

柱穴は、楕円形をなす柱穴がその中心で、例外的にはＰ４，６，７，８，９などは円形状の柱穴である。Ｐ13は、重複のため底部を確認したのみである。柱穴の深さは、各柱穴により異なり一定ではない。個々の柱穴径は、第７表に示した。

出土遺物としては、天目茶碗片、瓦質土器片、皿片などが出土している。

第７表　第６号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.80	0.70	0.74	楕円形		Ｐ８	0.58	0.56	0.43	楕円形	
2	1.42	0.74	0.79	楕円形		9	0.78	0.76	0.42	楕円形	
3	1.30	0.56	0.63	楕円形		10	0.74	0.56	0.67	楕円形	
4	0.85	0.74	0.76	長方形		11	0.94	0.70	0.70	楕円形	
5	0.88	0.60	0.79	長方形		12	1.10	0.66	0.60	楕円形	
6	0.62	0.60	0.25	楕円形		13	0.44	0.36	0.59	楕円形	
7	0.74	0.62	0.48	楕円形		14	1.00	0.70	0.63	楕円形	

第７号掘立柱建物址（第17図、第８表）

本建物址は、Ｉ郭の北東部中央で第13号溝の北側中央南西部に位置し、第13号住居址と重複している。また、本建物址は保存樹下に柱穴の一部を有するため、未確認の部分が所在している。本建物址は、桁行４間、梁行４間で長方形をなし、Ｎ－40°－Ｗに方位を有する建物址である。大きさは、桁行が４間で9.00m（30.0尺）あり、梁行は４間で4.68m（15.6尺）を各々計測する。

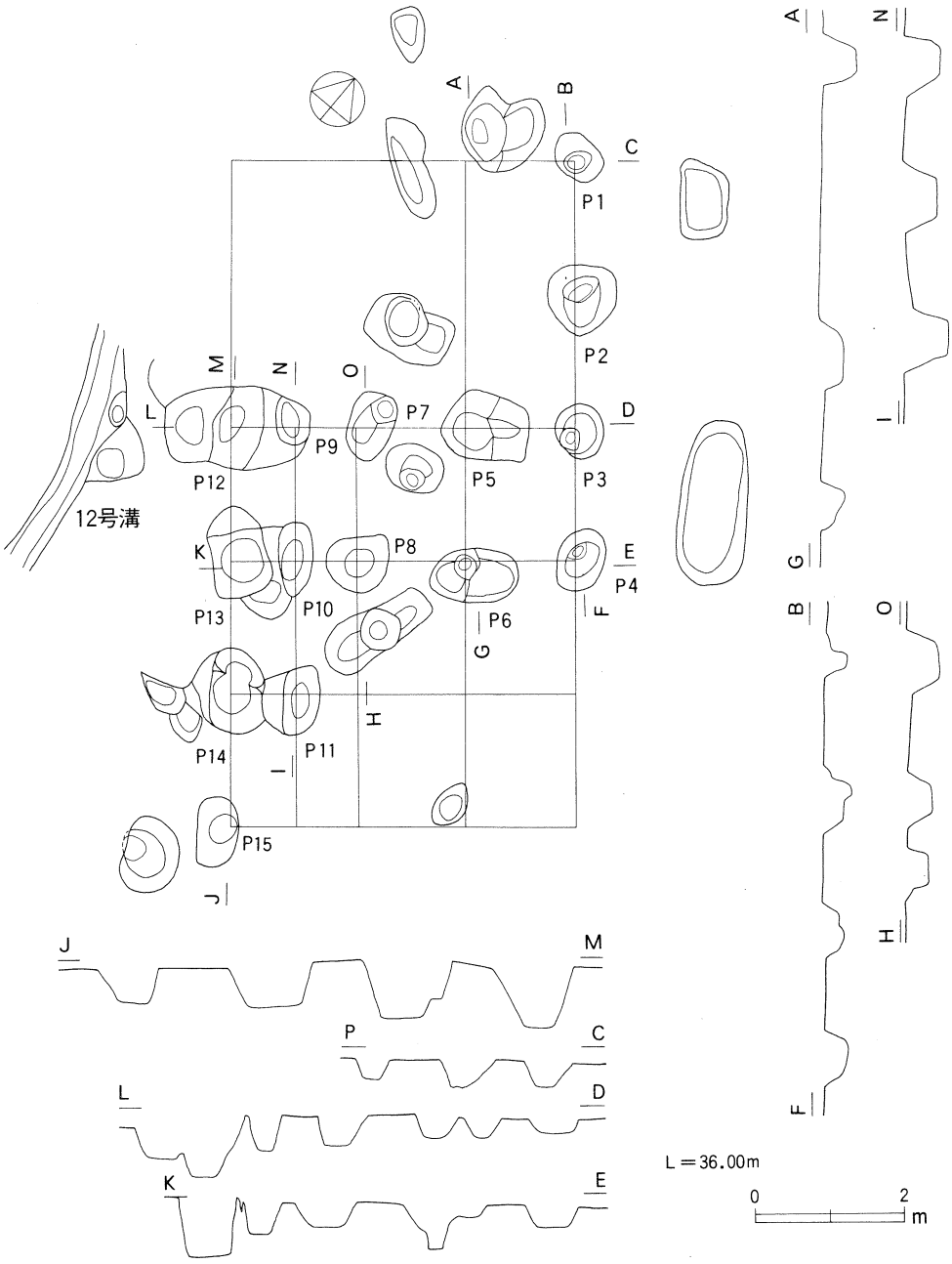
各柱間径は、桁行はＰ１～Ｐ３間が3.60m（12.0尺）あり、Ｐ３，Ｐ４間が1.80m（6.0尺）あり、Ｐ13,Ｐ14間が1.80m（6.0尺）であり、Ｐ14,Ｐ15間が1.80m（6.0尺）を、各々計測する。梁行は、北側と南側では異なっている。北側は、Ｐ12～Ｐ５間が広く3.18m（10.6尺）であり、他は狭くなっている。Ｐ12～Ｐ15とＰ９～11間は、0.87m（2.9尺）あり、Ｐ９～11とＰ７，８間は0.84m（2.8尺）あり、Ｐ７，８～Ｐ５,10間は1.47m（4.9尺）あり、Ｐ５，６とＰ１～４間は1.49m（4.9尺）を各々計測する。この計測値から、桁行は12尺×６尺×６尺×６尺となり、梁行は10.5尺×５尺＋３尺×３尺×５尺×５尺となり、小さく区画された構成の建物址となる。

柱穴は、楕円形をなす柱穴が中心でＰ２，３のように円形をなす柱穴も所在している。柱穴の深さは、各柱穴により異なっており、Ｐ３が最も浅くＰ12が最も深く掘り込まれている柱穴である。個々の柱穴径は、第８表に示した。

出土遺物としては、Ｐ12,13,14から各々少量の土師器小片とカワラケ小片が出土した程度で、図示可能な遺物は出土しなかった。

第８表　第７号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.68	0.66	0.31	楕円形		Ｐ９	0.68	0.46	0.48	楕円形	
2	0.98	0.96	0.38	楕円形		10	1.00	0.48	0.46	楕円形	
3	0.78	0.68	0.24	円形		11	0.90	0.78	0.60	楕円形	
4	0.86	0.68	0.31	楕円形		12	1.10	0.64	0.88	楕円形	
5	1.18	0.96	0.31	楕円形		13	1.26	0.78	0.81	楕円形	
6	1.20	0.74	0.46	楕円形		14	1.12	0.68	0.58	楕円形	
7	0.96	0.64	0.42	楕円形		15	0.92	0.56	0.50	楕円形	
8	0.84	0.76	0.35	楕円形							



第17図　第７号掘立柱建物址実測図

第８号掘立柱建物址（第18図、第９表）

本建物址は、Ｉ郭の北側中央部で第７号掘立柱建物址の南東部に位置し、桁行と梁行が各２間となるが、南側は１間の変則的な建物址である。方位としては、Ｎ－39°－Ｅと判断される。

大きさは、記述上北側（Ｐ３，４，５，６間）と南側（Ｐ１，２，６，７間）とに分けて記述する。北側は、１間４面でＰ３，４とＰ５，６間が1.92m（6.4尺）であり、Ｐ３，５とＰ４，６間が1.50m（5.0尺）を各々計測するため、6.5尺×５尺を意識したものと判断される。

南側は、Ｐ１，２とＰ６，７間が2.07m（6.9尺）であり、Ｐ１，６とＰ２，７間が3.12m（10.4尺）を各々計測することから、南側は７尺×10尺を意識したことと判断される。

この計測値から、本建物址は７尺×10尺＋6.5尺×５尺程度の建物址で、南側を広くしていることから、南側に建物址の中心があったことと判断される。

柱穴は、円形と楕円形をなす柱穴がある。円形には、Ｐ１，４，５の３柱穴が入り、楕円形には残りのＰ２，３，６，７の４柱穴が入る。大きさは、ほぼ同程度の大きさで深さは、Ｐ６が最も深く0.57mを計測し、Ｐ１，５が住居址であることから浅く0.20m前後である。他の柱穴は、0.30～0.40m台の深さを有している。また、他の柱穴も認められるが、遺構のプランは認められなかった。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。

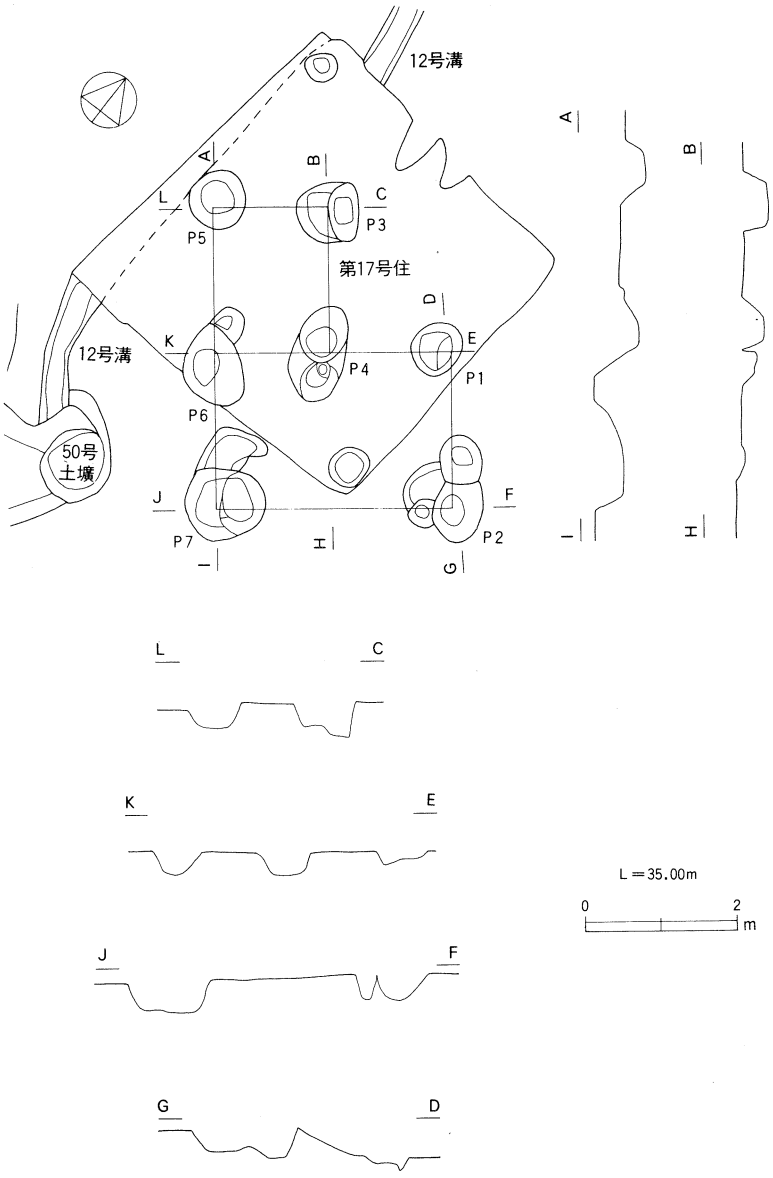
第９表　第８号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.68	0.68	0.29	円形		Ｐ５	0.78	0.76	0.29	円形	
2	0.78	0.68	0.33	楕円形		6	1.04	0.74	0.36	楕円形	
3	0.80	0.40	0.35	楕円形		7	0.95	0.46	0.33	楕円形	
4	0.70	0.60	0.29	楕円形							

第９号掘立柱建物址（第19図、第10表、図版11）

本建物址は、Ｉ郭の北東部に位置し第２、９、27号建物址などと重複しており、桁行が５間で梁行は２間（南側１間）の長方形をなす建物址であり、Ｎ－23°－Ｗに方位を有している。大きさは、桁行が５間で13.00m（43.3尺）あり、梁行は4.56m（15.2尺）を計側する。

各柱間は、桁行５間がＰ１，２とＰ11,12間は3.00m（10.0尺）あり、Ｐ２，３とＰ12,13間は2.82



第18図　第８号掘立柱建物址実測図

m（9.4尺）あり、P3，4とP13,14間は2.07m（6.9尺）あり、P4，5とP14,15間は2.10m（7.0尺）あり、P5，6とP15,16間は2.10m（7.0尺）を各々計測する。梁行は、東側2間（P5～15の東側と西側）は共に1間で4.56m（15.2尺）を計測する。P4～14間の西側ではP1～14とP7～10間が2.85m（9.5尺）あり、P7～10とP11～14間が1.74m（5.8尺）を各々計測する。この計測値から、本建物址は桁行が10尺×9尺×7尺×7尺×7尺で、梁行は9.5尺×6尺＋15尺×15尺の柱間構成と判断される。このように、北側と東側に広い部屋を配置しており、比較的しっかりした構造と判断される。

柱穴は、重複関係が著しいものの楕円形をなす柱穴が中心で、建物址の方向に沿って掘り込まれている柱穴がほとんどである。大きさは、0.50m～1.00m台がほとんどである。深さは、P2，6，7，10の4柱穴が0.10m台と浅く、P5，8，14の3柱穴が0.50m以上の深さを有している。他は、この範囲に入り一様でない。個々の柱穴径は、第10表に示した。

出土遺物は、P3，13,14 より少量の土師器小破片が出土した程度である。

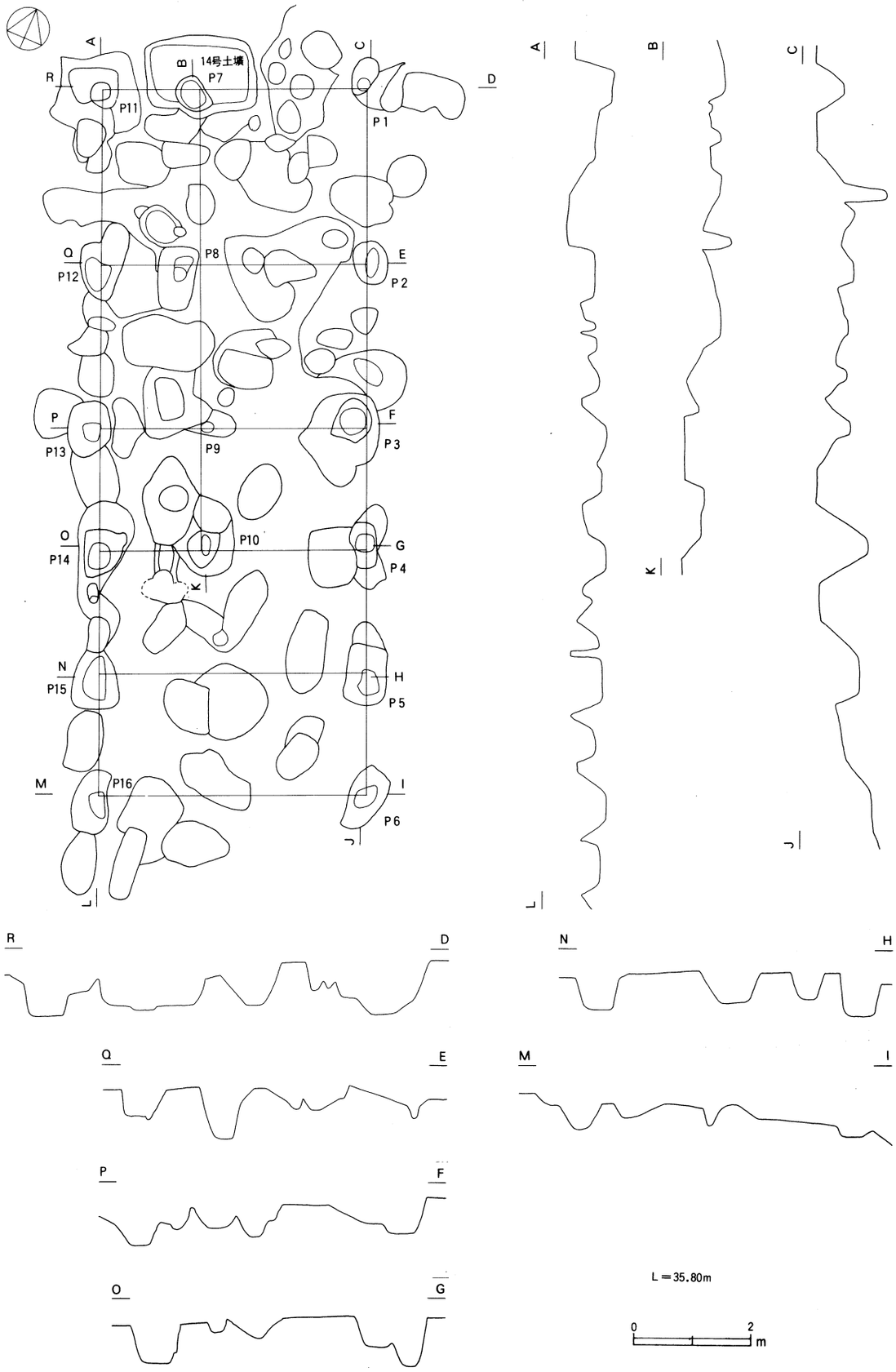
第10表　第9号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	0.60	0.45	0.45	楕円形		P9	0.85	0.48	0.40	楕円形	
2	0.74	0.60	0.30	楕円形		10	0.64	0.54	0.30	楕円形	
3	0.80	0.64	0.55	楕円形		11	0.85	0.76	0.69	楕円形	
4	0.78	0.42	0.76	長方形		12	0.98	0.72	0.43	楕円形	
5	1.05	0.70	0.55	長方形		13	0.92	0.74	0.54	楕円形	
6	1.10	0.70	0.55	楕円形		14	0.78	0.72	0.50	楕円形	
7	0.62	0.55	0.40	楕円形		15	1.02	0.75	0.57	楕円形	
8	1.12	0.66	0.68	長方形		16	1.10	0.60	0.47	楕円形	

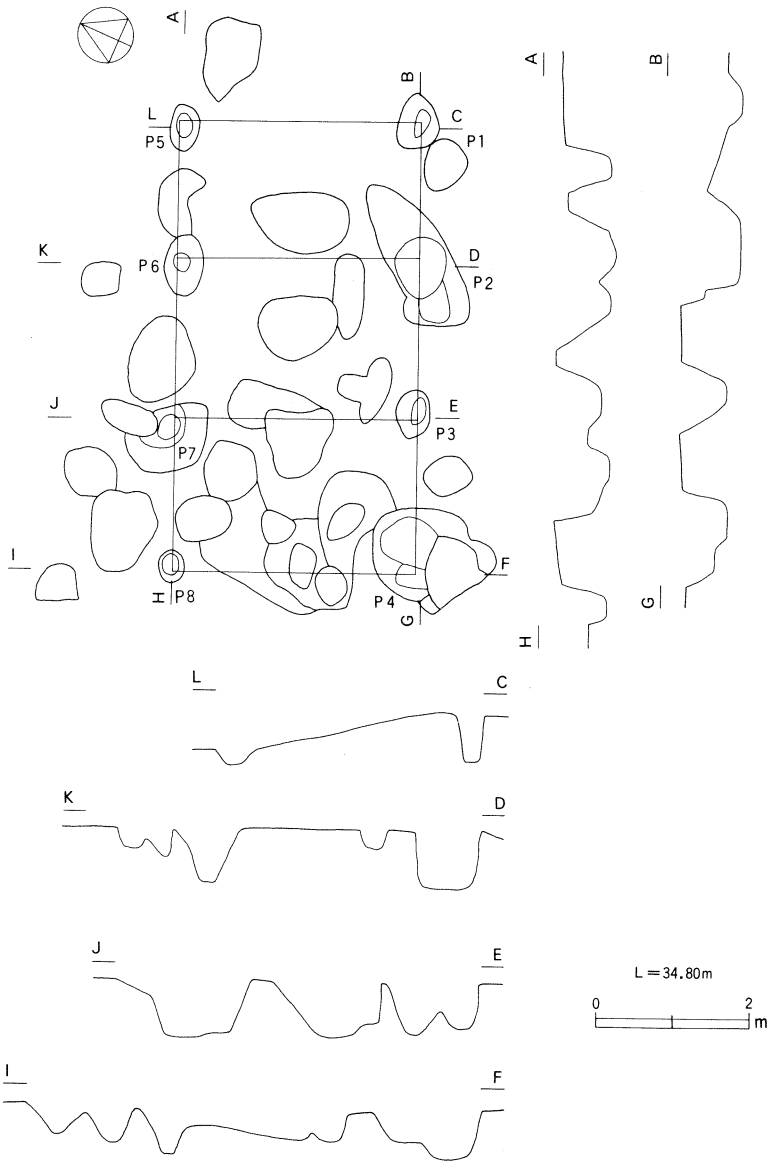
第10号掘立柱建物址　（第20図、第11表、図版11）

本建物址は、I郭の北東部に位置し桁行3間、梁行1間で長方形をなす建物址である。方位はN－65°－Eである。大きさは、桁行が5.96m（18尺）で梁行は3.18m（10.6尺）である。

各柱間は、東側（P1，2～P5，6）は1.80m（6尺）で、中央（P2，3～P6，7）が2.13mで7.1尺あり、南側（P3，4～P7，8）は2.04m（6.8尺）となり、6尺×7尺×7尺の柱間と判断される。梁行は、1間で3.18mを計測することから11尺意識したものと判断される。この



第19図　第９号掘立柱建物址実測図



第20図　第10号掘立柱建物址実測図

ように本建物址は、ほぼ同程度の柱間であり、平面プランから見ても比較的しっかりした建物址であったものと判断される。

柱穴では、Ｐ２，４，７の３柱穴が、他の柱穴より大きく掘り込まれており、Ｐ１，３，５，６，８は、小さな柱穴となっている。深さは、各柱穴により異なっている。各柱穴径は、第11表に示した。

出土遺物としては、Ｐ２，４，７の３柱穴より土師器片が少量出土した程度である。

第11表　第10号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.70	0.53	0.42	楕円形		Ｐ５	0.62	0.36	0.36	長方形	
2	1.48	0.90	0.68	楕円形		6	0.80	0.52	0.71	長方形	
3	0.64	0.44	0.60	楕円形		7	0.84	0.64	0.71	楕円形	
4	0.64	0.48	0.40	楕円形		8	0.44	0.30	0.64	楕円形	

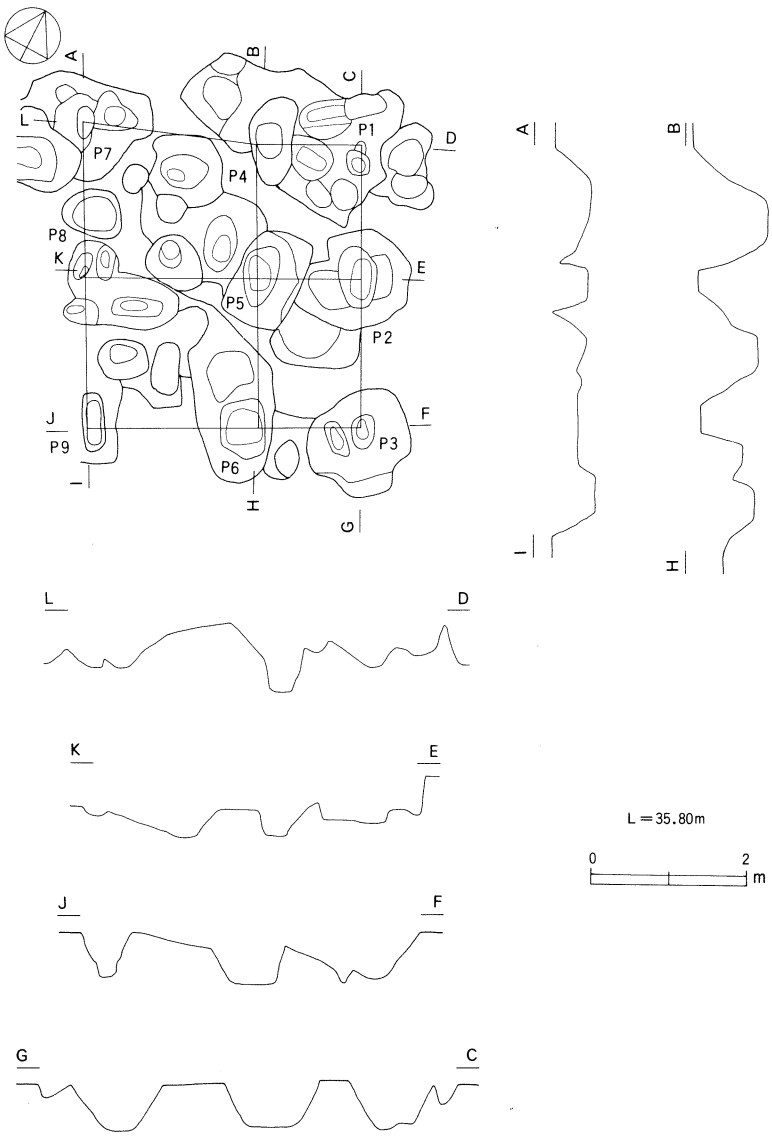
第11号掘立柱建物址（第21図、第12表、図版11）

本建物址は、Ｉ郭の北東部に位置し、第２、28、29号建物址と重複している。桁行と梁行が、各２間の正方形をなしているが、Ｐ７がやや北方に突出する柱穴配置をしている。方位としてはＮ－29°－Ｗである。大きさは、桁行が２間で東側3.72m（12.4尺）で西側4.02m（13.4尺）あり、梁行は２間で3.60m（12.0尺）を各々計測する。

桁行と梁行の柱間径は、桁行がＰ１，２とＰ４，５間は1.77m（5.9尺）あり、Ｐ４，７とＰ７，８間は、Ｐ７，８間がＰ４，７間より0.30m広い2.07m（6.7尺）ある。Ｐ２，３～Ｐ８，９間は1.98m（6.6尺）を計測する。このため、桁行の柱間径は６尺×6.5尺を基準としているようである。梁行は、Ｐ１，４～Ｐ３，６間が1.35m（4.5尺）あり、Ｐ４，７～Ｐ６，９間が2.25m（7.5尺）を計測する。Ｐ４とＰ７を直線で結ぶと、2.18mで7.6尺を計測する。このため、梁行の柱間径は4.5尺×7.5尺と判断される。よって、本建物址は６尺×6.5尺＋4.5尺×7.5尺の柱間径を有し、西側に広い部屋を持った建物址となる。

柱穴は、円形と楕円形の柱穴があり、大きさと深さは各柱穴により一様ではない。深さで見るならば、Ｐ４は0.90m、Ｐ６は0.70mを計測する。他の柱穴は、重複関係が著しいため計測による深さは浅い数値を示すが、本来の深さは0.70m～0.90m程度と推定される。個々の柱穴径に関しては、第12表に示した。

出土遺物としては、何ら出土していない。



第21図　第11号掘立柱建物址実測図

第12表　第11号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1			0.52	楕円形		P6	0.78	0.58	0.60	楕円形	
2	0.80	0.50	0.52	楕円形		7	0.44	0.22	0.43	楕円形	
3	0.46	0.30	0.31	楕円形		8	0.30	0.22	0.29	楕円形	
4	1.16	0.54	0.83	楕円形		9	0.80	0.30	0.57	楕円形	
5	0.78	0.44	0.75	楕円形							

第12号掘立柱建物址（第22図、第13表、図版10）

本建物址は、Ⅰ郭の中央北東部に位置し、桁行2間、梁行2間の正方形に、北側で1間付設された建物址である。方位は、N－41°－Wである。大きさは、桁行が2間で4.65m（15.5尺）あり梁行は2間で5.55m（18.5尺）を計測する。付設部は、北側が1.86m（6.2尺）で、南側は2.10m（7.0尺）を計測する。

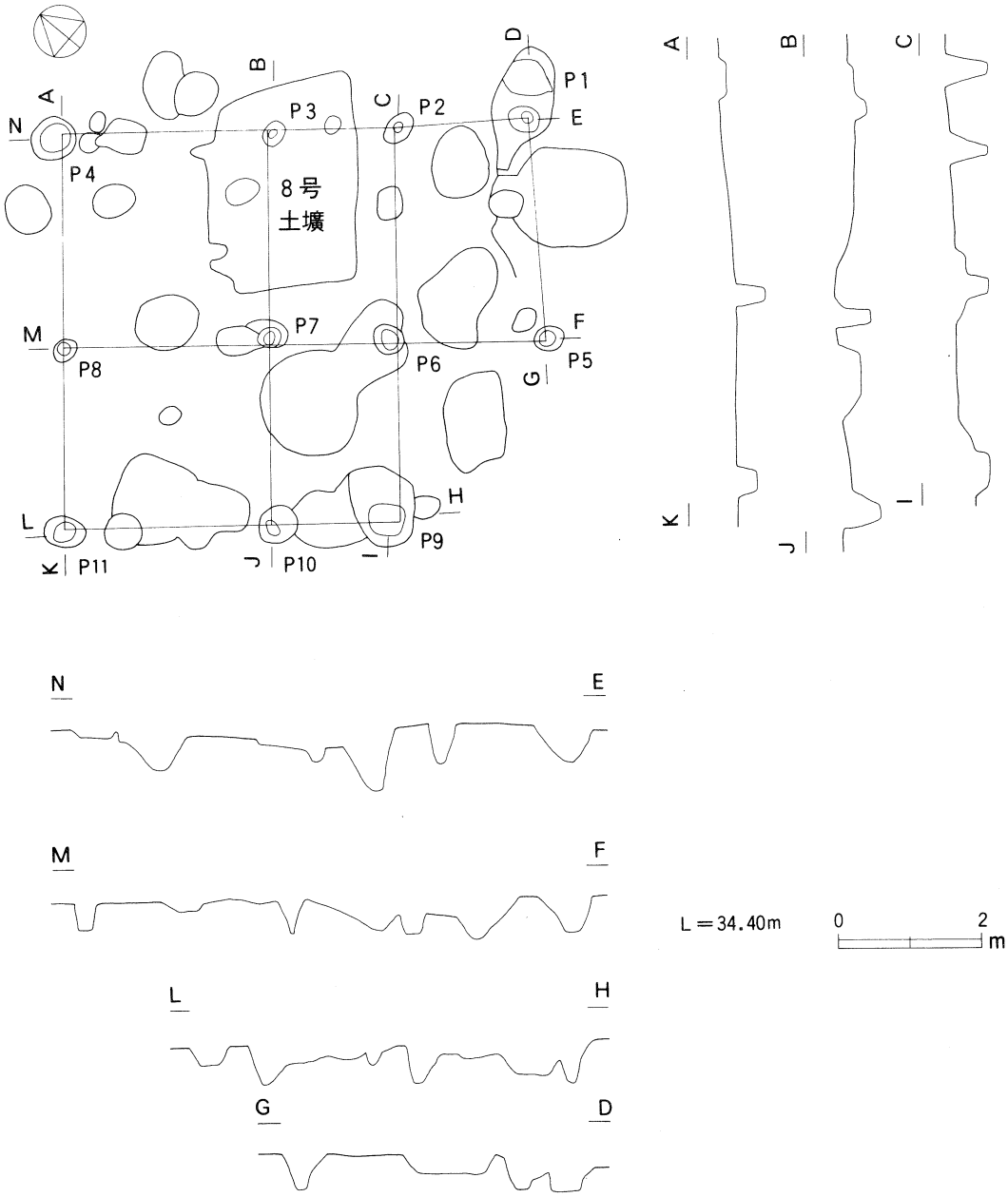
各柱間径は、桁行が2間でP2，3～P9，10間は1.80m（6.0尺）あり、P3，4～P10，11間は2.91m（9.9尺）を各々計測する。梁行は、2間でP2，6～P4，8間が3.03m（10.1尺）あり、P6，8～P9，11間が2.52m（8.4尺）を各々計測する。この計測値から、桁行は6尺×10尺となり、梁行は10尺×8.5尺を意識したようである。これに、東側の付設部が加わり桁行は3間と2間とに別れることとなり、西側（P3，7，10，とP4，8，11間）に広い部屋を置いた構成となる。

柱穴は、P9以外小型の柱穴で円形をなす柱穴がほとんどであり、深さは各柱穴によって異なるが、P5，10が0.50mと深くP4は0.11mと浅い柱穴である。しかし、第13表に示したようにP4，9が浅い以外比較的深く掘り込まれていることと、柱穴配置からしっかりした建物址であるものと推定される。P3は、土壙底面よりの深さである。

遺物としては、何ら出土しなかった。

第13表　第12号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	0.84	0.66	0.48	楕円形		P7	0.44	0.40	0.48	楕円形	
2	0.40	0.36	0.58	楕円形		8	0.32	0.30	0.41	楕円形	
3	0.34	0.28	0.46	楕円形		9	1.14	0.85	0.47	楕円形	
4	0.66	0.58	0.10	楕円形		10	0.58	0.50	0.55	楕円形	
5	0.40	0.32	0.52	楕円形		11	0.58	0.48	0.27	楕円形	
6	0.46	0.40	0.47	楕円形							



第22図　第12号掘立柱建物址実測図

第13号掘立柱建物址（第23図、第14表）

本建物址は、Ⅰ郭の北東部で第８号溝（堀４）と第13号溝（堀５）との間に位置し、第９、20号建物址と重複しており、桁行３間で梁行１間の建物址で長方形をなしている。方位は、Ｎ－42°－Ｗである。大きさは、桁行が３間で7.02m（23.4尺）あり、梁行は１間で3.66m（12.2尺）を計測する。

桁行３間の柱間径は、Ｐ１，２とＰ５，６間が3.06m（10.2尺）あり、Ｐ２，３とＰ６，７間が2.01m（6.7尺）あり、Ｐ３，４とＰ７，８間が1.92m（6.4尺）を、各々計測する。この計測値から、桁行は10尺×6.5尺×6.5尺を意識したようで、西側に広い部屋を置いている。これに梁行径の12尺が加わり、10尺×6.5尺×6.5尺＋12尺となる。

柱穴は、円形をなす柱穴がほとんどで、Ｐ２，５の２柱穴が楕円形をなすのみである。柱穴の深さは、他の建物址柱穴と重複している柱穴以外では、Ｐ２が0.45m、Ｐ４が0.58m、Ｐ８では0.44mを計測することから、0.50m前後の深さを有するものと判断される。個々の柱穴径は、第14表に示した。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。

第14表　第13号掘立柱建物址柱穴一覧表

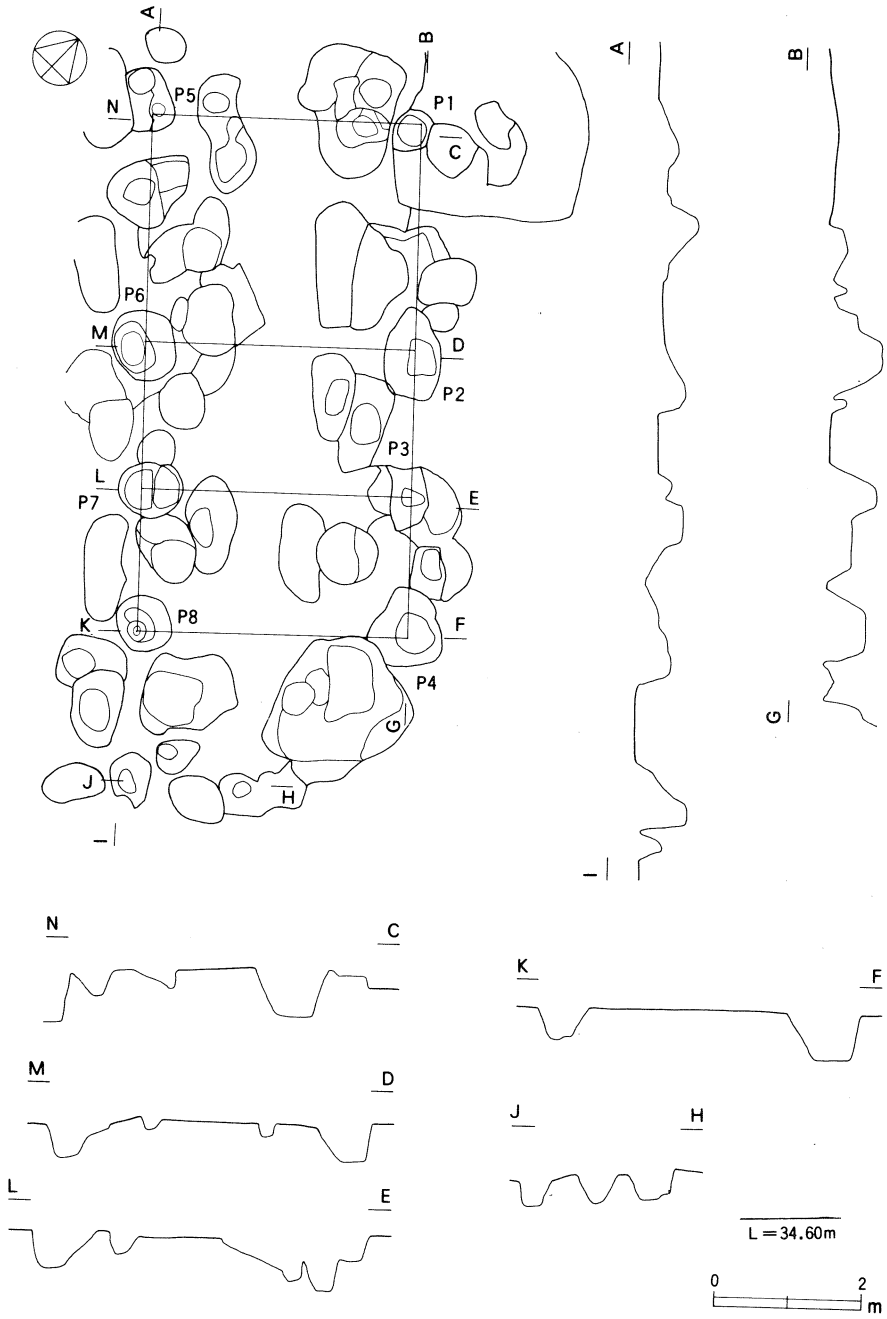
PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.54	0.50	0.14	楕円形		Ｐ５	0.85	0.34	0.28	楕円形	
2	1.24	0.78	0.58	楕円形		6	0.96	0.85	0.39	楕円形	
3	0.84	0.50	0.69	楕円形		7	0.74	0.50	0.47	楕円形	
4	1.08	1.00	0.57	楕円形		8	0.76	0.72	0.43	楕円形	

第14号掘立柱建物址（第24図、第15表）

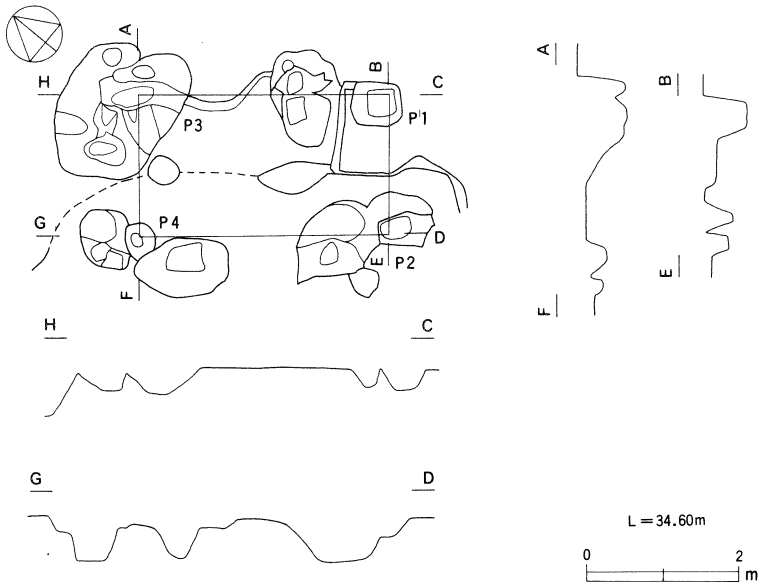
本建物址は、Ⅰ郭の南東部で旧堀である第８号溝と第13号溝との間に位置している。桁行が１間で、梁行も１間の建物址で長方形をなしており、Ｎ－40°－Ｗに方位を有している。

本建物址の大きさは、桁行が１間で3.30m（11.0尺）あり、梁行は１間で1.83m（6.1尺）を、各々計測することから、本建物址は11尺×６尺の建物址となる。

柱穴は、楕円形、円形、方形などの平面形であり、深さも各柱穴により一定ではないが、東側の柱穴は西側の柱穴に反し比較的しっかりと掘り込まれている。個々の柱穴径は、第15表に示した。



第23図　第13号掘立柱建物址実測図



第24図　第14号掘立柱建物址実測図

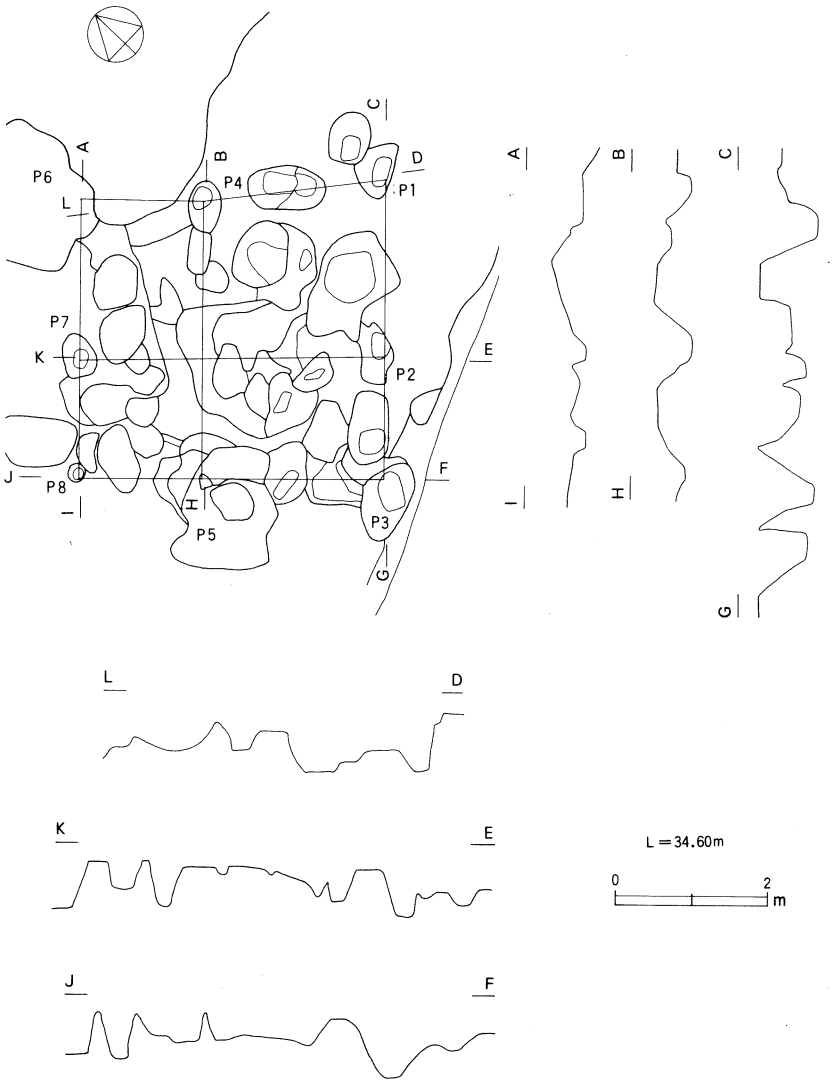
出土遺物としては、Ｐ３より自然石が１点検出されたが、根石等に用いた痕跡は認められないものであり、この石以外には何ら検出されなかった。

第15表　第14号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.66	0.58	0.37	楕円形		Ｐ３	1.10	0.36	0.45	楕円形	
2	0.68	0.42	0.27	楕円形		4	0.50	0.40	0.19	楕円形	

第15号掘立柱建物址（第25図、第16表）

本建物址は、Ｉ郭の南東部で第13号溝がＩ郭東側で止まる所の東側に位置し、第６、13～21号建物址と重複している。本建物址も、多数の柱穴状遺構と重複しているが、本建物址のプラン以外は確認されなかった。



第25図　第15号掘立柱建物址実測図

本建物址は、桁行が2間で梁行は2間の正方形をなす建物址で、N－42°－Wに方位を有し正方形をなす建物址である。大きさは、桁行が2間であるものの東側と西側では異なった数値を示している。これは、P1がP4，6より0.30m（1尺）だけ北側へ突出しているためである。これにより、桁行東側は3.96m（13.2尺）で西側が3.66m（12.2尺）を計測する。柱穴の位置等から、桁行は12尺を基準としたようである。梁行は、4.02m（13.4尺）を計測する。このため、本建物址は12尺×13尺を意識したようである。

桁行と梁行の柱間径は、桁行北側が2.10m（7.0尺）であるが、東側は2.40m（8.0尺）を計測する。桁行南側は、1.62mで5.4尺を計測する。梁行は、西側が1.62m（5.4尺）あり東側は、2.40m（8.0尺）を計測する。このため、本建物址の柱間径は、桁行が7尺（8尺）×5尺を意識したようであり、梁行は5尺×8尺を意識したようである。この計測値から、北側と東側が広い構造の建物址と判断される。

柱穴は、楕円形又は不整楕円形をなす柱穴が中心のようであり、深さと大きさは各柱穴により異なっている。個々の柱穴径は、第16表に示した。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。

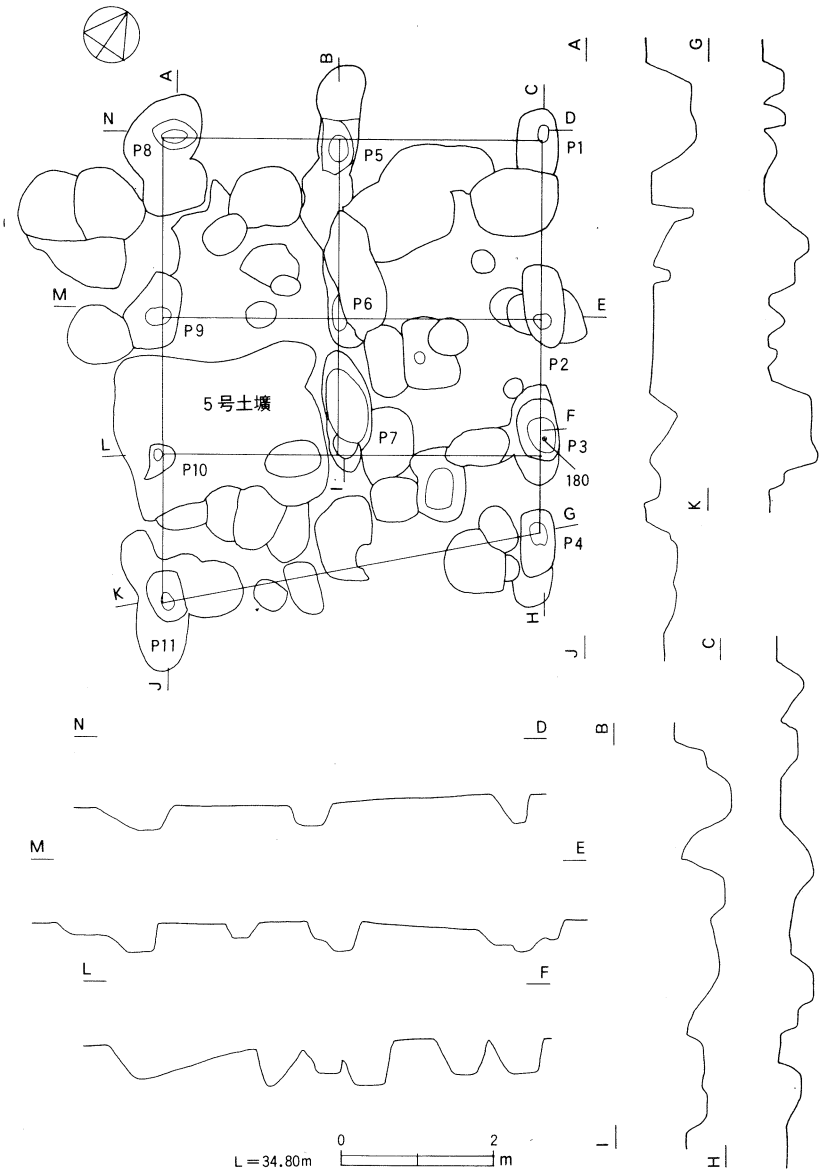
第16表　第15号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	0.64	0.50	0.77	楕円形		P5	0.94	0.50	0.33	楕円形	
2	0.68	0.40	0.58	楕円形		6			0.36		
3	1.00	0.60	0.48	楕円形		7	0.56	0.46	0.46	楕円形	
4	0.70	0.42	0.43	楕円形		8	0.26	0.22	0.41	円形	

第16号掘立柱建物址（第26図、第17表）

本建物址は、I郭の中央西側で旧堀の第8号溝北西コーナーの南東部に位置し、第34、36、46、50、54号建物址及び、第5号土壙などと重複している。本建物址は、南側に廂（P3，4～10，11間）を有している。この廂を除く身舎は、桁行2間、梁行2間で正方形をなす建物址である。方位はN－35°－Wである。

本建物址の大きさは、桁行が2間で4.14m（13.8尺）あり、梁行は2間で4.95m（16.5尺）を各々計測する。これに廂を加えると、桁行は東側（P1～4）で5.13m（17.1尺）あり、西側（P8～11）では6.12m（20.4尺）となる。



第26図　第16号掘立柱建物址実測図

これを各柱間径で見ると、桁行は北側（Ｐ１，２～Ｐ８，９間）が2.34m（7.8尺）であり、南側（Ｐ２，３～Ｐ９，10間）は1.80m（6.0尺）を計測する。梁行は、東側（Ｐ１～３とＰ５～７間）が2.64m（8.8尺）で、西側（Ｐ５～７とＰ８～10間）が2.31m（7.7尺）を計測する。廂は、東側が1.02m（3.4尺）で、西側は1.95m（6.5尺）を計測する。この計測値から、本建物址は桁行が８尺×６尺、梁行が９尺×８尺を意識したようである。廂は、３尺×6.5尺としたようである。よって、本建物址は北側が広い構造の建物址で、総柱式となる。

柱穴は、楕円形をなす柱穴のみであるが、Ｐ８は東西方向（梁行）に長軸を置いているが、他は南北方向（桁行）に長軸を置いている。大きさは、重複により本来の大きさ等を消失している柱穴が多いものの、中程度の大きさである。深さは、個々の柱穴により異なっている。個々の柱穴径は、第17表に示した。

出土遺物としては、出土しなかった。

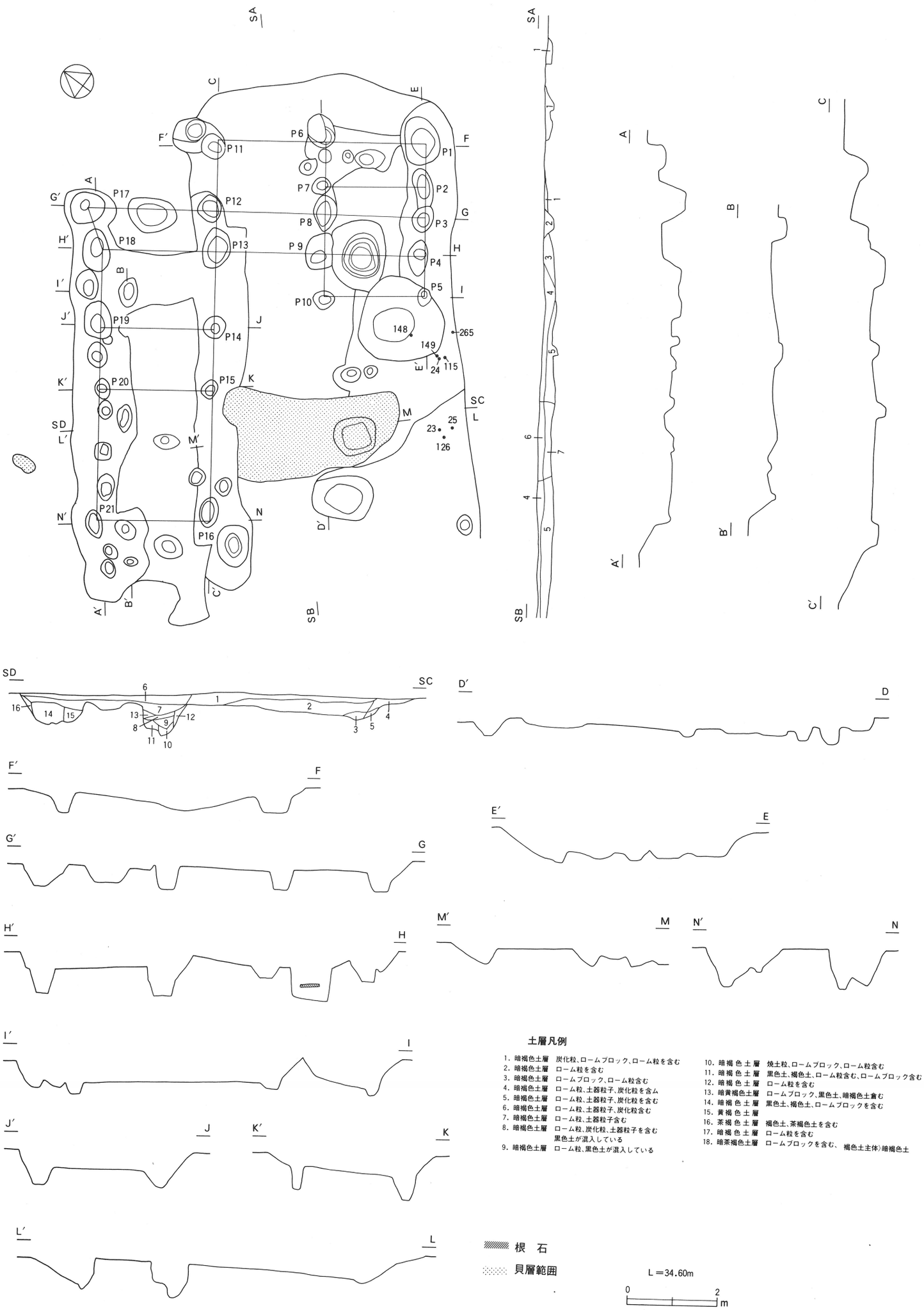
第17表　第16号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ1	0.84	0.54	0.41	楕円形		Ｐ7	0.40	0.40	0.27	楕円形	
2	1.06	0.54	0.28	楕円形		8	0.60	0.40	0.43	楕円形	
3	0.80	0.54	0.43	楕円形		9	1.00	0.70	0.30	楕円形	
4	0.88	0.45	0.27	楕円形		10	0.40	0.35	0.43	楕円形	
5	0.70	0.40	0.44	楕円形		11	0.68	0.50	0.43	楕円形	
6	0.62	0.26	0.32	楕円形							

第17号掘立柱建物址（第27図、第18表、図版９）

本建物址は、Ｉ郭の北西部で堀４の北側に位置し、３棟より構成され１棟をなす建物址である。３棟は、東側が桁行４間、梁行１間で、中央部は桁行２間、梁行１間で、西側が桁行４間、梁行１間の規模を有し、各々長方形をなす建物址である。方位は、Ｎ－53°－Ｅである。３棟は、中央の建物址で結ばれている。

３棟の大きさは、東側が桁行４間で3.42m（11.4尺）あり、梁行は１間で2.25m（7.5尺）あり中央棟は桁行が２間で2.49m（8.3尺）あり、梁行は１間で2.43m（8.1尺）あり、西側は桁行が４間で6.96m（23.2尺）あり、梁行は１間で2.52m（8.4尺）を、各々計測することから３棟は、各々11尺×7.5尺、８尺×８尺、23尺×8.5尺程度の建物址であったと判断される。



第27図　第17号掘立柱建物址実測図

各棟の柱間径は、東側がＰ１，２とＰ６，７間は0.96m（3.2尺）あり、Ｐ２，３とＰ７，８間が0.66m（2.2尺）あり、Ｐ３，４とＰ８，９間が0.84m（2.8尺）あり、Ｐ４，５とＰ９，10間が0.90m（3.0尺）を、梁行は１間で2.25m（7.5尺）を、各々計測する。中央は、桁行２間でＰ６，８間とＰ11,12間が1.62m（5.4尺）あり、Ｐ８，９とＰ12,13間は0.90m（3.0尺）あり、梁行は１間で2.43m（8.1尺）を、各々計測する。西側は、桁行が４間でＰ12,13 とＰ17,18間が0.90m（3.0尺）あり、Ｐ13,14とＰ18,19間が1.74m（5.8尺）あり、Ｐ14,15 とＰ19,20間が1.35m（4.5尺）あり、Ｐ15,16 とＰ20,21間が2.91m（9,7尺）あり、梁行は１間で2.52m（8.4尺）を、各々計測する。とすると、これら３棟の建物址は、３尺×２尺(２間で５尺）×３尺×３尺＋7.5尺の東棟と、５尺×３尺＋８尺の中央棟と、３尺×６尺×4.5尺×9.5尺＋8.5尺の西棟で、各々の柱間径を意識したものと判断される。全体の構成としては、Ｐ３，４からＰ17,18間の１間が、３棟共通した柱間で中央棟と西棟では、各々廂的用途を有しているものと判断される。また東棟のＰ２，７は、Ｐ１～３とＰ６～８間に入り１部屋のようである。

柱穴は、円形や楕円形をなす柱穴が中心で、溝状の部分内に位置するため柱穴の底部を確認したのみの柱穴が、その大部分である。この部分には、ロームブロック主体の黄褐色土が堆積していた。個々の柱穴径に関しては第18表に示した。

出土遺物は、主として東棟南側の貝層部分に集中している。遺物は、内耳片、火舎片、擂鉢片(No115,126)、皿（No23～25)、カワラケ（No148 ）などが出土している。また、東棟南側には、根石を有する大きな柱穴（径1.55m×1.20m）が掘り込まれているものの、本址に関係するかは断定出来ない。南側貝層は、本址に結び付く可能性を有している。

第18表　第17号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	1.15	0.86	0.49	楕円形		Ｐ12	0.60	0.60	0.55	楕円形	
2	0.82	0.42	0.64	楕円形		13	0.90	0.60	0.94	楕円形	
3	0.60	0.50	0.58	楕円形		14	0.50	0.50	0.81	楕円形	
4	0.80	0.46	0.59	楕円形		15	0.42	0.38	1.00	楕円形	
5	0.40	0.30	0.75	楕円形		16	0.66	0.44	0.86	楕円形	
6	0.72	0.60	0.30	楕円形		17	0.80	0.68	0.45	楕円形	
7	0.40	0.42	0.50	楕円形		18	0.90	0.60	0.88	楕円形	
8	0.78	0.53	0.42	楕円形		19	0.84	0.62	0.77	楕円形	
9	0.80	0.62	0.41	楕円形		20	0.46	0.36	0.77	楕円形	
10	0.50	0.48	0.54	楕円形		21	0.62	0.40	0.77	楕円形	
11	0.55	0.55	0.51	楕円形							

第18号掘立柱建物址（第28図、第19表、図版９）

本建物址は、Ｉ郭の北東で第８号溝（堀４）と接し、２本の柱穴は堀内に掘り込まれている。この第８号溝（堀４）は、旧堀であるため埋められた後に本址が建てられている。また、本址の内部には、第39号建物址が位置している。本建物址は、桁行４間、梁行２間でＮ－50°－Ｅに方位を有し、長方形をなす建物址である。大きさは、桁行が４間で7.50m（25.0尺）あり、梁行は２間で4.77m（15.9尺）を、各々計測する。

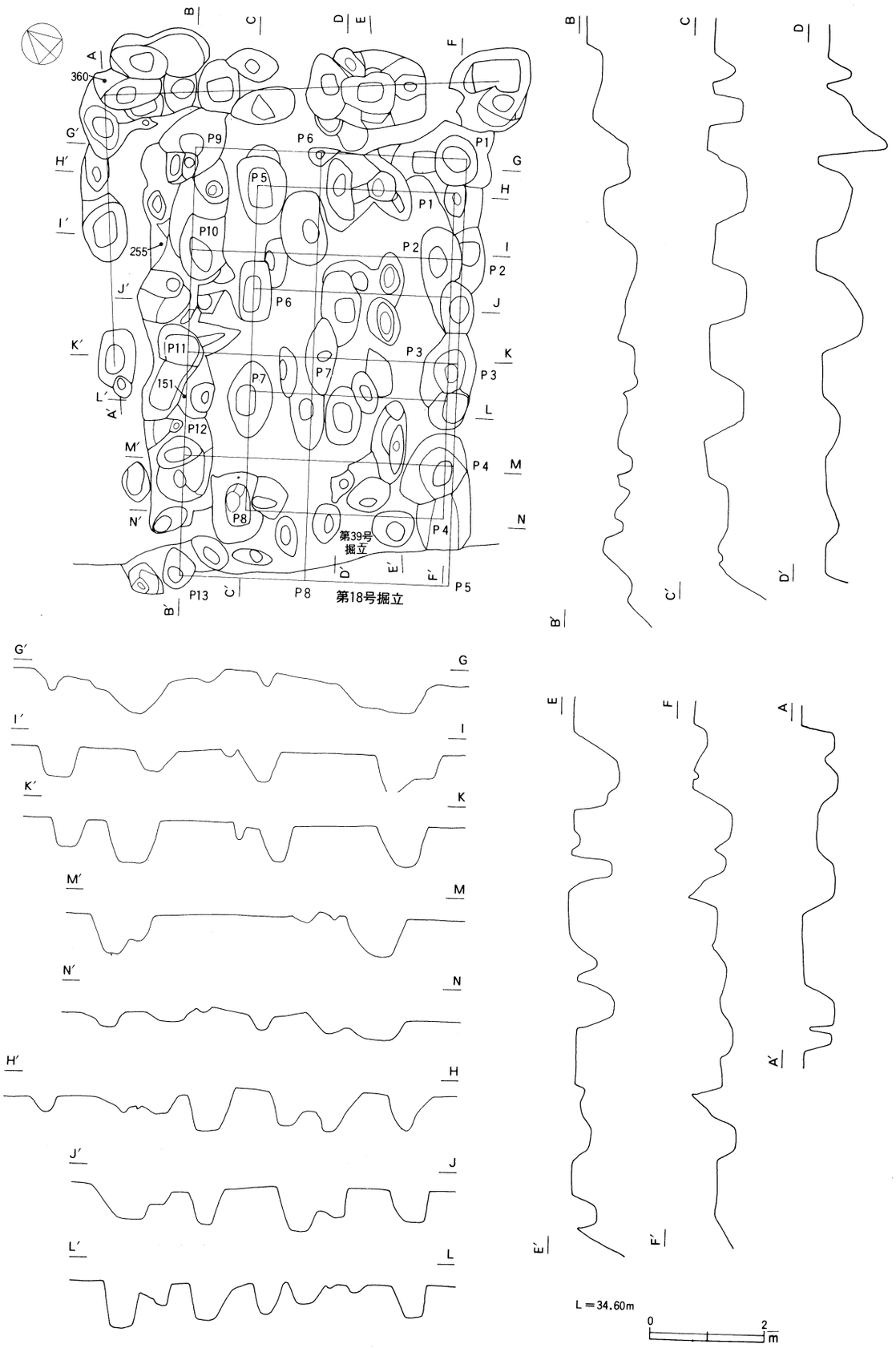
桁行と梁行の各柱間径は、桁行がＰ１，２とＰ９，10間は1.74m（5.8尺）あり、Ｐ２，３とＰ10，11間は1.83m（6.1尺）あり、Ｐ３，４とＰ11，12間は1.80m（6.0尺）あり、Ｐ４，５とＰ12，13間は2.10m（7.0尺）を、各々計測する。梁行は、Ｐ１～Ｐ５とＰ６～８間が2.55m（8.5尺）あり、Ｐ６～８とＰ９～13間が2.22m（7.4尺）を、各々計測する。この計測値から、桁行と梁行の柱間径は６尺×６尺×６尺×７尺＋8.5尺×7.5尺を意識したものと判断される。又、Ｐ７は建物址の中央に位置し、本建物址を区画するように配置されている。Ｐ７の位置は、ほぼ12尺×13尺の位置に配置されている。

柱穴は、重複関係などによりその多くが消失しているが、ほぼ円形と楕円形をなす柱穴がほとんどで、桁行方向に沿って掘り込まれている。深さは、個々の柱穴により異なっているが、ほぼ0.70m程度の深さを有している。柱穴の深さと、柱穴配置から本建物址は比較的しっかりした建物址と判断される。なお、個々の柱穴径は第19表に示した。

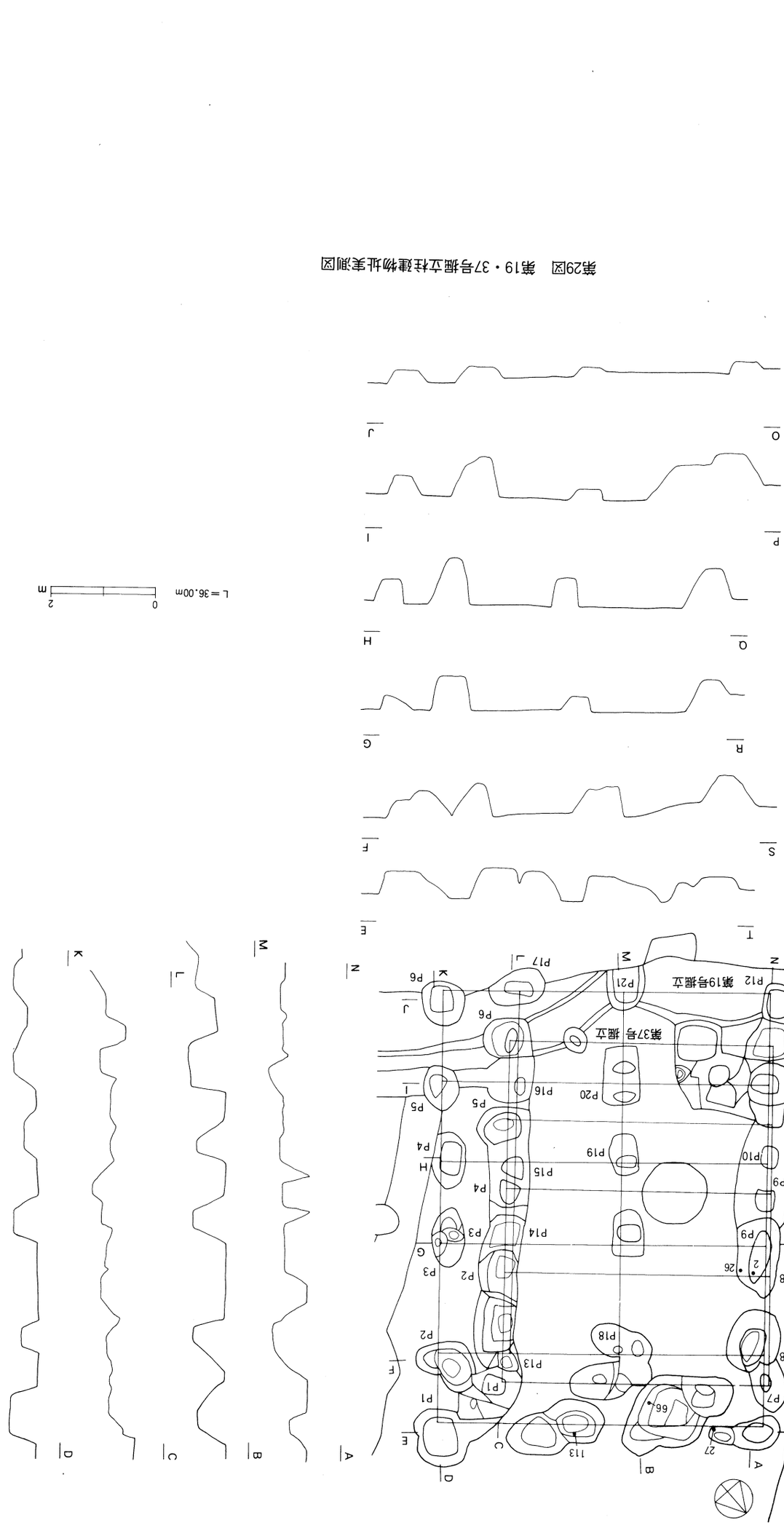
出土遺物としては、天目茶碗、古銭、カワラケ、火捨、管玉、砥石などが出土している。

第19表　第18号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.90	0.76	0.59	楕円形		Ｐ８					４号堀に切られる
2	1.00	0.44	0.57	楕円形		9	1.20	1.20	0.65	楕円形	
3	0.80	0.54	0.70	楕円形		10	1.10	0.78	0.60	楕円形	
4	1.18	1.10	0.69	楕円形		11	0.78	0.70	0.51	楕円形	
5					４号堀に切られる	12	0.74	0.60	0.48	楕円形	
6	0.44	0.32	0.25	楕円形		13	0.72	0.52	0.50	楕円形	
7	1.36	0.56	0.62	楕円形							



第28図　第18・39号掘立柱建物址実測図



第29図　第19・37号掘立柱建物址実測図

第19号掘立柱建物址（第29図、第20表）

本建物址は、Ｉ郭の北西部で第37号掘立柱建物址と重複している。また、本建物址の西側には旧堀である第４号堀と、北側には旧堀の第６号堀が位置している。本建物址は、第４号堀とも一部重複している。時期的には、第４号堀より本建物址が新しい建物址と判断される。本建物址は、桁行は５間で梁行が３間の建物址で長方形をなしておりＮ－34°－Ｅに方位を有している。桁行の５間は、8.28mで27.6尺を計測し、梁行３間は6.30mで21.0尺を各々計測する。桁行の柱間は、Ｐ１，２とＰ７，８間が1.32m（4.4尺）あり、Ｐ２，３とＰ８，９間が2.10m（7.0尺）あり、Ｐ３，４とＰ９，10間が1.56m（5.2尺）あり、Ｐ４，５とＰ10,11間が1.56m（5.2尺）あり、Ｐ５，６とＰ11,12間が1.74m（5.8尺）を、各々計測する。梁行の柱間は、北側（Ｐ８～Ｐ12とＰ18～Ｐ21まで）が2.79m（9.3尺）あり、中央（Ｐ18～21とＰ13～17まで）が2.10m（7.0尺）あり、南側（Ｐ13～17とＰ２～６まで）が1.38m（4.6尺）を、各々計測する。この計測値から桁行と梁行は4.5尺×７尺×５尺×５尺×６尺（桁行）×９尺×７尺×4.5尺（梁行）を意識した柱間と判断され北側と南側が同程度の広さであるため廂と判断され、東側と西側に広い部屋を配置した構成である。

柱穴は、楕円形をなす柱穴がほとんどであり、桁行と梁行の方向に沿う掘り方である。また、重複関係により、その底面以外確認出来なかった柱穴（Ｐ４，９）も所在している。柱穴内の土層は、ローム＝ブロックを主体として黄褐色土と黒褐色土であり、柱痕は柱穴底付近で確認された程度である。個々の柱穴径は、第20表に示した。

出土遺物としては、柱穴内より天目茶碗、小皿、擂鉢などが出土している。

第20表　第19号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ1	1.36	1.06	0.49	楕円形		Ｐ12	0.74	0.70	0.40	楕円形	
2	0.70	0.64	0.34	楕円形		13	0.42	0.36	0.44	楕円形	
3	0.50	0.28	0.37	楕円形		14	0.70	0.68	0.52	楕円形	第37号掘立と共有
4	1.10	0.60	0.34	楕円形		15		0.80	0.74	楕円形	
5	0.86	0.68	0.34	楕円形		16	0.90	0.92	0.84	楕円形	
6	0.86	0.82	0.22	楕円形		17	1.10	0.68	0.32	楕円形	
7	0.88	0.54	0.42	楕円形		18	0.70	0.60	0.52	楕円形	
8	0.64	0.50	0.55	楕円形		19	0.80	0.54	0.56	楕円形	
9	1.42	0.80	0.54	楕円形		20	0.70	0.36	0.42	楕円形	
10		0.94	0.67	楕円形		21	0.80	0.74	0.26	楕円形	
11	0.84	0.80	0.84	楕円形							

第20号掘立柱建物址（第30図、第21表、図版11）

本建物址は、Ⅰ郭の北東部で第８号溝（堀４）の北東虎口北側に位置し、桁行４間梁行１間で長方形をなしており、Ｎ－64°－Ｅに方位を有し長方形をなす建物址である。大きさは、桁行が４間で7.26m（24.2尺）あり、梁行は１間で3.90m（13.0尺）を、各々計測する。

各柱間径は、Ｐ１，２とＰ６，７間が1.80m（6.0尺）あり、Ｐ２，３とＰ７，８間では1.80m（6.0尺）あり、Ｐ３，４とＰ８，９間が1.65m（5.5尺）あり、Ｐ４，５とＰ９，10間では2.01m（6.7尺）を、各々計測する。この計測値から、桁行の柱間は６尺×６尺×5.5尺×6.7尺となり、６尺、５尺、6.5尺の柱間を意識したものと判断される。これに、梁行の13尺が加わることとなる。

柱穴は、桁行方向に沿って掘り込まれており楕円形、円形をなしているが、重複関係が著しいため、しっかりした柱穴は存在していない。深さは、0.50～0.70mと深く掘り込まれている。このことと、建物址の平面プランとから本建物址は、比較的しっかりした建物址と判断される。なお、個々の柱穴径は第21表に示した。

出土遺物としては、カワラケ、砥石、擂鉢などが出土している。

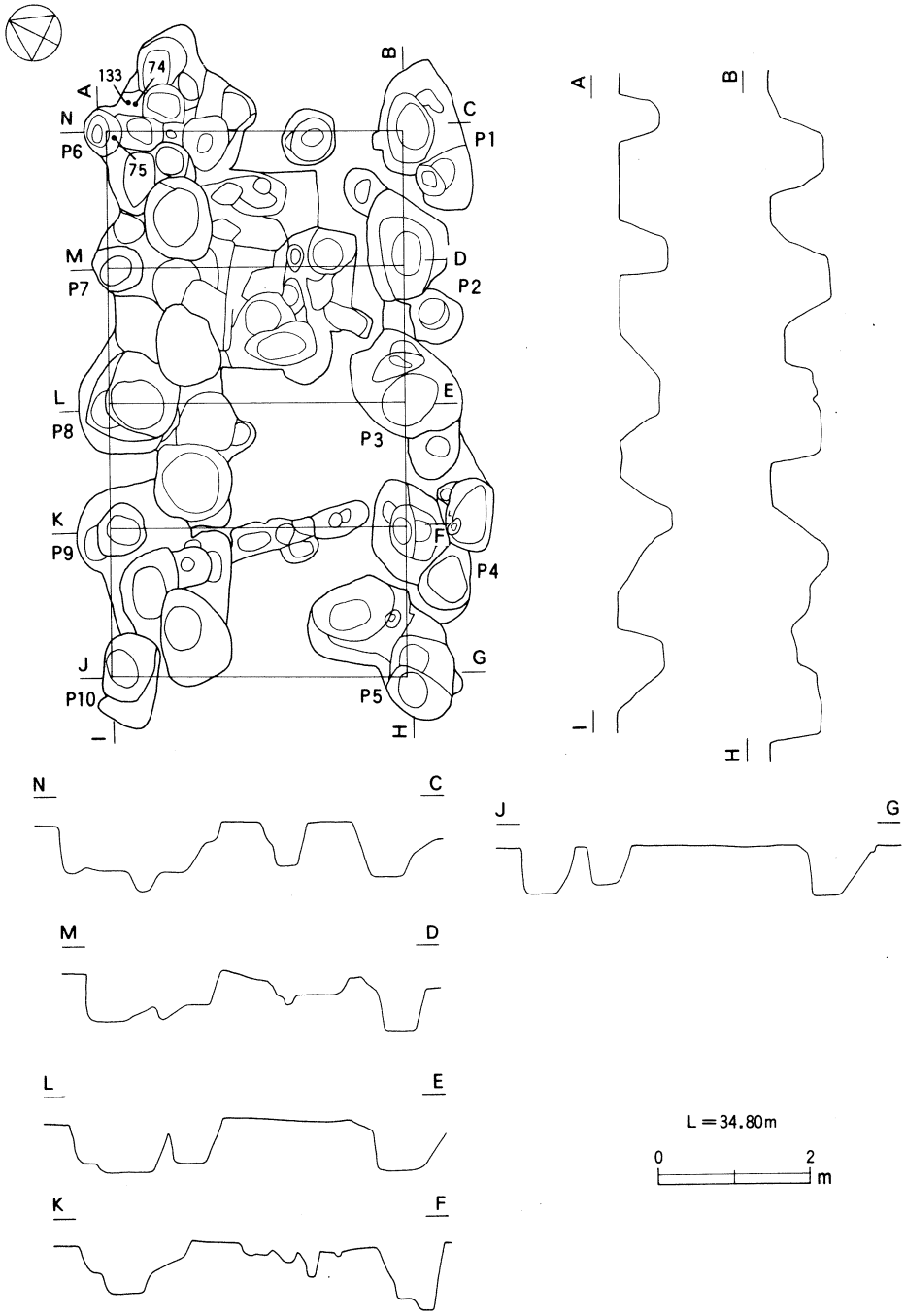
第21表　第20号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.90	0.60	0.72	楕円形		Ｐ６	0.42	0.28	0.57	楕円形	
2	1.08	0.66	0.76	楕円形		7	0.62	0.60	0.65	楕円形	
3	0.72	0.70	0.67	楕円形		8	1.60	0.38	0.59	楕円形	
4	0.70	0.34	0.75	楕円形		9	0.66	0.64	0.69	楕円形	
5	0.74	0.60	0.68	楕円形		10	0.94	0.64	0.61	楕円形	

第21号掘立柱建物址（第31図、第22表）

本建物址は、Ⅰ郭の南東部で旧堀の４堀と第５号堀との間に位置し、第６、13、14号掘立柱建物址と重複している。本建物址は、桁行４間で梁行１間の長方形をなす建物址であり、その方位はＮ－44°－Ｗである。

本建物址の大きさは、桁行が４間で7.92m（26.4尺）あり、梁行は１間で3.42m（11.4尺）を各々計測する。桁行４間の柱間径は、Ｐ１，２とＰ６，７間が2.25m（7.5尺）あり、Ｐ２，３とＰ７，８間が1.80m（6.0尺）あり、Ｐ３，４とＰ８，９間が2.10m（7.0尺）あり、Ｐ４，５とＰ９，10



第30図　第20号掘立柱建物址実測図

間が1.80m（6.0尺）を、各々計測する。この計測値から、本建物址の桁行は7.5尺×６尺×７尺×６尺の柱間となり、梁行は11.4尺でほぼ11.5尺を意識したようであり、比較的しっかりした建物址と判断される。

柱穴は、他の建物址との重複関係が著しいが、楕円形をなす柱穴がほとんどで、円形状をなす柱穴はＰ８,10の２柱穴のみである。大きさと深さは、各柱穴により一定ではなく、Ｐ１，２，７の３柱穴は大きく且深く掘り込まれている。Ｐ４，６，９は、小さな柱穴である。このように、各柱穴の平面形は一定しておらず、深さもＰ４と６は0.30m代で他は0.40～0.70m代の深さを有している。個々の柱穴径は、第22表に示した。

出土遺物としては、柱穴内より天目茶碗、カワラケ、外耳土器、古銭など出土している。遺物に関しては、後述する。

第22表　第21号掘立柱建物址柱穴一覧表

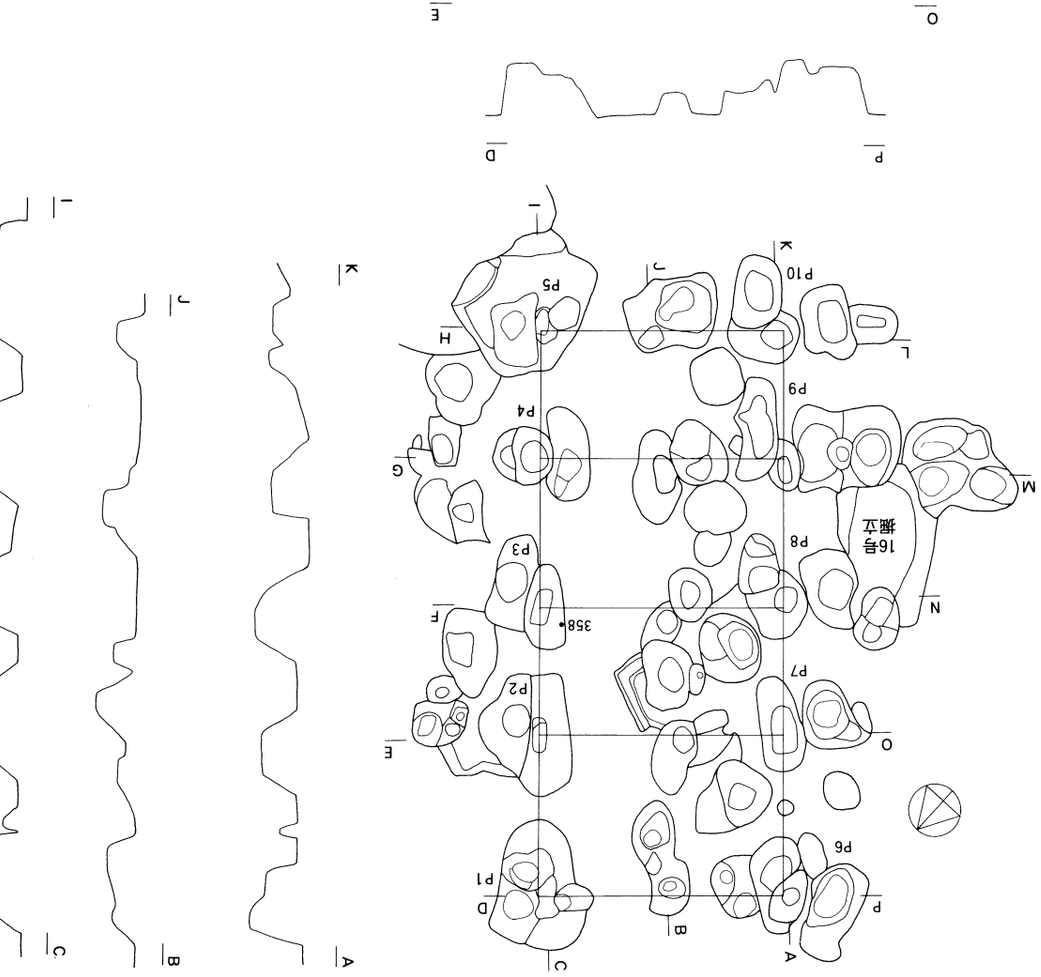
PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	1.80	1.32	0.57	楕円形		P6	0.60	0.46	0.76	楕円形	
2	1.70	0.54	0.78	長方形		7	1.30	0.58	0.54	隅丸長方形	
3	1.18	0.54	0.70	長方形		8	0.98	0.85	0.76	楕円形	
4	0.84	0.56	0.88	長方形		9	0.70	0.40	0.51	楕円形	
5	0.50	0.32	0.67	楕円形		10	0.94	0.60	0.56	楕円形	

第22号掘立柱建物址（第32図、第23表、図版10）

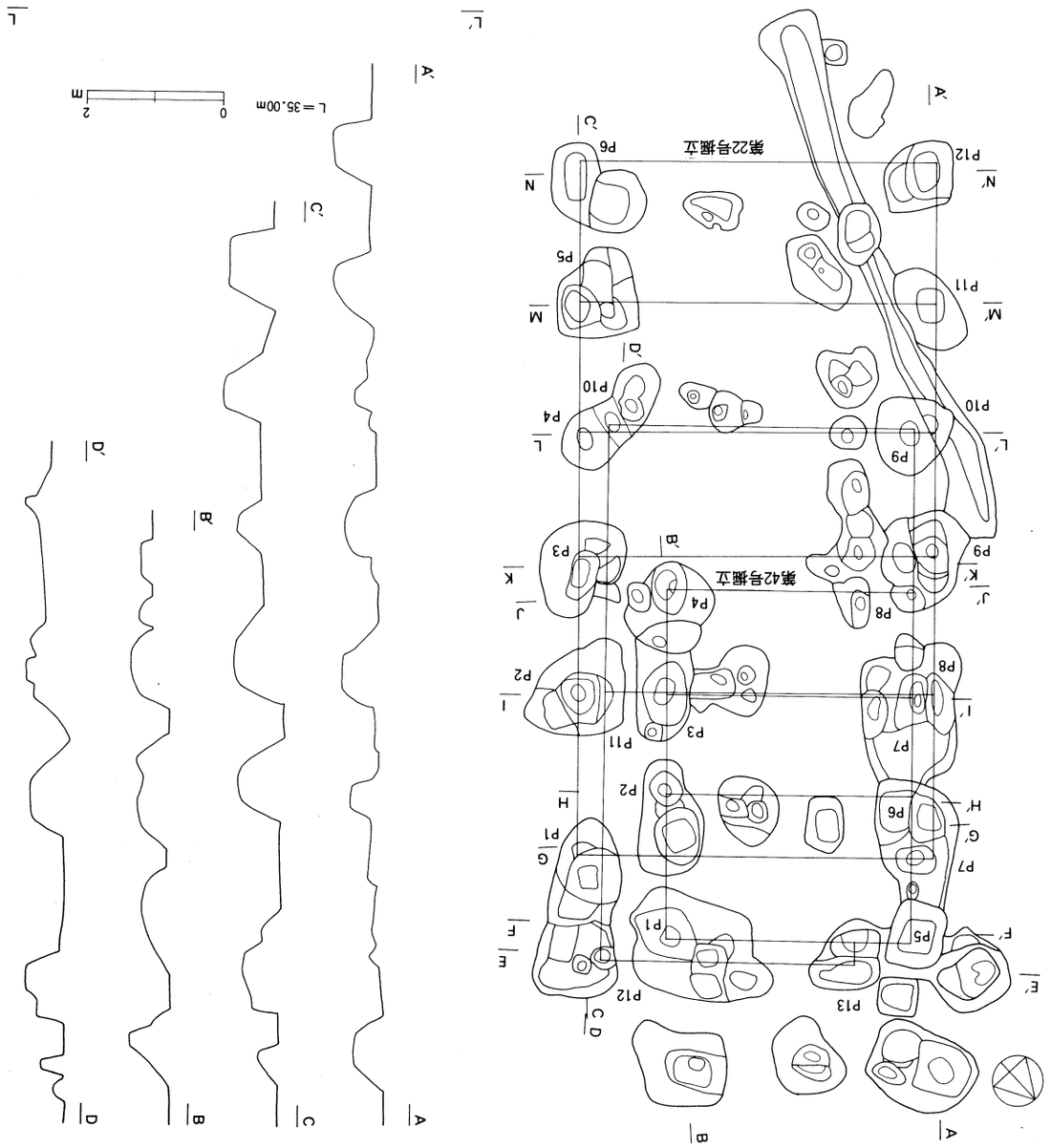
本建物址は、Ｉ郭の中央北側で第42号掘立柱建物址と重複しており、桁行は５間で梁行が１間で長方形をなす建物址である。方位は、Ｎ－45°－Ｅである。

本建物址の大きさは、桁行が５間で10.20m（34.0尺）あり、梁行は１間で7.23m（24.1尺）を計測し、大型の建物址である。桁行の柱間は、Ｐ１，２とＰ７，８間は2.40mで8.0尺あり、Ｐ２，３とＰ８，９間は2.01mで6.7尺あり、Ｐ３，４とＰ９,10間は1.80mで6.0尺あり、Ｐ４，５とＰ10,11間は1.89mで6.3尺あり、Ｐ５，６とＰ11,12間は2.07mで6.9尺を、各々計測する。この計測値より、桁行の柱間は８尺×７尺×６尺×６尺×７尺を意識した柱間と判断され、他の建物址より大きな建物址となる。梁行は、前述のように24尺と広い構成である。桁行の柱間から、本建物址は大きくしっかりした建物址と判断される。

柱穴は、Ｐ１からＰ４までの桁行北側と南側は、第22号掘立柱建物址と重複しているため、平



第31図　第21号掘立柱建物址実測図



第32図　第22・42号掘立柱建物址実測図

面径の計測値に差異を有しているが、楕円形を呈する柱穴がほとんどであり、円形を呈する柱穴としてはＰ５,12の２柱穴が所在する程度ある。個々の柱穴径は、第26表に示した。

出土遺物は、何ら出土しなかった。

第23表　第22号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ1	0.74	0.50	0.37	楕円形		Ｐ7	0.56	0.40	0.47	楕円形	
2	0.54	0.48	0.50	楕円形		8	0.80	0.40	0.53	楕円形	
3	0.70	0.42	0.70	楕円形		9	0.60	0.50	0.38	楕円形	
4	0.90	0.72	0.52	楕円形		10	0.50	0.50	0.30	楕円形	
5	0.60	0.56	0.64	楕円形		11	1.10	1.00	0.55	楕円形	
6	1.20	0.70	0.68	楕円形		12	0.86	0.72	0.30	隅丸長方形	

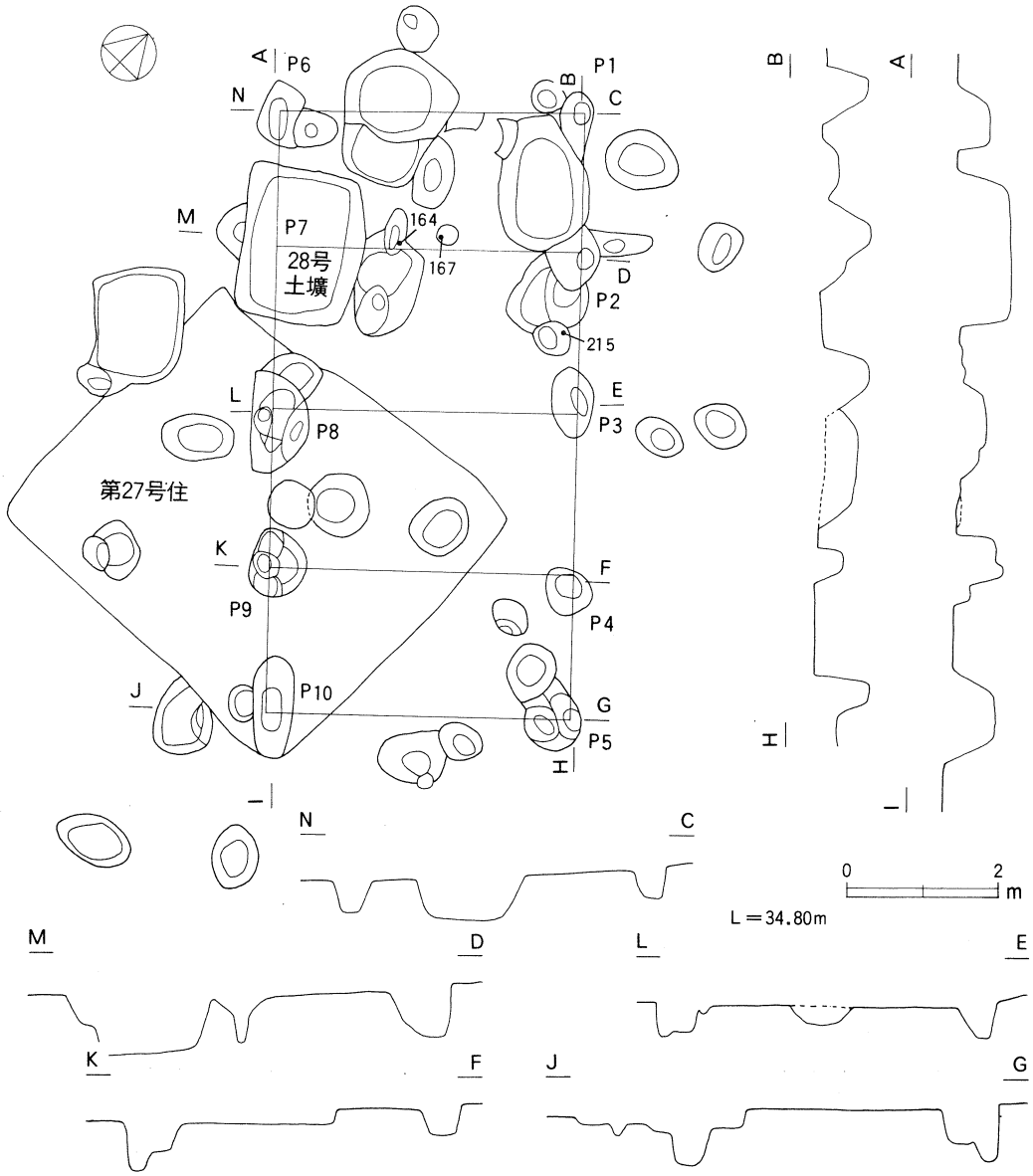
第23号掘立柱建物址（第33図、第24表）

本建物址は、Ｉ郭の中央北東部で旧堀の第４号堀北東虎口南西側に位置し、第28号住居址と第28号土壙を、本建物址の柱穴が掘り切っている。本建物址は、桁行４間で梁行１間の建物址で、方位をＮ－44°－Ｗに有し長方形をなしている。

本建物址の大きさは、桁行が４間で8.04m（26.8尺）あり、梁行は１間で4.02m（13.4尺）を各々計測する。桁行の柱間径は、Ｐ１，２とＰ６，７間は1.83m（6.1尺）あり、Ｐ２，３とＰ７，８間は2.13m（7.1尺）あり、Ｐ３，４とＰ８，９間は2.13m（7.1尺）あり、Ｐ４，５とＰ９，10間は1.92m（6.4尺）を、各々計測する。この計測値から桁行の柱間は、６尺×７尺×７尺×6.5尺を意識したようで、中央が広くなっている。梁行は、13.5尺を意識したようである。

柱穴は、比較的小さな柱穴が中心で、大きな柱穴としてはＰ２，10の２柱穴が所在するのみである。平面は、楕円形（Ｐ１，３，10）、長方形（Ｐ６）、円形（Ｐ４，５，９）などと一定ではなく、深さも各柱穴により異なっている。深さでは、Ｐ１，３，４，６，８の５柱穴が0.40m代であり、Ｐ10は0.50m代でＰ５，９は0.60～0.70m代の深さを有している。個々の柱穴径は、第24表に示した。

出土遺物としては、カワラケ、砥石、土師器片などが出土している。



第33図　第23号掘立柱建物址実測図

第24表　第23号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	1.00	0.42	0.47	楕円形		6	0.90	0.50	0.43	楕円形	
2	0.90	0.70	0.67	楕円形		7					第28号土壙に切られる
3	0.92	0.50	0.41	楕円形		8	1.34	0.78	0.35	隅丸形	
4	0.64	0.60	0.37	円形		9	0.92	0.76	0.64	楕円形	
5	1.00	0.76	0.69	楕円形		10	1.40	0.54	0.67	楕円形	

第24号掘立柱建物址（第75・76図、第25表、図版12）

本址は、Ⅰ郭の東南谷頭部で、堀4の西側南端部に位置し、虎口部を形成している。桁行と梁行は、各々1間でN－55°－Eに方位を有し長方形をなす建物址である。

本址の大きさは、桁行が1間で2.40m（8.0尺）あり、梁行は1間で2.10m（7.0尺）を、各々計測する。柱穴は、桁行方向で楕円形をなしており、P1と2は長径0.90m程度と小さいのに対しP3と4は長径が1.40mと大きく掘り込まれている。柱穴内には、良く固められた黒色土、暗褐色土、黒褐色土を用いている。P4からは、砥石（№214)が検出されており、P1～3内からはカワラケ、内耳土器などの小破片が少量出土しているのみである。

また、本址の南側には良く踏み固められた階段状の遺構があり、通路として使用されたことを示している。

第25表　第24号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	1.80	0.78	0.69	楕円形		P3	1.46	1.00	0.81	楕円形	
2	0.90	0.60	0.61	楕円形		4	1.20	0.90	0.63	楕円形	砥石(№214)出土

第25号掘立柱建物址（第62図、第26表、図版11）

本建物址は、Ⅰ郭南側中央部に位置し、虎口部の建物址である。第3号建物址と重複し、同建物址の下位面に位置している。大きさは、桁行が2間で4.68m（15.6尺）あり、梁行は1間であ

り2.10m（7.0尺）を、各々計測し長方形をなしている。方位は、N－52°－Eにある。また、本建物址の南側には、橋が掛けられていたようである。

本建物址の柱間径は、桁行が2間で北側（P1，2とP5，6間）が3.00m（10.0尺）あり、南側（P2，3とP6，7間）が1.68m（5.6尺）を、各々計測することから10尺×5.5尺で二階建ての櫓門と判断される。

また、南側で橋状の遺構は、P3（西側部分）、9，4とP7，10，8を通る部分で、長さが6.12m（20.4尺）で、幅が1.74m（5.8尺）を計測する。橋桁に相当するP9，10は、3.00m（10尺）の所に位置している。建物址と橋は、第3号建物址よりやや小型である。

柱穴は、楕円形と円形をなす柱穴であり、深く掘り込まれている。このため、その平面プラン等と合わせるとしっかりした造りであったことと判断される。柱穴径は、第26表に示した。

出土遺物は、第3号建物址と同様の状況である。

第26表　第25号掘立柱建物址柱穴一覧表

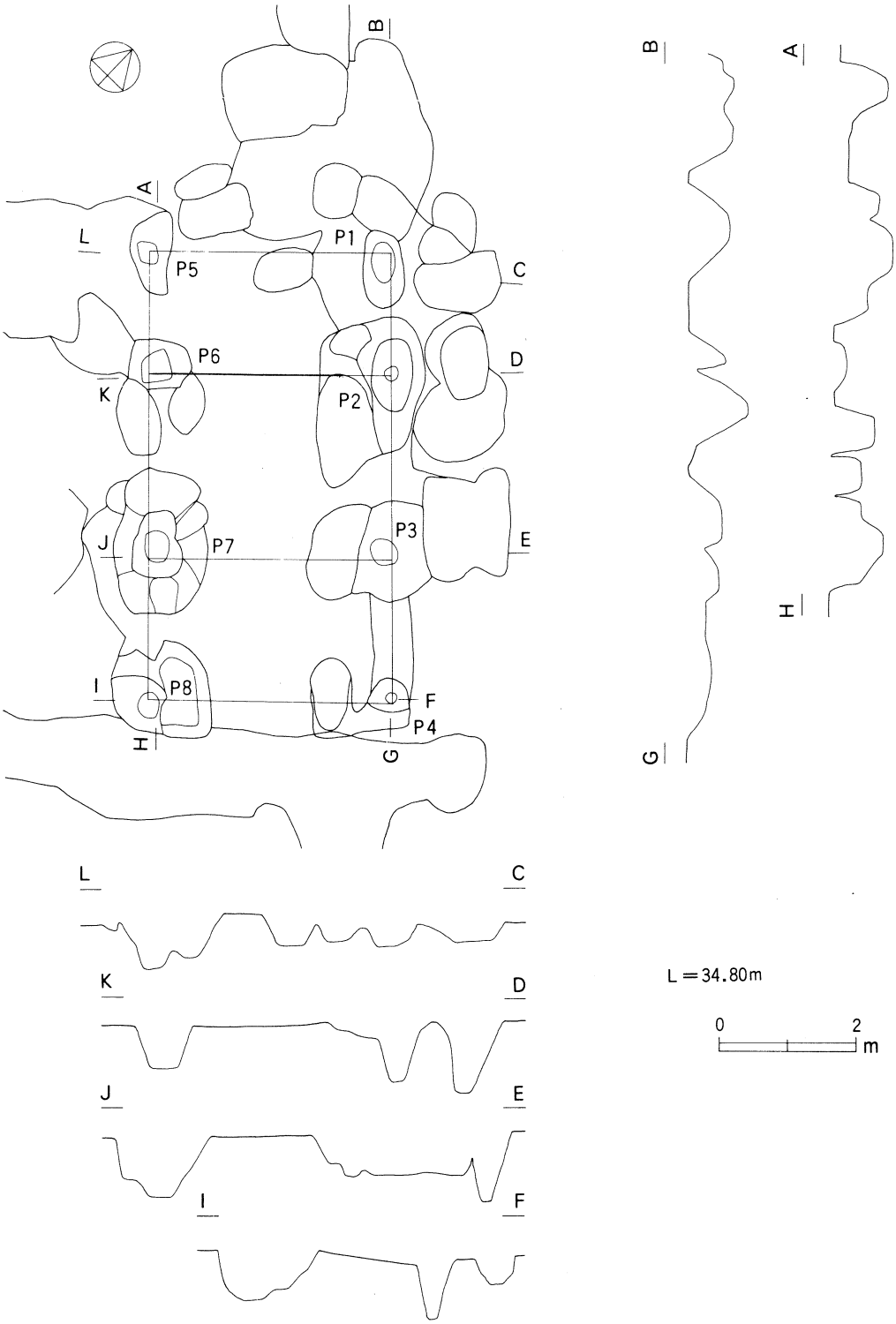
PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	1.10	1.10	0.23	楕円形		P5	0.60	0.55	0.33	楕円形	
2	1.38	1.20	0.70	楕円形		6	1.22	0.80	0.74	楕円形	
3	0.90	0.76	0.58	楕円形		7	0.26	0.26	0.69	楕円形	
4	0.38	0.36	0.55	楕円形		8	0.36	0.22	0.51	楕円形	

第26号掘立柱建物址（第34図、第27表）

本建物址は、I郭北西部で第8号溝（堀4）と第13号溝（堀5）との間に位置しており、桁行3間梁行1間で、長方形をなす建物址である。方位は、N－43°－Wである。大きさは、桁行が3間で6.60m（22.0尺）あり、梁行は1間で3.54m（11.8尺）を各々計測する。

これを各柱間径で見ると、桁行3間はP1，2とP5，6間が1.80m（6.0尺）あり、P2，3とP6，7間が2.70m（9.0尺）あり、P3，4とP7，8間が2.10m（7.0尺）を各々計測することから、桁行は6尺×9尺×7尺の柱間径となる。これに、梁行の11.8尺が加わる。そうすると中央に9尺の広い部屋を置いた構成となる。

柱穴は、重複関係から不整形をなす柱穴も存在するが、多くの柱穴は楕円形で桁行方向に沿い掘り込まれている。大きさでは、P3が最大でありP4が最小の柱穴である。また、深さで見るならば0.50m～0.80m程度の深さを有している。個々の柱穴径は、第27表に示した。



第34図　第26号掘立柱建物址実測図

このように、桁行と梁行の大きさ、各柱間径、柱穴径などから、本建物址は比較的しっかりした建物址と判断される。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。

第27表　第26号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	1.12	0.60	0.45	楕円形		P5	1.18	0.56	0.72	楕円形	
2	1.10	0.60	0.85	楕円形		6	0.94	0.74	0.65	楕円形	
3	1.46	0.96	0.50	楕円形		7	0.96	0.72	0.75	楕円形	
4	0.58	0.50	0.44	楕円形		8	0.80	0.70	0.67	楕円形	

第27号掘立柱建物址（第35図、第28表、図版11）

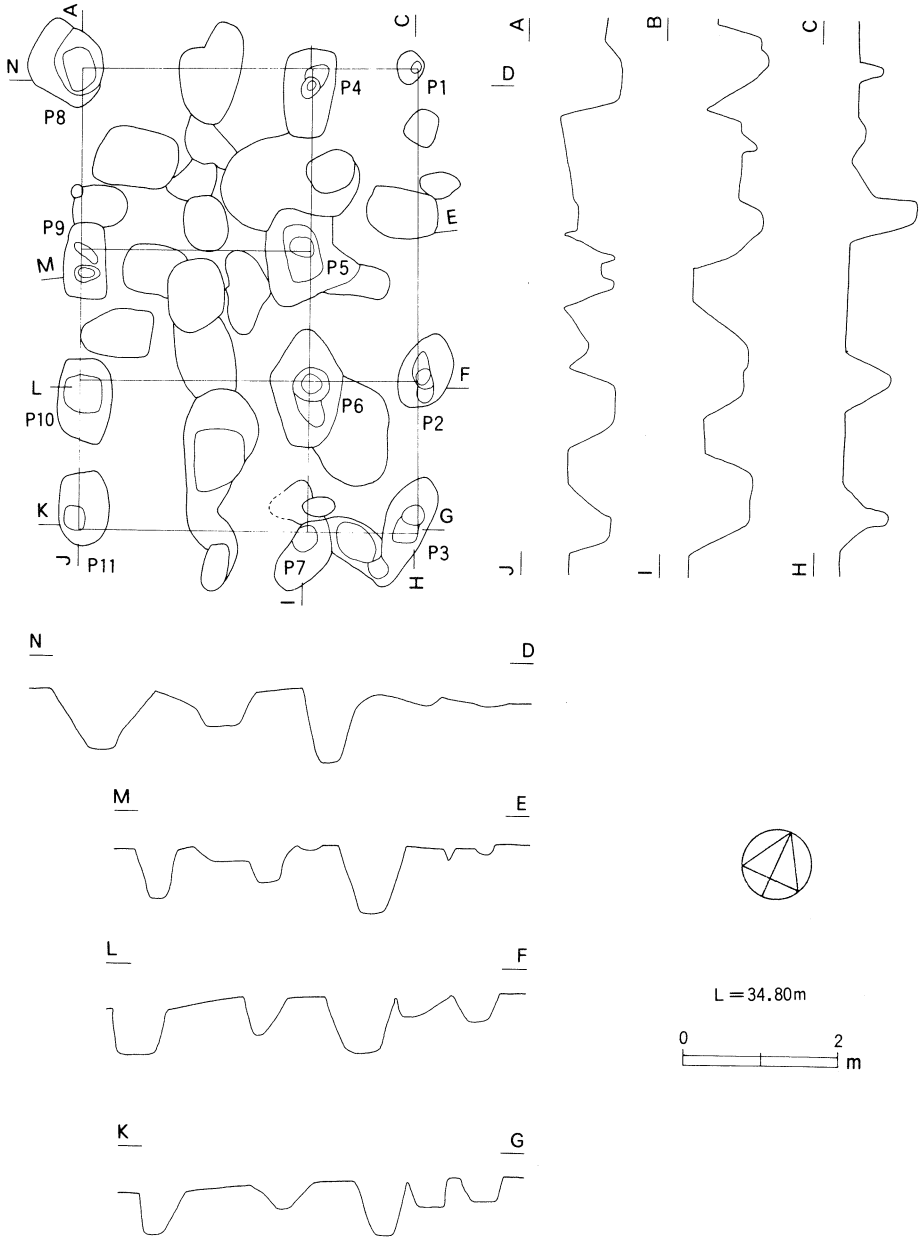
本建物址は、I郭の北東部に位置し、第2、9号建物址等と重複しており、東側に廂を有する建物址である。身舎は、桁行3間、梁行1間で、廂は桁行2間梁行1間となる。よって、本建物址は3間×2間の建物址で、N－23°－Wに方位を有し長方形をなしている。

大きさは、桁行が3間で6.00m（20.0尺）あり、梁行は2間で4.41m（14.7尺）を、各々計測する。身舎の梁行は、3.00m（10.0尺）を計測する。これを、桁行と梁行の柱間径で見ると、身舎の桁行はP4，5とP8，9間が2.34m（7.8尺）あり、P5，6とP9，10間が1.68m（5.6尺）あり、P6，7とP10，11間が1.98m（6.6尺）を、各々計測する。身舎の梁行は、3.00m（10尺）である。したがって、身舎の柱間径は8尺×5.5尺×6.5尺＋10尺を意識したものと判断される。廂の梁行径は、1.41m（4.7尺）で5尺を意識したようである。

身舎と廂を見ると、P2～P10が一直線に配置されており、P2の北側はP1のみであること等を合せ考えると、P5，9は桁行の柱でP4～6とP8～10で13尺間を構成していた可能性を有している。

柱穴は、桁行に沿って掘り込まれており、楕円形や隅丸長方形をなす柱穴がほとんどである。深さは、P4，6が0.30m～0.50m代と浅くなっているが0.50～0.70m代の深さを有している。P4，6が浅いのは、重複のため上部を消失したためで、本来は0.60～0.70m代の深さを有していたことと判断される。個々の柱穴は、第28表に示した。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。



第35図　第27号掘立柱建物址実測図

第28表　第27号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ		
P1	0.46	0.36	0.20	楕円形	
2	0.90	0.72	0.47	楕円形	
3	0.90	0.64	0.45	楕円形	
4	1.14	0.62	0.84	隅丸長方形	
5	0.72	0.44	0.90	長方形	
6	0.36	0.50	0.73	楕円形	

PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ		
P7	0.86	0.62	0.73	楕円形	
8	1.06	0.98	0.75	楕円形	
9	0.98	0.54	0.55	長方形	
10	1.08	0.70	0.59	楕円形	
11	0.90	0.62	0.55	長方形	

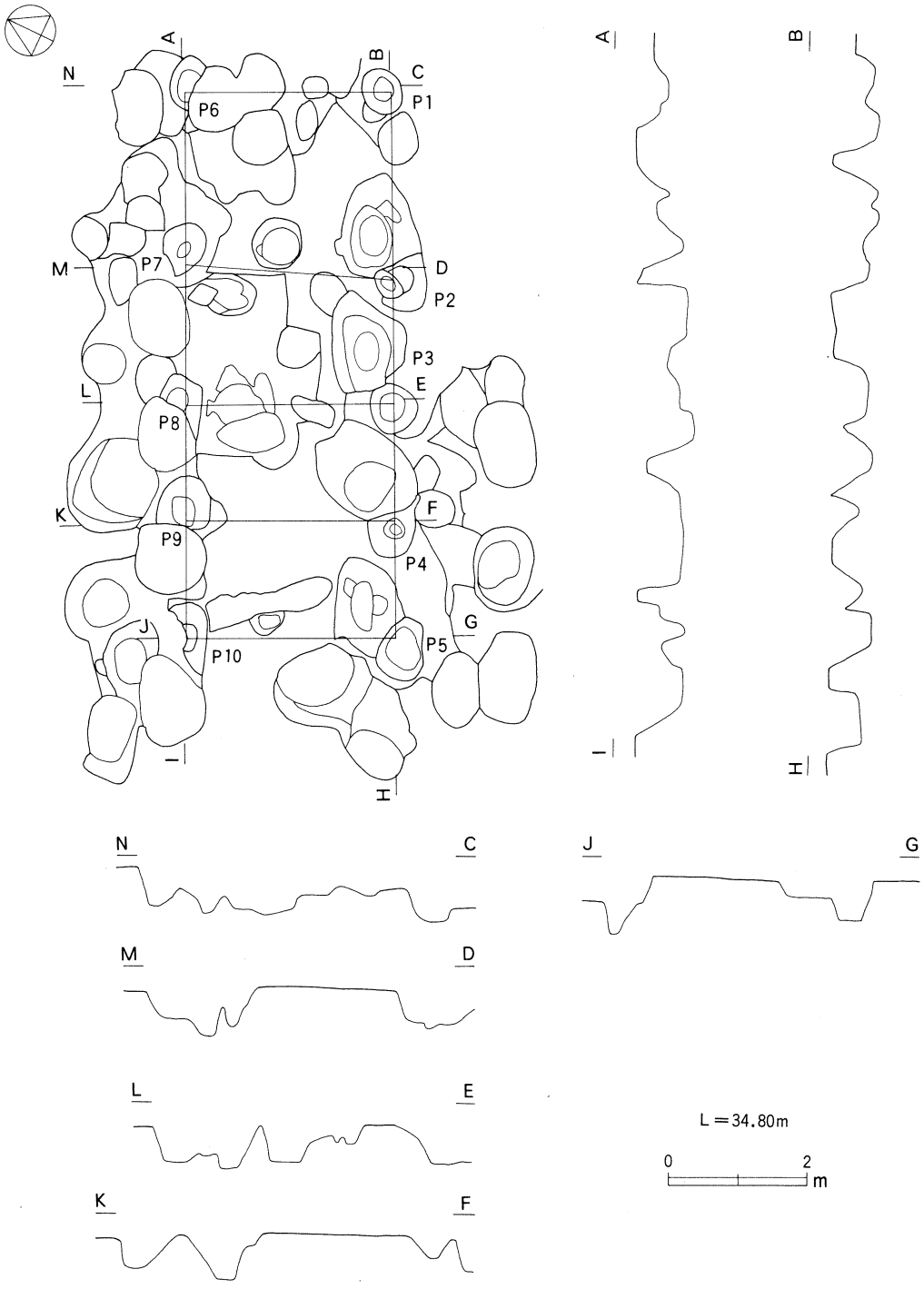
第28号掘立柱建物址（第36図、第29表、図版11）

本建物址は、Ｉ郭の北東部で第８号溝（堀４）の東側虎口北側に位置し、第５、20号建物址と重複している。大きさは、桁行が４間で7.95m（26.5尺）あり、梁行は１間で3.00m（10.0尺）を各々計測し、Ｎ－65°－Ｅに方位を有し長方形をなしている。

桁行４間の柱間径は、Ｐ１，２とＰ６，７間がＰ１，２は2.73m（9.1尺）でＰ６，７間が2.52m（8.4尺）と、計測値に７寸程度の差を有している。Ｐ２，３とＰ７，８は、前者の柱間がその計測値に差があるため、ここでも差が生じている。Ｐ２，３間は、1.80m（6.0尺）でＰ７，８間が2.04m（6.8尺）と７寸の差がある。Ｐ３，４とＰ８，９間は、1.71m（5.7尺）であり、Ｐ４，５とＰ９，10間は1.71m（5.7尺）を計測する。このように、東側に広い部屋を配置した構成である。

柱穴は、重複関係が著しいため柱穴の一部を消失してしまったものも所在するが、円形と楕円形をなす柱穴で、楕円形が主流を占め桁行方向に沿って掘り込まれている。深さは、各柱穴により異なっているが、Ｐ４が0.70mでＰ９は0.67mを計測し、Ｐ３は0.50mでＰ６は0.70mを計測する。この浅い柱穴は、重複により柱穴上半を消失した為と判断され、0.50～0.70m程度の深さを有するものと判断される。個々の柱穴径は、第29表に示した。

出土遺物は、何ら出土しなかった。



第36図　第28号掘立柱建物址実測図

第29表　第28号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ		
P1	0.70	0.60	0.54	楕円形	
2	0.40	0.36	0.52	楕円形	
3	0.76	0.70	0.53	円形	
4	0.66	0.55	0.35	楕円形	
5	0.90	0.70	0.58	楕円形	

PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ		
P6	0.70	0.40	0.38	楕円形	
7	0.72	0.62	0.55	楕円形	
8	0.60	0.54	0.58	楕円形	
9	0.76	0.74	0.58	楕円形	
10	0.90	.030	0.60	楕円形	

第29号掘立柱建物址（第37図、第30表、図版11）

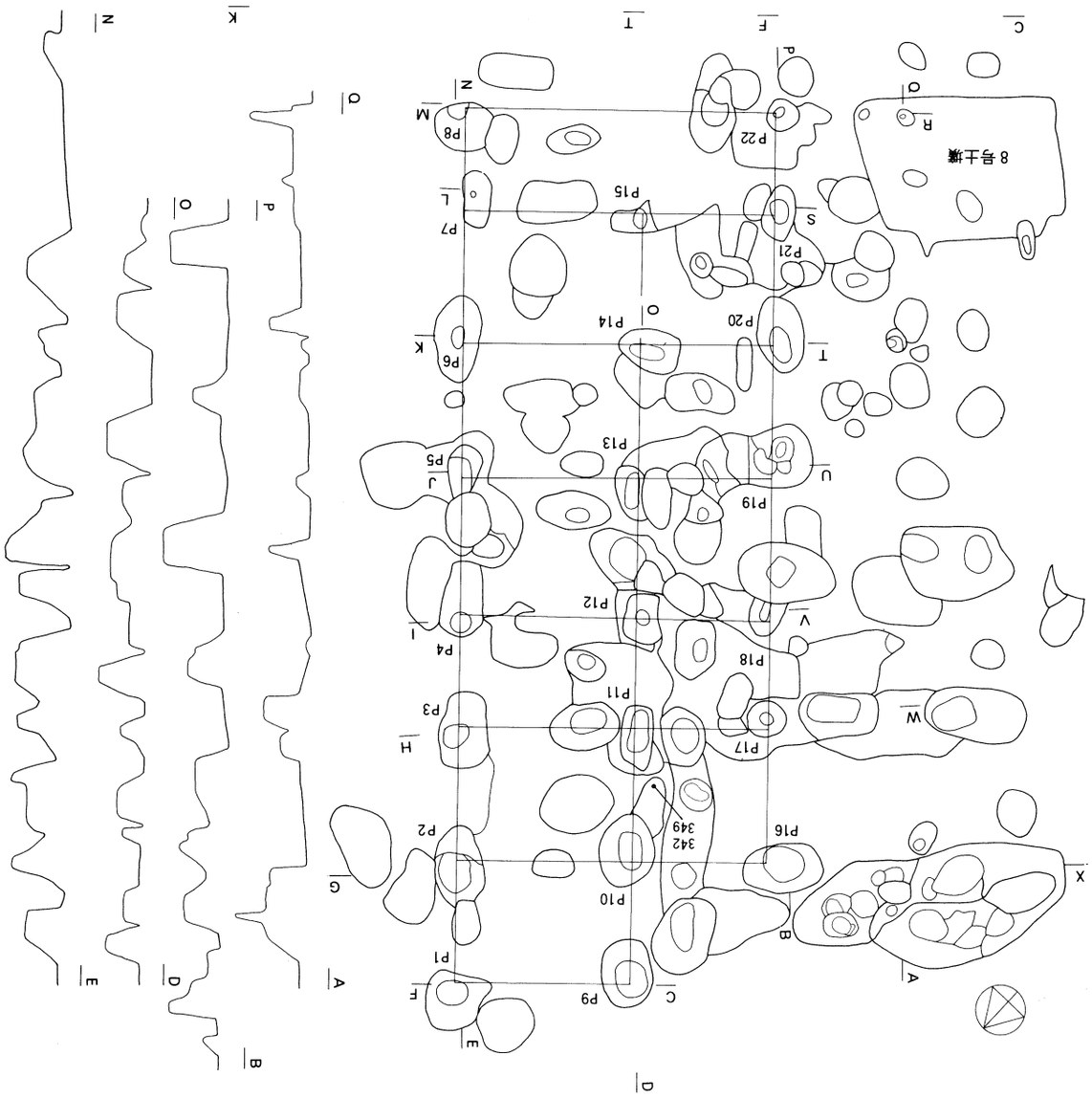
本建物址は、I郭の中央北西部で第8号溝（堀4）の南西側に位置している。方位としては、N－45°－Wで長方形をなす建物址であるが、桁行は7間で梁行が2間と1間で都合6間から構成されている。したがって、桁行も6間の部分が存在することとなる。大きさは、桁行7間の部分が12.84m（42.8尺）あり、同6間の部分は11.01m（36.7尺）を、各々計測する。梁行は、2間と1間の部分が4.56m（15.2尺）を計測する。

各柱間径は、桁行では7間と6間が6間の部分が同一柱間を有している。桁行の柱間径は、P1，2とP9，10間が1.80m（6.0尺）あり、P2，3とP16，17間が1.95m（6.5尺）あり、P3，4とP17，18間が1.65m（5.5尺）あり、P4，5とP18，19間が2.01m（6.7尺）あり、P5，6とP19，20間が1.98m（6.6尺）あり、P6，7とP20，21間が1.95m（6.5尺）あり、P7，8とP21，22間が1.50m（5.0尺）を、各々計測する。したがって、桁行は6尺×6.5尺×5.5尺×6.5尺×6.5尺×6.5尺×5尺を意識したことと判断される。梁行では、東側が1間構成で他は2間構成である。梁行の柱間径は、P2～7とP10～15間が2.58m（8.6尺）あり、P10～15とP16～21間が1.95m（6.5尺）あり、東側（P7，8とP21，22間）が4.56m（15.2尺）を、各々計測する。よって、梁行は8.5尺×6.5尺＋15尺を意識したことと判断される。

以上の計測値から、本建物址は東側と中央西側に5尺間を置き、他の部分は6尺と6.5尺間の部屋構成とした建物址で、比較的しっかりした建物址と判断される。

柱穴は、楕円形と円形状をなす柱穴で、桁行に沿うものと梁行方向に沿うものとがあり一様ではない。柱穴の大きさは、P7がやや小型である以外ほぼ同程度の大きさである。重複関係により、P11，12，17，18などのように柱穴の一部しか確認出来なかった柱穴もある。なお、個々の柱穴径は第30表に示した。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。



第37図　第29号掘立柱建物址実測図

第30表　第29号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	0.90	0.80	0.41	楕円形		P12	0.74	0.50	0.48	楕円形	
2	0.70	0.76	0.46	楕円形		13	0.76	0.36	0.42	楕円形	
3	1.10	0.72	0.75	楕円形		14	0.90	0.64	0.31	楕円形	
4	1.10	0.60	0.82	楕円形		15	0.66	0.40	0.52	楕円形	
5	0.70	0.54	0.46	楕円形		16	1.14	0.74	0.62	楕円形	
6	1.26	0.70	0.59	楕円形		17	0.56	0.54	0.39	円形	
7	0.90	0.40	0.45	楕円形		18	0.52	0.48	0.42	楕円形	
8	0.80	0.70	0.25	楕円形		19	0.53	0.38	0.41	楕円形	
9	1.00	0.72	0.53	楕円形		20	1.10	0.70	0.65	楕円形	
10	1.06	0.80	0.61	楕円形		21	0.83	0.48	0.45	楕円形	
11	0.90	0.50	0.39	楕円形		22	0.46	0.48	0.58	円形	

第30号掘立柱建物址（第38図、第31表、図版９）

本建物址は、Ｉ郭の南東で第53号掘立柱建物址と重複している。大きさは、桁行４間（7.38mで24.6尺）で、梁行１間（3.60mで12尺）であり、長方形をなす建物址である。方位としてはＮ－47°－Ｗで、東西方向を向く建物址である。

桁行４間の各柱間径は、Ｐ１，２とＰ６，７間が1.60mで６尺、Ｐ２，３とＰ７，８間が1.80mで６尺、Ｐ３，４とＰ８，９間が1.68mで5.6尺、Ｐ４，５とＰ９，10間が2.10mで７尺、を各々計測する。この計測値から、桁行の柱間は６尺と７尺を基準としたようである。異なる点としては、Ｐ３，４とＰ８，９の柱間が5.6尺と狭くなっている点である。これは、本建物址の用途と関連することと判断される。

柱穴は、Ｐ１～Ｐ５までの北側柱穴が、Ｐ６～Ｐ10までの南側柱穴に対して大きく掘り込まれているが、深さで見るならば各柱穴ともほぼ同程度の深さを有しており、形状も楕円形を呈している。

各柱穴内の土層は、ローム＝ブロックを含む黒色土が主体であり、これに暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土の各土層が交互に埋めた状況で確認されたが、柱痕と推定される部分はＰ２，５，７の各柱穴底でわずかに認められた程度である。各柱穴径は、第31表に示した。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。

第31表　第30号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	1.06	0.58	0.64	楕円形		10	0.90	0.86	0.47	楕円形	
2	1.44	0.82	0.58	楕円形		11	0.88	0.84	0.47	楕円形	
3	1.14	0.82	0.39	楕円形		12	1.28	0.90	0.78	楕円形	
4	0.90	0.70	0.57	楕円形		13	1.20	0.70	0.69	楕円形	
5	1.00	0.76	0.39	楕円形		14	1.50	0.70	0.66	楕円形	
6	1.20	0.70	0.50	楕円形		15	1.14	0.80	0.57	楕円形	
7	1.04	0.56	0.49	楕円形		16	0.64	0.72	0.41	楕円形	
8	1.22	0.74	0.39	楕円形		17	1.00	0.70	0.49	楕円形	
9	0.90	0.74	0.50	楕円形							

第31号掘立柱建物址（第39図、第32表）

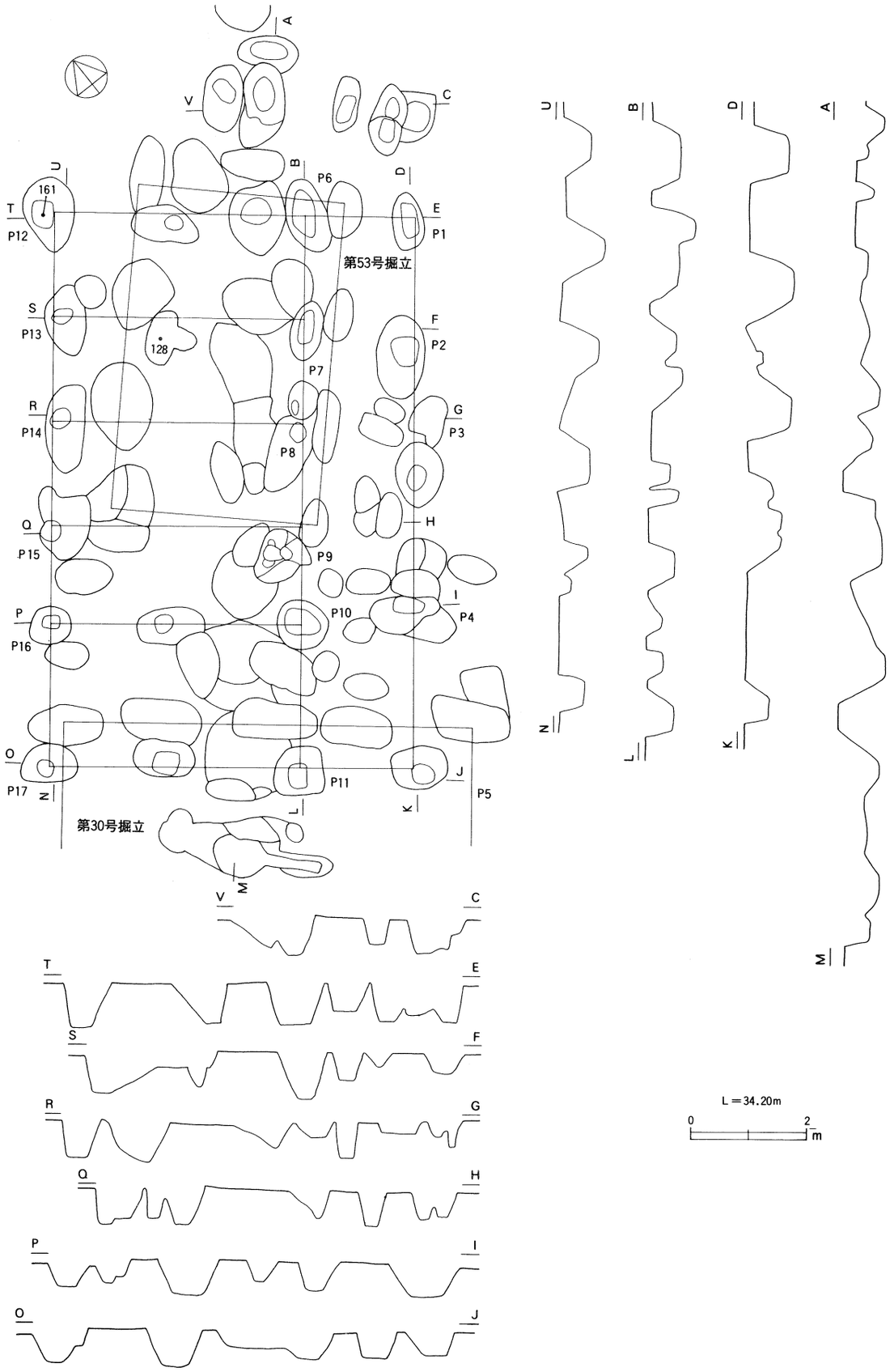
本建物址は、Ⅰ郭の南西部で第4号堀の東側で土橋の北東に位置し、桁行3間、梁行2間の建物址で、N－50°－Wに方位を有し長方形をなしている。大きさは、桁行が3間で6.15m（20.5尺）あり、梁行は2間で3.36m（11.2尺）を計測し、総柱式の建物址である。

各柱間径は、桁行がP1，2とP9，10間が1.95m（6.5尺）あり、P2，3とP10，11間が2.25m（7.5尺）あり、P3，4とP11，12間が1.95m（6.5尺）を各々計測する。梁行は、北側（P1列とP5列）が1.50m（5.0尺）を計測し、南側（P5列とP9列）が1.80m（6.0尺）を各々計測する。このことから、本建物址の柱間は、桁行が6.5尺×7.5尺×6.5尺の柱間径で、梁行は5尺×6尺の柱間径となり、中央がやや広くなる構造となる。

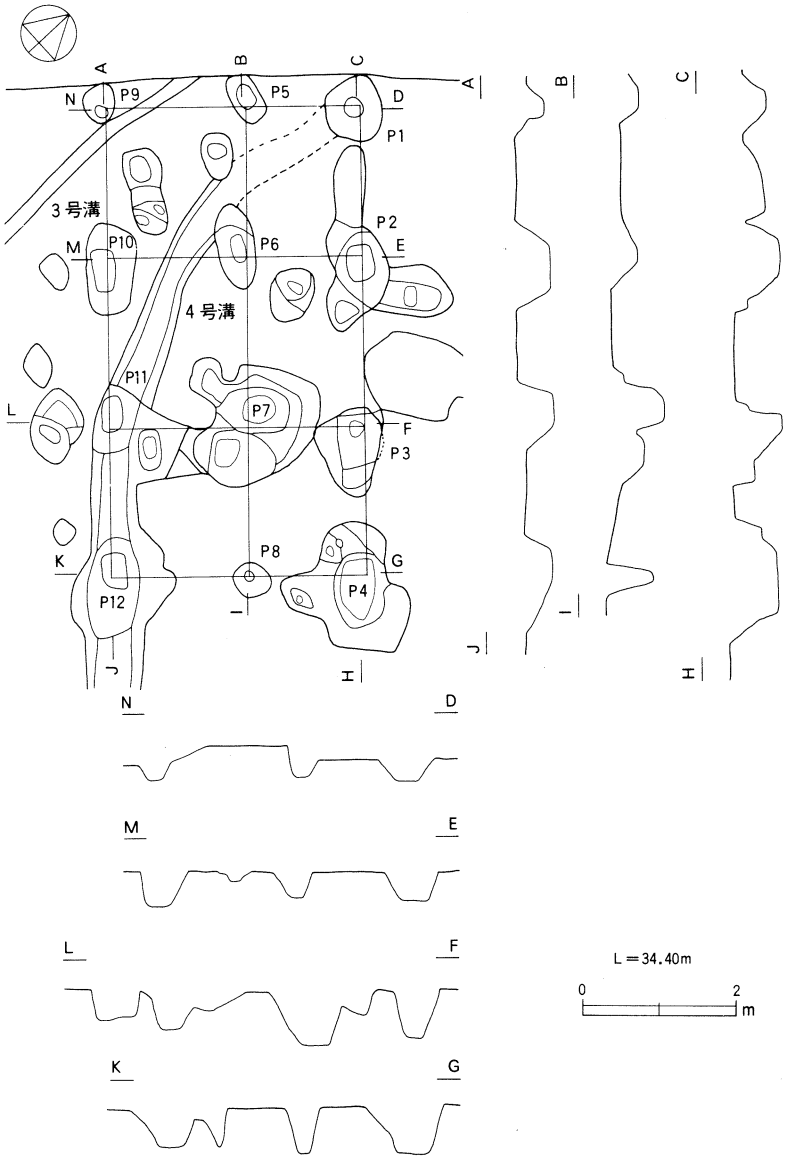
本建物址は、北側が5尺で南側は6尺となるが、北面廂ではなく総柱式の建物址と判断される。これは、Ⅰ郭内の建物址は本址と類似する建物址が多く確認されているためである。

柱穴は、円形の柱穴と楕円形の柱穴とが併用されている。円形の柱穴では、P1，8，9の3柱穴で、他は楕円形の柱穴である。柱穴の大きさは、P1～4，P7，P10～12の8柱穴が大きく掘り込まれている。深さは、各柱穴により異なっている。個々の柱穴径は、第32表に示した。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。



第38図　第30号掘立柱建物址実測図



第39図　第31号掘立柱建物址実測図

第32表　第31号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
1	0.84	0.76	0.29	楕円形		7	0.94	0.62	0.60	楕円形	
2	0.96	0.70	0.41	楕円形		8	0.50	0.48	0.60	楕円形	
3	0.70	0.54	0.64	楕円形		9	0.60	0.42	0.25	楕円形	
4	0.96	0.42	0.64	楕円形		10	1.20	0.60	0.45	楕円形	
5	0.70	0.50	0.32	楕円形		11	0.88	0.54	0.38	楕円形	
6	1.10	0.50	0.30	楕円形		12	1.32	0.68	0.43	楕円形	

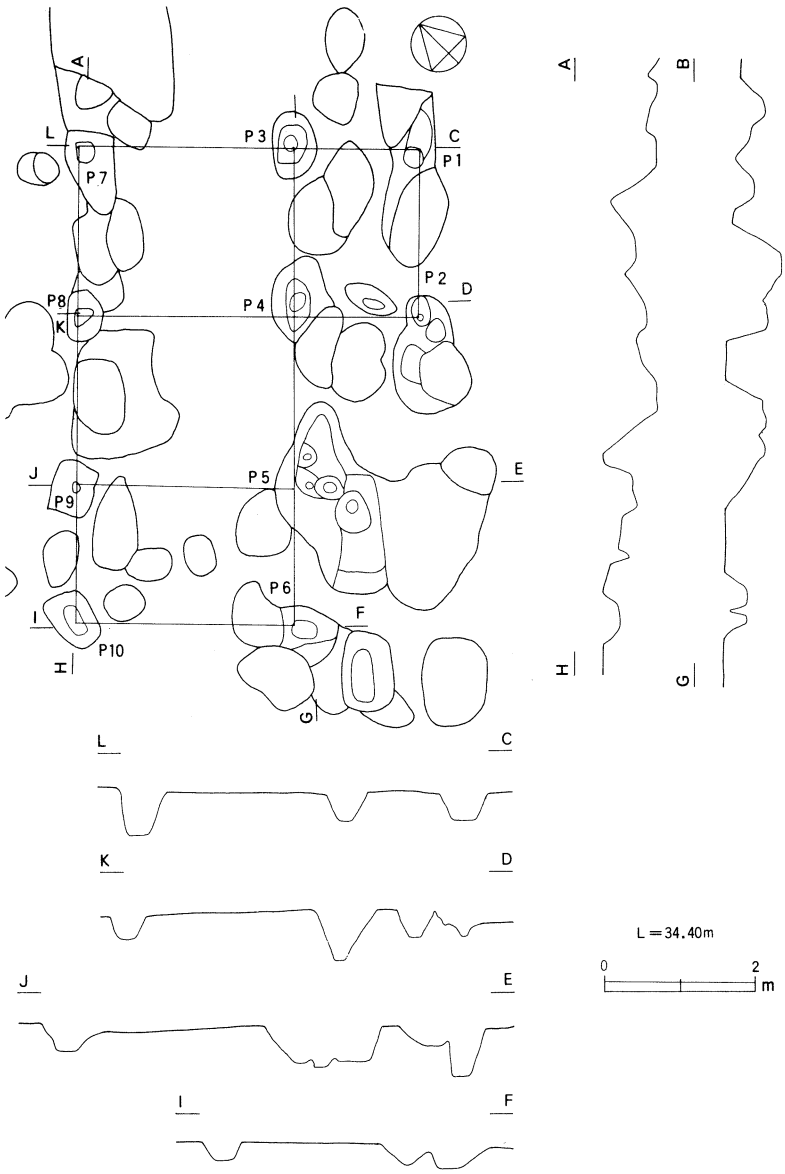
第32号掘立柱建物址（第40図、第33表）

本建物址は、Ｉ郭の南西部でＩ郭南側虎口の北側に位置し、第56号掘立柱建物址と重複しており、桁行３間で梁行１間の長方形をなす部分と、東側で南側に１間付設された部分とからなる建物構成で「Ｌ」型をなしている。記述上前者（Ｐ３～６とＰ７～10）を身舎、後者（Ｐ１～４）を付設部として記述する。

本建物址の大きさは、身舎が桁行３間で6.33m（21.1尺）あり、梁行は１間で2.91m（9.9尺）を計測する。桁行の各柱間径は、Ｐ３，４～Ｐ７，８間が2.25mで7.5尺あり、Ｐ４，５～Ｐ８，９間では2.25mで7.5尺あり、Ｐ５，６とＰ９，10間では1.83mで6.1尺を、各々計測する。この計測から、桁行の柱間は7.5尺×7.5尺×６尺を意識したようである。付設部（Ｐ１～４）は、１間４面となり東西径（Ｐ１，２とＰ３，４間）は2.25mで7.5尺となり、南北径（Ｐ１，３とＰ２，４間）は1.65mで5.5尺となる。以上の計測値から、本建物址は7.5尺×7.5尺×６尺×9.9尺の部分（身舎）に7.5尺×5.5尺（付設部）が付設され、比較的しっかりした建物址となる。方位は、Ｎ－47°－Ｅである。

柱穴は、重複により柱穴の一部しか確認出来なかった柱穴も存在するが、比較的小さな柱穴が多く、形状も円形、方形、楕円形と不規則である。深さは、中央部分が深く端部が浅くなっているなど、多少の差異は認められる。個々の柱穴径に関しては、第33表に示した。

出土遺物は、何ら出土しなかった。



第40図　第32号掘立柱建物址実測図

第33表　第32号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	0.60	0.34	0.35	楕円形		P6	0.74	0.50	0.30	楕円形	
2	0.40	0.26	0.23	楕円形		7	1.04	0.68	0.45	楕円形	
3	0.90	0.60	0.34	楕円形		8	0.68	0.50	0.25	楕円形	
4	1.10	0.80	0.66	楕円形		9	0.76	0.64	0.30	隅丸長方形	
5	0.32	0.30	0.43	楕円形		10	0.74	0.62	0.23	楕円形	

第33号掘立柱建物址（第41図、第34表）

本建物址は、Ⅰ郭の北西部に位置し、桁行2間で梁行1間の長方形をなす建物址である。本建物址の方位は、N－51°－Wである。

本建物址の大きさは、桁行が2間で3.78m（12.6尺）あり、梁行は1間で2.10m（7.0尺）を計測する。桁行2間の柱間径は、P1，2とP4，5間が1.86m（6.2尺）あり、P2，3とP5，6間は1.92m（6.4尺）を、各々計測する。この計測値から桁行は、6尺×6尺を意識したようである。建物址全体では、6尺×6尺×7尺となり、小型であるがしっかりした構造となる。

柱穴は、楕円形の柱穴を用いており、建物址の方向とは逆に南北方向（梁行）を向いて掘り込まれている。深さは、P1，4が0.30m以内と浅いが他は深くなっている。個々の柱穴径は、第34表に示した。

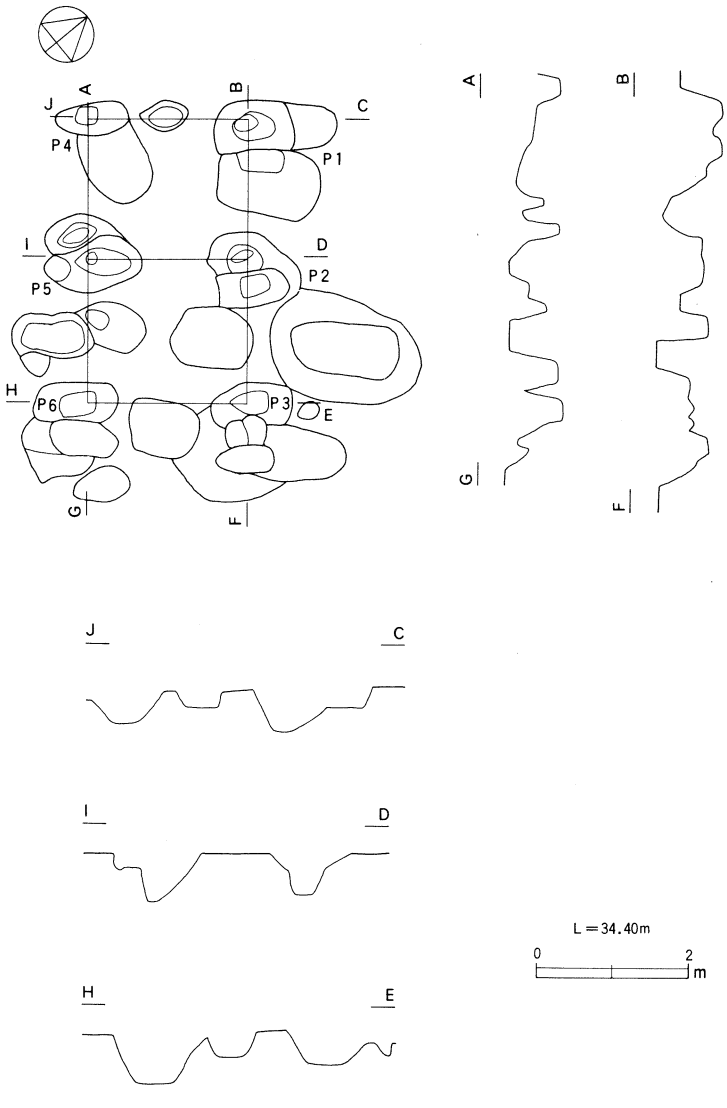
遺物は、何ら出土しなかった。

第34表　第33号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	1.08	0.70	0.59	楕円形		P4	1.00	0.44	0.30	楕円形	
2	1.04	0.54	0.55	楕円形		5	1.28	0.66	0.63	楕円形	
3	1.04	0.42	0.43	楕円形		6	1.12	0.50	0.66	楕円形	

第34号掘立柱建物址（第42図、第35表）

本建物址は、Ⅰ郭の中央西側で第50号掘立柱建物址の北西部に位置している。桁行が2間で、



第41図　第33号掘立柱建物址実測図

梁行は1間の長方形をなす建物址であり、N－47°－Eに方位を有している。

大きさは、桁行が2間で3.60m（12.0尺）を計測し、梁行は1間で2.85m（9.5尺）を計測する。桁行2間の柱間は、東側（P1，2とP4，5間）が1.80mで6.0尺を計測し、西側（P2，3とP5，6間）は1.80mで6.0尺を計測する。この計測値から、桁行と梁行の柱間は6尺×6尺×12尺となりしっかりした構造の建物址であると判断される。

柱穴は、P2と5以外重複しているが、楕円形をなす柱穴が中心であり、P1，2，5の3柱穴は大きく掘り込まれている。各柱穴の深さは、柱穴の位置により多少計測値に差は認められるが、ほぼ同程度の深さを有する柱穴が多いようである。個々の柱穴径は、第35表に示した。

出土遺物は、少量の土師器片が柱穴内より出土したのみである。

第35表　第34号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形状	備考	PNO	大き さ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深 さ				東西径	南北径	深 さ		
P1	1.20	0.68	0.53	楕円形		P4	1.10	0.60	0.56	楕円形	
2	1.20	0.80	0.61	楕円形		5	1.30	0.54	0.52	楕円形	
3	0.90	0.74	0.36	楕円形		6	0.50	0.50	0.39	楕円形	

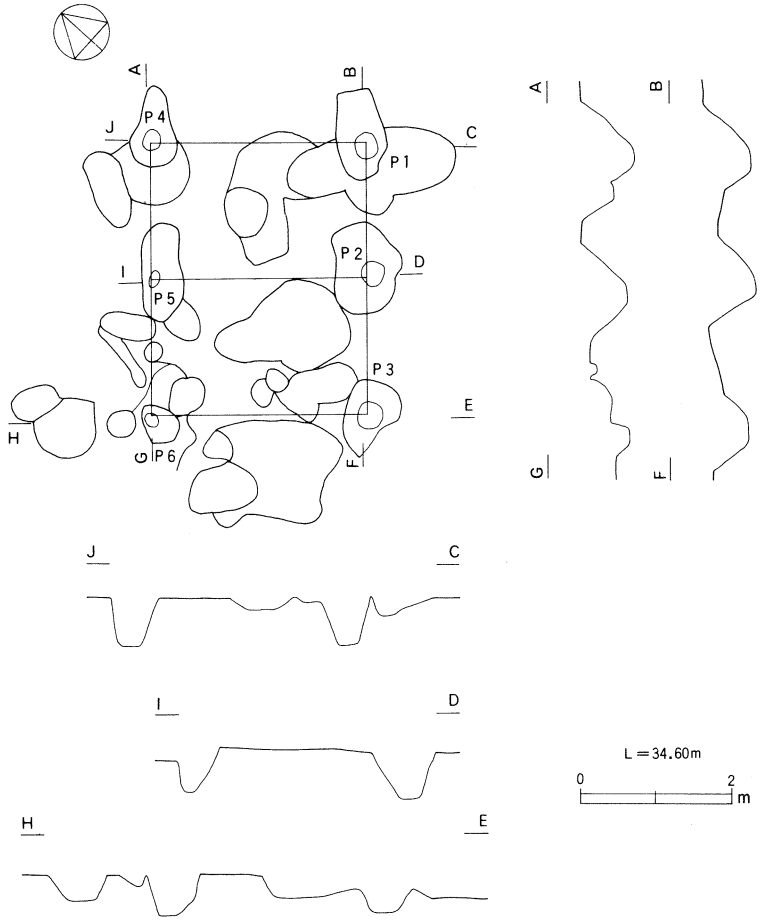
第35号掘立柱建物址（第43図、第36表）

本建物址は、I郭の南西で第8号掘立柱建物址の南西部に位置し、第52号掘立柱建物址と重複している。大きさは、桁行が3間で5.82m（19.4尺）あり、梁行が1間で3.36m（11.2尺）を各々計測する。方位は、N－46°－Eで東西方向を向き長方形をなす建物址である。

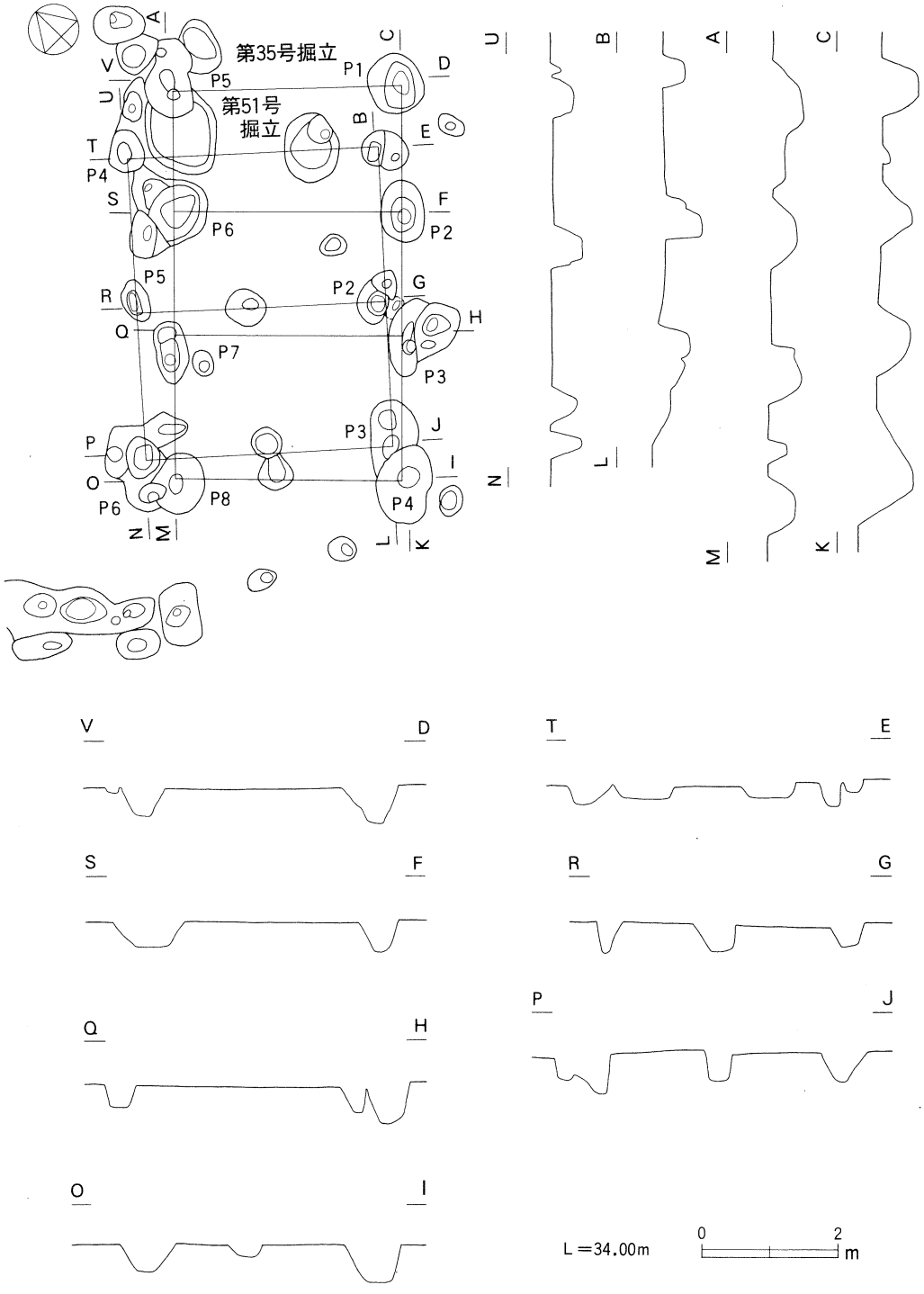
柱間径は、桁行が3間で梁行が1間であるため、桁行の柱間径を記述する。桁行東側（P1，2とP5，6）は、1.86mで6.2尺を計測し、中央の柱間（P2，3とP6，7）は1.80mで6.0尺を計測し西側の柱穴（P3，4とP7，8）は、2.16mで7.2尺を計測する。この結果、桁行3間は6尺＋6尺＋7尺を意識したものと判断される。これに、梁行の11尺が加わることとなる。

各柱穴は、第51号掘立柱建物址より大きく、やや深い柱穴である。柱穴の形状としては、楕円形をなす柱穴が中心である。個々の柱穴径は、第36表に示した。

出土遺物としては、ごく少量であるが内耳小片、カワラケ小片、土師器小片などがP1，4，5，8より検出されているが、図示可能な遺物は検出されなかった。



第42図　第34号掘立柱建物址実測図



第43図　第35、51号掘立柱建物址実測図

第36表　第35号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形 状	備　　考
	東西径	南北径	深 さ		
P 1	0.90	0.80	0.55	楕円形	
2	0.90	0.60	0.47	楕円形	
3	1.06	0.38	0.43	楕円形	
4	1.14	0.78	0.66	楕円形	

PNO	大き さ(m)			形 状	備　　考
	東西径	南北径	深 さ		
P 5	1.16	0.66	0.43	楕円形	
6	0.80	0.70	0.38	楕円形	
7	0.90	0.44	0.41	楕円形	
8	0.88	0.82	0.41	楕円形	

第36号掘立柱建物址（第44図、第37表、図版９）

本建物址は、Ｉ郭の南東部に位置しており、桁行が４間で梁行は１間の建物址で、長方形をなしている。方位は、Ｎ－47°－Ｗである。大きさは、桁行が４間で7.38m（24.6尺）を計測し、梁行は１間で3.60mで12.0尺を計測する。桁行の柱間は、Ｐ１，２とＰ６，７間は1.80mで6.0尺を計測し、Ｐ２，３とＰ７，８間は1.80mで6.0尺を計測する。Ｐ３，４とＰ８，９間は、1.68mで5.6尺を計測し、Ｐ４，５とＰ９，10間は2.10mで7.0尺を計測する。よって桁行の柱間は、６尺×６尺×５尺×７尺となり、５尺間を境として６尺間と７尺間に区分される。梁行は、12尺であることから南北に細長い構造となる。

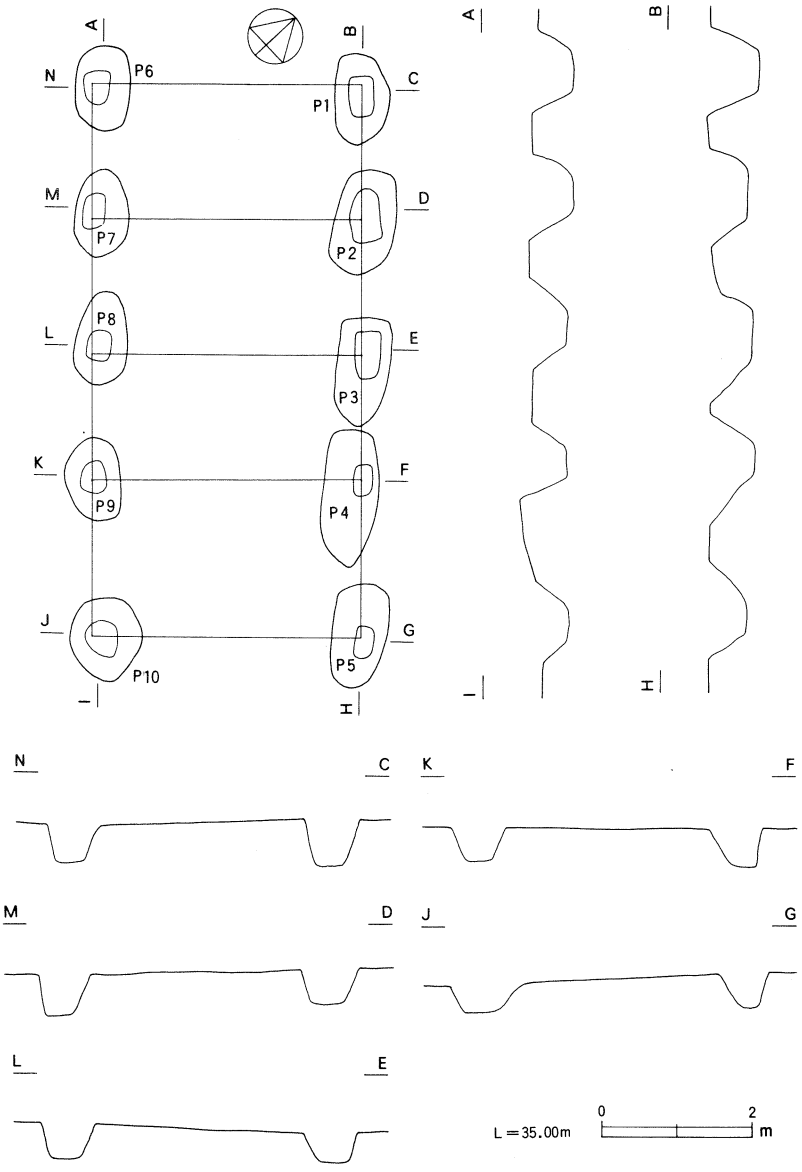
柱穴は、Ｐ10が不整円形である以外全て楕円形をなしており、深さもほぼ一定した深さを有している。建物址の平面プランと合わせ考えると、しっかりした構造の建物址と判断される。柱穴内の土層は、ローム＝ブロックを主体とした土層である。個々の柱穴径は、第37表に示した。

出土遺物としては、少量の土師器坏片が出土したのみである。

第37表　第36号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形 状	備　　考
	東西径	南北径	深 さ		
P 1	1.18	0.72	0.69	長方形	
2	1.38	0.82	0.50	長方形	
3	1.42	0.72	0.44	長方形	
4	1.80	0.72	0.57	長方形	
5	1.35	0.72	0.50	長方形	

PNO	大き さ(m)			形 状	備　　考
	東西径	南北径	深 さ		
P 6	1.12	0.72	0.53	長方形	
7	1.16	0.72	0.56	長方形	
8	1.22	0.68	0.48	長方形	
9	1.10	0.73	0.50	長方形	
10	1.10	0.96	0.38	長方形	



第44図　第36号掘立柱建物址実測図

第37号掘立柱建物址（第29図、第38表）

本建物址は、Ⅰ郭の北西部で第19号掘立柱建物址と重複しており、南側には旧堀である第４号堀が、西側に旧堀の第　号堀が各々掘り込まれている。本建物址は、桁行が４間で梁行は１間の建物址で長方形をなし、Ｎ－42°－Ｅに方位を有している。

大きさは、桁行が４間で6.54m（21.8尺）あり、梁行は１間で5.16m（17.2尺）を、各々計測する。これを各柱間で見ると、桁行はＰ１，２とＰ７，８間は2.10mで7.0尺あり、Ｐ２，３とＰ８，９間は1.62mで5.4尺あり、Ｐ４，５とＰ９，10間は1.32mで4.4尺あり、Ｐ５，６とＰ10，11間は1.50mで5.0尺を、各々計測する。梁行は、１間で17.2尺を計測することから、本建物址は桁行が７尺×５尺×４尺×５尺で、梁行が17尺の建物址と判断される。東側（Ｐ１，２とＰ７，８間）は、７尺×17尺で広い部屋構成となっているが、他の部屋は５尺×17尺と狭い部屋構成となっていることから、東側の部屋が中心部分と判断される。なお、Ｐ３はＰ２に接する柱穴で、本建物址の桁行線上に位置しているものの、本柱穴と対比する柱穴が存在しない。したがって、他の建物址（第19号建物址）の柱穴である可能性を有している。

柱穴は、桁行線に沿った楕円形状をなす柱穴と判断されるが、その多くは重複により壁の一部しか遺存しない柱穴がほとんどである。柱穴としては、大きくしっかりした柱穴であり、土層はローム＝ブロックを中心とした黄褐色土が中心である。また、Ｐ８は第19号建物址のＰ９に相当し共有のようである。

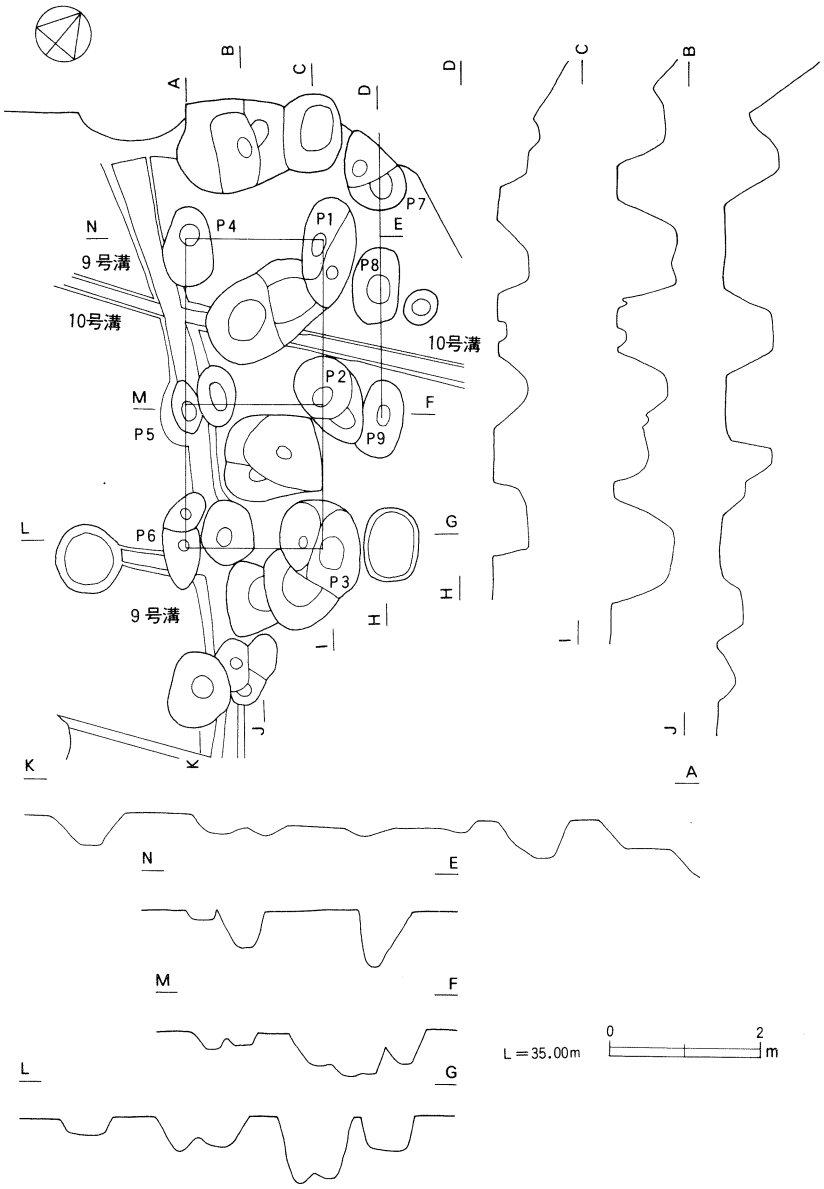
遺物は、何ら出土しなかった。

第38表　第37号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考	PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ				東西径	南北径	深　さ		
Ｐ１	0.96	0.74	0.50	楕円形		Ｐ６	0.92	0.74	0.64	楕円形	
2	1.04	0.56	0.58	楕円形		7	0.94	0.68	0.60	楕円形	
3	0.70	0.68	0.50	楕円形		8	1.52	0.80	0.47	楕円形	
4	0.48	0.38	0.52	楕円形		9	0.40	0.36	0.52	楕円形	
5	0.70	0.66	0.34	楕円形		10	0.88	0.82	0.20	楕円形	

第38号掘立柱建物址（第45図、第39表）

本建物址は、Ⅰ郭の北西部で第１号掘立柱建物址北西部に位置し、桁行は２間で梁行が１間の



第45図　第38号掘立柱建物址実測図

建物址である。方位は、N－50°－Wである。本建物址の西側には、6溝が掘り込まれている。

大きさは、桁行が2間で4.11m（13.7尺）を計測し、梁行は1間で1.80m（6.0尺）を計測する。桁行2間の柱間は、西側（P1，2とP4，5間）が2.19mで7.3尺を計測し、東側（P2，3とP5，6間）が1.92mで6.3尺を計測する。この計測値から桁行は、7尺×6尺の柱間径であったと判断され、西側が広い構造である。

柱穴は、円形の柱穴（P2）と楕円形をなす柱穴（P2以外の柱穴）がある。これらの柱穴は、他の柱穴や溝と重複している。大きさ等は、P6が小型の柱穴である以外は、ほぼ同程度の大きさであり、深さもほぼ一定している。個々の柱穴径は、第39表に示した。また、P1，2の北側に位置する3柱穴（P7～P9）は、柵列等の可能性を有している。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。

第39表　第38号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形状	備考	PNO	大き さ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	1.50	0.70	0.80	楕円形		P4	1.04	0.62	0.50	楕円形	
2	0.82	0.78	0.49	楕円形		5	0.70	0.34	0.24	楕円形	
3	1.18	0.60	0.80	楕円形		6	0.74	0.50	0.43	楕円形	

第39号掘立柱建物址（第28図、第40表）

本建物址は、I郭の北西部で第18号建物址の内側に位置している。桁行が3間で、梁行は1間で方位をN－50°－Eに有し、長方形をなす建物址である。大きさは、桁行が3間で5.67m（18.9尺）あり、梁行は1間で3.45m（11.5尺）を、各々計測する。

桁行3間の柱間径は、P1，2とP5，6間が1.80m（6.0尺）あり、P2，3とP6，7間が1.80m（6.0尺）あり、P3，4とP7，8間が2.07m（6.9尺）を、各々計測することから桁行の各柱間は、6尺×6尺×7尺を意識したものと判断される。これに、梁行の11.5尺が加わることとなる。

柱穴は、桁行方向に沿って楕円形に掘り込まれており、重複のためP1，3は一部を確認したのみであるが、大きさはほぼ同程度の大さきと判断される。P4は、堀4により南側を切られた状況を呈している。個々の柱穴径は、第40表に示した。

出土遺物としては、カワラケ、内耳土器、陶磁器、管玉などが検出されているが、数量としてはごく少量で、管玉（*Na*255)以外は全て小破片である。

第40表　第39号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考	PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ				東西径	南北径	深　さ		
P 1	0.56	0.48	0.57	楕円形		P 5	1.40	0.84	0.64	楕円形	
2	0.90	0.58	0.51	楕円形		6	1.08	0.60	0.59	長方形	
3	0.68	0.60	0.51	楕円形		7	1.36	0.80	0.64	楕円形	
4	1.00	0.94	0.45	楕円形		8	1.28	0.78	0.30	楕円形	

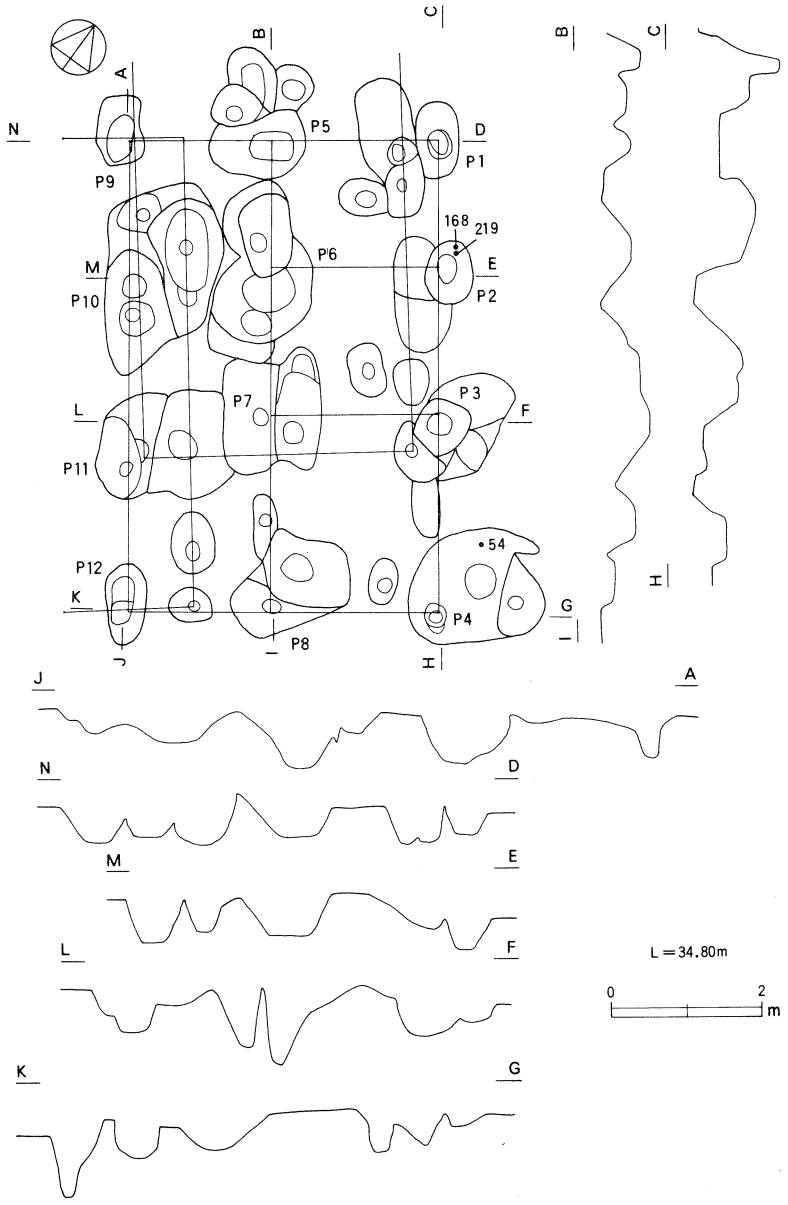
第40号掘立柱建物址（第46図、第41表）

本建物址は、Ｉ郭の北西部で第38号掘立柱建物址の東側に位置し、第26号掘立柱建物址と重複している。本建物址は、桁行３間で梁行１間の身舎と、桁行３間梁行１間の廂部から出来ており、全体では、桁行が３間で梁行は２間となり、長方形をなす建物址である。方位は、Ｎ－36°－Ｗである。

大きさは、建物址全体では桁行が３間で6.27m（20.7尺）を計測し、梁行は２間で4.08m（13.6尺）を計測する。これを身舎と廂に分けると、桁行は同様であるが梁行は身舎で2,19mの7.3尺となり、廂部分で1.89mの6.3尺となる。この数値から、梁行の柱間は７尺×６尺と判断される。身舎桁行３間の柱間は、西側（Ｐ１，２とＰ５，６間）が1.68mで5.6尺あり、中央（Ｐ２，３とＰ６，７間）が1.95mで6.5尺あり、東側（Ｐ３，４とＰ７，８間）が2.64mで8.8尺となり、5.5尺×6.5尺×９尺を意識した構造と推定される。廂部の桁行柱間は、東側と西側では異なった柱穴配置をしている。東側は、身舎と同様であるが、西側は中央が広くなっている。Ｐ９～10間は、1.95mで6.5尺を計測し、Ｐ10～11間は2.37mで7.9尺を計測し、Ｐ11～12間は1.95mで6.5尺を計測する。

柱穴は、重複関係が著しく柱穴底部以外確認出来なかった柱穴も存在するが、円形と楕円形をなしている。大きさでは、中央（Ｐ５～８）の柱穴が大きく掘り込まれている。深さは、ほぼ一定しているようであり、平面と合わせると比較的しっかりした建物址と判断される。個々の柱穴径は、第41表に示した。

出土遺物は、土師器片、内耳片、カワラケ片等が出土したのみである。



第46図　第40号掘立柱建物址実測図

第41表　第40号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ		
P 1	1.00	0.58	0.34	楕円形	
2	0.84	0.66	0.40	楕円形	
3	0.76	0.72	0.48	楕円形	
4	0.34	0.30	0.54	楕円形	
5	0.88	1.30	0.39	楕円形	
6	1.10	0.70	0.44	楕円形	

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ		
P 7	1.52	0.68	0.66	楕円形	
8	0.70	1.24	0.46	楕円形	
9	0.94	0.64	0.53	楕円形	
10	0.50	0.48	0.60	楕円形	
11	1.10	0.62	0.42	楕円形	
12	1.10	0.54	0.52	楕円形	

第41号掘立柱建物址（第47図、第42表）

本建物址は、Ｉ郭の北西部で、第40号掘立柱建物址と重複している。桁行が３間で、梁行は１間の長方形をなす建物址で、方位をＮ－49°－Ｗに有している。

本建物址の大きさは、桁行が３間で6.69m（22.3尺）を計測し、梁行は１間で3.60m（12.0尺）を計測する。桁行３間の柱間は、西側（Ｐ１，２とＰ５，６間）が1.50mで5.0尺あり、中央（Ｐ２，３とＰ６，７間）が1.80mで6.0尺あり、東側（Ｐ３，４とＰ７，８間）が3.39mで11.3尺を各々計測する。この計測値から、桁行の柱間は５尺×６尺×11尺であったと判断され、東側が広い構造となっていることが知られる。

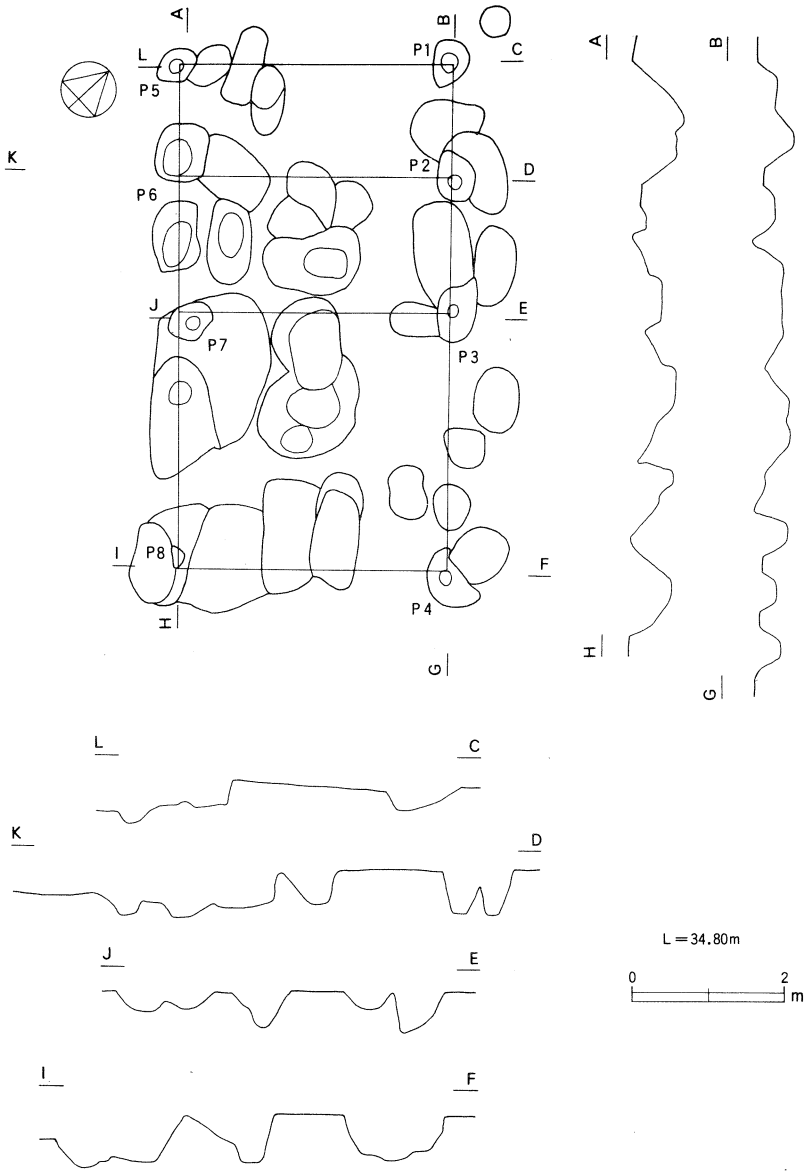
柱穴は、他の柱穴と重複している部分が多く単独の柱穴は、Ｐ１のみである。個々の柱穴径は第42表に示したが、比較的小型の柱穴が中心である。

出土遺物は、何ら出土しなかった。また、柱穴内の覆土は、ローム＝ブロックを主体とした土層で、一部黒色土と黒褐色土が柱穴底付近で認められた程度で、柱痕と判断される土層は認められなかった。

第42表　第41号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ		
P 1	0.60	0.48	0.27	楕円形	
2	0.66	0.50	0.44	楕円形	
3	0.90	0.50	0.47	楕円形	
4	0.80	0.62	0.43	楕円形	

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ		
P 5	0.60	0.44	0.30	楕円形	
6	0.80	0.64	0.22	楕円形	
7	0.48	0.52	0.24	楕円形	
8	1.30	0.74	0.07	楕円形	



第47図　第41号掘立柱建物址実測図

第42号掘立柱建物址（第32図、第43表、図版10）

本建物址は、Ⅰ郭の中央北側に位置し、第22号掘立柱建物址と重複しており、身舎と廂部より構成されている。桁行は4間で、梁行は1間である。廂は、東側と南側に付設されており、西側が広い部屋となっている。方位は、N－45°－Eである。

大きさは、身舎は桁行が4間で7.56m（25.2尺）あり、梁行はP1～P5（P4～P8まで)間で3.60m（12.0尺）を計測し、梁行西側（P9～10間）が4.50m（15.0尺）を各々計測する。廂は、東側が狭く0.33m（1.1尺）で南側が0.93m（3.1尺）を、各々計測する。

桁行4間の柱間は、P1，2とP5，6間は2.13mで7.1尺あり、P2，3とP6，7間が1.45mで4.8尺あり、P3，4とP7，8間が1.53mで5.1尺あり、P8，9とP10,11間が2.40mで8.0尺を計測することから、桁行は7尺×5尺×5尺×8尺の構成で、中央2部屋が狭い構成である。梁行は、12尺と15尺であるため、広い構成となっている。

柱穴は、重複関係が著しいものの楕円形と円形状を呈する柱穴が中心であり、深さは個々の柱穴により異なっているが、北側の柱穴は他の柱穴より比較的しっかりした掘り込みである。

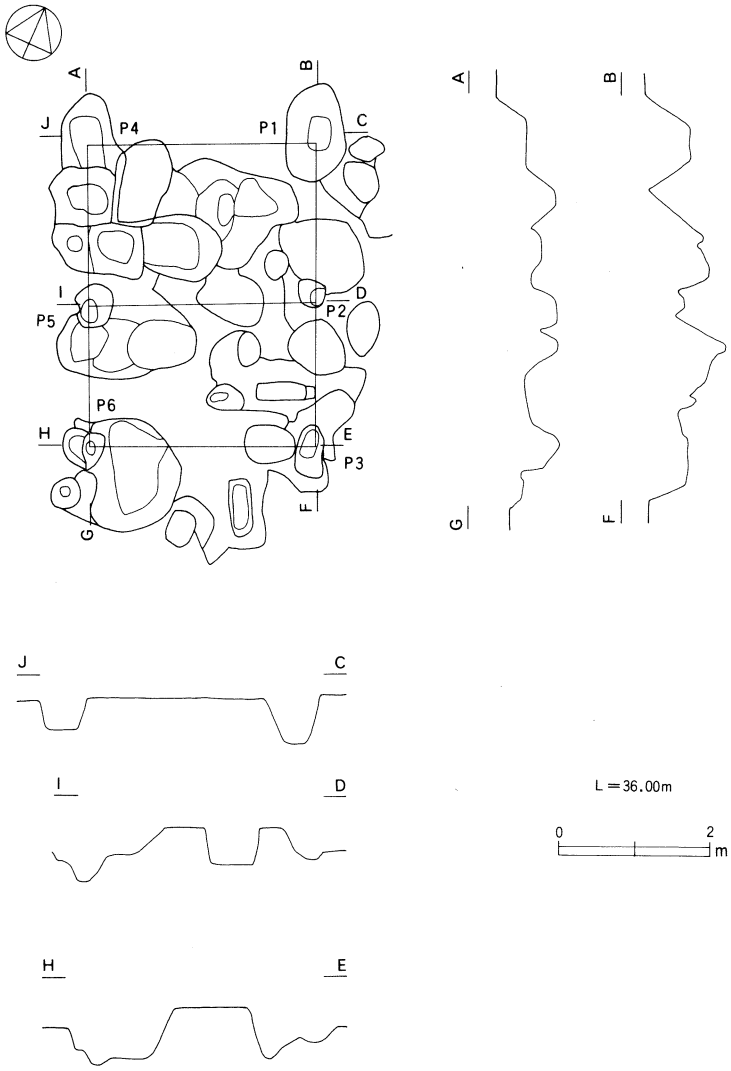
出土遺物は、何ら出土しなかったが、第42号掘立柱建物址より古い時期の建物址と判断される。なお、個々の柱穴径は第43表に示した。

第43表　第42号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形 状	備 考	PNO	大き さ(m)			形 状	備 考
	東西径	南北径	深 さ				東西径	南北径	深 さ		
P1	1.06	0.76	0.28	楕円形		P8	0.50	0.40	0.23	楕円形	
2	0.84	0.64	0.44	楕円形		9	1.18	0.80	0.22	楕円形	
3	1.36	0.78	0.56	楕円形		10	0.78	0.40	0.38	楕円形	
4	0.94	0.90	0.45	楕円形		11	1.34	0.34	0.49	楕円形	
5	1.06	0.80	0.24	楕円形		12	0.40	0.34	0.37	楕円形	
6	0.98	0.50	0.34	楕円形		13	1.04	0.50	0.24	楕円形	
7	0.80	0.44	0.53	楕円形							

第43号掘立柱建物址（第48図、第44表、図版11）

本建物址は、Ⅰ郭の北東部に位置しており、桁行は2間で梁行が1間の建物址で、長方形をなしている。方位は、N－24°－Wである。大きさは、桁行が2間で4.02m（13.4尺）を計測し梁行は1間で3.00m（10.0尺）を計測する。桁行2間の柱間は、西側（P1，2とP4，5間）が2.10



第48図　第43号掘立柱建物址実測図

mで7.0尺を計測し、東側（Ｐ２，３とＰ５，６間）が1.92mで6.4尺を計測する。この計測値から、桁行×梁行の柱間は７尺×６尺×10尺となり、西側の部分が広い構造となっている。

各柱穴は、重複関係が著しいため掘り込み面で確認された柱穴は、Ｐ１，４，５の３柱穴である。また、単独といえる柱穴は確認されなかった。各柱穴は、楕円形状を呈するものがほとんどで、深さは各柱穴により一定ではない。個々の柱穴に関しては、第44表に示した。

出土遺物は、Ｐ１，４，６より少量の土師器片と内耳土器小片が検出された程度で、図示可能な遺物は出土しなかった。

第44表　第43号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形状	備考	PNO	大き さ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深 さ				東西径	南北径	深 さ		
Ｐ１	1.30	0.75	0.60	楕円形		Ｐ４	1.00	0.80	0.41	楕円形	
2	0.36	0.32	0.24	楕円形		5	0.58	0.45	0.50	楕円形	
3	0.70	0.32	0.52	楕円形		6	0.50	0.30	0.57	楕円形	

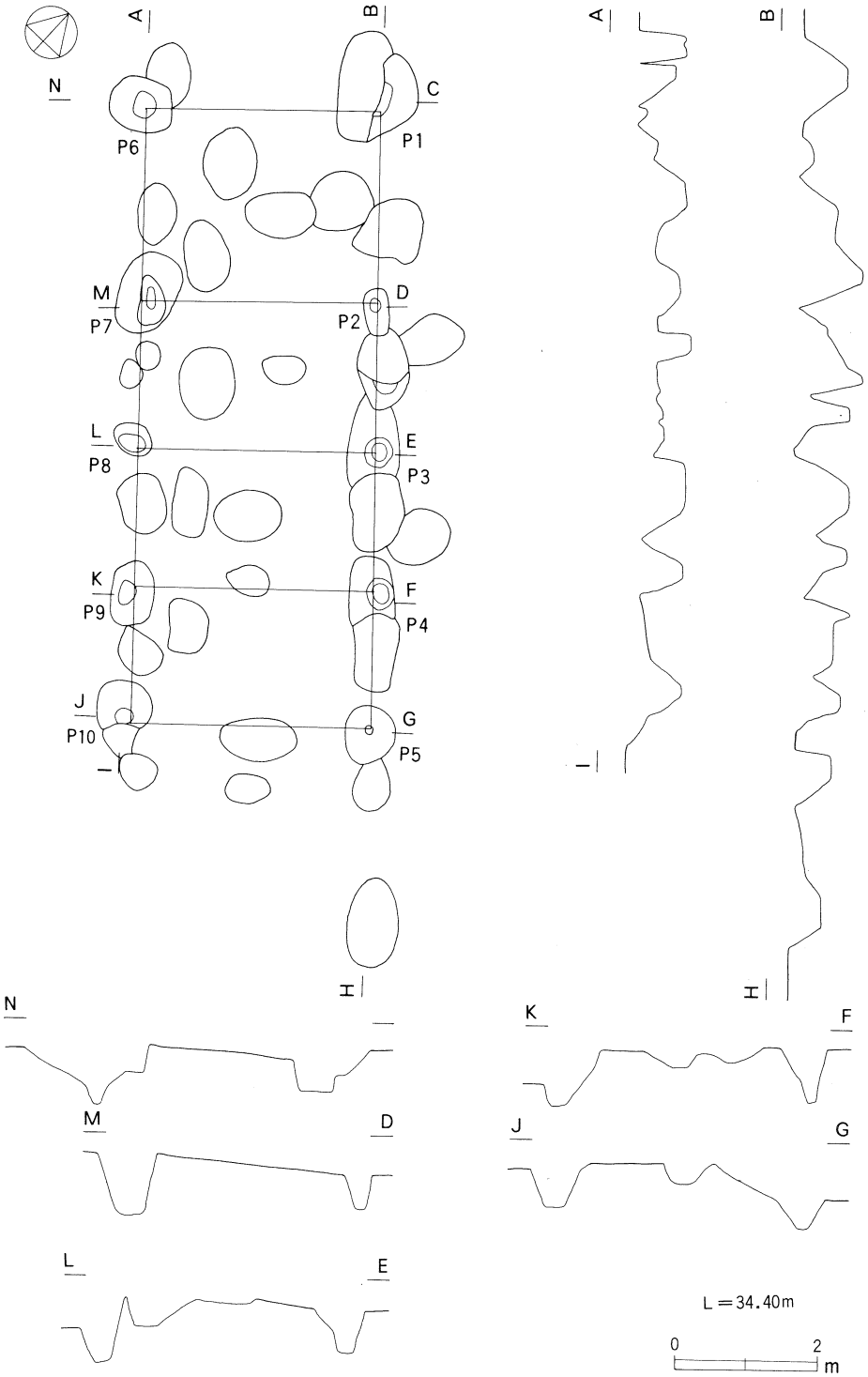
第44号掘立柱建物址（第49図、第45表）

本建物址は、Ｉ郭の中央南東側で第30号掘立柱建物址と重複しており、桁行が４間で梁行１間の長方形をなす掘立柱建物址である。方位は、Ｎ－43°－Ｗである。

本址の大きさは、桁行が４間で8.67m（15.6尺）を計測し、梁行は１間で3.30m（11.0尺）を計測する。桁行４間の柱間は、Ｐ１，２とＰ６，７間が3.69mで12.3尺あり、Ｐ２，３とＰ７，８間では2.10mで7.0尺あり、Ｐ３，４とＰ８，９間では1.95mで6.5尺あり、Ｐ４，５とＰ９，10間では1.92mで6.4尺を各々計測する。この計測値から、桁行の桁間は12尺×７尺×6.5尺×６尺であったと判断され西側の部分（Ｐ１，２とＰ６，７間）が広い構造となっている。

柱穴は、第30号掘立柱建物址と重複しているため、桁行北側の柱穴（Ｐ１～５）とＰ10の一部を消失しているが、楕円形をなす柱穴が中心である。楕円形の柱穴以外では、Ｐ６，８，10の３柱穴が円形状を呈している。大きさは、個々の柱穴により異なっているが、ほぼ一定である。柱穴としては、北側の柱穴がしっかりした柱穴である。柱穴内の土層は、ローム＝ブロック主体の黄褐色土であり、ごく一部に黒色土、黒褐色土を含んでいる。個々の柱穴径は第45表に示した。

出土遺物としては、各柱穴内より何ら出土しなかった。



第49図　第44号掘立柱建物址実測図

第45表　第44号掘立柱建物址柱穴一覧表

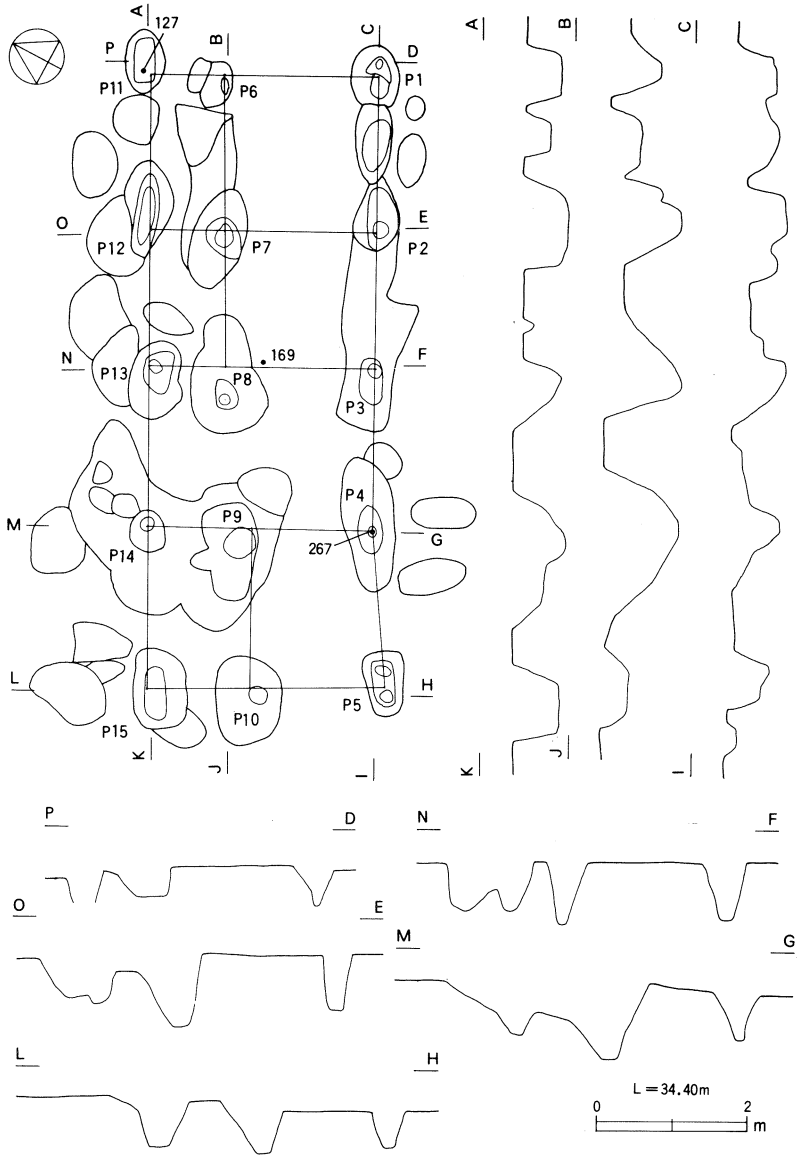
PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考	PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ				東西径	南北径	深　さ		
P 1	1.04	0.65	0.45	楕円形		P 6	0.88	0.78	0.44	楕円形	
2	0.64	0.40	0.36	楕円形		7	1.10	0.80	0.74	楕円形	
3	0.42	0.40	0.58	楕円形		8	0.48	0.45	1.20	楕円形	
4	0.45	0.38	0.74	楕円形		9	0.86	0.60	0.54	楕円形	
5	0.80	0.70	0.29	楕円形		10	0.90	0.58	0.46	楕円形	

第45号掘立柱建物址（第50図、第46表）

本建物址は、Ｉ郭の南東部に位置し、桁行４間（8.22m、27.4尺）、梁行２間(3.03m、10.1尺で、Ｎ－63°－Ｅに方位を有し長方形をなす掘立柱建物址である。桁行の北側１間は、廂に相当する部分と判断されるが、廂部南側の柱穴線（Ｐ６～Ｐ10）はＰ９までで、Ｐ10には通らずＰ９とＰ10間でこれ以東とは別の用途をなす部分と判断される。よって、本建物址はＰ１～Ｐ４及びＰ６～Ｐ９までの部分と、Ｐ４と５及びＰ９と10の部分とに分かれ、これに北面廂（Ｐ６～Ｐ10及びＰ11～Ｐ15までの部分）が付属することとなる。

柱間で見ると、桁行では東側から2.10mで７尺（Ｐ１，２～Ｐ６，７）、1.80mで６尺（Ｐ２，３～Ｐ７，８）、2.16mで7.2尺（Ｐ３，４　～Ｐ８，９）、2.10mで７尺（Ｐ４，５～Ｐ９，10）となり、７尺と６尺の柱間となる。梁行では、１間で2.04mの6.8尺となり、ほぼ７尺の柱間として建てたようである。梁行のＰ４～Ｐ９は、1.60m（Ｐ９～Ｐ４）と1.80m（Ｐ10～Ｐ５）となり、５尺×６尺の柱間となる。　廂は、桁行が各柱間と同じで７尺×６尺×７尺×７尺となる。梁行は、0.96mの3.2尺であるため３尺廂であると判断される。また、西側のＰ９～Ｐ14とＰ10～Ｐ15間は1.36mで4.5尺となる。

このように、本建物址はＰ４～Ｐ14を境として区分されるようである。なお、個々の柱穴径は第46表に示した。また、出土遺物はＰ４より須恵器高台付坏が出土している。



第50図　第45号掘立柱建物址実測図

第46表　第45号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考	PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ				東西径	南北径	深　さ		
P 1	0.80	0.66	0.50	楕円形		P 9	1.10	0.74	0.95	楕円形	
2	0.92	0.60	0.64	楕円形		10	1.20	0.90	0.49	楕円形	
3	0.60	0.30	0.65	楕円形		11	0.88	0.54	0.46	楕円形	
4	1.80	0.68	0.63	長方形		12	1.30	0.48	0.40	長方形	
5	0.90	0.48	0.45	楕円形		13	1.06	0.66	0.52	楕円形	
6	0.60	0.38	0.40	楕円形		14	0.56	0.46	0.71	楕円形	
7	1.38	0.70	0.82	楕円形		15	1.08	0.70	0.64	楕円形	
8	1.10	0.78	0.76	楕円形							

第46号掘立柱建物址（第51図、第47表、図版10）

本建物址は、Ｉ郭の中央西側に位置し、桁行２間で梁行２間の正方形をなす建物址である。方位は、Ｎ－62°－Ｗである。建物址の大きさは、桁行が２間で3.60m（12.0尺）あり、梁行は２間で3.36m（11.2尺）を計測し、桁行が梁行より0.8尺長くなっている。

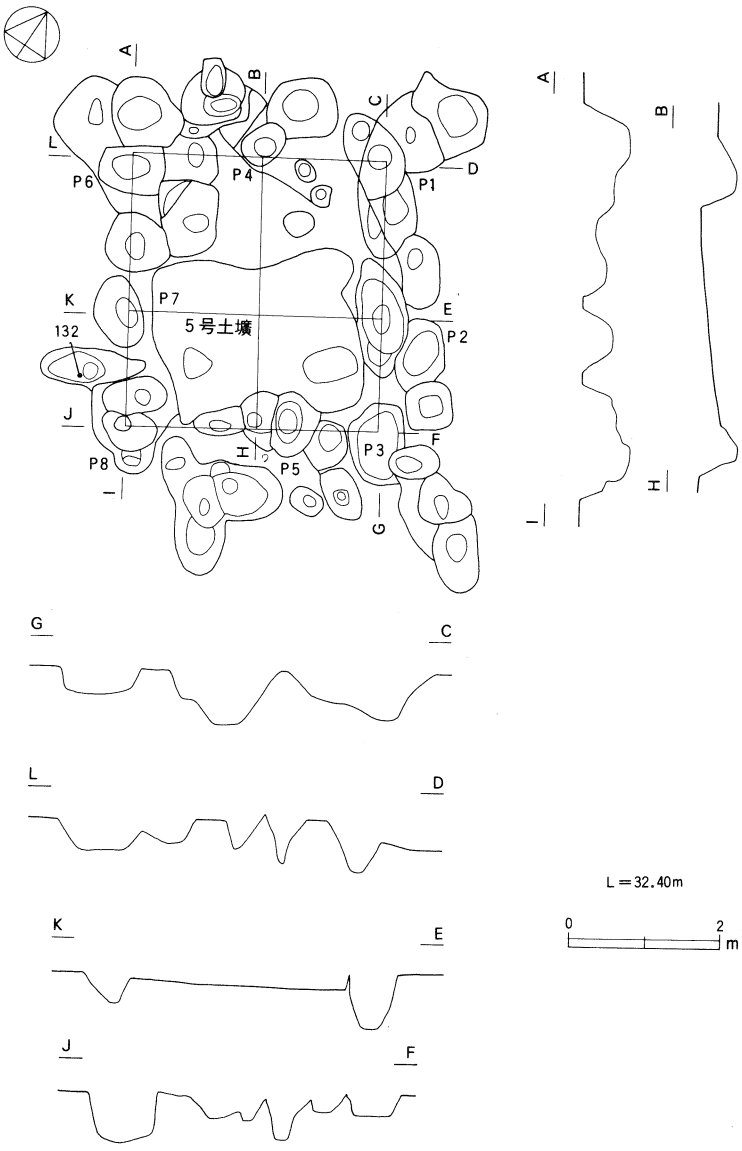
各柱間径は、桁行西側（Ｐ１，２とＰ６，７間）は2.10mで7.0尺あり、東側（Ｐ２，３とＰ７，８間）が1.50mで5.0尺を計測する。梁行は、北側（Ｐ１，４とＰ３，５間）が1.62mで5.4尺あり、南側（Ｐ４，６とＰ５，６間）は1.74mで5.8尺を計測する。このように、本建物址は西側が広く東側が狭い構造であり、柱間径を見ても広い部分は７尺間であるのに対し、狭い柱間は５尺～5.8尺と６尺以下の柱間径である。なお中央の柱は、確認されなかった。

柱穴は、土壙、柱穴等の重複関係が著しく、単独な柱穴はＰ７のみである。柱穴の平面形は、楕円形が中心で、大きさと深さは一定していない。個々の柱穴径は第47表に示した。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。

第47表　第46号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考	PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ				東西径	南北径	深　さ		
P 1	1.05	0.54	0.61	楕円形		P 5	0.55	0.40	0.44	楕円形	
2	1.40	0.70	0.74	楕円形		6	0.64	0.88	0.41	楕円形	
3	1.10	0.74	0.32	楕円形		7	0.96	0.64	0.41	楕円形	
4	0.55	0.50	0.38	楕円形		8	0.72	0.46	0.63	楕円形	



第51図　第46号掘立柱建物址実測図

第47号掘立柱建物址　（第52図、第48表、図版12）

本建物址は、Ｉ郭の南西部で、堀４（旧堀）内西側土橋の東側に位置している。大きさは、桁行２間（3.93mで13.1尺）で、梁行１間（3.36mで11.2尺＋12.4尺）であり、ほぼ正方形をなす建物址である。方位は、Ｎ－41°－Ｗである。

桁行２間の柱間はＰ1,2とＰ4,5間が2.10mで７尺あるが、Ｐ２,３とＰ５、６間ではＰ３が北側に突出して配置されているため異なった数値を示している。Ｐ２,３間は、1.80mで６尺となり、直線だと1.79mであるため６尺の柱間であったものと判断される。また、Ｐ５,６間も1.80mで６尺の柱間である。

梁行１間は、Ｐ１と４及びＰ２と５は同じ3.36mの11.2尺であるが、Ｐ３が北側に突出していることからＰ３,６間は3.72mで12.4尺となり0.36mの1.2尺広くなっている。

以上の結果から、本建物址は桁行が７尺＋６尺で、梁行が11尺＋12.4尺の規模を有する建物址ということとなる。

各柱穴は、円形か楕円形をなしており、その大きさも各柱穴により異なっている。柱穴内の土層は、黒色土と黒褐色土が主体で柱痕部の周囲に埋め込まれている。柱痕部は、明るく柔質な黒褐色土が堆積しており、21cm（７寸）程度である。個々の柱穴径は、第48表に示した。

出土遺物としては、きわめて少量でＰ１,３,６の３柱穴より、少量の土師器小片、カワラケ小片が検出された程度である。

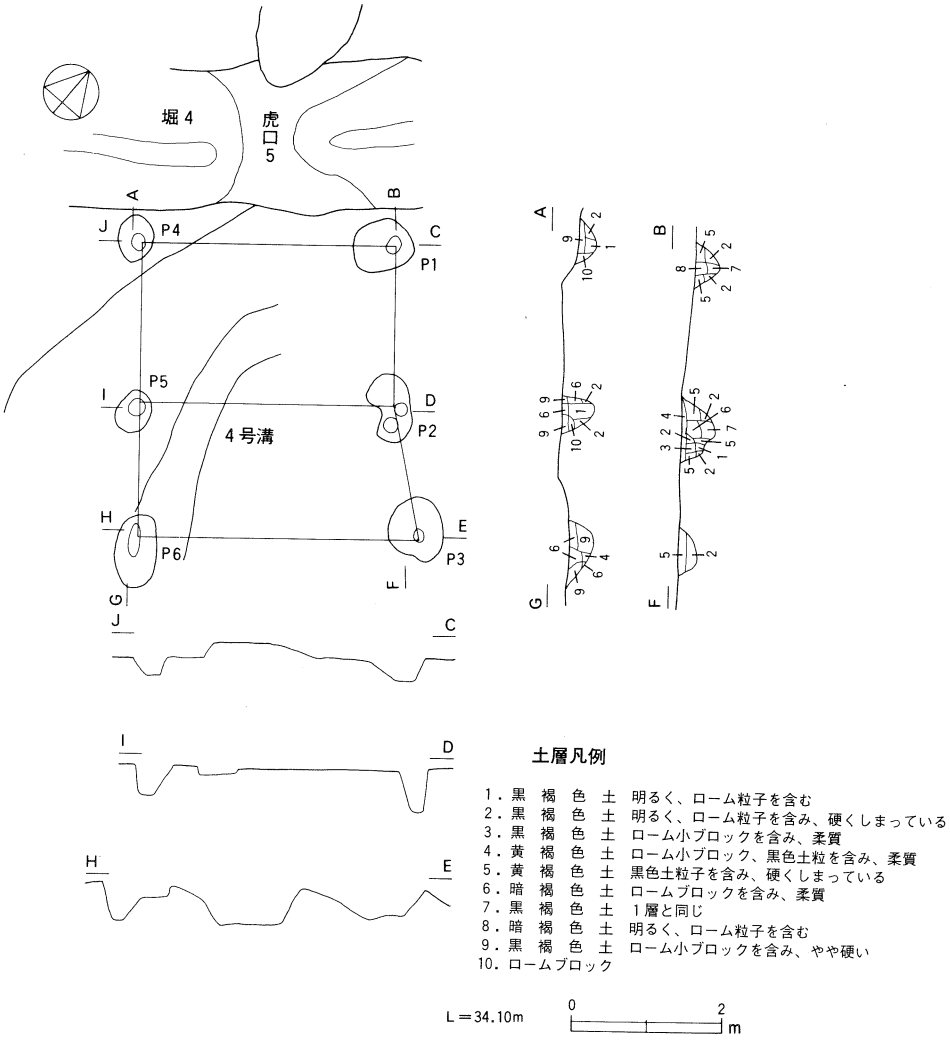
第48表　第47号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考	PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ				東西径	南北径	深　さ		
Ｐ１	0.80	0.70	0.31	楕円形		Ｐ４	0.62	0.46	0.43	楕円形	
2	0.92	0.42	0.50	楕円形		5	0.56	0.50	0.43	楕円形	
3	0.86	0.72	0.32	楕円形		6	0.96	0.56	0.49	楕円形	

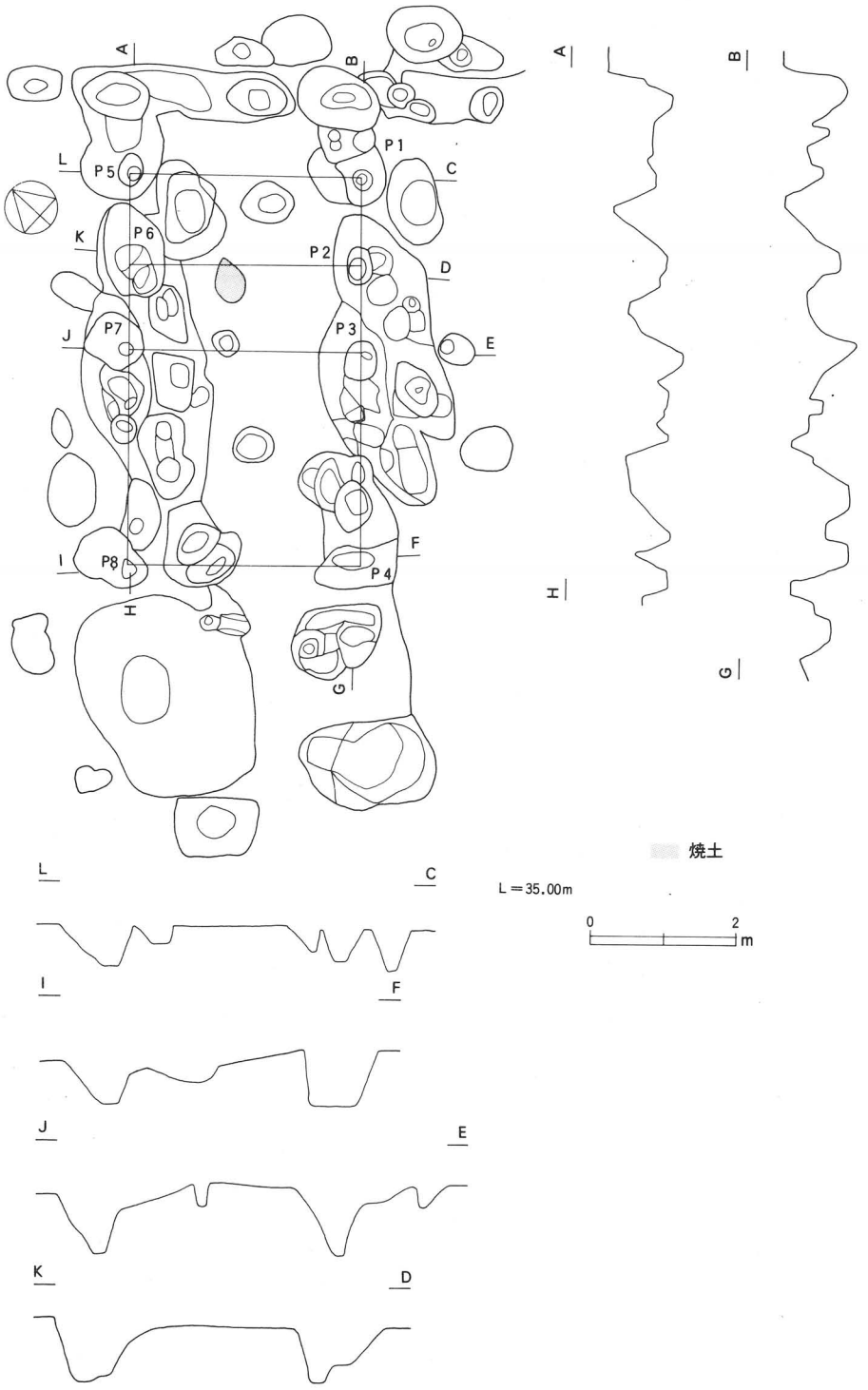
第48号掘立柱建物址（第53図、第49表、図版10）

本建物址は、Ｉ郭の中央西側で、第８号掘立柱建物址の西側に位置し、池状遺構と接している。大きさは、桁行が３間で5.37m（19.7尺）あり、梁行は１間で3.18m（10.6尺）を計測し、方位をＮ－48°－Ｅに有し、長方形をなす建物址である。

各柱間径は桁行が３間で梁行が１間であるため、桁行の柱間を計測する。桁行東側（Ｐ１,２



第52図　第47号掘立柱建物址実測図



第53図　第48号掘立柱建物址実測図

～Ｐ５,６）は1.20mで４尺を計測し、同中央（Ｐ３,４ ～Ｐ６,７）が1.20mで４尺を計測する。桁行南側は、東側や中央より広く2.97mで9.9尺を計測する。そうすると、桁行は４尺＋４尺＋10尺の柱間であったと判断され、これに梁行の10.6尺が加わることとなる。このように、本建物址は、西側に広い部室を設けた構造である。

柱穴は、多くの柱穴が複雑に重複しているため、正確な柱穴径を計測し得るのはＰ８のみである。個々の柱穴径は、第49表に示した。

出土遺物としては、内耳片、土師片などが少量ながら出土している。

第49表　第48号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形状	備考	PNO	大き さ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深 さ				東西径	南北径	深 さ		
Ｐ１	0.70	0.60	0.55	楕円形		Ｐ５	0.44	0.36	0.59	楕円形	
2	0.54	0.36	0.76	楕円形		6	0.85	1.23	0.75	楕円形	
3	0.56	0.44	0.95	楕円形		7	0.80	0.80	0.84	楕円形	
4	0.57	1.04	0.63	楕円形		8	1.00	0.80	0.62	楕円形	

第49号掘立柱建物址（第54図、第50表、図版10）

本建物址はＩ郭の中央部に位置しており、北側と南側には廂を有している。また、東側と西側には付設の建物址がある。身舎は、桁行が４間で梁行は３間である。廂は、桁行が４間で梁行は１間である。東側に付設する建物址は、桁行が３間で梁行は１間であり、西側は桁行が２間で梁行が１間となるが、北側には身舎の北側廂が延びている。本建物址は、Ｎ－38°－Ｗに方位を有し、長方形をなす建物址である。

身舎の大きさは、桁行が４間で10.50m（35.0尺）あり、梁行は３間で5.61m（18.7尺）を各々計測する。桁行の柱間径は、Ｐ１,２とＰ６,７間が2.88m（9.6尺）あり、Ｐ２,３とＰ７,８間が1.77m（5.9尺）あり、Ｐ３,４とＰ８,９間が1.80m（6.0尺）あり、Ｐ４,５とＰ９,10間が4.08m（13.6尺）を、各々計測する。梁行は、Ｐ１,12とＰ５,６間が1.80m（6.0尺）あり、Ｐ12,13とＰ16,17間が1.89m（6.3尺）あり、Ｐ13,６とＰ17,10間が1.92m（6.4尺）を各々計測する。この計測値から、身舎は9.5尺×６尺×６尺×13.5尺＋６尺×６尺×6.5尺を意識したようであり、Ｐ３,４とＰ８,９間の１間を境として東側と西側に広い部屋（広間）を配置している。廂は、北側で桁行が10.59m（35.3尺）で、梁行は1.68m（5.6尺）を計測する。北側廂の柱間径は、Ｐ20～22が身舎と一致しないのみで、Ｐ18～20間は身舎と同一柱間径である。Ｐ20～22間は、3.75m

(12.5尺) +2.15m (7.1尺) を計測する。梁行は、1.68m (5.6尺) である。南側廂は桁行が身舎と同一径であるものの、梁行は異なった数値を有している。東側のP10,27間では、1.44m (4.8尺) であるのに対し中央西側 (P17,24間) が1.32m (4.4尺) で狭くなっており、西側 (P 6 , 23間) は1.71m (5.7尺)と広くなっている。

身舎に付設した建物址は、東側が桁行3間で梁行1間の建物址である。桁行は、3間で5.40m (18.0尺) あり、梁行は1間で3.90m (13.0尺) を各々計測する。桁行の柱間は、各々、1.80m (6.0尺) を計測する。西側は、桁行が2間で4.08m (13.6尺) あり、梁行は1間で2.40m (8.0尺) を計測する。北側には、廂が延長されている。

本建物址の柱穴は、ほぼ桁行方向に沿って円形又は楕円形状に掘り込まれており、柱穴の大きさと深さは重複関係や構作等により、上面を破壊された柱穴も所在している。個々の柱穴径は、第50表に示したが、建物址全体の構成からしっかりした建物址と判断される。

出土遺物としては、P 6 , 16, 24, 32などから陶磁器 (No.45)、擂鉢 (No.119)、カワラケ (No.159、160、165) などが検出されている。これ以外では、図示不能であるが内耳土器小片、カワラケ片なども検出されている。

第50表　第49号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形 状	備 考	PNO	大き さ(m)			形 状	備 考
	東西径	南北径	深 さ				東西径	南北径	深 さ		
P 1	0.86	0.58	0.52	楕円形		P18	1.00	0.76	0.41	楕円形	
2	0.50	0.48	0.47	楕円形		19	1.08	0.62	0.47	楕円形	
3	1.00	0.56	0.53	楕円形		20	0.36	0.30	0.39	楕円形	
4	1.20	0.64	0.60	円 形		21	0.80	0.40	0.70	楕円形	
5	1.24	1.20	0.65	楕円形		22	1.13	0.54	0.43	楕円形	
6	0.86	0.84	0.72	楕円形		23	0.62	0.50	0.40	楕円形	
7	0.52	0.46	0.55	楕円形		24	0.72	0.60	0.37	楕円形	
8	0.60	0.58	0.18	楕円形		25	0.86	0.70	0.84	楕円形	
9	0.88	0.78	0.37	楕円形		26	0.32	0.24	0.28	楕円形	
10	1.30	1.00	0.63	楕円形		27	1.34	0.86	0.82	楕円形	
11	0.60	0.56	0.39	楕円形		28	1.10	0.94	0.69	楕円形	
12	1.14	0.64	0.42	楕円形		29	1.20	0.80	0.73	楕円形	
13	0.60	0.50	0.54	楕円形		30	1.02	0.72	0.87	楕円形	
14	0.40	0.38	0.49	楕円形		31	1.16	0.72	0.22	楕円形	
15	0.90	0.58	0.47	楕円形		32	0.60	0.44	0.22	楕円形	
16	1.23	0.77	0.76	楕円形		33	1.20	0.70	0.82	楕円形	
17	1.00	0.90	0.50	楕円形		34	0.66	0.58	0.26	楕円形	

第50号掘立柱建物址（第55図、第51表、図版10）

本址は、Ｉ郭の中央西側で堀４の西側コーナー付近に位置し、第34号建物址と重複している。桁行は３間で、梁行が１間の建物址でＮ－47°－Ｗに方位を有し、長方形をなしている。大きさは、桁行径が東側と西側では異なっており、西側がやや短くなっている。桁行東側は、5.85m（19.5尺）で西側が5.55m（18.5尺）を、各々計測する。梁行は、１間で4.20m（14.0尺）を計測する。

桁行３間の柱間径は、Ｐ１，２とＰ５，６間ではＰ５，６間が短くなっている。Ｐ１，２間は1.92m（6.4尺）であるのに対し、Ｐ５，６間は1.55m（5.5尺）であり約0.30mほど短かい。Ｐ２，３とＰ６，７間は2.10m（7.0尺）を計測し、Ｐ３，４とＰ７，８間は1.80m（6.0尺）を各々計測する。

柱穴は、重複により各柱穴の一部又は1／2程度を切られている柱穴が多く、桁行方向に沿って掘り込まれているが、楕円形、正方形、長方形などと一定していない。柱穴内には、ロームブロック主体の黄褐色土を埋土としている。個々の柱穴径は、第51表に示した。

出土遺物としては、各柱穴内よりカワラケ、内耳土器などの小破片が検出されたのみで、図示可能の遺物は出土しなかった。

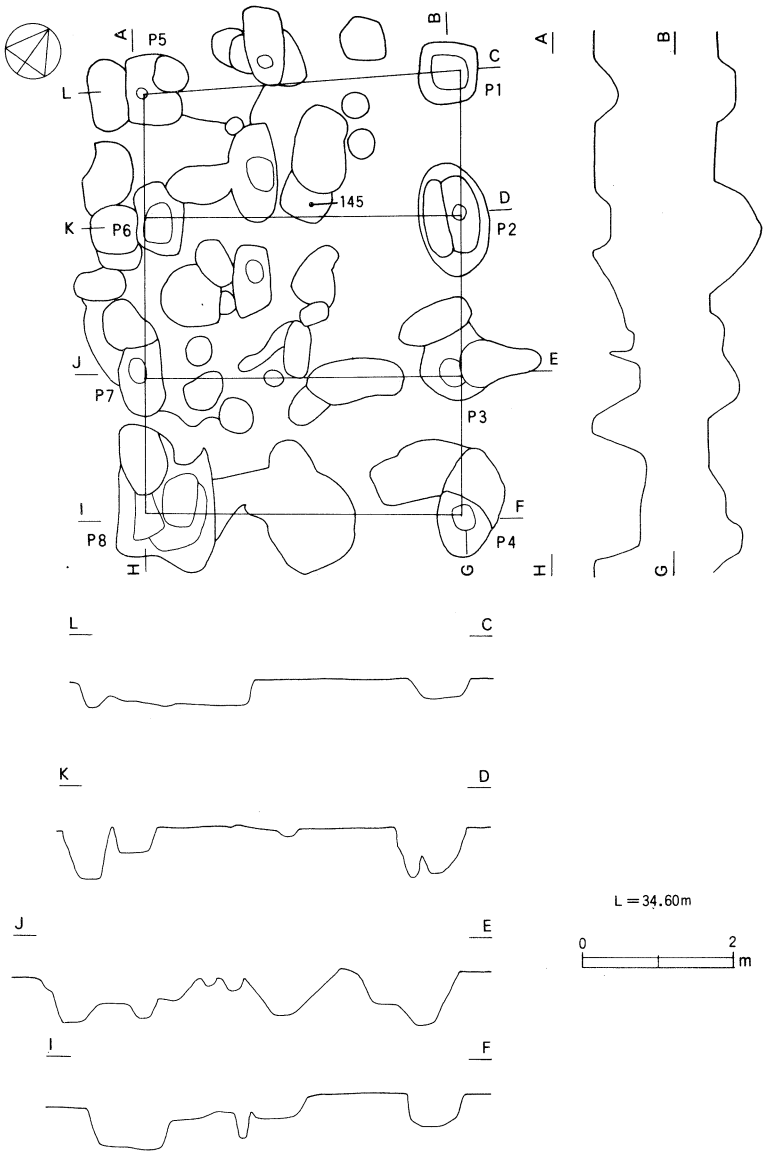
第51表　第50号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形状	備考	PNO	大き さ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深 さ				東西径	南北径	深 さ		
Ｐ１	0.84	0.80	0.28	楕円形		Ｐ５	0.96	0.70	0.38	楕円形	
2	1.50	0.96	0.63	楕円形		6	0.95	0.64	0.30	楕円形	
3	0.90	0.50	0.57	楕円形		7	0.92	0.60	0.63	楕円形	
4	0.80	0.70	0.52	楕円形		8	(1.22)	(0.68)	(0.52)	楕円形	

第51号掘立柱建物址（第43図、第52表）

本建物址は、Ｉ郭の中央部で第８号掘立柱建物址の北西方向に位置している。桁行３間、梁行１間で、長方形をなしＮ－47°－Ｗに方位を有し、長方形をなしている。

大きさは、桁行北側が5.88mで19.6尺あり、同南側は5.58mで18.6尺を計測する。桁行北側のＰ１が、南側より0.30m（１尺）西側に突出しているため、桁行北側が南側より長くなっている。桁行の柱間では、西側が（Ｐ１，２～Ｐ５，６）1.92m（6.4尺）×1.55m（5.5尺）であり、中央



第55図　第50号掘立柱建物址実測図

部分（Ｐ２，３～Ｐ６，７）が2.13mで7.1尺あり、南側（Ｐ３，４～Ｐ７，８）は1.86m（6.2尺）を各々計測する。梁行は、4.20mで14尺を計測する。この計測値から、本建物址は６尺＋７尺＋６尺＋14尺の柱間を有する建物址と判断されるが、梁行を桁行と比較するならば、梁行が広い建物址である。

柱穴は、各柱穴により形状、大きさ、深さ等は、一定していない。Ｐ１は正方形状を呈しているが、Ｐ２，４，７等は楕円形状を呈しており、Ｐ３は円形状を呈している。このように、個々の柱穴に統一性は見られない。各柱穴の大きさは、第52表に示した。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。

第52表　第51号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形状	備考	PNO	大き さ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.50	0.34	0.35	楕円形		Ｐ４	0.60	0.52	0.41	楕円形	
2	0.58	0.56	0.51	楕円形		5	0.60	0.40	0.51	楕円形	
3	0.80	0.70	0.42	楕円形		6	0.60	0.50	0.49	楕円形	

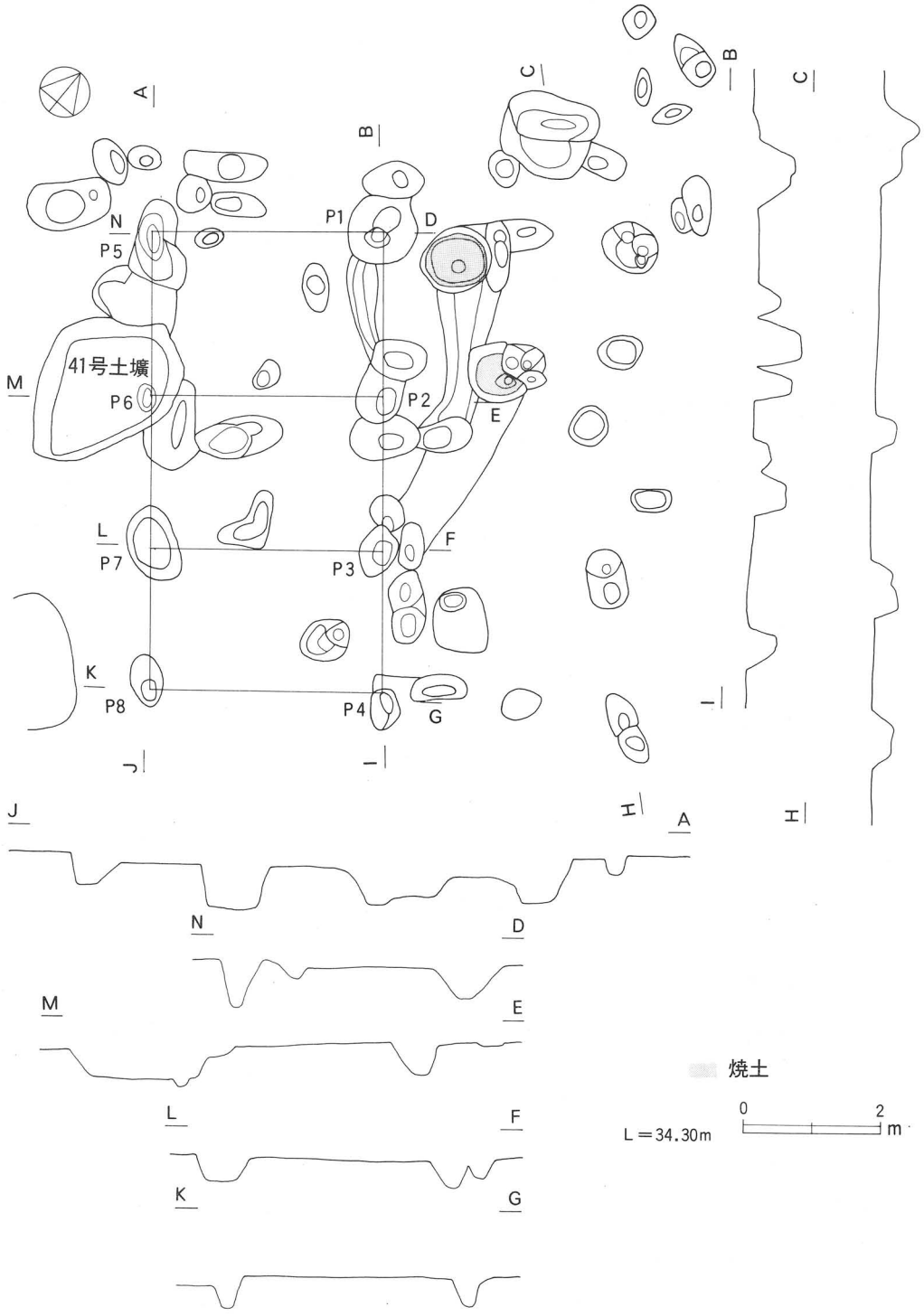
第52号掘立柱建物址（第56図、第53表）

本建物址は、Ｉ郭の南西部で第８号掘立柱建物址の南西部に位置し、第35号掘立柱建物址と重複している。大きさは、桁行が２間（4.41mで14.7尺）で梁行が１間（3.60mで12尺）の長方形をなす建物址である。方位は、Ｎ－45°－Ｅで東西方向を向いている。Ｉ期では、Ｉ郭の北西部に相当する。

桁行２間の柱間は、東側（Ｐ１，２～Ｐ４，５間）柱間は2.28mで7.6尺を計測し、西側（Ｐ２，３～Ｐ５，６）柱間が2.10mで７尺を計測し、東側がやや広くなっているが同程度の柱間と判断される。この計測値から本建物址は、7.6尺＋7.0尺＋12.0尺の柱間径を有する建物址で、桁行より梁行が広くなっている建物址である。

個々の柱穴は、第35号掘立柱建物址の柱穴や、その他の柱穴などと重複しているため、各柱穴径を正確に計測できるのは２本（Ｐ４，５）のみである。個々の柱穴径は、第53表に示した。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。



第56図　第52号掘立柱建物址実測図

第53表　第52号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形 状	備　　考	PNO	大き さ(m)			形 状	備　　考
	東西径	南北径	深 さ				東西径	南北径	深 さ		
P 1	1.04	1.00	0.48	楕円形		P 5	1.24	0.60	0.62	楕円形	
2	0.70	0.68	0.55	楕円形		6	0.40	0.28	0.54	楕円形	
3	0.70	0.56	0.42	楕円形		7	1.10	0.80	0.51	楕円形	
4	0.60	0.44	0.42	楕円形		8	0.76	0.50	0.45	楕円形	

第53号掘立柱建物址（第57図、第54表）

本建物址は、Ｉ郭の中央部で第８号掘立柱建物址の北東部に位置している。大きさは、桁行が３間で5.43m（18.1尺）あり、梁行は１間で3.54m（11.8尺）を計測し、Ｎ－45°－Ｅに方位を有する建物址で、東西方向を向いている。

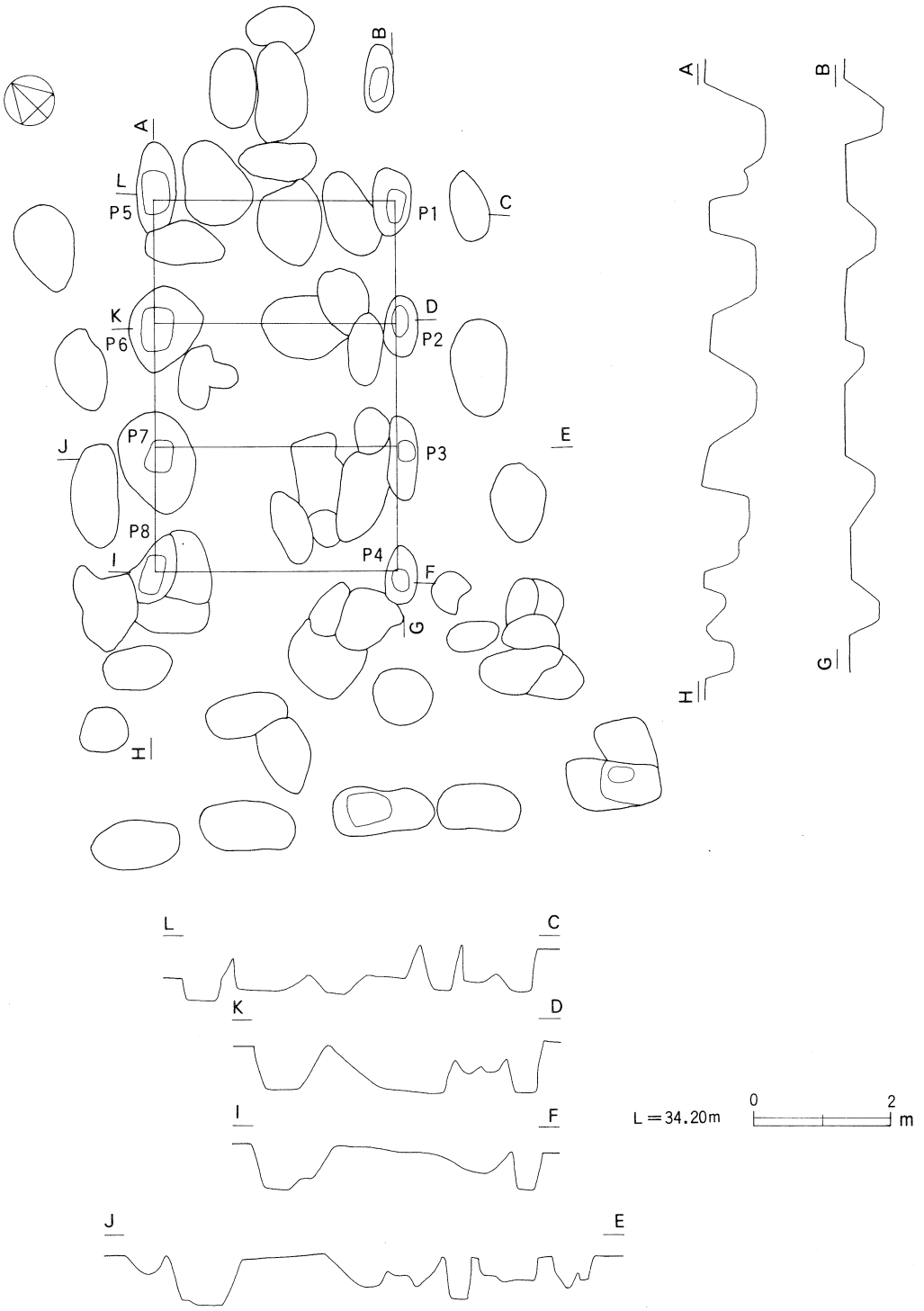
各柱間径は、桁行が３間で梁行が１間であるため、桁行の柱間径を記述する。桁行東側の柱間（Ｐ１，２～Ｐ５，６）は、1.80mで６尺を計測し、中央（Ｐ２，３～Ｐ６，７）が1.80mで６尺を計測する。西側の柱間（Ｐ３，４～Ｐ７，８）が、1.83、mで6.1尺を計測する。よって、桁行の柱間は６尺＋６尺＋６尺となり、６尺の柱間を用いていたこととなる。これに、梁行の11.8尺を加えても桁行が同一柱間であることから、本建物址はしっかりした構造であったものと判断される。

柱穴は、楕円形を呈しているが、大きさで見るならばＰ６、７が大きく、Ｐ１～４が小さい柱穴である。建物址全体では、北側の柱穴（Ｐ５～８）が大きく、南側の柱穴（Ｐ１～４）が小さな柱穴を用いている。これは、本建物址の用途等に起因する点であろうか。個々の柱穴径に関しては第54表に示した。

出土遺物としては、何ら出土しなかった。

第54表　第53号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形 状	備　　考	PNO	大き さ(m)			形 状	備　　考
	東西径	南北径	深 さ				東西径	南北径	深 さ		
P 1	0.98	0.60	0.54	楕円形		P 5	1.28	0.56	0.74	楕円形	
2	0.90	0.50	0.53	楕円形		6	1.18	1.10	0.66	楕円形	
3	1.24	0.40	0.53	楕円形		7	1.50	1.10	0.69	楕円形	
4	0.90	0.44	0.49	楕円形		8	0.88	0.70	0.69	楕円形	



第57図　第53号掘立柱建物址実測図

第54号掘立柱建物址（第58図、第55表）

本址は、Ⅰ郭の中央西側で、堀４の西側コーナーの南側に位置し、第34、50号建物址と重複している。桁行が２間で、梁行は１間で長方形をなし、Ｎ－36°－Ｗに方位を有する建物址である。大きさは、桁行が２間で3.30m（11.0尺）あり、梁行は１間で3.75m（12.5尺）を各々計測する。

桁行２間の柱間径は、Ｐ１，２とＰ４，５間が1.65m（5.5尺）あり、Ｐ２，３とＰ５，６間は1.65m（5.5尺）を、各々計測することから、等間隔の部屋構成であったと判断される。これに、梁行の12.5尺が加わり、5.5尺×5.5尺＋12.5尺の建物址となる。

柱穴は、桁行に沿って掘り込まれている。柱穴の形状としては、楕円形状を呈する柱穴が中心となっているものの、Ｐ６は梁行で掘り込まれている。大きさでは、Ｐ３が他柱穴より大きく、掘り込まれているのみで、他はほぼ同程度の大きさを有している。個々の柱穴径は第55表に示した。

出土遺物としては、内耳土器、カワラケ、土師器片などが柱穴内より出土したが、図示の出来たのは、Ｐ１内検出の内耳土器（№81）のみである。

第55表　第54号掘立柱建物址柱穴一覧表

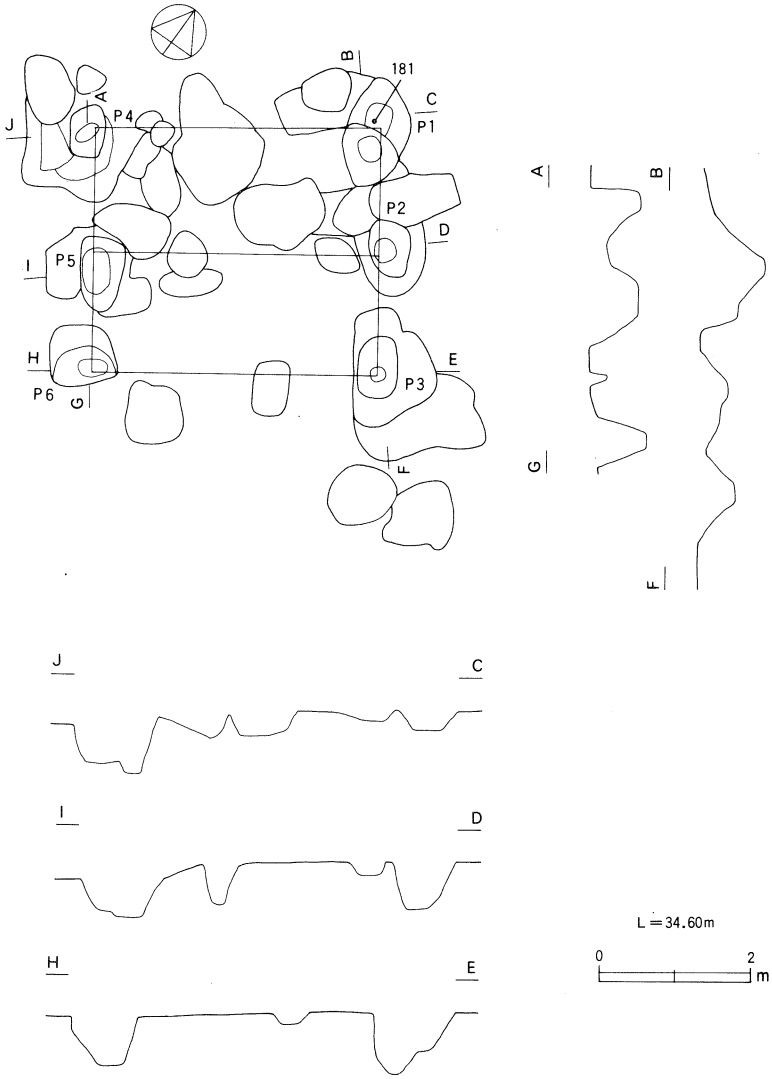
PNO	大き さ(m)			形状	備考	PNO	大き さ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
Ｐ１	0.80	0.70	0.52	楕円形		Ｐ４	0.96	0.06	0.66	楕円形	
2	1.00	0.88	0.44	楕円形		5	1.00	0.60	0.57	楕円形	
3	1.56	1.10	0.64	楕円形		6	0.88	0.70	0.65	楕円形	

第55号掘立柱建物址（第59図、第56表）

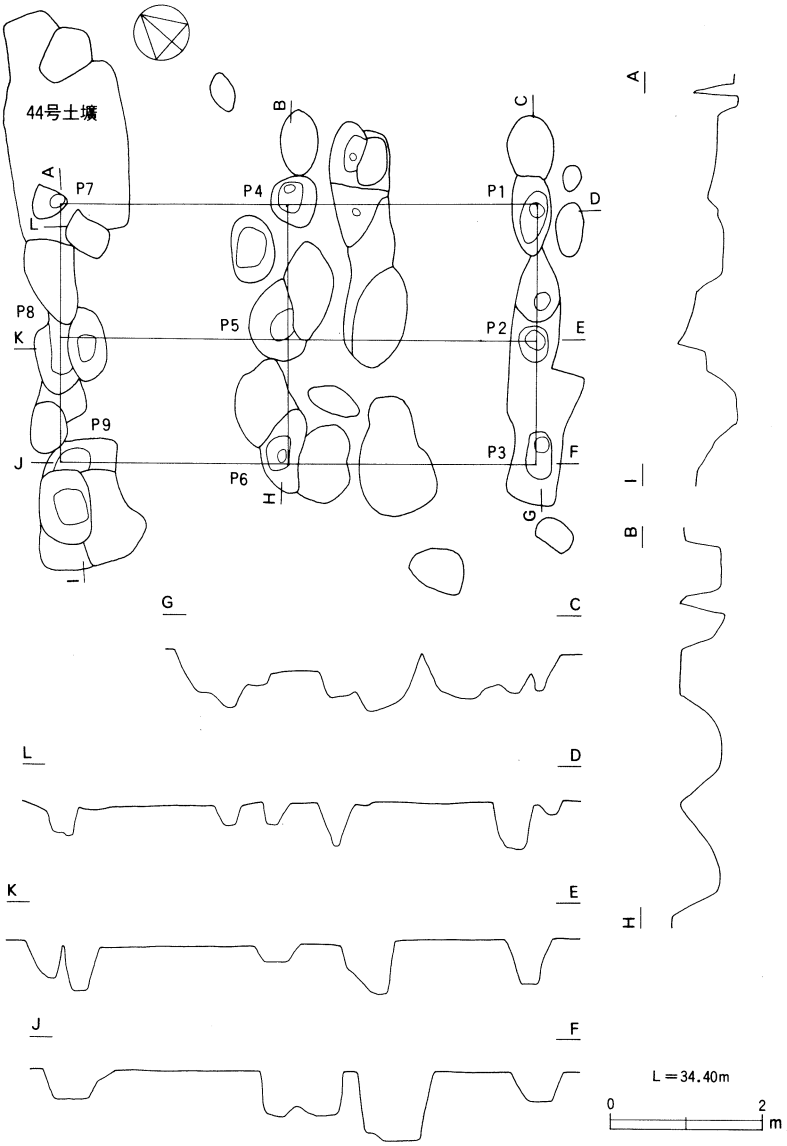
本址は、Ⅰ郭の南西部で池跡の南側に位置し、第35、56号建物址と重複している。桁行が２間で、梁行は２間の建物址であるが、東西方向に長軸を有している。方位は、Ｎ－41°－Ｗで長方形をなしている。大きさは、桁行が２間で6.30m（21.0尺）あり、梁行は２間で3.45m（10.5尺）を各々計測する。

桁行と梁行の柱間径は、桁行がＰ１，４～Ｐ３，６間は3.30m（11.0尺）あり、Ｐ４，７～６，９間が3.00m（10.0尺）を各々計測し、梁行はＰ１，２～Ｐ７，８間が1.80m（6.0尺）Ｐ２，３とＰ８，９間は1.65m（5.5尺）を各々計測する。

柱穴は、梁行（南北方向）に沿って掘り込まれており、円形や楕円形をなしているが、重複関



第58図　第54号掘立柱建物址実測図



第59図　第55号掘立柱建物址実測図

係が著しいため、一部又は1／2 程度を掘り切られた柱穴もある。柱穴内の埋土はロームブロック主体の黒褐色土である。個々の柱穴径は、第59表に示した。

出土遺物は、何ら出土しなかった。

第56表　第55号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大き さ(m)			形状	備考	PNO	大き さ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深 さ				東西径	南北径	深 さ		
P 1	1.08	0.52	0.60	楕円形		P 6	1.00	0.52	0.59	楕円形	
2	0.50	0.40	0.51	楕円形		7	0.50	0.40	0.48	楕円形	
3	0.60	0.32	0.43	楕円形		8	0.90	0.46	0.50	楕円形	
4	0.70	0.60	0.40	楕円形		9	0.90	0.40	0.40	楕円形	
5	1.00	0.60	0.39	楕円形							

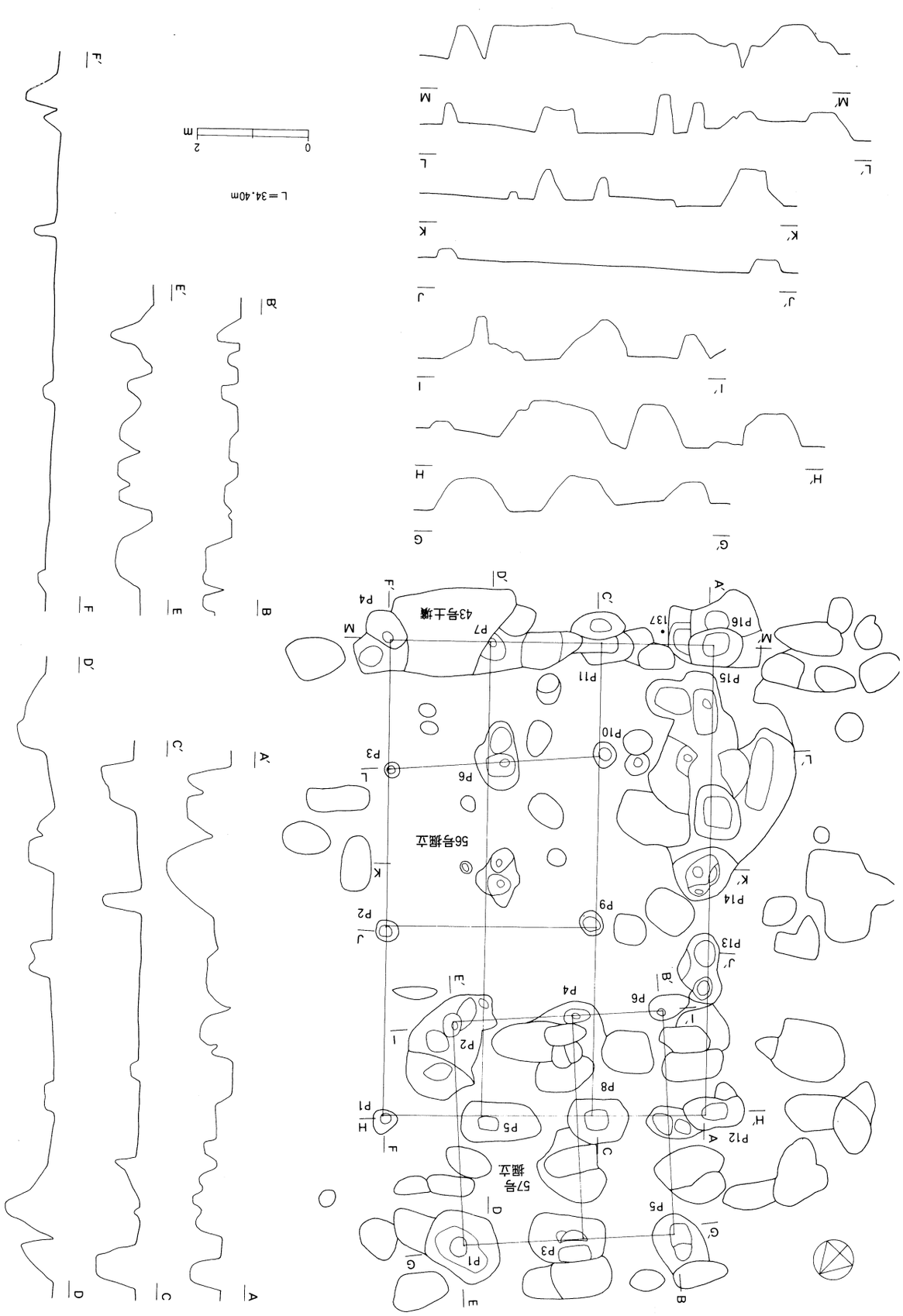
第56号掘立柱建物址（第60図、第57表）

本址は、Ｉ郭の南西コーナー部に位置し、第55、57号建物址と重複している。本址は、身舎が桁行３間、梁行２間で、南面に廂を有する建物址で、方位をＮ－44°－Ｗに有している。身舎は、桁行が３間で梁行は２間の長方形で、廂は桁行が４間で梁行は１間である。全体での大きさは、桁行が３間で8.61m（28.7尺）あり、梁行は３間で5.85m（19.5尺）を各々計測する。身舎の梁行は２間で3.78m（12.6尺）である。柱穴線では、身舎のＰ３～10間が斜めになっているがこの部分は１部屋となるものと判断される。

身舎の柱間径は、Ｐ１，２とＰ８，９間が2.40m（8.0尺）あり、Ｐ２，３間が2.82m（9.4尺）でＰ９，10間が3.09m（10.3尺）となり、南側が0.9尺広くなっている。Ｐ３，４間は2.34m（7.8尺）で、Ｐ10，11間が2.04m（6.8尺）となり、中央間とは逆に北側が1.0尺広くなっている。以上が、桁行の各柱間径である。梁行は、Ｐ１～４間とＰ５～７間は1.77m（5.9尺）で、Ｐ５～７間とＰ８～11間は2.01m（6.7尺）を、各々計測する。この結果、身舎は８尺×９尺＋10尺×８尺＋７尺の桁行と、６尺×７尺の梁行で構成されていたものと判断される。

廂は、桁行（Ｐ12～16）は2.34m（7.8尺）×2.10m（7.0尺）×3.00m（10.0尺）×1.08m（3.6尺）で、梁行が2.07m（6.9尺）を計測する。東端（Ｐ15，16間）が、きわめて狭い構成となっている。

柱穴は、重複関係等により身舎の各柱穴は、その中央部以上を消失しているものが多く、残っている柱穴は楕円形をなす柱穴が中心であることから、円形と楕円形の両柱穴を使用したものと



第60図　第56・57号掘立柱建物址実測図

判断される。梁行の東側と西側は、楕円形の柱穴である。個々の柱穴径は、第57表に示した。

出土遺物は、少量のカワラケ小破片、内耳土器小破片がＰ５，７，16から出土した程度で、図示可能の遺物は出土しなかった。

第57表　第56号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考	PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ				東西径	南北径	深　さ		
Ｐ１	0.44	0.42	0.14	楕円形		Ｐ９	0.44	0.44	0.16	円　形	
2	0.40	0.40	0.18	円　形		10	0.50	0.44	0.70	楕円形	
3	0.30	0.28	0.38	楕円形		11	1.00	0.46	0.54	楕円形	
4	0.70	0.60	0.58	楕円形		12	1.10	0.56	0.52	楕円形	
5	1.44	0.70	0.77	楕円形		13	1.28	0.72	0.26	楕円形	
6	1.26	0.80	0.44	楕円形		14	1.02	0.94	0.72	楕円形	
7	0.50	0.40	0.52	楕円形		15	1.50	0.90	0.74	楕円形	
8	1.10	0.82	0.76	楕円形		16	0.98	0.70	0.62	楕円形	

第57号掘立柱建物址（第60図、第58表）

本建物址は、Ｉ郭の中央西側で、第８号掘立柱建物址の西側に位置しており、身舎と廂とから出来ている。廂は、南面廂である。大きさは、身舎が桁行３間（8.61mで28.7尺）で、梁行が２間（3.51mで11.7尺）を各々計測する。廂は１間で、桁行8.49mで28.3尺となり、身舎よりも0.4尺狭くなっている。廂の梁行は、2.01mで6.7尺を計測する。

身舎は、Ｐ３～Ｐ10を境として分かれる。西側が広く、東側が狭い構造である。また、柱穴配置は桁行の北側と南側とでは一部（Ｐ８，９）異なった配置をしているため、計測値は一定していない。身舎桁行の柱間径は、Ｐ１～２間が3.42mで11.4尺を計測し、これの南面であるＰ８～９間は3.40mで11.3尺を計測する。中央であるＰ２～３は、2.82mで9.4尺を計測し、これの南面であるＰ９～Ｐ10間は3.12mで10.4尺を計測する。桁行東側のＰ３～４間は、2.34mで7.8尺を計測し、これに対する南面のＰ10～11間は2.04mで6.8尺を計測する。身舎梁行は、２間で同じ柱間径である。身舎梁行は、北側（Ｐ１，５～Ｐ４，７間）が1.80mで6.0尺を計測し、同南側（Ｐ５，８～Ｐ７，11間）は2.00mで6.7尺を計測する。このように、身舎は桁行北側に対し南側が広い部分と狭い部分を有している。また、Ｐ２～Ｐ９間に柱穴が存在しないため、Ｐ３～Ｐ10を境として東側の部分と西側の部分に分かれるようである。

廂部は、梁行が2.04mで6.8尺を計測するのに対し、桁行は8.50mで28.3尺となるが、柱穴配置

は、不規則である。P12～13間は2.91mで9.7尺あり、P13～14間は1.50mで5.0尺あり、P14～15間は5.0尺あり、P15～16間は1.08mで3.6尺を各々計測する。廂は、中央と東側が狭く、この間が広くなっている。

柱穴は、円形、楕円形を呈する柱穴がほとんどであり、最大の柱穴はP5で最小の柱穴はP3である。また、東側の柱穴は土壙や他の柱穴と重複している。個々の柱穴径は、第58表に示した。

出土遺物としては何ら検出されていない。

第58表　第57号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大きさ(m)			形状	備考	PNO	大きさ(m)			形状	備考
	東西径	南北径	深さ				東西径	南北径	深さ		
P1	1.30	1.30	0.72	楕円形		P4	1.10	0.42	0.68	楕円形	
2	0.43	0.32	0.76	楕円形		5	0.94	0.90	0.41	楕円形	
3	1.40	0.86	0.54	楕円形		6	0.74	0.50	0.43	楕円形	

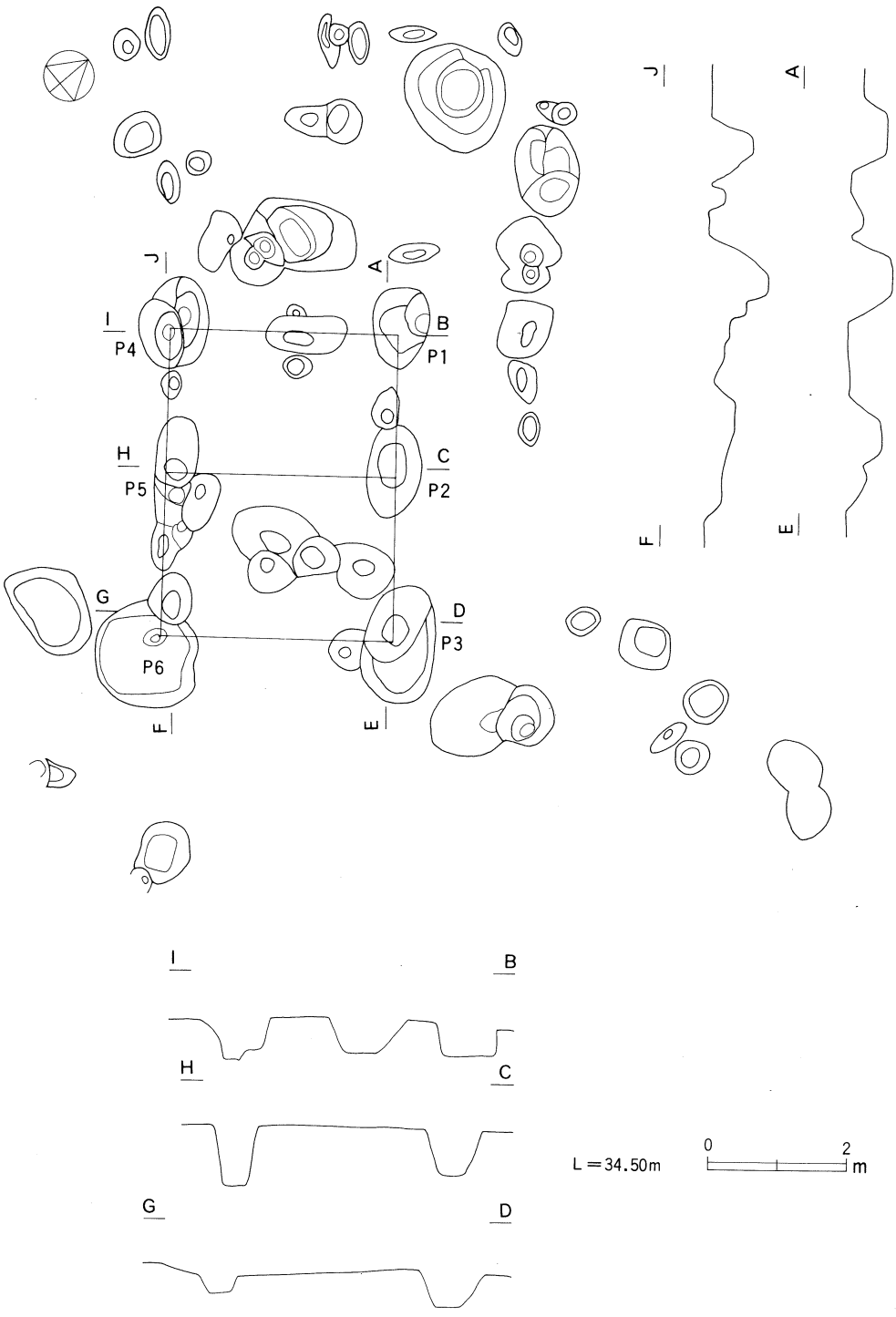
第58号掘立柱建物址　（第61図、第59表、図版9）

本建物址は、I郭の中央西側で、第57号掘立柱建物址の西側に位置し、同建物址と重複している。大きさは、桁行が1間で4.02m（13.4尺）あり、梁行は2間で3.81m（12.7尺）を各々計測し、桁行（東西方向）が梁行より、0.7尺広くなっているが、正方形をなしている建物址と判断される。方位としては、N－44°－Wである。

桁行と梁行の柱間径は、桁行が1間で4.02mの13.4尺（P1，2とP5，6間）であるが、梁行は2間である。梁行北側（P1，3とP2，4間）は、2.16mで7.2尺を計測する。梁行南側（P3，5とP4，6間）は、1.65mで5.5尺を計測し、北側が広い構造となっている。この計測値から、本建物址は、13.4尺×7.2尺×5.5尺の柱間を有する建物址となる。

柱穴は、西側の3柱穴（P1～5）は大きく深く掘り込まれており、しっかりした柱穴と判断されるが、東側の3柱穴（P2～6）は比較的小さな柱穴となっている。個々の柱穴径は、第59表に示した。

出土遺物としては、P1，2，3，5の4柱穴内より、少量の土師器坏小破片、内耳土器小破片などが検出されたが、図示可能な遺物は出土しなかった。



第61図　第58号掘立柱建物址実測図

第59表　第58号掘立柱建物址柱穴一覧表

PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考	PNO	大　き　さ(m)			形　状	備　　考
	東西径	南北径	深　さ				東西径	南北径	深　さ		
P 1	1.20	0.80	0.44	楕円形		P 5	1.00	0.60	0.87	楕円形	
2	1.30	0.80	0.64	楕円形		6	1.54	1.50	0.31	楕円形	
3	1.04	0.80	0.50	楕円形		7	0.76	0.64	0.36	楕円形	
4	0.96	0.64	0.61	楕円形							

2）　**土塁**（図版13・14）

土塁としては、Ⅰ郭、Ⅰ郭外堀外土塁、Ⅱ郭西側と南側とに所在している。Ⅰ郭の土塁は、南側、西側、北西側が高くしっかりした土塁であるが、北側中央部から北西部にかけては広いが低くなり、東側は低く小さな土塁となっている。

南側は、基底部幅6.30m（21.0尺）、上面幅1.20m（4.0尺）、高さ2.10m（7.0尺）を計測する。土塁基底部中央から、第1号堀（外堀）にかけて、第1号堀にその南側を掘り切られている第6号堀があり、この堀を埋めて土塁を構築しているため、第6号堀は旧堀である。よって、南側土塁は、第6号堀から新旧の土塁を有することとなる。旧土塁は、基底部幅3.15m（10.5尺）、上面幅0.60m（2.0尺）、高さ1.05m（3.5尺）を計測する。この計測値から、新土塁は旧土塁の2倍の大きさを有することとなる。新土塁と旧土塁は、上面が良くしまっており、北西部まで同程度の規模を有している。

西側土塁は、中央東側を破壊されているものの、補足調査部から規模を計測した。規模は、基底部幅5.44m（14.8尺）、上面幅1.20m（4.0尺）、高さ2.10m（7.0尺）を計測する。土塁は、基底部中央で確認された溝（第1号溝）を境として、異なった土盛を行なっている。まず、溝の外側に黒色土、ロームブロック、黄褐色土を用いて幅2.40m（8.0尺）、高さ1.41m（4.7尺）で土盛した後、ここの東側に溝を埋めながら黒色土、黄褐色土、黒褐色土、ロームブロック等を用いて土盛りし、現状の土塁を構築している。この第1号溝を境として、新旧が所在するようであるが、南西コーナー部土塁が未調査であるため、この調査結果を待ち結果を出したい。

西側中央部では、東側を破壊されているため、土塁の全容は不明である。確認部での規模は、長さ4.50m（15.0尺）、高さ2.04m（6.8尺）を計測することから、補足調査部分と同程度の大きさを有するものと判断される。土盛は、前者と異なりローム上に東側から順次積み上げた事を示しており、前者のように新旧関係を示すような結果は得られなかったが、土塁下溝が埋没してから土塁を構築している。

北西部から北東部にかけては、土盛状況から造改築を示しているものの南西側土塁とは、明らかに異なった土盛をしている。土塁基底部の溝（第１号溝）が、最初に掘り込まれ、この溝が埋没した後黄褐色土、黒褐色土、黒色土、暗褐色土を用いて整地し、南側に堀（第５号堀）を掘り込んでいる。そして、第５号堀を埋めながら暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土等を用いながら土塁を表土下0.30mの所まで土盛した後、外側へ土盛し新土塁を構築している。堀と溝の前後関係は北側の溝が自然埋没した状況を示し、この後に土盛されていることから、溝→堀への新旧関係が推定される。土塁の規模は、基底部幅7.80m（26.0尺）、上面幅1.80m（6.0尺）、高さ1.14m（3.8尺）を計測する。

北側の土塁は、谷頭部の東側と西側とでは多少異なるが、基本的には北西部土塁と同様である。谷頭部西側では、土塁下北側の溝（第１号溝）と、南側の堀（第５号堀）は、ローム上の黒褐色土（自然層）上面より共に掘り込まれている。北側の溝が、自然埋没した後に暗褐色土を盛土してから、粘土を厚さ0.75mと盛り北側を固めている。溝上に褐色土を盛るのと、南側の堀を埋めるのはほぼ同時限的に行われたようである。この後、暗褐色土、褐色土を用いて土塁を構築している。土塁の規模、基底部幅4.80m（16.0尺）、上面幅1.50m（5.0尺）、高さ2.10m（7.0尺）を計測する。

谷頭部東側では、谷頭西側と異なっている。堀と溝（第１号溝）の前後関係は、北側と同様である。溝は、ローム上面より掘り込まれているものの、北側は斜面となっているため黒色土と黒褐色土を盛り、ロームと同一面を構築してから溝を掘り込んでいる。この溝が、埋没した後に暗褐色土、ロームブロック、黒色土等を用いて土塁を構築したが、溝の北側よりも溝上面と南側に土盛されていることから、北側に低い土塁が存在した可能性を有している。南側の堀（第５号堀）も、埋められ新土塁基底部をなしている。土塁の新旧は、検討を要する所である。土塁の規模は基底部7.80m（26.0尺）、上面幅1.50m（5.0尺）、高さ0.99m（3.3尺）を計測する。

Ｉ郭北東部も、谷頭部西側とほぼ同様の状況である。溝と堀は、ローム上の黒色土上面より掘り込まれている。溝が埋没してから、黒色土、ロームブロック、暗褐色土、黄褐色土等を用いて盛土している。堀の部分も、同様の状況を呈しているが、新旧の土塁を示す部分は見られない。土塁の規模は、基底部幅7.50m（25.0尺）、上面幅2.10m（7.0尺）、高さ1.50m（5.0尺）を計測する。

東側の土塁は、その一部を残すのみで、その多くは破壊されているが、溝（第１号溝）の西側に土塁基底部が一部残存し、東側は斜面部にかけて盛土している。この部分は、溝がある程度自然埋没した後、幅3.30m（11.0尺）を褐色土等を用いて埋め、この後に西側と東側に盛土して土塁を築いたこととなる。西側は、6.00m（20.0尺）ある。東側は、6.84m（22.8尺）あり、高さは1.50m（5.0尺）程度である。東側の土盛は、外堀（第１号堀）上面まで暗褐色土、褐色土等を

用いて盛土している。

Ⅰ郭外土塁は、西側と北東部では黒色土（自然層）上に、黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土を用いて盛土し、土塁を構築しているが、幅に対し低い土塁となっている。基底幅は、2.85m（9.5尺）で上面幅が1.80m（6.0尺）程度であり、高さは0.45m（1.5尺）である。

北側谷頭部は、自然堆積している土層（11、15層以下）上に、砂質粘土、褐色土、茶褐色土、粘土等を用いて、固く盛土して土塁としている。盛土の高さは、1.20m（4.0尺）程度を計測する。

また、Ⅰ郭東南部は、南側開析谷に向けての斜面となっている。このためか、この部分は、南側谷地に向かい崩れている。第3層の黒褐色土は、旧表土に相当する土層で、この上面に、黒褐色土、暗褐色土、茶褐色土、砂等を第29層から順次盛土して平坦面を構築している。構築部分は長さ6.15m（20.5尺）、高さは最大で0.96m（3.2尺）を計測している。この上に、東側からの土塁が構築されている。

Ⅱ郭の土塁は、南側と西側に現存している。南側の土塁は、ローム上に暗褐色土を盛土した後に暗褐色土、黒褐色土を交互に盛土している。ローム上の暗褐色土は、良くしまり硬質であるが他の土層はあまりしまっていない。規模は、基底部3.60m（12.0尺）、上面幅1.20m（4.0尺）、高さ1.59m（5.3尺）を計測する。この部分は、保存区であるためトレンチ1本のみの調査とした。

Ⅱ郭西側土塁は、西側斜面部に築かれているため、黒褐色土（自然層）上に西側斜面より暗褐色土、ロームブロック、黒色土、粘土、黄褐色土、黒褐色土を、順次盛土して土塁を構築している。盛土の部分は、良くしまっている。土塁の規模は、基底部4.35m（14.5尺）、上面幅1.60m（5.3尺）、高さ0.90m（3.0尺）を計測する。

Ⅱ郭の土塁は、南側は平坦な地形であるため高く築き、西側は西側外堀（第12号堀）の西側とは、土塁上面から3.60m（12尺）の比高差を有することから、低い土塁でも十分防護可能と判断しての事と推察される。

3）堀（第5図、第67～70図、図版15～23）

堀は、前項で述べたようにⅠ郭とⅡ郭で確認されている。Ⅰ郭では、堀以外に溝も確認されている。Ⅰ郭の堀は、Ⅰ郭土塁外側に沿って全周する外堀（第1号堀）とⅠ郭内で西側中央部から北側に向かって掘り込まれた2本の堀（第2、3号堀）と、Ⅰ郭の南側から方形状に中央部まで掘り込まれた堀（第4号堀）と、Ⅰ郭の北側で堀2、3を切りながら西側まで掘り込まれた堀（第5号堀）と、Ⅰ郭南側土塁の南側基底部に掘り込まれた堀（第6号堀）と、Ⅰ郭北側土塁南側基底部に掘り込まれた堀（第6号堀）の、7本の堀が認められた。Ⅱ郭からは、Ⅰ郭南側に沿って直

線的に掘り込まれた堀（第７号堀)と、Ⅱ郭西側で西側外堀まで掘り込まれた堀（第８号堀)と、Ⅱ郭南側で台地を掘り切るように掘り込まれ、東側で２本に分かれている堀（第９～11号堀)と、西側外堀（第12号堀）の、合計６本の堀がⅡ郭で確認されている。

第１号堀は、Ⅰ郭土塁に沿って全周しており、西側以外に畝堀となっており西側、北側、東側の外堀にはその外側に低い土塁を築いている。堀幅は、南側で1.80m～2.20mあり、北側で1.10m～2.00mある。北側中央部が最も狭く、1.00mを計測する。東側は、1.30m～1.40mあり西側で4.00m～4.20mを計測する。深さは、Ⅰ郭南側虎口を境として東側で1.50m（東端）～1.70m（虎口東側）が平均的な深さで、東側中央部が最も深く2.20mを計測する。西側では、1.90m（虎口西側）～1.70m（北西コーナー付近）が平均で、西側中央部が最も深く2.24mを計測することから、堀１南側は幅６尺～７尺、深さ５尺～７尺の規模であったと判断される。北側では、Ⅰ郭とⅢ郭間が1.70m、谷地部分で1.50m、北東部で0.72mを計測し、東側へ進むにつれ浅くなる傾向を有しているが、Ⅰ郭からの深さではⅠ郭とⅢ郭部間が1.70m、谷地部が3.60m、北東部で3.80mを計測するため、北東部一帯はかなり高低差を有していることとなる。北東部虎口付近で0.21m、中央部で0.30m、南東コーナー部で0.50mを計測し北側同様浅い堀となっているがⅠ郭からは2.40mと3.80mとなり南東コーナーにかけて低くなり、北東部同様かなりの高低差を有している。西側では、1.70m～2.00mの深さを有している。この堀１（外堀）での差は、地形的要因によるものと判断される。つまり、Ⅰ郭とⅢ郭は34.50～35.00mの標高であるのに対し、北東部から南東部にかけては32.00m～33.00mと標高差で2.00m～2.50mの差を有していることに起因するようである。

第１号堀は、前述のように畝堀であるが、西側は畝を設けず、虎口部の畝間は、広くなっている。第１号堀の畝間は、差があり一様ではない。畝の間隔は、虎口の東側で最大が5.00mで最小が2.70mであり、3.45mと3.50mの間隔を有する部分が３ヶ所、4.00mが４ヶ所となり、東側に至るにつれ広くなっている。畝側は、最大幅が0.70mが最小幅が0.20mであり、0.70mの幅を有する畝が２ヶ所、0.55mの畝幅を有する所が３ヶ所、他は0.60mと0.30mであり、畝間の広さとは一致していない。畝高は、0.07m～0.52mの高さを有し、東端より中央部が高く造られており、0.30mから0.50m以内の高さを有する畝が多い。東側端部は、崖となっているため子細は不明である。

虎口部分は、西側で畝間が5.65mと6.25mと広くなっており、畝幅が0.25mで畝高は0.10m程度と低い畝となっている。虎口部分の畝を広くするのは、北東部虎口と同様の状況である。

虎口西側では、南西コーナー部が4.80mと広くなっており、他の部分は1.80m、1.60m、2.00m、2.10m、2.80mの広さを有し、東側より一定していない。畝幅は、ほぼ0.25m程度で畝高は虎口側が0.25mであるのに対し、コーナー部が0.30mと高くなっている。中央部は、不規則な高

さで0.07m～0.25mまでの高さを有している。

西側では、堀を畝堀としておらず一般的な箱薬研堀である。このような堀は、北側虎口付近まで続き、北側虎口が畝堀となった後、北西部まで（北側谷頭部）同様の堀を造っている。北側虎口では、4ヶ所の畝堀を造っている。畝堀幅は、1.80mと2.00mの2種類で、畝幅は0.80mと1.20mである。畝高は、西側で0.37m、東側で0.60mとなっている。このことから比較的規則性を持ちながら造られたものと判断される。

北側の畝は、谷頭部側から、1.80m、3.00m、2.85m、2.85m、3.30m、2.85m、の広さで区切られており、東側（北東部虎口）に回るにつれしだいに広くなり、虎口付近で再び狭くなる

畝幅は、0.30m、0.45m、0.60mを2ヶ所ずつ計測する。畝高は0.30m～0.60mまでの間隔を有しており、北東虎口西側の畝が高く造られている。

東側では、北東部虎口が13.80mと広く造られている。ここの両側畝は、北側で0.60m×0.36m南側で0.30m×0.40mの畝を造り出している。ここから南側にかけては、2.40m、2.80m、3.20m、3.45mとしだいに広くなっており、南東コーナー部では6.00m前後の広さを有している。畝幅は、0.24m～0.45mの幅を有し畝高は0.28mとほぼ一定している。北東虎口部から、南側にかけて狭く浅い堀となっている。

南側では、最も広く3.60m、3.90m、3.00mと3.00m以上と広く造られている。畝幅では、0.45mで畝高が0.20mとほぼ同程度の規模を有している。南東部中央以西は、不明である。

以上のように、第1号堀は北側、東側、南側に畝堀を構築し、北側から南東部にかけて一段低い所に回しており、幅と深さも狭くなっている。北側、南側、西側は、外堀として位置付けられるが、他の部分（北東部～南東部）では外堀としては、浅く狭いようで曲輪的用途をも併存したのではなかろうか。

第2号堀は、I郭の中央西側で第3号堀と併行しており、第4号堀の北西コーナーから北側中央部まで土塁と併行するように掘り込まれている。第2号堀の規模は、北側と西側では異なり西側が広く北側が狭くなっている。西側では、上面幅が1.68mで下面（堀底）幅は0.90mあり、深さが0.95mを計測する箱薬研堀である。北側では、北西部で第5号堀に切られ消滅している。北側での規模は、上面幅が1.50mで下面（堀底）幅は0.30mであり、深さが0.50mを計測している。

第3号堀は、I郭西側で第2号堀と併行しているが、北側では第2号堀と同様大きくカーブしてから北側中央部まで掘り込まれている。第3号堀の規模は、第2号堀同様北側と西側が広く北側が狭い堀となっている。西側での規模は、上面径が2.00mで下面径は0.70mが平均的な計測値であり、深さは1.00mを計測する。北側では、堀先端が浅く狭い堀となっている。中央部では、上面幅が2.00mで下面（堀底）は0.80mであり、深さは1.00mを計測する。先端部は、上面幅が0.60mで下面（堀底）は0.24mであり、深さは0.75mである。第3号堀は、第2号堀と同様第5

号堀に切られている。また、第2号堀と第3号堀間には北側内土塁（C）が所在している。

第4号堀は、前途のようにⅠ郭内で「コ」字状に掘り込まれており、西側、北側中央部、東側では同程度の規模であるが、他の部分では浅く掘り込まれている。また西側では、土橋付近が浅く掘り込まれている。

第4号堀の規模は、西側では長さ41.50m、中央部での幅は上面3.30m、下面0.15mを計測し深さは1.50m～1.80mと北西コーナーにかけて深くなっている。堀の形態としては、薬研堀といえよう。南側（虎口＝土橋付近）では、上面幅2.40m～2.50mで、下面幅0.24m～0.40mを計測し深さは、南端部で0.40mを計測し土橋の両側では0.60mを計測する。南端から、19.50m付近で堀幅は3.00m以上と広くなる。土橋部分は、掘り残しの土橋である。西側の堀は、土橋の北約9m付近からゆるやかに湾曲している。北側の堀は、中央部で南側へほぼ直角に折れ曲がっており、ほぼ直線的に掘り込まれている。中央東側では、西側よりも浅い堀となっている。中央部には堀底を利用した通路が所在している。北側堀の全長は、53.50mであり、折れ曲がる所までは27.50mで、浅くなる部分までは4.50m、折れの部分は0.15m～0.25mを、各々計測する。幅は、西側で上面幅が3.00m～3.50mで、折れ曲がってからしだいに狭くなっている。下面（堀底）幅は、西側とほぼ同様で0.15m～0.20mを計測し、深さは1.70m～1.80mでほぼ同程度の深さである。堀の形態としては、薬研堀である。東側は、上面幅が1.50m～1.00mと東端部にかけて広くなっている。下面（堀底）は、0.80m～0.90mとほぼ一定である。東側の堀は、西側の堀と異なり箱堀となっている。東側では、3.50mの部分から深くなり8.00m付近で東側へほぼ直角に折れ曲がってから東南虎口に至り、第24号建物址の南側から東側へ緩やかに曲がっている。東側での全長は、34.0m程度を計測する。上面幅は、北側（浅い部分）で1.10m～2.00mを計測し、下面（堀底）では0.50m～0.90mと、しだいに広くなっている。東側堀が深くなった部分では、上面幅が2.50mで下面（堀底）は0.15mを計測し、北側、西側と同様の状況を有している。また、第24号建物址の北側2.50m付近で深さと下面（堀底）が変化し、深さでは0.32m浅くなり幅では0.35mと広くなり、箱堀状をなしている。この状況は、第21号建物址の南側まで続いている。

第5号堀は、Ⅰ郭北西部で第3号堀と接し第2、3号堀を切りながら、土塁に沿い東側中央部まで掘り込まれている。全長は、約106.0mを計測する。堀の幅と深さは、北西部と北側と東側とでは異なっている。北西部では、上面幅が1.70mで下面（堀底）幅は0.40mで、深さが0.70mを計測する。北側では上面幅が3.50mで下面（堀底）幅は0.30mで、深さは、1.14mを計測し、薬研堀となっている。東側では、上面幅が3.30mで下面（堀底）幅は0.45mで、深さは1.25mを計測する薬研堀である。このように、第5号堀は北側から東側にかけて広く深い堀となっている。また、第5号堀の北東部には、埋めて構築した土橋が設けられている。

第6号堀は、Ⅰ郭の土塁下南側で確認された堀で、南側土塁と同じ方向で掘り込まれているが

南西コーナーから西側、北側、東側にかけては、浅い溝が所在するのみである。この第6号堀が西側土塁下の溝と接続するかは、保存区域の関係上今回調査出来なかった部分で、この問題の答えとしては今後の課題となる。第6号堀の規模は、上面幅1.65m（5.5尺）、下面（堀底）幅0.45m（1.5尺）、深さ0.85m（2.5尺）を有し箱薬研堀である。

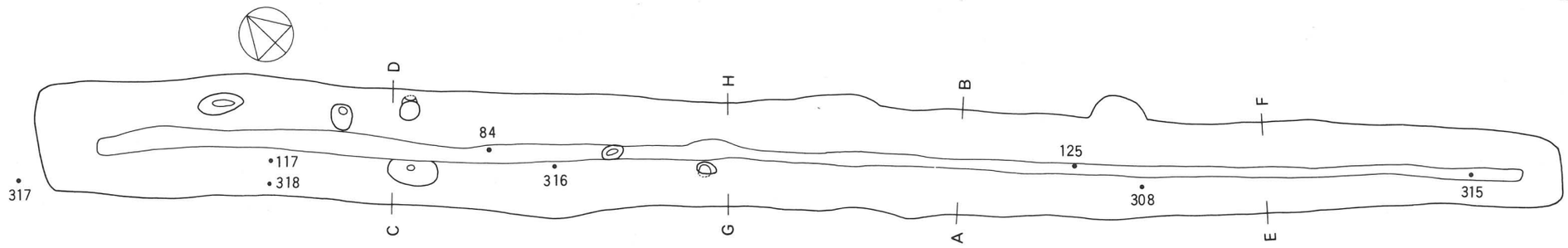
第7号堀は、Ⅱ郭の西側で第1号堀（Ⅰ郭外堀）の西側と平行するように掘り込まれている。第7号堀の規模は、長さ25.0m、上面幅は東側で1.60m、西側で2.10mを計測し、下面（堀底）幅は東側では0.15mであるが、西側では0.40mを計測し、深さはほぼ1.00mを計測する。このように、深さはほぼ同一であるのに対し、上下両面幅では西側が広くなっている。

第8号堀は、Ⅱ郭の西側で第7、9号堀の間に位置し、東側と西側とに分かれ、かつ0.50m程度西側を南側にずらして掘り込んでいる。第8号堀東側では、直線的に全長11.10mを計測し、上面幅は東側で2.64m、中央部で2.10m、西側で1.80mとしだいに狭くなっている。深さは、東側で1.90m、中央部で1.11m、西側で1.45mを、各々計測する。また、堀底は東側と西側を深く掘り下げており（東側0.67m、西側0.42m）、中央東側には長方形の落し穴を設けている。落し穴は、長さが1.20mで幅は0.44mあり、堀底からの深さは0.49mを計測する。

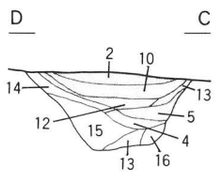
第8号堀の西側は、長さ17.10mを計測し、幅は東側で2.10m、中央部で1.80m、西側で2.10mと中央部が狭くなっている。深さは、東側で1.24m、中央部で1.10m、西側で0.60mと、西側がしだいに浅くなっている。これは第8号堀の西側は緩やかな斜面に位置するためである。また、堀底には、東側で落とし穴が設けられている。この落とし穴は、長さ1.02m、幅0.46m、深さ0.30mを計測する。第8号堀は、西側で第12号堀と接続し、この接続に第8号堀埋没後南側へ拡張し虎口を形成している。

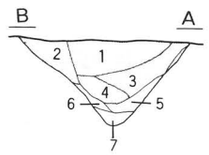
第9号堀は、Ⅱ郭の南側外堀に相当する堀で、台地を横断するように掘り込まれている。東側は、今回の調査から除外された。確認部分での規模は、西側で堀12との接続部から、この堀が第10、11号堀と分岐点までが51.0mを計測し、第10号堀は北側へ回りながら東側へ19.0m程度伸びており、第11号堀は、南側へ湾曲しながら伸びており、3.00mまで調査した。分岐点には、落とし穴が所在している。

第9号堀の幅は、分岐点西側で3.60m、中央部以西は4.32mを計測する。深さは、東側で2.00m、中央部で2.10m、西側で1.97mを各々計測する。堀底は、平坦面で畝を設けない箱薬研堀となっており、東側堀には分岐点とここの西側に1ヶ所づつ落とし穴を設けている。分岐点の落とし穴は、長さ2.40m、幅1.50m、深さ0.10mを計測し、西側は長さ0.60m、幅0.50m、深さ0.08mを、各々計測する。第10号堀は、分岐点で上面幅3.00m、下面（堀底）幅は0.60m～0.24mとしだいに狭くなっている。深さは、1.60mである。このため、第10号堀は箱薬研堀から薬研堀に変化しているものと判断される。第11号堀は、上面幅3.00m、下面（堀底）幅0.45m、深さ1.35



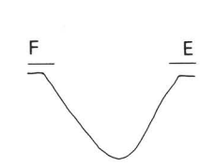
0 2 m

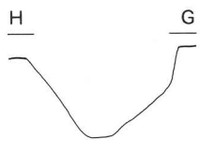




土層凡例

1. 暗　褐　色　土　粘土粒子とロームブロックを含む
2. 暗　褐　色　土　暗く粘性に富む
3. 暗　褐　色　土　ロームブロックとローム粒子を含む
4. 黒　褐　色　土　ロームブロックを含む
5. ロームブロック
6. 黒　褐　色　土　ローム粒を含む
7. 黒　褐　色　土　ローム小ブロックを含む
8. 暗　褐　色　土　ローム粒子を含む
9. 暗　褐　色　土　ローム粒を含む
10. 暗　褐　色　土　ロームブロックを含み固質
11. 黄　褐　色　土
12. 暗　褐　色　土　ローム粒子を含み固い
13. 黄　褐　色　土　ローム小ブロックを含み、ローム固質
14. 黒　褐　色　土　ローム小ブロックを含み柔質
15. 暗　褐　色　土　ロームブロックを含み柔質



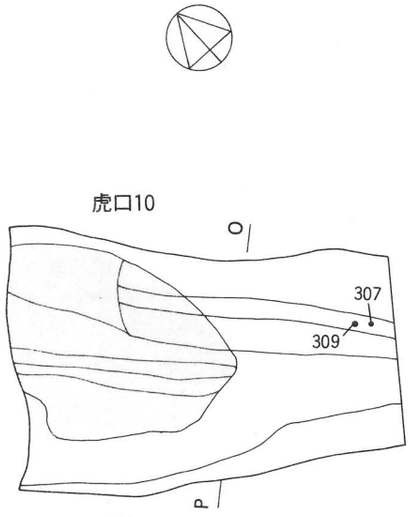


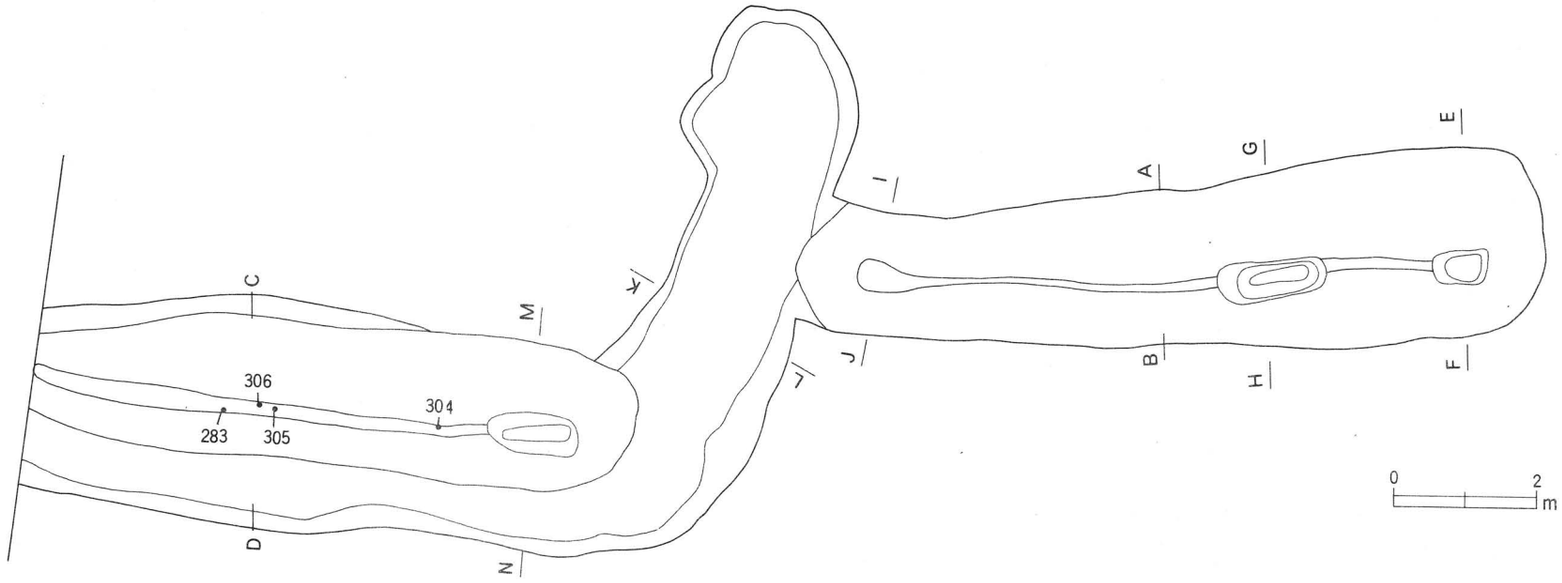
L＝34.00m

踏み固め

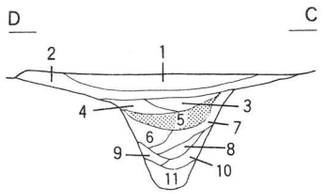
0 2 m

第67図　第７号堀実測図



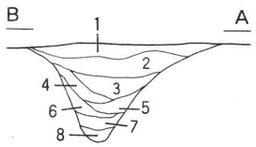


突き固め範囲



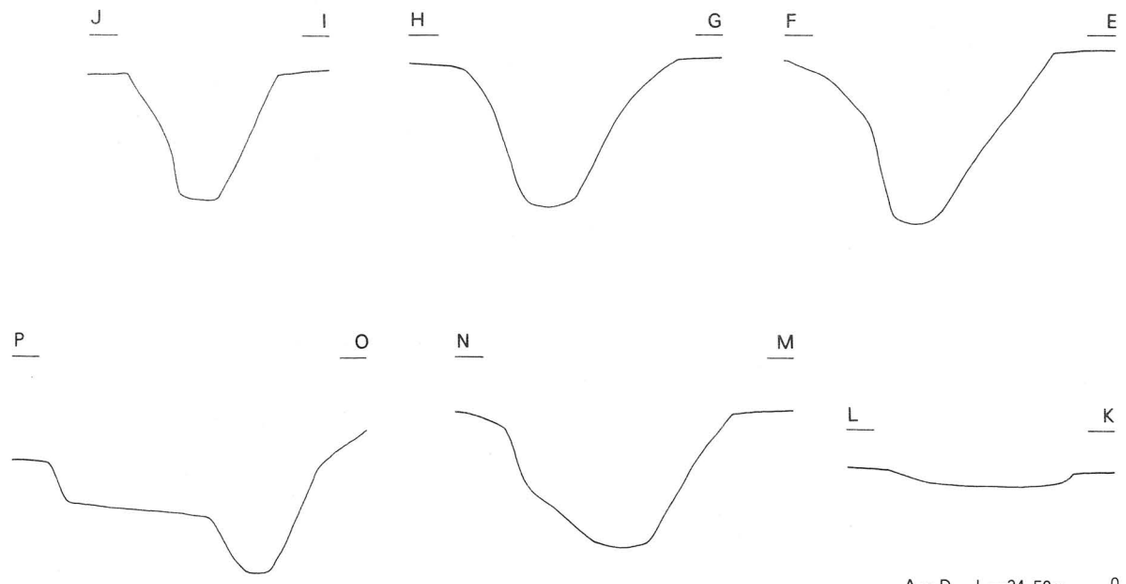
土層凡例

1. 暗褐色土　明るく、炭化物を含む
2. 暗褐色土　ロームブロックを含む
3. 暗褐色土　暗く、ローム小ブロックを含む
4. 明褐色土　ローム小ブロックを含む
5. 明褐色土　突き固め、ロームブロックと粘土ブロックを含む
6. 暗褐色土　ロームブロックと粘土ブロックを含む、硬い
7. 暗褐色土　軟質、粘土ブロックとロームブロックを含む
8. 暗褐色土　ロームブロックと粘土ブロックを含む
9. 黒 色 土　ロームブロックと粘土ブロックを含む
10. 黒褐色土　明るく、ローム小ブロックを含む
11. 黄褐色土　ローム粒を含む

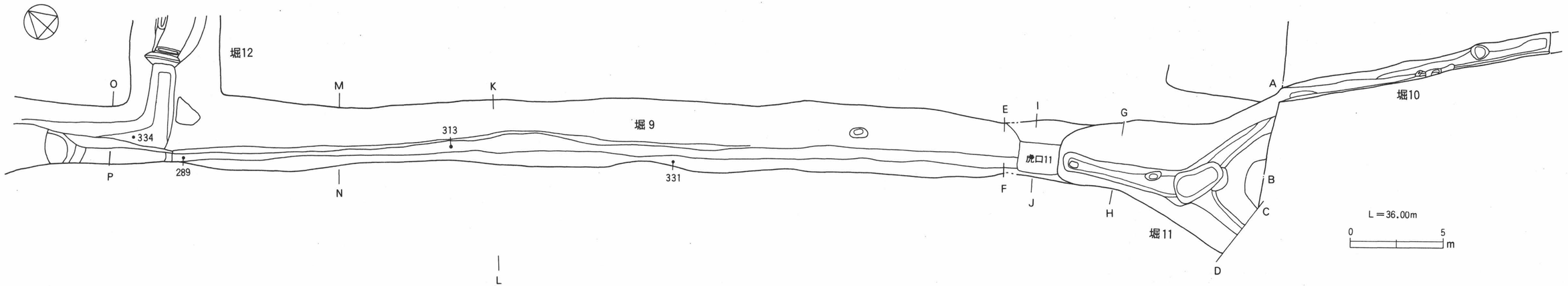


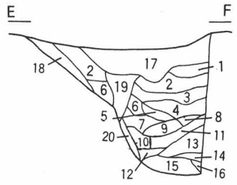
土層凡例

1. 暗褐色土　ローム粒子を含む、固くしまっている
2. 暗褐色土　ローム粒子とロームブロックを含む、1より暗い、固くしまっている
3. 暗褐色土　2より暗い、ローム粒子とロームブロックを含む、しまっている
4. 暗褐色土　明るく、ロームブロックを含む
5. 暗褐色土　3より明るい、ローム粒含む
6. 黄褐色土　ロームブロックを含む
7. 暗褐色土　ロームブロックと粘土を含む
8. 暗褐色土　ロームブロックを含む



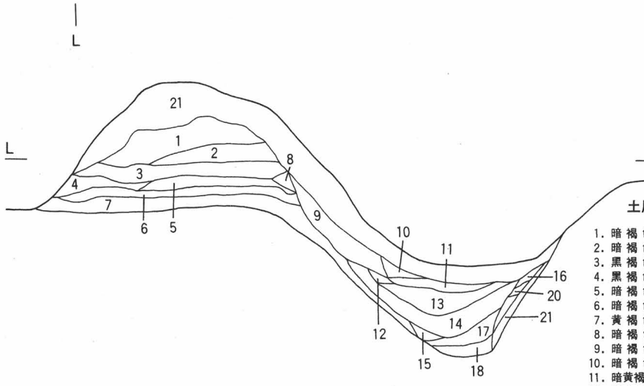
第68図　第8号堀（虎口10）実測図





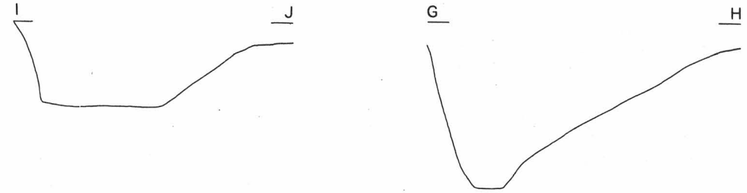
土層凡例

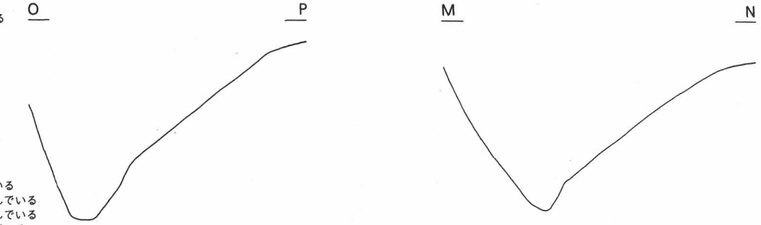
1. 暗褐色土　よくしまっている、腐蝕土と考えられる
2. 暗褐色土　よくしまっている、旧地表と考えられる
3. 暗褐色土　よくしまっている
4. 暗褐色土　ローム粒を含む
5. 暗褐色土　ローム小ブロックとローム粒を含む
6. 暗褐色土　よくしまっている、ローム粒を含む
7. 暗褐色土　軟質、ローム粒を含む
8. 暗褐色土　ローム粒を含む
9. 黒褐色土　ローム粒を含む
10. 暗褐色土　ややしまっている
11. 暗褐色土　ロームブロックを含む
12. 暗褐色土　粘性をもちロームブロックとローム粒を含む
13. 暗褐色土　粘性をもち、しまっている
14. 黒褐色土　粘性をもち、よくしまっている
15. 暗褐色土　粘性をもち、よくしまっている
16. 黄褐色土　ロームブロック
17. 表　　土
18. ロ ー ム
19. 攪　　乱
20. 暗褐色土　攪乱の影響

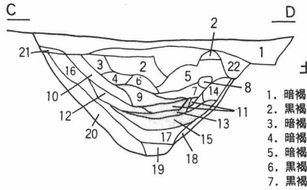


土層凡例

1. 暗 褐 色 土　ロームブロック、ローム粒子を含む、表土化している
2. 暗 褐 色 土　3層の影響
3. 黒 褐 色 土
4. 黒 褐 色 土　2層より暗い
5. 暗 褐 色 土
6. 暗 褐 色 土　しまっている
7. 黄 褐 色 土　よくしまっている
8. 暗 褐 色 土　さらさらしている
9. 暗 褐 色 土　ボロボロしている
10. 暗 褐 色 土　よくしまっている
11. 暗黄褐色土　ロームブロックを含む
12. 暗 褐 色 土　よくしまっている、10層と同質
13. 暗 褐 色 土　ローム小ブロック、ローム粒子を含み、暗い
14. 暗 褐 色 土　ローム粒子を含む
15. 暗 褐 色 土　粘性アリ
16. 暗 褐 色 土　ローム小ブロック、ローム粒子を含み、ボロボロしている
17. 暗 褐 色 土　ロームブロックを含む、粘性に富む
18. 暗 褐 色 土　白色粘土粒を含み、粘性に富む
19. 茶褐色粘土
20. 黄 褐 色 土　ロームブロックを含み、ボロボロしている
21. 表　　土

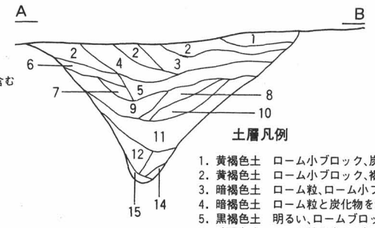






土層凡例

1. 暗褐色土　ロームブロックと炭とローム粒子を含む、固い
2. 黒褐色土　ローム粒子を含む
3. 暗褐色土　ローム小ブロックを含む
4. 暗褐色土　ローム粒子を含む
5. 暗褐色土　ロームブロックとローム粒子を含む
6. 黒褐色土　ローム粒子を含む
7. 黒褐色土　ローム粒子を含む
8. 黒褐色土　ブロック
9. 黒褐色土　炭とローム粒子を含む、固い
10. 黒褐色土　ローム小ブロックを含む
11. 暗褐色土　ローム粒子を含む、固い
12. 黒褐色土　ローム粒子と粘土ブロックを含む
13. 黒褐色土　ローム粒子を含む、固い
14. 明褐色土　ローム粒子を含む
15. 明褐色土　粘土ブロックを含む
16. 茶褐色土
17. 暗褐色土　ロームブロックと炭を含む
18. 茶褐色土
19. 暗褐色土　ロームブロックを含む
20. 黄褐色土　ロームブロックを含む
21. 黄褐色土　ローム粒子を含む
22. 黄褐色土　攪乱



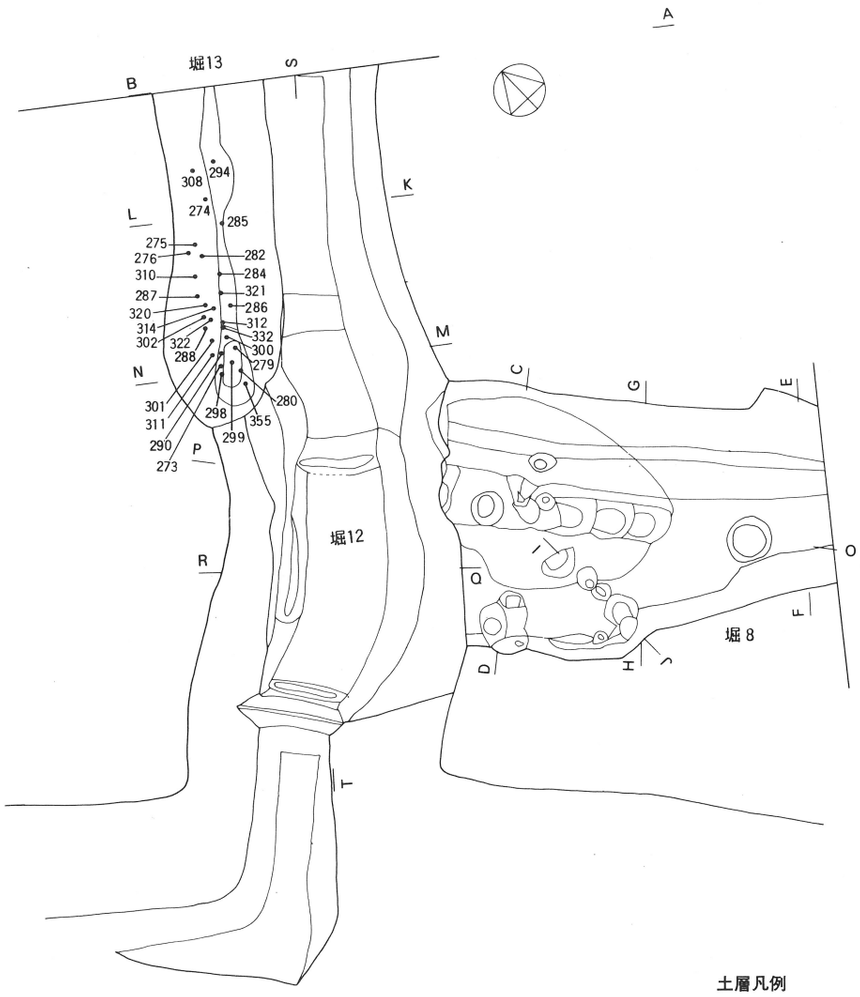
土層凡例

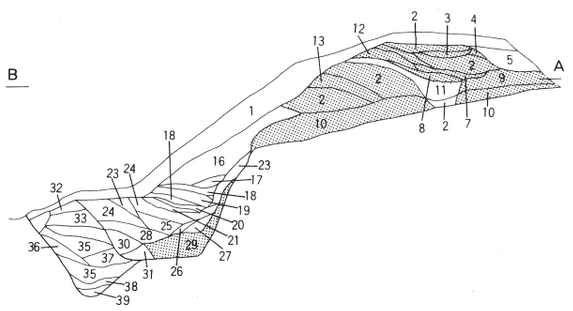
1. 黄褐色土　ローム小ブロック、炭化物、褐色粘土粒を含む
2. 黄褐色土　ローム小ブロック、褐色土粒を含む
3. 暗褐色土　ローム粒、ローム小ブロックを含む
4. 暗褐色土　ローム粒と炭化物を含み暗い
5. 黒褐色土　明るい、ロームブロック、ローム粒を含む
6. 暗褐色土　ローム粒を含み、暗い
7. 暗褐色土　ローム粒を含む
8. 黒褐色土　ローム粒を含み、明るくすんでいる
9. 黒 褐 色 土　ローム粒を含み、明るくすんでいる
10. 茶 褐 色 土　ローム小ブロックを含み、くすんでいる
11. 黄 褐 色 土　ローム小ブロックを含み、くすんでいる
12. 黄 褐 色 土　ロームブロックを含み、くすんでいる
13. 黄 褐 色 土　ロームブロックを含み、くするでいる
14. 粘土ブロック
15. 黄 褐 色 土　黒色土を含む

L＝34.80m
0
2
m

踏み固め

第69図　第９～11号堀・虎口11実測図

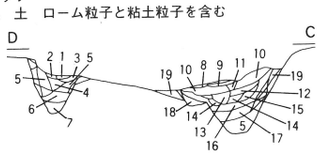




土層凡例

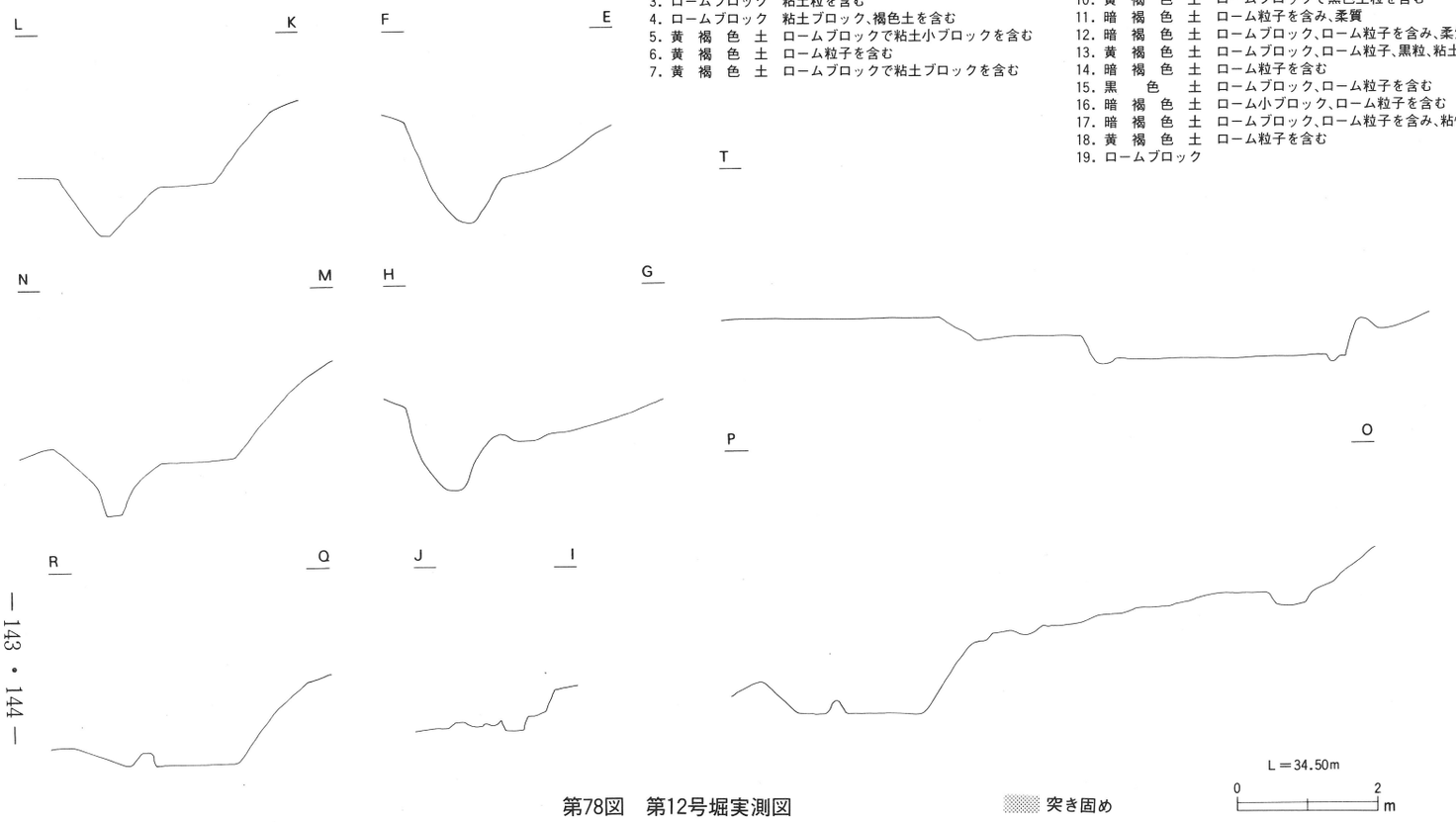
1. 表　　土
2. ロームブロック
3. 暗 褐 色 土　ロームブロックを含む
4. 暗 褐 色 土　ローム小ブロックを含む
5. 暗 褐 色 土　ローム粒子を含む
6. 暗 褐 色 土　ロームブロックとローム粒子を含む
7. 黒　色　土　ローム粒子を含む
8. 粘土ブロック
9. 暗 褐 色 土　ローム粒子と粘土ブロックを含む
10. 黒 褐 色 土　ローム粒と粘土粒を含む
11. 黒 褐 色 土　ロームブロック、粘土ブロックを含む
12. 黄 褐 色 土　ロームブロック粒を含む、突き固め
13. 黒 褐 色 土　ローム小ブロックとローム粒を含む
14. 暗 褐 色 土　ローム粒子を含む
15. ロームブロック
16. 暗 褐 色 土　ローム粒子と粘土粒子を含む
17. 暗褐色土　粘土ブロックを含む
18. 黒褐色土　炭化物含み、粘土粒を含む
19. 暗褐色土　ローム粒子を含み、明るい
20. 黒褐色土　粘土粒子とローム粒子を含む
21. 黒褐色土　粘土ブロック、ロームブロックを含む
22. 黒褐色土　粘土ブロック、粘土粒子を含む
23. 黒褐色土　ロームブロックを含む
24. 黒褐色土　粘土粒子、ロームブロックを含む
25. 黒褐色土　ローム、炭化物を含む
26. 黒褐色土　ローム粒子を含む
27. 黒褐色土　粘土粒子を含む
28. 黒褐色土　粘土質で、ローム粒子を含む
29. 黒褐色土　粘土質、炭化物含み、しまりよく固い
30. 黒褐色土　粘土質で柔質
31. 粘　　土　自然層

※全体的にしまり良好



土層凡例

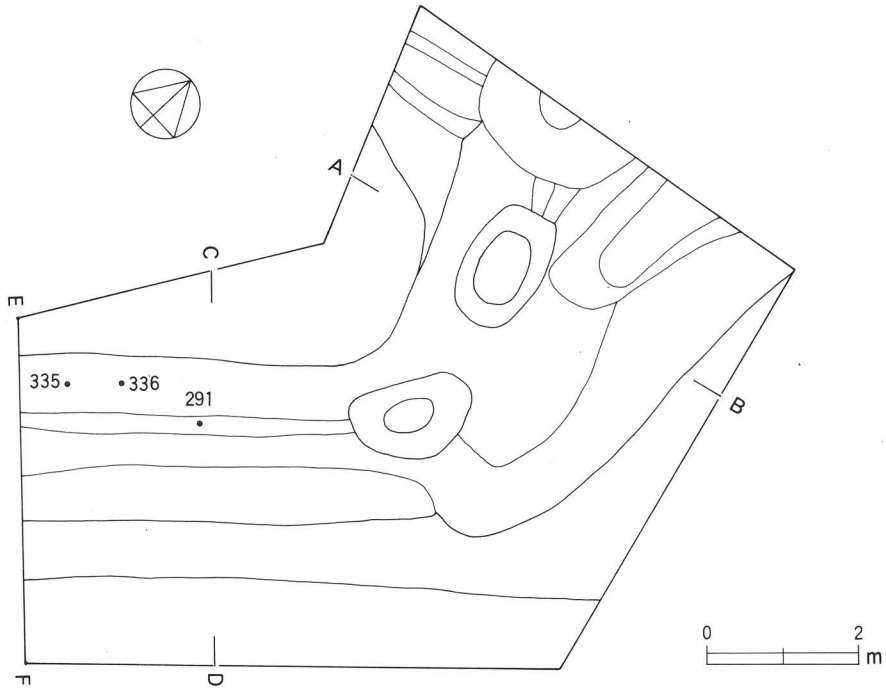
1. 黒　　色　　土
2. 暗 褐 色 土　ロームブロックを含む
3. ロームブロック　粘土粒を含む
4. ロームブロック　粘土ブロック、褐色土を含む
5. 黄 褐 色 土　ロームブロックで粘土小ブロックを含む
6. 黄 褐 色 土　ローム粒子を含む
7. 黄 褐 色 土　ロームブロックで粘土ブロックを含む
8. 暗 褐 色 土　ロームブロック、ローム粒子を含む
9. 黒　　色　　土　ロームブロックを含む
10. 黄 褐 色 土　ロームブロックで黒色土粒を含む
11. 暗 褐 色 土　ローム粒子を含み、柔質
12. 暗 褐 色 土　ロームブロック、ローム粒子を含み、柔質
13. 黄 褐 色 土　ロームブロック、ローム粒子、黒粒、粘土ブロックを含む
14. 暗 褐 色 土　ローム粒子を含む
15. 黒　　色　　土　ロームブロック、ローム粒子を含む
16. 暗 褐 色 土　ローム小ブロック、ローム粒子を含む
17. 暗 褐 色 土　ロームブロック、ローム粒子を含み、粘性に富む
18. 黄 褐 色 土　ローム粒子を含む
19. ロームブロック

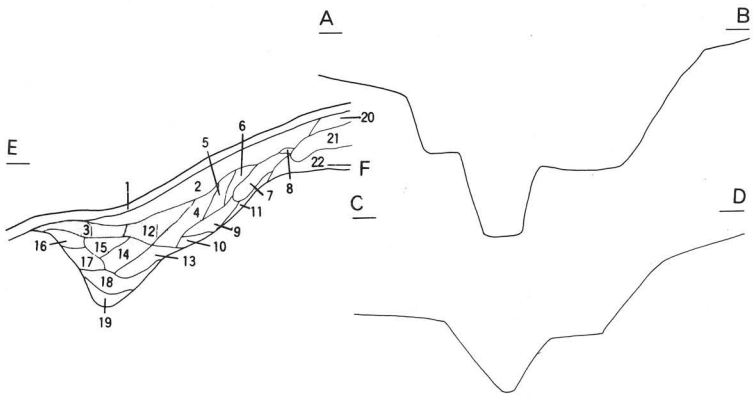


L＝34.50m
0　2 m

突き固め

第78図　第12号堀実測図





土層凡例

1. 表　　土
2. 黒褐色土　砂質で柔かい
3. 黒褐色土　砂質、ローム小ブロック含み柔かい
4. 黒褐色土　砂質、ローム粒含み柔かい
5. 黒褐色土　砂質、柔かく明るい
6. 黒褐色土　砂質、暗くローム小ブロック含み柔かい
7. 黒褐色土　ロームブロックと粘土ブロックを含む、粘性有
8. ロームブロック
9. 暗褐色土　砂質、ローム小ブロックと粘土粒を含む
10. 暗褐色土　粘土粒とローム小ブロックを含む、砂質
11. 暗褐色土　砂質、柔質
12. 暗褐色土　ローム小ブロックと粘土粒を含む、砂質やや固い
13. 黄褐色土　ロームブロックと粘土ブロックと黒色土痕を含む
14. 黒褐色土　ローム小ブロックと粘土粒、砂質、粘性有
15. 黒褐色土　ローム小ブロックとロームブロックと粘土ブロックを含む
16. 暗褐色土　砂質、粘土ブロックを含む
17. 黒 色 土　砂質、粘土ブロックと粘土粒を含む
18. 黒褐色土　ローム小ブロックと粘土ブロックを含む、砂質
19. 黒 色 土　砂質、ローム粒を含む
20. 黄褐色土　ロームブロックを含む、固い
21. 黒褐色土　ローム小ブロック含む、固い
22. 黄褐色土　密ローム、しまっている

A－B …… L＝32.00m
C－D、E－F …… L＝33.00m

第70図　第12号堀北西部実測図

mを計測し箱薬研堀となっている。

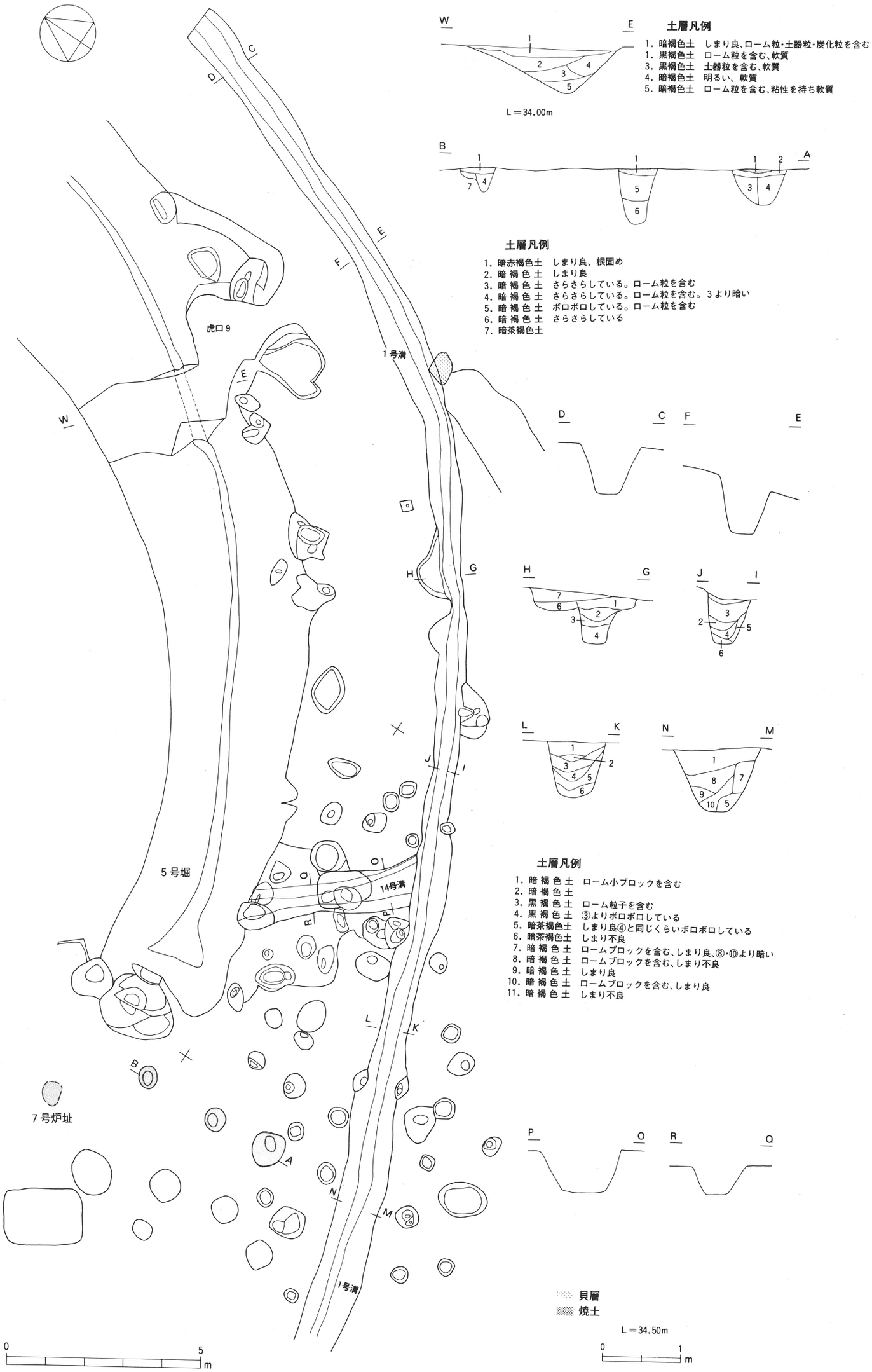
第12号堀は、Ⅱ郭の西側外堀で、第9号堀西側から第1号堀南西コーナー西側まで掘り込まれた後、一段下がりⅠ郭西側斜面部堀に接続している。両接続部は、各々西側へ折れている。また中央西側では、第12号堀Bが所在するため2重堀状を呈している。

第12号堀の規模は、全長25.0m、最大幅4.20m、最大深度は南側で1.16m、浅い部分（北側）で1.07mを計測する。北側での幅は、1.90mを計測する。またこの堀は、堀底を北側から南側にかけて3段のテラスに造り、第9号堀との合流部に畝を造り出している。最下段の堀底には、北側と南側に浅い溝を掘り込んでいる。テラスは、北側から長さ16.0m、堀底幅0.60m、深さは1.06mあり、中央部は長さ2.46m、堀底部幅1.20m、深さは上面からが1.24mで北側テラスより約0.30m下降している。南側は、長さ5.00m、堀底部幅は1.50m、深さは上面から1.16mで中央部テラスから約0.30m下降している。南側テラスの南端部畝は、長さ1.90m、高さ0.33m、上面幅0.06m、下面幅0.45mを計測する。溝は、北側が1.45m×0.66m×0.10m、南側では1.40m×0.24m×0.15mを、各々計測している。この畝から、南側へ3.50mの所から西に折れている。この部分は、上面幅1.20m～1.70m、下面（底）幅0.70m、深さ2.10m下降している。

第12号堀は、長さは14.60mを計測し、上面幅が1.00m、下面（底）幅0.15m～0.30mあり、深さ0.81mを計測する。南端には、1.45m×0.60m×0.24mで長方形をなす落とし穴が掘り込まれている。この部分から、合計29点の石塔類が検出されている。この第12号堀は、北側で西方へ折れている。テラス及び堀底は、平坦面をなしている。

第12号堀西側は、2段となり下段が西側斜面の堀となっている。上段は、長さ1.90m、幅1.05m、深さ1.14mを計測するが、東側より西側が0.10m程度下降している。下段は、上面幅0.96m下面（底）幅0.60mで、深さは1.65mを計測する。第12号堀Bは、上面幅0.30m、下面（底）幅0.15m、深さ0.21mを計測し、3ヶ所の落とし穴に掘り切られている。3ヶ所の落とし穴は、北側から長さ1.20m、幅0.84m、深さ0.96mで、楕円形をなしている。中央は、長さ1.50m、幅0.85m深さ0.84mで、楕円形をなしている。南側は、確認面で長さ1.80m、幅0.75m、深さ0.83mあり円形又は楕円形を呈するものと判断されるが、大きさ等から土壙等の可能性を有している。

第13号堀は、Ⅰ郭北側土塁南側に位置する堀で、土塁構築時に埋められた堀である。同堀は、南側で第2、5号堀と接している。土塁の盛土状況や、第2、5号堀の埋没状況等から同堀は、第2、5号堀よりやや新しいようである。第13号堀は、Ⅰ郭北東部で消失しているようである。大きさは、重複のため深さ以外不明である。深さは、0.90m（3.0尺）であり、推定幅は3.00m程度となるようである。確認底面幅は、1.30m（4.3尺）である。



第71図　第1号、14号溝実測図

4）溝（第5図、図版18・22）

溝としては、合計14本確認されている。第1号溝は、土塁の中央下位面（地山面）から掘り込まれている。第2～4号溝は、I郭の南西部で堀4西側虎口付近から、I郭南側虎口の北側まで掘り込まれているが、第4号溝は第22号土壙付近で終了し、第3号溝はI郭南側虎口の北側で消失している。第2号溝は、I郭南側虎口の北側部が消失しているが、第7号溝と接続している。第5号溝は、I郭南側虎口からI郭中央部まで掘り込まれているが、その大部分は消失している。第6号溝は、第5号溝と併行して掘り込まれているが、その多くは消失している。第7号溝は、I郭の南側土塁付近に掘り込まれているが、この溝も一部のみでその多くは消失している。第8号溝は、I郭の中央西側で堀2の西側に掘り込まれており、北側は堀2に接し南側は第14号溝に切れている。第9号溝は、I郭の北西部で第19号建物址の北側に位置しているが、東側は第11号溝と西側は堀3に接し終了している。第10号溝は、第9号溝と重複しており、第2号住居址の南壁から第19号建物址北側まで掘り込まれている。第11号溝は、I郭北西部に位置しており、第2号住居址の東側から第23号土壙の北側まで掘り込まれているが、堀5以北には掘り込まれておらず、第23号土壙の北側以南は掘立柱建物址との重複により消失し、中央部は堀4と第14号溝とにより切られている。第12号溝は、I郭の北西部で第17号建物址の北側から第16号住居址の北側にかけて掘り込まれており、第17住居址西壁を掘り切っている。第13号溝は、I郭の中央部で第22号建物址と重複しているが、第22号建物址の西側部分に掘り込まれているだけである。第14号溝は、I郭の中央西側で堀2中央部西側から第4号住居址の上面を掘り切り、同住居址部分で消失している。第14号溝は、堀2、4と第8号溝と重複している。

これら各溝の規模は、溝1は西側で上面幅0.80m、下面（堀底）幅0.40m、深さ0.65mを計測する。溝内には、黒色土、黒褐色土が堆積している。この溝は、I郭西側から北側、西側まで掘り込まれているが、南側土塁下の堀6と接続するかは、断定出来ない。

第2号溝は、I郭南西部で堀4西側土橋の北東部から掘り込まれ、東側へ約6.50mの所で消失している。溝幅は、上面幅0.60m、下面（底）幅0.30m、深さ0.07mを計測する。溝内には、黒褐色土が堆積している。

第3号溝は、第2号溝の南側で湾曲しながらI郭の中央南側まで掘り込まれ、消失している。溝の全長は、21.50m、上面幅0.70m、下面幅0.30m、深さ0.07mを計測する。溝内には、黒褐色土が堆積している。

第4号溝は、第3号溝と同様でI郭東側で第7号溝と接続し消失している。中央部で、第5号溝と接している。全長31.0m、上面幅0.90m（最大幅1.50m、最小幅0.65m）、下面（底）幅0.40m～0.45mで深さは、0.12mを計測する。

第5号溝は、Ⅰ郭南側虎口部からⅠ郭中央部にかけ掘り込まれているが、中央部は耕作等により消失している。溝の全長は、37.0mで、上面部は虎口部で2.60m、北側（Ⅰ郭中央部）で0.90mを計測する。下面（底）幅は、虎口部で1.00m、北側（Ⅰ郭中央部）では0.45mを計測する。深さは、0.15m程度である。土層は黒色土と黒褐色土が堆積している。　第6号溝は、Ⅰ郭の中央部で、第5号溝南側に掘り込まれているが、南側は消失している。長さは、7.50mで上面幅0.40m、下面（底）幅0.25m、深さ0.15mを計測する。溝内には、黒褐色土、褐色土が堆積している。

第7号溝はⅠ郭の中央南側で、南側土塁付近に掘り込まれている。この溝は、第24、30号建物址の西側から、第7号住居址にかけて逆「L」字型に掘り込まれている。全長は、18.50mで上面幅は北側で1.00m、南側で2.30mあり、下面（底）は北側で0.65m、南側で1.60mを計測する。深さは、北側で0.15m、南側で0.30mを、各々計測する。

第8号溝は、Ⅰ郭西側で堀2と並行するように掘り込まれており、北側で堀2に南側で第14号溝に接し消失している。全長は22.0mで上面幅0.80m、下面（底）幅0.25m～0.40m、深さ0.25mを各々計測する。溝内の土層は、第7号溝と同様褐色土、黒褐色土が堆積している。

第9号溝は、Ⅰ郭北西部で第2号住居址の南側に位置し、東側で第11号溝と西側で堀3と接し消失している。全長は、8.00mを計測し、上面幅0.50m、下面（底）幅0.25m、深さ0.11mを計測する。

第10号溝は第9号溝と同様Ⅰ郭北西部で、第2号住居址の南側に位置している。この溝は、第2号住居址西壁部分から、第19号建物址の北側まで掘り込まれている。全長は、6.00mで上面幅0.30m、下面（底）幅0.18m、深さは0.10mを計測する。溝内の土層は、第9号溝同様黒褐色土ロームブロック全体の黄褐色土が堆積している。

第11号溝は、第9、10号溝同様Ⅰ郭北西部に位置している。北側は、第5号堀に切られているものの第1号竪穴上面を切り第2号堀で終わっている。南側は、第9号溝を掘り切り第14号溝と第4号堀に切られ、第55号建物址付近で消失している。全長は、30.50mを計測し、上面幅は中央部で1.00m、北側で0.65m、南側で0.90mを計測する。下面（底）幅は、中央部で0.90m、北側で0.20m、南側で0.55mを計測する。深さは中央部で0.25m、北側で0.20m、南側で0.15mを計測する。第9～第11号溝は、底面がほぼ平坦面をなし、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。第12号溝も、同様の状況を呈している。

第12号溝は、Ⅰ郭の中央北側で第11、17号住居址の上面を掘り切り、第4号堀の東側と接して終了し、逆「L」字型に掘り込まれた溝で全長では、43.50mを計測し、上面幅は北側で0.50m、東側で1.20mを計測し、下面（底）幅は北側で0.30m、東側で0.90mを計測し深さは北側で0.15m、東側で0.25mを計測する。北側は平坦な底面でほぼ垂直な壁であるが、東側では壁が斜めに掘り込まれている。

第13号溝は、Ⅰ郭中央部で第11号住居址西側に位置している。長さは、8.30mで上面幅は0.60mあり、下面（底）幅は0.20m～0.40mあり、深さは0.04mを計測する。第22号建物址とも重複しており、平坦な溝底とほぼ垂直に掘り込まれた壁をなしている。溝内には、黒色土と黒褐色土が堆積している。

第14号溝は、Ⅰ郭の西側で第8号溝を切り第4号堀に切られ、第4号住居址の上面を切りながら、再び第4号堀に切られ消失する。長さは、22.0m（消失部分は、約9.00m程度）で、上面幅は1.00m～1.30m程度で、下面（底）幅は0.20m～0.50mを計測し、深さは0.16m～0.15mを計測する。溝底面はほぼ平坦で、壁は斜めに掘り込まれている。溝内には、褐色土と黒色土が堆積している。

第15号溝は、Ⅰ郭の北東部で第1号溝と第5号堀に切られている。規模は、長さ4.30m、上面幅1.08m～0.66m、下面（底）幅0.65m～0.24m、深さ1.08m～0.72mを、各々計測する。底面は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。この溝は、多数の柱穴郡と重複している。

以上が、当古屋敷遺跡で確認された溝であり、全てⅠ郭内で確認されている。これらの溝で、第1号溝と第12号溝などは、注目される所である。

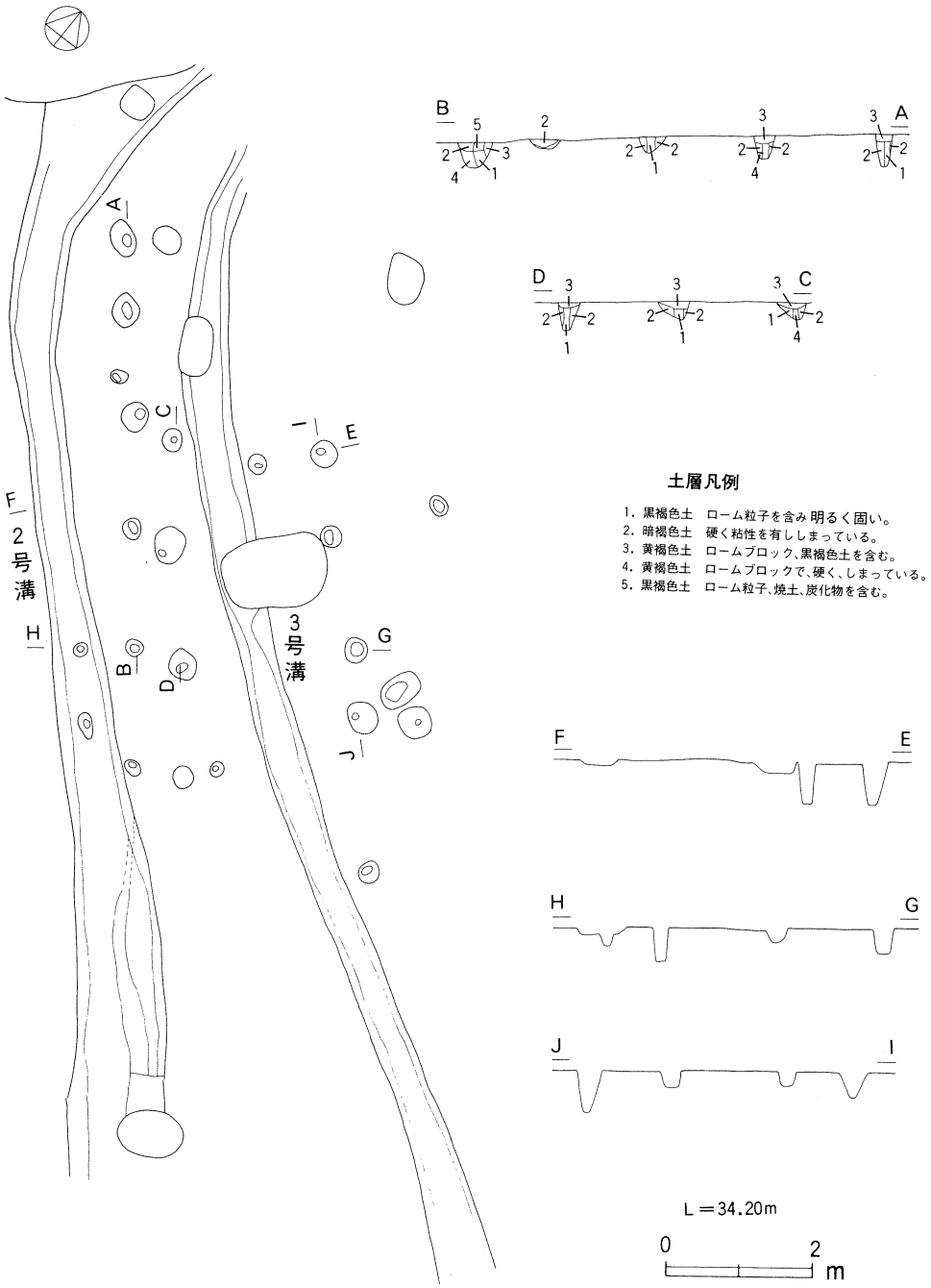
5）虎口（第62・72～74. 76～77図、図版11・12）

虎口としては、Ⅰ郭で南側、北側、北東部、第2号堀北西部、第4号堀西側、北側、北東部、東南部と、第5号堀北東部での合計9ヶ所に所在している。Ⅱ郭では、南側と西側の2ヶ所に所在している。これらの虎口は、当遺跡が造改修されるにつれ移動している。

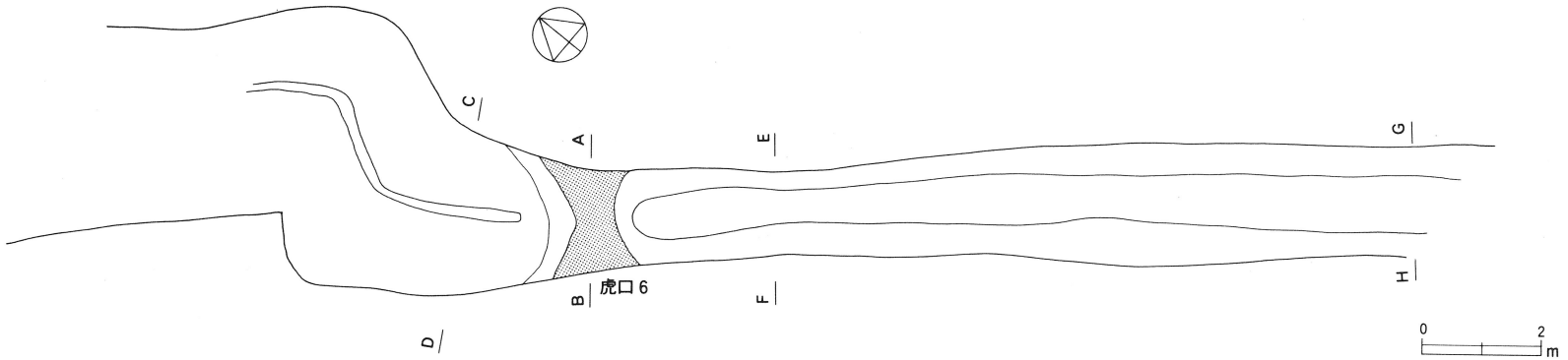
Ⅰ郭南側虎口（虎口1）は、Ⅰ郭南側のほぼ中央部に位置し、Ⅰ郭南側土塁が切れている。この虎口には、2間1間の建物址が2棟（新旧）建てられている。建物址部分は、良く踏み固められている。虎口全面は、外堀（第1号堀）であるが、橋を用いてⅡ郭と連結している。また、外堀は中間付近まで埋没後、褐色土と茶褐色土を用いて土橋としている。この部分も、良く踏み固められている。高さは、1.50m（5.0尺）程度である。

北側虎口（虎口2）は、Ⅰ郭の北西部でⅠ郭とⅢ郭を連結している。この部分は、Ⅰ郭外堀を埋めて土橋としている。この為、土橋上面はⅠ郭とⅢ郭線から0.45m程度下位に位置している。土層は、表土と南壁付近の土層以外は、硬くしまっている。土橋の高さは、表土下1.20m（4.0尺）を有している。

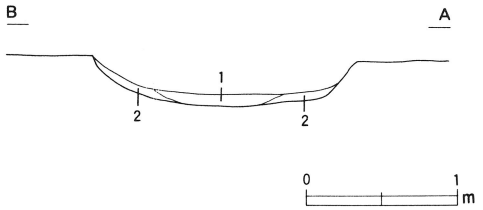
北東部虎口（虎口3）は、Ⅰ郭の北東部で東側斜面と連結している。この部分は、第1号溝の東側でローム上0.30m部分の土層から、外堀（第1号堀）東側土塁上面0.12mまで、良く踏み固められている。したがって、外堀（第1号堀）が埋没後に褐色土を用いて踏み固めながら、直線

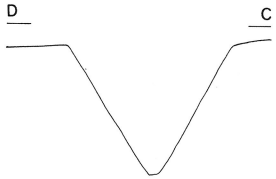


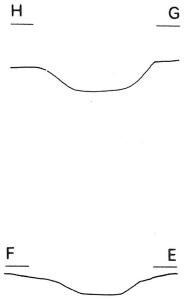
第72図　Ⅰ郭柵列実測図



踏み固め





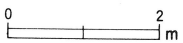


土層凡例

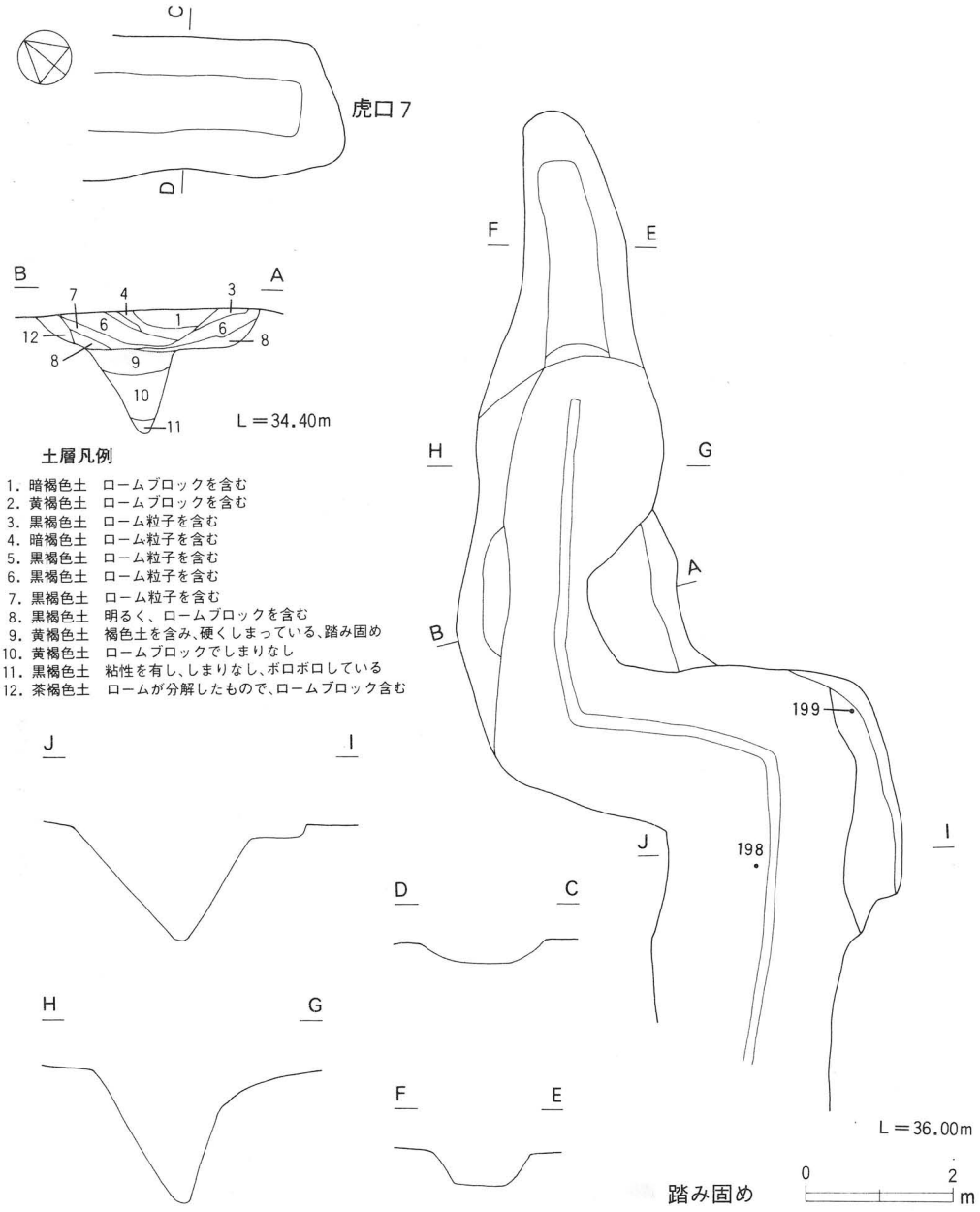
1. 暗褐色土(ローム粒を含む)
2. 黄褐色土(ロームブロックを含む)

} 踏み固められている

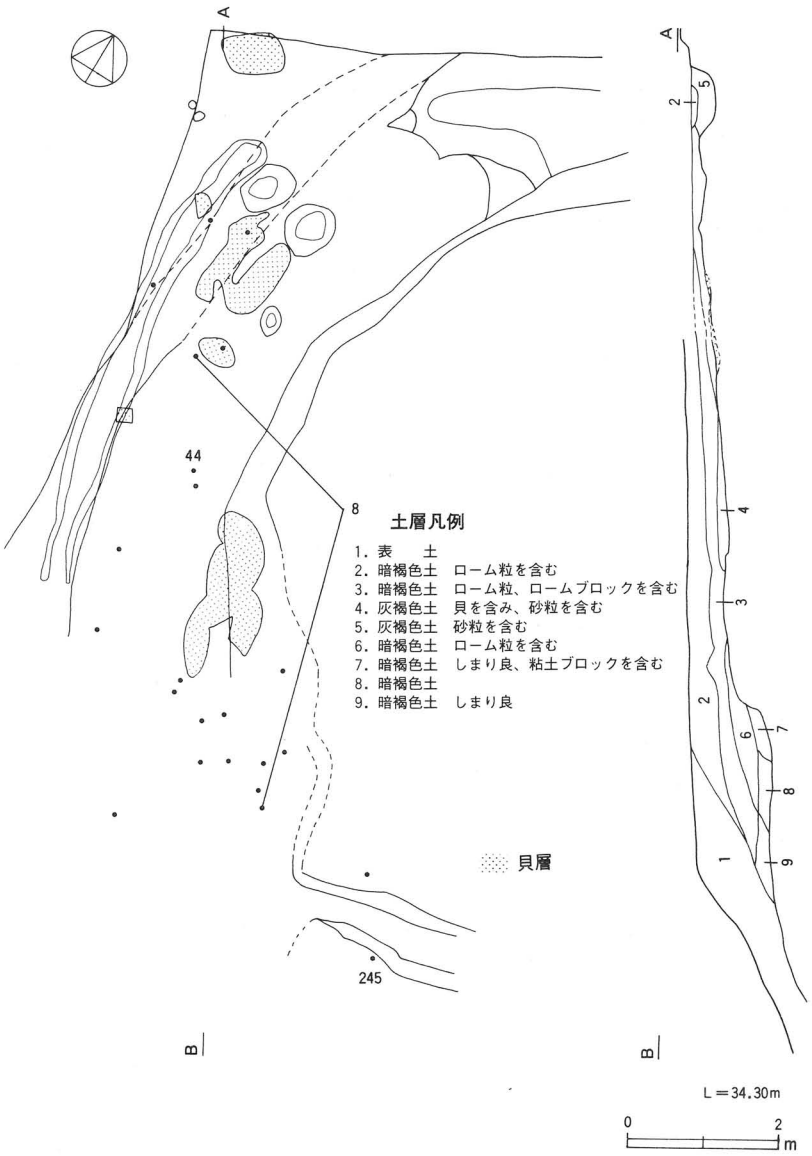
L＝34.50m



第73図　第4号堀北側中央虎口(虎口6)実測図



第74図　第４号堀東側虎口（虎口７）実測図



第75図　東南谷頭部(虎口８)遺物出土状況実測図

的に通路を構築したこととなる。この部分の長さは、約7.00mを計測する。ここから、北東斜面の階段へと接続している。

階段は、長さ7.10m（24.0尺）で幅は上段で4.20m（14.0尺）、下段で4.50m（15.0尺）程度であり、10～11段の階段を構築している。階段は、幅が0.24m（0.8尺）～0.60m（2.0尺）を有し下段が狭く、上段が広くなっている。階段高は、0.11m（0.4尺）～0.18m（0.6尺）を計測する。

Ⅰ郭内では、第2号堀の北西部土橋は、第2号堀内貝層の南側で土壙（又は落とし穴）上面に粘土を用いて構築している。つまり、第2号溝と土壙を埋めながら、上面に粘土を用いて構築している。粘土下位層は、黒色土、黒褐色土、暗褐色土で、0.74mの高さを有している。各土層は、良くしまっている。土橋下の落とし穴状土壙は、貝層の北側にもある。土橋下では、2.50m×0.70m×0.64mを計測し、第2号堀底面からは0.41mを計測する。北側は、3.45m×1.32m×0.67mを計測し、堀底面からは0.42mの深さを有している。虎口4である。

第4号堀西側土橋（虎口5）は、掘り残しによる土橋である。長さ2.00m、幅0.65m、高さは0.38mで、上面からは0.29m下がっている。北側の土橋は、北側中央部で第4号堀が南側へ折れ曲がり、浅くなった部分を利用している。長さ1.75m、幅0.70m（中央部径）を計測する。堀底に薄く（0.08m）暗褐色土とロームブロックが堆積してから、通路として利用している。土層は、固くしまっている。北東部の虎口は、第4号堀の掘り残しによる虎口で、幅2.40m（8.0尺）を計測する。虎口の南側と北側及び虎口内に、木戸、門等の遺構は確認されなかった。虎口6、7である。

Ⅰ郭東南部虎口（虎口8）は、第24号建物址の南側で、第4号堀の東南端部に位置している。第24号建物址は、四脚門でこれに通じる通路は第4号堀を使用している。通路部分は、南側で1列、北側で2列の階段状（人間の足幅分）となっており、北側では一部ずれている。規模は、全長が6.00m、幅は北側で1.20m、南側で1.50m、中央部で1.80mを計測する。北側と南側の比高差は、0.86mである。階段部分は、平坦面ではなく中央が周囲より数㎝窪んでいる。大きさは北側が左右で異なっている。右側は、0.55m×0.45m×0.07m×から0.85m×0.60m×0.13mの範囲で、北側から3段目まで各々接しているが、4段目から7段目までは各々0.10m程度間隔を置いている。左側は、径が0.55m×0.34mから0.80m×0.56m前後の範囲で、深さは0.06m～0.12mの範囲で窪んでいる。3段目と4段目、5段目～7段目（北側から）は、各々0.10mの間隔を有している。南側は、径が1.00m×0.60mから1.25m×0.60mの範囲で、0.04m～0.20mの範囲で窪んでおり、北側で、0.10m程度の間隔を有する以外接続している。

また、階段状通路の東側と西側には、合計4本の溝（第16～19号溝）が掘り込まれている。東側は第16号溝で、西側は第17、18、19号溝である。このうち、第16、17号溝は階段状通路と併行して掘り込まれているが、第18、19号溝は北から南にかけ直線的に掘り込まれている。このため

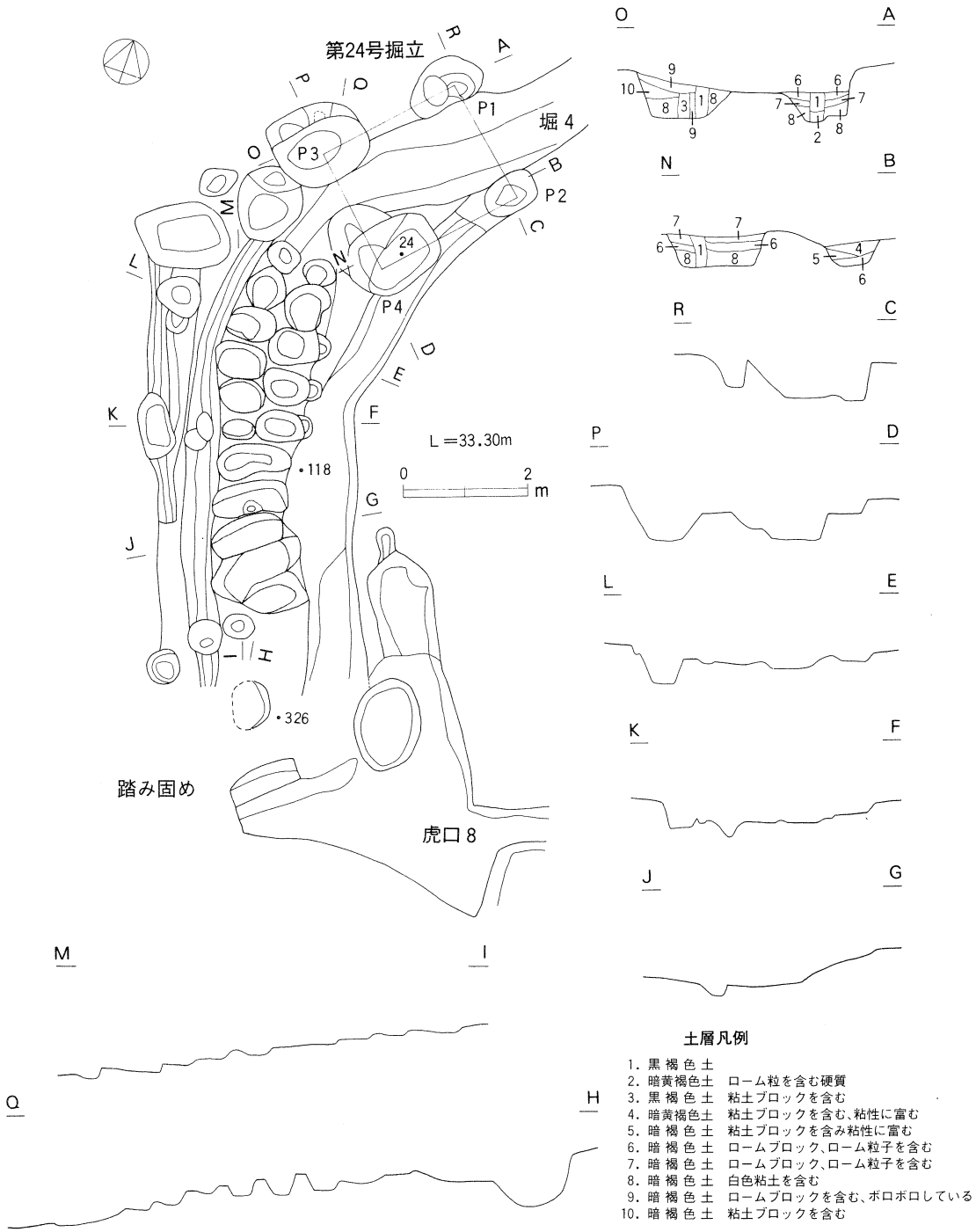
第16、17号溝は当遺構に関連する溝と判断される。各溝の大きさは、第16号溝が長さ8.80m、上面幅0.55m～0.80m、下面（底）幅0.25m～0.55m、深さ0.24m～0.71mを計測する。第17号溝は長さ7.50m、上面幅0.35m～0.50m、下面（底）幅0.15m～0.20m、深さ0.07m～0.16mを計測する。第18号溝は、長さ2.80m、上面幅0.45m～0.25m、下面（底）幅0.12m、深さ0.10mを計測する。第19号溝は、長さ4.10m、上面幅0.30m～0.35m、下面（底）幅0.10m～0.15m、深さは0.16m～0.12mを計測する。これらの溝は、谷に落ち込むように掘り込まれている。第18、19号溝は、途中で確認出来なくなり合流している。

これらの南側には、柱穴状の遺構を有するが、確実な所は不明である。また、総数で44点の遺物、貝層が遺構（通路、溝上面）上で確認されており、通路部分は良く踏み固められている。

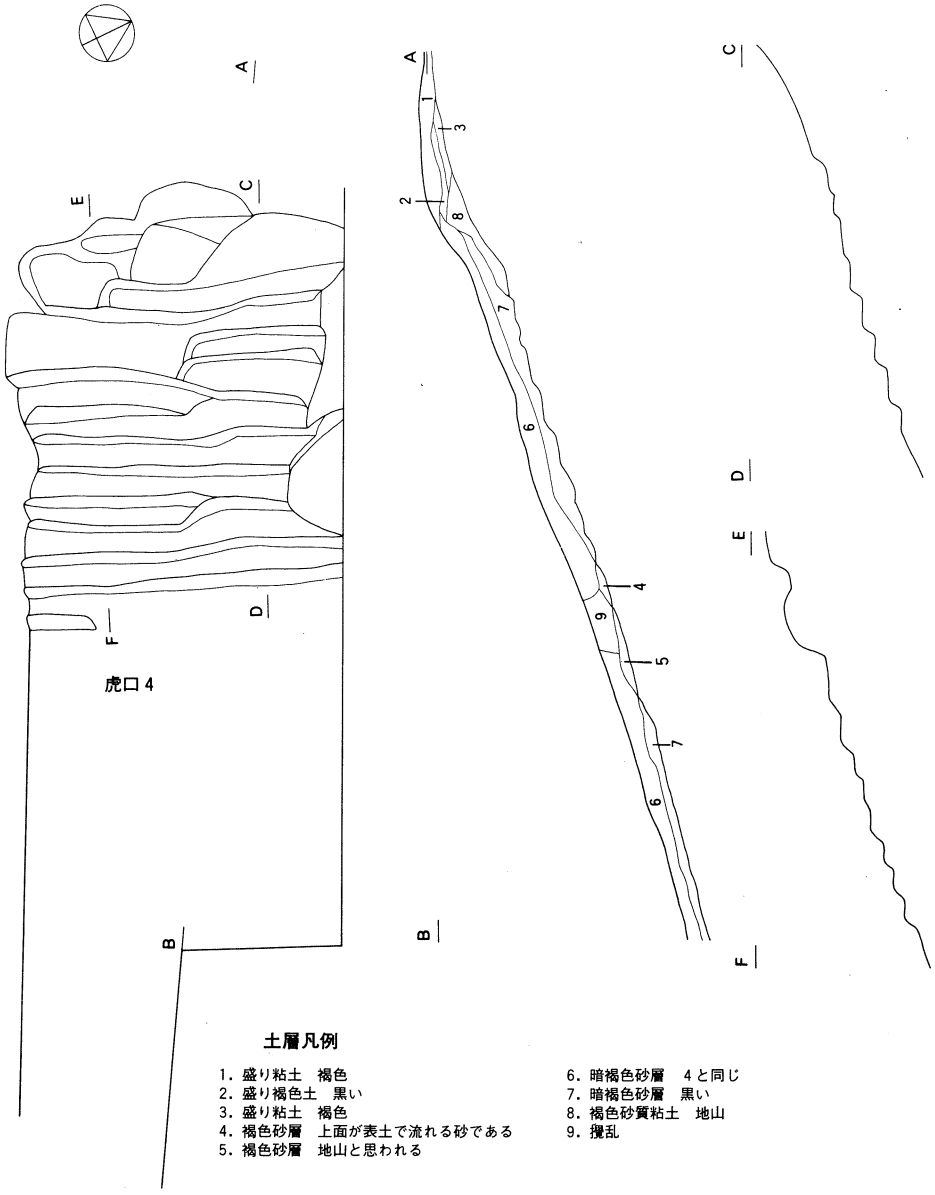
Ⅰ郭北東部虎口（虎口９）は、第５号堀の北東部で、同堀を埋めて構築した土橋で、虎口３、４に接続する虎口である。長さ3.60m（12尺）、幅1.20m、高さ0.60mを計測し、暗褐色土、黒褐色土を用いて埋めており、上面は良くしまっている。土橋の東側は、北東に折れ曲がりながら虎３へ到る。土橋の西側は、建物址郡が存在するが門等は確認されなかった。

虎口10は、Ⅱ郭西側で第８号堀西側と第12号堀との合流部に位置している。虎口は、第８号堀が底面より0.40m埋没してから、この上面に0.30m程度盛土して通路面と同一面を構築している。構築面は、長さ3.20m、幅2.60mを計測し、良く踏み固められている。通路の中心は、第８号堀の西側で、長さ4.70m、幅0.45m～0.80mを計測する。この中心部分は、虎口８と同様階段状（人間の足が入る程度）に造られている。階段状の部分は、0.52m×0.50m×0.06m～0.80m×0.90m×0.13mまで範囲で造られている。また、南東方向にも１列造られている。この部分は、Ⅱ郭西側土塁が切れている部分に相当するが、門等の遺構は確認されなかった。

虎口10は、Ⅱ郭南側で第９号堀の東側に位置している。この部分は、第９号堀を埋めて土橋を構築している。土橋の部分は、長さ1.75m、幅2.20m、堀底より1.35mで、上面からは約0.50m程度下がった所に、土橋面が位置している。土橋上面は、厚さ0.25m～0.35m程度の暗褐色土で良くしまっている。土橋の南側には、Ⅱ郭南側土塁が築かれており、土橋の部分が切れている。



第76図　第24号掘立柱建物址及東南虎口(虎口8)実測図



第77図　東側斜面虎口部東側階段遺構（虎口4）実測図

6） 製鉄址（第81．82図）

当遺跡では、Ｉ郭の北東部と北西部から、各々１基で計２基の製鉄址が確認されている。以下にその概要を記述する。

第１号製鉄址（第79図、図版25）

本遺構は、Ｉ郭の北西部で第30号建物址と重複しており、南側に中心を置いている。北側は、煙道部と判断される。全体での規模は、南北径（長さ）が2.86ｍを計測する。

南側の中心部は、右側（東側）で焼けていない部分と、中央部の良く焼けている部分とから構成されており、中央の狭くなっている部分が北端である。中央部の大きさは、長径1.60ｍ、最大幅0.80ｍ、深さは北側で0.09～0.14ｍ、中央部で0.31ｍ、南側で0.53ｍを計測する。このように、底面は高低差を有している。特に、中央南側では底面より0.20～0.40ｍ程度高くなっており隔壁状を呈している。また、壁と底面は良く焼けている。なかでも、北端部分はレンガ状に焼けていることから、壁と推定される。右側（東側）は、長径1.06ｍ、幅0.55ｍ、深さは東側で0.68ｍ、西側で0.50ｍを計測し、中央部は底面より0.54ｍの高さを有する壁状で、上面まで0.10ｍの空間を有している。壁と底面は、焼けていない。

北側は、長径2.35ｍ、幅1.24ｍを計測し、中央部が良く焼けており0.62ｍの深さを有している。焼土域の東側と西側には、深さ0.70ｍ程度で円形をなす落ち込みがある。壁は、南側が垂直であるのに対し斜めに掘り込まれている。

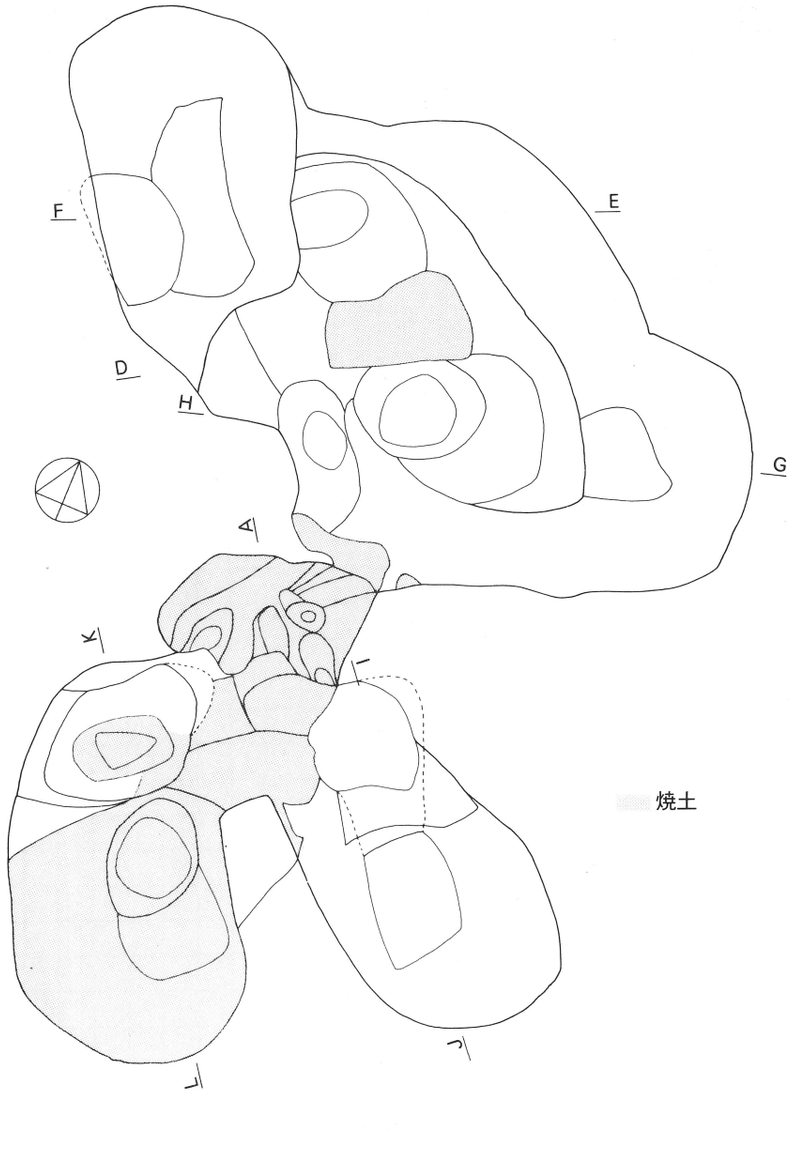
土層は、暗褐色土、灰褐色土、赤褐色土が堆積しており、第６層の赤褐色土（暗赤褐色土）は焼土ブロックとロームブロックを含み、第10層の灰褐色土は灰色粘土と黒色土を含んでおり、土層図Ｎ～Ｓ中の第６、８層が、燃焼部に相当する部分と推定される。

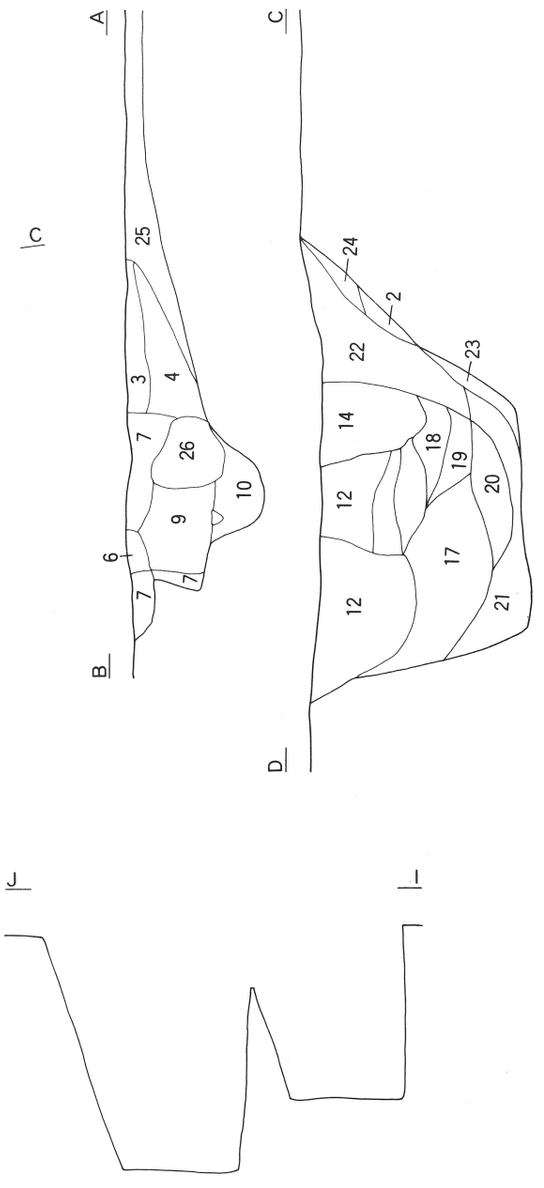
出土遺物としては、小皿小片、火舎片、カワラケ小片などをごく少量検出したのみで、図示可能な遺物は検出されなかった。

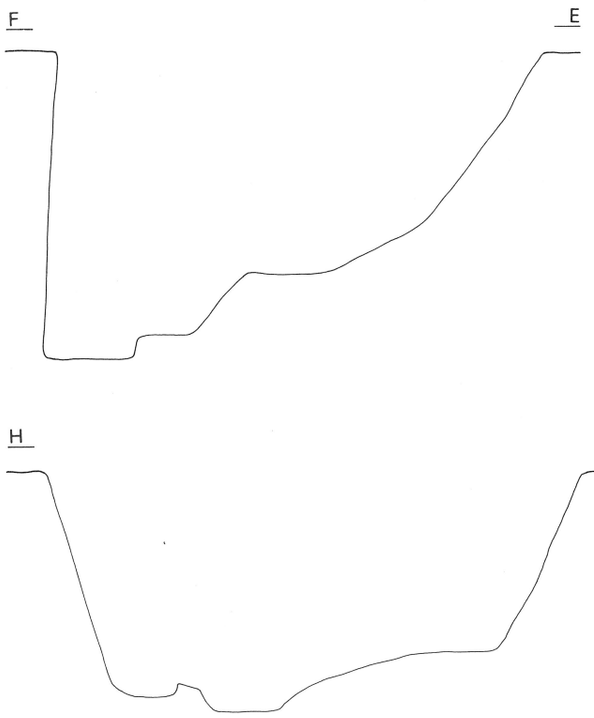
第２号製鉄址（第80図、図版25）

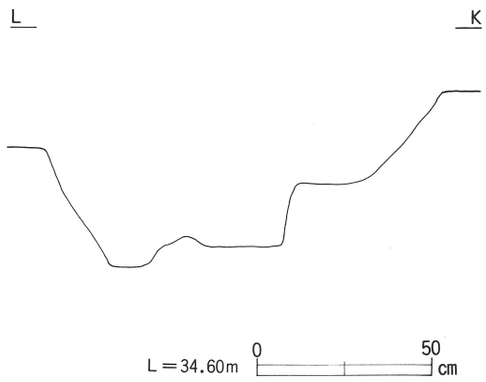
本遺構は、Ｉ郭の北東部で北東部建物址郡と重複しており、遺構の大部分を建物址の柱穴により破壊されている。確認部分での大きさは、東西径3.42ｍ、南北径2.30ｍを計測する。深さは、0.23ｍ～0.50ｍを計測し、平坦ではない。

焼土（底面と壁面が焼けている部分）は、中央南側、北側、東側に所在しているが、焼土間は









L＝34.60m　0　50 cm

土層凡例

1. 暗黄褐色土　ローム粒を含む
2. 暗黄褐色土　ロームブロックを含む
3. 暗褐色土　ロームブロックを含む
4. 暗灰褐色土　灰色粘土を含む
5. 暗褐色土　軟質で焼土ブロックとロームブロックを含む
6. 暗赤褐色土　焼土ブロックとロームブロックを含む
7. 暗褐色土　ローム粒を含み、さらさらしている
8. 暗灰褐色土　灰色粘土、ロームブロック、ローム粒を含む
9. 暗黄褐色土　ロームブロックを多く含む
10. 暗黄褐色土　粘性があり炭化粒を含む
11. 暗灰褐色土　灰色粘土と黒色土を含む
12. 暗灰茶褐色土　ロームブロックを含む
13. 暗灰茶褐色土　ロームブロックを含む
14. 暗灰茶褐色土　褐色土を含む
15. 黄灰褐色土　ロームブロックを含む
16. 暗灰茶褐色土　炭化粒を含む
17. 暗灰茶褐色土　ロームブロックを含む
18. 暗灰茶褐色土　炭化粒を含む
19. 暗灰褐色土　灰色粘土、ローム粒を含む
20. 暗灰褐色土　灰色粘土、ロームブロック、焼土を含む
21. 暗灰褐色土　灰色粘土、ローム粒を含む
22. 暗黄褐色土　焼土粒を含む
23. 褐色土
24. 暗黄褐色土　炭化粒を含む
25. ローム
26. 攪乱

第82図　第１号製鉄址実測図

土層凡例

1. 褐 色 土　ロームブロック、ローム粒を含み、固くしまっている
2. 暗褐色土　黒色土を含み、しまっている
3. 褐 色 土　ややくすんでいる、しまっている
4. 暗褐色土　ロームブロック、黒色土を含み、くすみ、しまっている
5. 暗褐色土　ロームブロック、黒色土を含み、しまっている
6. 暗褐色土　ロームブロック、黒色土を含みしまっている、5層より暗い
7. 暗褐色土　ロームブロック、黒色土を含み、しまっている
8. 黄褐色土　くすんでいる
9. 暗褐色土　ローム粒を含み`しまっている
10. 暗褐色土　黒色土粒、小ブロックを含み、しまっている
11. 暗褐色土　ローム大ブロックと焼土大ブロックを含み、しまっている
12. 暗褐色土　ローム大ブロックを含み、しまっている
13. 暗褐色土　黒灰を含み、しまっている
14. 粘土質の灰色がかった層で、灰を含み、しまっている
15. 黄褐色土　ロームブロックを含み、固くしまっている
16. 褐 色 土　ロームブロック、ローム粒、粘土ブロックを含み、固くしまっている
17. 黄褐色土　ローム大ブロック、ローム粒を含み、固くしまっている
18. 黄褐色土　ローム大ブロック、ローム粒、灰を多く含み、しまっている
19. 褐 色 土　暗く、くすんでいる
20. 暗褐色土　ローム大ブロック、ローム粒、少量の黒色土粒を含み、固くしまっている
21. 暗褐色土　ローム大ブロック、ローム粒、多量の黒色土粒を含み、しまっている
22. 暗褐色土　ローム中ブロック、ローム粒、少量の黒色土粒を含み、しまっている
23. 暗褐色土　ローム大ブロック、ローム粒、黒色土粒を含み、固くしまっている
24. 暗褐色土　ローム中ブロック、ローム粒、黒色土粒を含む、22層より暗い
25. 暗褐色土　ローム小ブロック、ローム粒、黒色土粒を含み、しまっている

注　14. 15. 16. 18層は人為埋土

L＝34.80m

0　1 m

焼土

第83図　第２号製鉄址実測図

柱穴による破壊が著しく分離した状況を呈している。東側は、東端の焼土域から0.23m程度下がり、東側中央部焼土域に接続する。東側中央部の焼土域は、浅い擂鉢状のテラスを形成している。中央南側の焼土域は、7本の小Pit状遺構を含み、浅い擂鉢状を呈している。北側も同様で、浅い擂鉢状を呈している。焼土域は、良く焼けておりレンガ状となっている。

土層は、暗褐色土と黄褐色土が合計26層堆積しているが、焼土層は認められなかった。また、一部埋められた部分も所在するが、本遺構廃棄後による結果と推定される。土層では、第13、14層が灰を含む程度である。

出土遺物としては、小皿と砥石が検出された程度である。小皿は、第122図No30に示した。

7）池跡（第81図、図版25）

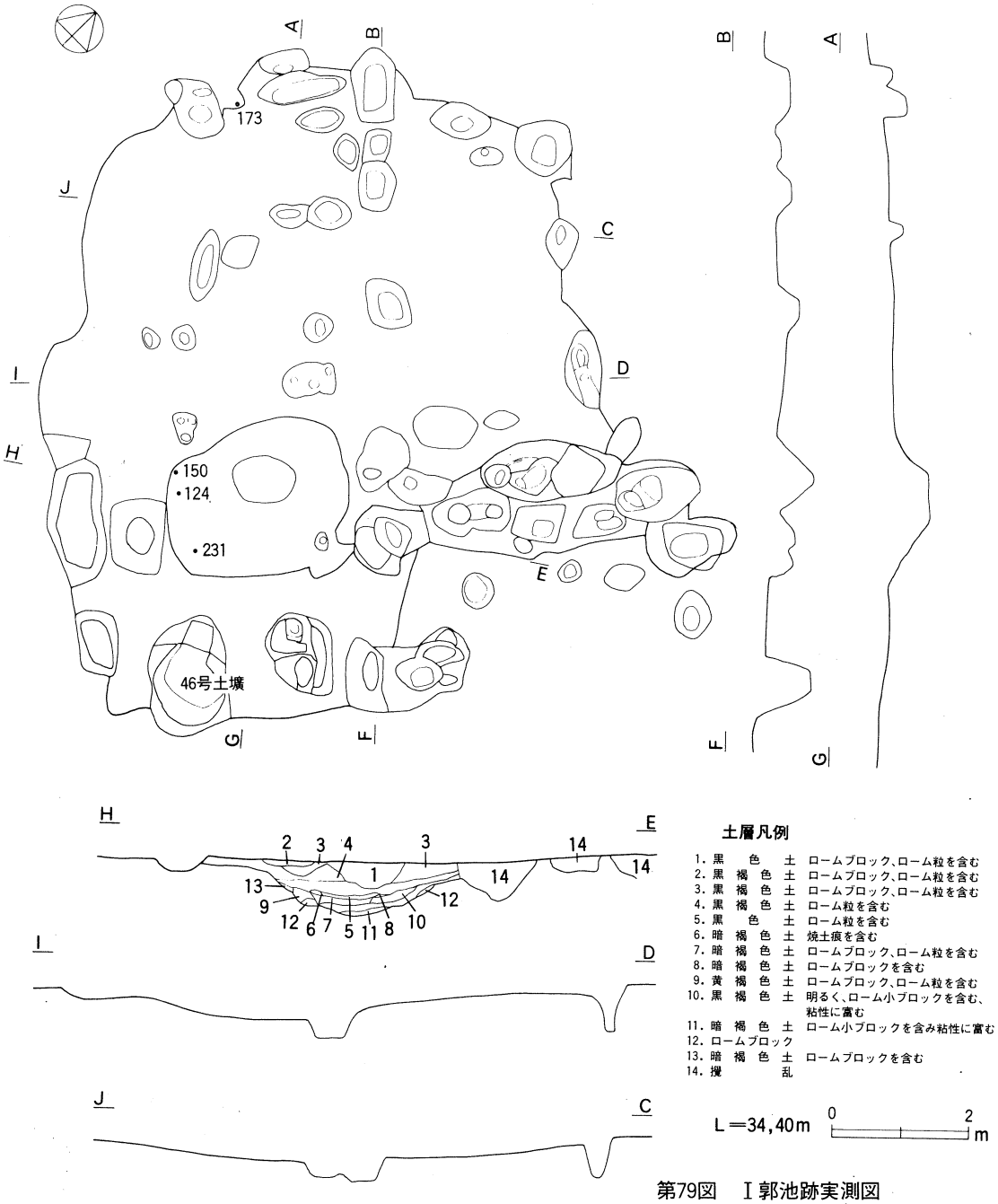
本遺構は、I郭の中央西側で第5号建物址と一部重複している。大きさは、東西径8.80m、南北径9.50m、深さ1.10mを計測し不整楕円形状を呈している。長軸方向は、N－45°－Wである。中心部は、東側に位置し擂鉢状を呈している。他の部分は、緩やかな斜面を呈している。中心部以外には、第5号建物址の柱穴以外に多数のPit状をなす掘り込みが所在しているものの、周辺の遺構とは結び付かない。

土層の堆積状況は、上面より黒色土、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土、ローム＝ブロックが堆積しており、第4層黒褐色土以下の各土層はレンズ状に堆積している。また、第10層黒褐色土と第11層暗褐色土は、非常に粘性に富む土層である。このことから、水が溜まっていた可能性を有するものの、中央部底面はハード＝ローム層内で止まっているため、雨水等が一時溜ったものと推定される。

出土遺物としては、カワラケ、内耳、砥石などの中世品と、土師器片、須恵器片などの土器、土玉などの土製品が出土している。このうち、図示出来たのは擂鉢片（第133図No124）、カワラケ（第137図No150）、土玉（第141図No231）のみである。

8）竪穴遺構（第82、83図、図版25）

ここでいう竪穴遺構とは、I郭の北側と北東部で確認された第1号～3号までの3遺構で、長方形等の形状をなす遺構である。以下、順に記述する。



土層凡例

1. 黒　色　土　ロームブロック、ローム粒を含む
2. 黒　褐　色　土　ロームブロック、ローム粒を含む
3. 黒　褐　色　土　ロームブロック、ローム粒を含む
4. 黒　褐　色　土　ローム粒を含む
5. 黒　色　土　ローム粒を含む
6. 暗　褐　色　土　焼土痕を含む
7. 暗　褐　色　土　ロームブロック、ローム粒を含む
8. 暗　褐　色　土　ロームブロックを含む
9. 黄　褐　色　土　ロームブロック、ローム粒を含む
10. 黒　褐　色　土　明るく、ローム小ブロックを含む、粘性に富む
11. 暗　褐　色　土　ローム小ブロックを含み粘性に富む
12. ロームブロック
13. 暗　褐　色　土　ロームブロックを含む
14. 攪　乱

第79図　Ⅰ郭池跡実測図

第１号竪穴（第82図、図版25）

本遺構は、Ｉ郭の北側で堀２、３と重複しており、堀２を掘り切っている。大きさは、東西径2.90m、南北径5.00m、深さ0.52mを計測し、長方形を呈している。方位は、Ｎ－58°－Ｅである。底面は、平坦で壁は斜めに掘り込まれている。Pitは、底面と壁面には掘り込まれていないが、壁外で壁に沿うように３本のPit（Ｐ１～３）が掘り込まれているが、東側には１本も掘り込まれていない。Ｐ１は、長径0.26m、短径0.23m、深さ0.16mを計測し不整円形状を呈している。Ｐ２は長径0.40m、短径0.35m、深さ0.17mを計測し円形状を呈している。Ｐ３は、長径0.46m短径0.36m、深さ0.19mを計測し楕円形状を呈している。３本のPitは、全て浅いPitである。

土層は、底面に黄褐色土（ローム＝ブロック）が厚く堆積しており、この上面に茶褐色土（２層に分かれる）が堆積している。このことから、本遺構は一度埋められたことを示している。

出土遺物は、皆無である。

第２号竪穴（第83図、図版25）

本遺構は、Ｉ郭の北東部で第55号土壙と第16号土壙の中間に位置している。本遺構は、耕作撹乱、柱穴等により一部を消失している。大きさは、東西径2.50m、南北径4.72m、深さ0.25mを計測し、楕円形状を呈している。底面は、平坦で壁は斜めに掘り込まれている。Pitは、中世建物址関係のPitで、本遺構に結び付くPitは確認されなかった。また、方位はＮ－34°－Ｗである。なお、底面は貼床状でしっかりと踏み固められている。

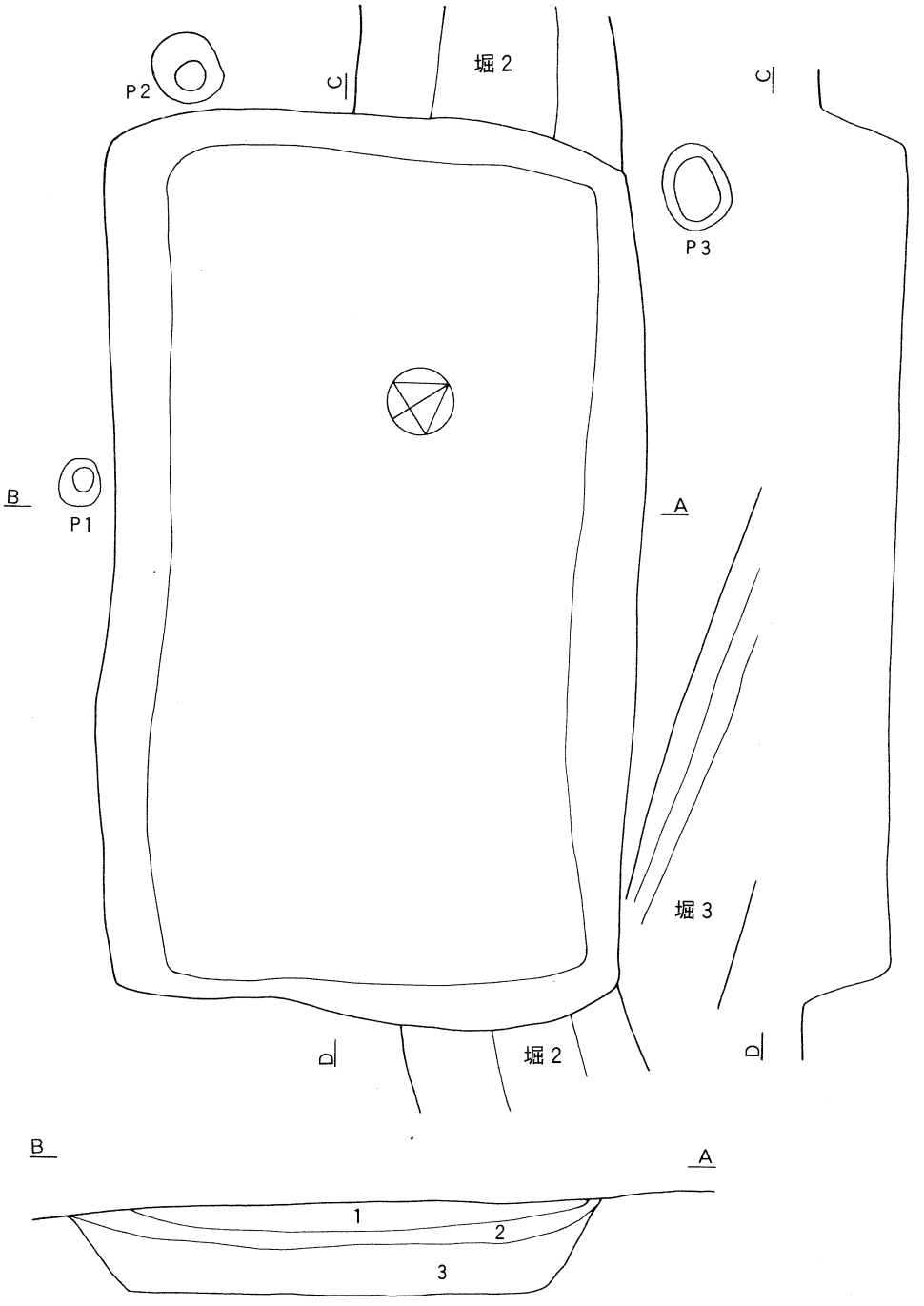
土層は、暗褐色土と暗茶褐色土が堆積しており、出土遺物としては碗、土師器などが出土しているが、図示可能な遺物ではない。

第３号竪穴（第83図、図版25）

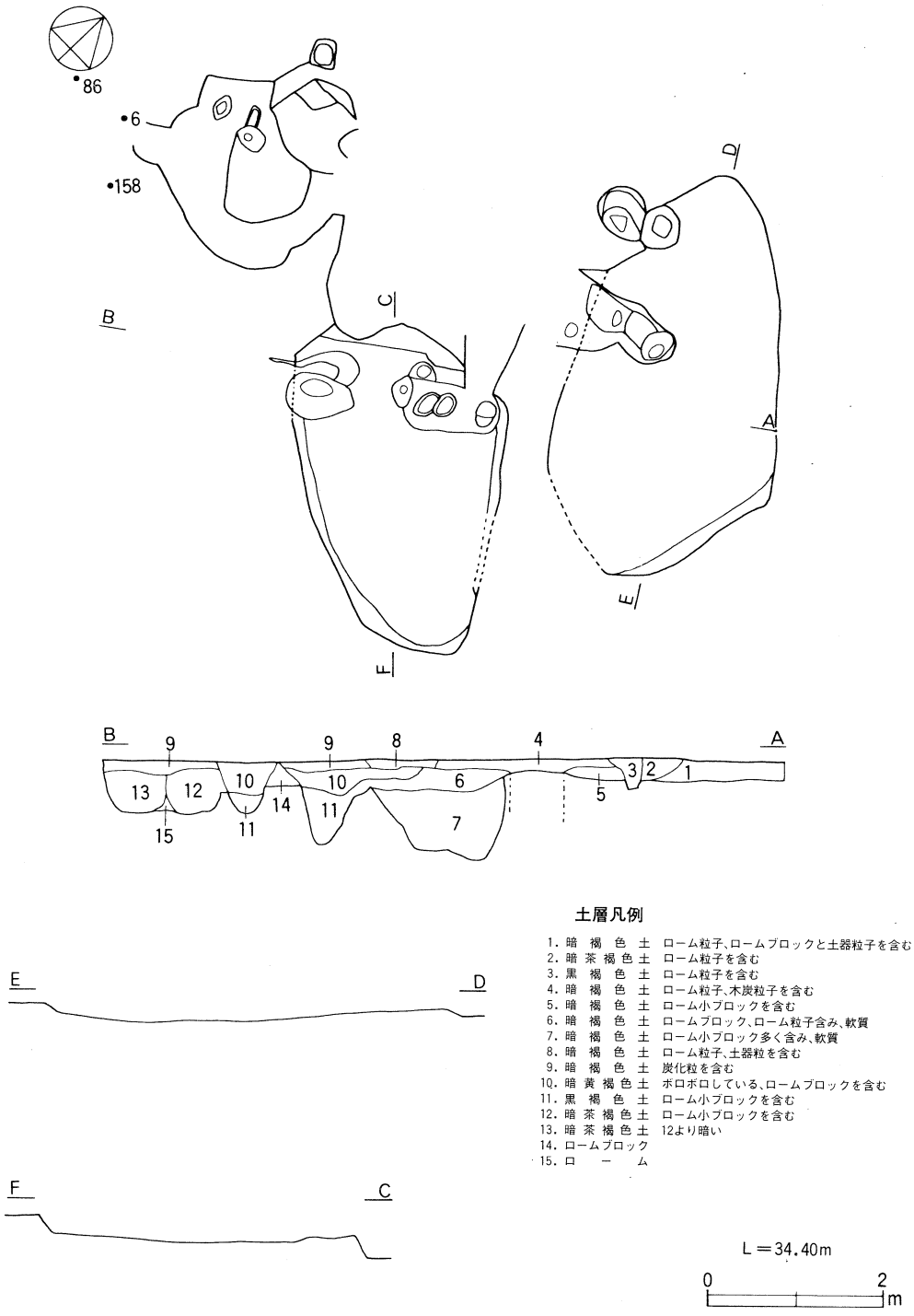
本遺構は、Ｉ郭北東部で第２号竪穴の南側に位置し、第２号竪穴と同様の状況を呈している。大きさは、東西径2.48m、南北径3.75m、深さ0.31mを計測し、楕円形状を呈している。方位はＮ－56°－Ｗである。底面は、厚い貼りロームでしっかり踏み固められている。壁は、東壁がほぼ垂直に掘り込まれている以外斜めに掘り込まれている。

土層は、暗褐色土と黄褐色土が堆積しており、多くは建物址関係の土層である。出土遺物は、火舎小片、カワラケ小片などが出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。

なお、本遺構の北西部から、天目茶碗（第121図No６）、外耳土器（第129図No86）、カワラケ



第80図　第1号竪穴実測図



土層凡例

1. 暗　褐　色　土　ローム粒子、ロームブロックと土器粒子を含む
2. 暗 茶 褐 色 土　ローム粒子を含む
3. 黒　褐　色　土　ローム粒子を含む
4. 暗　褐　色　土　ローム粒子、木炭粒子を含む
5. 暗　褐　色　土　ローム小ブロックを含む
6. 暗　褐　色　土　ロームブロック、ローム粒子含み、軟質
7. 暗　褐　色　土　ローム小ブロック多く含み、軟質
8. 暗　褐　色　土　ローム粒子、土器粒を含む
9. 暗　褐　色　土　炭化粒を含む
10. 暗 黄 褐 色 土　ボロボロしている、ロームブロックを含む
11. 黒　褐　色　土　ローム小ブロックを含む
12. 暗 茶 褐 色 土　ローム小ブロックを含む
13. 暗 茶 褐 色 土　12より暗い
14. ロームブロック
15. ロ　ー　ム

第81図　第2、3号竪穴実測図

（第137図No158）が出土しているものの、本址に結び付くかどうかは不明である。

9）炉址（第84～88図、図版26）

炉址としては、Ⅰ郭内から合計9ヶ所確認されている。第1号～第8号炉址は、建物址内に位置し、柱穴の根固め用等に用いられた可能性を有しているが、その多くは柱穴が埋められてからの炉址である。

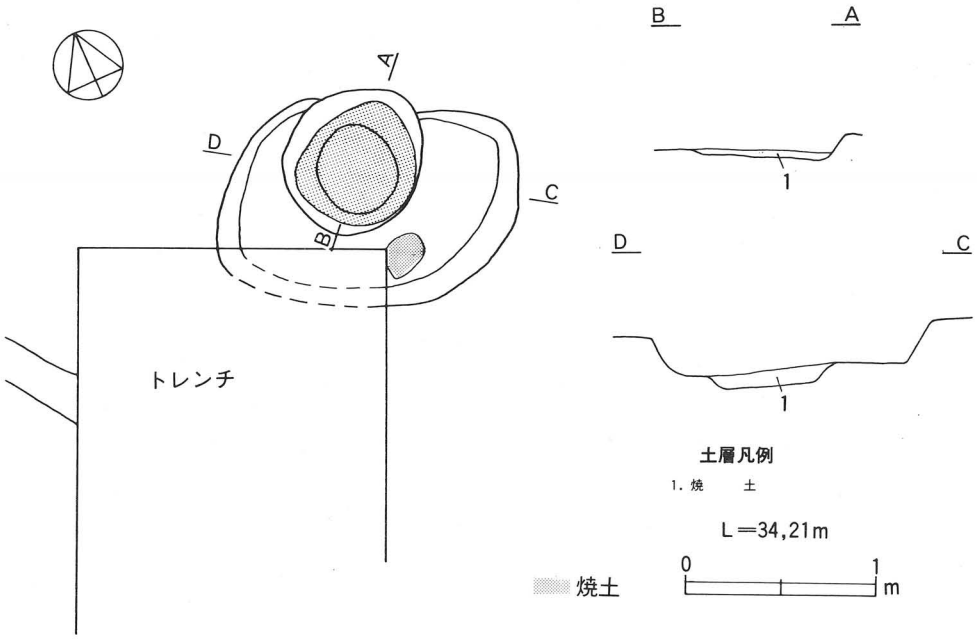
第1号炉址（第84図、図版26）

本炉址は、Ⅰ郭の東南斜面部に位置しており、同所にトレンチを入れた時北壁で確認された炉址である。2段の掘り込みを有し、中央に焼土が堆積している。大きさは、外径は東西径1.55m南北径1.00m、深さ0.20mを計測し、楕円形を呈している。方位としては、N－68°－Wである。この部分には、黄褐色土が堆積している。内径は、東西径0.72m、南北径0.80m、深さ0.08mを計測し、不整円形を呈している。方位は、N－44°－Eである。この部分には、焼土がしっかり堆積しており下位のロームは良く焼けている。また、上径底面には焼土が一部堆積している。遺物は、皆無である。

第2号炉址（第85図、図版26）

本炉址は、Ⅰ郭の北東部で第2号建物址と重複している。大きさは、東西径1.07m、南北径が0.89m、深さ0.10mを計測する。形状は、長方形状を呈するが、焼土は中央部に位置している。焼土の範囲は、固くしまっている部分としまっていない部分とがある。前者は、0.45m×0.35m×0.10mで、後者は0.31m×0.20m×0.10mを計測する。焼土の周囲には、茶褐色粘土（10層）を敷いており、この外周は暗茶褐色土（9層）がある。炉址の下位は、柱穴である。柱穴の柱痕部は、6層がこれに相当する。遺物は、皆無である。

この結果、本炉址は柱穴を埋めてから根固め用としていたことが判明し、固くしまった焼土（A）が根固め部分と判断される。



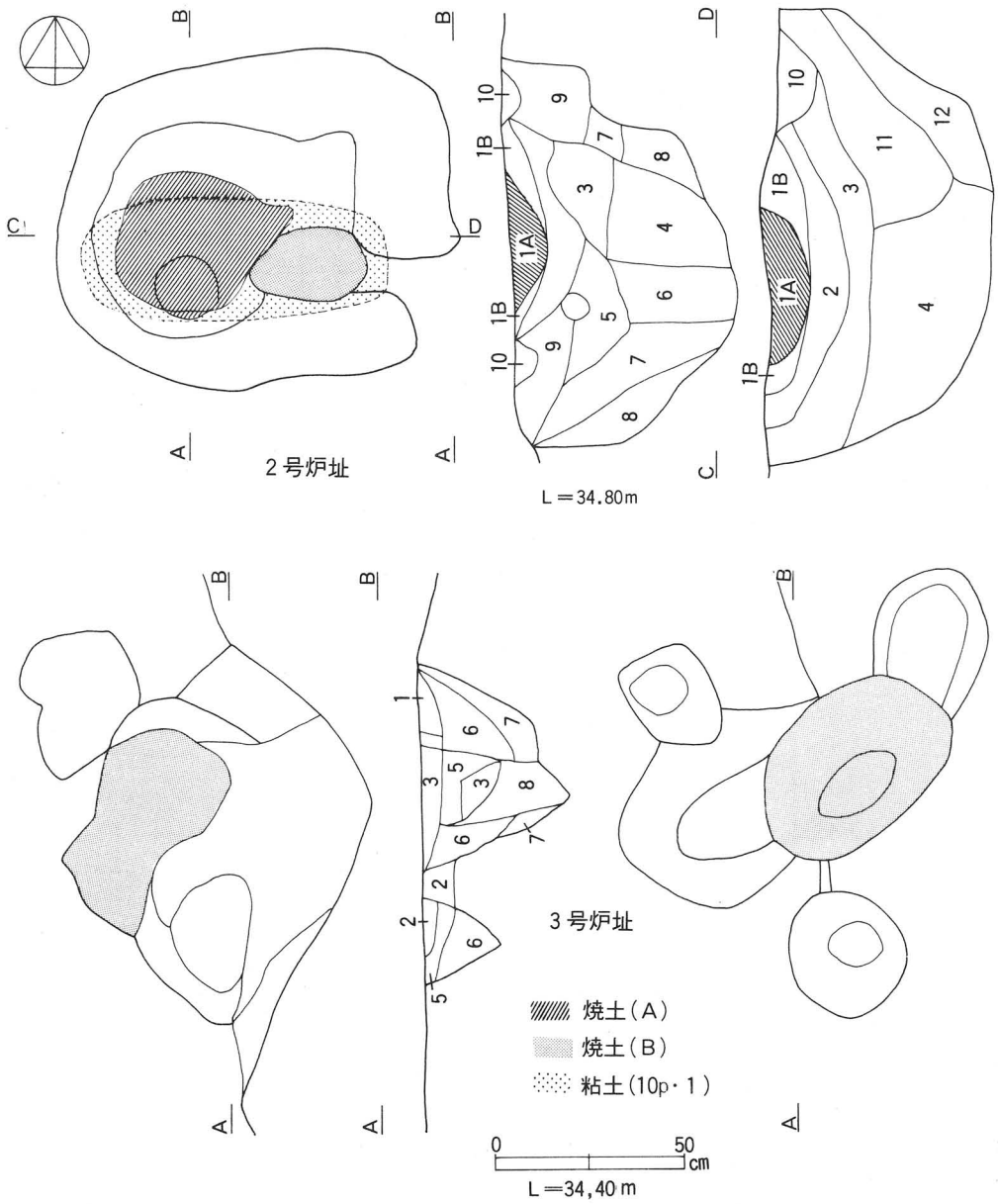
第84図　第１号炉址実測図

第３号炉址（第85図、図版26）

本炉址は、Ｉ郭西側で第55号建物址内で確認され上面と下面は異なり下位は柱穴となっている。炉址の大きさは、東西径0.33m、南北0.53m、深さ0.15mを計測し、不整形を呈している。方位としては、Ｎ－40°－Ｅである。焼土は、しっかりと堆積している。下位は、東西径0.38m、南北径0.56m、深さ0.40mを計測し楕円形を呈している。底面及び壁面は、比較的焼けている。

第４号炉址（第86図、図版26）

本炉址は、Ｉ郭の中央西側で第46号建物址の北側に位置している。大きさは、東西径0.82m、南北径1.05m、深さ0.08mを計測し、楕円形を呈している。方位は、Ｎ－０°－Ｅである。焼土層は、長さ0.35m、幅0.25m、厚さ0.04mを計測し楕円形を呈しており、掘り方とは異なり北西方向を向いている。焼土下のローム層は、あまり分解していない。遺物は、皆無である。



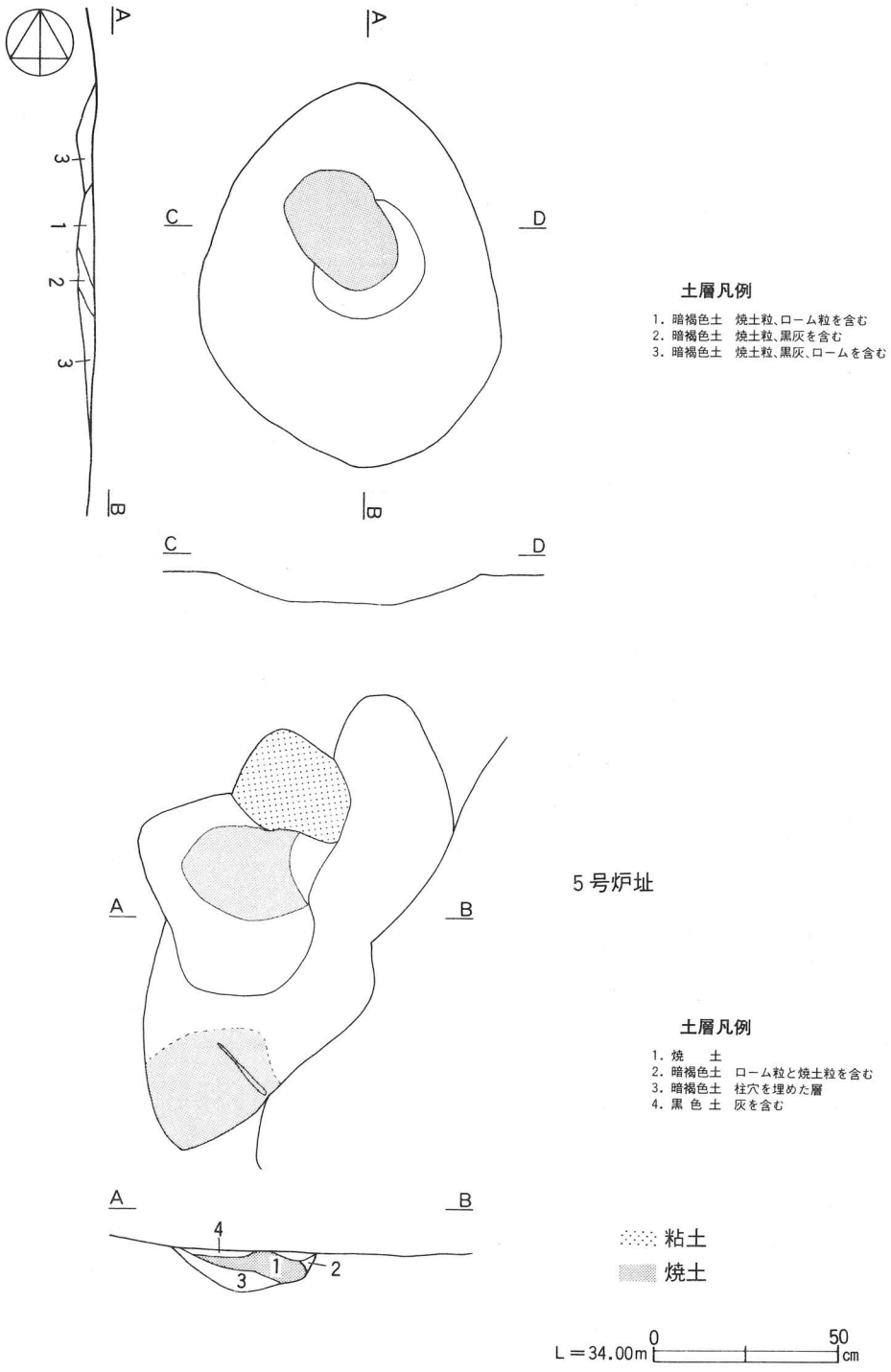
土層凡例(2号)

1. 焼 土 A　固くしまっている
   焼 土 B　しまっていない
2. 暗褐色土　ローム粒、炭化粒、焼土粒を含む
3. 暗褐色土　ロームブロック、炭化粒を含む
4. 暗褐色土　ローム小ブロック、黒色土を含む
5. 暗褐色土　黒灰を含む
6. 暗褐色土　黒灰、ローム小ブロックを含む
7. 暗褐色土　ロームブロック、ローム粒を含む
8. 暗褐色土　さらさらしている
9. 暗茶褐色土　炭化粒、ロームブロックを含む
10. 茶褐色粘土
11. 暗褐色土
12. 暗褐色土

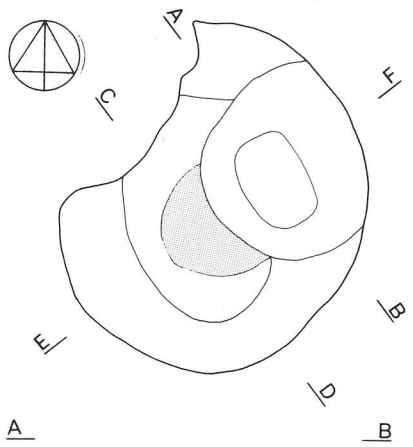
土層凡例(3号)

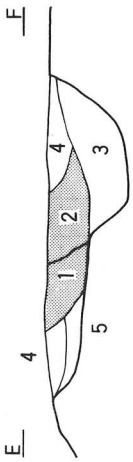
1. 暗 褐 色 土　炭化物を含む
2. ロームブロック
3. 暗 褐 色 土　黒灰を含む
4. 暗 褐 色 土　黒灰と焼土粒を含む
5. 暗 褐 色 土　黒灰、ローム粒を含む
6. 暗黄褐色土　黒灰を含む、柔かい
7. 暗黄褐色土　ロームブロックを含む
8. 暗黄褐色土　柔らかい、ローム粒、ロームブロックを含む

第85図　第2号、3号炉址実測図



第86図　第４、５号炉址実測図

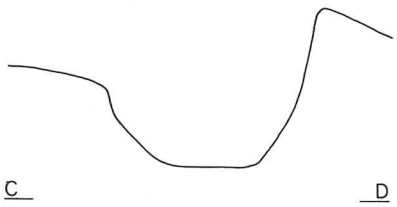


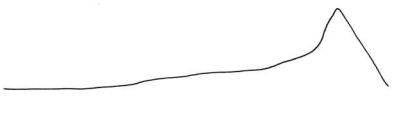


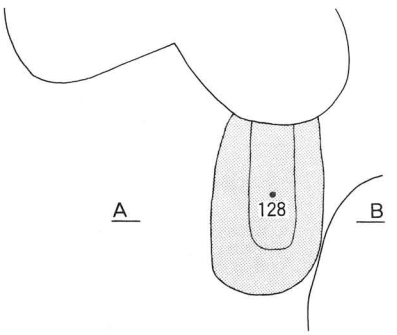
土層凡例

1. 焼　　土
2. 焼　　土　褐色土が混じる
3. 黄 褐 色 土　酸化還元層
4. 暗黄褐色土　ロームブロックと焼土粒を含む
5. 暗 褐 色 土　ロームブロックを含む、酸化還元層

6号炉址

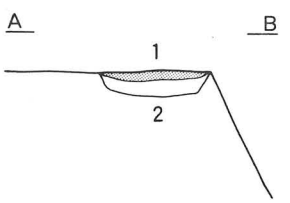






土層凡例

1. 焼　　土
2. 暗黄褐色土　ロームブロックを含み、黒色土が混入している



7号炉址

焼土

第87図　第6、7号炉址実測図

第５号炉址（第88図、図版26）

本址は、Ｉ郭の南側中央部で第30号建物址と重複している。焼土域は、２ヶ所に分かれており北側の焼土域には粘土が貼られている。全体での大きさは、東西径0.60m、南北径1.20m、深さ0.11mを計測し、不整楕円形を呈している。方位としては、Ｎ－18°－Ｅである。北側の焼土域は、長径0.30m、短径0.26m、深さ0.10mを計測し、楕円形を呈している。焼土は、厚くしっかりと堆積している。南側の焼土は、長径0.38m、短径0.32m、深さ0.11mを計測し、不整形である。焼土は、暗褐色土上に７cmの厚さで堆積している。

本址の下位は、第30号建物址の柱穴となるため、暗褐色土（３層）は柱穴の覆土上層に相当し南側焼土下で柱穴内より青銅製の斧（第134図No128）が、横位で１点出土しているが、炉址内からは何ら出土しなかった。

第６号炉址（第87図、図版26）

本炉址は、Ｉ郭の中央部で第58号土壙の北東部に位置している。北西部は、柱穴により消失しており、掘り方と燃焼域からなっている。掘り方の大きさは、長径0.88m、短径0.62m、深さは0.10mを計測し楕円形を呈している。方位は、Ｎ－50°－Ｅである。燃焼部は、長径0.37m、短径0.30m、焼土の厚さは0.10mである。焼土は、しっかり堆積しているが南側はブロック状をなしている。北側焼土（２）下には、灰層があり下位のロームは良く分解している。よって、１の焼土の部分が旧炉であったものと推定される。

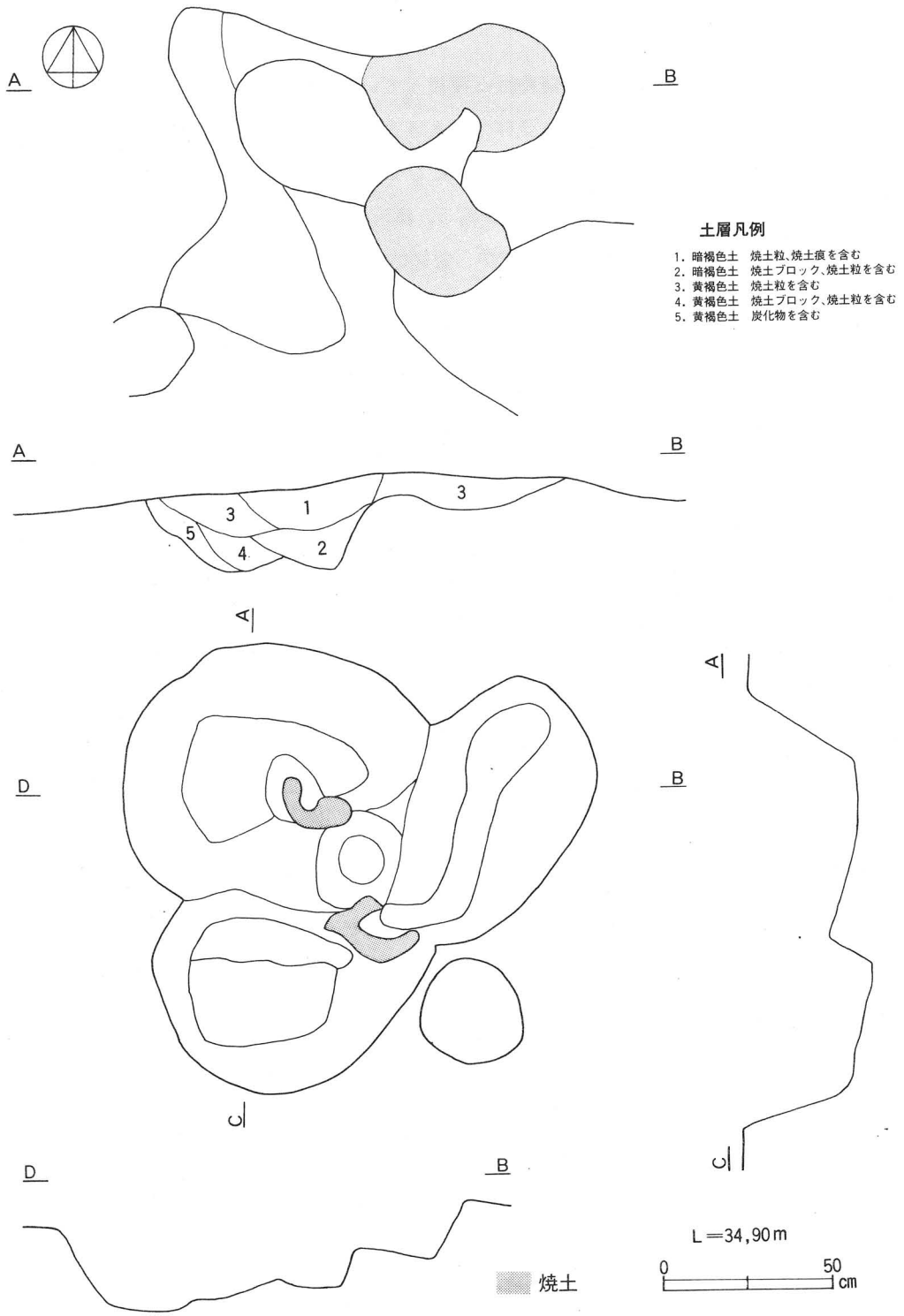
出土遺物は、皆無である。

第７号炉址（第87図）

本炉址は、Ｉ郭中央南側で第30号建物址内と重複し、柱穴に北側を切られている。大きさは、東西径0.29m、南北径0.45m、深さ0.08mを計測し、楕円形を呈している。方位は、Ｎ－０°－Ｅである。焼土は、厚さ３cmでしっかりと堆積している。遺物は、皆無である。

第８号炉址（第88図）

本炉址は、Ｉ郭の中央東側に位置し、２ヶ所の焼土域があり、焼土下は柱穴となっている。北側の焼土域は、長径0.60m、短径0.38m、焼土厚0.10mを計測し、不整楕円形状を呈している。



第88図　第８号炉址実測図

焼土域は、焼土粒を多量に含む黄褐色土で、下位のローム層は良く焼けている。南側の焼土域は長径0.42m、短径0.30m、焼土厚0.11mを計測し、楕円形をなしている。焼土は、しっかりと堆積しており、下位のローム層も良く焼けている。焼土下のローム層は、柱穴を埋めるために用いられたローム層である。

焼土層下は、柱穴である。深さは、0.30～0.37mを計測する。下位には、ロームが焼けて焼土ブロック化した部分が、北側と南側にある。この東側上面が、焼土域である。このため、本址は炉穴の可能性を有するが、記述上炉址として記述した。

出土遺物は、皆無である。

10) 貝層（第89～92図、図版24）

貝層としては、Ⅰ郭内より7ヶ所で確認された。最大の貝層としては、Ⅰ郭中央北側で第17号建物址内の貝層と、Ⅰ郭中央東側で第4号堀東側に接した貝層である。他の貝層は、全て堀や溝内から出土している。

貝層1は、第3号堀北側で2基の落し穴状土壙間に位置し、同堀が埋められた時に一緒に捨てられている。貝層の大きさは、長さ2.05m、幅1.50m、厚さ0.30m～0.45mを計測する。貝層は純貝層ではなく、暗茶褐色土を含む混土貝層である。第89図の第5～9層がこれで、貝が密な貝層と粗な貝層があり、多少の時間差が所在するようである。貝は、シジミである。

貝層2は、貝層1の北側で落し穴状遺構内に位置している。貝層の大きさは、長さ1.15m、幅0.48m、厚さ0.10mを計測し、西側から捨てられた状況を呈している。貝層は、混土貝層で貝はシジミである。

貝層3（第90図）は、第4号堀東側で同堀と接している。貝層としては、第4号堀が埋められてから、捨場として使用されたことをその土層が示している。大きさは、長径4.00m、短径1.57m、厚さ0.17mを計測し、楕円形をなしている。貝層は、シジミの混土貝層で南側につれて厚みを増している。貝層内からは、シジミ以外にカワラケ片、内耳土器片などが出土している。

貝層4（第91図）は、第5号堀内北東部土橋の南側で出土している。同堀が、埋められる時に埋土と一緒に捨てられた貝層である。大きさは、長さ0.70m、幅0.55m、厚さ0.10mを計測し楕円形状を呈している。貝層は、シジミと黒褐色土との混土貝層である。

貝層5（第91図）は、第17号建物址の南側に位置している。大きさは、長径3.70m、短径1.85m、厚さ0.20～0.30mを計測し、楕円形状を呈している。貝層は、シジミの純貝土層でかなり密の状況である。貝層下には、砂（暗灰色砂）が堆積している。

出土遺物としては、シジミ以外には内耳土器片、カワラケ片、擂鉢片などが出土しているが、

全て小破片である。

貝層6（第92図）は、第5号堀の北側中央部に位置している。大きさは、長径1.50m、短径は0.70m、厚さ0.10mを計測し、不整形を呈している。貝層は、シジミと黒色土との混貝土層であり、堀を埋める時南方より捨てられた状況を示す。出土遺物は、シジミ以外に瓶（No49）、壷（No62）、火埜（No68）、浅鉢（No109）、カワラケ（No201）などが出土している。貝層7は、第7号溝の中央部に位置している。大きさは、長径1.50m、短径1.20m、厚さ0.01mを計測し、方形状を呈している。貝層は、混土貝層できわめて薄い貝層である。遺物は、シジミ以外皆無であり、貝層の位置は第7号溝上面と同一平面をなしている。

11）土壙（第93～118図、第60表、図版27～34）

土壙としては、粘土貼り土壙、井戸、墓壙（人骨を埋葬したものと、馬を埋葬したものとがある。）、その他の土壙などに分けることが出来る。土壙総数では、59基確認されている。59基の内容は、粘土貼り土壙19基、井戸2基、人骨を供なう墓壙1基、馬骨を供なう墓壙9基、その他28基である。粘土貼り土壙より、順次記述して行く。

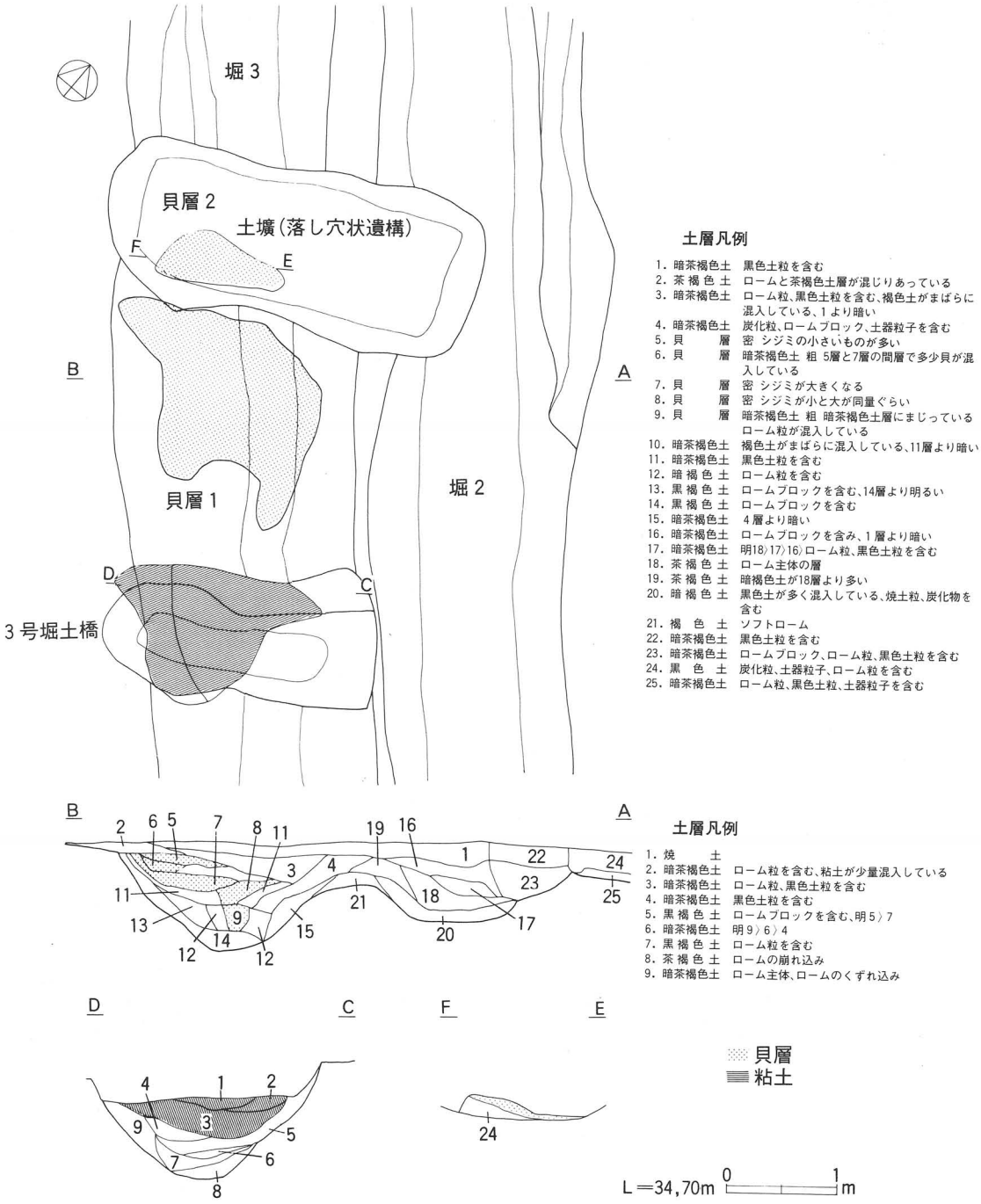
第1号土壙（第93図、図版27）

本土壙は、Ⅰ郭の北東部西側に位置している。大きさは、東西径1.50m、南北径2.54m、深さ0.30mを計測し、楕円形状をなし南北に長軸を有している。方位は、N－52°－Eである。南側は、柱穴等により破壊されている。土壙底は、ほぼ平坦で壁は、垂直に掘り込まれている。また土壙底南側は、一段下がっている。規模は、0.75m×0.70m×0.08mと、きわめて低い段差である。粘土は、0.09m～0.08mの厚さを有し、全面貼り付けられている。南側は、やや薄く0.05m程度である。壁には、2本の柱穴が掘り込まれている。

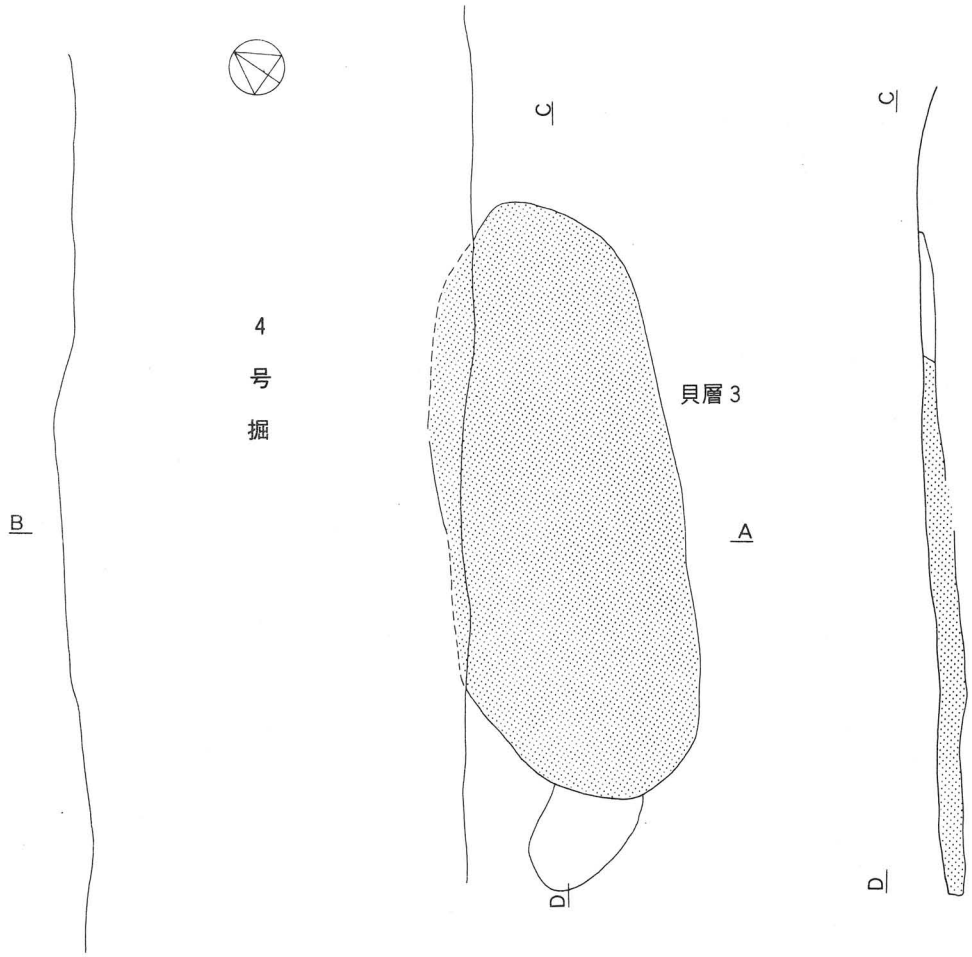
土壙内覆土は、南側に茶褐色粘土層が堆積し、この上面と土壙底面より暗褐色粘土層が順次堆積しているが、第4層が中央部で高くなっており、重複とも考えられるが確証はない。各土層とも、ロームブロック等を含み粘性に富んでいる。遺物は、何ら検出されなかった。

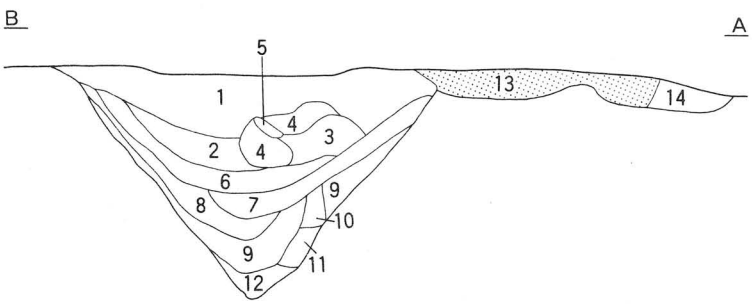
第2号土壙（第93図、図版27）

本土壙は、Ⅰ郭の北西部で第26、39号建物址の北西に位置し、土壙も新（2A）旧（2B）を有している。Aは、東西径1.43m、南北径2.20m、深さ0.44mを計測し、楕円形をなしている。



第89図　貝層1、2・土橋・土壙(落し穴状遺構)実測図





貝層

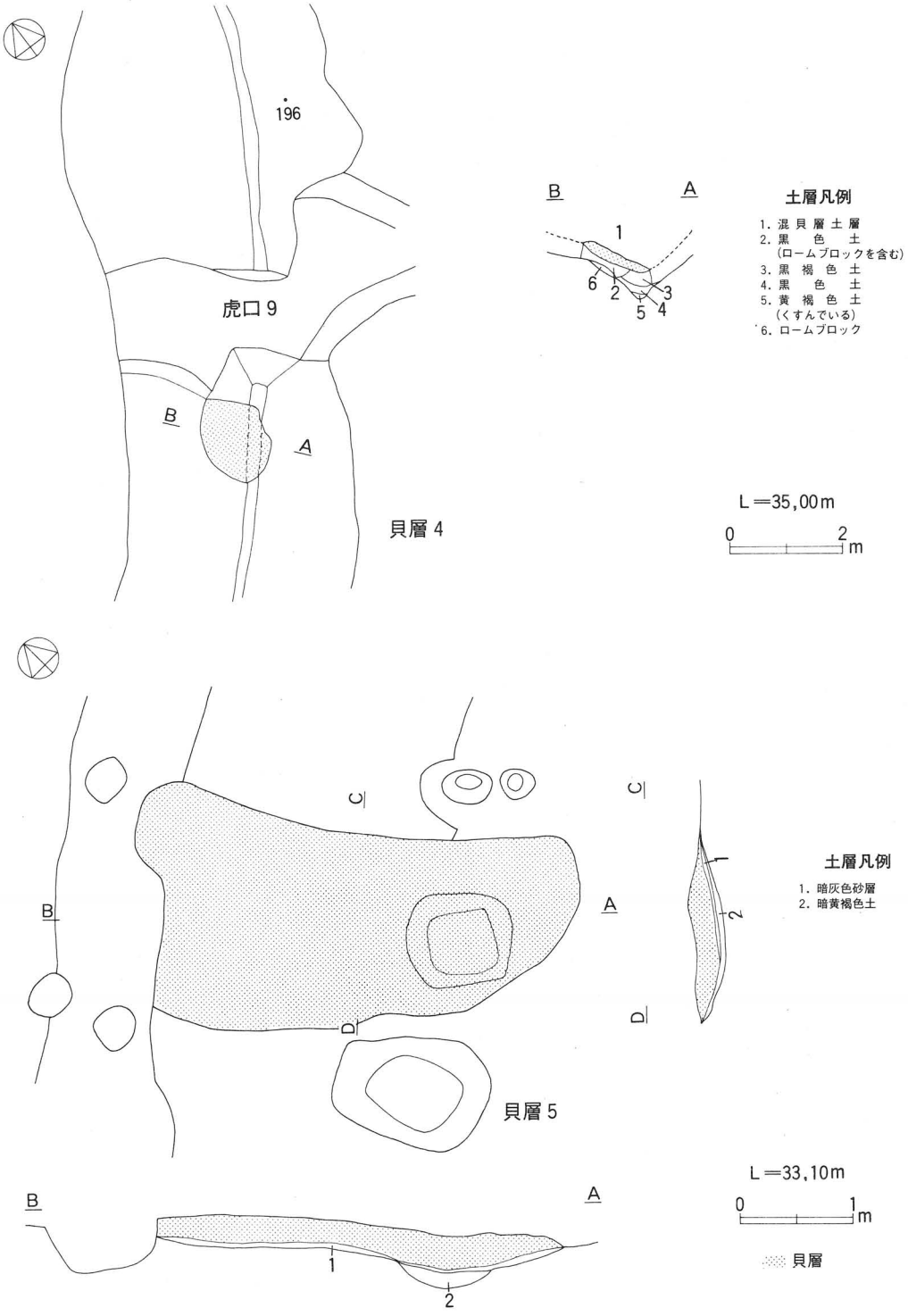
土層凡例

1. ロームブロック
2. 黒　色　土　ローム粒とロームブロックを含み、明るい
3. 粘土ブロック
4. ロームブロック　くすんでいる
5. 黒　色　土　ロームブロックを含み、くすんでいる
6. 黒　色　土　ローム小ブロックを含み、硬くしまっている
7. 黄　褐　色　土　ローム層でロームブロックを含み、くすんでいる
8. 黄　褐　色　土　ローム小ブロックを含み、くすんでいる、7層より暗い
9. 黄　褐　色　土　ローム小ブロック層で、しまっている
10. 黄　褐　色　土　ロームブロックで分解している、しまりがない
11. 黄　褐　色　土　10層より、暗い
12. 黄　褐　色　土　ロームブロックを含み、暗くくすんでおり、はりがない
13. 黒　色　土　混貝土層
14. 暗　褐　色　土　貝小片とロームブロックを含む

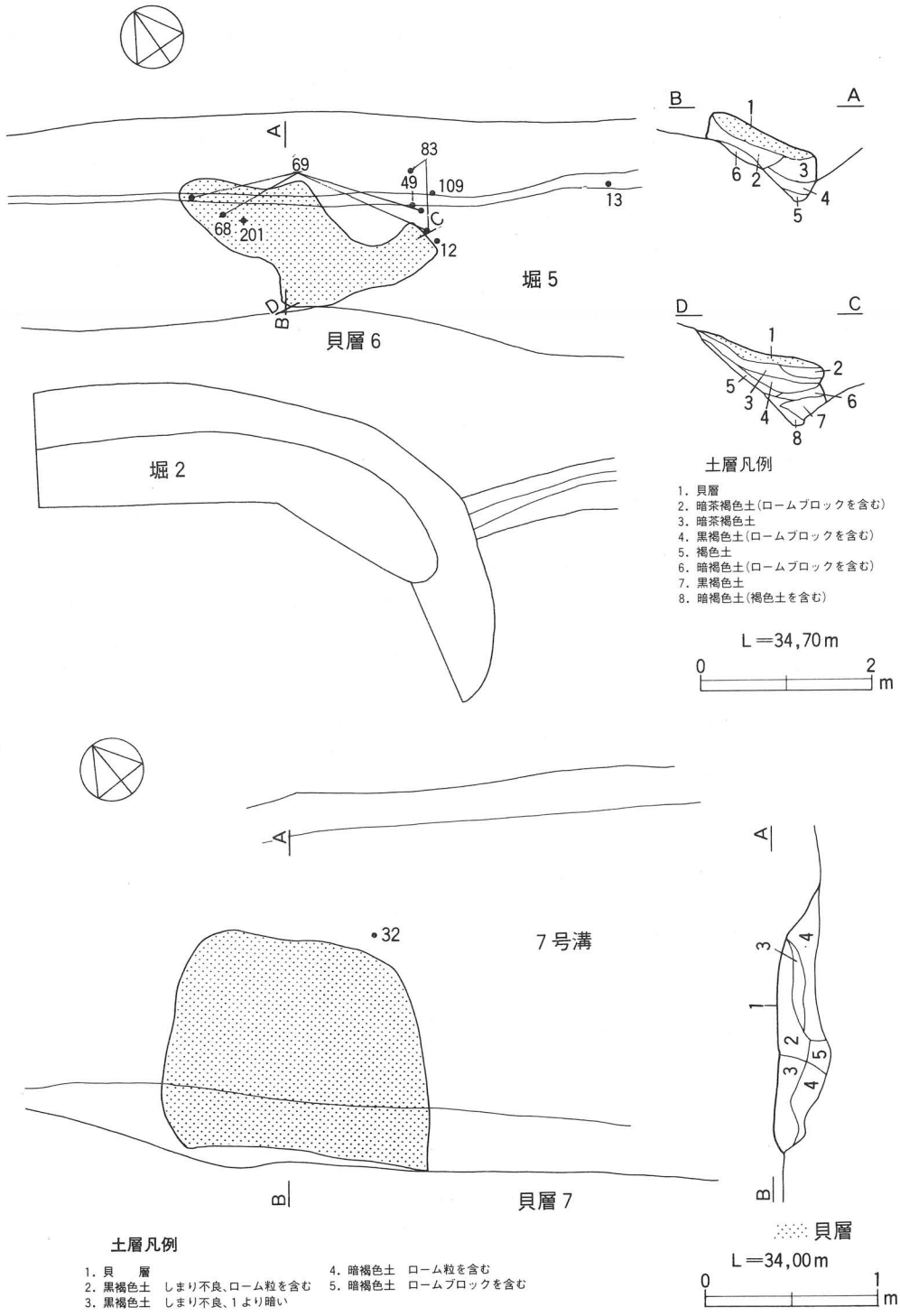
L＝34,30m

0　1 m

第90図　貝層3実測図



第91図　貝層4、5実測図



第92図　貝層6、7実測図

方位は、N－46°－Wである。北西部は、柱穴により破壊されている。土壙底は、南側から北側にかけて斜めになっている。その差は、0.09m程度である。壁は、斜めに掘り込まれている。粘土は、0.06m～0.10mの厚さでしっかりと貼り付けられている。Bは、Aの北東でAに切られている。確認面の大きさは、東西径0.70m、南北径2.06m、深さ0.50mを計測し、長方形状を呈している。底面は本来平坦であったものが、Aの粘土貼りによりBの底面が盛り上がった状況を示している。壁は、斜めで粘土は0.07mとAより厚く貼り付けている。

土層は、Aに茶褐色土、茶褐色粘土、青色粘土が堆積し、Bには暗茶褐色粘土が堆積している。この土層は、粘土層以外ではロームブロック、粘土ブロック等を含み粘性に富んでいる。

出土遺物は、皆無である。

第3号土壙（第94図）

本土壙は、I郭の北西部で第26、39号建物址と重複している。このため、土壙の西壁、東壁、底部の一部を、柱穴に掘り切られている。

土壙の大きさは、東西径1.70m、南北径2.65m、深さ0.52mを計測し、N－43°－Wに方位を有し、長方形を呈している。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。粘土は、土壙中央部で0.03m、壁付近で0.06m～0.08mと、壁付近が厚く貼られている。このため、粘土を貼った面での土壙底は、緩やかな曲線をなしている。

土壙内の覆土は、ロームブロックと粘土ブロックを褐色土が堆積しており、中央部の土層は柱穴の土層である。

出土遺物は、皆無である。

第4号土壙（第94図）

本土壙は、I郭の南西部に位置し、第3号溝と重複し上面を切られている。大きさは、東西径1.40m、南北径1.95m、深さ0.26mを計測し、方位をN－39°－Eに有し、長方形状を呈している。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土層は、黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土が堆積しており、各々ロームブロックや粘土粒子などを含んでおり、土壙底の黒褐色土は粘性に富んでいる。粘土は、0.05m～0.20mの厚さでしっかりと貼り付けられている。

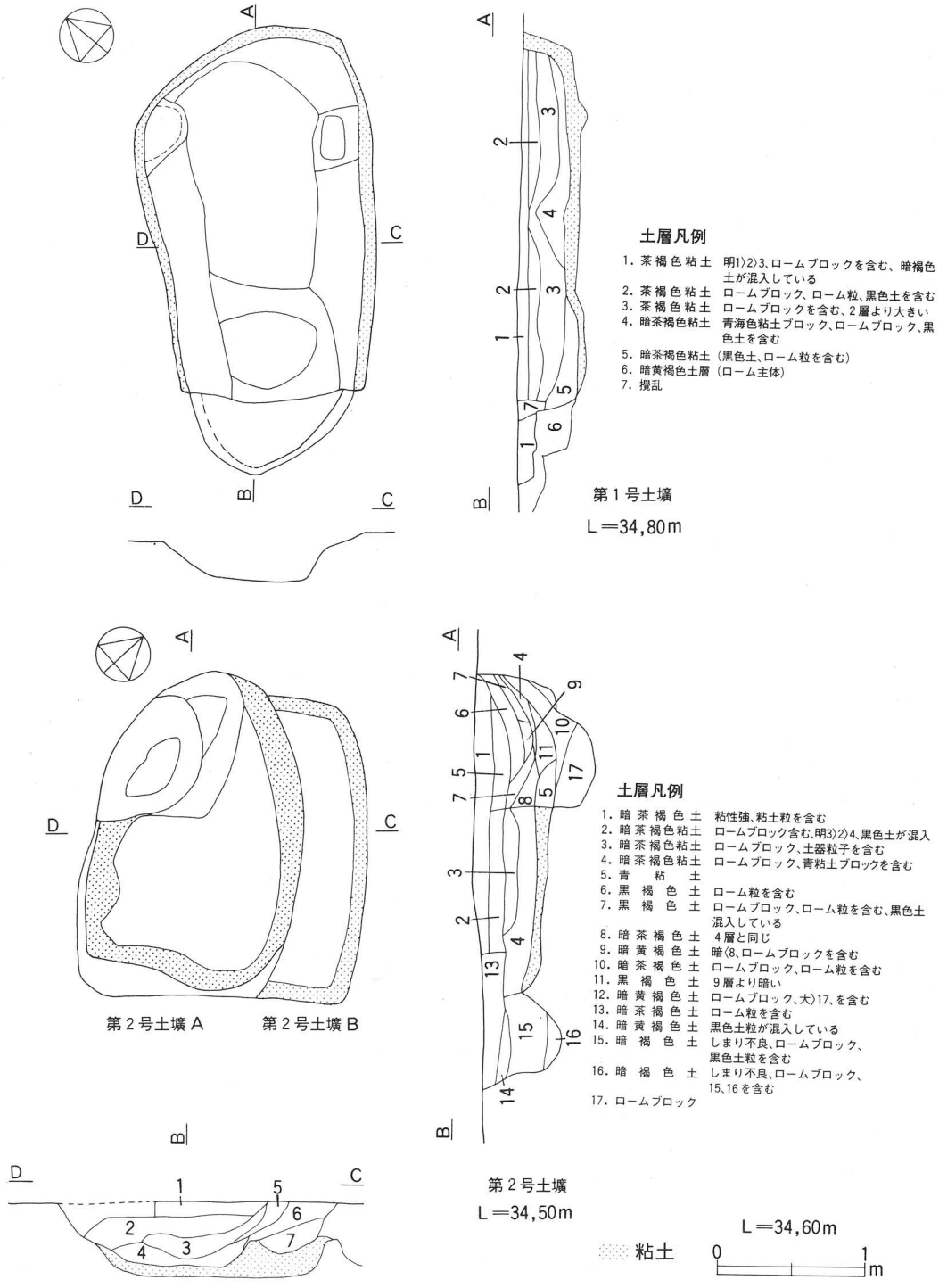
出土遺物は、皆無である。

第60表　土壙一覧表１（粘土貼り）

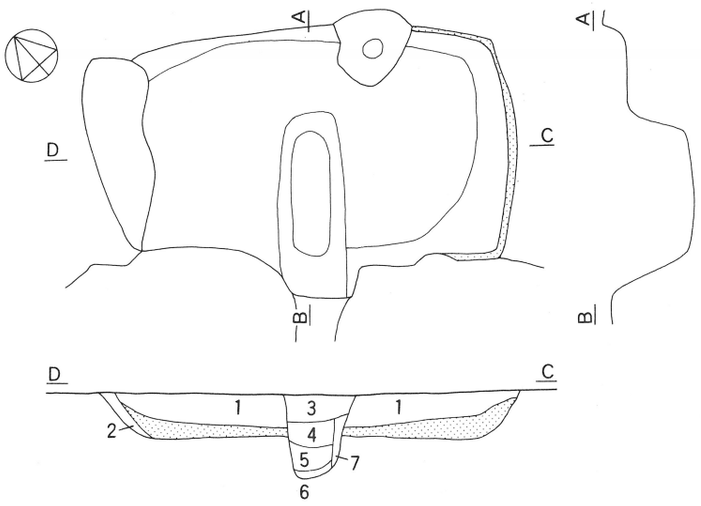
NO	大きさ(m)			形　状	方　位	備　　考
	東西径	南北径	深　さ			
第１号土壙	1.50	2.54	0.30	楕円形	N－52°－E	
第２号土壙	A1.43	2.20	0.44	楕円形	N－46°－W	B 2.06m ×0.70m ×0.50m で長方形をなす
第３号土壙	1.70	2.65	0.52	長方形	N－43°－W	
第４号土壙	1.40	1.95	0.26	長方形	N－39°－E	第3号溝と重複
第５号土壙	2.20	2.49	0.45	正方形	N－42°－E	小札(134－132)
第６号土壙	3.05	3.30	0.27	長方形	N－47°－E	
第７号土壙	3.15	1.60	0.51	長方形	N－43°－W	内耳(129－85)
第８号土壙	3.35	2.70	0.30	長方形	N－43°－W	A2.00m×1.60m ×0.30m N－47°－E カワラケ(137－171.172) B2.45m×2.80m ×0.25m N－47－E 砥石(140－220)
第９号土壙	1.95	2.85	0.48	長方形	N－39°－E	
第10号土壙	1.03	1.35	0.60	長方形	N－47°－E	
第11号土壙	1.05	1.50	0.10	楕円形	N－29°－W	
第12号土壙	1.45	1.15	0.37	長方形	N－35°－W	
第13号土壙	1.78	1.70	0.07	正方形	N－41°－W	
第14号土壙	1.75	3.32	0.53	楕円形	N－52°－E	
第15号土壙	2.10	1.50	0.66	長方形	N－70°－E	壷(123－55)
第16号土壙	1.56	1.20	0.25	長方形	N－55°－W	砥石　(140－221.222)
第17号土壙	1.50	2.10	0.57	長方形	N－33°－W	土玉(141－239)
第18号土壙	1.34	2.00	0.15	楕円形	N－32°－W	
第19号土壙	1.18	1.50	0.38	長方形	N－37°－W	
第20号土壙	A0.95	1.15	0.70	円　形	AN－18°－W BN－ 0 °－E	（井戸）B1.53 ×1.67×2.80
第21号土壙	1.10	1.05	4.28	円　形	N－46°－E	（井戸）
第22号土壙	0.80	1.02	0.46	楕円形	N－20°－E	（人骨）古銭(156－350～355)
第23号土壙	0.96	1.95	0.20	楕円形	N－15°－E	（馬骨）
第24号土壙	1.52	1.90	0.23	楕円形	N－63°－E	（馬骨）
第25号土壙	1.43	1.96	0.26	楕円形	N－66°－E	（馬骨）
第26号土壙	2.16	1.50	0.28	楕円形	N－64°－E	（馬骨）
第27号土壙	1.33	1.35	0.47	正方形	N－50°－E	（馬骨）
第28号土壙	0.70	1.40	0.25	楕円形	N－50°－E	（馬骨）
第29号土壙	1.47	2.13	0.67	長方形	N－31°－W	（馬骨）
第30号土壙	3.75	2.10	0.56	楕円形	N－52°－W	（馬骨）浅鉢(131－111）カワラケ(137－174)
第31号土壙	1.22	1.66	0.25	楕円形	N－50°－E	（馬骨）

第60表　土壙一覧表 2

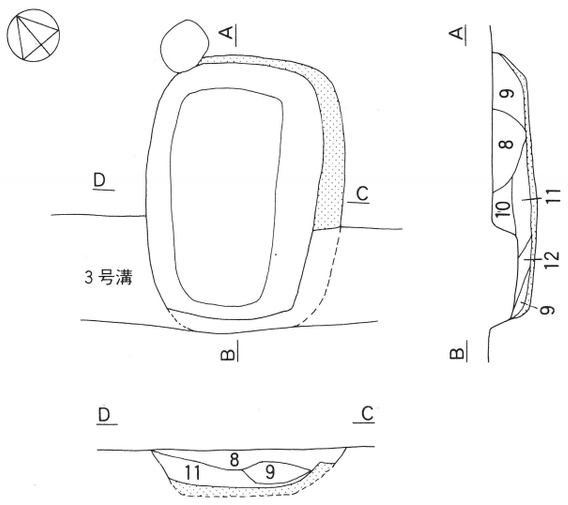
NO	大きさ(m)			形　状	方　位	備　考
	東西径	南北径	深　さ			
第32号土壙	1.25	1.20	0.91	円　形	N－40°－W	
第33号土壙	0.60	0.75	0.21	楕円形		火舎(127－73)
第34号土壙	1.80	0.90	0.35	楕円形	N－31°－W	
第35号土壙	2.10	1.75	0.45	楕円形	N－50°－E	
第36号土壙	1.05	1.25	0.14	楕円形		
第37号土壙	1.30	1.70	0.46	楕円形	N－47°－W	
第38号土壙	1.90	1.85	0.66	円　形	N－52°－E	
第39号土壙	0.95	1.10	0.16	楕円形	N－40°－E	小皿(122－36)
第40号土壙	1.34	1.85	0.42	長方形		
第41号土壙	2.00	2.15	0.49	不整長方形	N－30°－E	
第42号土壙	1.33	1.00	0.34	楕円形	N－43°－E	
第43号土壙	0.78	0.63	0.45	楕円形	N－43°－E	
第44号土壙	1.52	2.23	0.54	楕円形	N－55°－E	
第45号土壙	3.23	2.00	0.50	長方形	N－47°－W	粘土貼り　カワラケ(138－182)
第46号土壙	1.15	1.90	0.37	楕円形	N－26°－W	
第47号土壙	2.07	1.60	0.30	不整形	N－79°－E	寛永通貨(156－370)
第48号土壙	1.15	1.35	1.54	楕円形	N－5 °－E	
第49号土壙	1.11	1.35	1.60	楕円形	N－3 °－W	
第50号土壙	0.85	1.00	0.50	円　形	N－0 °－E	
第51号土壙	0.98	1.00	0.60	隅丸円形	N－40°－E	
第52号土壙	0.94	0.94	0.55	隅丸円形	N－45°－E	
第53号土壙	0.95	1.05	0.72	不整円形	N－33°－E	
第54号土壙	2.65	3.23	1.50	不整円形	N－23°－W	
第55号土壙	4.80	6.80	1.05	楕円形	N－30°－E	
第56号土壙	1.20	1.20	0.17	円　形	N－43°－E	土玉(141－246)
第57号土壙	1.40	1.50	0.60	正方形	N－38°－W	
第58号土壙	1.55	1.70	0.14	隅丸方形	N－44°－W	
第59号土壙	1.67	1.90	0.37	不整楕円形		カワラケ(137－175)　土玉(141－236～238.246)
第60号土壙	0.98	0.98	0.45	不整円形	N－53°－W	
第61号土壙	0.80	0.70	0.35	隅丸方形	N－55°－E	
第62号土壙	0.92	1.10	1.65		N－23°－E	
第63号土壙	0.65	0.65	1.62	不整円形	N－34°－E	
第64号土壙	0.55	0.68	1.79	楕円形	N－52°－W	
第65号土壙	0.68	0.86	0.65	楕円形	N－13°－W	



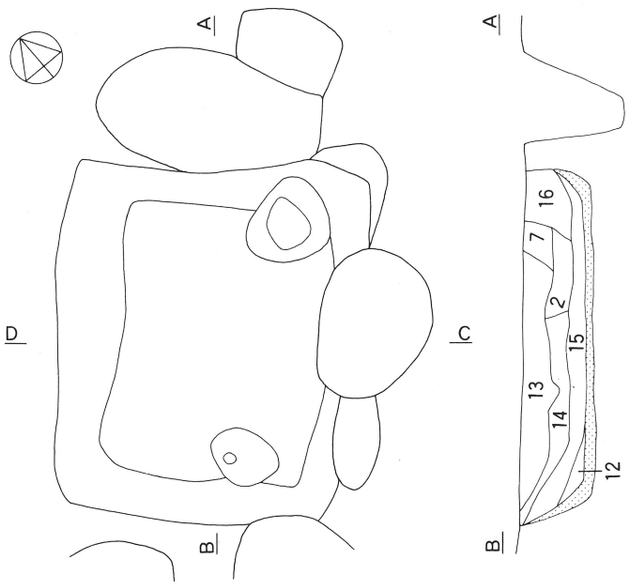
第93図　第1、2号土壙実測図



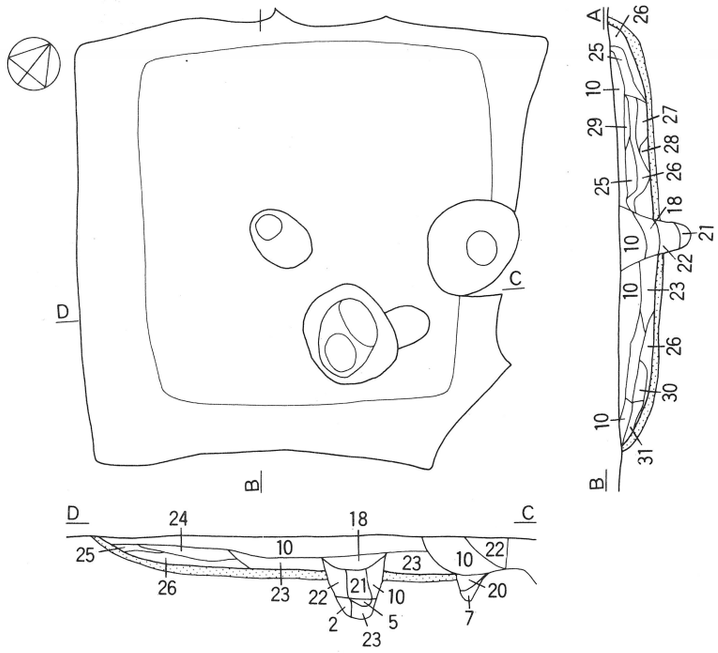
第3号土壙　L＝34,50 m



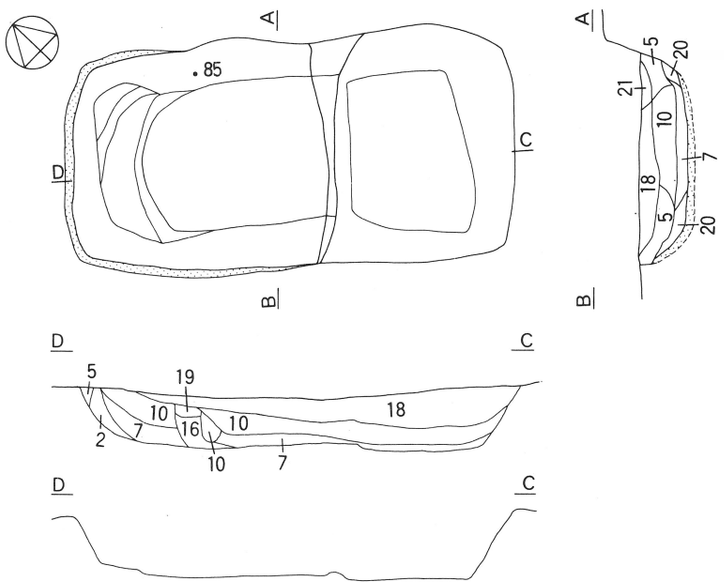
第4号土壙　L＝34,20m



第5号土壙
L＝34,10m



第6号土壙　L＝34,10m



第7号土壙　L＝34,10m

土層凡例

1. 褐　色　土　ロームブロック、粘土ブロックを多く含み、粘性に富む
2. 黄 褐 色 土
3. 暗黄褐色土　ロームブロック、ローム粒子を含む
4. 暗黄褐色土　ロームブロックを含む　ボロボロしている
5. 暗 褐 色 土　ロームブロックを含む　ボロボロしている
6. 暗黄褐色土　硬質である　ボロボロしている
7. 暗 褐 色 土　ローム粒子を含む
8. 黄 褐 色 土　ロームブロック、粘土粒子を含む
9. 黄 褐 色 土　ロームブロックを含む
10. 暗 褐 色 土　ロームブロック、粘土粒子を含む
11. 黒 褐 色 土　ロームブロックを含む
12. 黒 褐 色 土　ローム粒子、粘土粒子を含む
13. 黒 褐 色 土　ローム粒子を含み明るく柔質
14. 黄 褐 色 土　ロ┴ム粒子を含み柔かい
15. 黒 褐 色 土　ロームブロック、粘土ブロックを含む
16. 撹　　乱
17. 粘土ブロック
18. 暗　褐　色　土　ボロボロした感じ、粘土性ブロックを含む
19. 暗　褐　色　土　焼土粒子を含む
20. 暗　褐　色　土　炭化物を含み、柔質粘性有り
21. 暗　褐　色　土　粘土粒子を含み、柔かい
22. 暗　褐　色　土　ボロボロした感じ、粘土粒子を含む
23. 暗茶褐色土　しまり良
24. 暗茶褐色土　しまり良、ロームブロックを含む、粘性強　粘土を多く含む
25. 暗茶褐色土　しまり良、多少砂っぽい、粘性強　粘土を多く含む
26. 暗茶褐色土　しまり良、ローム粒子を含む、粘性強　粘土を多く含む
27. 暗茶褐色土　しまり不良、ローム粒子を含む
28. 暗茶褐色土　粘土層、粘土主体のロームを含む
29. 暗茶褐色土　粘性強、ローム粒子、ロームブロック、炭化物を含む
30. 暗茶褐色土　しまり良、ローム粒子、黒色土粒を含む
31. 暗茶褐色土　褐色土主体

粘土

0　1 m

第94図　第3、4、5、6、7号土壙実測図

第5号土壙（第94図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央西側に位置し、第34号建物址等と重複しているため、壁や底面を柱穴等に切られている。大きさは、東西径2.20m、南北径2.49m、深さ0.45mを計測し、方位をN－42°－Eに有し、正方形状を呈している。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土層は黒褐色土、黄褐色土、黒褐色土が、ほぼレンズ状に堆積し、各々ローム粒子やロームブロックと粘土ブロックを含んでいるが、底面上の黒褐色土以外は粘性が無くサラサラしている。また、西側には、撹乱やロームブロックが堆積している。粘土は、比較的薄く均等の厚さでしっかり貼られている。粘土の厚さは、0.06m～0.10mを計測し、底面からの立ち上がり部分が厚く貼られている。

出土遺物は、小札（第134図 No132）が検出されている。

第6号土壙（第94図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央西側で第5号土壙の南西部に位置し、土壙の壁と底面を柱穴により一部破壊されている。大きさは、東西径3.05m、南北径3.30m、深さ0.27mを計測し、方位をN－47°－Eに有し、長方形状を呈している。土壙の底面は、皿状を呈し壁は斜めに掘り込まれている。

土層は、暗茶褐色土、薄黄茶褐色粘土、砂、暗褐色土等が堆積しており、自然堆積というよりは人為埋土の状況を呈している。各土層とも、ローム粒子、ロームブロック、粘土粒子等を含んでおり、比較的良くしまっている。粘土は、0.05m～0.06m程度の厚さで薄いがしっかりと貼り付けられている。

出土遺物は、皆無である。

第7号土壙（第94図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央西側で第6号土壙の南側に位置している。大きさは、東西径3.15m、南北径1.60m、深さは東側で0.51m、西側で0.43mを計測し、長方形をなしている。方位は、N－43°－Wである。この土壙は、東側が西側より0.08m程度で低くなっているため、一見重複しているように見えるが、土層は重複を示していない。東側の一段下がった部分は、東西径1.25m、南北径1.65mを計測する。

粘土は、西側の一段高い部分では壁と底面に厚さ0.05mで、しっかりと貼られているが、東側は底面で壁には貼られていない。しかし、東側の壁面は焼けているものの底面は焼けていない。

土壙の土層は、暗褐色土と黄褐色土がほぼレンズ状に堆積しており、暗褐色土は9層に細分される。これらの土層は、粘土ブロック、同粒子、ローム粒子等を含み、6層と9層の暗褐色土は焼土粒子と炭化物粒子を含んでいる。

出土遺物は、内耳土器（第129図No85）と石が検出されたのみである。内耳土器は、土壙上面から検出で、底面から46cm上位に位置している。石は、自然石である。

第8号土壙（第95図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央部に位置し、第49号建物址等と重複している。このため、壁と底面の一部は柱穴により切られている。大きさは、東西径3.35m、南北径2.70m、深さ0.30mを計測し、長方形を呈している。方位は、N－43°－Wであるが、本土壙は2基の重複で西側が東側を切っている。Aは、2.00m×1.60m×0.30mでN－47°－Eに方位を有している。Bは、2.45m×2.80m×0.25mでN－47°－Eに方位を有している。形状は、A・Bとも長方形を呈している。Aは、平坦な底面で壁は斜めに掘り込まれているが、粘土は壁面にごく一部残存するのみである。Bは、ほぼ平坦な底面で壁は斜めに掘り込まれている。粘土は、0.10m～0.30mの厚さで壁面と底面にしっかり貼り付けられている。

出土遺物は、土壙Aよりカワラケ（第137図No171、172）、砥石（第140図No220）が検出され、土壙Bからは擂鉢小片が検出された程度である。No172は、口縁部が焼け、煤が付着しているため灯明皿と判断される。

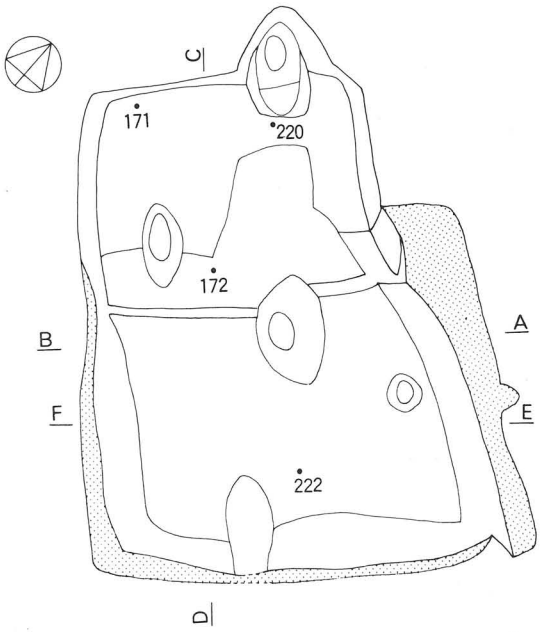
土層は、茶褐色土、暗茶褐色土が土壙Aに堆積しており、土壙Bには暗茶褐色土、暗褐色土、茶褐色土、黒褐色土などが堆積している。各土層は、粘土粒子、ローム粒子、粘土ブロック等を含んでいる。

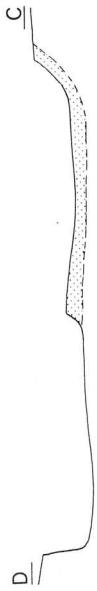
第9号土壙（第95図）

本土壙は、Ⅰ郭の南側で虎口の北東部に位置している。大きさは、東西径1.95m、南北径2.85m、深さ0.48mを計測し、長方形をなしている。方位は、N－39°－Eである。本土壙の底面はほぼ平坦で壁は、斜めに掘り込まれている。粘土は、東壁と西壁が厚く北壁と南壁と底面は薄くしっかりと貼り付けられている。粘土の厚さは、0.35m～0.07mの厚さを有している。

土層は、黒色土、黄褐色土、暗褐色土、灰白色土がほぼレンズ状に堆積しており、各々ロームブロックや粘土粒子を含んでいる。

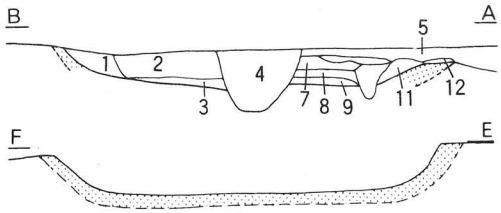
出土遺物は、内耳土器小片とスラグ小片が、底面上15cmで第4層中から検出された程度で、





土層凡例

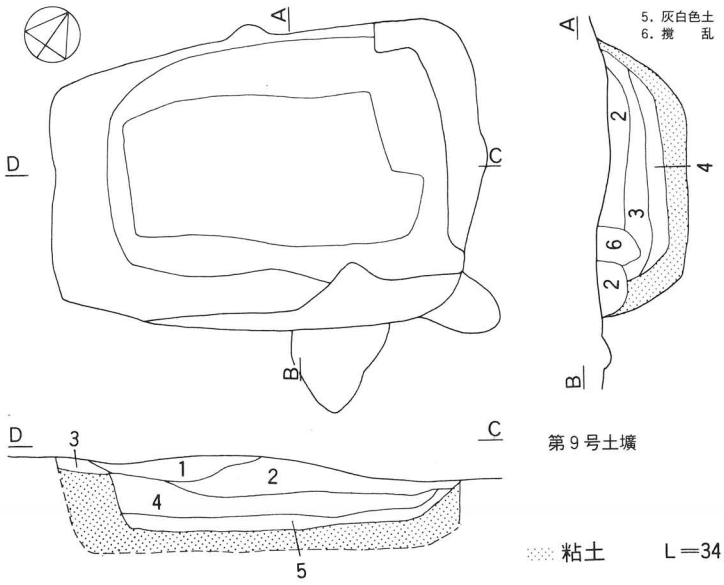
1. 茶 褐 色 土　ローム粒子を含む、しまり良好
2. 暗茶褐色土　ローム粒子、ローム小ブロックを含む
3. 暗茶褐色土　2層より暗い
4. 暗 褐 色 土　粘土ブロック、ローム粒子を含む
5. 暗 褐 色 土　土器粒子を含む
6. 薄暗茶褐色土　粘土粒を含む
7. 薄暗茶褐色土　褐色土主体でさらさらした感じ
8. 暗 褐 色 土　さらさらした感じ
9. 暗茶褐色土　7層より暗く、さらさらした感じ
10. 暗 褐 色 土　ロームブロックを含みボロボロした感じ
11. 暗茶褐色土　茶色砂粒を含む
12. ロ　ー　ム



第8号土壙

土層凡例

1. 黒 色 土　ローム小ブロックを含む
2. 黄褐色土　ロームブロックとローム粒子を含む
3. 暗褐色土　ロームブロックを含む
4. 黄褐色土　ロームブロックとローム小ブロック、粘土ブロックを含む
5. 灰白色土　粘土粒子とロームブロックを含み硬い
6. 攪　　乱



第9号土壙

粘土　　L＝34,10m　　0　1 m

第95図　第8、9号土壙実測図

実測可能遺物は検出されなかった。

第10号土壙（第96図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央西側で第８号土壙の西側に位置し、第48号建物址と重複しているため、柱穴により土壙の南東部を破壊されている。大きさは、東西径1.03m、南北径1.35m、深さ0.60mを計測し、長方形状を呈している。方位は、N－47°－Eである。

土壙の底面は、皿状で中央が最も深くなっている。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、粘土は、底面部分のみで0.09mの厚さを有し、しっかりと貼り付けられている。壁の部分は、消失している。土層は、黒色土、ローム ブロック主体の黄褐色土、などが堆積しており、遺物は皆無である。

第11号土壙（第96図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央南側で第９号土壙の北側に位置している。大きさは、東西径1.05m、南北径1.50m、深さ0.10mを計測し、N－29°－Wに方位を有し楕円形状を呈している。中央部から西壁にかけ、柱穴に切られており、西壁中央部から南壁西側の間で、壁に粘土は貼られていない。土壙底は、ほぼ平坦であり、西壁が垂直に掘り込まれている以外斜めに掘り込まれている。粘土は、0.03m～0.13mまでの厚さで、しっかりと貼り付けられている。

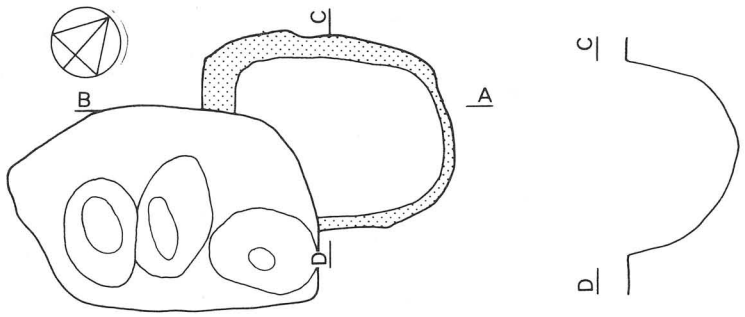
土層は、暗褐色土と黄褐色土が堆積しており、各々粘土粒子とローム ブロックを含んでいる。

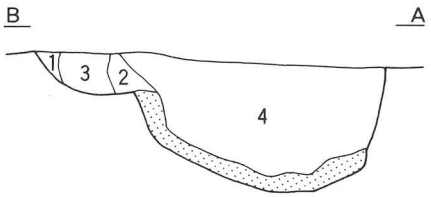
出土遺物としては、皆無である。

第12号土壙（第97図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央南側で第30号建物址の東側に位置している。大きさは、東西径1.45m、南北径1.15m、深さ0.37mを計測し長方形状をなし、N－35°－Wに方位を有している。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。粘土は、0.05m～0.10mの厚さでしっかりと貼り付けられている。

土層は、暗褐色土と黒色土が堆積しており、各土層とも粘土粒子とローム ブロックを含んでいる。出土遺物は、皆無である。



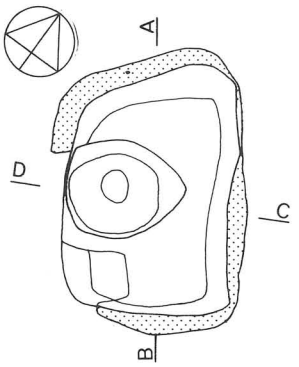


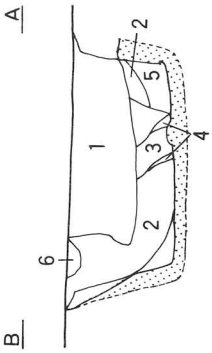
第10号土壙

L＝34.20m

土層凡例

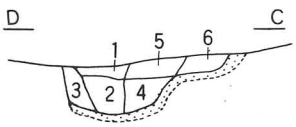
1. 黄褐色土　ロームブロックを含む
2. 暗黄褐色土　ロームブロックを含む
3. 黒褐色土　ロームブロックを含む
4. 黒褐色土　ロームブロックと粘土ブロックを含む





土層凡例

1. 黄褐色土　ロームブロックとロームブロックを含みボロボロしている
2. 暗褐色土　ロームブロックとロームブロックを含み暗くボロボロしている。
3. 黒褐色土　ロームブロックと炭化物を含み粘性を有す
4. 黄褐色土　ロームブロックを含む
5. 黒褐色土　ロームブロックと粘土粒子を含み、柔かくボロボロしている
6. 黒色土　ロームブロックを含む



第11号土壙

L＝35.00m

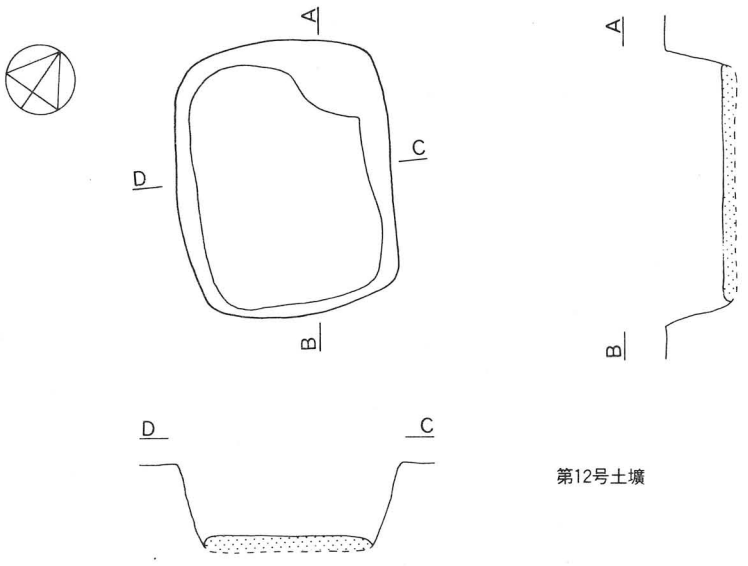
土層凡例

1. 暗褐色土　硬質で粘土ブロックを含む
2. 暗褐色土　軟質で粘土ブロックを含む
3. 暗褐色土　硬質で粘土ブロックとロームブロックを含む
4. 暗褐色土　硬質で粘土ブロックとロームブロックを含む
5. 暗黄褐色土　粘土ブロックを含む
6. 暗黄褐色土　ロームブロックを含む

粘土

0　1 m

第96図　第10、11号土壙実測図



第97図　第12、13号土壌実測図

第13号土壙（第97図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央北側で第10号住居址の一部を掘り切っている。大きさは、東西径1.78m、南北径1.70m、深さ0.07mを計測し、正方形をなしている。方位は、N－41°－Wである。土壙底は、緩やかな曲線をなしており、壁は斜めに掘り込まれている。粘土は、0.03m～0.09mと薄いがしっかりと貼り付けられている。

土層は、黒色土と暗褐色土が粘土粒子を含みながら堆積しており、出土遺物は皆無である。

第14号土壙（第98図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央北側で第10号住居址の一部を掘り切り、第12号土壙の北東部に位置している。大きさは、東西径1.75m、南北径3.32m、深さ0.53mを計測し、楕円形をなしている。方位は、N－52°－Eである。土壙の底面は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。粘土は、0.05m～0.09mの厚さで、薄いがしっかりと貼り付けられている。

土層は、ロームブロック主体の黄褐色土と黒褐色土や、焼土粒子、黒色土などを含む黄褐色土が堆積しているが、土壙の壁から底面にかけて厚く粘土ブロックが堆積している。この粘土は、上面から崩れ落ちた粘土と推定される。

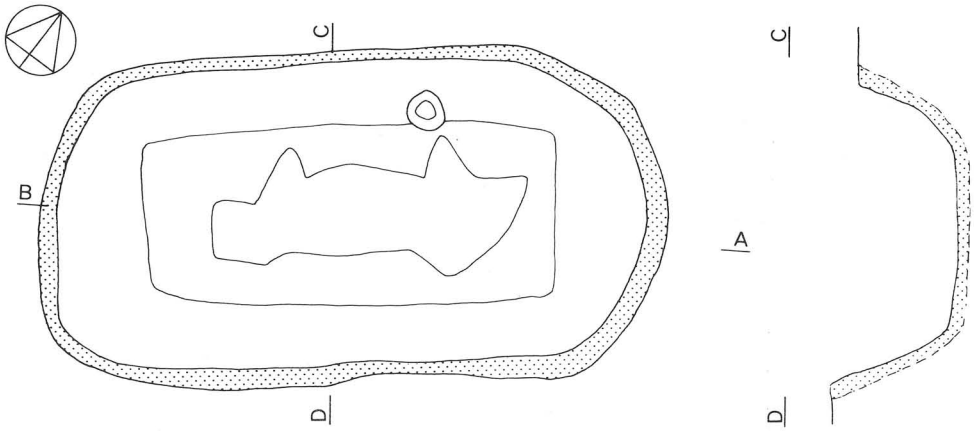
出土遺物としては、ごく少量の土師器小破片が、土壙内覆土中位層から検出されている。また本土壙は、第10号住居址のカマド北側を切っているため、土壙覆土上面に焼土が流入している。

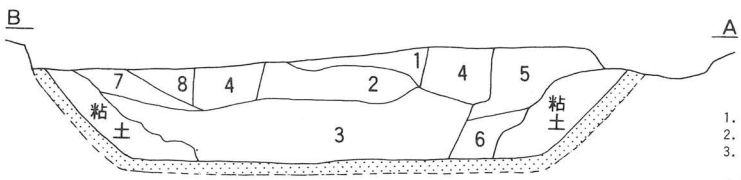
第15号土壙（第98図）

本土壙は、Ⅰ郭の北東部で北東部建物址群と重複しているため、柱穴により壁と底面の一部を切られている。大きさは、東西径2.10m、南北径1.50m、深さ0.66mを計測し、長方形をなしている。方位は、N－70°－Eである。土壙の底面は、緩やかな曲線をなし土壙底中央が壁下位より0.05m程度下がっている。壁は、斜めに掘り込まれている。粘土は、0.10m～0.15mの厚さでしっかり貼り付けられているが、南東部は消失している。

土層は、暗褐色土と黒褐色土がほぼレンズ状に堆積しており、土壙底には多量の粘土粒子を含む暗褐色土が堆積している。各土層は、ロームブロックや粘土粒子などを含んでいる。

出土遺物としては、内耳土器片、壺型陶磁器片が検出されているが、内耳土器は小破片であるため図示し得たのは陶磁器（第123図、No55）のみである。この遺物は、底面上26cmの所から検出されている。



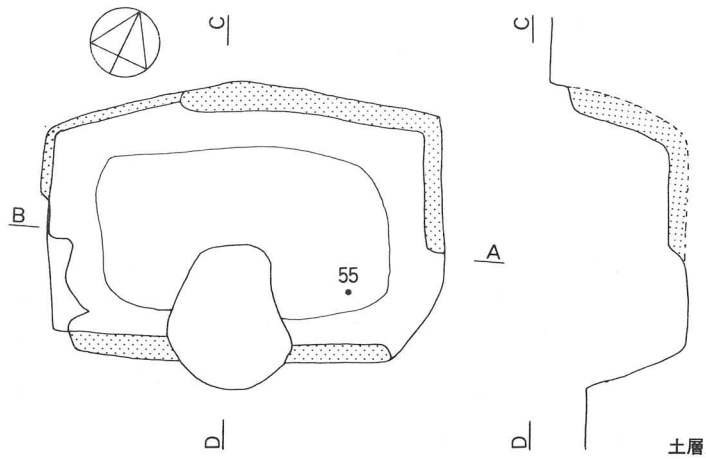


第14号土壙

L＝35,00ｍ

土層凡例

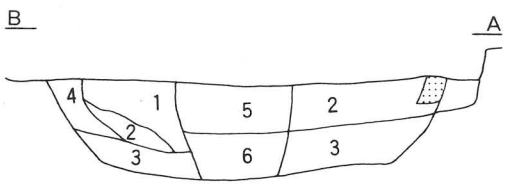
1. 暗黄褐色土　暗くロームブロックを含む
2. 暗黄褐色土　ロームブロックを含む
3. 暗黄褐色土　ロームブロック、黒色土ブロックを含む、しまり良好 ボロボロした感じ
4. 黒 褐 色 土　しまり不良、ローム小ブロックを含む
5. 暗黄褐色土　2と同じで2より明るい
6. 暗黄褐色土　ローム粒子、黒色土粒を含む
7. 暗黄褐色土　ロームブロックとローム粒子黒色土小ブロックを含む
8. 暗黄褐色土　焼土粒、ロームブロック黒色土小ブロックを含む



粘土

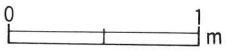
土層凡例

1. 暗褐色土　ローム小ブロックを含み固い
2. 暗褐色土　ローム小ブロックと粘土ブロックを含む
3. 暗褐色土　ローム小ブロックを含む
4. 暗褐色土　ローム小ブロックを含み、明るく固い
5. 黒褐色土　ローム小ブロックと褐色土を含む
6. 黒褐色土　ローム小ブロックと粘土粒子を含む



第15号土壙

L＝34.60m



第98図　第14、15号土壙実測図

第16号土壙（第99図）

本土壙は、Ⅰ郭の北東部で第4号堀北東虎口の西側に位置している。大きさは、東西径1.56m、南北径1.20m、深さ0.25mを計測し、長方形状を呈している。方位は、N－55°－Wである。土壙は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。粘土は、底面は残存しているが、壁では西側と北東コーナー部及び南東部に残存する程度である。粘土の厚さは、壁で0.06m～0.15m、底面で0.03mを計測し、しっかりと貼り付けられている。

土層は、暗褐色土が堆積しており、ロームブロック、ローム粒子、粘土を含み硬くしまっている。出土遺物としては、土師器高坏脚部片、カワラケ片、浅鉢片、砥石、などが検出されたが、砥石（第140図No221、222）以外は全て小破片である。

第17号土壙（第99図）

本土壙は、Ⅰ郭の東側で第6号建物址と重複しているため、土壙の一部を柱穴により切られている。大きさは、東西径1.50m、南北径2.10m、深さ0.57mを計測し、長方形をなしている。方位は、N－33°－Wである。土壙の底面は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。粘土は壁面で0.03m～0.15m、底面で0.06mを計測するが、北東部壁と南側壁の粘土は消失している。粘土の厚さは、前述の厚さを有しているものの、東壁より西壁が厚く貼られている。

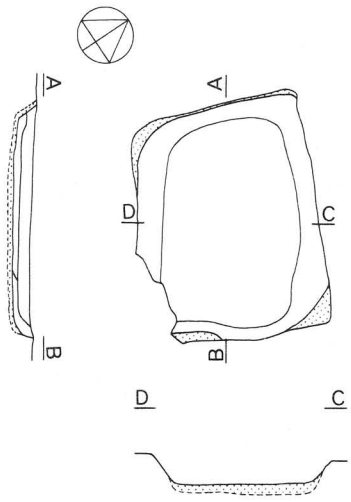
土層は、ローム粒子やロームブロック又は粘土ブロックを含む暗褐色土、黄褐色土が、ほぼレンズ状に堆積している。

出土遺物は、北側柱穴内より砥石（第140図No221）が1点検出されたのみで、土壙内からは何ら検出されなかった。

第18号土壙（第99図）

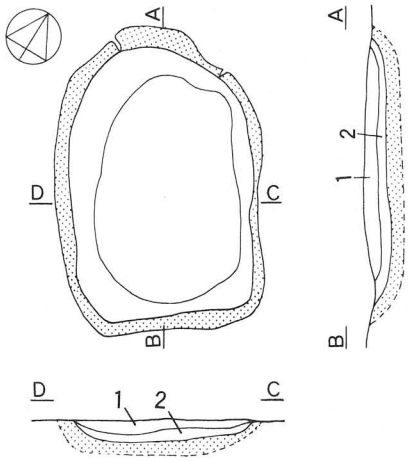
本土壙は、Ⅰ郭の南東部で第53号建物址の南側に位置している。大きさは、東西径1.34m、南北径2.00m、深さ0.15mを計測し、楕円形状を呈している。土壙底は、ほぼ平坦であり、壁は斜めに掘り込まれている。粘土は、壁面から底面にかけて0.03m～0.15mの厚さでしっかりと貼り付けられている。東壁中央部が、薄く貼られているのみで他は、ほぼ均一の厚さである。

土層は、暗褐色土と暗褐色粘土がレンズ状に堆積しており、粘土層はしまりが無くボロボロしている。暗褐色土層は、ローム粒子を含んでいる。出土遺物は、皆無である。なお、方位としては、N－32°－Wである。



第16号土壙

L＝34,00m

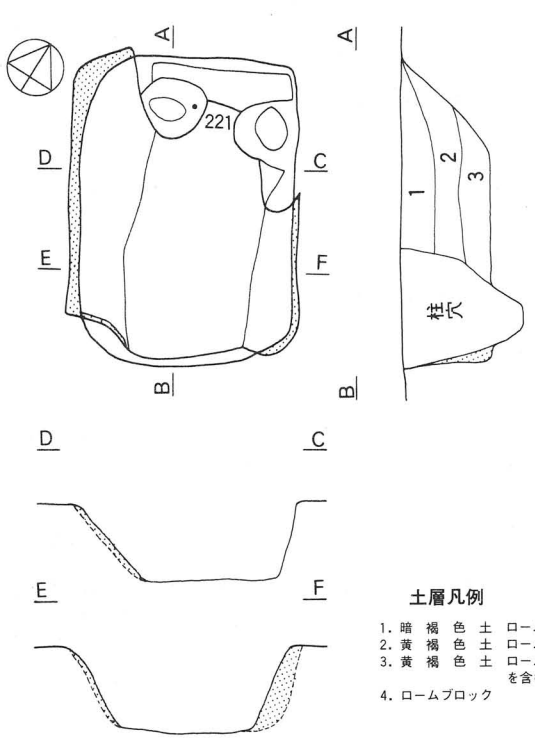


第18号土壙

L＝34,00m

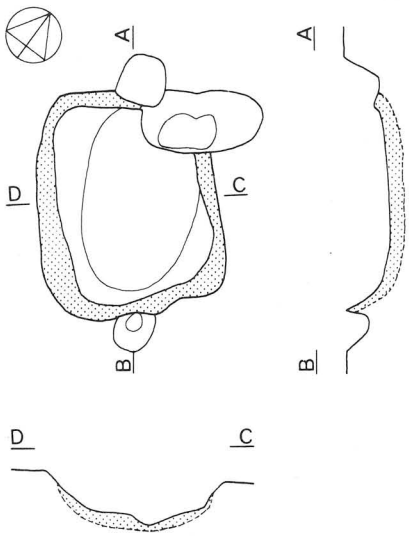
土層凡例

1. 茶褐色土　粘性強、ローム粒子を含む
2. 暗褐色土　青海色粘土を含む



第17号土壙

L＝35,50m



第19号土壙

L＝34.00m

土層凡例

1. 暗　褐　色　土　ロームブロックを含む
2. 黄　褐　色　土　ローム小ブロックを含む
3. 黄　褐　色　土　ローム小ブロックと粘土ブロックを含む、くすんでいる
4. ロームブロック

粘土

0　1m

第99図　第16、17、18、19号土壙実測図

第19号土壙（第99図）

本土壙は、Ⅰ郭の南側で第30号建物址の東側に位置している。大きさは、東西径1.18m、南北径1.50m、深さ0.38mを計測し、長方形状を呈している。方位は、N－37°－Wである。土壙底は、皿状を呈し壁は斜めに掘り込まれている。粘土は、壁で上面を消失しているが、0.09mの厚さを有し、しっかりと貼り付けられている。

土壙内覆土は、黒褐色土と暗褐色土が堆積しており、黒褐色土はロームブロックを含み、暗褐色土は、粘土粒子を含んでいる。遺物は、皆無である。

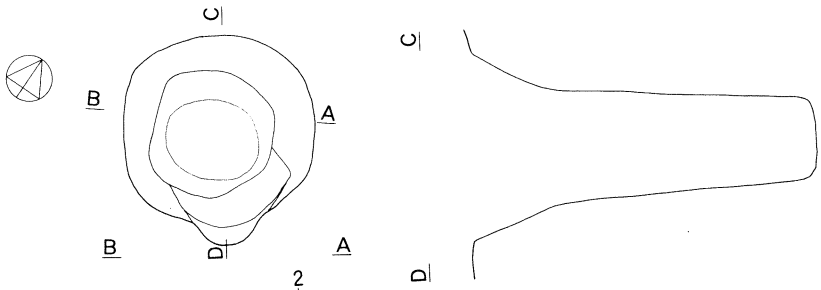
第20号土壙（井戸）（第100図、図版31）

本土壙は、Ⅰ郭の南西部で、Ⅰ郭南側土塁西側に接するように位置し、2基の重複である。AはBを切っており、Bは第1号井戸である。大きさは、Aが東西径0.95m、南北径1.15mで、深さ0.70mを計測し、円形状を呈している。方位は、N－18°－Wである。土壙底は、ほぼ平坦で壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、黒色土（粘性に富む）と黒褐色土が堆積している。遺物は、皆無である。

Bは、東西径1.53m、南北径1.67m、深さ2.80mを計測し、N－0°－Eに方位を有し、円形状を呈している。底面は、粘土層内で掘り終わっており、擂鉢状を呈している。壁は、垂直に掘り込まれている。土層は、黒色土と黒褐色土が堆積しており、下層になるにつれて粘性を有している。出土遺物は皆無である。

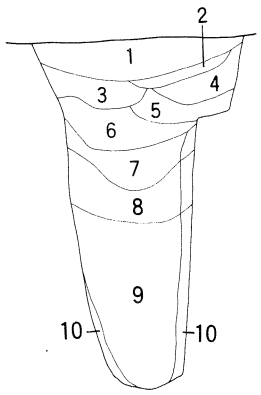
第21号土壙（井戸）（第100図、図版31）

本土壙は、Ⅰ郭の南西コーナー部で、第4号堀の南西端部に位置し第4号堀と重複している。大きさは、東西径1.16m、南北径1.05m、深さ4.28mを計測し、円形をなす第2号井戸である。方位は、N－46°－Eである。井戸の底面は、粘土層内で掘り終わっており、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、上面に褐色土が堆積しており、褐色土以下は黒褐色土、黒色土が堆積し下層になるとしだいに粘性を有する土質となる。遺物は、皆無であるが、第4号堀を掘り切っていることと、ごく近年まで使用されたということから、新しい井戸と考えられる。



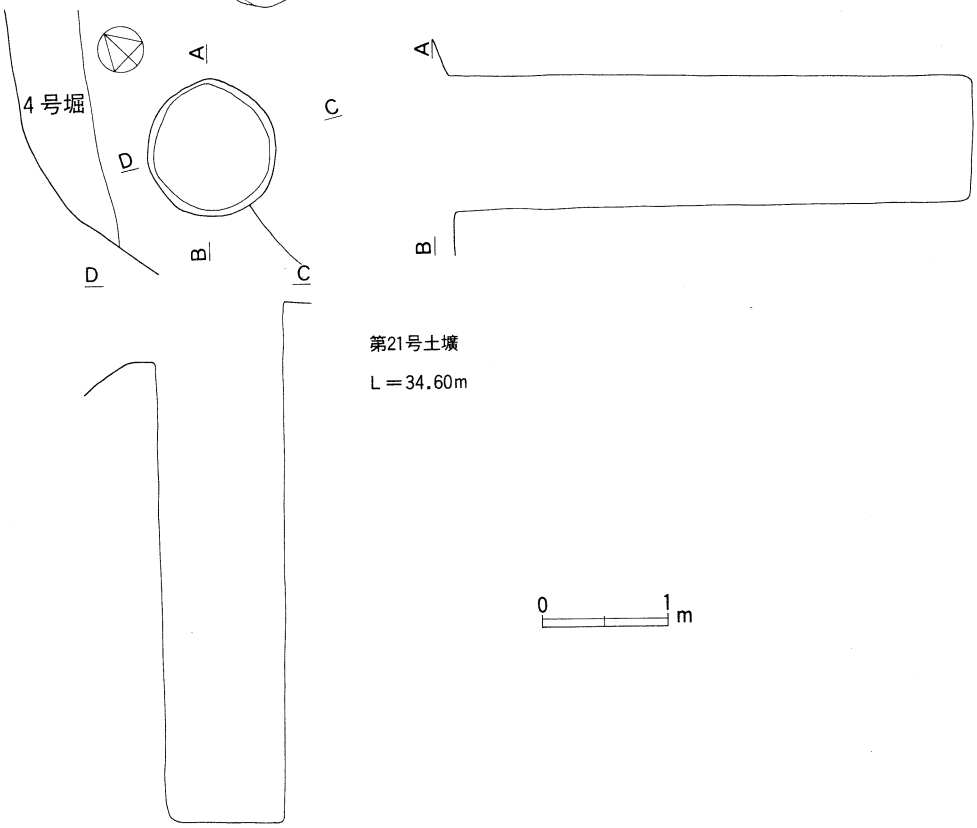
第20号土壙

L＝34.50m



土層凡例

1. 黒 色 土　ロームブロックを含む
2. 黒 色 土　ロームブロックを含む
3. 黒褐色土　ロームブロックと茶褐色土を含む
4. 黒 色 土　明るく、矛質
5. 黒 色 土　ロームブロックとローム粒子を含む
6. 黒 色 土　ロームブロックと粘土ブロックを含み、粘性有
7. 黄褐色土　ロームブロックを含む
8. 黒褐色土　ロームブロック含み
9. 黒褐色土　ローム粒子含み、粘性有
10. ロームブロック



第21号土壙

L＝34.60m

0　1 m

第100図　第20、21号土壙実測図

第22号土壙（墓壙）（第101図、図版31）

本土壙は、Ⅰ郭の北西部で第1号竪穴の南西部に位置し、人骨を供っている。墓壙は、東西径0.80m、南北径1.02m、深さ0.46mを計測し、楕円形をなしている。方位は、N－20°－Eである。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。人骨は、北東壁付近で頭蓋骨を検出したが、骨の保存状況は著しく悪くボロボロしている。

土壙内の覆土は、黒色土、黒褐色土、ロームブロックが堆積しており、黒色土と黒褐色土はロームブロックを含んでいる。遺物としては、6枚の古銭（No350～355）が検出されている。また、本土壙の東側には撹乱土壙が隣接している。

人骨の埋葬形式は、その保存状況が悪く確実な点は不明であるが、北頭西顔ではあるまいか。

第23号土壙（第102図）

本土壙は、Ⅱ郭の北東部に位置している。大きさは、東西径0.96m、南北径1.95m、深さ0.20mを計測し、楕円形状を呈している。方位は、N－15°－Eである。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土壙の南東部から、馬歯が検出されている。

土壙内覆土は、黄褐色土が堆積しており、遺物としては馬歯以外は皆無である。

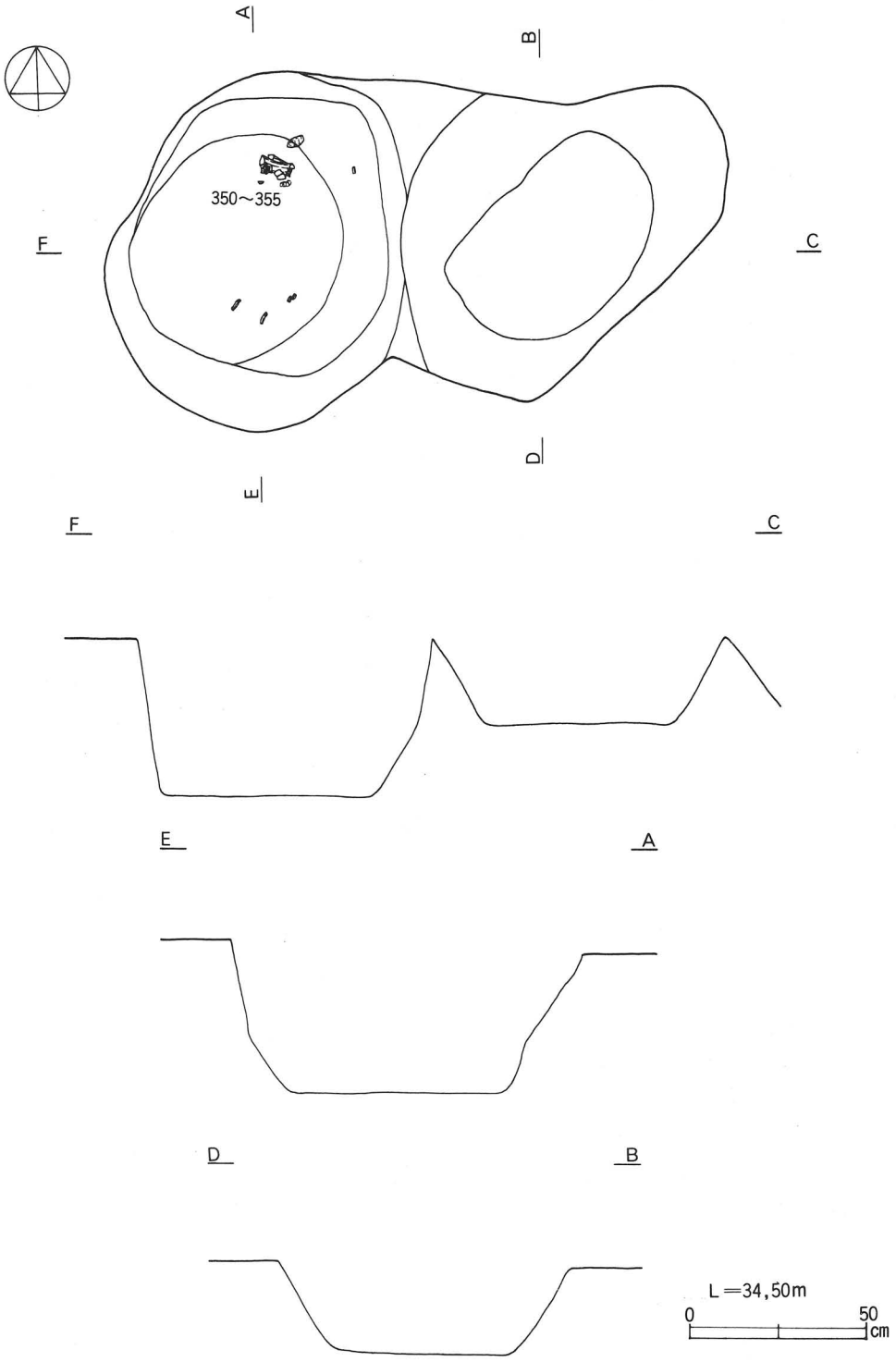
第24号土壙（第102図）

本土壙は、Ⅱ郭の北西部に位置している。大きさは、東西径1.52m、南北径1.90m、深さ0.23mを計測し、N－63°－Eに方位を有し楕円形を呈している。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土壙の北東部には、馬の顎が西向きで南東部には足の骨があり、中央部には小骨片が3点検出された。

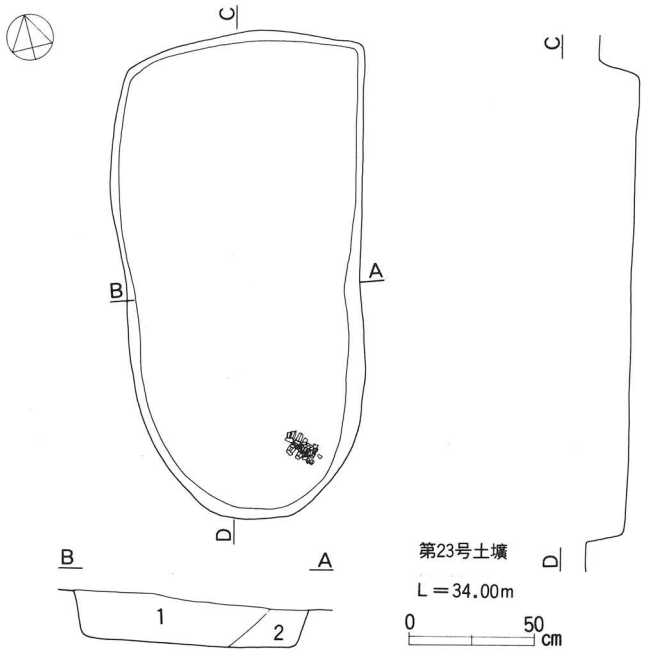
土壙内覆土は、黄褐色土（5層に分かれる）が堆積しているが、埋土の黄褐色土である。出土遺物としては、馬骨以外に土錘が北東壁付近で、土壙底上19cmの所より検出された程度である。

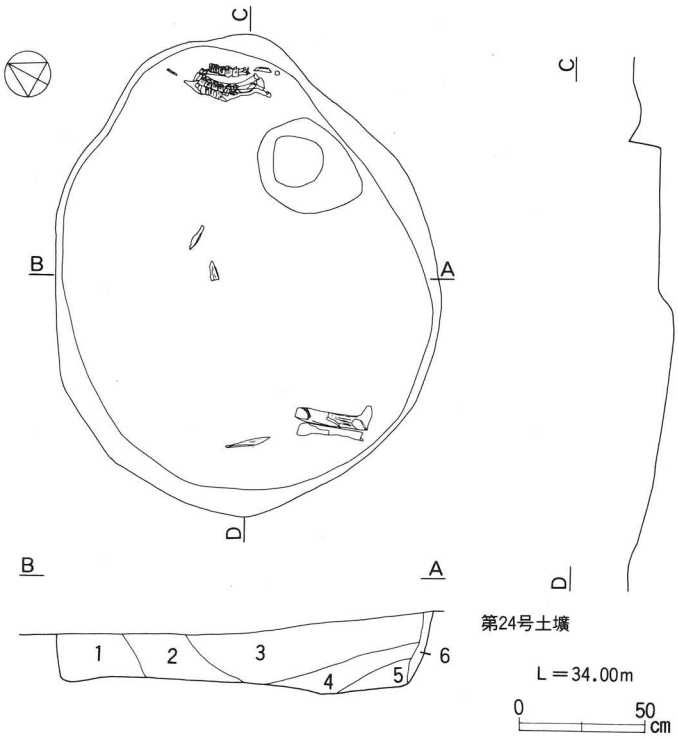
第25号土壙（第103図）

本土壙は、Ⅱ郭の北西部で、第1号堀の南西コーナー付近に位置している。大きさは、東西径1.43m、南北径1.96m、深さ0.26mを計測し、N－66°－Eに方位を有し楕円形を呈している。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土壙内からは、中央東側で馬の下顎が、中内

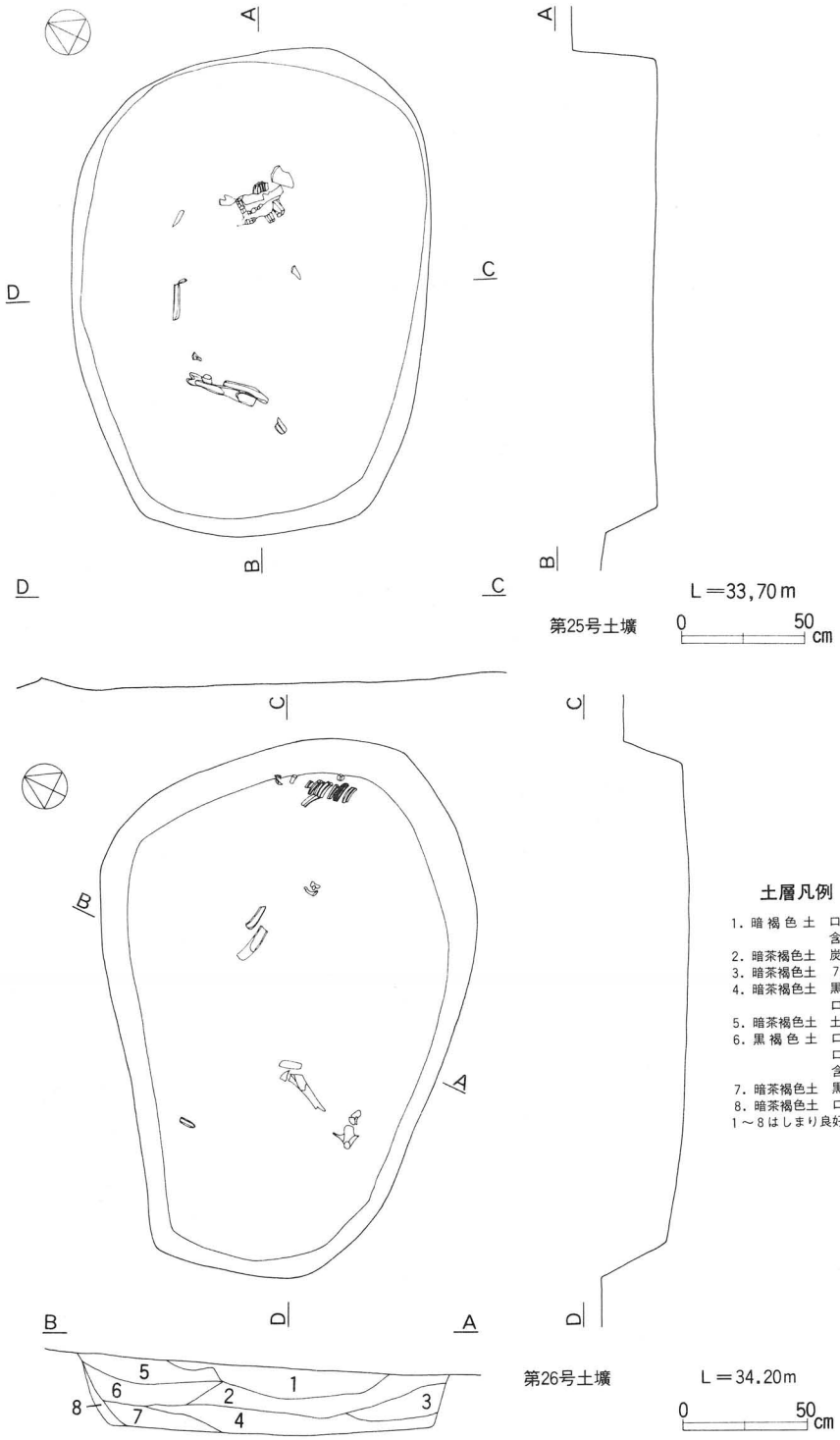


第101図　第22号土壙実測図





第102図　第23、24号土壌実測図



第103図　第25、26号土壌実測図

部から西側にかけて小骨片が検出されている。馬骨以外では、底面上26cmの所から石器が1点検出されたのみである。馬の顎は、西方を向いている。

土壙内覆土は、黄褐色土（埋土）が黒色土を含みながら堆積している。

第26号土壙（第103図）

本土壙は、Ⅰ郭の南東部で第25号住居址の北側に位置している。大きさは、東西径2.16m、南北径1.50m、深さ0.28mを計測し、N－64°－Eに方位を有し楕円形を呈している。南径の最小径は、西側で0.90m程度である。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土壙の北東壁部分には、馬歯がある。中央部には、小骨片が6点散在し、南西部には足の関節部分がある。

土層は、暗褐色土、暗茶褐色土、黒褐色土が堆積し、遺物は骨以外皆無である。

第27号土壙（第104図）

本土壙は、Ⅰ郭の北東部に位置し、東西径1.33m、南北径1.35m、深さ0.47mを計測し、正方形状を呈している。方位は、N－50°－Eである。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。

土壙の南西部から、馬歯が検出されている。また、土壙内の覆土は暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土が堆積しており、遺物は馬歯以外皆無である。

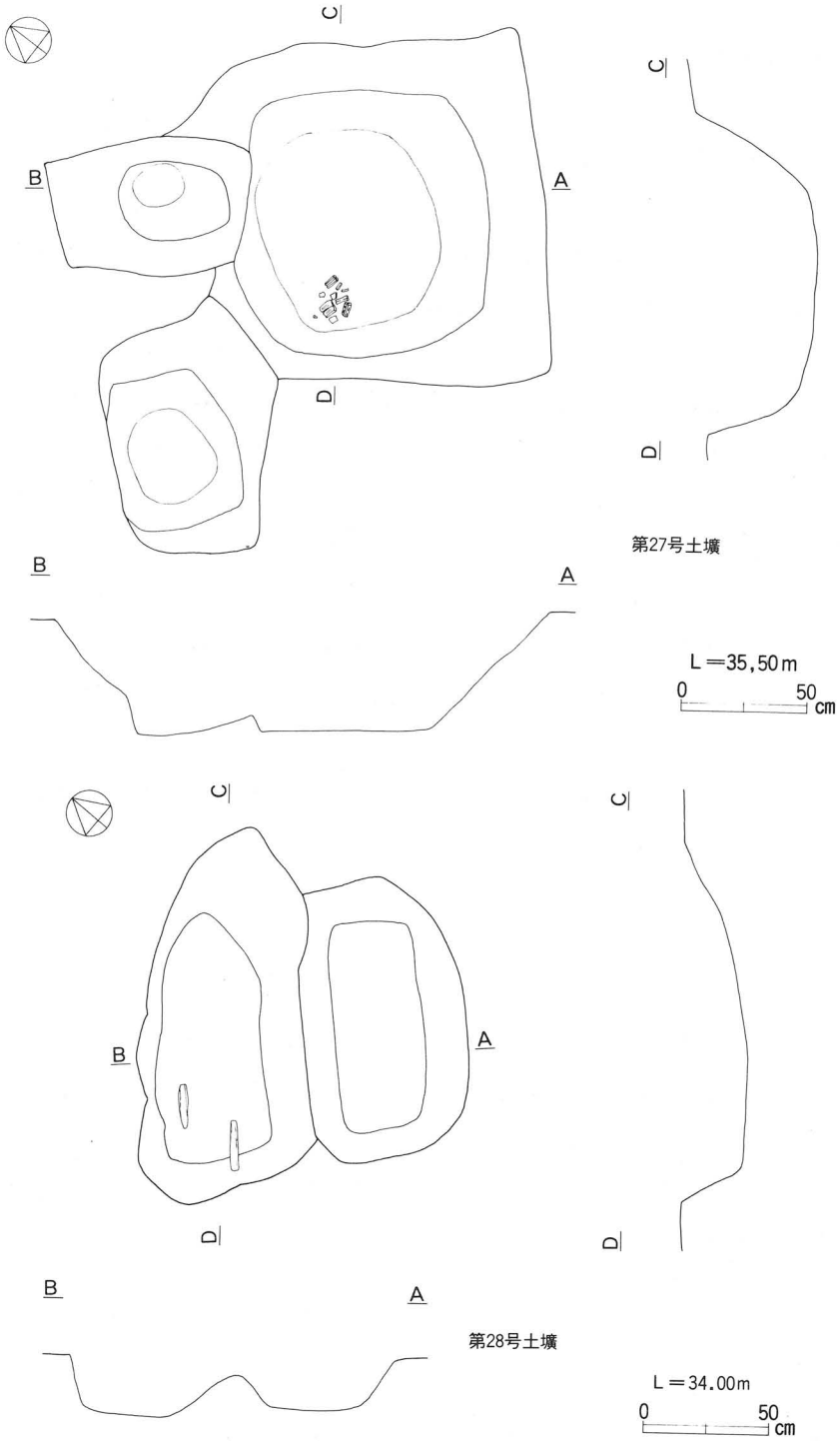
第28号土壙（第104図）

本土壙は、Ⅰ郭の北東部に位置し、東西径0.70m、南北径1.40m、深さ0.25mを計測し、楕円形状を呈している。方位は、N－50°－Eである。土壙底は、緩やかな皿状を呈しており、壁は斜めに掘り込まれている。土壙の南西部から、2本の骨片（足の部分）が検出された。

土層は、黄褐色土が堆積しているのみで、遺物としては骨以外皆無である。また、本土壙の東側には耕作土壙が掘り込まれている。

第29号土壙（第105図）

本土壙は、Ⅰ郭の北東部で、第20号建物址の南西部に位置している。大きさは、東西径1.47m、南北径2.13m、深さ0.67mを計測し、長方形状を呈している。方位は、N－31°－Wである。土壙



第104図　第27、28号土壙実測図

底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。

土壙からは、北側に馬の下顎と骨片（前足の部分）、南側から2本骨片（後足）が検出されている。骨片以外には、何ら検出されなかった。土層は、黄褐色土が堆積している。

第30号土壙（第105図）

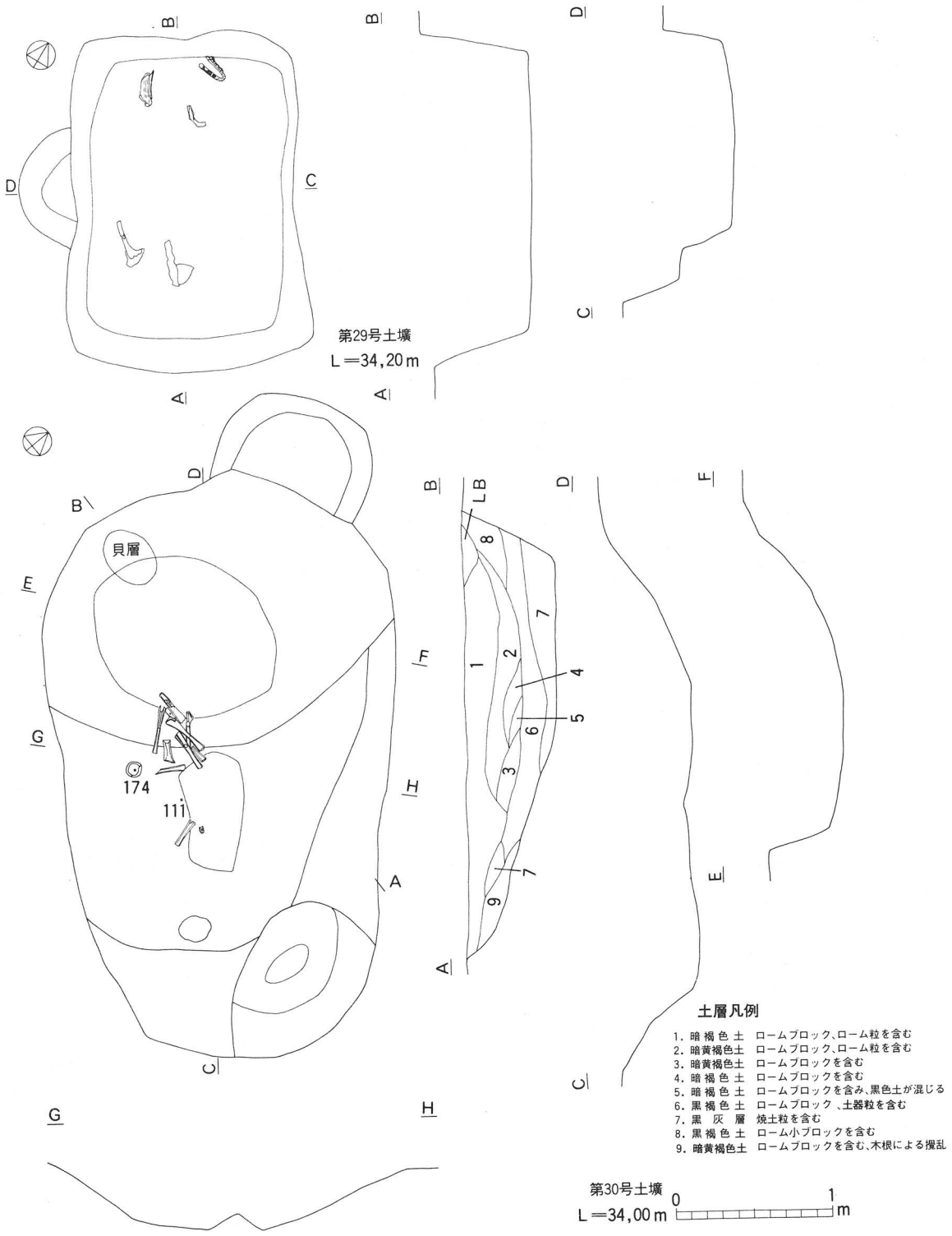
本土壙は、I郭の中央南側で第30号建物址の北東部に位置している。大きさは、東西径3.75m南北径2.10m、深さ0.56mを計測し、楕円形を呈している。方位は、N－52°－Wである。土壙底は、ほぼ平坦で狭く壁は斜めに掘り込まれている。西側には、長径2.25m、短径1.65m、深さ0.50mで楕円形状に一段下がった部分がある。底面は、皿状を呈している。

土壙底の中央部から、多数の骨片が検出されている。骨は、西側が低く東側が高い位置に所在することから捨てられたもののようである。また、土壙の東側からはカワラケ、鉢、小皿、石錘内耳片、火舎片などが検出されているものの、図示出来たのは鉢（第131図No111）とカワラケ（第137図No174）の2点のみである。

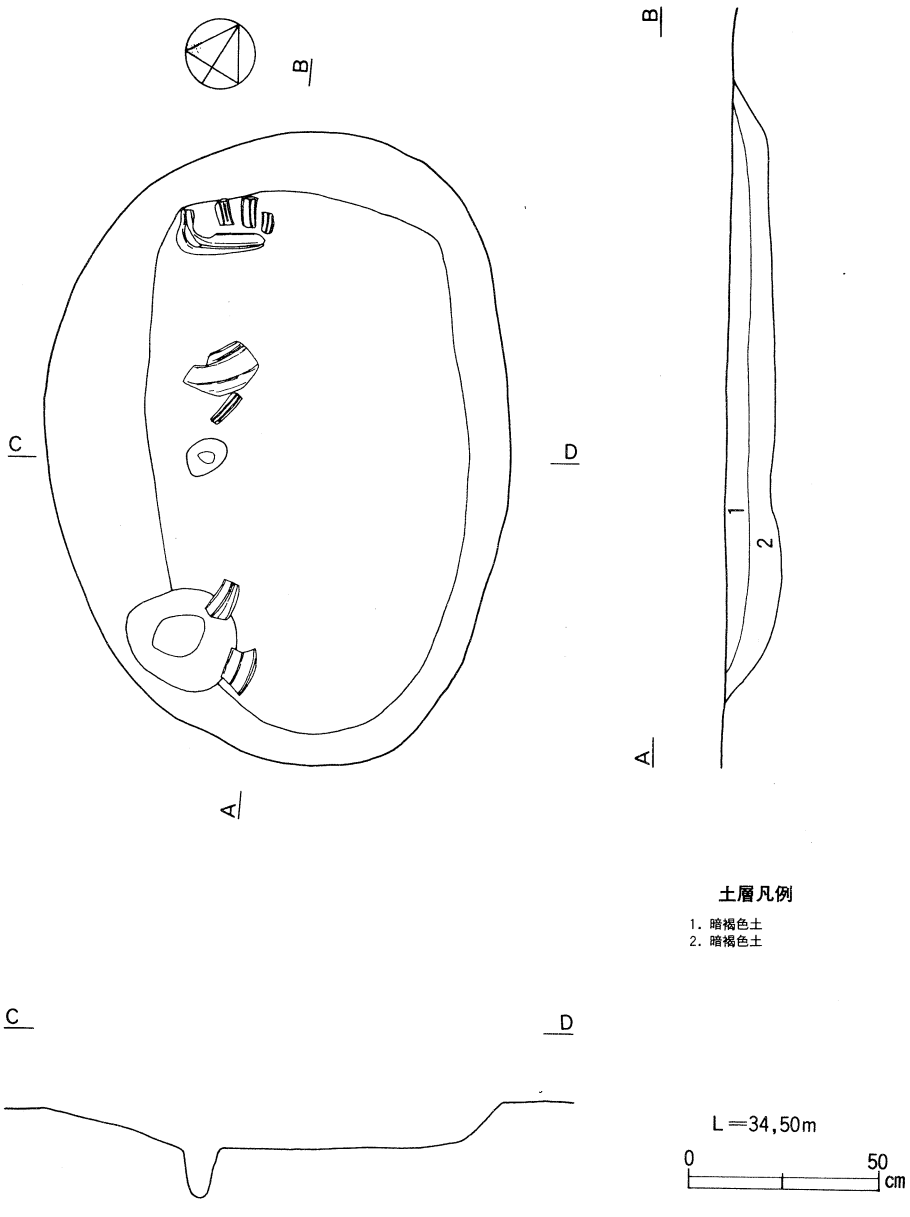
土層は、暗褐色土、暗黄褐色土、黒褐色土、灰などが堆積している。土層に灰層を含むが、壁や底面は焼けていない。また、土壙の西側には、長径1.00m、短径0.60m、深さ0.10mで円形をなす土壙状の遺構を有するものの、本土壙と関連するかは不明である。南東部の落ち込みは、撹乱である。

第31号土壙（第106図）

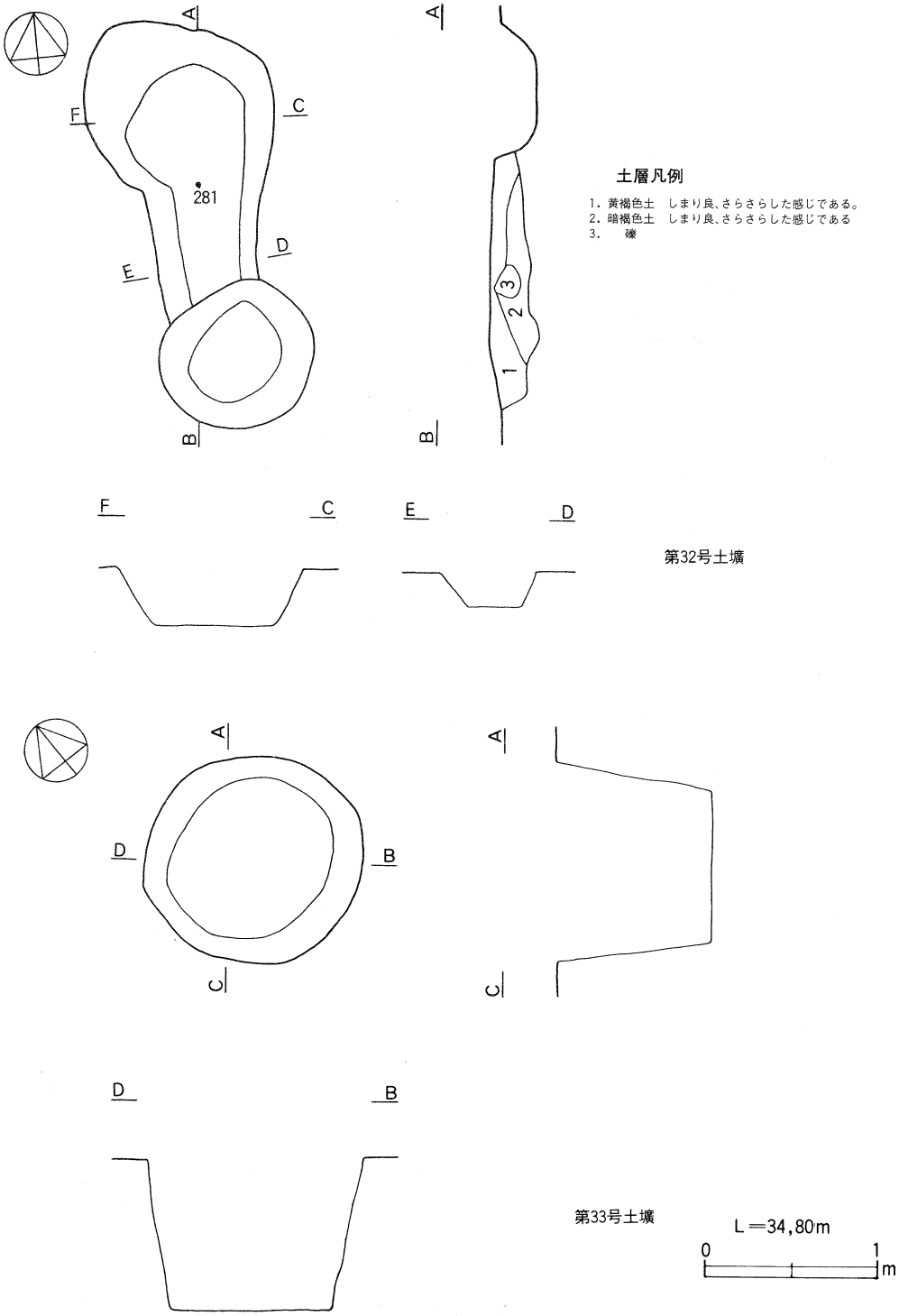
本土壙は、I郭の中央西側で第20号土壙（第1号井戸）の南側に位置し、I郭南西部土塁と接している。大きさは、東西径1.22m、南北径1.66m、深さ0.25mを計測し、楕円形をなしている。方位は、N－50°－Eである。土壙底は、緩やかな皿状を呈しており、壁は斜めに掘り込まれている。土壙の北西部には、馬の下顎と歯があり、西側には骨片が散乱している。また、土壙の中央西側と南西部にはPitが掘り込まれているものの、骨がPitと上面に位置するため古いPitと判断される。　土壙内覆土は、暗褐色土がレンズ状に堆積しており、ローム粒子を含むが粘性は有していない。遺物としては、馬骨以外皆無である。



第105図　第29、30号土壌実測図



第106図　第31号土壙実測図



第107図　第32、33号土壙実測図

第32号土壙（第107図）

本土壙は、Ⅰ郭の北西部で第19号建物址内の中央部に位置している。大きさは、東西径1.25m南北径1.20m、深さ0.91mを計測し、円形状を呈している。方位は、N－40°－Wである。土壙底は、ほぼ平坦で壁は垂直に掘り込まれている。

土層は、ロームブロック主体の黄褐色土が堆積しており、遺物は皆無である。また、本土壙は第19号及び第37号建物址内に位置するものの、両者との関連は不明であるが、土壙内土層と柱穴内土層とは類似している。

第33号土壙（第107図）

本土壙は、Ⅰ郭の北西部で第4号住居址の北側に位置し、北側と南側を柱穴に切られている。大きさは、東西径0.60m、南北径0.75m、深さ0.21mを計測し、楕円形か長方形状を呈するものと推定される。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土壙内の覆土は、ロームブロックを主体とした黄褐色土が堆積している。

出土遺物としては、火舎（第127図No73）が1点検出された程度である。

第34号土壙（第108図）

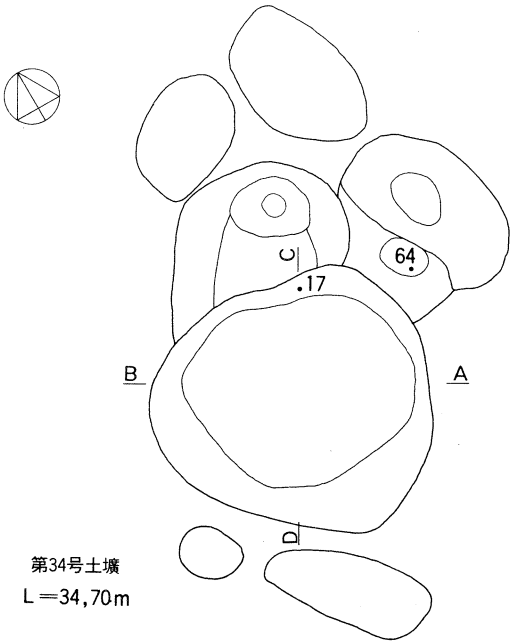
本遺構は、Ⅰ郭の北東部に位置し、東西径1.80m、南北径0.90m、深さ0.35mを計測し楕円形を呈している。方位は、N－31°－Wである。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。

土壙内覆土は、暗茶褐色土、暗褐色土、褐色土などがレンズ状に堆積しており各層とも粘土ブロックを含んでおり、第4層の暗茶褐色土は焼土粒子を含んでいるが、底面や壁面は焼けていない。

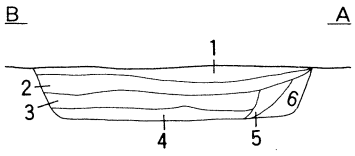
出土遺物としては、土壙内北壁付近で上面から火舎小破片、内耳土器小破片が検出された程度で図示可能な遺物は検出されなかった。

第35号土壙（第108図）

本土壙は、Ⅰ郭の南西部でⅠ郭南側土塁西側に接し、第21号土壙の南西部に位置している。大きさは、東西径2.10m、南北径1.75m、深さ0.45mを計測し、楕円形状を呈するものと判断される。

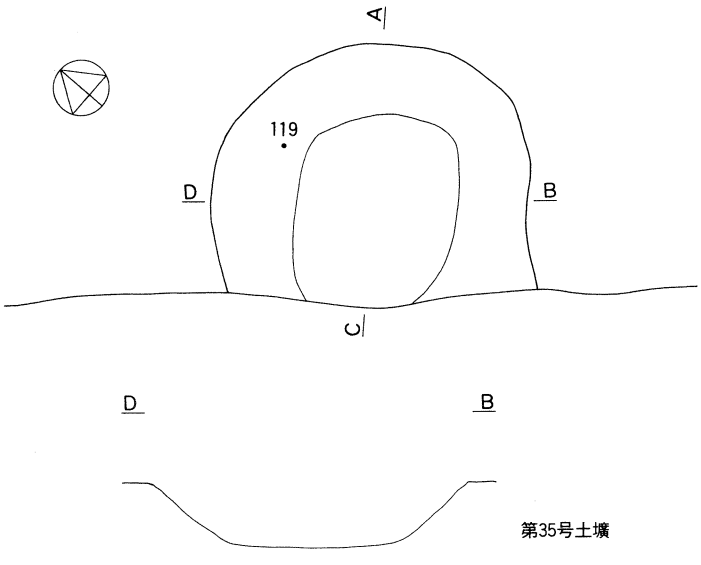


第34号土壙
L＝34,70m



土層凡例

1. 暗茶褐色土　粘土小ブロック、粘土粒、焼土粒を含む
2. 暗茶褐色土　焼土ブロック、ロームブロック、粘土ブロックを含む
3. 暗 褐 色 土　黒色土、粘土小ブロック、ロームブロック、焼土粒を含む
4. 暗茶褐色土　焼土粒、粘土小ブロックを含む、粘性若干有
5. 褐 色 土
6. 暗 褐 色 土　ロームブロック、ローム粒を含む、しまり不良



第35号土壙

L＝34,50m
0　1 m

第108図　第34、35号土壙実測図

土壙底は、皿状を呈しており壁は斜めに掘り込まれている。土層は、褐色土、黒褐色土が堆積している。方位は、N－50°－Eである。

出土遺物としては、土壙の北東部で底面より0.07m上面から擂鉢小片が1点検出されたが、他には何ら検出されなかった。

第36号土壙（第109図）

本土壙は、I郭の中央南側でI郭南側土塁東側付近で、第37、38、42、43号土壙と隣接し、第37号土壙に切られている。確認面での大きさは、東西径1.05m、南北径1.25m、深さ0.14mを計測し楕円形状を呈している。底面は、皿状を呈しており壁は斜めに掘り込まれている。土壙内覆土は、暗褐色土と灰褐色土が堆積しており、暗褐色土はローム粒子やロームブロックを含み、灰褐色土は少量の炭化物を含んでいる。各土層とも、しまりや粘性は有していない。

出土遺物は、皆無である。

第37号土壙（第109図）

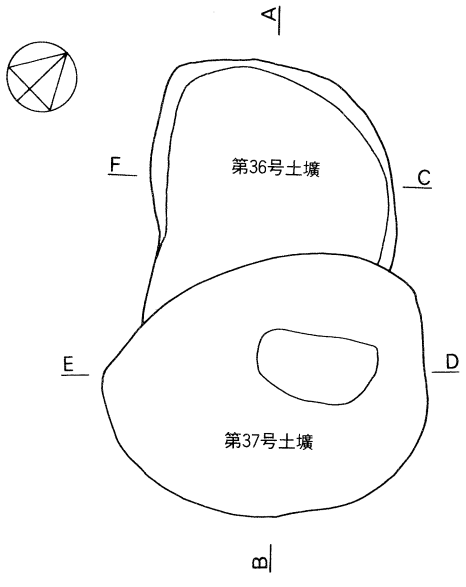
本土壙は、I郭の中央南側でI郭南側土塁東側付近に位置し、第36号土壙と重複している。大きさは、東西径1.30m、南北径1.70m、深さ0.46mを計測し、楕円形を呈している。方位は、N－47°－Wである。

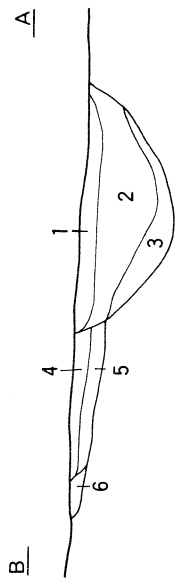
土壙の底面は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土壙内覆土は、暗褐色土が堆積しており、第36号土壙を掘り切っている。出土遺物は、皆無である。

第38号土壙（第109図）

本土壙は、I郭の中央南側で第37号土壙の東側に位置している。大きさは、東西径1.90m、南北径1.85m、深さ0.66mを計測し円形状を呈している。方位は、N－52°－Eである。土壙の底面は、皿状を呈しており壁は斜めに掘り込まれている。

土壙内覆土は、暗褐色土と黒褐色土が堆積しており、細分すると暗褐色土は3層に黒褐色土が2層に細分され、ほぼレンズ状に堆積している。出土遺物は、皆無である。

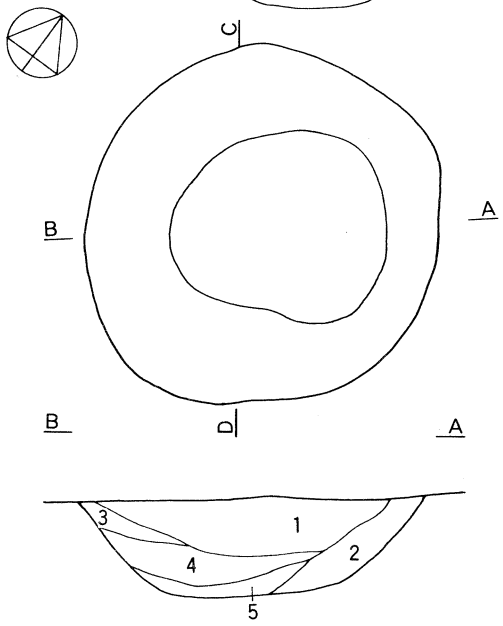


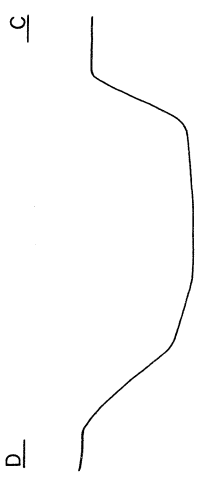


土層凡例

1. 暗褐色土　ロームを含み、矛質である
2. 暗褐色土　1より暗く、ローム粉子を含み、矛質である
3. 暗褐色土　ローム粒子を含み、やや硬い
4. 暗褐色土　ロームブロックを含み、1より暗く2より明るい
5. 暗褐色土　矛質、粘性をやや有す
6. 灰褐色土　くすんでおり、炭化物を含む

第36、37号土壙





土層凡例

1. 暗褐色土　暗くくすんでおりロームブロックを含む
2. 暗褐色土　しまり明るくロームブロックを含み、柔かい
3. 暗褐色土　暗くローム粒子を含む
4. 黒褐色土　明るくロームブロックを含み、粘性を有す
5. 黒褐色土　4より暗く焼土粒子を含む、粘性有

L＝34,40m

0　1 m

第38号土壙

第109図　第36、37、38号土壙実測図

第39号土壙（第110図、）

本土壙は、Ⅰ郭の中央南側に位置している。大きさは、東西径0.95m、南北径1.10m、深さは0.16mあり、楕円形状を呈している。方位は、N－40°－Eである。土壙底は、皿状をなし壁は斜めに掘り込まれている。

本土壙は、底面と東壁が焼けており、底面に厚さ5cmで灰と炭化物が堆積している。焼土層は、土壙の壁面に沿って堆積している。

出土遺物としては、覆土内より小皿、火舎などがごく少量検出されたのみで、図示出来たのは小皿（第122図、No36）のみである。

第40号土壙（第110図）

本土壙は、Ⅰ郭の北西部で第　　号建物址と重複している。大きさは、東西径1.34m、南北径は1.85mで、深さが0.42mを計測し、長方形状を呈している。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。

土壙内覆土は、ロームブロック主体の黄褐色土、暗褐色土などが堆積している。出土遺物としては、少量のカワラケや火舎などの小破片が検出された程度である。

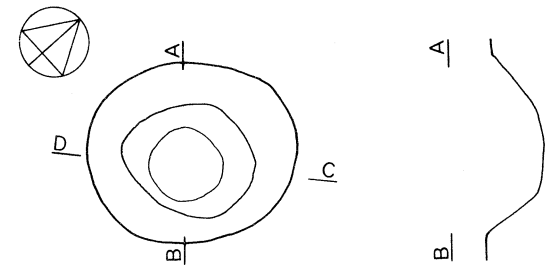
第41号土壙（第111図）

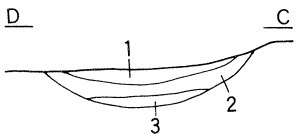
本土壙は、Ⅰ郭の中央部で第20号建物址内に位置している。大きさは、東西径2.00m、南北径2.15m、深さ0.49mを計測し、不整長方形状を呈している。方位は、N－30°－Eである。土壙の底面は、皿状を呈しており壁は斜めに掘り込まれている。底面には、北東部にPitが1本掘り込まれている。

土層は、ロームブロック主体の黄褐色土、黒褐色土がレンズ状に堆積している。出土遺物は、皆無である。

第42号土壙（第111図）

本土壙は、Ⅰ郭の南側中央部で第37号土壙の南側に位置している。土壙の南側は、Ⅰ郭南側土塁下に入り込んでいる。大きさは、東西径1.33m、南北径1.00m（調査部分）、深さ0.34mを計測し、楕円形状を呈している。方位は、N－43°－Eである。





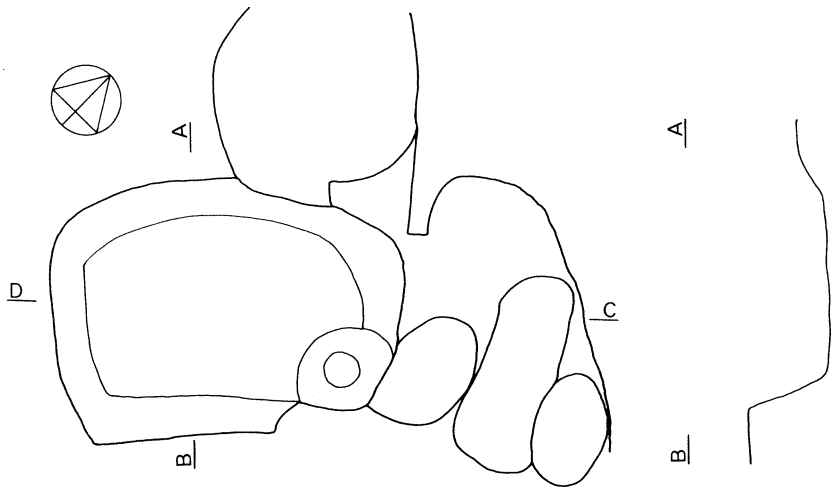
土層凡例

1. 暗褐色土　ロームブロックを含み、明るい
2. 暗褐色土　ロームブロック、炭化物を含む
3. 灰　　層　焼土小ブロック、炭化物を含む

L＝34,10m

第39号土壙

0　1 m

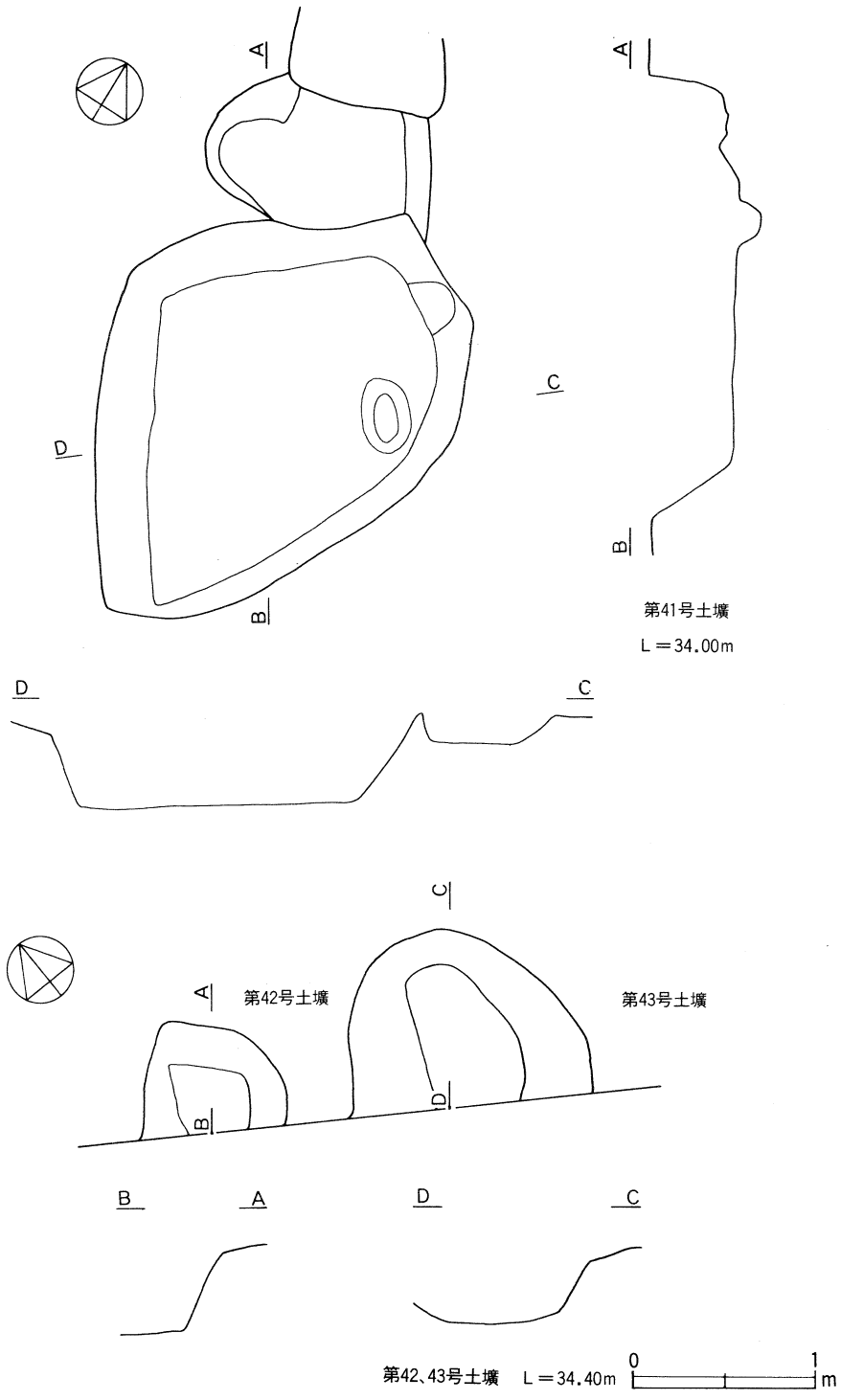


L＝34,80m

第40号土壙

0　2 m

第110図　第39、40号土壙実測図



第111図　第41、42、43号土壙実測図

土壙底面は、緩やかな皿状をなし壁は斜めに掘り込まれている。土壙内覆土は、1層で褐色土が堆積している。出土遺物としては、覆土上層（底面上25cm）からカワラケ小破片と自然石が検出された程度で、図示可能な遺物ではない。

第43号土壙（第111図）

本土壙は、I郭の南側中央部で第42号土壙の西側に位置し、確認状況は第43号土壙と同様である。大きさは、東西径0.78m、南北径0.63m、深さ0.45mを計測し楕円形を呈している。方位はN－43°－Eである。底面は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。

土壙内の土層は、第42号土壙と同様褐色土が堆積しており、遺物は皆無である。

第44号土壙（第112図）

本土壙は、I郭の中央西側で第56号建物址と重複している。このため、土壙の東側と西側は柱穴により切られている。確認面での大きさは、東西径1.52m、南北径2.23m、深さ0.54mを計測し楕円形状を呈するものと判断される。方位は、N－55°－Eである。

土壙の底面は、2段になっている。上段は、深さ0.47mでほぼ平坦面であるのに対し下段は、深さ0.54mで皿状を呈している。

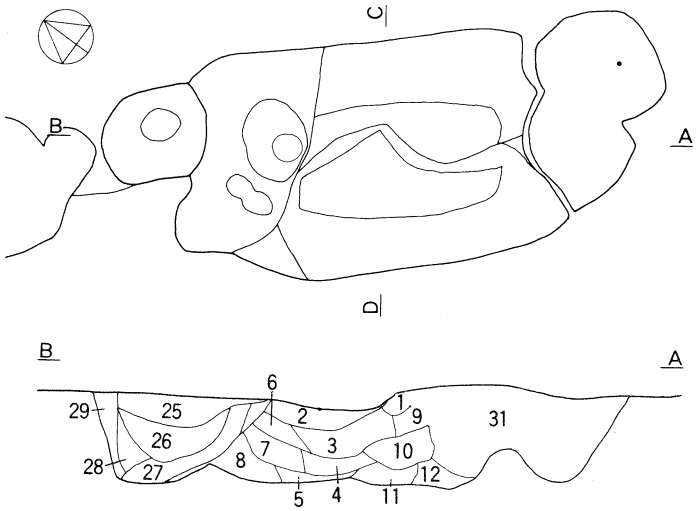
土層は、暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土がレンズ状に堆積しており、細分すると暗褐色土は9層に、黄褐色土は2層に各々分類される。

出土遺物としては、土壙の北西壁付近で、土壙底から50cmの上位層より天目茶碗の小破片が2点検出された程度である。

第45号土壙（第112図）

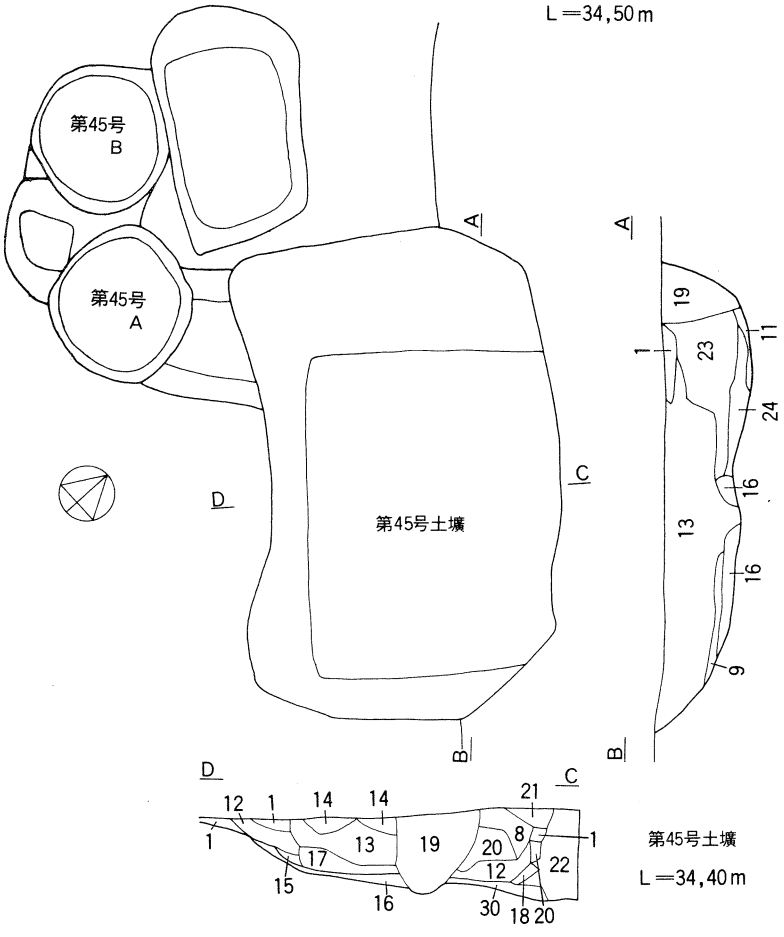
本土壙は、I郭の中央西側で第4号堀と重複している。大きさは、東西径3.23m、南北径2.00m、深さ0.50mを計測し長方形をなしている。方位は、N－47°－Wである。

土壙の底面は、ほぼ平坦で北壁がほぼ垂直に掘り込まれている以外は、斜めに掘り込まれている。土層は、暗褐色土、黒褐色土、暗茶褐色土、黄褐色土が堆積しており、暗茶褐色土は7層に黒褐色土は2層に、黄褐色土は2層に各々細分される。土層の堆積状況は、埋められた状況を示している。出土遺物としては、カワラケ（第138図No182）火舎小片、土師器片、などを検出しているが、図示出来たのはカワラケ1点のみである。



第44号土壙

L＝34,50m



第45号土壙

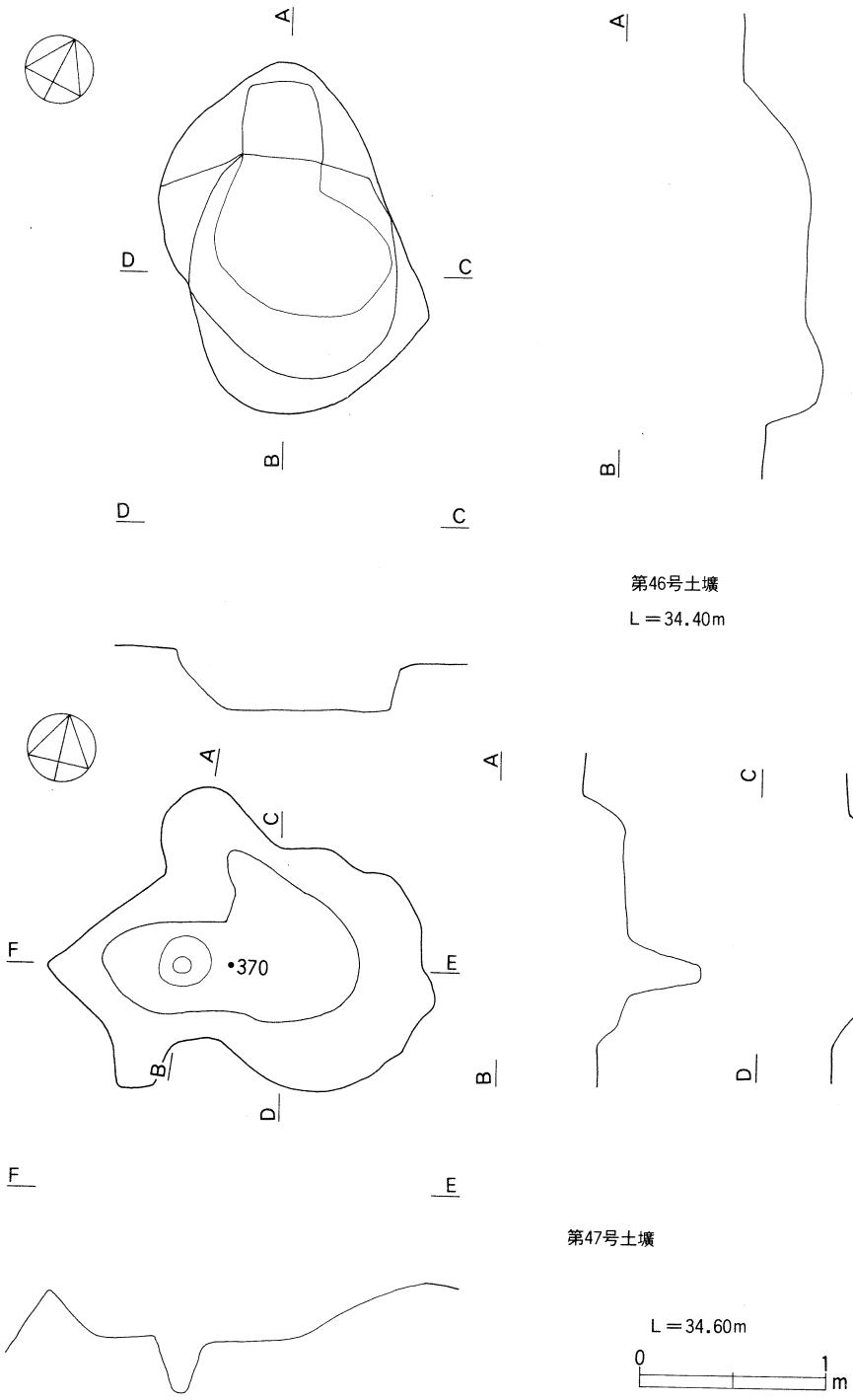
L＝34,40m

0 1 m

土層凡例

1. 暗褐色土　ローム粒子を含み、暗い
2. 暗褐色土　ロームブロックを含み、明るい
3. 暗褐色土　ロームブロックを含み2層より明るく硬い
4. 暗褐色土　ロームブロックを含み、粘性に富む
5. 暗褐色土　ロームブロックを含み、硬い
6. 暗褐色土　ロームブロックを含み、硬い
7. 黄褐色土　ロームブロックとローム粒子を含む
8. 黄褐色土　ロームブロック層
9. 暗褐色土　ローム粒子と粘土ブロックを含み、暗く柔かい
10. 暗褐色土　ローム小ブロックを含む
11. 暗褐色土　ロームブロックと粘土ブロックを含む
12. 黒褐色土　ローム粒子を含む
13. 暗茶褐色土　軟質で、ローム粒子、炭化物を含む
14. 暗茶褐色土　軟質で、ローム粒子を含む、13層より明るい
15. 暗茶褐色土　しまり良、ロームブロックを含む
16. 暗茶褐色土　軟質、褐色土主体、焼土粒を含む
17. 暗茶褐色土　軟質、褐色土主体、焼土粒を含む
18. 暗茶褐色土　しまり良、粘土ブロックを含む
19. 暗茶褐色土　撹乱、ロームブロック、ローム粒子を含みボロボロである
20. 暗黄褐色土　しまり良、ローム粒子を含む
21. 黒褐色土　ローム粒を含む
22. 暗黄褐色土　しまり不良、ローム粒子を含む
23. 暗茶褐色土　しまり良、ロームブロック、ローム粒子、炭化粒を含む
24. 暗褐色土　しまり良、粘土ブロック、ロームブロック、炭化粒を含む
25. 黒褐色土　ロームブロックを含む
26. 黄褐色土　ロームブロックを含み、暗くくすんでいる
27. 黒褐色土　ロームブロックを含み、明るい
28. 暗褐色土　ロームブロックと粘土ブロックを含む
29. 暗褐色土　ロームブロックとローム粒子を含む
30. 褐色土
31. 撹乱

第112図　第44、45号土壙実測図



第113図　第46、47号土壌実測図

第46号土壙（第113図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央西側で第48号建物址の南に位置している。大きさは、東西径1.15m、南北径1.90m、深さ0.37mを計測し楕円形状を呈している。方位は、N－26°－Wである。土壙の底面は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。

土層は、ロームブロック主体の黄褐色土と黒褐色土が堆積している。出土遺物は、土壙内上面（底面上30cm）より火舎小片が1点検出された程度である。

第47号土壙（第113図）

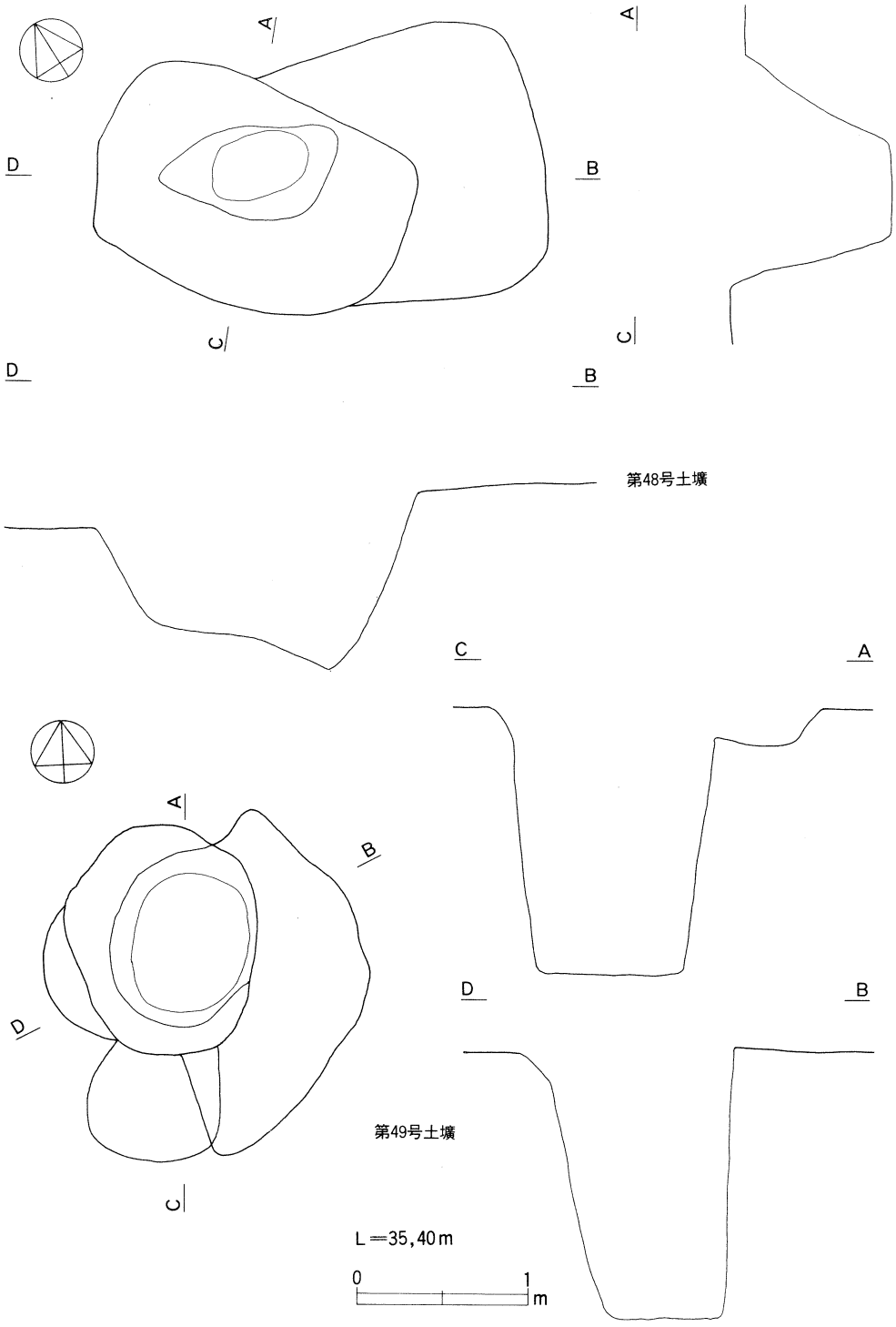
本土壙は、Ⅰ郭の中央西側で第44号建物址の西側に位置している。大きさは、東西径2.07m、南北径1.60m、深さ0.30mを計測し、不整形を呈している。方位は、N－79°－Eである。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土壙底の中央西側には、径0.27m、深さ0.30mで円形の柱穴が1本掘り込まれている。土層は、1層でローム＝ブロック主体の黄褐色土が堆積している。出土遺物としては、土壙底面より寛永通寶（第156図 No370）が1点出土したのみである。

第48号土壙（第114図）

本土壙は、Ⅰ郭の中央西側で第5号住居址の南東部に位置している。大きさは、東西径1.15m、南北径1.35m、深さ1.54mを計測し、楕円形を呈している。方位は、N－5°－Eである。土壙底は、平坦で壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

土層は、上面に黒褐色土、中位以下は黒色土が、ロームブロックやローム粒子を含みながら堆積している。下位につれて、粘性を有している。また、東側には、2.00m×0.70m×0.12mで楕円形を呈し、底面は擂鉢状をなす部分があり、4点の遺物が検出された。

出土遺物は、東側から4点と中央部から1点の計5点検出されている。この5点は、土師器片、カワラケ片、火舎片であるが、全て小破片であり図示可能な遺物ではない。



第114図　第48、49号土壙実測図

第49号土壙（第114図）

本土壙は、Ｉ郭の中央西側で第６号住居址と一部重複している。大きさは、東西径1.11m、南北径1.35m、深さ1.60mを計測し、楕円形状を呈している。方位は、Ｎ－３°－Ｗである。また東側と南側には掘り方と判断される掘り込みがある。東西径は、東側で0.70mを計測し、南径は2.05mである。

中央の土壙は、底が平坦で壁は西壁がやや斜めであるが、ほぼ垂直に掘り込まれている。掘り方は、斜めになっているが、一部耕作撹乱を受けている。底面は、ハード＝ローム層中で止まっているため、井戸を途中で中止した可能性を有している。

土層は、黒色土と黒褐色土が堆積しており、下層になるにつれて粘性を有している。遺物は、内耳土器と火舎が出土しているが、図示可能な遺物ではない。

第50号土壙（第115図）

本土壙は、Ｉ郭の北東部で第10号住居址の北東部に位置している。大きさは、東西径0.85m、南北径1.00m、深さ0.50mを計測し円形を呈している。方位は、Ｎ－０°－Ｅである。土壙底は平坦で壁は斜めに掘り込まれている。土層は、ローム粒子を含む黒色土が堆積しており、出土遺物としては、少量の土師器小片とカワラケ小片が出土したのみである。

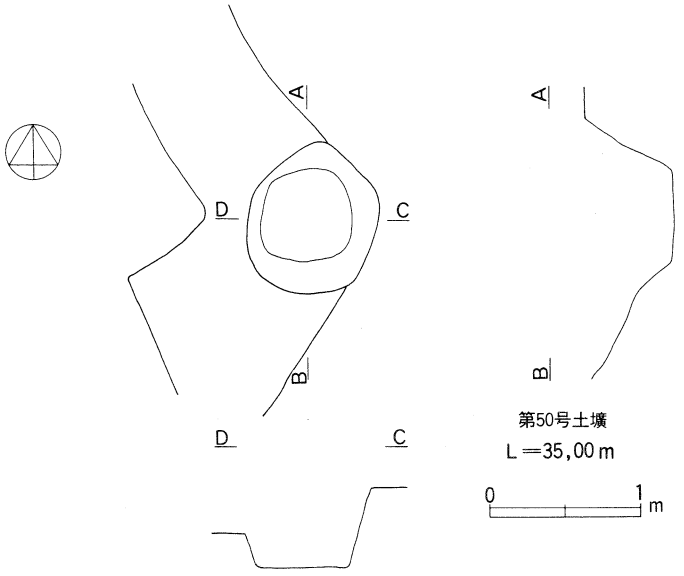
第51号土壙（第116図）

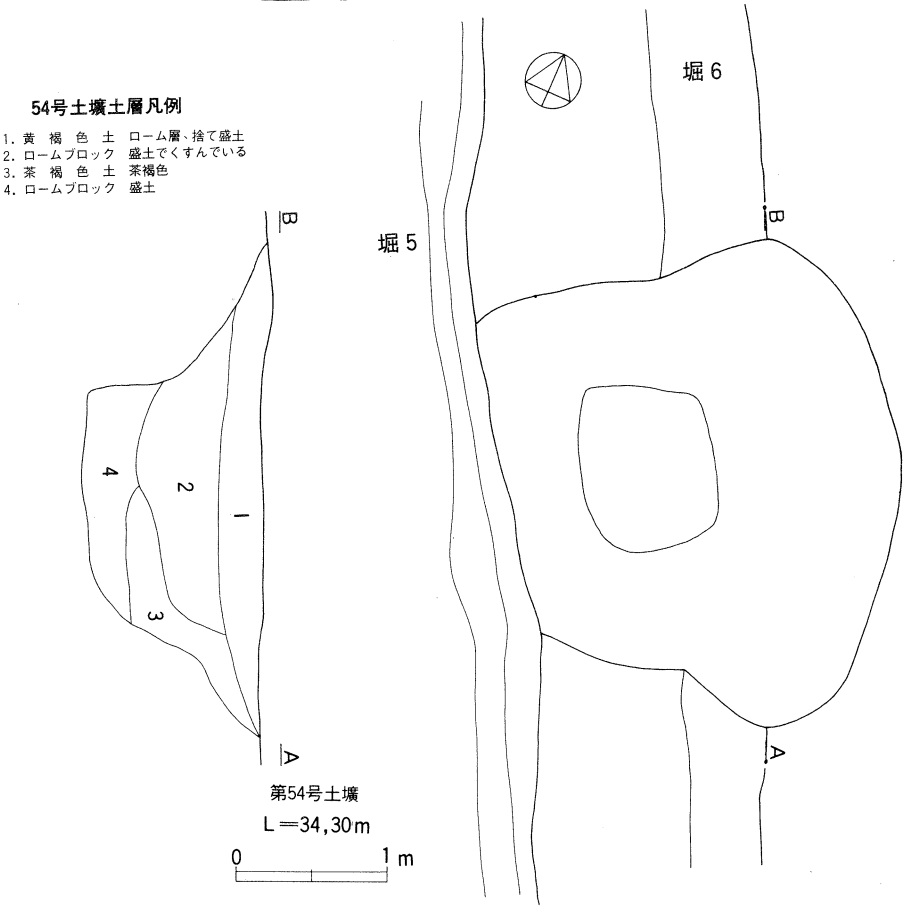
本土壙は、Ｉ郭の中央南側で第30号建物址の北側に位置している。大きさは、東西径0.98m、南北径1.00m、深さ0.60mを計測し、隅丸円形状を呈している。方位は、Ｎ－40°－Ｅである。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。

土層は、ローム＝ブロック主体の黒色土が１層堆積しており、遺物の出土は皆無である。なお第52、53号土壙も、本土壙と同様の状況を有している。

第52号土壙（第116図）

本土壙は、第51号土壙の南西部に位置し、東西径0.94m、南北径0.94m、深さ0.55mの規模を有し隅丸円形状を呈している。土壙底は、皿状を呈しており壁はほぼ垂直に掘り込まれているが東壁はややオーバーハング気味である。土層と遺物に関しては、第51号土壙と同様である。なお





第115図　第50、54号土壌実測図

方位は、N－45°－Eである。

第53号土壙（第116図）

本土壙は、第52号土壙の南西部に位置し、東西径0.95m、南北径1.05m、深さ0.72mの規模を有し、不整円形状を呈している。方位は、N－33°－Eである。土壙底は、鍋底状を呈しており壁は斜めに掘り込まれている。土層と遺物は、第51号土壙と同様である。

第54号土壙（第115図）

本土壙は、I郭北側土塁下南側で第5号堀に上面を切られた状況で確認された。大きさは、東西径2.65m、南北径3.23m、深さ1.50mを計測し、不整長方形状を呈している。方位は、N－23°－Wである。底面は、皿状を呈しており壁は斜めに掘り込まれている。土層は、黄褐色土、ロームブロック、茶褐色土、ロームブロックが堆積している。これらの土層は、土壙を埋め土塁の基底部を構築する時の盛土としての土層と判断される。遺物は皆無である。

第55号土壙（第117図）

本土壙は、I郭の北東部で第16号土壙の東側に位置している。大きさは、東西径4.80m、南北径6.80m、深さ1.05mを計測し、楕円形を呈している。土壙底は、擂鉢状を呈しており壁は緩かな斜面となっている。中央北側には、0.80m×0.60mで楕円形状に灰層が堆積している。灰層の厚さは、0.03mである。

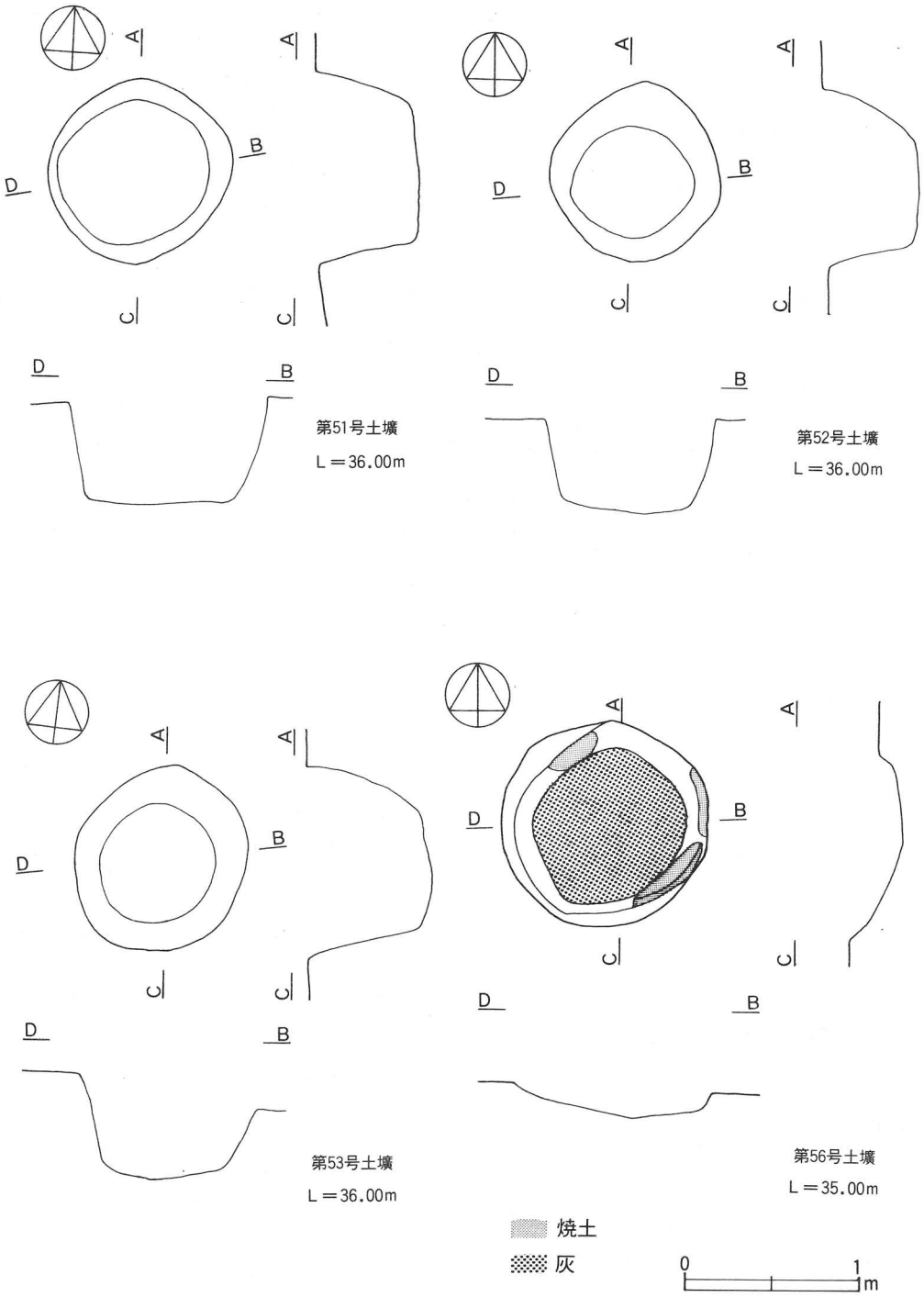
土層は、ローム＝ブロック主体の黄褐色土で、一部灰層を含んでいるが、焼土層が堆積しておらず底面も焼けていない。また、土層自体かなりしまっており、埋められ踏み固められている。

出土遺物は、皆無であるため、時期等は不明である。方位は、N－30°－Eである。

第56号土壙（第116図）

本土壙は、I郭の中央東側で第4号堀北東虎口の北東部に位置している。大きさは、東西径が1.20m、南北径は1.20m、深さ0.17mを計測し、円形状を呈している。方位は、N－43°－Eである。土壙底は、皿状で壁は斜めに掘り込まれている。

土層は、黒褐色土と灰層が堆積しており、灰層は厚さ4cmを計測する。また、3ヶ所の壁に



第116図　第51、52、53、56号土壙実測図

は焼土が薄く堆積しているが、焼土下の壁はやや変色し分解している程度である。出土遺物としては土玉（第141図No246）が1点出土したのみである。

第57号土壙（第174図）

本土壙は、Ⅰ郭の北側中央部で第11号、16号住居址を掘り切っている。大きさは、東西径1.40m、南北径1.50m、深さ0.60mを計測し、正方形状を呈している。方位は、N－38°－Wである。土壙底は、平坦で壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

土壙内覆土は、ローム粒子を含む黒色土とローム＝ブロックを含む黒褐色土が堆積しており、少量の土師器片が出土したのみである。

第58号土壙（第118図）

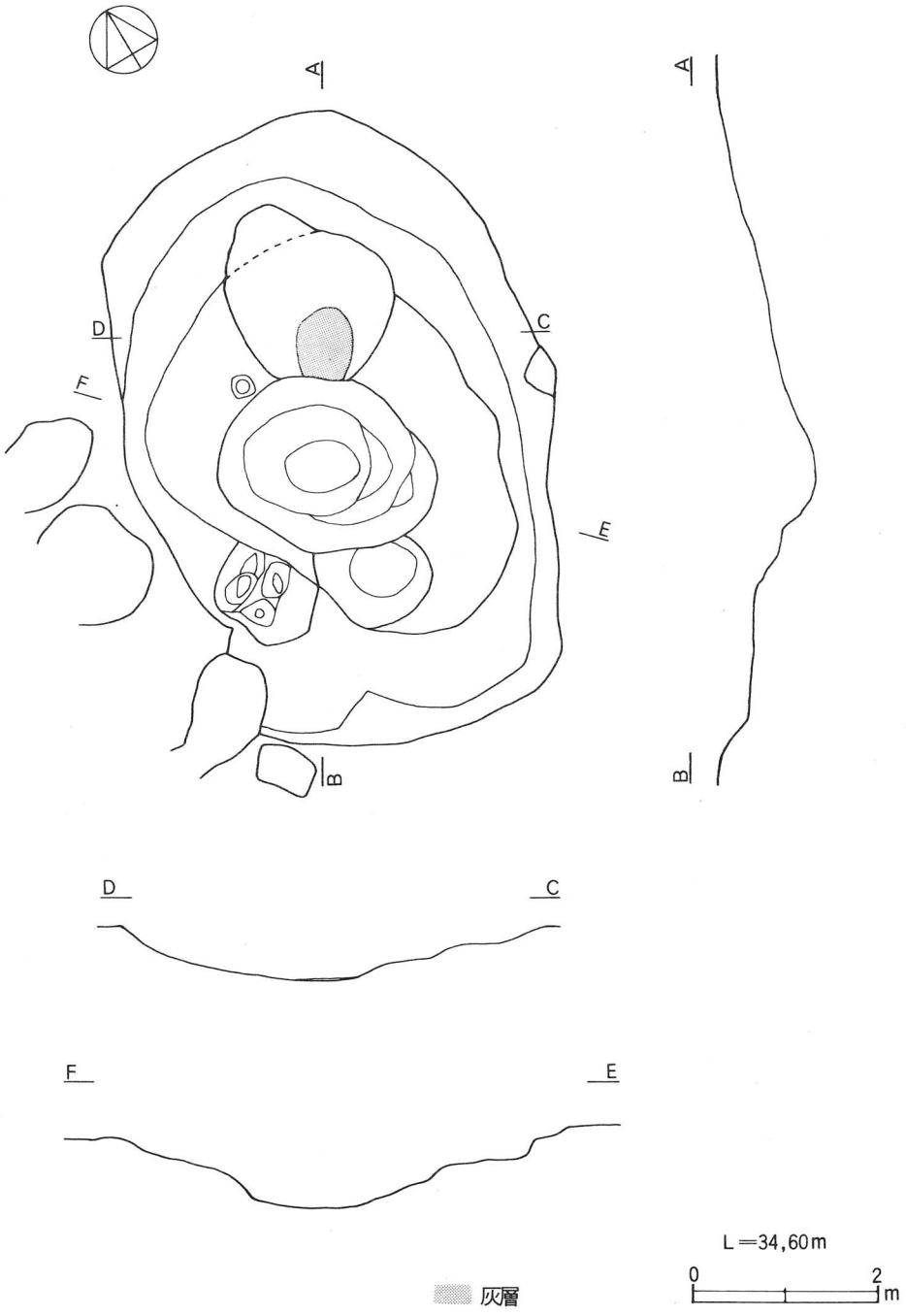
本土壙は、Ⅰ郭の中央部で第49号建物址と重複している。大きさは、東西径が1.55m、南北径は1.70mであり、深さ0.14mを計測し、隅丸方形状を呈している。方位は、N－44°－Wである。土壙底は、ほぼ平坦で壁は斜めに掘り込まれている。壁には、2本の小Pitが掘り込まれている。P1は、東壁にあり長径0.38m、短径0.25m、深さ0.24mを計測し楕円形を呈している。P2は南西壁にあり長径0.45m、短径0.27m、深さ0.24mを計測し楕円形を呈している。この2柱穴は本址に供なう柱穴と判断される。

土層は、ローム＝ブロックを含む黒色土が堆積しており、少量のカワラケ小破片と土師器小破片を含んでいる。土壙内には、焼土層や焼土域が存在していないものの、プランから小堅穴と判断される。

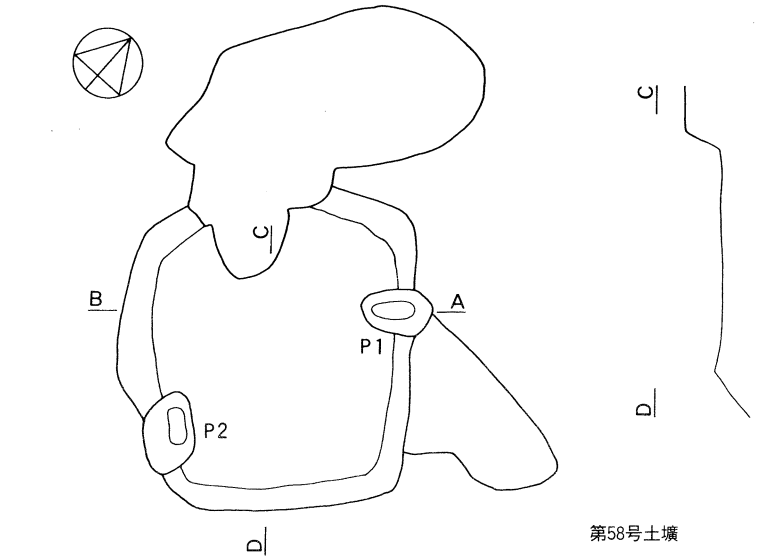
第59号土壙（第118図）

本土壙は、Ⅰ郭の南側で第7号溝と重複している。大きさは、東西径1.67m、南北径1.90m、深さ0.37mを計測し、不整楕円形状を呈している。本土壙は、擂鉢状を呈している。

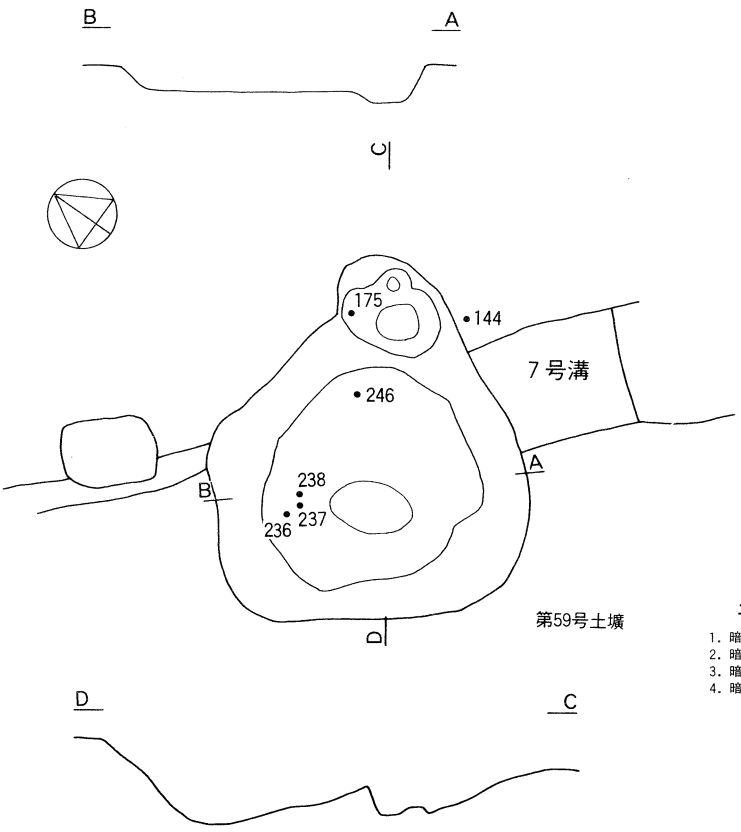
土壙内覆土は、暗褐色土と暗黄褐色土が堆積しており、暗褐色土が3層に細分され、カワラケ（第137図No175）と土玉（第141図No236～238、246）を含んでいる。これらの出土遺物は、覆土内第1、2層中よりの出土である。



第117号　第55号土壙実測図



第58号土壙



第59号土壙

土層凡例

1. 暗褐色土　ローム粒を含む
2. 暗褐色土　ローム小ブロックを含む
3. 暗褐色土　ローム粒を含む
4. 暗黄褐色土　ロームブロック、ローム粒を含む

L＝36.00m

0　1 m

第118図　第58、59号土壙実測図

第60～65号土壙（第119図）

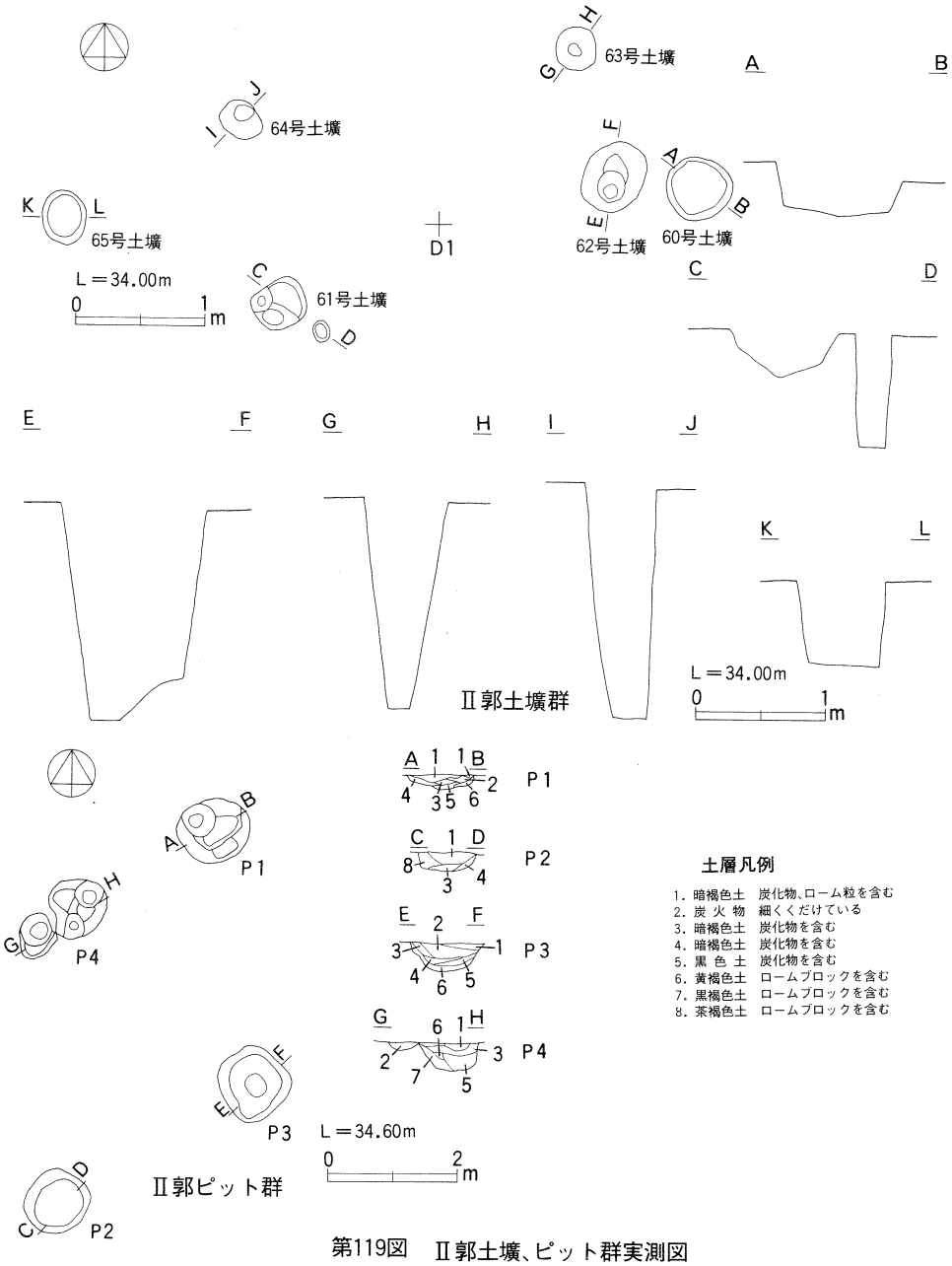
第60～65号土壙は、Ⅱ郭の中央東側に位置する土壙である。第60号土壙は、東側に位置し東西径0.98m、南北径0.98m、深さ0.45mを計測し不整円形状を呈している。方位は、N－53°－Wである。底部は、皿状を呈し壁は斜めに掘り込まれている。土層は、黒色土と黒褐色土が堆積しており、出土遺物としては少量の土師器片を含んでいる。第61号土壙は、東西径0.80m、南北径0.70m、深さ0.35mを計測し隅丸方形状を呈している。方位は、N－55°－Eである。底面は、擂鉢状を呈し壁は斜めに掘り込まれている。土層は、黒色土が堆積しており、少量の土師器片を含んでいる。また、本土壙の南東部には、長径0.34m、短径0.25m、深さ0.85mを計測し楕円形をなす小Pitが掘り込まれている。なお、本土壙の南西部のPit状部分は撹乱である。第62号土壙は、東西径0.92m、南北径1.10m、深さ1.65mを計測する。北側は、1.30mの深さを計測する。方位は、N－23°－Eである。北側は、南側に切られている。土層は、黒色土と黒褐色土が堆積しており、下層につれて粘性を有している。第63号土壙は、東西径0.65m、南北径0.65m、深さ1.62mを計測し、不整円形状を呈している。方位は、N－34°－Eである。底面は、平坦で壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、黒色土と黒褐色土が堆積しており、黒褐色土は下層になるにつれて粘性を有している。第64号土壙は、東西径0.55m、南北径0.68m、深さ1.79mを計測し楕円形を呈している。方位は、N－52°－Wである。底面は、平坦で壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、黒色土が堆積しており、下層は粘性に富んでいる。第65号土壙は、東西径が0.68m、南北径が0.86m、深さ0.65mを計測し楕円形を呈している。方位は、N－13°－Wである。底面は、平坦で壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

これらの土壙は、第60号、61号、65号の3土壙以外は、全て円筒状の土壙である。出土遺物としては、少量の土師器片と第62号、63号、64号土壙より、少量の縄文式土器小片が出土したのみであるが、小破片であるため図示出来なかった。時期的には、茅山期に位置する。

Pit群（第119図）

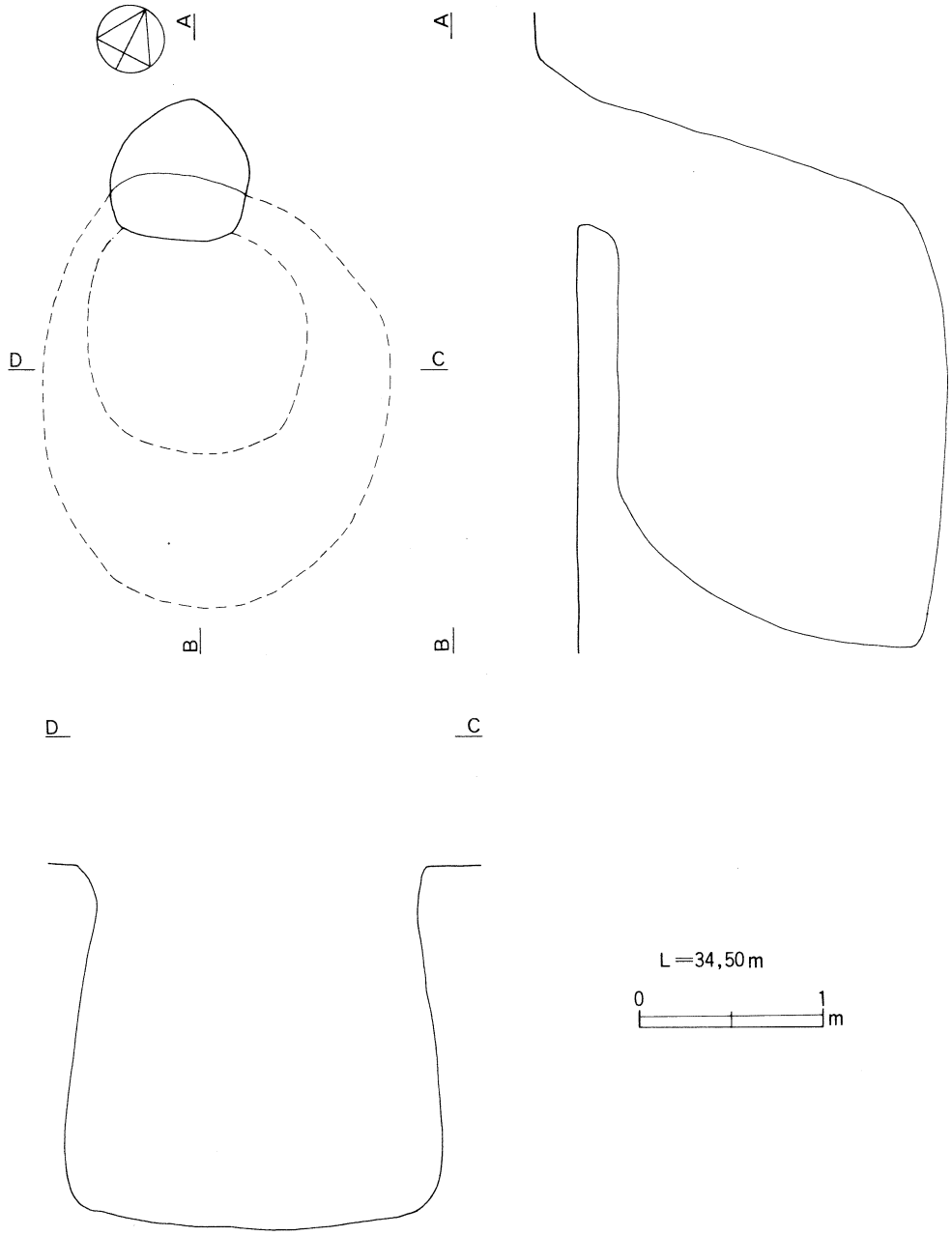
Pit群としては、第1号堀南側虎口付近でⅡ郭第31号住居址の西側に位置する。Pit群とするよりは、P2のように土壙と考えられる遺構もあるが、虎口の前面でもあり礎石等の可能性もあることから、一応Pit群とした。

P1は、東西径0.96m、南北径1.08m、深さ0.25mを計測し、不整円形状を呈し方位はN－60°－Eである。底面は、鍋底状を呈し壁はほぼ垂直に掘り込まれている。西側には、撹乱Pitがある。土層は、暗褐色土、炭化物、黒色土、黄褐色土が堆積している。堆積状態は、埋められた状況を



第119図　Ⅱ郭土壙、ピット群実測図

呈し上面は比較的しまっている。Ｐ２は、東西径0.92m、南北径1.00m、深さ0.30mを計測し、円形状を呈している。方位は、Ｎ－40°－Ｅである。底面は、皿状を呈し壁はほぼ垂直に掘り込まれている。土層は、暗褐色土と茶褐色土が堆積しており、縄文式土器片が出土した。縄文式土器片は、阿玉台式期に位置する。Ｐ３は、東西径1.05m、南北径1.04m、深さ0.43mを計測し不



第120図　第１号地下式倉庫実測図

整方形状を呈している。底面は、鍋底状を呈し壁は斜めに掘り込まれている。方位は、N－41°－Eである。土層は、暗褐色土、炭化物、黒色土、黄褐色土が堆積している。堆積状況は、埋められた状況を呈している。P4は、東西径0.86m、南北径1.00m、深さ0.42mを計測し不整円形状を呈している。底面は皿状を呈し壁は斜めに掘り込まれている。方位は、N－62°－Eである。土層は、暗褐色土、黒色土、黄褐色土、黒褐色土が堆積しており、埋められている。南西部には長径0.48m、短径0.45m、深さ0.12mで円形をなすPit状の遺構があり、炭化物が堆積している。P4には、Pit状の掘り込みが2本確認されたが、撹乱Pitである。

12）地下式倉庫（第120図）

地下式倉庫としては、I郭の中央西側で第4号堀北西コーナー部で1基確認されている。西側に入口があり、径0.75mを計測する。内部の大きさは、東西径1.90m、南北径2.35m、深さ1.95mを計測する。底面は、東西径1.15m、南北径1.15mを計測する。天井部の厚さは、0.22mを計測する。底面は、ローム層内で止まっているが、堀と近接しているため水が溜っている。

倉庫内には、粘土ブロックを含む黒色土と黄褐色土（ロームブロック）が堆積している。ロームブロックの黄褐色土は、天井や壁の崩れたものである。

出土遺物は、何ら出土しなかったが、前述のように水が良く溜るため、長期間の使用には適さないようである。

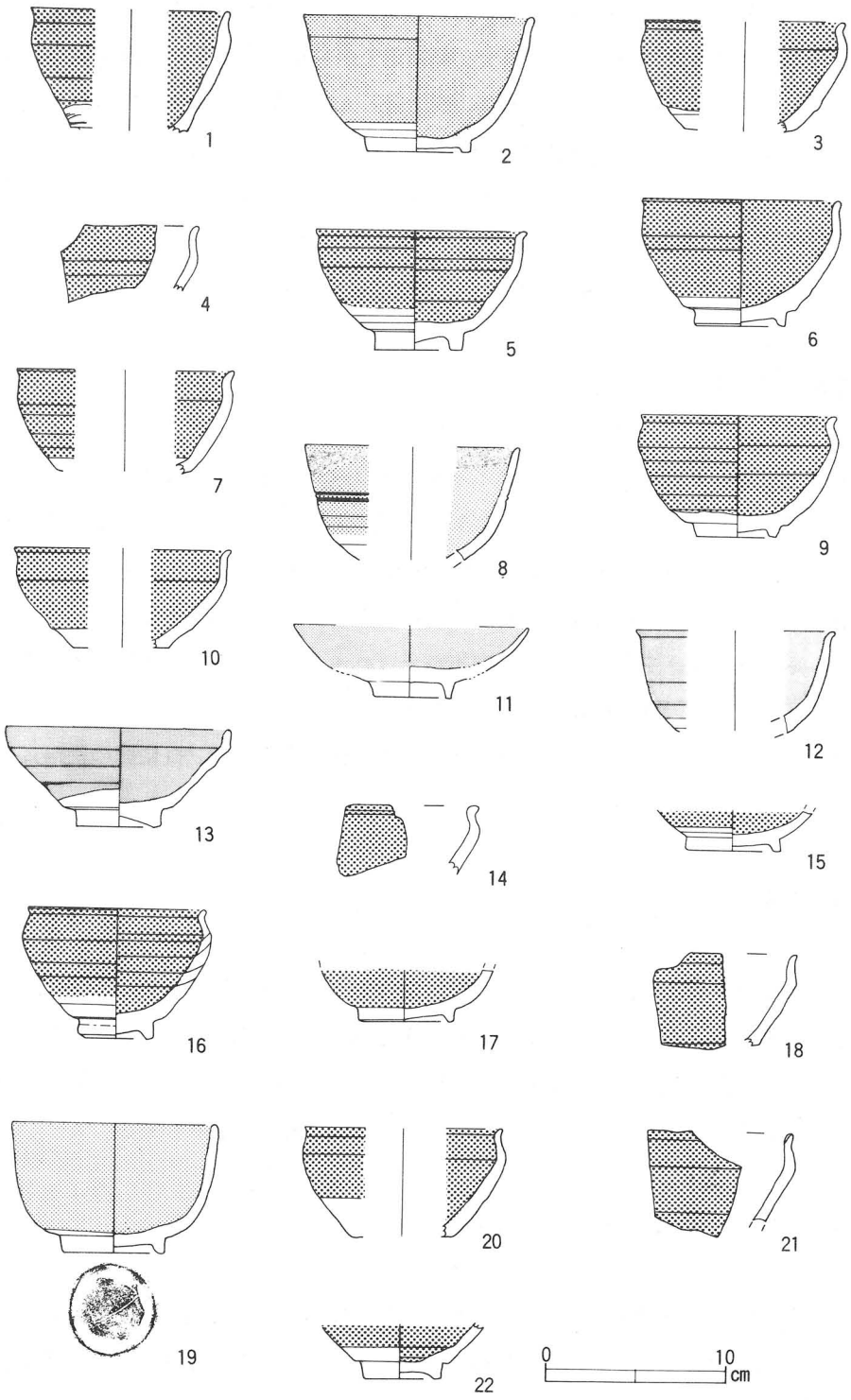
2．中世の出土遺物

中世の古屋敷に関係する出土遺物としては、輸入陶磁器、国産陶磁器、土鍋、鉄製品、古銭、カワラケなどの土器類などが検出されている。輸入陶磁器では、小皿があり、国産陶磁器では茶碗、皿類、甕、水瓶、壷、香炉などがある。土鍋類では、内耳土器と外耳土器、土鍋がある。鉄製品としては、釘、小札、馬具、鍔等がある。図版上、一部前後するものもある。

1）陶磁器（第121～125図、第61～68表、図版48・49）

陶磁器としては、輸入陶磁器と国産陶磁器がある。輸入陶磁器は、数量的にごく少数で器種も小皿に限られている。数量としては、国産陶磁器が中心である。国産陶磁器は、天目茶碗、小皿などの皿類、甕、壷、香炉、合子、水瓶などが検出されている。

輸入陶磁器としては、第121図No42の小皿がある。体部はやや内傾ぎみに外傾しており、高台



第121図　城址関係出土遺物実測図１

第61表　城址関係出土遺物一覧表１

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備考
1	茶碗	第18号掘立	第121図	A 10.9 B 6.6	1／6	体部は、内傾ぎみ口縁部は直立後口唇部がやや外傾	口縁から底部まで回転ヘラ削り、釉は薄い茶褐色釉	淡暗褐色 良好 淡茶褐色	瀬戸 黒天目
2	茶碗	第19号掘立	第121図	A 12.8 B 7.5 D 6.0 E 0.7	体部を1／2 欠損	低い高台から、内傾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや内傾後小さく外傾	体部は、回転ヘラ削り、高台は、回転ヘラ削りの造り出し釉は、淡緑色で薄い	淡灰白色 良好 淡緑色	織部天目 No.6
3	茶碗	第19号掘立	第121図	A 11.0 B 6.1	1／4～1／5	底部から肩まで直線的に外傾、口縁部は、内傾後外傾で「く」字状をなす。	口縁部から底部まで、回転ヘラ削り、体部下半は露胎釉は、厚い淡黒色	灰白色 淡黒色 良好	瀬戸 黒天目
4	茶碗	第30号掘立	第121図		口縁部片	肩部から緩やかに内傾後、口縁部は外傾	回転ヘラ削り後に、薄い淡黒色釉をかける。	淡暗褐色 良好 淡黒色	瀬戸 黒天目 wpit
5	茶碗	第21号掘立	第121図	A 11.7 B 6.6 D 1.1 E 4.9	体部を1／2 欠損	体部は、やや内傾ぎみ口縁部は、直立後口唇部外傾高台は、やや外傾する	体部は、回転ヘラ削り、高台は回転ヘラ削りの造り出し、体部中央まで釉有	灰白色 良好 淡黒色	瀬戸 黒天目
6	茶碗	第21号掘立	第121図	A 11.0 B 7.0 D 0.8 E 5.3	口縁～底部まで1／4残	体部は、内傾ぎみで、口縁部は、内傾後外傾で「く」字状をなす。	回縁～底部まで回転ヘラ削り、高台部は、造り出し体部下半まで黒色釉を有す	暗灰白色 黒色	瀬戸 黒天目 No.6
7	茶碗	第21号掘立	第121図	A 12.0 B 5.6	口縁～底部の破片	体部は、内傾ぎみ、口縁部は、内傾後外傾で「く」字状をなす	口縁～底部まで回転ヘラ削り黒色釉は薄く、一部釉だれを有す	灰白色 黒色	瀬戸 黒天目
8	茶碗	第24号掘立 東南虎口	第121図	A 12.0 B 6.3	口縁～底部1／6 程度残	体部上半は直接的に外傾体部下半は、内傾、体部中央に２条の沈線有	口縁～体部は回転ヘラ削り体部下半まで釉をかける口縁部に白色釉有（内外に有）	暗灰白色 淡緑色	瀬戸、美濃系 No.17＋東南各頭部No.34 接合資料
9	茶碗	北東部土塁内	第121図	A 10.9 B 6.7 D 0.8 E 4.5	体部を1／2 欠損	体部は内傾ぎみ、口縁部は「く」字状をなす高台部は、やや内傾	口縁部～底部まで回転ヘラ削り 高台部は、造り出し	暗灰白色 黒色釉有	瀬戸 黒天目
10	茶碗	工郭第２号堀	第121図	A 20.0 B 5.4	1／4	体部は、直線的に外傾口縁部は、直立外傾	口縁～底部まで回転ヘラ削り、体部下半まで薄い釉有	灰白色 黒色	瀬戸 黒天目
11	碗	工郭第２号堀	第121図	A 13.0 B 4.0 D 0.8 E 4.4		口縁部まで内傾ぎみに立ち上がり、薄い器肉高台は直立で削り出し	体部は、回転ヘラ削り、内面と外面に薄く釉を有す	淡灰白色 淡緑釉	青白磁 輸入陶磁器
12	茶碗	工郭第２号堀	第121図	A 11.0 B 5.7	口縁～体部1／3～1／4	体部下半は内傾で、上半は外傾口縁部は、小さく外傾している。	体部は、回転ヘラ削り後に茶褐色釉を薄くかける	長石粒含みの淡暗褐色 茶褐色	瀬戸 赤天目
13	茶碗	工郭第５号堀（北側）	第121図	A 12.5 B 5.5 D 1.0	口縁～底部1／2 欠損	体部は、直線的に外傾口縁部は、直立高台部は、直立	口縁～底部にかけ回転ヘラ削り、高台部は造り出し、体部に茶褐色釉有	長石含みの暗褐色 茶褐色	瀬戸 赤天目 No.26

第62表　城址関係出土遺物一覧表 2

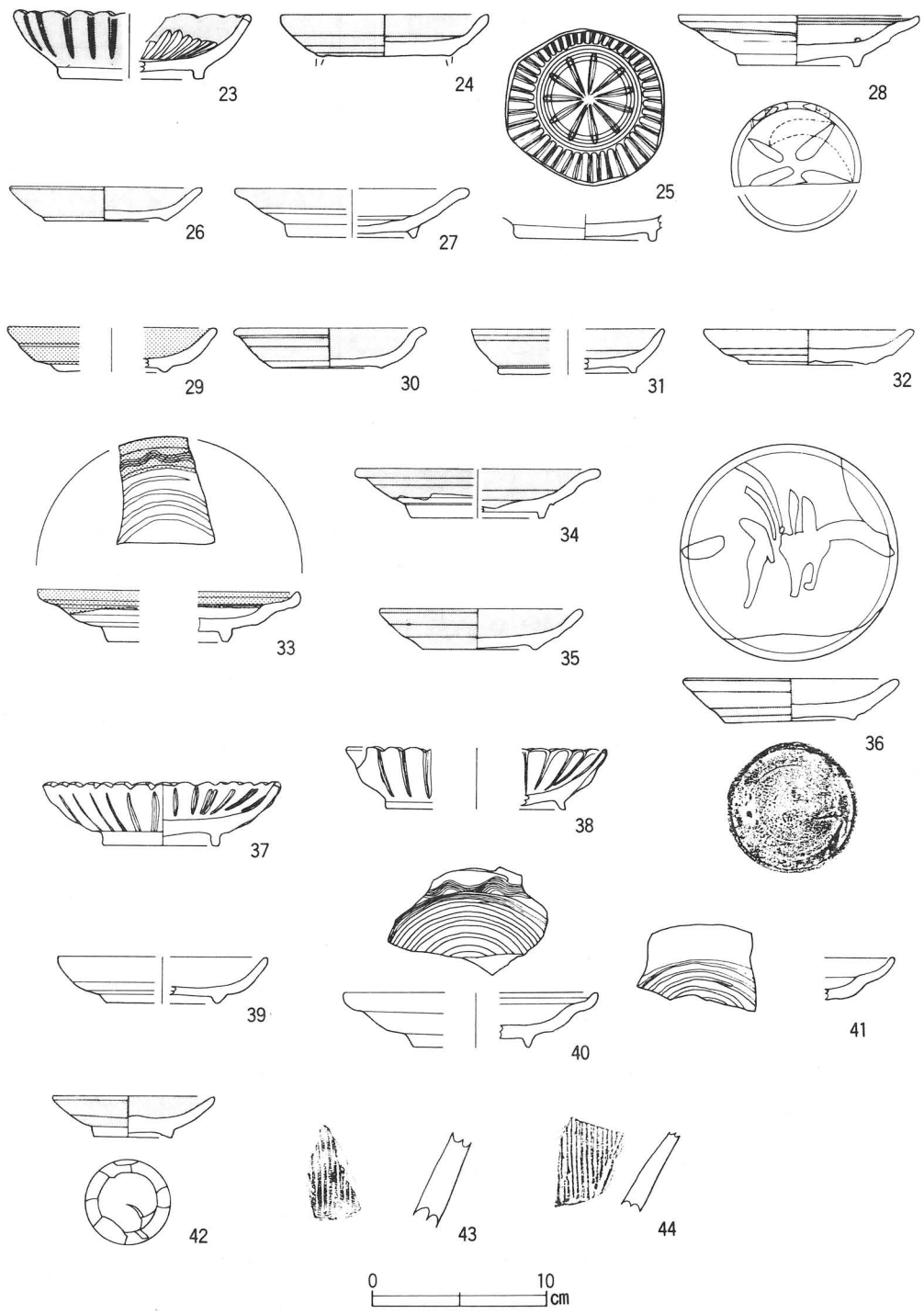
No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
14	茶碗	工郭第5号堀(北側)	第121図		小破片	体部は、直線的に外傾口縁部は、内傾後外傾で「く」字状をなす	口縁部～体部にかけ回転ヘラ削後釉をかける	暗灰白色 暗茶褐色	瀬戸 天目
15	茶碗	工郭第5号堀	第121図	B　2.3 D　0.7 E　5.3	体部上半欠損	体部は、内傾ぎみに立ち上がる 高台は、直立で外傾	体部は、回転ヘラ削り高台部は、削り出し	淡灰白色（長石)体部下半、内面黒色体部下半は、暗茶褐色	瀬戸 黒天目
16	茶碗	第4号掘立	第121図	A　9.8 B　7.2 C　5.0 D　1.1 E　4.2	口縁部1／6 体部1／2 残	体部は内傾ぎみで、口縁部は内傾後外傾で「く」字状口縁部は、外傾	体部は、回転ヘラ削り、高台は、回転ヘラ削りの削り出し、釉は体部下半まで肩釉は、やや厚い	淡暗褐色 黒色	瀬戸 黒天目
17	茶碗	第33号土壙	第121図	B　2.8 D　0.8 E　5.3	体部上半1／2以上欠	体部は内傾ぎみ、高台部は、削り出しでやや外傾する	体部は、回転ヘラ削り後施釉、 釉は、淡緑色	淡暗褐色 (長石粒含) 淡緑色	瀬戸、天目 No.2
18	茶碗	第4号掘立	第121図		口縁部片	体部は、直線的に外傾口縁部は、内傾後外傾で「く」字状を	回転ヘラ削り後、薄く施釉している。長石の出が見られる	淡暗褐色 明褐色	掘立内一括 天目
19	茶碗	Ⅰ郭	第92回	A　11.5 B　7.1 D　0.9 E　5.8	口縁～体部1／3 残	なす体部はやや内傾ぎみに直立する 高台は直立	体部は、回転ヘラ削り後内面と体部下半まで施釉、体部上半に緑色釉有高台部は露胎	淡暗褐色 緑色＋褐色	織部 底部内面に長石粒の釉有 底面に刻線有
20	茶碗	Ⅰ郭	第121図	A（11.0) B　6.1	破片	体部は、直線的に外傾口縁部は、直立後やや外傾で「く」字状	体部は、回転ヘラ削り後施釉、釉は、体部中央と内面に施す	淡暗褐色 黒色	瀬戸 黒天目
21	茶碗	Ⅰ郭	第121図	A（10.8) B　2.5	破片	体部は、直線的に外傾口縁部は、内傾後外傾で緩い「く」字状、口唇部に削り出し有	体部は、回転ヘラ削り後施釉施、採色する	暗褐色 淡黒色＋白色	瀬戸 天目
22	茶碗	Ⅰ郭	第121図	B　3.0 D　0,9 E　2.5	体部上半を欠く	体部は、直線的に外傾高台部は、削り出しで直立	体部は、回転ヘラ削り体部下半と高台部は、露胎釉は、内面と体部下半まで	暗褐色で、長石、石英粒を含 淡黒色＋褐色	瀬戸 天目

部は外側がやや内傾で内側が外傾し、逆三角形状を呈しており、３ヶ所削り出している。胎土と施釉は白色を呈している。底部内面に輪トチ、同外面に団子トチを置き重ね焼きをしている。この小皿以外は、国産陶磁器がほとんどで種類としては、茶碗、丸碗、小皿、徳利、甕、香炉、擂鉢、合子などがある。以下に、これらを順に記述する。

茶碗としては、天目茶碗がほとんどで、破片を含めると総数は、200点以上で、第98図はこれらの中17点（No１，３～７，９，10，13～18，20～22）を図示した。No１は、第18号建物址から検

出された茶碗片で、体部下半は露胎となっている。No３は、第19号建物址から検出された茶碗片で、体部下半は露胎で口縁部が「くの字」状を呈している。No４は、第30号建物址より検出された茶碗小片で、口縁部が「くの字」状を呈している。No５は、体部を1／2 程度欠損している天目茶碗で、口縁部は直立後外傾している。高台は、水平に切られている。第21号建物址より出土している。No６は、No５同様第21号建物址より出土している。器型としては、No５より体部上半が張っており、口縁部が短くなっている。また、高台部は逆台形状を呈するものの底面は斜めに削り出されている。底部内面には、円錘ピンを用いて重ね焼きしている。No７は、第21号建物址より検出された体部片である。口縁部は、No５，６より長くなっている。この５～７は、３点とも天目茶碗である。No９は、第24号建物址より出土して天目茶碗で、体部上半はNo６より張り、口縁部も鋭く曲がっている。底部内面には、円錘ピンを置いており、高台部は逆台形状に削り出されている。体部下端は、露胎となっている。No10は、第２号堀より出土した天目茶碗片である。体部上半の張りも緩く、口縁部も短くなっている。No13は、第５号堀より出土した天目茶碗で、口縁部は直立しており、高台部外側は直線的であるが内面は、中央部から斜めに削り出されている。No14,15 は、第５号堀より出土した天目茶碗片である。No14は、口縁部が短くそして肥厚化している。No15は、体部下端が丸味を有しており、高台部は逆台形状を呈するものの高台部底面内傾は、やや丸味を付けて削り出されている。No16は、第４号建物址より出土した天目茶碗である。体部下半は、露胎で体部上半の張りはやや緩くなっている。口縁部は、薄手で短くなっている。高台部は、逆台形をなしているが、丸味を有して削り出されている。No17は、第33号土壙から出土した天目茶碗の底部片である。底部は、No15と同様丸くなっており、逆台形の高台部であるが丸く削り出されている。No18は、第４号建物址から出土した天目茶碗片である。体部上半は、鋭く張り出しているが口縁部は直立ぎみに外傾している。No20～21はＩ郭内より出土した天目茶碗片である。No20は、口縁部が薄手化し短くなっている。No21は、口縁部内面を片口状に削り出している。No22は、底部片である。これらの茶碗は、No13が赤天目である以外全て黒天目である。

丸碗としては、No２，８，12,17 の４点がある。No２は、第19号建物址より出土しており低く逆台形をなす高台で、口縁部をやや外傾させている。高台部には、輪トチを有している。内面と外面体部下端まで淡緑色釉をかけている。No８は、第24号建物址と東南谷頭部から出土した同一遺物の接合資料である。体部中央に、二条の沈線を刻し体部は直線的に外傾している。内面と外面の体部下端まで淡緑釉をかけたのち、口縁部内外面毛筆による白色釉を画いている。沈線には、黒色釉を塗っている。No12は、第２号堀より出土している。口唇部が、短く外傾している。釉は、内面と外面にかけられ茶褐色を呈し薄くかけられている。No17は、第33号土壙より出土している。高台部は、逆台形をなすが底面は、内側にかけ丸く斜めに削られている。底部外面には、



第122図　城址関係出土遺物実測図 2

第63表　城址関係出土遺物一覧表 3

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
23	皿	第17号掘立	第122図	A (14.0) B 3.7 D 0.5 E (8.6)	1／6	体部は、内傾ぎみに立ち上がる。 高台部は、削り出しで直立	体部は、回転ヘラ削り、口縁部は波状をなし、体部外面に沈線を刻す施釉は、薄い。	暗灰色 淡青色	輸入陶磁 No.4
24	皿	第17号掘立	第122図	A (12.0) B 2.3 C 7.0 D 0.3	体部1／6 底部1／2残	体部は、直線的に外傾し、口縁部は、やや肥厚。底部は水平で、高台は非常に低い。	体部は、回転ヘラ削りで、高台部は削り出し、施釉は、薄く白色を呈す	淡暗褐色 白色	志野 No.10
25	皿	第17号掘立	第122図	B 1.4 D 0.5×0.8 E 8.2	体部下半以上欠	体部は、内傾ぎみで、高台部は削り出しで直立、底部は高台に向い下がっている	施釉は、やや厚め、底部内面に、円形沈線とこの中に1本の低い隆帯、体部放斜状の隆帯有	暗灰色色 淡青色	輸入陶磁 No.25
26	皿	第19号掘立	第122図	A 11.0 B 1.9 C 7.0 D 0.2	体部1／2 底部1／3欠	底部は、ほぼ水平で体部は直線的に外傾、口唇部やや肥厚、高台部は低く削り出している	体部は回転ヘラ削り底部は、回転糸切り施釉は、薄く淡黒点を有する淡色釉	淡暗褐色 淡白色	志野 No.5
27	皿	第19号掘立	第122図	A (13.5) B 2.8 D 0.4 E 7.4	体部1／3 底部1／2残	体部は、内傾ぎみに外傾、口縁部は、折り返し高台部は、三角形をなし削り出し	体部は、回転ヘラ削り底部は、回転ヘラ切りで露胎施釉は薄く、体部下半に露胎を有す	淡暗褐色 暗白色	瀬戸、美濃 No.4
28	皿	第49号掘立	第122図	A (13.8) B 2.9 D 0.6 E 7.9	体部1／5 底部1／2残	体部は、内傾ぎみに外傾後直線的に外傾、口唇部削り出し。底部内傾で、高台部は削り出し	体部と底部は、回転ヘラ削り、体部外面下半は露胎底部内面に抑葉状の文様有、釉は薄い	淡灰白色 淡褐色	瀬戸
29	皿	第4号掘立	第122図	A (12.0) B 2.6 D 0.3 E (7.0)	1／4	体部は、内傾ぎみに立ち上がる。高台部は、低く直立高台部に削り出しによる沈線有	体部は、回転ヘラ削り後施釉は、薄い淡黄褐色で、底部内面に緑色の採色有	淡暗褐色 淡黄褐色	織部 No.2
30	皿	第2号製鉄址	第122図	A 11.1 B 2.3 D 0.2 E 6.5	完	底部は、内傾ぎみで体部は、内傾ぎみに外傾。口縁部は、外傾。高台部は、低く削り出し	体部は、回転ヘラ削り後に淡灰褐色釉を施釉、底部は回転ヘラ切り	淡暗褐色 淡灰褐色	志野
31	皿	I郭第2号堀	第122図	A (11.0) B 2.0 D 0.4 E (7.9)	1／4	底部は、やや内傾ぎみで、体部は、直線的に外傾高台部は、低く外傾で削り出し	体部は、回転ヘラ削り後褐色釉を施釉 高台部は、露胎	灰白色 褐色	瀬戸
32	皿	I郭第7号溝	第122図	A (12.0) B 2.0 D 0.2 E (0.8)	1／4	底部は、水平で体部は直線的に外傾、高台部は削り出しで低い。底部外面中央に円形状の削り出し有	体部は、回転ヘラ削り、底部は回転ヘラ切りで高台部は削し出し。全体に施釉しており、赤褐色状の斑点有	淡灰褐色 淡灰褐色	志野 No.6
33	皿	I郭第2号堀	第122図	A (15.0) B 2.9 D 0.5 E (7.0)	1／6	底部は水平で、体部は内傾ぎみで、口縁部は、大きく外傾後口唇部は直立、高台部削り出しで直立	体部は、回転ヘラ削り後体部上半まで施釉、体部下半と高台部は、露胎、内面には、は円形と波状の文様有、円形は茶褐色釉で、口縁は緑色の釉	暗褐色 淡黄褐色釉に茶褐色釉、緑釉をかける	織部

第64表　城址関係出土遺物一覧表 4

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備考
34	皿	Ⅰ郭第5号堀	第122図	A (14.1) B 2.8 D 0.4 E 7.6	底部1／2 体部1／6	底部は水平で内面を削り込む体部は内傾ぎみに外傾し、口縁部大きく外傾、高台部は直立で削り出し	体部は、回転ヘラ削りで、高台部は削り出しで露胎。底部内面と体部に薄い釉を施釉	淡暗褐色 淡緑色	志野
35	皿	Ⅰ郭第5号堀	第122図	A 11.6 B 2.3 E 6.7	1／2	底部は、内傾ぎみで体部は、内傾ぎみに立ち上がる高台部は削り出し	体部と底部は、回転ヘラ削り。内面と体部に薄い褐色釉を施釉する	淡暗褐色 淡褐色	志野
36	皿	第37号土壙	第122図	A 12.3 B 2.6×2.3 D 0.2 E 7.5	体部1／3 欠	底部は、水平で体部は直線的に外傾、高台部は低く削り出し	体部と底部は、回転ヘラ削りとヘラ切り、高台部は削り出し、内面に施文後、薄く釉をかけている	淡暗褐色 淡褐色	志野
37	皿	Ⅰ郭	第122図	A (13.6) B 3.6 D 0.7 E 6.7	体部3／4 欠	底部は、やや内傾ぎみ体部は、内傾ぎみに外傾、高台部は、削り出しで直立で露胎	体部はヘラ削り後ヘラナデ口縁部を波状に削り出し、体部に縦位の沈線を削り出す。底部まで施釉、口縁部内面は緑釉	淡暗褐色 淡黄褐色	黄瀬戸 Ⅰ郭第5号堀と接合資料一部くすんでいる。
38	皿	Ⅰ郭	第122図	A (15.0) B 3.6 D 0.6 E 10.3	1／5	底部は内傾で、体部は内傾ぎみに外傾、高台部は削り出しで外傾する。口縁を波状と体部に沈線を削り出す	体部は回転ヘラ削り後薄く釉を施す高台に釉だれ有、高台部は露胎	灰褐色	輸入陶磁
39	皿	Ⅰ郭	第122図	A 12.0 B 2.7 D 0.5 E 7.4	1／2	底部は水平で、体部は内傾ぎみに外傾する。高台部は直立で三角形に削り出す	体部は、回転ヘラ削り、釉は、高台部内面までやや厚く施釉	淡褐色 淡暗褐色	志野
40	皿	Ⅰ郭	第122図	A (14.5) B 3.1 D 0.6	1／4	底部は水平で、体部は内傾後口縁外傾で口唇部直立、高台部は直立で三角形に削り出す	体部は回転ヘラ削り、口縁部以下露胎、内面に円形、口縁部にクシで波状文有釉は口縁部のみ施釉	暗褐色 (小石含み) 淡緑釉	志野
41	皿	Ⅰ郭	第122図	A (14.0) B 2.4	片	底部は水平で、体部は、直線的に外傾後、内傾ぎみに外傾	体部は回転ヘラ削り、釉は、淡褐色釉後円形文を施す。口縁部に緑色釉有	淡暗褐色	織部
42	皿	Ⅱ郭	第122図	A 9.4 B 2.3 D 0.4 E 4.8	体部～口縁一部欠	底部はほぼ水平で体部は内傾ぎみに外傾、底部内面削り出し、高台部は、削り出しで削りによる造り出し有	体部は回転ヘラ削り前面に淡白色釉を施釉する	淡浮白色 淡白色	志野
43	摺鉢	第30号掘立	第122図	破片		直線的に外傾する内面に7～8本の節を有す	回転ヘラ削り後施釉釉は内外黒色でやや厚い	暗灰褐色 淡黒色	瀬戸、美濃系
44	摺鉢	第24号掘立	第122図	破片		直線的に外傾する内面に12本1 単位の節を有す	回転ヘラ削り後施釉釉は内外黒色でやや厚い	暗灰褐色 淡黒色	東南谷頭部 No.5 瀬戸、美濃系

一本線の印を刻している。釉は、淡緑色で薄く体部の内外面にかけられている。

No11は、体部下端を一部欠損している皿で、高台部は逆台形で小さく削り出されている。体部から口縁部にかけて、しだいに薄くなっており、釉は淡青色で薄くかけられている。

茶碗、丸碗の整型を見るならば、茶碗は体部が回転ヘラ削りで、口縁部は回転ヘラ削りによる削り出し、高台部は回転ヘラ削りによる削り出しで、ヘラナデは施していない。このため、施釉後もヘラ削り痕が明瞭に残っている。釉は、体部内面と外面下半までかけ、下端は露胎をなすのが普遍的である。丸碗は、体部と高台部は茶碗と同様回転ヘラ削りであるが、茶碗よりしっかりしたヘラ削りを施している。

皿としては、第122図No23～42までがこれに相当する。前述したように、No42が輸入陶磁器である以外は、全て国産品である。No23は、第17号建物址より検出されている。口唇部は、波状に削り出し、体部内外面は口唇部に合せ縦に削り出しを行なっている。高台部は、逆台形で低く削り出している。釉は、体部の内外面にやや厚く施釉しており、淡青色を呈している。類似品としては、No37, 38 がある。また、No23は底部外面に団子トチの痕跡を有している。No24は、第17号建物址より出土しており、高台部を欠損している。口縁部は、削り出しにより肥厚化しており、口唇部は三角形状に削り出され鋭くなっている。底部内面には、円錘ピンの痕跡を有している。釉は、体部内外面に薄く施釉されている。No25は、底部片である。底部には、5本細い隆線を削り出し、底部内面中央から放射状に11本の低い隆帯を削り出している。体部は、全面に狭く低い隆帯を削り出している。高台部は、やや高く逆台形状で底面は内側に向って斜めに削り出されている。釉は、やや厚く施釉されており淡青色を呈している。底部外面には、団子トチの痕跡を有している。No26は、第19号建物址より出土している。口唇部は、丸く削り出され高台部は、低く三角形状に削り出されている。釉は、淡白色釉で薄く施釉されている。底部外面に、団子トチの痕跡を有している。また、高台部は底部から体部にかけての部分を底部側から削り出している。No27は、第19号建物址より出土している。口縁部は、外側へ折り返しており口唇部を丸く削り出している。高台部は、逆台形状で内外面より削り出した後底面をやや丸く削り出している。釉は、体部上半で表面のみに薄く施釉しており、暗白色を呈している。No28は、第49号建物址より出土している。口縁部は、大きく外傾した後に口唇部をやや直立ぎみに削り出している。高台部は、逆台形状で内外面より削り出している。底部内面には、柳葉状の文様が4枚ある。釉は、体部表面中央までと内面に薄く施釉され、底部内面には釉の高まりが見られる。また、底部内面に輪トチ痕を残している。No29は、第4号建物址より出土している。口唇部は、丸く削り出され高台部は、低い逆三角形で内外面より削り出され、底面はやや丸く削り出される。体部には、ヘラ削り痕を残している。釉は、薄く施釉されており淡黄褐色を呈している。底部内面には、円錘ピンの痕跡を残している。No30は、第2号製鉄址より出土している。口縁部は、外反し口唇部はほぼ水

平に削られている。高台部は、底部外面内側より削り出され、非常に低く小さな逆三角形を呈している。釉は、薄く施釉しており淡灰褐色を呈している。No31は、第2号堀より出土しており、口唇部を丸く内外面より削り出しているため、口縁部にヘラ削り痕を残している。高台部は、低く小さな逆台形をなしており、外面は垂直に内面は斜めに削り出している。釉は、体部内外面に薄く施釉している。底部内面には、円錘ピンを置き外面には輪トチを置いている。No32は、I郭第7号溝より出土している。口唇部は、内面を広く削り出しながら丸味を持たせ、高台部は非常に低く内外面より逆三角形に削り出している。釉は、体部内外面に薄く施釉され淡灰褐色を呈している。No33は、第2号堀より出土している。体部内面は、陵を削り出している。口縁部内面には、三条の波状線を削り出しており、体部には渦巻き文を画いている。高台部は、逆台形で内外より高く削り出されている。釉は、口縁部の波状線に淡黄褐色釉を施釉後に緑色釉を施釉している。体部の渦巻き文は、茶褐色を呈している。No34は、第5号堀より出土している。底部内面を、薄く削り出し体部表面下端にヘラ削り痕を残している。高台部は、逆台形で内外面より斜めに削り出されている。釉は、体部下半と内面に薄く施され、淡緑色を呈している。体部表面には、釉だれが見られる。No35は、第5号堀より出土している。口縁部は、やや肥厚に削り出されており、高台部は内外面より斜めに削り出され逆三角形状をなすが、下端は丸く削り出されている。底部中央外面と、高台部下端は同じ高さとなっている。釉は、全面に施釉しており淡褐色を呈している。底部内面には、円錘ピンを置いている。No36は、第37号土壙より出土している。口縁部は、内外面より丸く削り出しており、高台部は外面は斜めに、内面は底部中央より弧を画きながら低く小さな逆三角形状に削り出している。底部内面には、重物様の文様を画いている。この後に、施釉している。釉は、薄く全面に施釉しており淡褐色を呈している。文様部分は、黒色を呈している。No37は、I郭より出土している。口唇部を、波状に削り出しこれに合わせて体部に縦位の沈線を内外面に削り出している。高台部は、直立で上面と下面を内外から削り出しているため、中央に陵を残している部分がある。釉は薄く施釉しており、淡黄褐色を呈している。No38は、I郭より出土している。口縁部は、No37同様波状を呈するが、口唇部の削りは前者より端整である。体部の削り出しは、前者より肥厚化している。高台部は、小さく狭い高台部で内外とも外側へ斜めに削り出されている。このため高台部底面を斜めに削って水平にしている。釉は、体部全面に薄く施釉しており、淡緑色を呈し高台部に釉だれが見られる。底部内面には、円錘ピンの痕跡が見られる。No39は、I郭より出土している。口唇部は、外面と内面より削り出して三角形状とし、高台部は内面と外面より斜めに削り出し、高い逆三角形をなしている。袖は、体部内面と高台部内面までやや厚く施釉され、淡暗白色を呈している。また、底部内面には円錐ピンを、底部外面には団子トチを置いている。No40,41 は、共にI郭より出土している。口縁部は、No40が肥厚化しているがNo41は細長くなっており、口縁部内面はNo40が波状線を削り出しているが、

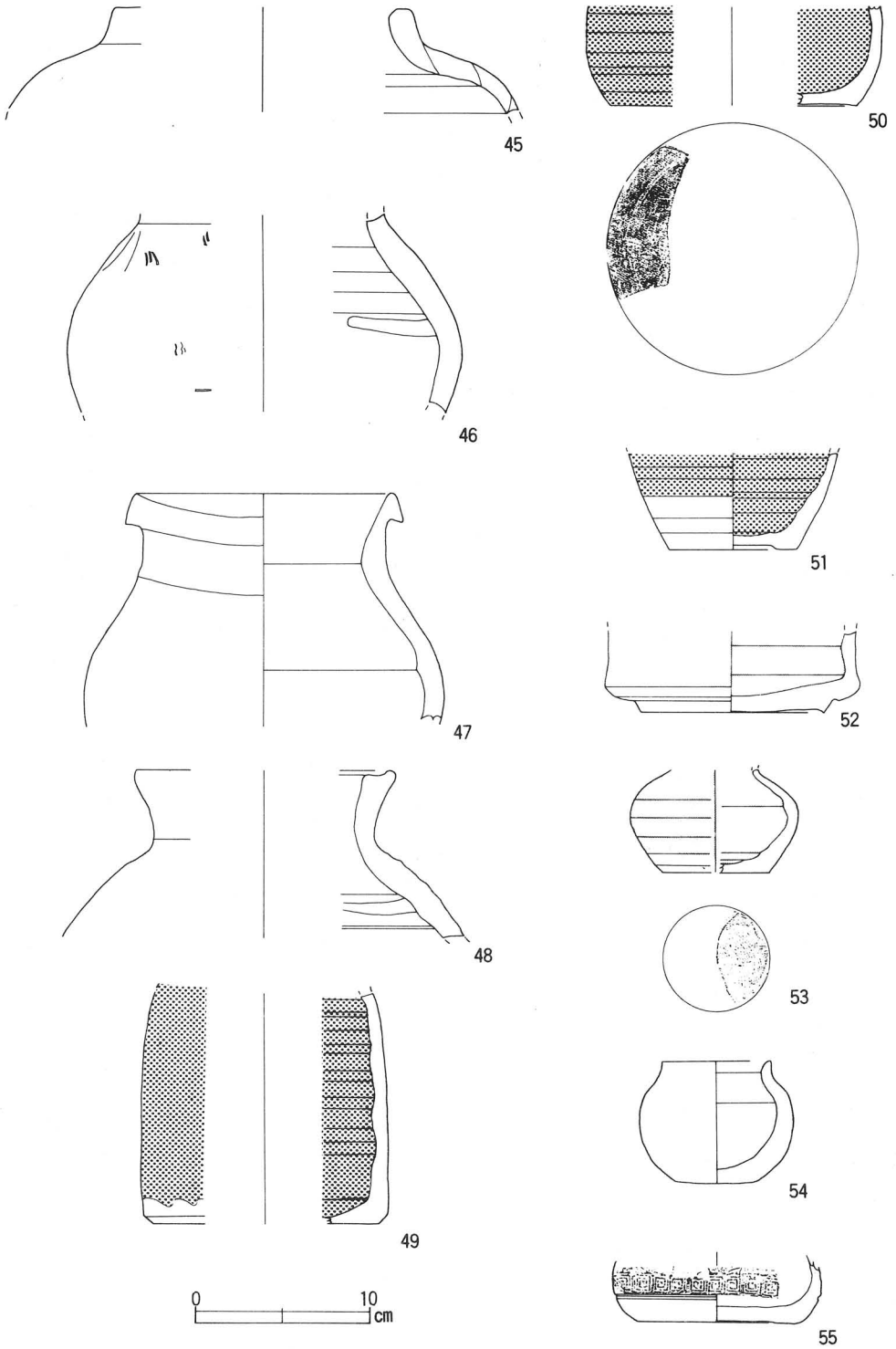
No41は無文としいる。体部は、両者とも渦巻状の線を画いている。釉は、No40が口縁部に淡緑色釉で、体部の渦巻は両者とも淡暗褐色釉である。No43は、第30号建物址より出土した擂鉢である。釉は、内外にやや厚く施釉しており、淡黒色を呈している。No44は、第30号建物址より出土した擂鉢である。釉は、内外にやや厚く施釉しており、淡黒色を呈している。(No44～淡黒色を呈している。)擂鉢は、内面の筋を櫛引してから施釉している。

皿類は、体部が回転ヘラ削りで、口縁部を内外面より丸くか三角形状などに削り出しており、ヘラナデ等は行こなわれていない。高台部は、逆台形と逆三角形で内外面よりの削り出しであり、その方向は個々により異なっている。この後に、施釉している。皿は、志野の小皿が主流である。

No45～55は、壷、徳利、花瓶などである。No45～48の4点は、壷類である。No45は、第49号建物址より出土しており、体部の最大径を上半に有するようである。口縁部は、肥厚で口唇部は低い三角形状に内外面より削り出されている。釉は、かけられておらず露胎となっている。No46は、第5号堀より出土しており、体部上半に櫛等による3本1単位の刻が見られる。釉は、薄く施釉され暗茶褐色を呈している。No47は、第5号堀より出している。口縁部は、折り返しで湾曲しており、体部は丸味を持っている。釉は、薄く施釉され暗褐色を呈する。No48は、第5号堀より出土しており、口縁部は肥厚で口唇部は外面が内面より削り出されている。釉は、かけられていない。この4点は、回転ヘラ削りからヘラナデされたもの(No45～47)と、回転ヘラ削りのままのもの(No48)とがある。(以上第123図)

第123図No49～52は、徳利、花瓶などである。No49は、I郭より出土しており頚部以上を欠損しているが、徳利と判断される。釉は、体部内面は底部内面までと外面は、体部下端まで施釉されており、下端と内面に釉だれが見られる。釉は、厚く施釉され黒褐色を呈している。No50は、第5号堀より出土した花瓶と判断される。釉は、内外面全体に施釉され淡黒褐色を呈している。体部には、回転ヘラ削り痕を残している。No51は、第5号堀より出土している。体部は、回転ヘラ削りで高台部は、広く低い逆台形で内面より斜めに削り出されている。表面は体部下半までで内面は、底部内面まで薄く施釉されており、暗茶褐色を呈している。No52は、第5号堀より出土した花瓶と判断される。高台部は、底部内面と外面より斜めに削り出され、低く小さな逆三角形を呈している。底部外面には、高台部削り出しによる削り痕が見られる。釉は、薄く施釉され、淡暗白色を呈している。体部下端は、露胎である。No53は、I郭より出土した合子である。釉は、表面では高台部までと、体部内面全域に薄く施釉しており、淡緑色を呈している。No54は、第40号建物址より出土した土師器である。No55は、第14号土壙より出土した壷片である。体部下半に、回文帯が刻されており、釉はかけられていない。

No45～48は、体部が回転ヘラナデであり、No47は折り返し口縁であるが、No48は内面よりの削り出し口縁である。



第123図　城址関係出土遺物実測図 3

第65表　城址関係出土遺物一覧表 5

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備考
45	壷	第49号掘立	第123図	A (17.0) B 5.8	1／4	頚部は、直線的に内傾体部は、内傾している	内外とも回転ヘラナデ露胎をなす	暗灰褐色 (長石、砂含) 茶褐色	越前系 内面一部煤付着 No.7 (P46内)
46	壷	Ⅰ郭第5号堀北側	第123図	B 11.4 最大径 22.8	体部 1／4	体部内傾しており、頚部は、やや直立ぎみ	体部表面はヘラ削り後ヘラナデ、内面ヘラナデ、体部上半に3本1単位の刻印を有す釉は薄く暗茶褐色	暗灰褐色 (長石含) 暗茶褐色	越前系
47	壷	Ⅰ郭第5号堀	第123図	A 15.0 B 13.3 最大径 20.8	口縁1／6 体部下半欠	体部は内傾で、頚部は直立しており、口縁部はやや外傾、口唇部は折り返し	体部内外回転ヘラナデ口縁部は折り返し後ヘラ削りで体部表面に薄く施釉 釉は、暗茶褐色	暗茶褐色 (長石含) 暗茶褐色	越前系 口縁～体部釉だれ有 No.33＋No.37
48	壷	Ⅰ郭第5号堀 (北側)	第123図	A (15.0) B 9.5 C 13.3	1／6	体部内傾 頚部は、やや外傾ぎみに直立口縁部は肥厚で口唇削り出し	内外ともヘラナデ 体部～口縁部まで露胎	暗灰褐色 (石英、長石含) 暗茶褐色	越前系
49	瓶	Ⅰ郭	第123図	C (13.0)	1／4	底部は、水平で体部はやや内傾ぎみ、肩部上半で内傾する。体部下半回転ヘラ削り	体部は、内外面ともロクロ整型後施釉、底部は糸切り釉は厚く内面に釉だれ有	淡黒褐色 黒色釉	第3号＋第5号堀No.11の接合資料 瀬戸、美濃系
50	壷	Ⅰ郭第5号堀	第123図	B 4.8 C (13.5)	体部 1／5	底部は、内傾しており、体部は内傾しながら立ち上がる	体部は、回転ヘラナデ、底部は回転糸切り後ヘラナデ、施釉は体部表面に薄く施す	暗灰褐色 淡黒褐色	瀬戸、美濃系
51	瓶	Ⅰ郭第5号堀	第123図	B 5.5 D 0.2 E 7.2	体部 下半1／2 底部1／2	体部は、やや内傾ぎみで高台部は、底部よりの削り出しで広く低い	体部は、内外ともロクロ整形後、高台部まで表に施釉底部は、回転ヘラ切り、釉は、薄い	明灰褐色 暗茶褐色	瀬戸、美濃系 No.37 内面に長石の釉出有
52	瓶	Ⅰ郭第5号堀	第123図	B 4.8 C 14.7 D 0.3 E 10.5	体部上 半欠損	底部は、内傾しており、体部は内傾後直立、高台部は、低く三角形に削り出す	体部内外面は、回転ヘラナデ後、体部内外面に施釉高台部は露胎で、体部下半は回転ヘラ削り	淡暗褐色 淡暗白色	志野 No.68
53	壷	Ⅰ郭	第123図	B 6.0 C 6.0	1／2 口縁欠	底部は水平で、体部内傾している。頚部は直立ぎみ	体部は、回転ヘラ削り後施釉、底部は回転糸切り、釉は、体部下半まで、一部釉だれ	淡暗褐色 淡緑色	瀬戸 茶入
54	壷	第40号掘立	第123図	A (6.3) B 7.0 C 4.6	口縁1／7 体部1／2 残	底部は水平で、体部は内傾しながら立ち上がり、口縁部はやや外傾	口縁部は、横位ヘラナデ体部は、ヘラナデ、ヘラ磨底部は、ヘラナデ	小石、雲母、長石、石英 良好 暗茶褐色	土師器 No.1 第40号掘立の柱穴群
55	壷	第14号土壙	第123図	B 4.0 C (9.0)	1／4	底部は水平で、体部は内沈している	体部はヘラ削りで底部は回転ヘラ切り、体部下半には沈線を引き、を線刻している	暗茶褐色 (雲母含) 淡茶褐色	No.3

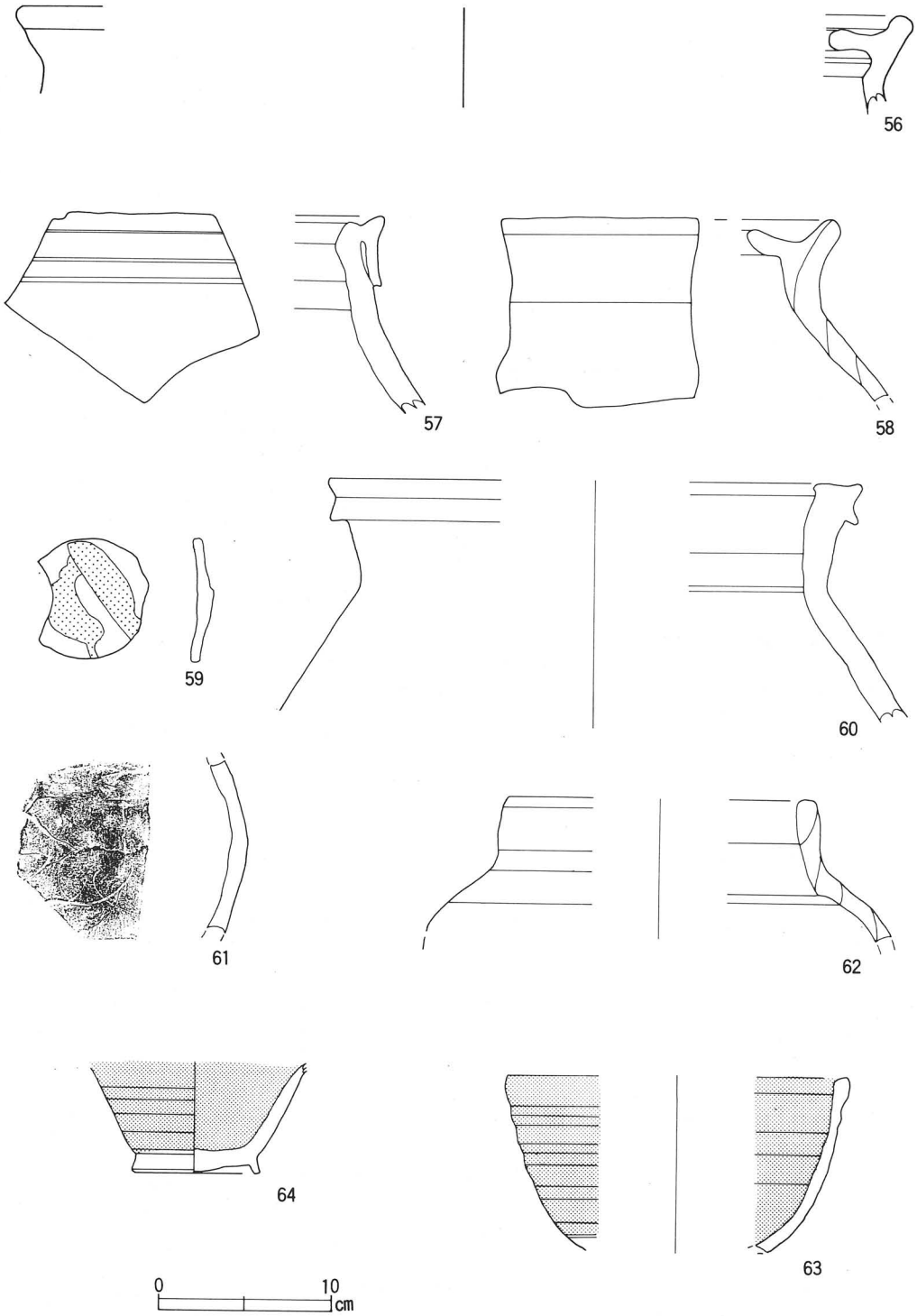
第124図No56，57，58，60は、甕片である。No56は、口縁部内面は上面と下面より削り出されており、下面には削り出しによる陵が見られる。先端部は、丸く削り出されている。No57は第1号堀より出土した口縁部片で、折り返し口縁である。口縁部下端は、体部に接合しており上部は内面より三角形状に削り出されている。No58は、第1号堀より出土している。口縁部は、内面を上下から削り出しており、先端は下端より削り出している。No60は、第5号堀より出土しており、口縁部表面は削り出してある。この4点は、常滑の甕片でNo58,60は自然釉を有している。

No59は、転用硯で中央部が良く使用されている。No61は、甕体部片で交差する円を細い線で3個刻んでいる。器面には、釉が薄く施釉されている。No62は、第5号堀より出土した壷片である。口唇部は、中央部より内外面へ削られ丸味を持たせている。No63は、I郭東側土塁内より出土した水注である。口縁部は、削り出しにより肥厚化しており、口唇部は斜めに削られている。釉は、鉄釉でやや厚く施釉されている。No64は、第33号土壙より出土した茶碗である。高台部は、底部内面より削り出されている。釉は、体部内外面に薄く施釉しているが、体部表面は下端が露胎となっている。No62は、ヘラナデが施こされており、No63と64は内外とも回転ヘラ削りで、体部表面にヘラ削り痕を残している。

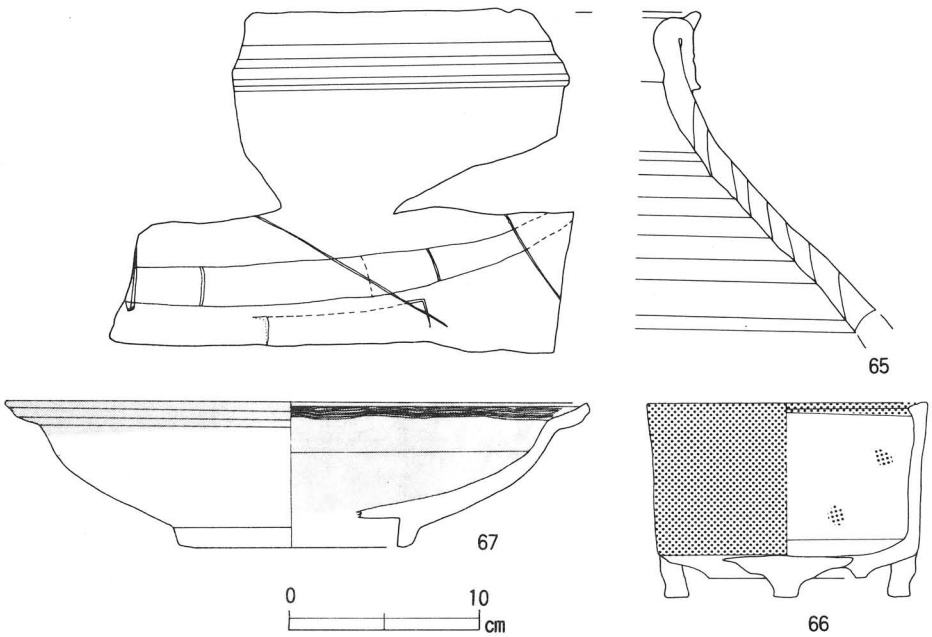
第125図は、甕、皿、香炉である。No65は、大甕片である。口縁部は、折り返しで下端は体部に接合している。口唇部は、外側が逆形状に削り出されている。体部には、ヘラ削り痕が一部明瞭に認められ、第5号堀より出土している。No66は、第19号建物址より出土した香炉である。脚は、やや内傾ぎみで猫足状を呈しており、2本遺存しているが本来は3本程度であった推定される。口縁部内面は、上下より削り出され口唇部は斜めになっている。釉は、体部表面と口縁内面に鉄釉が薄く施釉されている。体部内面には、斑点状に釉が散っている。No67は、第5号堀の北側とI郭北側土塁間から出土した大型の皿である。口縁部内面には、5本の波状線を削り出している。高台部は、高く大きい高台で内面は垂直に、外面からは斜めに削り出されている。釉は、口縁部内外面と体部内面に施釉されている。

第66表　城址関係出土遺物一覧表6

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備考
56	甕	I郭第5号堀	第124図	A (52.0)	片	口縁部は外傾で折り返しで削り出し、頸部は直立ぎみ、	口縁部は、回転ヘラナデ内面ヘラ削りで自然釉有	暗紫色 (長石含) 暗茶褐色	常滑 No.55
57	甕	I郭第1号堀	第124図		片	体部は、外傾ぎみ 口縁は、外側へ折り返されている	内外とも回転ヘラナデ体部と口縁部内面に長石の釉出あり	明暗褐色 (小石含) 暗茶褐色	常滑



第124図　城址関係出土遺物実測図 4



第125図　城址関係出土遺物実測図５

第66表　城址関係出土遺物一覧表７

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
58	甕	Ⅰ郭第1号堀	第124図		片	体部は、直線的に外傾、口縁部は外傾で折り返し後、削り出し	内外ともヘラナデで露胎、口唇部と体部に自然釉有	明茶褐色 明黒色	常滑
59	硯	Ⅰ郭部2号堀	第124図			外面は回転ヘラ削り内面は、ヘラナデ	内面中央を使用する	灰褐色 (長石含)	転用硯
60	甕	Ⅰ郭第5号堀	第124図	A (31.0) B 13.5	1／3	体部は、直線的に外傾頚部は、やや外傾で口縁部は折り返し	体部はヘラナデ、口縁部は削り出し、口縁内面に自然釉有	暗灰褐色 (小石、長石含) 暗茶褐色	常滑 No.44
61	甕	Ⅰ郭	第124図		体部片	内傾する体部	体部はヘラナデ後、を連線的に刻む 楕円釉は薄い	明黒褐色 (長石粒含) 暗茶褐色	常滑
62	壷	Ⅰ郭第5号堀	第124図	A (18.0) B 7.8	1／4	口縁部は、直線的にやや内傾。体部は、内傾している	口唇部ヘラナデ 口縁部と体部はヘラナデ	雲母、長石、石英含みで粗い、暗褐色	土師器 内面磨滅 No.16
63	碗	Ⅰ郭東側土塁	第124図	A (20.0) B 10.2	1／5	体部は、内傾ぎみに立ち上がる。口縁は、肥厚である	体部は、内傾と回転ヘラ削りで、体部下半は露胎口唇部ヘラ削り、釉はやや厚い	淡暗褐色 黒色	瀬戸
64	碗	第33号土壙	第124図	B 6.0 D 1.1 E 7.5	底部1／2 体部1／3	底部は内傾に、体部は直線的に外傾、口縁外傾高台部は、削り出しで外傾	体部外面は回転ヘラ削りで内面はヘラナデ、体部は下半以下露胎、体部表下半まで薄く施釉、内面に釉有	淡灰褐色 (雲母含) 淡暗褐色	瀬戸、美濃系 No.3

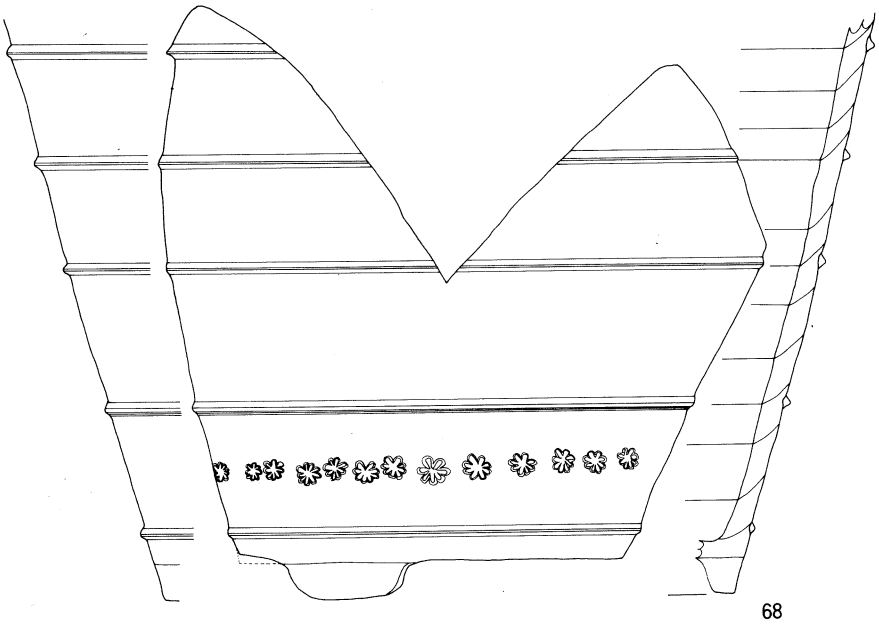
2）瓦質土器（第126・127図、第68表）

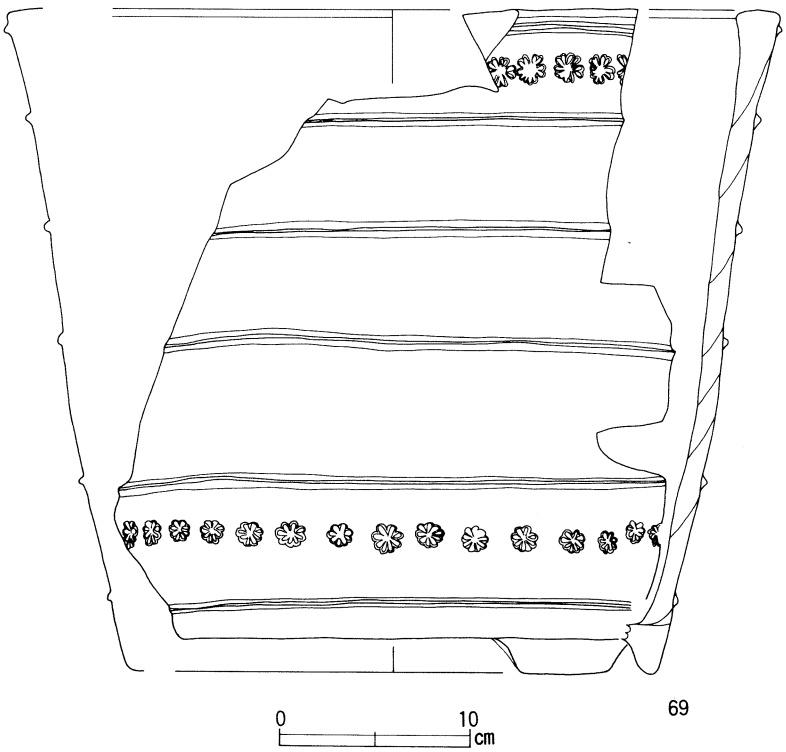
第126図No68，69は、瓦質土器である。No68は、第2号、5号堀よりの出土で接合資料である。体部には、三角形の低い隆帯が5本貼付けられており、下段隆帯内に花型文が押されている。脚は、長い逆台形状で貼付けられており、3ヶ所程度有ったものと推定される。隆帯間は、不規則である。No69は、第2号、5号堀よりの出土で接合資料である。体部には、三角形に低い隆帯が6本貼り付けられており、最上段と最下段の隆帯内に花型文が押されている。口唇部は、丸く整型されている。脚部は、貼付けで長い台形状を呈するが、脚下端は内面に向け丸く削り出されている。この2点は、共に火舎である。隆帯は、低く小さい三角形をなしており、間隔は下から2段目が広くなっており、7.5cmを計測する。また、下段が共に6.5cmである以外は一定していない。

第127図、No70は、第1号堀南側虎口部より出土している。体部を、3本の細い刻線で区画し、上段に横位のS字文、中段に貼付の円形浮文、下段に梅鉢と菱文を押している。高台は、高く逆台形をなし、2条の溝を刻している。高台は、3ヶ所程度あったようである。体部表面は、2次加熱により著しく磨滅している。No71は、第12号堀より出土している。須恵質で、体部上半に3本の沈線を刻している。No72は、第12号堀より出土した須恵質の手焙と推定される。口縁部は、折り返しである。No73は、第30号土壙より出土した火舎片で、低い三角形状の貼付隆帯を3本有している。下段に、菱状の文様が押されている。No74，75 は、第20号建物址より出土した甕片で、接合しないが同一個体と判断される。

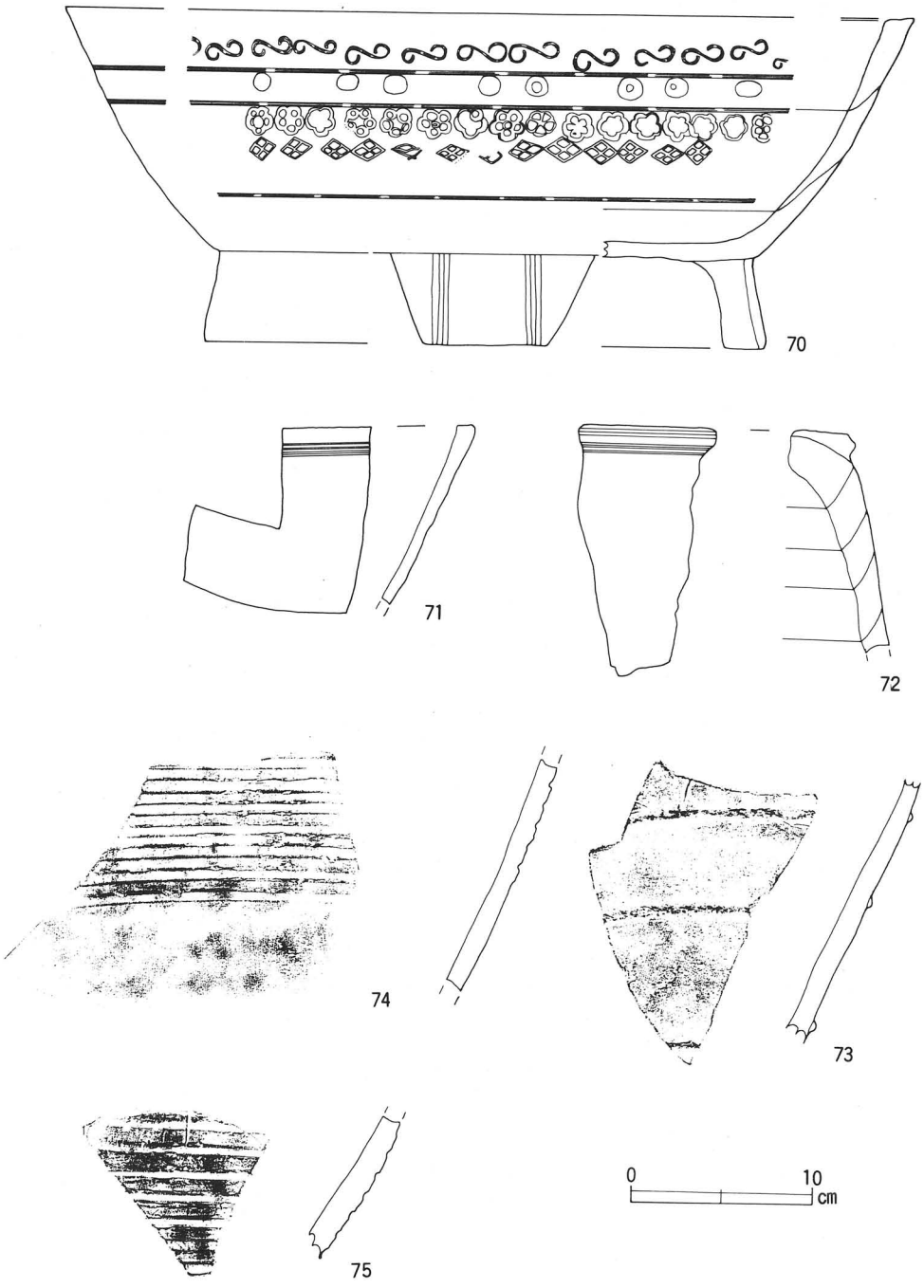
3）内耳、外耳土器（第128・129図、第68・69表）

第128図、No76～82は、土鍋と内耳土器である。No76は、第5号堀より出土している。口縁部がやや肥厚で、口唇部内面に削り出しがある。耳は欠損している。No77は、第5号堀より出土している。耳は、1個で小さく丸い形を成している。口縁部は、斜めに削られており口唇部内面は、ヘラ削りによる削り出しが無い。他の内耳土器より、浅い器型で口唇部より12cm下位に耳を付けている。No78は、第5号堀より出土している。耳は、口唇部直下から円形で大きく1個造られている。口唇部は、水平に近づいており内面は、削り出しが見られる。No79は、第12号堀より出土している。耳は、口唇部から楕円形で大きく2個造られている。口唇部は、外面がやや鋭くなっており、上面はほぼ水平に削られている。耳間は、9.5cmを計測する。No80は、第12号堀より出土している。耳は、1個で口唇部内側上面より楕円形に大きく造られている。口唇部は、水平でやや厚く削り出されている。No81は、瓦質の内耳土器で第5号堀より出土している。耳は、1個のようであるが口縁部より折り返して、耳の部分を形成している。このため、口唇部の内外端部





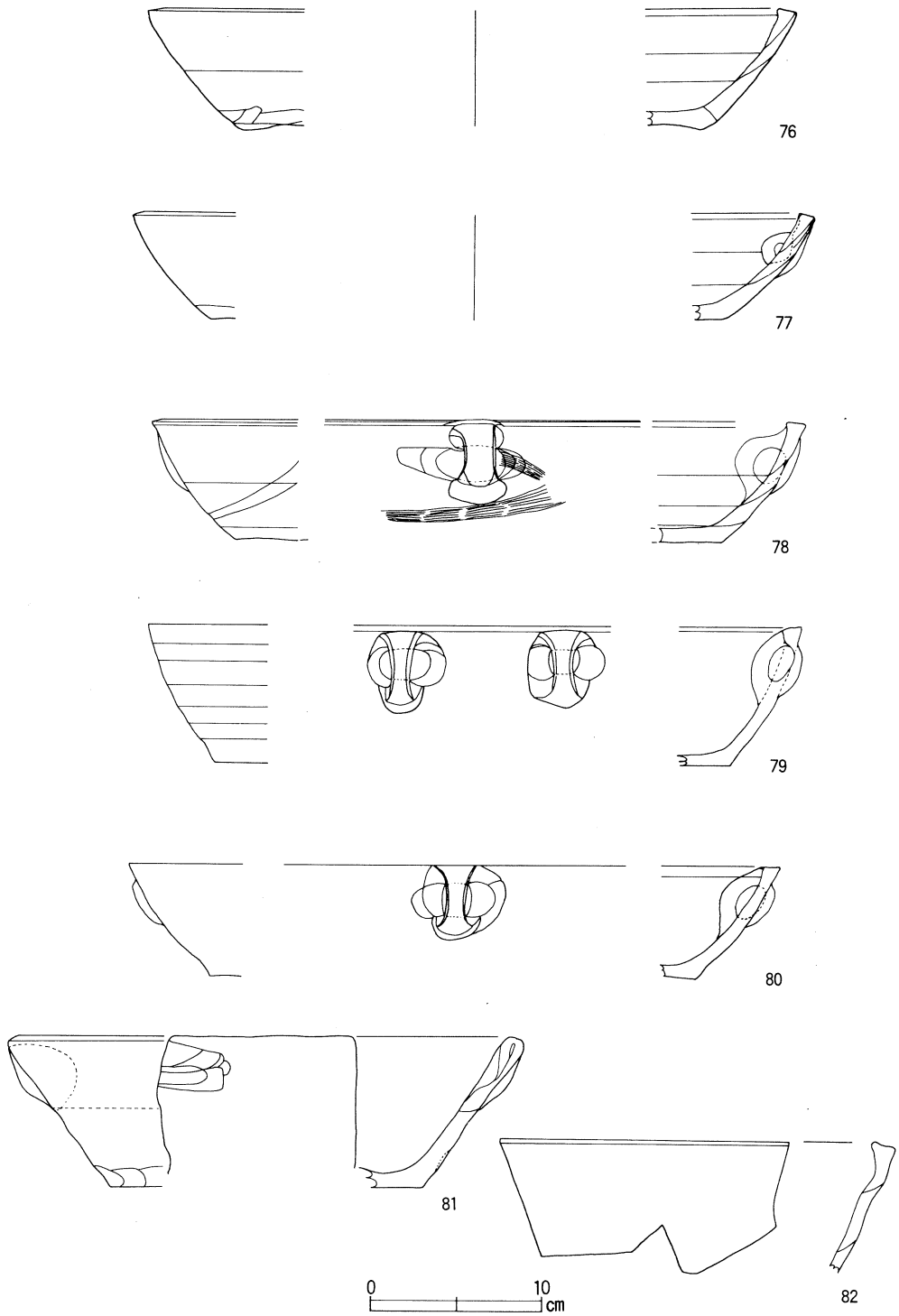
第126図　城址関係出土遺物実測図 6



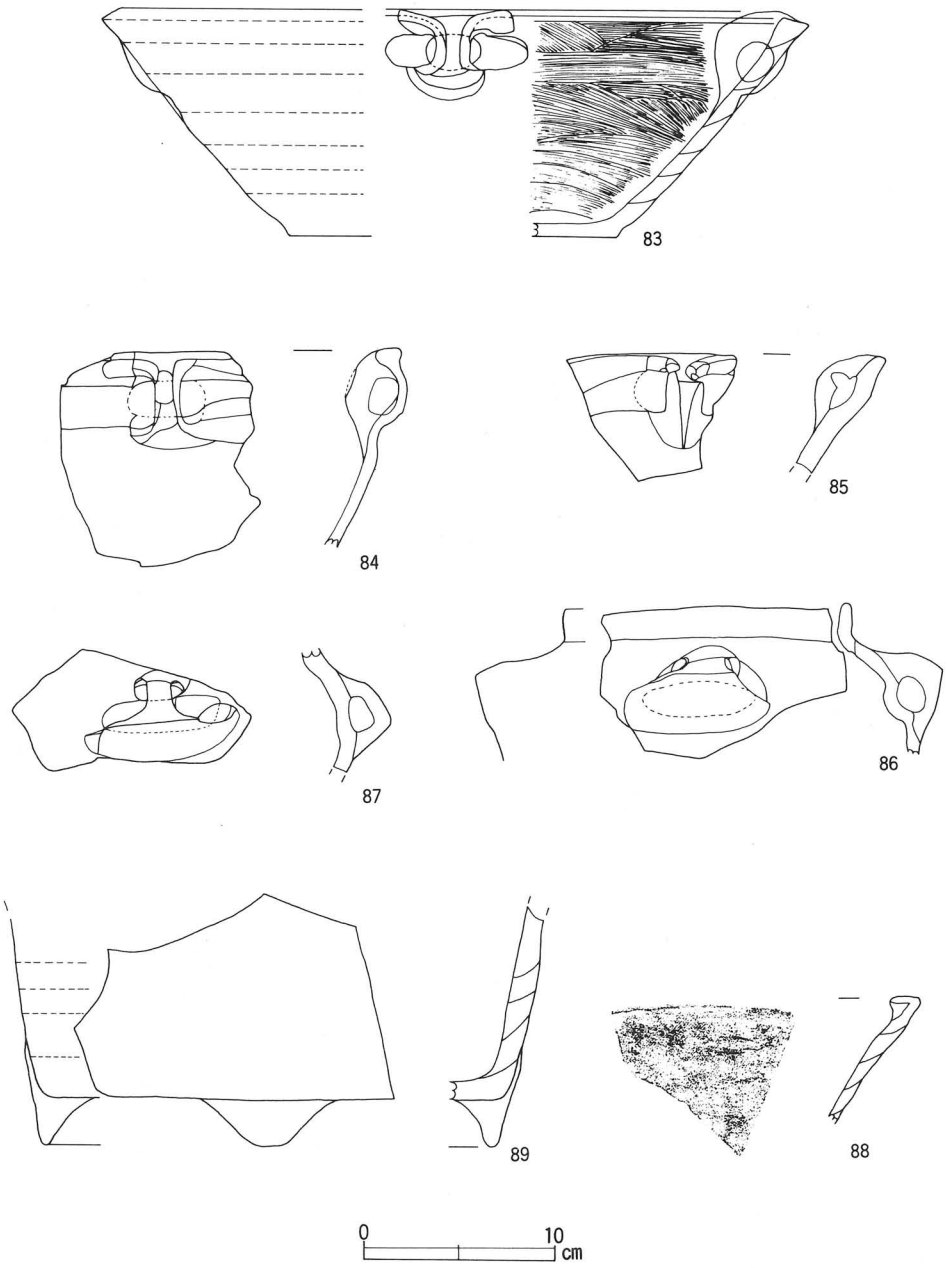
第127図　城址関係出土遺物実測図７

第68表　城址関係出土遺物一覧表 8

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
65	甕	Ⅰ郭第5号堀	第125図		破片	口縁部は、折り返しで口唇部は削り出し体部は外湾ぎみになっている	口縁部は、回転ヘラナデ体部は、ヘラナデ、体部と口縁部に長石の釉出有	外暗灰褐色 内淡暗褐色 (長石、小石含) 暗茶褐色	常滑 No.2
66	香炉	第19号掘立	第125図	A (14.8) B 10.1 C 13.7 D 8.3	体部1／6 底部2／3	底部は、底面水平で上面内傾体部は直立ぎみにやや外傾、高台は、直立で脚は貼付けで2本残る	体部は、回転ヘラナデ、底部は回転ヘラ切り後、高台部は削り出しで直立、口縁部と体部に薄く施釉、内面釉だれ	淡暗褐色 淡黒褐色	瀬戸 No.3 脚は三脚
67	Ⅲ	Ⅰ郭第5号堀北側	第125図	A 30.6 B 7.5 D 1.1 E 12.3	2／3	底部は、内傾し、体部は内傾ぎみに外傾、口縁部は大きく外反、高台部は高く、やや内傾している	体部は、回転ヘラナデ。高台部は削り出し。口縁部に5本の波線を施文、釉は口縁のみに施釉	暗灰褐色 暗紫色	内面に長石の釉出有 土塁の上面で焼土城内
68	火舎	Ⅰ郭第2号堀、5号堀	第126図	B 31.3 C (31.0) D 2.0	1／4	底部は水平で体部は直線的に外傾する。脚は貼付で3本程度	体部は、回転ヘラナデ。三角形状の低い突帯を5本貼付下段に花文を線刻する	灰褐色 (雲母、石英含、粗) 黒色	瓦質土器(接合資料) 第2号堀No.4と第5号堀 No.7
69	火舎	Ⅰ郭第2号堀、5号堀	第126図	A (40.4) B 34.7 C (28.7) E 1.8	1／4	底部は水平で、体部は直線的に外傾し、口唇部やや肥厚、脚は貼付けで3脚	線刻する体部は回転ヘラナデ口縁部は、ヘラナデ、ヘラ磨き6本の貼付け隆帯有上段と下段に花文を線刻	灰褐色(長石、石英、小石含み、粗) 黒色	瓦質土器(接合資料)2号堀No.4,5号堀 No.6, 7, 12, 15
70	火舎	Ⅰ郭南側虎口部堀	第127図	A (46.6) B 18.6 C (30.0) D 5.0	1／3	底部は水平で、体部は内傾ぎみに外傾。脚は3脚程度で貼付、2本の沈線を刻す	体部は、内外面ヘラナデ、口唇部はヘラ削り、ヘラナデ3段菱文、円形浮文等を施す	雲母、小石、石英、長石を含み粗 暗褐色	土師質土器 表面磨滅大
71	鉢	Ⅱ郭第12号堀東側虎口	第127回		片	体部は、直線に外傾口縁部は、やや肥厚	口縁部表と内面はヘラナデ 体部表面は手ナデ 口唇部は、ヘラ削り、ヘラナデ	明灰褐色 (小石、長石、石英含) 灰褐色	瓦質土器 No.23
72	手焙	Ⅱ郭第12号堀東側虎口	第127図		片	口縁部は、折り返しで肥厚体部は、直線的に内傾	体部表面はヘラナデ、内面はナデ、口縁部はヘラ削り、ヘラナデ	灰褐色 灰褐色	瓦質土器 No.4
73	火舎	第30号土壙	第127図		片	体部は直線的に外傾体部に3本の突帯を貼付ける	体部は、内外面ともヘラナデ下位に菱文を線刻する	灰褐色 (長石、雲母含) 黒色	瓦質土器
74	甕	第20号掘立	第127図		片	体部は、直線的に外傾体部に7本以上の沈線を引いている	体部は、内外ヘラナデ、体部は、一部ヘラナデ後ヘラ磨き	長石粒含みの灰褐色	瓦質土器 第20号掘立の柱穴群 No.75と同一個体
75	甕	第20号掘立	第127図		片	体部は、直線的に外傾、体部に7本以上の沈線を引いている	体部は、内外面ともヘラナデ	長石粒含の灰褐色	瓦質土器 PNo.6 No.74と同一個体
76	内耳	Ⅰ郭第5号堀	第128図	A (38.0) B 6.7 C (27.5)	1／4 ～ 1／5	底部は水平で、体部は内傾ぎみに立ち上がる口唇部内面やや削り出し	体部は、ヘラナデ、一部ヘラ磨き、底部ヘラナデ口唇部はヘラ磨き	茶褐色 (長石含み) 黒色	No.89 器面煤付着



第128図　城址関係出土遺物実測図 8



第129図　城址関係出土遺物実測図９

第69表　城址関係出土遺物一覧表 9

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備考
77	内耳	Ⅰ郭第5号堀	第128図	A (40.0) B 6.1 C (30.2)	1／6 ～ 1／7	底部は水平で、体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は削り出し	底部は、一部ヘラナデ、体部は表内ヘラナデ、体部下半はヘラ磨き	暗茶褐色 (雲母、長石含) 黒色	No.39 器面煤付着
78	内耳	Ⅰ郭第5号堀	第128図	A (40.0) B 6.1 C (30.2)	1／5	底部は、ほぼ水平で体部は内傾ぎみ、口縁部内面削り出し、突手は貼付けと押し出し	体部は内外ヘラナデで下半はヘラ削り、ヘラ磨き、底部はヘラナデ	茶褐色 (小石、雲母含) 黒色	No.30＋34 器面煤付着
79	内耳	Ⅱ郭第12号堀	第128図	A (38.0) B 8.0 C (30.0)	1／4	底部は、やや内傾で体部は内傾する。口縁部は、削り出しで、突手２個で貼付け押し出し	体部内外面と底部はナデ、口縁部はヘラ削り後ヘラナデ	茶褐色 (長石、石英含) 黒色	虎口部出土 No.12＋27
80	内耳	Ⅱ郭第12号堀	第128図	A (38.0) B 6.5 C (28.3)	1／4	底部はやや内傾で、体部は内傾する。口縁部は、削り出しで、突手は１個で貼り付けと押し出し	底部外面は無調整 体部外面はナデ、内面ヘラナデ、口縁部はヘラ削り	茶褐色 (小石、長石、石英含) 黒色	虎口部出土 No.14＋17＋38 器面煤付着
81	内耳	Ⅰ郭第5号堀	第128図	A (30.0) B 8.5 C (18.0)	1／6 ～ 1／7	底部はほぼ水平で体部は直線的に外傾、突手は一個程度で折り返しと押し出し、体部下半に孔を有す	底部はヘラナデ、体部内外はナデ、口縁部はヘラナデとヘラ削り、ヘラナデ、孔は整形後	明灰褐色 (長石含) 灰褐色	瓦質土器 No.29
82	内耳	Ⅱ郭第7号堀	第128図		口縁部片	体部は直線的に外傾口縁部は内面よりの削り出しでやや突出	体部は内外ヘラナデ口縁部は回転ヘラ削り、後ナデ、口唇部ヘラナデ	暗褐色 (長石含) 黒色	
83	内耳	Ⅰ郭第5号堀	第129図	A (37.0) B 11.8 C (17.3)	体部1／4 底部一部	底部は水平で、体部は直線的に外傾突手は１個で貼付けと押し出し	体部は内外ヘラナデ 口縁部はヘラナデ 底部はヘラナデ	暗茶褐色 (長石、砂含) 黒色	No.21 器面煤付着
84	内耳	Ⅱ郭第7号堀	第129図		片	体部はやや内傾ぎみ口縁部は水平、突手は貼付けと押し出し	口縁部はヘラナデ 体部は内外ナデ 薄い器肉仕上げ	暗褐色 (雲母、砂含) 黒色	No.3 器面煤付着
85	内耳	第7号土壙	第129図		片	体部は、直線的に外傾し、耳は貼付けで突手中央を細く削り出す	体部内外面はヘラナデ、口縁部は回転ヘラ削り	暗灰褐色 (小石、砂含) 暗灰褐色	瓦質 No.1
86	外耳	第17号掘立	第129図	B 7.9	片	体部は、球形状をなし、口縁部は、直立、突手は貼付けで押し出し	口縁、口唇部は回転ヘラ削り、体部内外面ヘラナデ	暗茶褐色 (雲母、砂含) 暗灰褐色	No.13
87	外耳	第17号掘立	第129図		片	体部は、球形状をなし、突手は、貼付けで内面への押し出しはない	体部は内外ヘラナデ 突手部は、ヘラ削り	明灰褐色 (雲母含み) 灰褐色	瓦質 貝層内
88	内耳	Ⅰ郭第4号堀	第129図		片	体部は、直線的に外傾し、口縁部は折り返し口縁部下端内面は、削り込む	体部内面は、回転ヘラ削りで、外面ヘラナデ、口縁部はヘラ削り	暗褐色 (小石、砂含) 黒色	虎口部 器面煤付着
89	火舎	Ⅱ郭第12号堀	第129図	B 12.0 C (24.0) E 2.5	片	底部は、ほぼ水平で体部は直線的に外傾、脚は丸味を有し直立	体部内面はヘラナデ、体部表面と底部外面は磨滅が著しい	明灰褐色 (小石、長石、砂含) 灰褐色	瓦質土器 No.25

は丸味を持つようになっている。No82は、第7号堀より出土している。口唇部内面は、上方へ削り出されている。第129図No83は、第5号堀より出土している。耳は、口唇部中央より大きく造られている。口唇部は、外面がやや外側へ削り出されている。No84は、第7号堀より出土している。口唇部は、ほぼ水平で内外面より削り出され、肥厚化している。耳は口唇部内面よりやや大きく造られている。鉢の器肉は、他の土器より薄くなっている。No85は第7号土壙より出土している。耳は、口唇部内面より低く大きく造られ、上面には弦を掛け安くするため、円形に削り出している部分がある。口唇部は、丸く削り出されている。

これらの内耳土器は、外面は粗いヘラナデであるのに対し、内面は端整なヘラナデである。耳は、口唇部と口唇部下位部分に造られており、耳の部分を外側へ押し出してから貼り付けているのが大部分で、No85のような土器はこの1点のみである。

第129図No86, 87の2点は、外耳土器である。外耳土器は、この2点のみで他は全て内耳土器である。No86は、第17号建物址より出土している。直立する口縁部で、体部上半に耳を大きく貼り付けて造り出している。No87は、第17号建物址より出土しており、器型的にはNo86と同様であるが、耳下半は外側に突出するように造られている。

第129図、No88は、第4号堀より出土した内耳土器である。No89は、第12号堀より出土した瓦質土器で火舎と推定される。高台部は、逆台形状をなしているが、下端は狭く丸味を有しており、内外面より削り出されている。高台部は、貼付けである。三角形状の貼付隆帯は、認められない。

4）火舎、瓦質土器（第130図、第70・71表）

第130図No90は、I郭中央東側で第49号掘立の北側に位置している埋甕である。須恵質で、体部下半に、低い三角形の隆帯が貼り付けられている。高台部は、低い逆台形状をなし3ヶ所程度貼り付けられていたようである。現状では、2ヶ所遺存している。器面は、著しく磨滅している。No91～105までは、火舎片である。No91～98は、菊花状の花型を押しており、隆帯は低い三角形状で貼り付けられている。隆帯間は、ほぼ5㎝程度である。No99、100は狭い隆帯内に菱型文を押している。隆帯は、低い三角形状で貼り付けられており、隆帯間は2.4cm程度である。No101は、隆帯を供なわず菊花状花型と菱型の併用で手焙片であろう。No102は、103と同様隆帯を持たず、沈線で区画している。文様は、横位のS字文を押している。No103は、沈線で区画し口縁部下に横位のS字文を押し、沈線内に円形浮文を貼付けており、この下に梅花状の花文を押している。No104は、菱文を押しており沈線で区画している。101と同じ器型であろう。No106は、低く小さな三角形状の貼付隆帯内に亀甲文を押している。No91～105までの諸文様は、全てスタンプ状の型押しである。No106は、須恵質の擂鉢で第4号堀より出土している。筋は、櫛引きで6㎝

程度の間隔で引いている。

5）擂鉢、内耳土器（第131～133図、第71～73表、図版49）

第131図No107～109は、内耳土器片で共に耳を欠損している。No107 は、第4号堀より出土しており、耳の部を欠く破片である。口縁部は、やや肥厚で口唇部内面が少し削り出されている。No108は、耳を欠く破片である。口縁部は、内面よりの削りより少し外側へ突出している。No109は、須恵質の土器である。耳を欠き、口唇部外面は斜めに削られている。

No110, 111は、擂鉢である。No110は、3本1単位の筋を3.0～1.5cmごとにヘラ引きしている。口縁部はやや肥厚で口唇部は水平に削られている。No111は、第29号土壙より出土しており、連続的な櫛引きが施されている。

第132, 133図は、擂鉢である。No112は、第2号堀より出土しており良く使用している。筋は、12本1単位の櫛引きである。釉は、表面に薄く施釉されており暗茶褐色を呈する。口唇部は、削り出しである。No113は、第19号建物址より出土している。折り返し口縁で、7～8本1単位の櫛引きである。釉は、やや厚く内外面に施釉され暗茶褐色を呈している。No114は、第2号建物址より出土しており、片口を有する擂鉢である。筋は、6～7本1単位の櫛引きであり釉は薄く施釉されている。No115は、第17号建物址より出土した破片である。筋は、12～13本1単位の櫛引きである。釉は、体部表面下半まで施釉されている。No116は、第7号堀より出土している。筋は、体部と底部に6本と13本1単位の櫛引きである。釉は、内外面全体に薄く施釉している。筋は、良く使用されたため良く擂り減っている。No117は、第7号堀より出土している。筋は、体部は13本1単位で縦に、底部は円形に櫛引きで良く使用しているため擂り減っている。No118は、接合資料である。筋は、体部は11～13本1単位で縦に引いており、底面は右から左に引いた後中央に引いている。筋は、櫛引きである。良く使用されているため、筋は擂り減っている。No119は、接合資料である。筋は、櫛引きで体部は縦に底面では中央に向けて引いた後、縦への櫛引きを行なっている。櫛は、体部が14本1単位で底面は8～10本1単位である。No120は、I郭南側虎口部より出土した擂鉢である。筋は、口唇部からのと体部中央部からのとを交互に櫛引きしている。No121～124は、擂鉢片である。No121は、3～4本1単位の櫛引きで、No122は10～11本1単位の櫛引きである。No123は、太い筋と細い筋を1単位とし2.0cm 間隔で4本以上で1組として、ヘラ引きされている。No124は、13本1単位への櫛引きである。No121, 122, 124は、良く使用されているため筋も磨滅している。No125～127は、擂鉢底部片である。No125は、第7号堀より出土しており、筋は12～14本1単位の櫛をほぼ3㎝間隔で引いている。底部内面には、引いていない。No126は、第17号建物址より出土しており、体部には9～13本程度での櫛引きで、

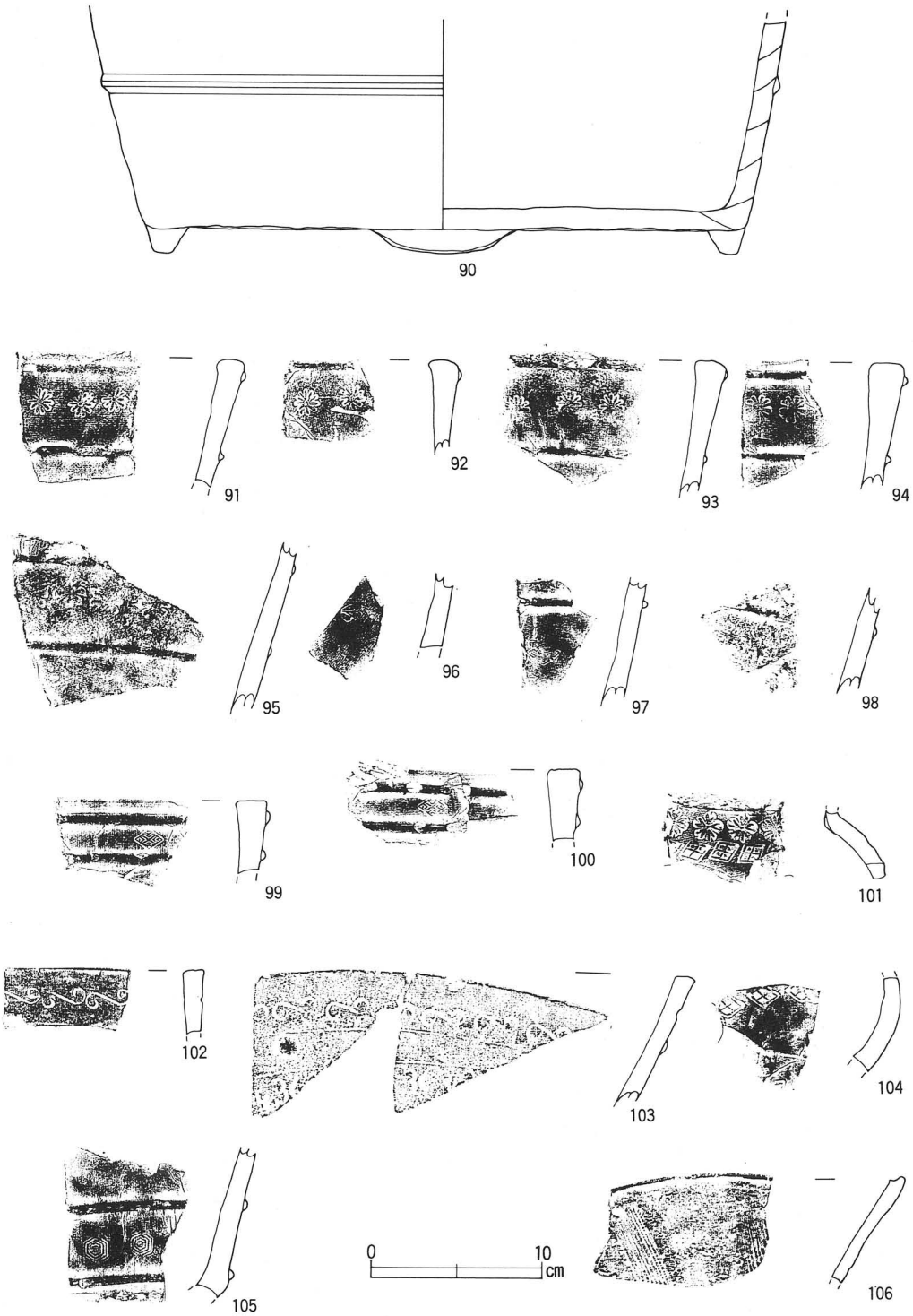
底部内面には同心円状に同程度の櫛引きが施されている。No127は、第45号建物址より出土している。筋は、体部のみに5本1単位の櫛引きで、底部内面には引かれていない。

6）鉄製品（第134～136図、第73・74表、図版50）

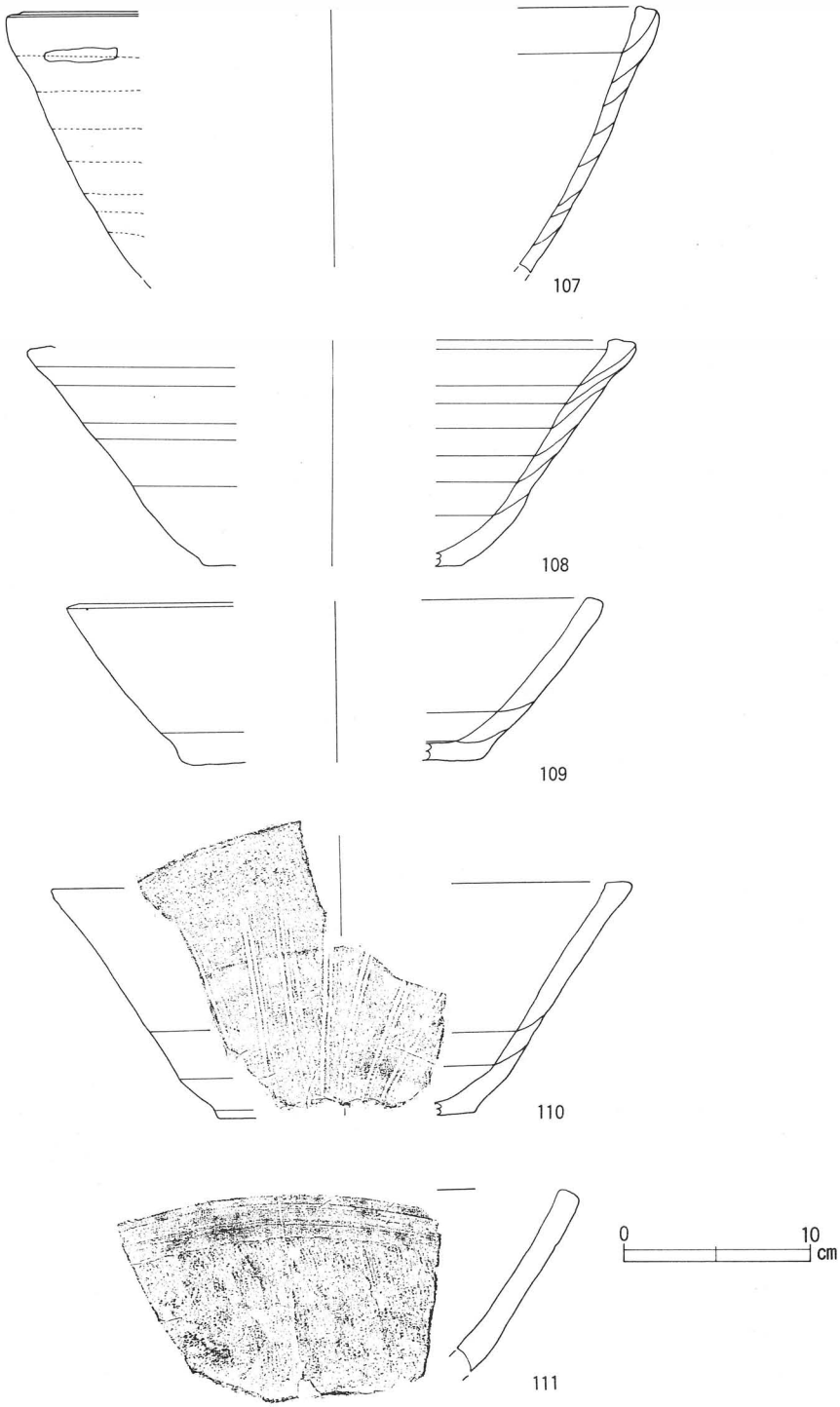
第134～136図（No128～147）は、鉄及び青銅製品である。No128は、第30号建物址より出土した青銅製の斧である。頂部は、丸い摘み出しが有り中央部には無文である。先端は、丸くなっている。全体的に、扁平な造りである。No129～131は、鉄釘である。先端を欠くのがほとんどで、No129が最も良く遺存している。頭部は、水平に折り曲がっている。No132は第5号土壙より出土した小札である。孔は3孔2列と1孔1列の8孔式である。No133は第20号建物址より出土した刀子で、両先端を共に欠損している。No134,135は、火打ち金具である。2点とも、類似した型態である。中央上部には、孔が穿たれている。No136は、鉄輪である。径は、外径3.3cm、内径1.7×2.1cmを計測する。No137は、鉄製金具である。中央部には、0.9×1.2cmの突出する摘みがある。No138は、青銅製の金具で、下面左側は0.1cmほど突出している。孔、文様等は、刻されていない。

第135図No139の2点は、馬具の轡でありNo140は鍔である。No139は、轡の鏡板と引手である。鏡板は、8.5×8.0cmで円形をなし十字に鉄を貼り付けている。引手は、長さ4.0cmで鏡板と接合しており、上部は2.8×1.5cmの楕円形の輪が造られている。この部分に、鋲の痕跡は見られない。No.139－2は、銜である。全長11.7cmを計測する。一方の先端は、4.5×5.5cmで楕円形の輪に、長さ7.8cmの軸が被い接合させている。両者とも、鉄製である。No140は、青銅製の鍔である。鍔端部は、幅0.3cmで薄い銅板で被っている。中子部は、峰幅0.9cm、厚0.9cm、幅2.7cmを計測する。小柄孔は、穿たれていない。青銅製である。

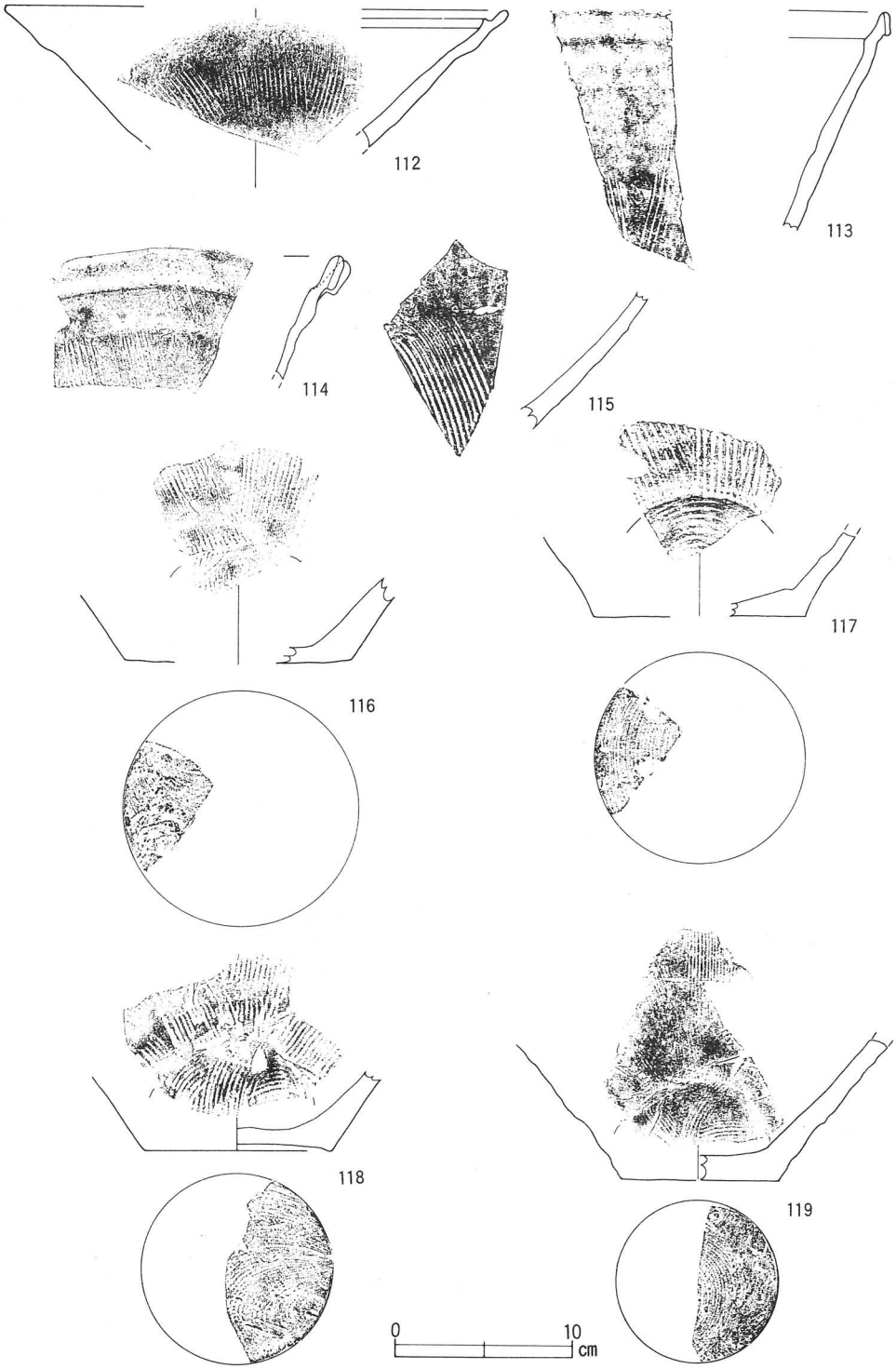
第136図は、鍔、燭台、煙管である。No141は、青銅製の鍔でNo140と同一型式である。中子の部分は、厚0.9cm、幅2.7cmを計測する。No142は、燭台と推定される。全長は、5.5cmを計測する。先端は、扇状に立ち上がっている。柄部は、半円形で上幅1.8～2.4cm、厚1.2cmを計測し、中央部に径0.5×0.4cmの目釘孔を1本有している。青銅製である。No143～147は煙管である。No143は、先端部で上下左右に5～8本の細い線を引いており、内面に紙が付着している。No144と145は、先端部である。No144は、先端は軸と接合しており、No145は2段接合である。No146と147は、吸口である。No144は、第58号土壙より出土し、No145は第32号建物址より出土している。No147は、第5号堀からの出土であり、全て青銅製である。



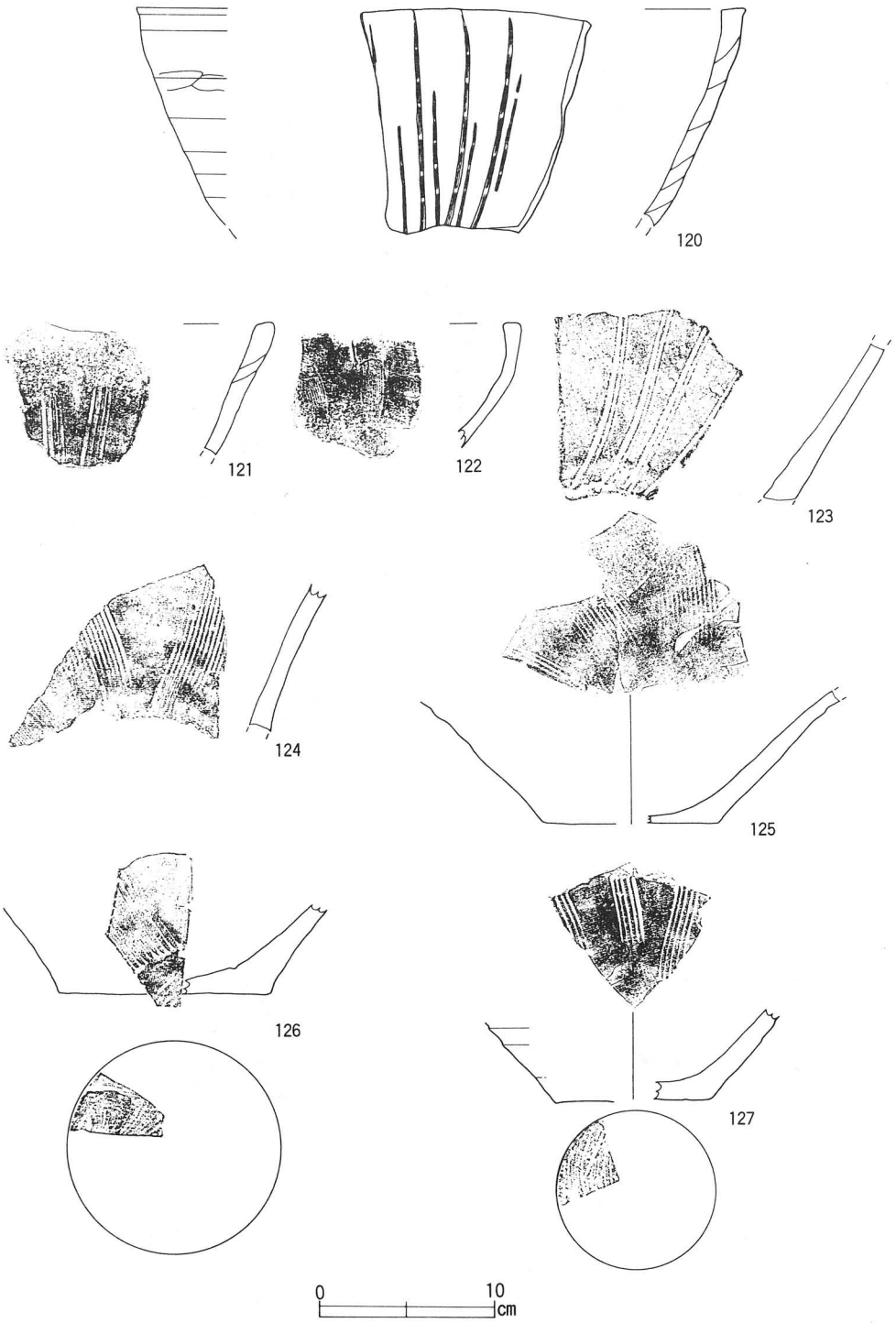
第130図　城址関係出土遺物実測図10



第131図　城址関係出土遺物実測図11



第132図　城址関係出土遺物実測図12



第133図　城址関係出土遺物実測図13

第70表　城址関係出土遺物一覧表10

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備考
90	火舎	第49号掘立	第130図	B 8.5 C 35.0 E 1.4	1／2	底部は、ほぼ水平で体部は、直線的に外傾し、低い隆帯を回す、脚は低く直立	体部内外面はヘラ削り隆帯は、貼付け脚端部はヘラ削り	灰褐色（長石粒含） 灰褐色	瓦質土器 東側埋甕 器面著しく磨滅
91	火舎	Ⅰ郭第4号堀	第130図			体部はやや外傾ぎみ口縁部は、丸く削り出す、隆帯は2本で貼付け	体部内外ともヘラナデ、口縁部はヘラナデ、隆帯内に花文を押す	暗褐色（長石、雲母含） 黒色	東南虎口部 口縁部磨いている
92	火舎	Ⅰ郭第1号堀	第130図			体部は、やや外傾口縁部は、丸く削り出す、隆帯は貼り付け	体部内外ヘラナデ口縁部は、ヘラ削り、ナデ、隆帯下に花文を押す	暗褐色（長石、雲母含） 黒色	虎口部 口縁部磨いている。 No.28
93	火舎	Ⅰ郭第4号堀	第130図			体部は、やや外傾口縁部は、丸く削り出す、隆帯は、貼り付け	体部は内外ヘラナデ口縁部は、ヘラ削り、ナデ、隆帯内に花文を押す	暗褐色（長石、砂含） 黒色	東側貝層内 口縁部は磨かれている。
94	火舎	Ⅰ郭第2号堀	第130図			体部は、やや外傾口縁部は、水平隆帯は、2本貼り付け	体部内外面はヘラナデ、口縁部はヘラ削り、端部は丸く貼り出す、隆帯内に花文を押す	暗灰褐色（長石、砂含） 黒色	瓦質土器
95	火舎	Ⅰ郭第4号堀	第130図			体部は直線的に外傾隆帯は、貼り付で広い間隔	体部は、内外ともヘラナデ、隆帯内に花文を押す、器面磨滅	暗褐色（長石含） 黒色	東側貝層内 瓦質土器
96	火舎	第17号掘立	第130図			体部は、やや内傾ぎみ	表はヘラナデ、内はナデ、花文を押す	淡灰褐色（長石、雲母） 暗茶褐色	瓦質土器 一部黒色
97	火舎	Ⅰ郭	第130図			体部は直線的に外傾隆帯は、貼り付けでやや高い	体部は内外ヘラナデ隆帯内に、菱形文を押す。	灰褐色（長石、雲母） 黒色	瓦質土器 第3～4層中
98	火舎	Ⅰ郭	第130図			体部は直線的に外傾隆帯は、貼り付け	器面磨滅 花形文を押す	暗褐色（小石、長石） 明黒色	第3～4層中
99	火舎	第18号掘立	第130図			体部はやや内傾ぎみ隆帯は、貼り付け2本で狭い。	体部表面は、ヘラ磨きで内面はヘラナデ、口縁部はヘラ磨、隆帯内に菱形文を押す	橙褐色（長石、砂含） 明黄褐色	No.100と同一個体
100	火舎	Ⅰ郭	第130図			体部は、直立ぎみで口縁部を水平に切る。隆帯は2本で狭い、貼り付け	体部は、内外ロクロ整形、口縁部は、ロクロ整形、隆帯内に菱形文を押す	淡橙褐色（長石含） 明褐色	No.99と同一個体
101	手焙	Ⅰ郭第4号堀	第130図			体部は、内傾で、口縁部外傾 体部に孔を削り出す	体部は、内外ロクロ整形、体部に、花文と菱文を押す。	灰褐色（長石、砂） 明淡黒色	瓦質土器 No.19
102	火舎	Ⅰ郭第4号堀	第130図			体部は、直立 口縁部は、水平に削り出す	体部内外ロクロ整形 口縁部は、回転ヘラ削り 逆S字文を刻す	灰褐色（雲母、長石、石英含） 暗灰褐色	瓦質土器 No.15

第71表　城址関係出土遺物一覧表11

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　　考
103	火舎	Ⅰ郭第1号堀	第130図			体部は直線的に外傾口縁部は、水平で外面端を削り出す、細い沈線を引いている。	体部内外面ロクロ整形、口縁部は、回転ヘラ削り、逆S字文と突帯、梅花文を有す。	暗褐色（小石、雲母、長石含）暗茶褐色	虎口部粗い胎土
104	手焙	Ⅰ郭第3号堀	第130図			体部は球形状に内傾体部上半に削りの孔有	体部外面ロクロ整形、内面ヘラナデ菱形文を押す	暗褐色（石英、雲母）明灰褐色	瓦質土器
105	火舎	Ⅰ郭	第130図			体部は直線的に外傾体部下半に、高い貼り付けの隆帯有	体部内外面は、ロクロ整形、隆帯内に亀甲様の文様を押す	暗茶褐色（小石、長石含）明黒色	粗い胎土
106	擂鉢	Ⅰ郭第4号堀	第130図			体部は直線的に外傾口縁部は、削り出して折り返して合わせる。	体部外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、口縁部はヘラ削り、9本1単位の櫛引き	明灰褐色（長石粒含）淡黒色	瓦質土器No.5
107	内耳	Ⅰ郭第4号堀	第131図	A（35.0）B　14.0	1／5	体部は直線的に外傾口縁部は、回転ヘラ削りによる一部折り返し	体部内外面ヘラナデ口縁部ヘラ削り	暗褐色（小石、雲母、長石含）黒色	No.11器面煤付着
108	浅鉢	Ⅰ郭	第131図	A（16.4）B　12.0 C　（7.0）	1／5	底部はほぼ水平で体部は直線的に外傾、口縁部は削り出し	体部外面ヘラナデで内面は、ロクロ整形、口縁部は、回転ヘラ削り	暗褐色（長石、雲母含）黒色	Ⅰ郭東側外堀十束内側中央部土塁
109	浅鉢	Ⅰ郭第5号堀	第131図	A（29.0）B　8.8 C（16.0）	1／5	底部は、ほぼ水平で体部やや内傾ぎみに外傾、口縁部は、平で端部は削りで丸くしている。	体部下半回転ヘラ削り、上半判回転ヘラナデ、体部はヘラナデ、体部内面回転ヘラナデ口縁部ヘラ削り	灰褐色（長石、雲母粒含）黒色	瓦質土器No.14器面煤付着
110	擂鉢	Ⅰ郭＋Ⅱ郭	第131図	A（33.0）B　6.3 C（14.0）	1／6	底部は、水平で体部は外傾しており、口縁部は水平で、内面削り出し	体部は、内外面ヘラナデ口縁部は、ヘラ削り、内面に2本1単位の櫛引	暗褐色（長石、雲母含）黒色	Ⅰ郭東側土塁＋Ⅱ郭第12号堀
111	浅鉢	第29号土壙	第131図		1／6	体部やや内傾ぎみに外傾、口縁部は水平で端部は丸く削り出す。	体部は、内外ともヘラ削り口縁部は、回転ヘラナデ口唇部は、回転ヘラ削り	灰褐色（雲母粒含）黒色	瓦質土器器面煤付着No.5
112	擂鉢	Ⅰ郭第2•4号堀	第132図	A（28.0）B　7.7	1／5	体部は、直線的に外傾、口縁部は、削り出し	体部は内外回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削りの削り出し、12本1単位の櫛引き	暗褐色暗茶褐色	瀬戸美濃系4号堀　2号堀良く使用されている。
113	擂鉢	第19号掘立	第132図		片	体部は、やや外傾ぎみ口縁部は、内傾後外傾し折り返す。	体部は内外回転ヘラ削り後7 ～8本1単位の櫛引き軸は、やや厚く前面に施釉	暗褐色（小石、石英含）暗茶褐色	瀬戸、美濃系No.1
114	擂鉢	第2号掘立	第132図	A（35.0）	片	体部は、湾曲しながら直線的に外傾し、口縁部は折り返しで片口を造り出す。	体部は、内外回転ヘラ削り後施釉、口唇部は丸く削り出す、6～7本1単位の櫛	淡暗褐色（小石、長石含）飴色	瀬戸、美濃系P No.33

第72表　城址関係出土遺物一覧表12

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
115	擂鉢	第17号掘立	第132図		片	体部は、やや内傾ぎみに外傾し、体部上半は内傾	体部は、内外とも回転ヘラ削り後施釉12～13本1単位の櫛引き体部下半は露胎	淡暗褐色（小石、長石含）飴色	瀬戸、美濃系No.11
116	擂鉢	Ⅱ郭第7号堀	第132図	B　3.8 C（13.0）	1／5	底部は薄く水平、体部は肥厚で直線的に外傾	底部は回転糸切り、体部は回転ヘラ削り、6本と13本前後2単位の櫛引後薄く施釉する。	暗褐色（小石.長石含み）明黒褐色	瀬戸、美濃系粗い胎土良く使用している。
117	擂鉢	Ⅱ郭第7号堀	第132図	B　4.5 C（12.0）	1／5	底部は、水平で体部は直線的に外傾する。	底部は、回転糸切りで体部は回転ヘラ削り、体部は縦で底面は円形の櫛引、13本1単位	暗褐色（長石粒含）暗褐色	瀬戸、美濃系No.1、一部茶褐色良く使用されている。
118	擂鉢	Ⅰ郭	第132図	B　4.0 C（10.6）	1／5	底部は器肉が薄く内傾し、体部は直線的に外傾	底部は、回転糸切り、体部は回転ヘラ削りで下半は櫛削り、11～13本1単位の櫛引、底部は端部より内面、体部は縦	暗褐色（長石粒含）暗茶褐色	瀬戸、美濃系良く使用されている東南虎口No.26との接合
119	擂鉢	Ⅰ郭	第132図	B　7.5 C　（9.0）	1／5	底部は水平で、体部は直線的に外傾	底部は回転糸切り後ヘラナデ体部は、回転ヘラ削り、櫛は体部14本、底部は8～10本1単位	暗褐色（長石、石英含）暗褐色	瀬戸、美濃系良く使用されている49号掘立No.6＋34号土壙No.1
120	擂鉢	Ⅰ郭南側虎口	第133図	A（35.0） B　12.3	1／6	体部は、内傾ぎみに外傾、口縁部はヘラ削りで水平	体部は、内外面ヘラナデ口縁部は、ヘラ削り長短の沈線を引く	暗褐色（小石、長石粒含）暗褐色	土師質土器
121	擂鉢	Ⅰ郭第5号堀	第133図		片	体部は、直線的に外傾で、口縁端部は水平、口縁端部は丸い	体部内面ヘラナデ口縁部はヘラ削り3～4本1単位の櫛引き	暗褐色（小石、雲母、石英含）淡黒褐色	粗い胎土良く使用されている。
122	擂鉢	Ⅰ郭第1号堀東側	第133図		片	体部は、外傾し体部上半は直立している。口縁部は水平	体部内外面ヘラナデ口縁部は、ヘラ削りの削り出し、10～11本1単位の櫛引き	灰褐色（小石、雲母、石英含）灰褐色	粗い胎土良く使用されている。
123	擂鉢	Ⅰ郭第4号堀	第133図		片	体部は直線的に外傾	体部は、内外面ヘラナデ2本1単位で、2.5cmごとに櫛引き	暗褐色（小石、雲母、長石含）黒色	虎口部
124	擂鉢	池跡	第133図		片	体部は、外湾ぎみに外傾	体部は、内外ヘラ削り13本1単位の櫛引き体部一部磨滅	暗褐色暗褐色	備前良く使用されている
125	擂鉢	Ⅱ郭第7号堀	第133図	B　7.5 C（10.0）	底　1／4 体　1／5	底部は、薄く水平で体部はやや外湾ぎみに外傾	体部は、回転ヘラ削り12～14本1単位の櫛引き	淡暗褐色（小石、長石含）淡暗茶褐色	瀬戸、美濃系No.5良く使用する

第73表　城址関係出土遺物一覧表13

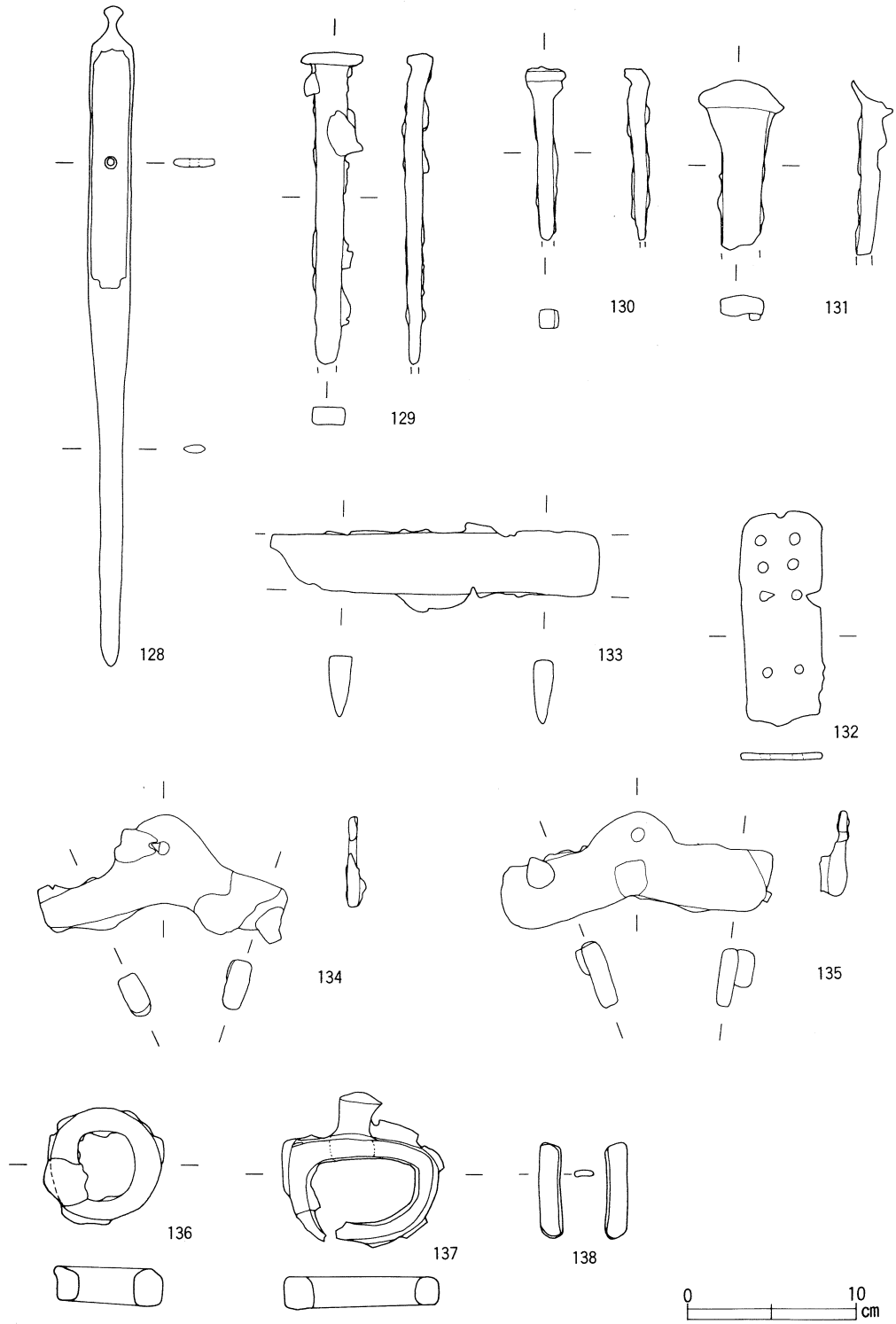
No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　　考
126	擂鉢	第17号掘立	第133図	B　4.9 C（12.0）	片	底部は水平で、体部は直線的に外傾する	底部は、回転糸切り 体部は、回転ヘラ削り9～13本1単位の櫛引き	淡暗褐色 （小石、石英粒含） 暗茶褐色	瀬戸、美濃系 No.3 良く使用する
127	擂鉢	第45号掘立	第133図	B　4.7 C（ 9.0）	1／5	底部は水平で体部はは直線的に外傾	底部は回転糸切りで体部は回転ヘラ削り5本1単位の櫛引き	暗褐色 （小石、石英含） 暗褐色	瀬戸、美濃系 良く使用する
128	笄	第30号掘立	第134図	長　19.6 幅1.3× 0.7 厚0.3×0.25	完				青銅製
129	釘	Ⅰ郭	第134図	長　9.2 幅　0.8 厚　0.5		先端を欠損しているが角釘で、頭部は折り曲げられている。			鉄製
130	釘	Ⅰ郭	第134図	長　5.1 幅　1.0 厚　0.5		頭部の一部と先端を欠損している。頭部は折れ曲っている。			鉄製
131	釘	Ⅰ郭	第134図	長　5.0 幅　1.3 厚　0.6		頭部と先端部を欠損しているが釘片と推定される			鉄製
132	小札	第5号土壙	第134図	長　6.3 幅　2.4 厚　0.15	一部欠	両端を一部欠損する孔は0.3cmで上に6個下に2個を配している。			鉄製 No.1
133	刀子	第20号掘立	第134図	長　9.8 幅　0.7 厚　1.8		両先端を欠き刀身部片で平造の刀子である。			鉄製 第20号掘立の桂穴群
134	金具	Ⅰ郭	第134図	長　7.3 幅　2.6 厚　0.7	完	中央が突出し左右は「ハ」字状に開く、中央孔は1個で0.3cm			火打金具
135	金具	Ⅰ郭	第134図	長　8.0 幅　2.4 厚　0.4	完	中央が突出しており、左右は「ハ」字状に広く中央に0.4cmの孔有			火打金具
136	金具	Ⅰ郭	第134図	径　3.3 厚0.8 ×1.1	完	円形をなす鉄製環で、やや変形している。			鉄製 No.54
137	金具	第48号掘立	第134図	径4.4 ×3.1 頭1.2 ×1.4 厚　0.8	一部欠	頭は丸く上部は平輪は、上が水平で下は円形をなしている。			No.4
138	金具	第2号掘立	第134図	長　5.7 幅　1.2 厚　0.3	完	やや湾曲しており、両端は丸味を持たせている。1面を突出されている。用途不明			P32内出土 青銅製
139 － 1	馬具	Ⅰ郭	第135図		完				轡の鏡板 鉄製

7）カワラケ（第137・138図、第74～79表、図版51）

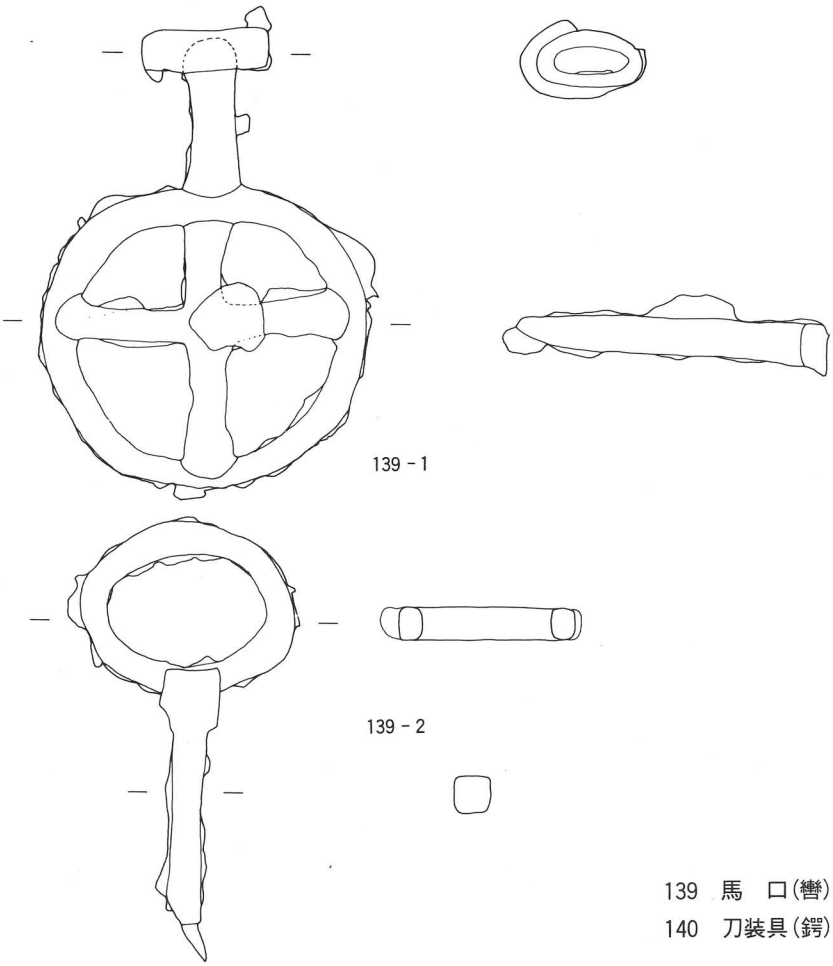
第137,138図は、カワラケである。第137図No148は、体部が直線的に外傾し、口唇部は水平に整型されている。No149は、内傾ぎみに直立する体部で、口縁部は肥厚で口唇部が丸く整型されている。No150は、内傾ぎみに外傾する体部で、口唇部は外面より丸く整型されている。No151は、直線的に外傾する体部で、口縁部は肥厚で口唇部は丸く整型されている。底部内面は、削り出しである。No152は、低い器高で直線的に外傾する体部と、口縁部はやや外湾している。No153は、直線的に外傾する体部で、口唇部は直立ぎみに整型されている。No154は直線的に外傾し肥厚な体部で、口唇部は内外より削り出されている。No155は、体部が直線的に外傾し、口縁部はやや外湾しており、口唇部は丸く整型されている。No156は、体部が直線的に外傾し、口縁部がやや肥厚である。底部内面は、削り出しが見られる。No157は、体部が外湾ぎみに外傾し、口縁部は内面がやや肥厚で、口唇部が内外より削り出されている。No158は、丸味を持つ器型で体部は低く肥厚である。体部下端には、回転糸切りの糸痕を有している。

No159～167までは、小型のカワラケである。No159は、内傾ぎみに外傾し、口唇部は外面より削り出されている。No160は、低く肥厚な体部で口唇部は、外面より斜めに削り出されている。No161は、低く短い体部であるのに対し、底部は高く整型されいる。No162は、体部が直線的に外傾しており、口唇部は鋭く内外面より削り出されている。No163は、体部上半を欠損しているが、薄い器肉に整型されている。No164は、肥厚で低い体部に整型され、体部はやや内傾ぎみに外傾し、口縁部は内外面より削り出されているが、No162ほど鋭くない。No165は、やや薄い器肉で体部は直線的に外傾し、口唇部は外面より削り出されている。No166は、やや内傾ぎみに外傾する体部で、口唇部は丸く整型されている。No167は、肥厚な器型に整型され、体部は直線的に外傾する。また、小型のカワラケとしてはNo184～193、No202～218までがある。

No168は、直立ぎみに外傾し底部内面は、削り出しである。口唇部は、内側が水平で外側は斜めに削り出している。No169は、体部が直線的に外傾し、口縁部はやや肥厚で口唇部が内外面より鋭く削り出されている。底部は、削り出している。No170は、底部に反し体部は薄い器型で、やや内傾ぎみに外傾しており、口唇部には片口状の削り出しを有している。No171は、薄い底部に対し口縁部が肥厚に整型されている。No172は、直線的に外傾する体部で、口唇部は内外面より削り出されている。No173は、体部は直線的に外傾し口縁部がやや外湾している。口唇部は、外面より削り出されている。No174は、体部が内傾ぎみに外傾しており、口縁部は水平に整型されている。No175は、薄い器肉に整型されている。体部は、直線的に外傾しており、口縁部がやや肥厚で口唇部は内面より水平に削られている。No176は、体部が直線的に外傾し口縁部は丸く削り出されやや外湾している。底部内面端部には、6個の刺突を有している。No177は、体部が



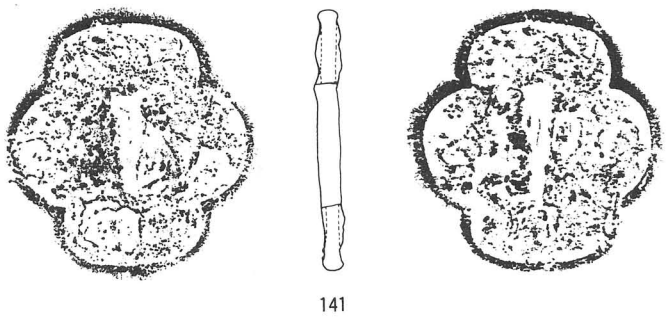
第134図　城址関係出土遺物実測図14

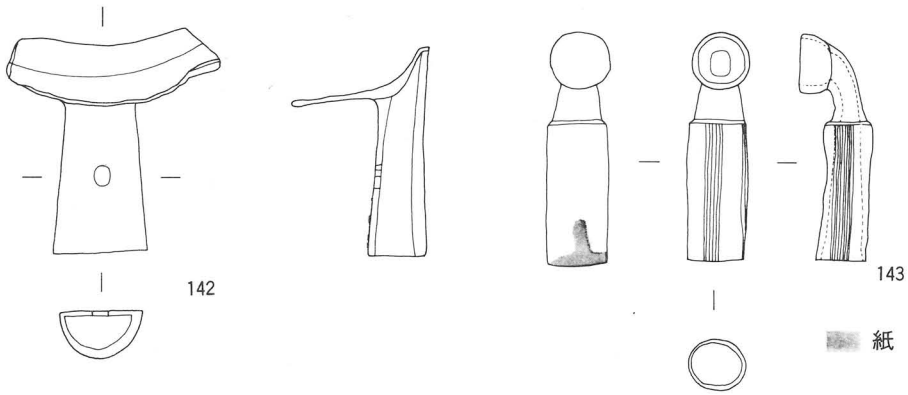


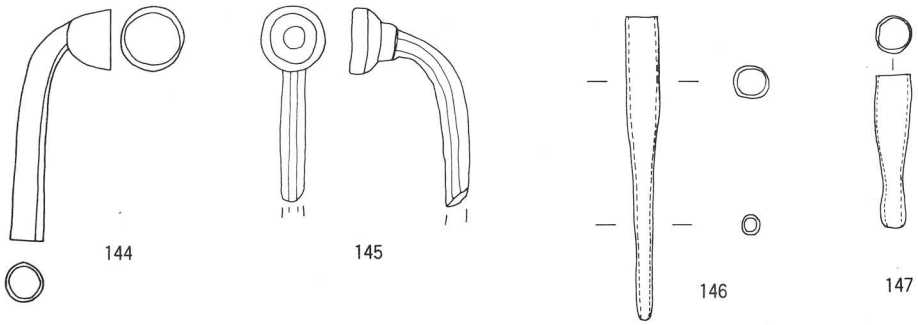
139　馬　口(轡)
140　刀装具(鍔)

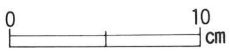
0　5 cm

第135図　城址関係出土遺物実測図15



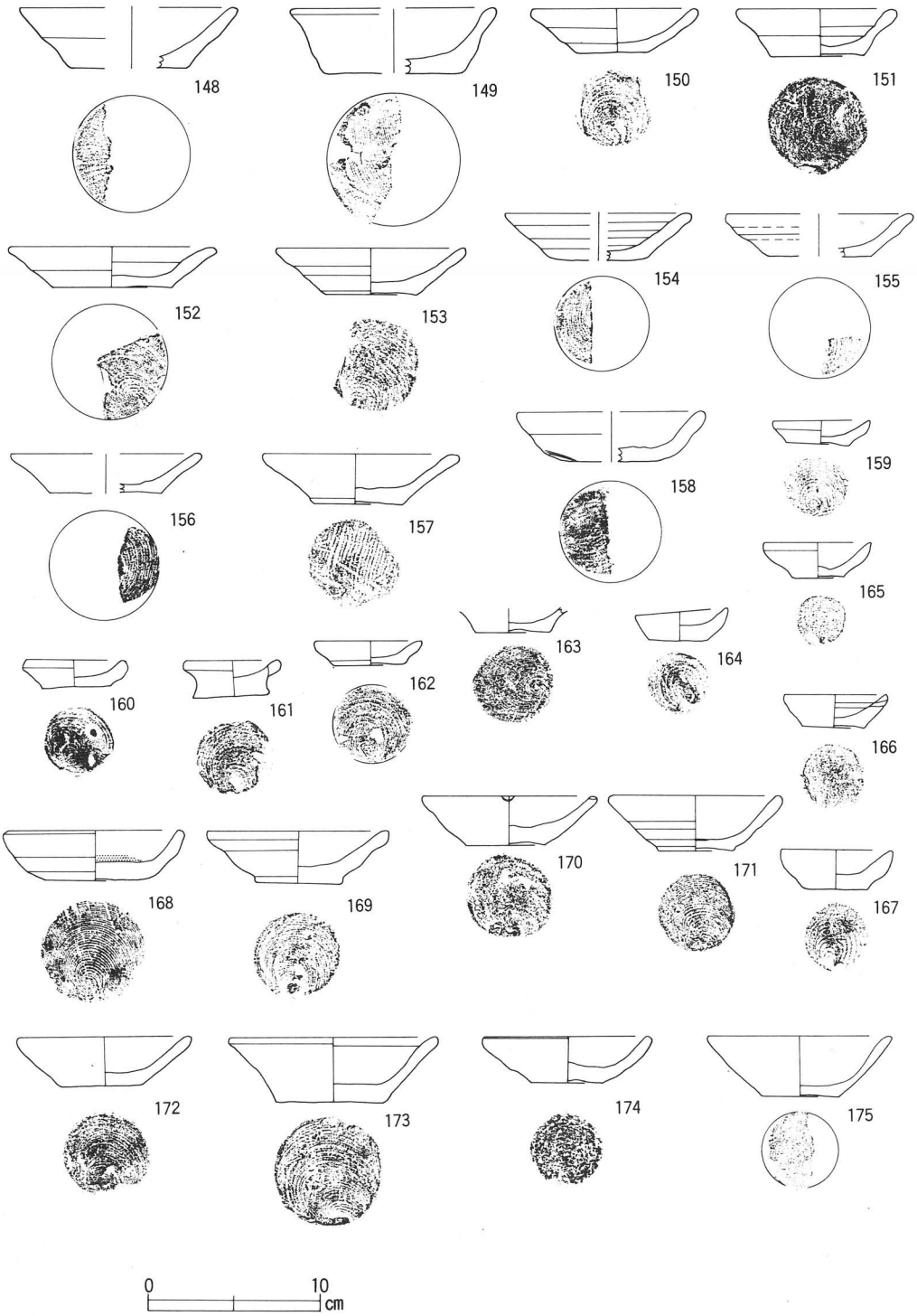






第136図　城址関係出土遺物実測図16

内傾ぎみに外傾し、口縁部は肥厚である。底部外面には、墨書痕を有している。No178は、体部が直線的に外傾し、口唇部は外面より削り出されている。No179は、直線的に外傾する体部で、口縁部はやや肥厚化しており、口唇部は内外面より鋭く削り出されている。底部内面は、削り出されている。No180は、内傾ぎみに外傾する体部で、口縁部は内外面より削り出されているが、丸味を持つ三角形状を呈している。No181は、肥厚な底部と低く直線的に外傾する体部で、口唇部は外面より削り出されている。No182は、低い器高で体部は直線的に外傾し、口唇部は外面より垂直に削り出され鋭くなっている。No183は、直線的に外傾する体部で、口縁部は肥厚で外面より少し削り出されており、削り出しの片口を有している。底部は削り出しである。No184は、肥厚な底部で体部は直線的に外傾するが、非常に低い体部である。No185は、肥厚で内傾ぎみに外傾する体部で、口縁部は細くなっている。No186は、肥厚な底部で体部は直線的に外傾し、口唇部は外面より削り出されている。No187は、削り出しの底部で体部は直線的に外傾し、口唇部は外面より削り出されている。No188は、内外面とも削り出しによる底部で、体部は直線的に外傾し三角形状を呈している。No189は、最も小型のカワラケである。肥厚で低く、やや内傾ぎみに外傾する体部と、外面より垂直に削り出されている口唇部を有している。No190は、薄い器肉で体部が直線的に外傾しており、口縁部はやや外湾ぎみで口唇部は外面より斜めに削り出されている。No191は、体部上半を欠損しているが直線的に外傾する体部である。No192は、器高が著しく異なっているが、直線的に外傾する体部に口唇部は外面より斜めに削り出されている。底部は、肥厚である。No193は、丸味を有する底部で、体部は直立ぎみに外傾しており、口唇部は細く整型されている。手捏土器である。No194は、肥厚な底部で体部は直線的に外傾し、口唇部にかけ、薄く整型されている。体部下端には、回転糸切り痕を有している。No195は、やや内傾ぎみに外傾する体部で、口唇部は内面より水平に削り出されている。底部内面は、削り出しである。No196は、直線的に外傾する体部で、口縁部はやや肥厚化しており、口唇部外面は削り出しである。No197は、直線的に外傾する体部で、口唇部は内外面より丸く削り出されている。また、体部下端と底部内外面は削り出しである。No198は、内傾ぎみに外傾する体部で、口縁部はやや肥厚で口唇部は内外面より丸く削り出されている。体部内面下半には、一部煤が付着している。底部外面は、削り出しが見られる。No199は、内傾ぎみに外傾する体部で、口縁部内面はやや肥厚で口唇部は、丸く削り出されている。底部は、削り出しである。No200は、底部が肥厚で体部は直線的に外傾し、口唇部にかけ細く整型されている。口唇部は、水平に削り出されている。底部は、外面が削り出して体部にかけて回転糸切り痕を有する。No201は、直線的に外傾する体部で、口縁部は肥厚化しており口唇部は、外面より丸く削り出されている。底部外面は、削り出しである。No202は、肥厚な底部で低く短い体部で、三角形に整型されいる。No203は、直線的に外傾する体部で、口縁部がやや外湾ぎみで斜めに削り出されている。No204は、No202と類似した器



第137図　城址関係出土遺物実測図17

第74表　城址関係出土遺物一覧表14

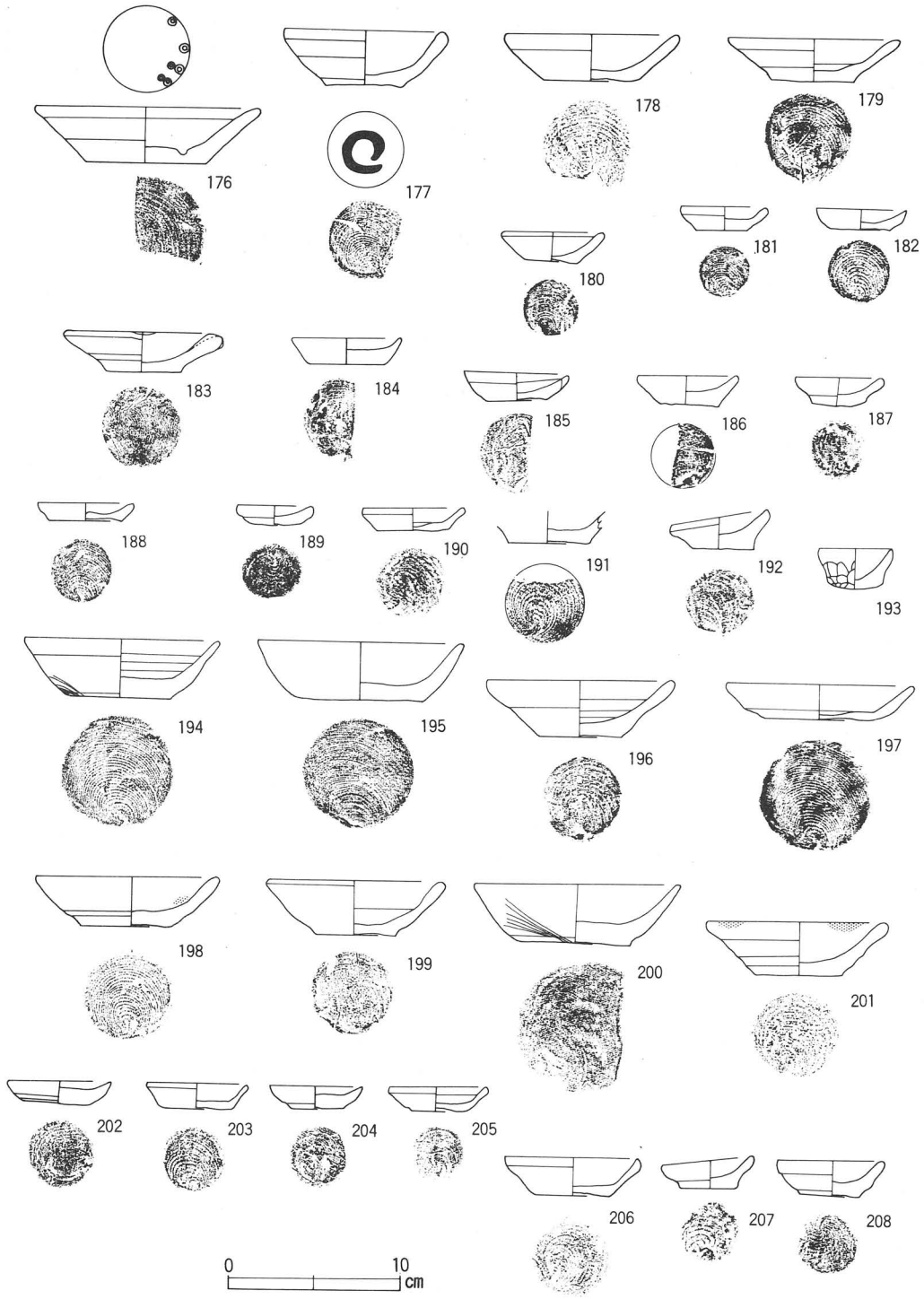
No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
139－2	馬具	Ⅰ郭	第135図	長　11.3 径5.5×4.5 軸　5.8	1／2	楕円形をなす輪中央に歯噛が接続している。			轡の衡 鉄製
140	鍔	Ⅰ郭	第135図	径　7.6 孔0.9×3.0	一部欠	上下左右が円形と隅丸長方形状に突出し、隅は折被せている、刀部は平造りである。			青銅製 刀部は0.8×3.0cm
141	鍔	Ⅰ郭	第136図	径6.9×6.4 刀孔 0.9×3.3	完	No.140と同じ型である。			青銅製 刀部は 0.9×3.0cm
142	燭台	Ⅰ郭	第136図	長　5.5 巾　5.5		先端を欠く 目釘穴1有			青銅製
143	煙管	Ⅰ郭	第136図	長5.1×1.5 径　×0.6	一部欠	煙管先端部分で、柄部先端を欠く、2段に造られている。			青銅製
144	煙管	第58号土壙	第136図	長　6.2 径1.6×0.8	完	先端部の完型品 柄部が太くなっている。			青銅製 No.9
145	煙管	第32号掘立	第136図	長　8.0 径0.9×0.4	完	吸口部の完型品で、先端がつぶれている。			青銅製 No.1
146	煙管	Ⅰ郭	第136図	長　6.1 先径 1.5 軸　1.5	完	やや大型の煙管先端部で、軸部は厚く4ケ所に6～8本の線を引く			青銅製 内面に和紙が残る。
147	煙管	Ⅰ郭第5号堀	第136図	長　4.0 径　0.9	完	吸い口部で、吸い口にかけて細くなっている。			青銅製 No.4
148	カワラケ	第17号掘立	第137図	A（12.8） B　3.6 C（0.8）	1／4	底部は水平で体部は直線的に外傾、口縁部は丸い	底部は、静止糸切り体部上半は回転ヘラ削り体部下半は、回転ヘラナデ	雲母、砂 良好 淡黒褐色	No.12
149	カワラケ	第17号掘立	第137図	A　12.1 B　3.6 C（7.8）	1／2	底部は水平で、体部は、内傾ぎみに外傾し口縁部は肥厚	底部は回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削り、ナデ	長石、砂 良好 明褐色	底部に圧痕有 No.23
150	カワラケ	池跡	第137図	A　9.8 B 2.7×2.4 C　4.5	完	底部は、ほぼ水平で体部は、内傾ぎみに外傾している。	底部は、回転糸切り体部は、回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラナデ	粗 良好 暗茶褐色	
151	カワラケ	第18号掘立	第137図	A（9.4） B 2.7×2.8 C　5.5	体部1／2欠	底部は、やや内傾で内面地硫黄を削り出す。体部は外傾で、口縁部が肥厚	底部は、回転糸切り後ヘラナデ、体部は回転ヘラナデ、口縁部はヘラナデ	小石、砂 良好 淡茶褐色	No.6
152	カワラケ	第49号掘立	第137図	A（12.0） B　2.4 C　7.0	1／3	底部は、やや内傾で体部は直線的に外傾し、口縁部は外湾する。	底部は、回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削り	砂 良好 暗褐色	No.4

第75表　城址関係出土遺物一覧表15

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
153	カワラケ	第49号掘立	第137図	A (11.0) B 2.7 C 5.3	体部 1／6 残	底部は、やや内傾 体部は直線的に外傾 口縁部は、やや肥厚	底部は、回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ	小石、砂 良好 暗褐色	
154	カワラケ	第32号掘立	第137図	A (10.9) B 2.7 C 5.0	1／4	底部はほぼ水平 体部は直線的に外傾 口唇部は水平	底部は、回転糸切り 体部は、回転ヘラナデ口唇部は、回転ヘラ削り	長石、砂 良好 茶褐色	
155	カワラケ	第2号掘立	第137図	A (10.8) B 2.5 C (6.0)	1／5	底部は水平で、体部は直線的に外傾、体部上半肥厚	底部は、回転糸切りで体部下半は、回転ヘラ削り、上半はヘラナデ	小石、砂 良好 茶褐色	P30内出土
156	カワラケ	第2号掘立	第137図	A (9.0) B 2.3 C (6.5)	1／2	底部は水平で、体部は直線的に外傾、口縁部肥厚で口唇部はやや鋭い	底部は、回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ口唇部は、回転ヘラ削り	粗 良好 淡暗褐色	
157	カワラケ	第4号掘立	第137図	A (11.0) B 2.9 C 5.5	体部 1／5	底部は、やや内傾しており、体部はやや外湾している。	底部は、静止糸切りで体部は回転ヘラナデ口縁部は、ヘラ削り	小石、砂 良好 暗褐色	
158	カワラケ	第21号掘立	第137図	A (11.2) B 3.0 C (6.0)	1／4	底部は水平でやや突出体部は直線的に外傾し、口縁部は肥厚で外湾ぎみ	底部は、回転糸切りで削り出す、体部下半は回転ヘラ削り、上半はヘラナデ、体部下半に糸切り払有	長石、砂 良好 暗褐色	
159	カワラケ	第49号掘立	第137図	A 5.7×5.4 B 1.5×1.3 C 3.7	完	底部は、内傾で薄く体部は、低く直線的に外傾、口縁部は鋭い	底部は、回転糸切りで内面ヘラ削り、体部は回転ヘラナデで、口縁部は回転ヘラ削り、ナデ	緻密 良好 暗褐色	内面黒色 No.8
160	カワラケ	第49号掘立	第137図	A 5.5×5.2 B 2.3×1.5 C 3.8×3.7	完	底部は水平で、体部は、低く内傾ぎみに外傾口縁部は斜め	底部は、回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削り	小石、長石 良好 暗褐色	P16出土 No.8
161	カワラケ	第30号掘立	第137図	A 5.7 B 4.5×4.1 C 2.2×1.9	ほぼ 完	底部は、高く突出して水平、体部は低く直線的に外傾	底部は、回転糸切り 体部はヘラナデ 口縁部はヘラ削り、ナデ	雲母、長石、石英 良好 暗褐色	P12内出土
162	カワラケ	第4号掘立	第137図	A 6.3 B 1.5×1.3 C 4.2	完	底部は、やや内傾し体部は直線的に外傾、口縁部は、鋭く削り出す。	底部は、回転糸切りで、体部は、ヘラナデ、口縁部は回転ヘラ削り	緻密 良好 淡黒色	No.1
163	カワラケ	第4号掘立	第137図	B 1.4 C 4.3	体部 1／2	底部は、内傾で中央が薄い、体部は直線的に外傾している。	底部は、回転糸切りで内面ヘラ削り、体部は回転ヘラナデ	小石、雲母、砂 普通 褐色	
164	カワラケ	第23号掘立	第137図	A 5.4 B 1.8×1.5 C 3.3	完	底部は、水平で肥厚体部は、低く直線的に外傾し、口縁部は鋭い	底部は、回転糸切り体部は、回転ヘラナデ	緻密 良好 淡黒色	No.1

第76表　城址関係出土遺物一覧表16

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
165	カワラケ	第49号掘立	第137図	A 6.3 B2.1×2.0 C 3.0	体部 1／3欠	底部は、内傾ぎみで中央肥厚、体部はやや内傾ぎみに外傾、口縁部は鋭く削り出す。	底部はヘラナデで、体部はナデ、口縁部はヘラ削り、ヘラナデ	密 良好 茶褐色	No.6
166	カワラケ	第34号掘立	第137図	A 5.9 B2.0×1.8 C3.9×3.8	完	底部は、やや内傾しており体部は、内傾ぎみに外傾口縁部は鋭い	底部は、回転糸切り、ヘラナデ、体部は回転ヘラ削り、ナデ	小石、砂 良好 茶褐色	No.7
167	カワラケ	第23号掘立	第137図	A 6.6 B 2.3 C 3.7	1／2	底部は水平で、突出しており体部は、肥厚で直線的に外傾、口縁部を薄くしている。	底部は、回転糸切り、体部は、ヘラナデ、口縁部はヘラ削り、ヘラナデ	粗 良好 茶褐色	No.2
168	カワラケ	第19号土壙	第137図	A 10.6 B 4.9 C 5.6	ほぼ完	底部はやや内傾し、体部は、やや内傾ぎみに外傾する、口唇部は水平	底部は、回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ口唇部は回転ヘラ削り	緻密 良好 暗褐色	底部内面を硯に転用 体部～口縁部一部欠 No.1
169	カワラケ	第45号掘立	第137図	A 10.6 B 3.1×2.9 C 5.1	完	底部は突出し水平で体部は直線的に外傾し口縁部肥厚で口唇部はやや鋭い	底部は、回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ、口唇部は、回転ヘラ削り	小石、雲母、長石 良好 淡赤褐色	内面黒色 (二次火災を受) 表面磨滅 P No.8
170	カワラケ	第45号掘立	第137図	A 10.2 B 2.8 C 4.5	2／3	底部は内傾で内面は削り出し、体部は直線的に外傾、口唇部に削り出し有	底部は、回転ヘラ切り、ナデ体部は、回転ヘラナデ、口縁部はヘラナデ	粗 良好 明黒色	
171	カワラケ	第8号土壙	第137図	A 10.2 B 3.2 C 4.5	2／3	底部は、内傾で内面削り出す、体部は内傾ぎみに外傾し、口縁部は丸い。	底部は、回転糸切り、体部は、回転ヘラ削り口縁部は回転ヘラナデ	粗 良好 暗褐色	No.1
172	カワラケ	第8号土壙	第137図	A 10.2 B 2.9×2.7 C 4.6	2／3	底部は水平で、内面削り出す、体部は直線的に外傾し、口縁部は丸くなっている	底部は、回転糸切り、体部は、回転ヘラ削り、底部と口縁部が焼け黒色化	粗 良好 暗褐色	灯明皿 No.3→No.2
173	カワラケ	I 郭池跡	第137図	A 12.3 B 3.8 C 6.2	体部 2／3	底部は水平で、体部は直線的に外傾、口縁部はやや肥厚で外湾ぎみ	底部は、回転糸切り体部は、回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削り、ナデ	緻密 良好 暗褐色	No.1
174	カワラケ	第29号土壙	第137図	A 9.9 B 2.8×2.6 C 4.0	完	底部は、底面外面内傾で内面突出、体部は内傾ぎみに外傾、口縁部は丸い	底部は、回転糸切りか、体部は、内面回転ヘラ削りとヘラナデ、外面磨滅	粗 普通 黒色	No.4
175	カワラケ	第58号土壙	第137図	A 10.8 B 3.6 C 4.6	1／2	底部は、やや内傾しており体部は、直線的外傾体部上半肥厚	底部は、回転糸切り体部は、回転ヘラナデ口縁部は、ヘラナデ	長石、砂 普通 暗褐色	No.1



第138図　城址関係出土遺物実測図18

第77表　城址関係出土遺物一覧表17

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　　考
176	カワラケ	Ⅰ郭南側土塁	第138図	A (13.0) B 3.3 C (7.0)	約1／4	底部は水平で、体部は直線的に外傾する。底部内面に6個の円形刺突有	底部は、回転糸切りで、体部は、体部は回転ヘラナデ、	雲母、砂 良好 暗褐色	
177	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A (9.6) B 3.2 C 4.6	体部 1／5	底部は、やや突出するが水平で、体部は内傾ぎみに外傾、口縁部肥厚	底部は、回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ、口縁部は回転ヘラ削り、ヘラナデ	緻密 良好 茶褐色	底部に「0 」印の墨書を有す。 No.100
178	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A 10.4 B 2.7 C 5.3	体部 1／3	底部は、やや内傾で、体部は、直線的に外傾、口縁部は、丸くなっている。	底部は回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ、口縁部は回転ヘラナデ	雲母、石英、砂 良好 暗茶褐色	No.20
179	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A (10.0) B 2.5 C 5.0	体部 1／3	底部は水平でやや突出し内面は削り出す、体部は直線的に外傾で、口縁部は外湾ぎみ	底部は、回転糸切りで体部は回転ヘラ削り、口縁部はヘラ削り、ナデ	粗 良好 暗褐色	No.89
180	カワラケ	第9号掘立	第138図	A 6.1 B 1.9×1.6 C 3.0	ほぼ完	底部は、内傾で中央は薄い器肉、体部は直線的に外傾	底部は、回転糸切り、体部は、回転ヘラ削り、口縁部は、回転ヘラ削り	小石、長石、石英 良好 茶褐色	口縁部一部欠損
181	カワラケ	第54号掘立	第138図	A 5.2×5.0 B 1.4×1.3 C 3.0	完	底部は、水平で、体部は直線的に外傾し、口縁部はやや肥厚化	底部は、回転糸切り、体部は、回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削り、ナデ	緻密 良好 暗褐色	小型で端整な造り No.1
182	カワラケ	第43号土壙	第138図	A 5.2 B 1.2 C 3.6	完	底部は内傾で内面削り出し、体部は直線的に外傾、口縁部は鋭い	底部は回転糸切りで内面ヘラ削り、体部は回転ヘラナデで、口縁部は回転ヘラ削り	小石、長石 良好 暗褐色	No.1
183	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A 9.3×9.0 B 2.4 C 2.2	完	底部は、やや突出し水平で体部は、直線的に外傾し口縁部は肥厚で、削り出し有	底部は、回転糸切りで体部は回転ヘラナデ、口縁部は回転ヘラ削り、ナデ、手持ヘラ削り	砂 良好 暗褐色	No.8
184	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A 6.4 B 1.6 C 4.5	1／2	底部は、水平で肥厚体部は、直線的に外傾し薄い	底部は、回転糸切り、体部は、内面ヘラナデであるが表面は磨滅	雲母、砂 良好 茶褐色	
185	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A 6.1 B 1.9×1.4 C 3.5	1／2	底部は、内傾で薄い器肉であり、体部は直線的に外傾、底部から口縁にかけ	底部は、回転糸切りで、体部から口縁部にかけては回転ヘラナデ	緻密 良好 茶褐色	口縁部内面一部煤付着 灯明皿か
186	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A 6.0 B 1.8×1.6 C 3.5	1／2	底部は水平で、体部は直線的に外傾、体部は低い	底部は、回転糸切り体部は回転ヘラナデ	緻密 良好 暗褐色	
187	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A 5.2×5.5 B 1.4×1.9 C 3.2	完	底部は、ほぼ水平で一部削りで突出し、体部は直線的に外傾し、口縁部やや肥厚	底部は、ヘラ削り後ヘラナデ体部～口縁部までヘラナデ	小石、砂 普通 茶褐色	No.9
188	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A 5.6 B 1.0 C 3.6	体部 1／2	底部は、内傾で内面削り出し、体部は直線的に外傾し鋭い	底部は回転糸切りで内面ヘラ削り、体部は回転ヘラ削り、ナデ	長石、砂、小石 良好 茶褐色	

第78表　城址関係出土遺物一覧表18

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　　考
189	カワラケ	Ⅰ郭第5号堀	第138図	A　4.5 B　1.2 C　2.7	完	底部は、やや内傾で体部は緩やかに外傾、口縁部はやや肥厚	底部は、回転糸切りで、体部は、回転ヘラナデ、口縁部はヘラ削り、ナデ	雲母、石英、砂良好 淡赤褐色	火災を受ける
190	カワラケ	Ⅰ郭第5号堀	第138図	A　6.0 B　1.3 C　4.0	完	底部はほぼ水平で、内面中央を薄くしている。体部は、直線的に外傾口縁部を削り出す	底部は、回転糸切りで、体部は、回転ヘラナデ、口縁部は回転ヘラ削り、ヘラナデ、	緻密 良好 暗褐色	端整な造り No.40
191	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	B　1.9 C　4.8	1／2	底部はやや内傾で突出しており、体部は直線的に外傾する。	底部は、回転糸切りで体部は、回転ヘラ削り	長石、砂 良好 淡茶褐色	
192	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A　5.9 B 2.4×1.4 C　4.1	完	底部は水平で突出し体部は直線的に外傾口縁部は、斜め	底部は、回転糸切りで体部は回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削り	砂 良好 暗褐色	No.69
193	手捏土器	Ⅰ郭	第138図	A　(4.2) B　2.4 C　(3.2)	1／2	底部は、丸く削り出しており、体部は直立ぎみに外傾している	底部は、ヘラ削りで体部下半は指頭圧痕、口縁部ヘラナデ、内面ナデ	小石、砂 良好 暗褐色	No.54
194	カワラケ	Ⅰ郭第5号堀	第138図	A　11.5 B　3.4 C　5.8	ほぼ完	底部は水平でやや突出体部は直線的に外傾口縁部は丸く造り出す	底部は、回転糸切りで体部下半に糸切糸痕有体部は回転ヘラ削り、ヘラナデ	雲母、石英 良好 黒色	火災のため黒ずんでいる。 体部一部欠
195	カワラケ	Ⅰ郭第5号堀	第138図	A　(12.0) B　7.2 C　3.3	体部 1／3	底部は、ほぼ水平で、体部はやや内傾ぎみに外傾する。口縁部は削り出す	底部は、回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ、口縁部はヘラ削り、ナデ	小石、砂 良好 黒色	火災のため、黒ずんでいる
196	カワラケ	Ⅰ郭第5号堀	第138図	A　(11.0) B　3.3 C　4.5	体部 1／5残	底部は、やや内傾しており体部は、直線的に外傾口縁部は肥厚でやや鋭い	底部は回転糸切り体部は、回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削り、ナデ	雲母、長石、砂普通 暗褐色	No.63
197	カワラケ	Ⅰ郭	第138図	A　(11.0) B　2.0 C　6.2	体部 1／2	底部は、やや内傾で内面は削りで薄い、体部は直線的に外傾	底部は、回転糸切、体部下半は、回転ヘラ削り、体部上半は回転ヘラナデ	雲母、砂 普通 暗褐色	
198	カワラケ	Ⅰ郭第4号堀	第138図	A　10.6 B　2.9 C　5.8	完	底部はやや内傾で、体部は直線的に外傾口縁部は、やや鋭い	底部は、回転糸切り、体部は、回転ヘラナデで下半は、削り出す、口縁はヘラナデ		内面一部煤付着灯明皿か No.2
199	カワラケ	Ⅰ郭第4号堀	第138図	A　10.5 B　3.2 C　4.8	体部 1／4欠	体部は、内傾で内面削り出し、体部は内傾ぎみに外傾し、口唇部は削りでやや鋭い	底部は回転糸切り体部は、回転ヘラナデ口唇部は、回転ヘラ削り	小石、砂 普通 黒褐色	No.1
200	カワラケ	Ⅰ郭第5号堀	第138図	A　12.1 B 3.5×3.7 C　6.5	体部 1／2欠	底部は、内傾で体部は直線的に外傾する口縁部は水平	底部は、回転糸切り体部は、回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削り体部に、糸切り糸痕有	長石、砂 良好 黒色	
201	カワラケ	Ⅰ郭第5号堀	第138図	A　10.6 B　3.2 C　5.2	ほぼ完	底部は水平で、体部は直線的に外傾、口縁部は肥厚で丸味を有す	底部は、回転糸切りで体部は回転ヘラ削り、口縁部はヘラナデ	小石、砂 良好 暗褐色	口縁部内外に一部煤付着、灯明皿か No.8

第79表　城址関係出土遺物一覧表19

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
202	カワラケ	I郭第5号堀	第138図	A 6.0×5.7 B 1.4×1.1 C 3.8	完	底部は水平で、体部は低く直線的に外傾、口縁部は、鋭く造り出す。	底部は、回転糸切り 体部は、回転ヘラナデ	砂 良好 淡黒褐色	No.42
203	カワラケ	I郭第5号堀	第138図	A 5.2 B 1.5 C 4.0	ほぼ完	底部は、やや内傾で体部は直線的に外傾、口縁部は肥厚、口縁部は斜め	底部は回転糸切り、体部は、回転ヘラナデ、口縁部は回転ヘラナデ	緻密 良好 暗褐色	端整な造り No.47 口縁部を一部欠損
204	カワラケ	I郭第5号堀	第138図	A 5.5 B 1.9×1.3 C 3.0	ほぼ完	底部は、水平でやや突出し肥厚、体部は低く外傾し、口縁部まで削り出し	底部は、回転糸切り 体部は、回転ヘラ削り、ナデ	小石、砂 良好 灰褐色	No.48 端整な造り
205	カワラケ	I郭第5号堀	第138図	A 5.8 B 1.5×1.3 C 2.7	完	底部は、内傾で薄く削り出し、体部は直線的に外傾し、口縁部は斜めに削り出す	底部は、回転糸切りで体部は、回転ヘラナデ、口縁部は、回転ヘラ削り、ヘラナデ	緻密 良好 暗褐色	No.43
206	カララケ	I郭第5号堀	第138図	A (8.0) B 2.3 C 4.5	体部 1／3	底部は、外面内傾で内面水平、体部は直線に外傾し、口縁部は肥厚で削り出し	底部は、回転糸切で、体部は回転ヘラ削りで口縁を削り出す、口唇部はヘラ削り	雲母、砂 普通 茶褐色	
207	カワラケ	I郭第5号堀	第138図	A 5.5 B 1.9×1.3 C 3.4	完	底部は水平で体部は直線的に外傾、口縁部は肥厚でやや鋭く削り出す。	底部は、回転糸切り 体部は、回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削り、ナデ	小石、砂 良好 茶褐色	No.69
208	カワラケ	I郭	第138図	A 6.3 B 2.1 C 3.4	1／2	底部は水平で、突出し体部は、内傾ぎみに外傾底部内面肥厚	底部は、回転糸切りで削り出す、体部は回転ヘラ削り、ナデ、底部内面ヘラ削り	砂 良好 暗褐色	

型である。No202との相異点は、底部外面と内面が削り出しである点である。No205は、直線的に外傾する体部で、口縁部は肥厚化し口唇部が外面より削り出されている。底部外面は、内傾で削り出しである。No206は、直線的に外傾する体部で、口縁部は肥厚化し口唇部が外面より斜めに削り出されている。底面は、内傾している。No207は、No192同様著しく器高に差を有している。体部は、直線的に外傾し口唇部は、外面よりやや丸く削り出されている。No208は、直線的に外傾する体部で、口唇部は内外面より丸く削り出されており、底部下端は削り出しで下面はやや内傾している。

これらのカワラケは、図示したように大型と小型とに分けられ、それぞれがいくつかのタイプに分類される。整型は、体部は回転ヘラナデで、口縁部から口唇部にかけてはヘラ削りにより丸型、水平、三角形などに整型されている。底部は、回転糸切りが主流である。大型よりも、小型のカワラケに整型の良好な遺物が多い。

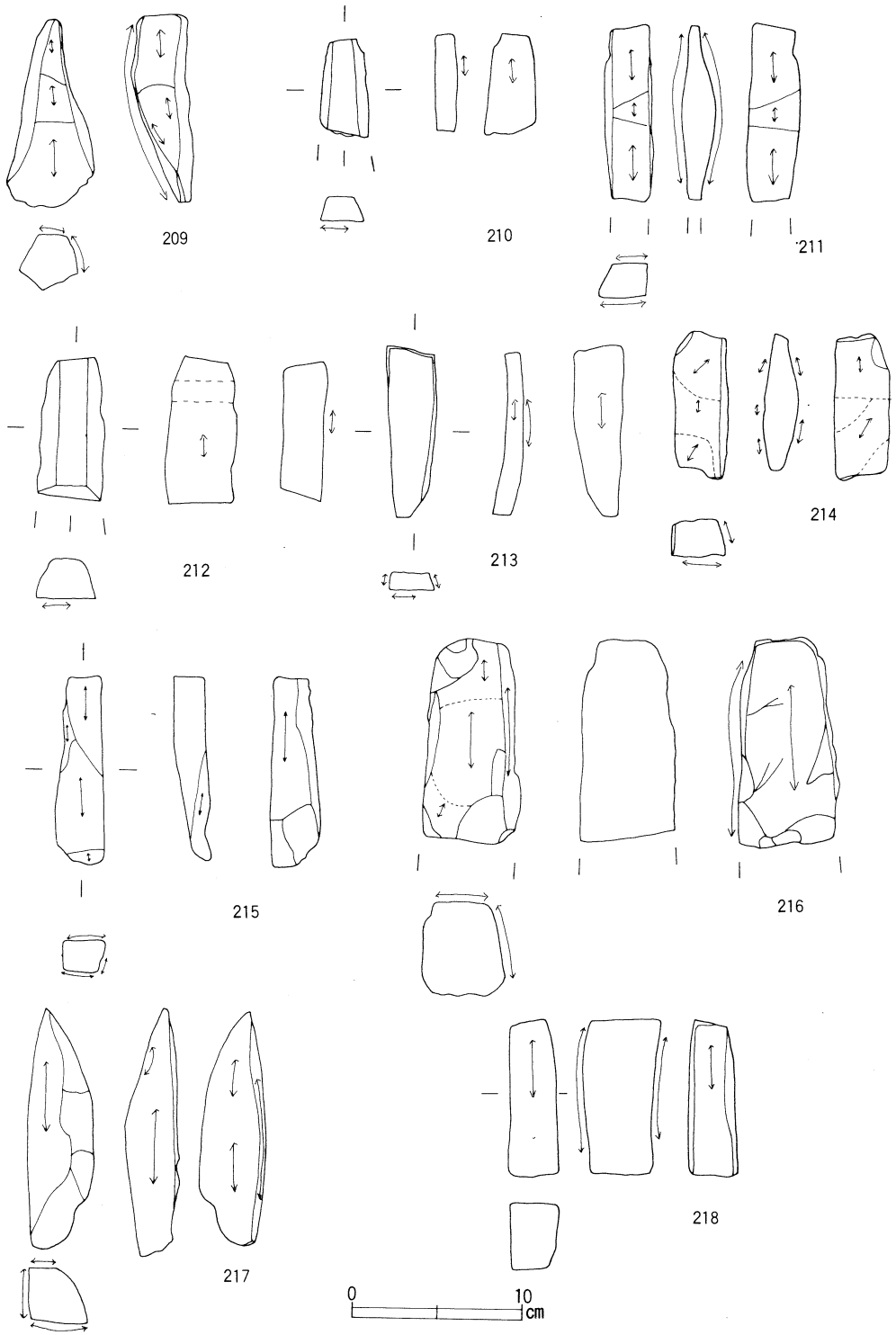
8）砥石（第139図・140図、第80・81表、図版51）

第139,140図は、砂岩の砥石である。主なもの17点を図示した。17点の砥石は、上下両側面の4面を使用面としているのがほとんどで、1面を自然面としているのはごく少量である。砥石当初の型態を示すのは、第139図No210と第140図No220がこれに相当する砥石と判断されることから、長方形状か台形状をなしていたものと判断される。砥石の型態は、使用により著しく型態が変化するため、細分出来ないが良く使用された砥石では、No211, 213, 214, 217, 222などがある。砥石の各面を同程度に使用した砥石としては、No211, 221, 223などがある。また、No216のように傷を有する砥石もある。

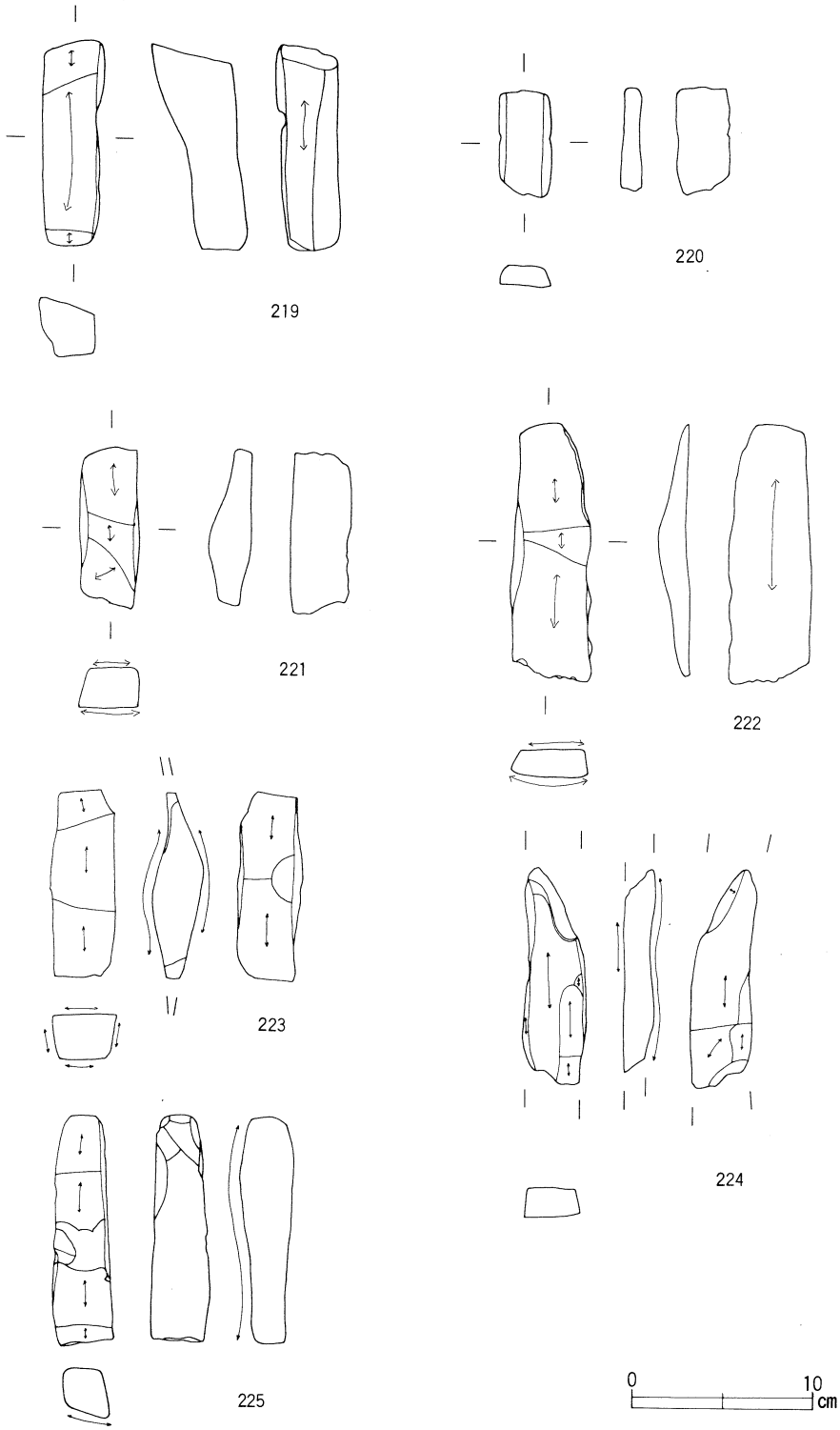
9）土製品（第141・142図、第81～84表、図版51）

第141図は、土玉である。Ⅰ郭、Ⅱ郭のほぼ全域で、堀、東側虎口、土壙などから総数60点の土玉が出土している。大きさからは、No239～244までのように径3～4cmを有する大型の土玉や、径2cm前後のやや小型の土玉、そしてこの中間に位置する土玉などがあり、一様ではない。中世の土玉であるかは、断定出来ないが奈良～平安期の住居址に供なう土玉ではあるまいか。

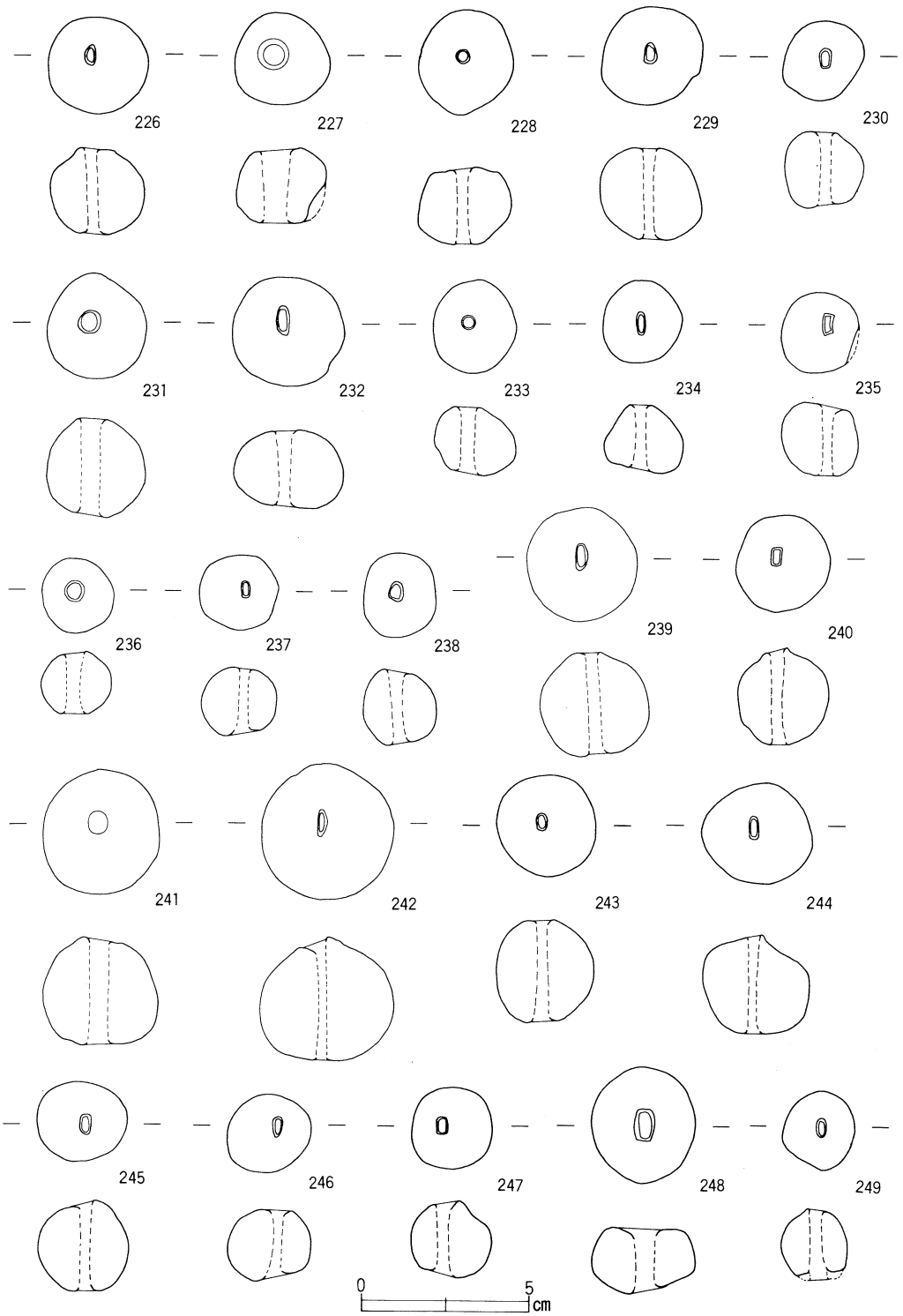
第142図は、土玉、管玉、土製紡錘車である。土玉は、No250～254までで、No254が大型の土玉である以外、小型の土玉である。No257～259は、管玉である。No257と258は、大型の管玉で、No259は小型である。No256は、½程度の土製紡錘車である。



第139図　城址関係出土遺物実測図19



第140図　城址関係出土遺物実測図20



第141図　城址関係出土遺物実測図21

第80表　城址関係出土遺物一覧表20

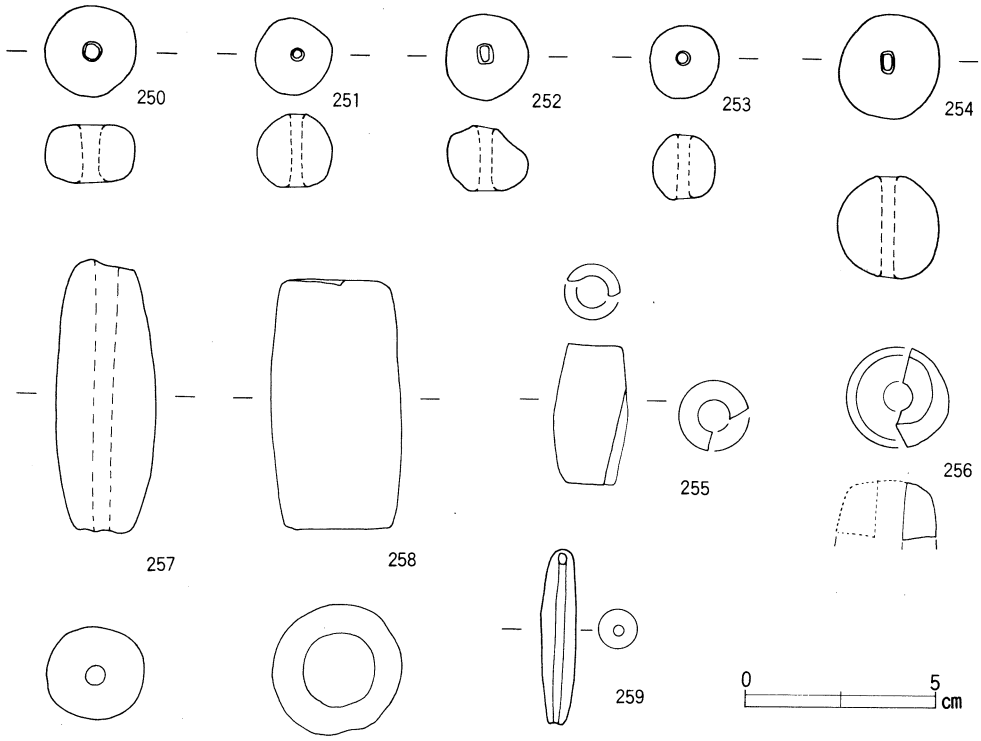
No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
209	砥石	第18号掘立	第139図	H 10.9 I 3.5 J 3.2		下位と左側面は良く使用、他は自然面		砂岩	120g
210	砥石	第4号掘立	第139図	H 5.7 I 2.6 J 1.4		上面、両側は切出面 下面、使用面		砂岩	No.4 30g
211	砥石	第4号掘立	第139図	H 10.2 I 2.8 J 2.0		上下両面は良く使用されている		砂岩	75g
212	砥石	第4号掘立	第139図	H 8.1 I 2.3 J 3.4		上面と両側面で切り出し面		砂岩	No.8 110g
213	砥石	第4号掘立	第139図	H 10.0 I 2.1 J 1.0		上面切り出し面 下位面使用面 両側面使用面		砂岩	No.9 下位が良く使われている 50g
214	砥石	第24号掘立	第139図	H 8.5 I 3.3 J 2.3		両面が良く使用 右側を使用		砂岩	35g
215	砥石	第23号掘立	第139図	H 11.0 I 2.4×2.0 J 1.9		上下両面と左側面良く使用されている		砂岩	No.6 71g
216	砥石	I郭第4号堀	第139図	H 11.5 I 4.6 J 5.5		上面右側は良く使用他は自然面		砂岩	530g
217	砥石	I郭第5号堀	第139図	H 14.4 I 3.9 J 3.2		左側面、下面は良く使用上面はあまり使用ない右側面は自然面		砂岩	No.6 5 150g
218	砥石	I郭第4号堀	第139図	H 9.1 I 2.2 J 3.8～4.1		上下両面が良く使用されている 側面は1面使用しているがそれほどでもない		砂岩	182g
219	砥石	I郭	第140図	H 11.2 I 3.0 J 3.2		上面と下面使用 上面が良く使用されている		砂岩	170g
220	砥石	第8号土壙	第140図	H 5.9 I 2.9 J 1.1				砂岩	No.3 30g
221	砥石	第16号土壙	第140図	H 8.9 I 2.3 J 2.2		上下両面良く使用されている		砂岩	No.1 80g
222	砥石	第16号土壙	第140図	H 14.3 I 2.3 J 1.6		上下両面良く使用されている		砂岩	No.2 110g
223	砥石	第30号掘立	第140図	H 10.2 I 3.5 J 2.8		上下面は良く使用 両側面はあまり使用されていない		砂岩	110g

第81表　城址関係出土遺物一覧表21

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備考
224	砥石	第4号掘立	第140図	H 12.0 I 3.3 J 1.6		一部欠損 上下両面良く使用 左側は一部使用（あまり使用なし）			90g
225	砥石	第2号掘立	第140図	H 12.5 I 2.9 J 2.4		使用は一面のみで良く使用する他の面に切り出し時の痕跡を残す			140g
226	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 3.0 I 2.9 J 2.5 K 0.6×0.3	完			密 良好 橙褐色	
227	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 2.8 I 2.8 J 2.2 K 0.9				長石、石英 良好 暗褐色	一部欠損
228	土玉	Ⅰ郭第2号堀	第141図	H 3.1 I 2.8 J 2.3 K 0.4	完			雲母、長石 良好 暗褐色、黒色	
229	土玉	Ⅱ郭第12号堀	第141図	H 3.0 I 2.9 J 2.7 K 0.6×0.4	完			砂粒 良好 暗褐色	
230	土玉	Ⅰ郭北側土塁	第141図	H 2.4 I 2.3 K 0.6×0.3	完			密 良好 橙褐色	
231	土玉	池跡	第141図	H 3.1 I 3.0 J 3.0 K 0.7	完			密 良好 暗褐色	28.0g
232	土玉	Ⅰ郭第2号堀	第141図	H 3.3 I 3.3 J 2.3 K 0.8×0.4	完			密 良好 暗褐色	
233	土玉	Ⅰ郭東側虎口	第141図	H 2.8 I 2.5 J 2.0 K 0.7×0.3	完			密 良好 暗褐色	
234	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 2.5 I 2.4 J 2.0 K 0.7×0.3	完			密 良好 暗褐色	
235	土玉	Ⅰ郭第7号溝	第141図	H 2.4 I 2.3 J 2.2 K 0.7×0.3				密 良好 暗褐色	一部欠損
236	土玉	第56号土壙	第141図	H 2.2 I 2.1 J 1.9 K 0.7	完			密 良好 黒褐色	No.7　10g

第82表　城址関係出土遺物一覧表22

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
237	土玉	第56号土壙	第141図	H 2.3 I 2.2 J 2.0 K 0.5×0.3	完			粗 良好 暗褐色	No.5　10g
238	土玉	第56号土壙	第141図	H 2.5 I 2.2 J 2.3 K 0.6×0.5	完			砂粒 良好 明褐色	No.6　11g
239	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 3.4 I 3.3 J 3.0 K 0.8×0.4	完			長石、雲母、砂粒 良好 黒色	
240	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 2.8 I 2.8 J 2.9 K 0.6×0.3	完			密 良好 暗褐色	
241	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 3.8 I 3.4 J 3.3 K 0.6	完			砂粒 良好 茶褐色	
242	土玉	Ⅱ郭第12号堀	第141図	H 4.0 I 3.7 J 3.7 K 0.8×0.3	完			石英、砂粒 良好 暗褐色	
243	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 3.0 I 3.0 J 3.0 K 0.5×0.3	完			密 良好 暗褐色	
244	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 3.3 I 3.1 J 2.9 K 0.7×0.3	完			長石粒、砂粒 良好 暗茶褐色	
245	土玉	Ⅰ郭東南部虎口	第141図	H 2.7 I 2.4 J 2.7 K 0.6×0.3				密 良好 暗褐色	第24号掘立 No.2 3　19g
246	土玉	第56号土壙	第141図	H 2.5 I 2.3 J 2.2 K 0.6×0.3	完			密 良好 明褐色	No.2　11g
247	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 2.5 I 2.5 J 2.8 K 0.6×0.4				密 良好 黒色	
248	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 3.5 I 3.1 J 2.0 K 1.0×0.6	完			密 良好 明褐色	



第142図　城址関係出土遺物実測図22

第83表　城址関係出土遺物一覧表23

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備考
249	土玉	Ⅰ郭	第141図	H 2.1 I 2.4 J 2.1 K 0.6×0.3				密 普通 暗褐色	下欠損
250	土玉	Ⅰ郭	第142図	H 2.4 I 2.4 J 1.5 K 0.5	完			長石、石英 良好 暗褐色	
251	土玉	Ⅰ郭第4号堀	第142図	H 2.1 I 1.9 J 1.9 K 0.4	完			長石、小石 普通 暗褐色	
252	土玉	Ⅰ郭	第142図	H 2.3 I 2.2 J 1.7 K 0.6×0.4	完			密 良好 暗茶褐色	
253	土玉	Ⅰ郭第2号堀	第142図	H 1.9 I 1.8 J 1.7 K 0.4	完			密 良好 黒褐色	

第84表　城址関係出土遺物一覧表24

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備考
254	土玉	Ⅰ郭	第142図	H 2.7 I 2.7 J 2.6 K 0.6×0.3	完			密 良好 明橙褐色	
255	管玉片	第18号掘立	第142図	H 7.3 I 4.0 J 2.8 K 1.8				緻密 良好 明褐色	No.4　40g
256	土製紡錘車片	Ⅰ郭第5号堀北側	第142図	A 5.3 B 2.7	1／4			砂粒 良好 褐色	30g
257	管玉	第4号掘立	第142図	H 7.2 I 2.6 J 2.5 K 0.6	完			密 良好 暗褐色	40g
258	管玉	Ⅰ郭	第142図	H 6.5 I 6.5 J 3.5 K 1.9				密 良好 明褐色	No.96　60g
259	管玉	Ⅰ郭	第142図	H 4.6 I 1.0 J 1.0 K 0.5				密 良好 茶褐色	
260	土師質坏	第18号掘立	第143図	A 15.0 B 3.7	体部1／2	口縁部ヘラ削り 体部ヘラ削り		雲母、砂粒 良好 赤褐色	口縁部欠損 口縁部一部煤付着
261	土師質土器	第4号掘立	第143図	A 12.2 B 3.8 C 7.5		体部回転ヘラ削り 内面ヘラ削り 底部糸切り		雲母、小石、砂、粗 良好 暗褐色	No.18 体部～口縁部一部欠損 内面煤付着

10）その他の土器（第143図、第84・85表）

第143図は、中世の遺構より出土した土師器、須恵器、カワラケなどである。No261、262, 265, 266以外は、土師器と須恵器である。No260は、土師器坏で球型の体部で、口唇部は斜めに整型されている。No261は、カワラケで直線的に外傾する体部に、口縁部内外面から削り出され口唇部は丸く整型されている。No262は、カワラケで直線的に外傾する体部で、口唇部は水平に整型されている。底面内面は、削り出しである。No263は、土師器坏片である。No265は、カワラケ片である。低い器高で、直線的に外傾する体部で、口唇部は内外面より削り出されている。No266は、カワラケ片で体部が直線的に外傾している。No264は、カワラケ片である。No267は、須恵器高台付坏で高台部を欠損している。口縁部は、やや外湾している。No268は、土師器坏で低い陵を有し、口縁部は内傾している。No269は、土師器坏で直立する口縁部を有しており、体部は黒色処理が施されている。No270は、土師器甕である。口縁部は、外傾している。No271は、須恵器坏蓋片であり、No272は、土師器高坏器台片である。

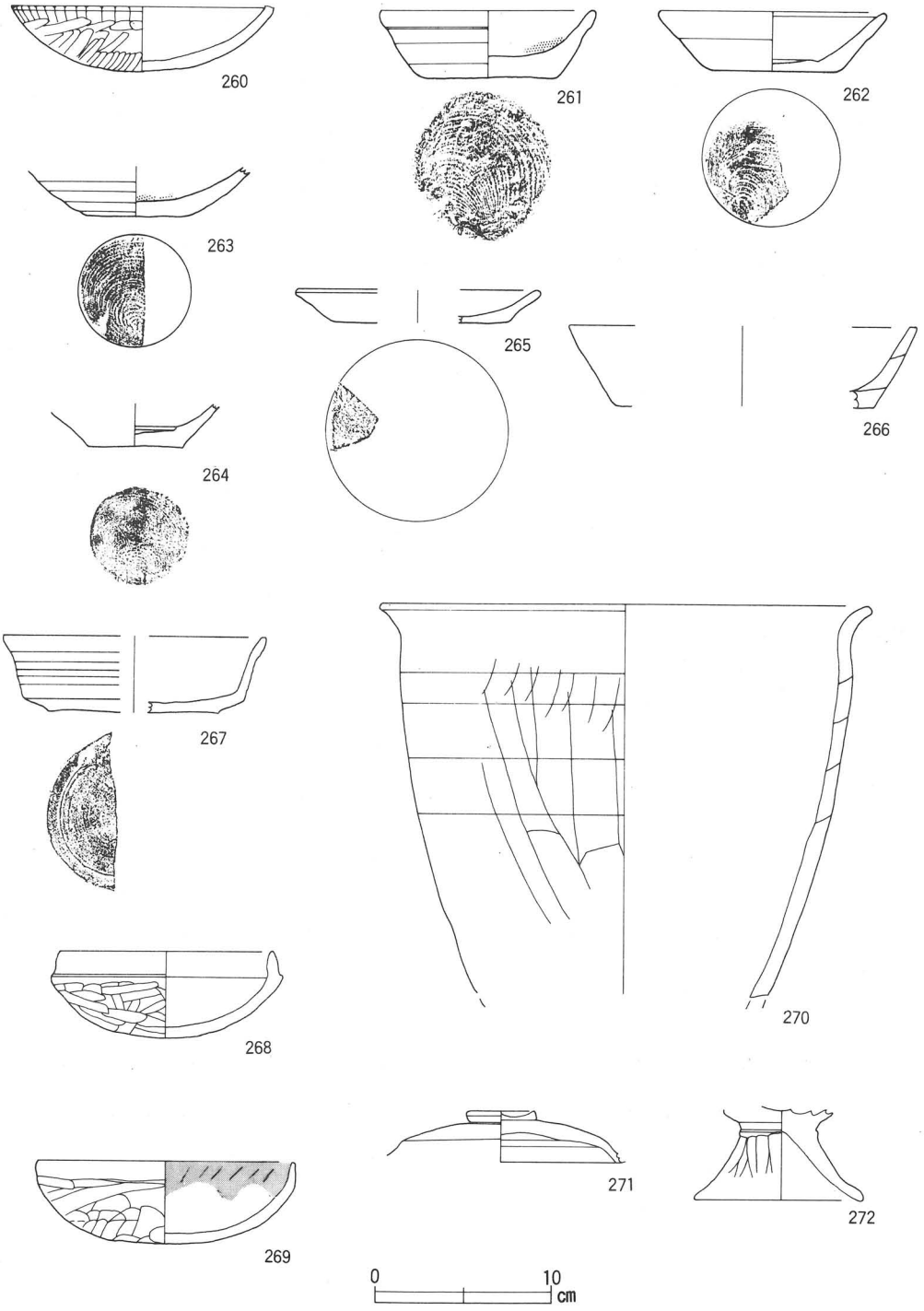
11）石造物（第144～155図、第86・87表、図版52・53）

石造物としては、Ⅰ郭とⅡ郭の堀より出土した五輪塔と方篋印塔がある。五輪塔は、古屋敷遺跡で出土した石造遺物中で最も多く出土しているが、完全な状態での出土はなく全て各輪ごとの出土である。最も注目されるのは、Ⅱ郭西側外堀より30点の石造物が１ヶ所より多量に出土したことである。以下に、五輪塔と方篋印塔に分けて記述する。

五輪塔（第144～155図、第86～92表）

五輪塔としては、前述のように完全な五輪塔（地、水、火、空、風の各輪が揃ったもの）は無く、各輪がバラバラの状況で出土している。なお、空風輪は一石で造られている。石質としては砂岩と凝灰岩とがある。砂岩質は、保存状況が比較的良好であるが、凝灰岩質は風化が著しいものが多く出土している。総数は56基である。56基の内容は、地輪７基、水輪14基、火輪16基、空風輪19基で合計56基となる。地輪のみが、きわめて少量であることが判明する。

地輪は、No273～277（第144図）とNo278, 281（第145図）の７基である。図示したように、上面と下面は不一致であり、その径と各面、高では異なった計測値を示すものが多い。７基中で、比較的良好な型態を有するものとしてはNo275がある。またNo274は、カイセン虫孔が上面に多数ある。石質は、砂岩質が中心であるが、砂岩質以外の石質を用いている場合もある。各輪の法量は、



第143図　城址関係出土遺物実測図23

第85表　城址関係出土遺物一覧表25

No.	名称	出土地点	挿図No.	法量(cm)	完存率	器型の特徴	整形等の特徴	胎土、焼成、色調	備　考
262	土師質土器	第49号掘立	第143図	A (13.2) B (3.4) C (7.3)		口縁部ヘラナデ、ヘラ削り体部回転ヘラナデ底部回転糸切り		密 良好 暗褐色	No.3 底部～口部にかけて1/4残
263	土師質土器片	Ⅰ郭第2号堀西側	第143図	A (6.0) B (2.6)	1／2	体部ロクロ整形 内面ヘラナデ、底部横位回転糸切り	ヘラナデ	雲母、小石、砂粒 良好 暗褐色	
264	坏型土器土師質	第32号掘立	第143図	B (2.5) C (5.6)		体部ヘラナデ 底部回転糸切り		雲母、砂、粗 良好 明褐色	No.18 内面磨滅大
265	土師質土器坏片	第17号掘立	第143図	A (14.0) B (1.9) C (9.6)		体部回転ヘラナデ 内面ナデ 底部糸切り		密 良好 橙褐色	1／8程度残 内外に煤付着 No.16
266	土師質(浅鉢片)	第21号掘立	第143図	A (20.0) B (4.6) C (15.0)		口縁部回転ヘラ削り		小石、砂粒 良好 明茶褐色	器面が著しく磨滅、内面もやや磨滅 No.1
267	須恵器高台付坏片	第45号掘立	第143図	A (15.0) B 4.3 C 9.6		体部回転ヘラナデ 内面ヘラナデ 底部回転ヘラ削り		小石、長石、砂粒 良好 灰褐色	体部～口縁部にかけて½に残 PNo.4 高台部欠損
268	土師器坏	Ⅰ郭第2号堀	第143図	A 12.2 B 4.9		口縁部ヘラナデ 内面ナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ		砂、密 良好 内外黒色	1／4欠損 口縁部一部煤付着
269	土師器坏	Ⅰ郭第2号堀	第143図	A 14.0 B 4.7	1／2	口縁部ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ底部ヘラ削り後ヘラナデ	内面ナデ	砂粒、密 良好 黒色、褐色	内外黒色処理 Ⅰ郭との接合資料
270	土師器甕	Ⅰ郭第2号堀	第143図	A 28.0 B 22.4		口縁部横ヘラナデ 体部上位左下りヘラ削り以下縦ヘラ削り後にヘラナデ、内面ナデ		長石、石英、雲母 良好 暗褐色	口縁部1/2残 体部1/3欠損 器面磨滅の為整形不明な部分多い
271	須恵器坏蓋	Ⅰ郭西側土塁	第143図	B 2.9		体部内傾気味に外反宝珠は貼り付け		小石、雲母、砂粒 良好 灰褐色	
272	土師器器台	Ⅰ郭第5号堀	第143図	B 5.3 C 9.7		台上部ヘラ削り 脚部縦のヘラ削り 底部ナデ		砂、密 良好 赤褐色	No.58

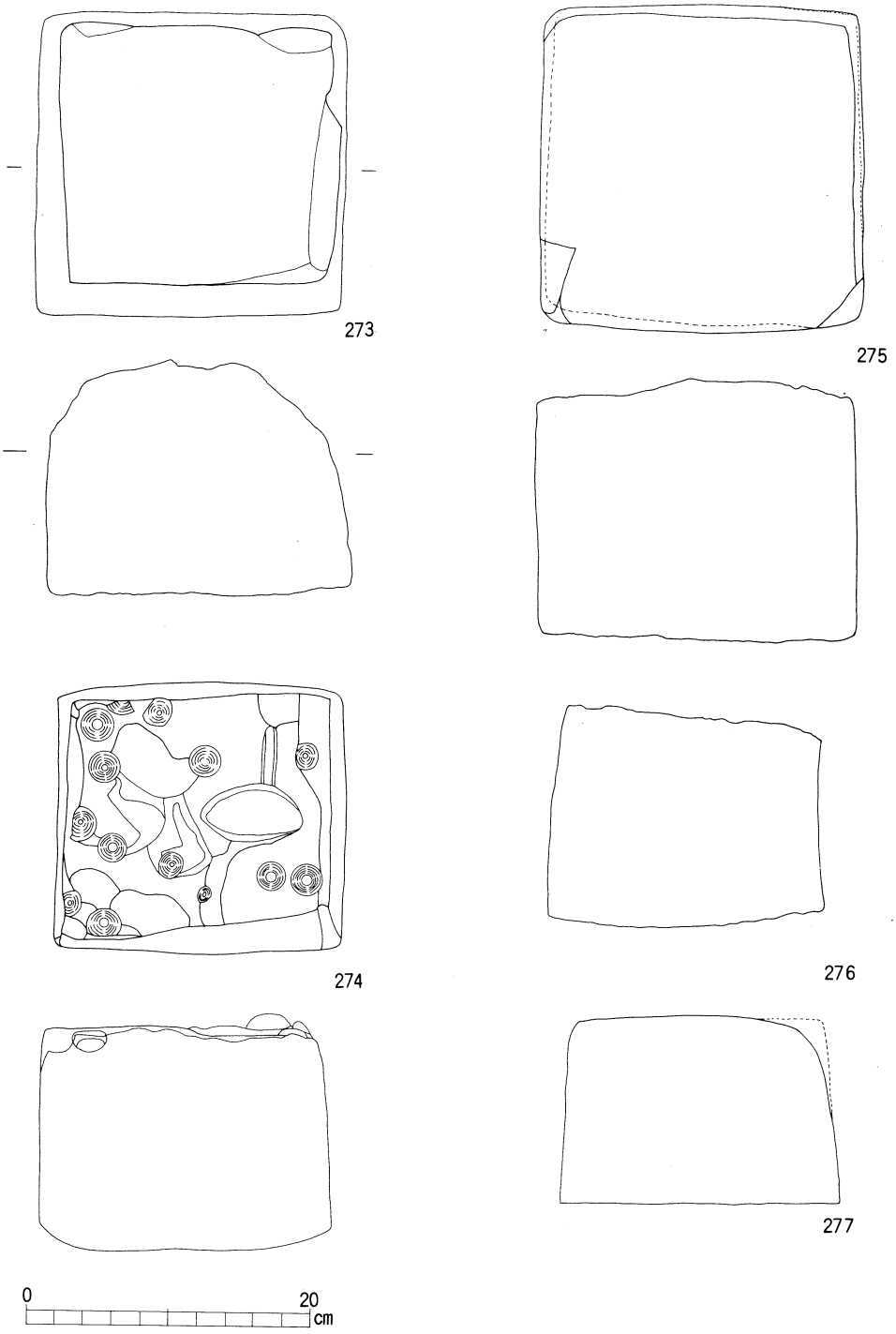
第82表に示した。

水輪は、No279～283（第145図），No284～289（第146図），No290, 291と294, 295（第147図）である。水輪は、No279やNo283などのように、最大径が中央部に位置し上面と下面が、水輪の中央部に置かれしっかりした型態をなすものと、No284やNo286などのように、幅の最大径が下位にあり上面と下面が、中央より左右のどちらかに寄っているため、不整型をなすものとがある。

火輪は、No292, 293, 296, 297（第147図），No298～303（第148図），No308, 309（第149図），No310～313（第150図）である。火輪を見ると、左右の高さと軒高がほぼ同等で、上面が正方形で孔が中心部に穿たれ、しっかりした型態を有する火輪（No296, 299, 302）と、低い輪高で幅広の型態をなす火輪（No298）と、左右の高さ、軒高、上面径、孔などが一致していない火輪（No292, 296, 302, 308），などの型態に分けられる。佛種子は刻されていないのが中心で、No302のように上部に種子を有するのは、この１点のみである。この輪型式の変化は、時期的な変遷過程と一致しているものと判断される。

空風輪は、No304～307（第149図），No314, 315（第150図），No316～319（第151図），No320～322（第152図），No323, 324（第153図）で、合計19基である。石質は、砂岩と凝灰岩とに分かれ且型態的な相異を供なっている。砂岩質の空風輪は、No304, 306, 315などのように、縦長で空風輪の幅は横長となり、不整型ではあるが扁平となっている。正面と裏面は、No321のように比較的しっかりと整型されているものと、No304, 305のように一部を整型したものと、No315のように無整型のものなどがある。空風輪を全体で見ると、No304, 306, 315のように、比較的しっかりした型態のものと、No305, 318, 321のように不整型なものとが所在している。また、空輪と風輪との連結部分は、同じ幅と深さであるものと幅が左右異なるものとがある。この場合、空輪は不整型となる。No319が、後者の好例である。また、No328, 334～336（第154, 155図）も砂岩質である。

凝灰岩の空風輪は、砂岩質のものより大型で、各輪が隅丸方形状を呈するものが多いが、中には円形に近い型態を有するものもある。全体的には、高さより幅広でしっかりした正面観を有するもの（第152図、No320）と、風輪より空輪が小さく造られているもの（第151図, No317, 第153図、No324など）とがある。空風輪の接合部は、広く表現されている。梵字は、第151図、No317, 第153図、No324，第153図、No323, 324に刻されているが、石質の関係上風化が著しく判読出来ないのがほとんどである。判読された梵字からは、大日如来五大真言が刻されているが、一面であったり（第151図、No317）、２面であり（第153図、No323）、４面であったり（第153図、No324）一様ではないが、砂岩質の五輪塔よりほとんどの五輪塔に刻されている所に、大きな相異がある。



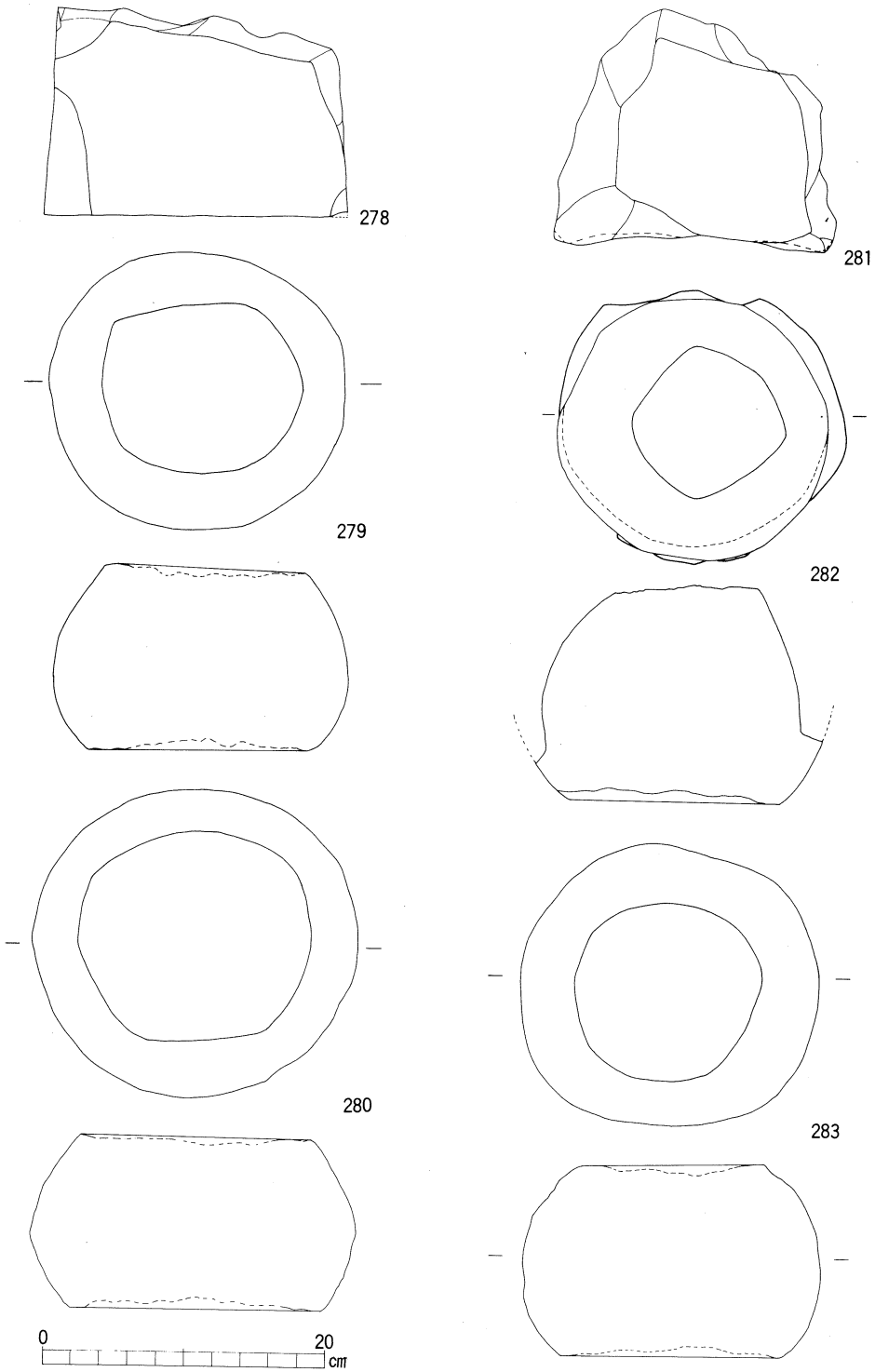
第144図　五輪塔実測図１

第86表　五輪塔一覧表（地輪）

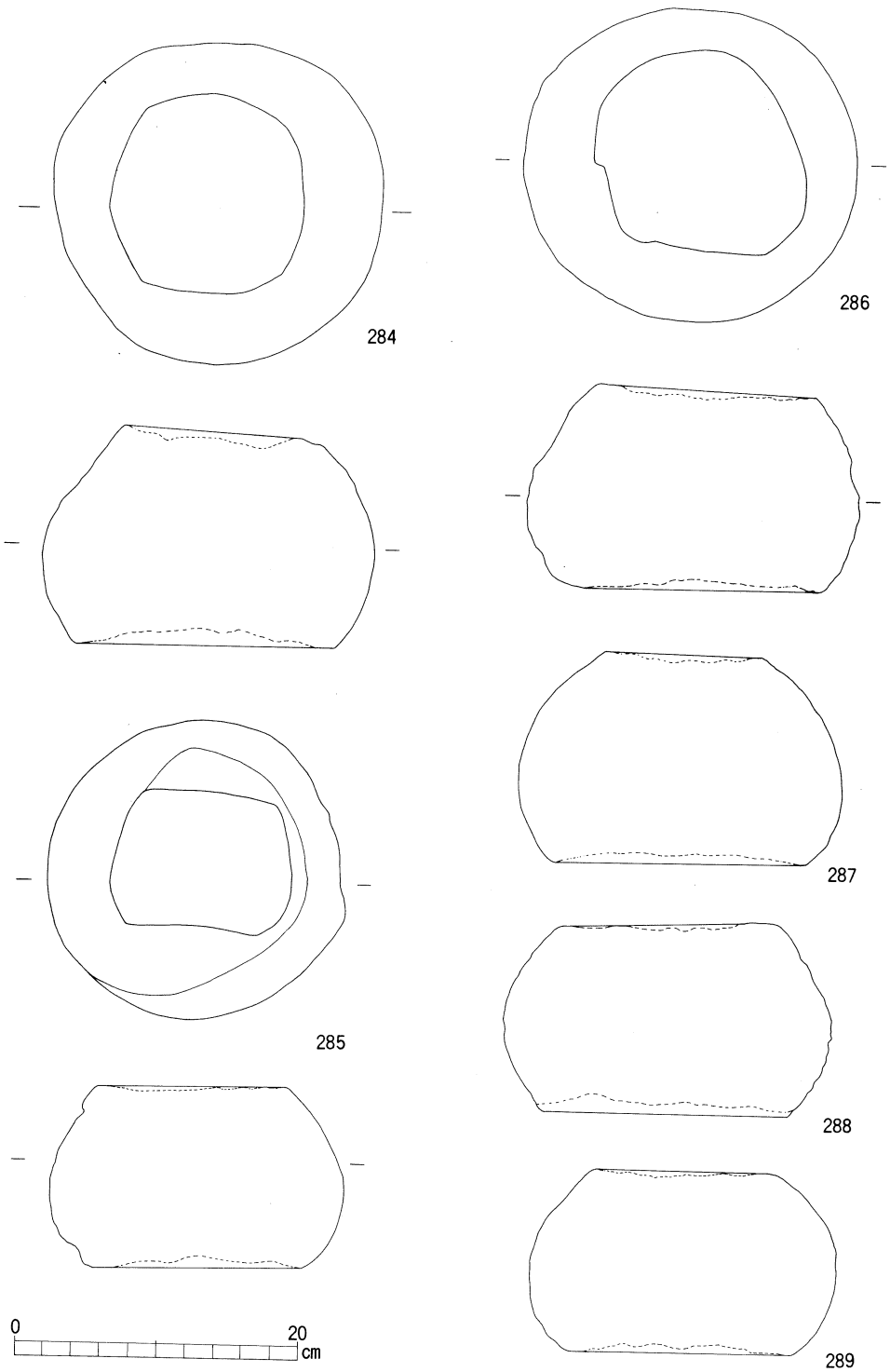
No.	出土地点	法量（cm） 上径 縦	横	下径 縦	横	高	銘文	種子	石質	挿図No.	図版No.	備考
273	Ⅰ郭第1号堀	18.6×18.3		21.3×21.0		16.6				第144図		No.. 4
274	Ⅰ郭第1号堀	16.0×18.7		19.0×20.3		15.7			砂岩質	第144図		No..27
275	Ⅰ郭第1号堀	22.2×22.1		22.5×22.3		18.3				第144図		No..24　最大形230
276	Ⅰ郭第1号堀	17.1×18.3		19.5×19.2		15.3			砂岩質	第144図		No..23
277	Ⅰ郭第1号堀	15.5×18.0		19.5×19.5		13.1			砂岩質	第144図		No.. 8
278	Ⅰ郭第1号堀			21.6×21.6		14.7			砂岩質	第145図		No..17　上部欠損
281	Ⅰ郭第3号土壙			19.7		16.7				第145図		No..1

第87表　五輪塔一覧表（水輪）

No.	出土地点	法量（cm） 上面径	下面径	最大径	上内径	下内径	高	種子	石質	挿図No.	図版No.	備考
279	Ⅰ郭第1号堀	14.2×12.0	16.0×15.5	21.0×19.5	0.7	0.7	13.0×12.5		砂岩質	第145図		No.. 8
280	Ⅰ郭第1号堀	16.4×15.0	17.4×16.5	23.1×21.9	0.8	0.5	12.3×12.1		砂岩質	第145図		No.. 2
282	Ⅱ郭第12号堀	10.4×0.9	15.0×16.0				15.3		砂岩質	第145図		No..22
283	Ⅱ郭第8号堀								砂岩質	第145図		No.. 5
284	Ⅱ郭第12号堀									第146図		No..20
285	Ⅱ郭第12号堀	10.8×9.8	16.0×15.5	20.7×21.6					砂岩質	第146図		No..25
286	Ⅱ郭第12号堀	15.3×13.8	18.5×18.0	23.5×22.1			14.5×13.8		砂岩質	第146図		No..14
287	Ⅱ郭第12号堀	11.1	18.0×17.2	23.1			14.7×15.0		砂岩質	第146図		No..18
288	Ⅱ郭第12号堀	15.0×13.8	17.1×16.2	23.1			13.7×13.2		砂岩質	第146図		No..11
289	Ⅱ郭第9号堀	12.0×10.2	15.9×15.6	21.6×21.3			13.0×12.9		砂岩質	第146図		No.. 3
290	Ⅱ郭外堀	15.5×14.5	18.0×16.0	23.5×21.2			11.2×11.1		安山岩	第147図		No.. 6
291	Ⅱ郭北西外堀						13.9×14.4		砂岩質	第147図		No.. 3 最大径は下位
294	Ⅱ郭第12号堀	15.5	17.2×16.8	24.0×24.5					砂岩質	第147図		No.29 最大径は下位
295	Ⅰ郭第1号堀	15.0	16.2	22.1			14.5×14.5		砂岩質	第147図		No.. 7 最大径は下位



第145図　五輪塔実測図 2



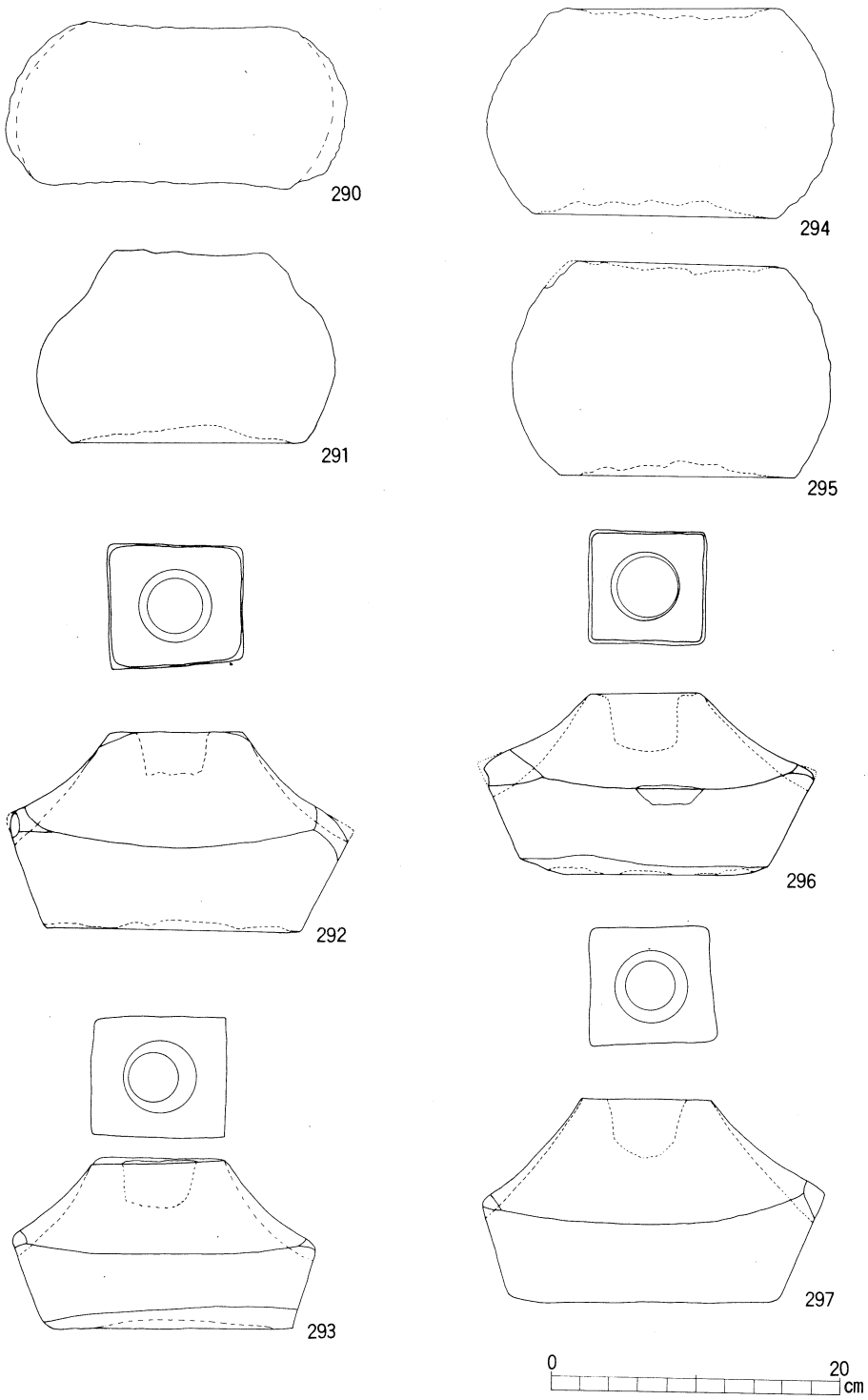
第146図　五輪塔実測図 3

第88表　五輪塔一覧表（火輪）

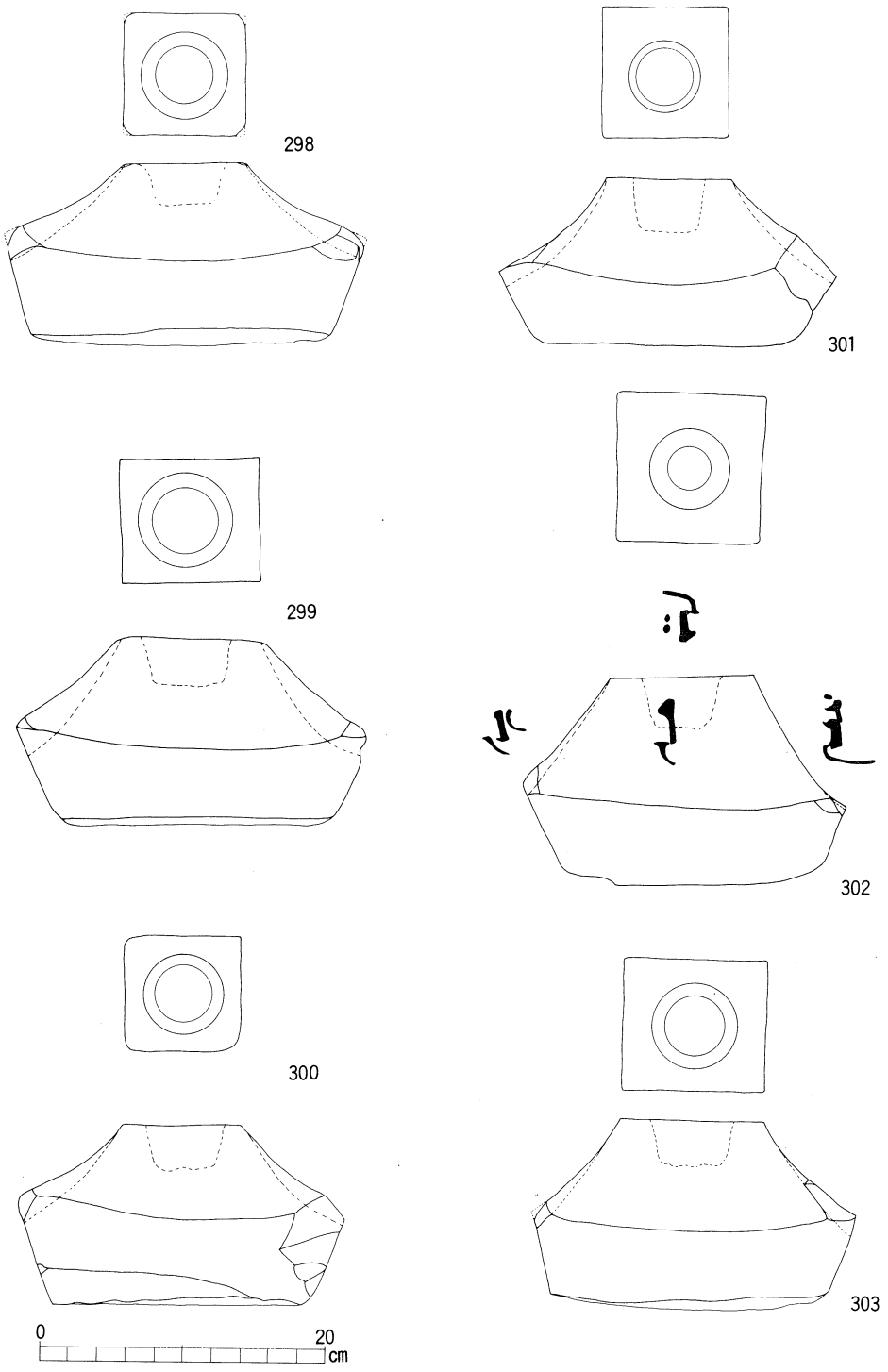
No.	出土地点	法量（cm）					孔径	種子	石質	挿図No.	図版No.	備考
		上径	下径	軒径	軒高	反						
292	Ⅰ郭第1号堀	9.1×8.4	18.0	23.4	7.0×6.5	0.5	5.1×3.0		砂岩質	第147図		No.1
293	Ⅰ郭第1号堀	9.3×8.4	16.5×17.1	21.0	6.3×5.5		5.0×3.3		砂岩質	第147図		No.2
296	Ⅰ郭第1号堀	7.4×7.7	17.1×16.9	22.8	7.1×7.6	0.6	4.8×4.0		砂岩質	第147図		No.5
297	Ⅰ郭第1号堀	8.4×8.1	18.6×18.9	23.7	7.0×7.5	0.3～0.6	5.0×4.0		砂岩質	第147図		No.3
298	Ⅱ郭第12号堀	8.5	21.0×21.3	25.0(25.5)	7.8×7.6		6.2×3.0		砂岩	第148図		No.3
299	Ⅱ郭第12号堀	8.7	18.0×19.5	24.3	7.0	0.3	6.5×3.2		砂岩質	第148図		No.5
300	Ⅱ郭第12号堀	8.1	18.6×19.1	22.6(23.1)	7.5×(7.2)		5.5×3.3		砂岩質	第148図		No.7
301	Ⅱ郭第12号堀	8.7		23.8	5.0	0.3～0.4	5.0×4.0		砂岩質	第148図		No.10
302	Ⅱ郭第12号堀	10.0×10.5	17.1×18.0	22.5	5.3×7.1				砂岩質	第148図		No.16
303	Ⅱ郭第12号堀	10.0 (9.9) ×9.3	19.5×19.1	22.8	6.6×6.9	0.3	6.0×5.7		砂岩質	第148図		No.28
308	Ⅱ郭第7号堀	{8.17 9.6}×9.3	17.1×16.5	24.5	7.5×7.8	0.6	4.5×4.2		砂岩質	第149図		No.6
309	Ⅱ郭第8号堀西側	9.1×9.3		24.1	6.5×6.3	0.5～0.6	5.1×3.6		砂岩質	第149図		No.7
310	Ⅱ郭第12号堀	{9.0 8.7}×{9.6 9.3}	19.8×19.2	24.0×23.4	7.0(7.5)	0.5～0.6	4.8×3.3		砂岩質	第150図		No.21
311	Ⅱ郭第12号堀	9.4	19.2	25.5	7.3	1.0	5.5×3.2		砂岩質	第150図		No.9
312	Ⅱ郭第12号堀	9.5	19.0×17.8	22.2	4.1～4.5	0.3～0.4	5.0×4.0		砂岩質	第150図		No.13
313	Ⅱ郭第9号堀	8.6×9.6	19.2		12.0×12.5	0.3			砂岩質	第150図		No.2

第89表　五輪塔一覧表（空風輪1）

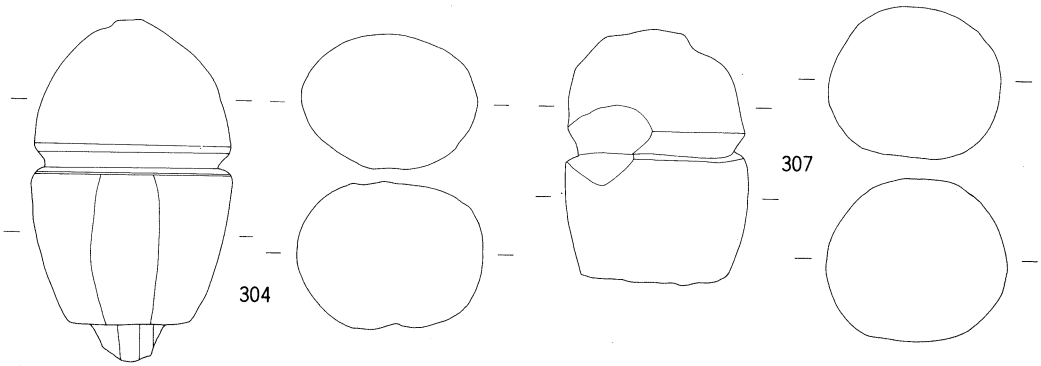
No.	出土地点	全長	空輪			風輪			種子	石質	挿図No.	図版No.	備考
			長	幅×厚	風長	幅	厚	差込部					
304	Ⅱ郭第8号堀	22.5	18.4		9.7			2.4×4.5×4.0		砂岩質	第149図		No.1
305	Ⅱ郭第8号堀	24.6	11.5	上13.2×11.2 下 8.7×8.3	12.6	13.5×11.5		6.7×4.9×0.7		砂岩質	第149図		No.2
306	Ⅱ郭第8号堀	23.2	10.7	上12.5×10.6 下 8.2×6.5		下12.9×11.5		1.7×4.0×4.4		砂岩質	第149図		No.3 接合部 11.0×9.3
307	Ⅱ郭第8号堀西側	16.8	8.5	上11.8×10.6 下 9.7×8.0	8.3	下11.5×10.5				砂岩質	第149図		No.6 差込部欠損
314	Ⅱ郭第12号堀			16.0×10.0×10.5							第150図		No.15
315	Ⅱ郭第7号堀	22.8	10.5	上11.8×8.8 下 7.5×6.6	9.6	下11.5×8.8		5.1×4.2×3.0		砂岩質	第150図		No.8 接合部 10.2×7.5
316	Ⅱ郭第7号堀	20.7	9.2	14.6×7.5×2.4	11.4	14.8×13.9				凝灰岩	第151図		No.4 接合部 14.5×0.7
317	Ⅱ郭第7号堀	24.6	9.0	9.0×16.8	15.6	16.0×16.0				凝灰岩	第151図		No.10 接合部 0.6
318	Ⅱ郭第7号堀	22.9	9.6	上11.7×10.5 下 7.8×1.3	10.4	12.3×11.4		24.0×5.7×4.7		砂岩質	第151図		No.1

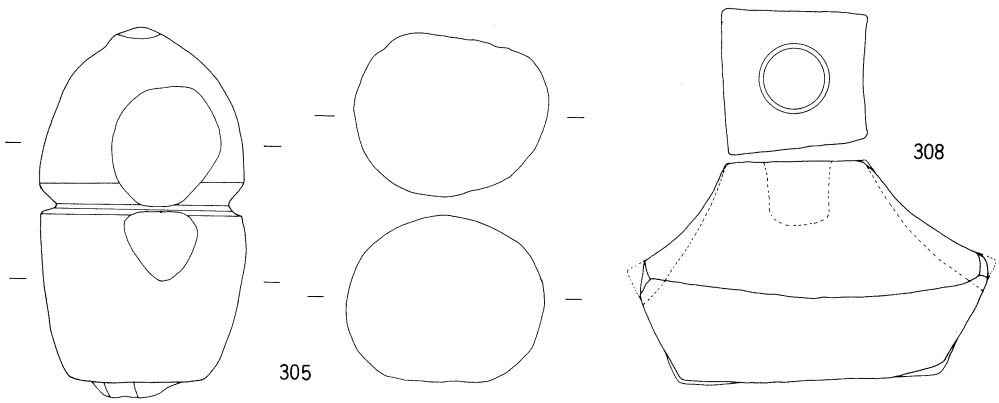


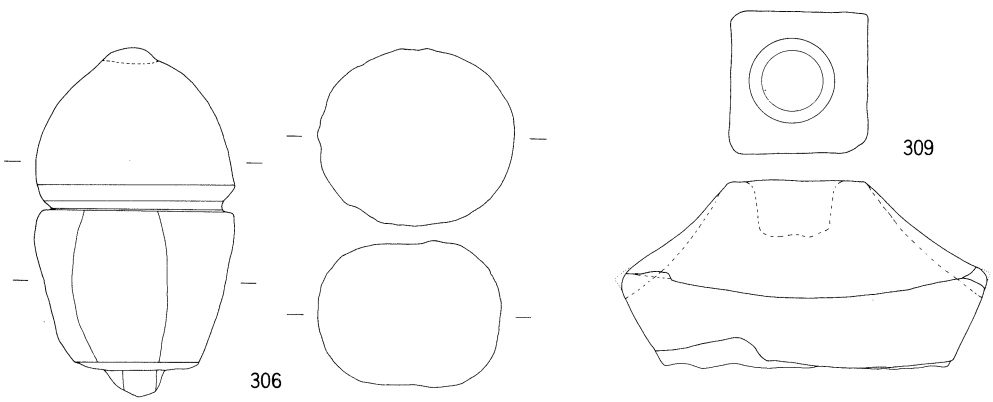
第147図　五輪塔実測図 4

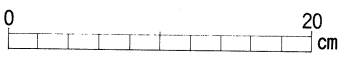


第148図　五輪塔実測図 5

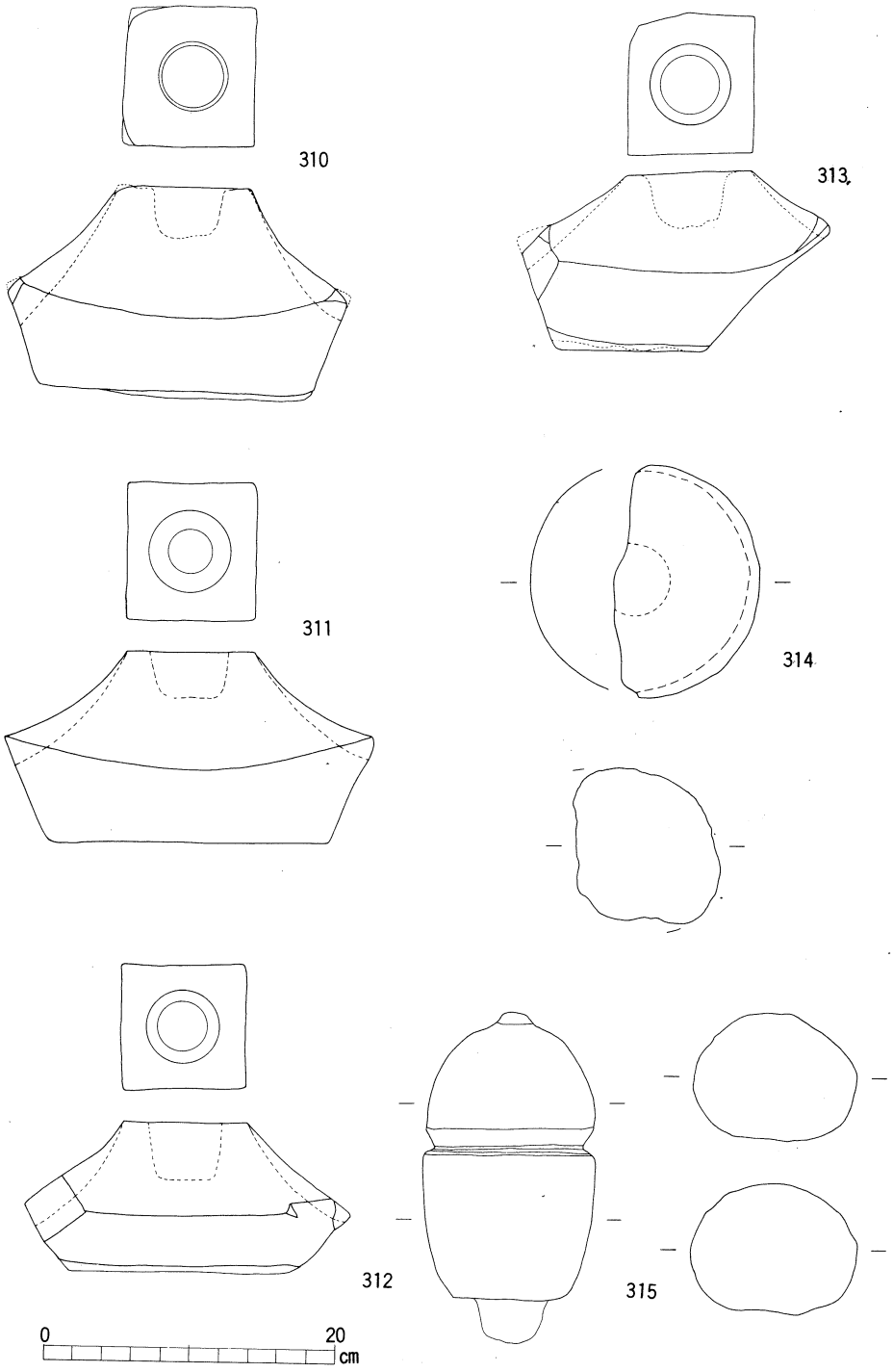




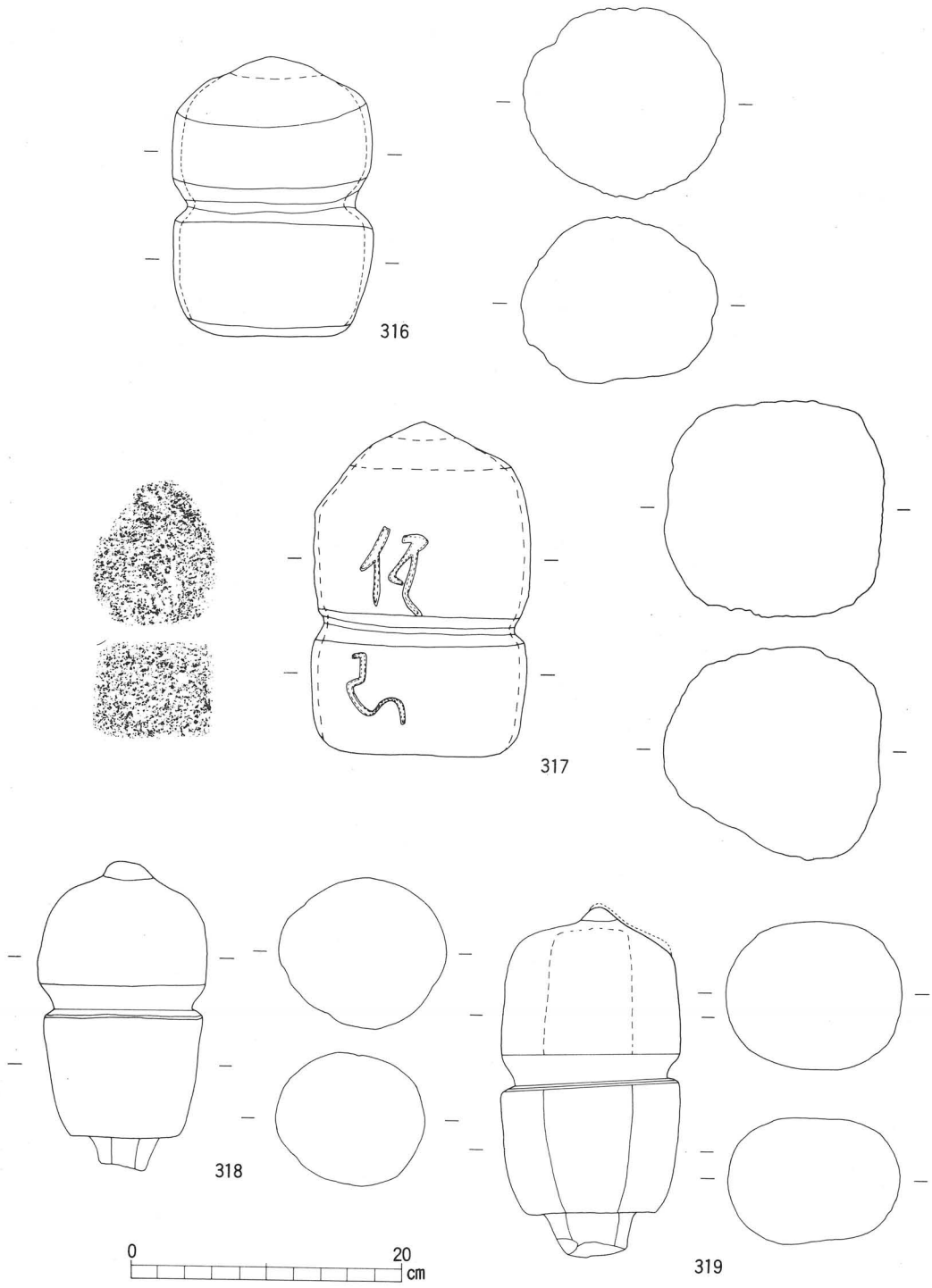




第149図　五輪塔実測図 6



第150図　五輪塔実測図７



第151図　五輪塔実測図 8

第90表　五輪塔一覧表（空風輪２）

No.	出土地点	全長	空輪			風輪			種子	石質	挿図No.	図版No.	備考
			長	幅×厚	風長	幅	厚	差込部					
319	Ⅰ郭 第１号堀	25.6	25.6	上 9.6×9.9 下12.6×9.3	11.6	17.9×10.9		6.9×5.9×3.3		砂岩質	第151図		No.6 宝珠 1.1×3.5
320	Ⅱ郭 第12号堀	26.1	10.5	15.5×17.5×12.5	15.6	17.4×15.5					第152図		No.17
321	Ⅱ郭 第12号堀	24.8	10.2	上14.4×9.9 下 9.3×6.9	11.6	14.4×10.0		3.0×6.0×6.8 同内径0.5		砂岩質	第152図		No.19 接合部 12.9×9.3
322	Ⅱ郭 第12号堀	14.2	9.3	上11.5×10.0 下14.8	4.9	下14.8					第152図		No.12 最大巾 16.2
323	Ⅰ郭 第１号堀	21.7	9.6	12.1×10.0×12.3	12.1	10.0×10.4	15.8				第153図		No.9 最大巾 空 16.1 風 16.9
324	Ⅰ郭 第１号堀	20.8	7.2	上 9.0 下13.0	13.7	下9.0					第153図		No.10 最大巾 空 16.5 風 15.0
328	Ⅰ郭 第１号堀	26.3	10.5×10.8	11.7×11.2	12.3 12.6	11.4×10.6		5.2×3.0×2.7		砂岩質	第154図		No.13
332	Ⅱ郭 第１号堀	高13.2		長25.0	3.0						第155図		No.4
334	Ⅱ郭 第９号堀	12.3						6.3×1.7		砂岩質	第155図		No.4
335	Ⅱ郭 第12号堀	14.5	12.6	下8.5×7.0				5.5×5.1×1.9			第155図		No.1
336	Ⅱ郭 第12号堀	14.1		12.7						砂岩質	第155図		No.2

第91表　方篋印塔基礎一覧表

No.	出土地点	法量（cm）							石質	挿図No.	図版No.	備考
		全高	上径	下径	高	1段	2段	3段				
325	Ⅱ郭 第12号堀	20.7	24.4×24.5	25.4×25.0	14.5	21.6×21.8 ×1.8	20.0×19.8 ×1.8	18.2×18.4 ×1.7	砂岩質	第154図		No.1 基礎
326	Ⅰ郭東南谷頭部	11.5	13.5						砂岩質	第154図		No.30 最大径17.0cm
331	Ⅱ郭 第９号堀	19.0			方立 9.0×8.4	11.4×10.5 ×3.0	14.4×12.9 ×3.6	17.4×19.2 ×4.1	4段 13.4×15.3×3.3	第155図		No.1 砂岩質 孔径6.9 最大径33.4

第92表　方篋印塔相輪　石棒一覧表（その他の石造物一覧表）

No.	出土地点	全長	相輪						石質	挿図No.	図版No.	備考
			上径	下径	輪高	全長	上径	下径				
327	Ⅰ郭 第１号堀	10.6			3.0×3.5 ×2.7					第154図		No.15
329	Ⅰ郭 第１号堀	17.4	8.6×13.1 ×10.5	8.9×19.2 ×12.5						第154図		No.11
330	Ⅰ郭 第１号堀	9.1	5.7×15.3 ×13.5	3.3×10.8 ×10.0						第154図		No.14

宝篋印塔（第154・155図、図版53）

宝篋印塔としは、基礎、笠、相輪の部分が出土したのみである。基礎は、第154図、No325があり、高くしっかりした基礎に段を3段造り出している。梵字は、刻されていない。第155図No331は、笠の破片である。方立は、大きく造り出され段は4段である。笠上段の孔は、やや小さく穿たれている。第154図、No326は、笠で方立の大部分を欠いており、No321より小型の笠である。段は4段である。第154図、No327は、相輪片で上下を欠いている。

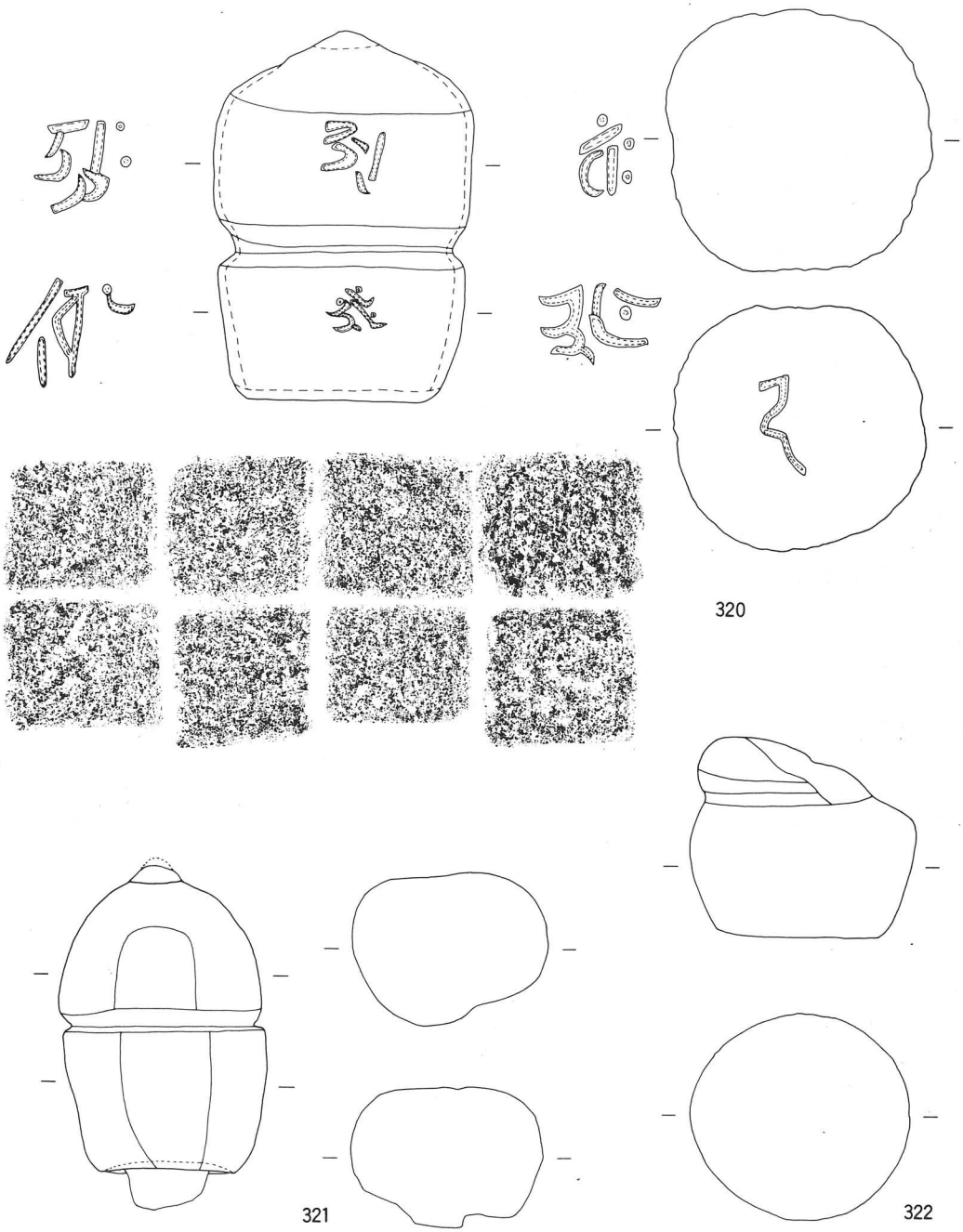
その他の石造物

五輪塔と宝篋印塔以外の石造物を、一括して記述する。第155図、No333は、石臼片である。同図No332は、用途不明であるが表面が火災を受け黒く変色している。建物址等の礎石ではなかろうか。第154図、No329,330の2点は、大型と小型であるが同一型態をなすもので、石棒片と判断されるが、子細は不明である。

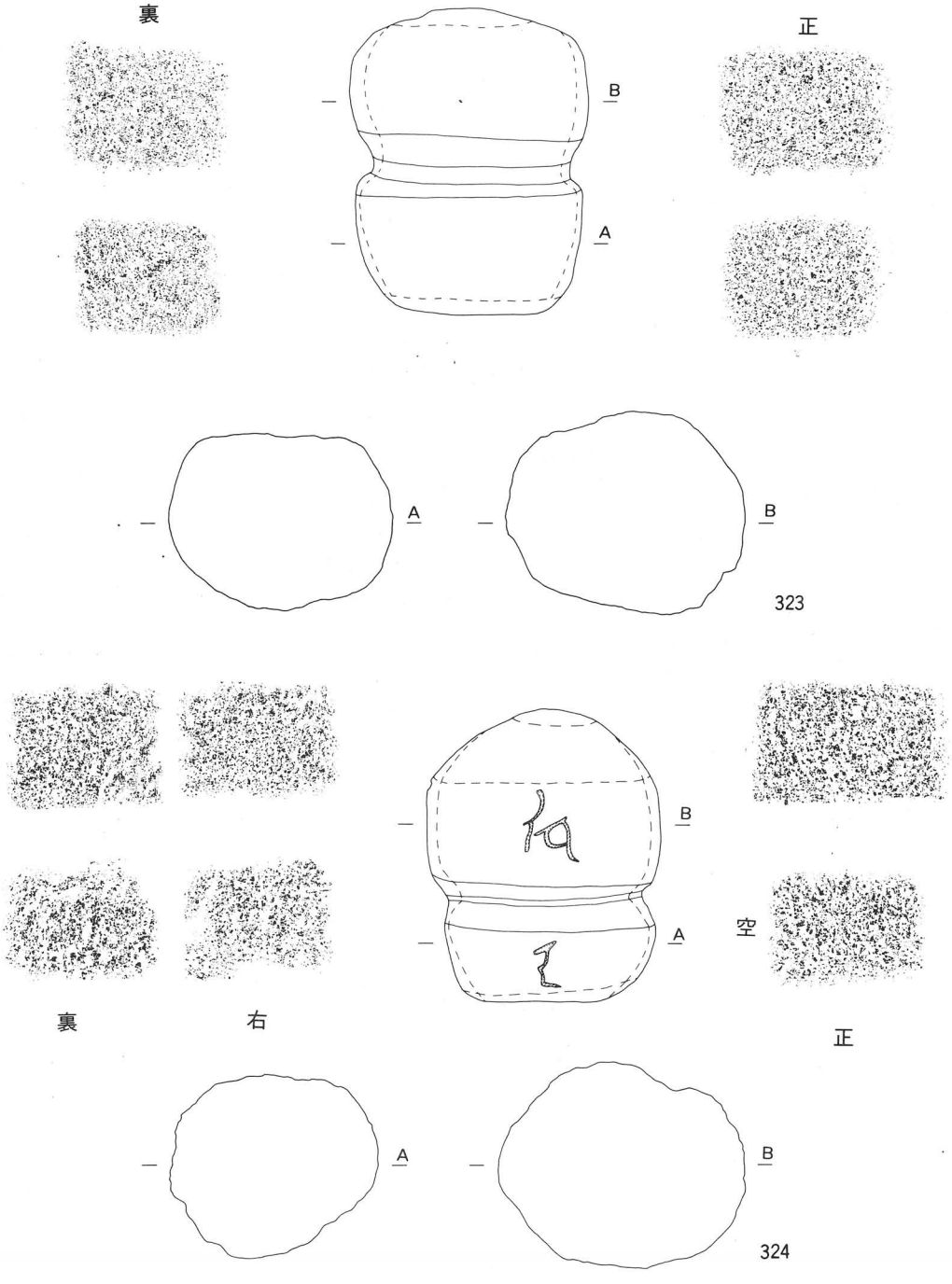
12）古銭（第156図、第93表、図版51）

古銭としては、第156図に示したように合計36枚出土している。36枚の種類は、永楽通寶、開元通寶　治平元寶、開元通寶、元豊通寶、威道元寶、朝鮮通寶、寛永通寶などである。これらの数量は、永楽通寶が8枚、開元通寶が1枚、治平元寶が2枚、開元通寶が3枚、元豊通寶が2枚、威道元寶が1枚、朝鮮通寶が1枚、寛永通寶が8枚、銭名不明が10枚である。寛永通寶は、江戸時代の古銭であり、他は中世の古銭である。寛永通寶以外では、永楽通寶のみが単独で8枚出土しているのに対し、他は6種類合計で10枚であることから、永楽通寶の流通量が他の古銭より多いことを示しているものと判断される。また、No350～355までの6枚は、第1号墓壙より出土した古銭であり、No360,361の2枚は鉄銭である。この鉄銭2枚以外は、全て青銅品である。

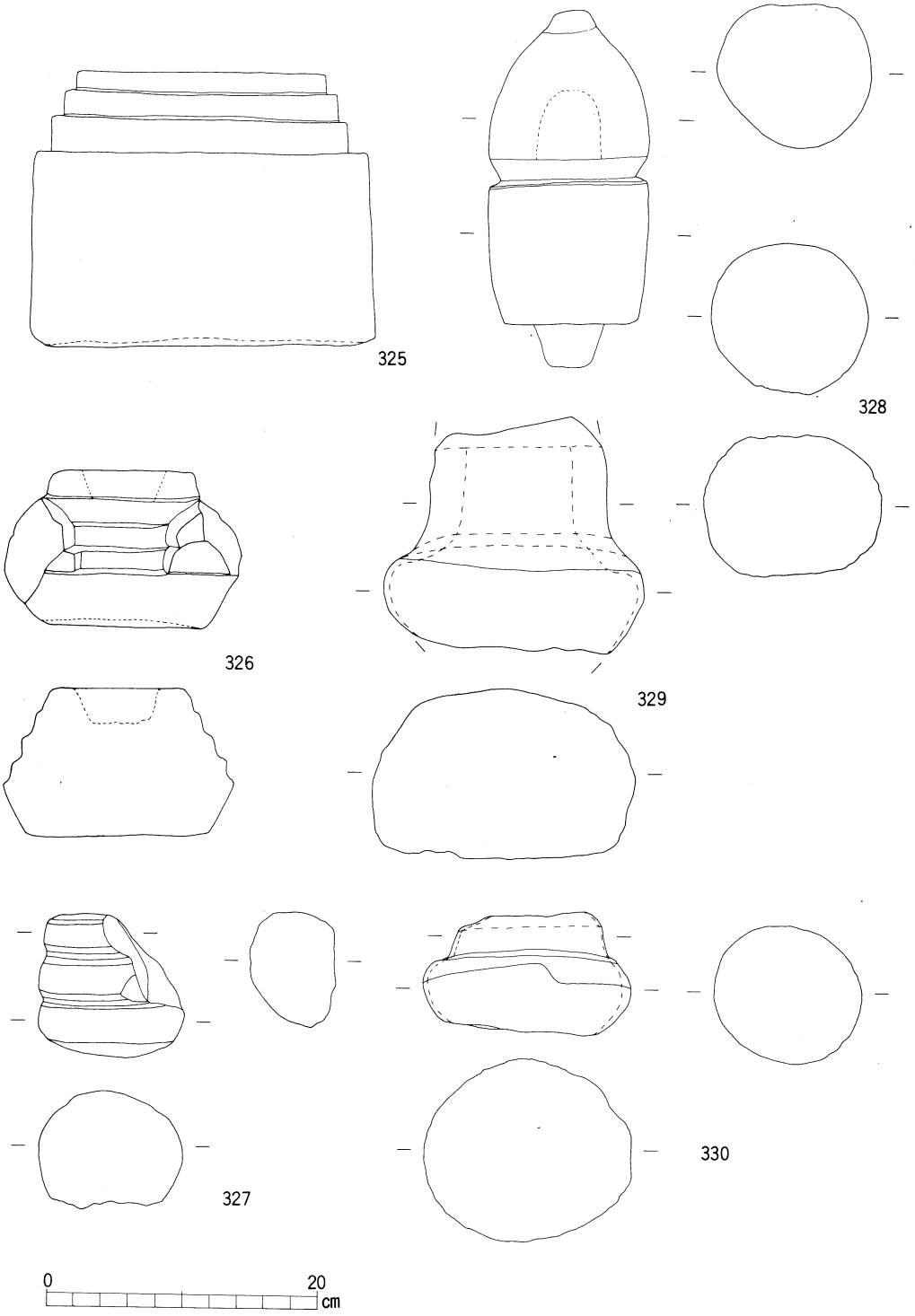
古銭径としては、永楽銭が径2.4～2.5cmであるのに対し重さは2.0～2.8gとバラバラである。寛永通寶は、径2.3～2.5cmであるのに重さ2.2～3.2gとバラバラである。また、これ以外の古銭は径2.3～2.4cmであるのに対し重さは、2.2～3.5gを計測する。この差は、鋳造年代や錆などにより異なった計量値と判断される。また、No368の寛永通寶は背面に「文」字を刻している。



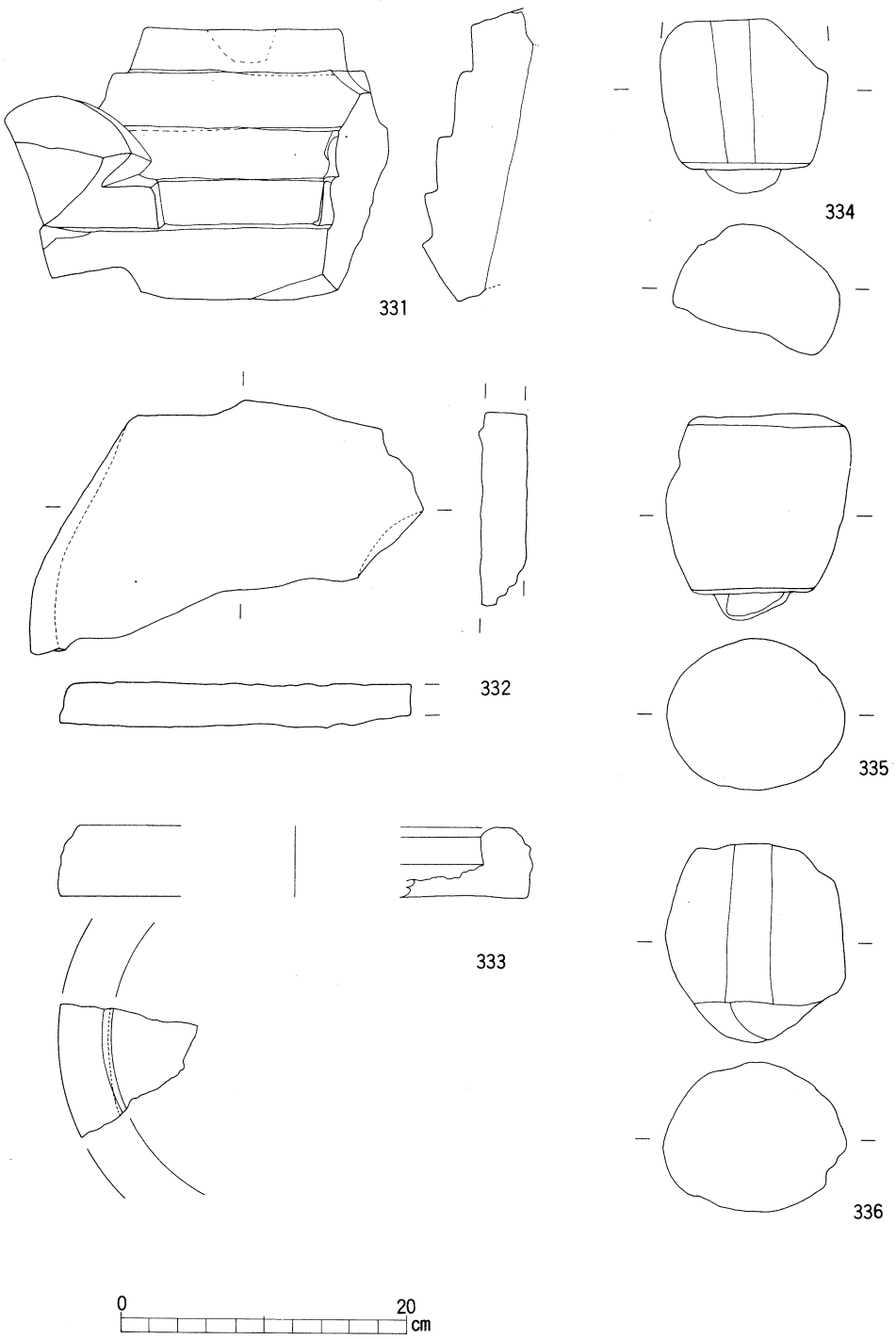
第152図　五輪塔実測図 9



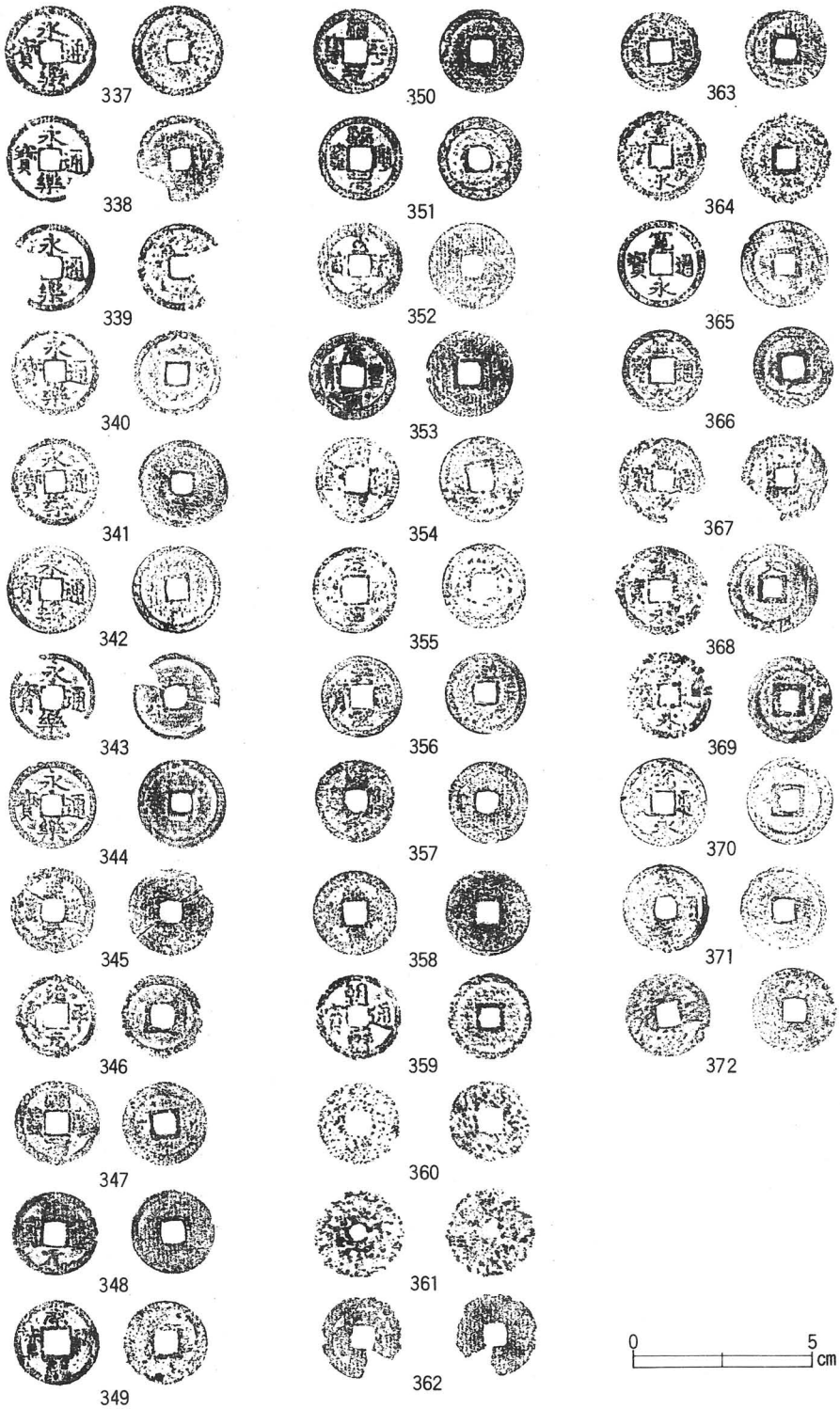
第153図　五輪塔実測図10



第154図　五輪塔・宝篋印塔実測図(五輪塔-11)



第155図　五輪塔・宝篋印塔その他実測図(五輪塔-12)


337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
0
5
cm

第156図　古銭拓影図

第93表　古銭一覧表

No.	出土地点	名　称	法　量			挿図No.	備　考
			径（cm）	孔径（cm）	重量（g）		
337	第４号掘立	永楽通寶	2.5	0.6	2.3	158	裏面は、無地、No.6
338	Ⅰ郭第4号堀	永楽通寶	2.4	0.6	2.5	158	裏面は、無地、右下、一部欠損
339	Ⅰ郭	永楽通寶	2.5	0.6	2.1	158	裏面は、無地、左側、一部欠損、No.7
340	Ⅰ郭	永楽通寶	2.4	0.6	2.6	158	裏面は、無地、No.78
341	第19号住居址	永楽通寶	2.4	0.6	2.7	158	裏面は、無地、No.11
342	第29号掘立	永楽通寶	2.4	0.6	2.8	158	裏面は、無地　第29号掘立の柱穴群
343	第６号土壙	永楽通寶	2.4	0.7	2.0	158	裏面は、無地、一部欠損
344	第６号土壙	永楽通寶	2.4	0.6	2.6	158	裏面は、無地
345	Ⅰ郭	□元通寶	2.4	0.7	2.2	158	裏面は、無地、左上、一部欠損、No.19
346	第４号掘立	治平元寶	2.3	0.7	2.5	158	裏面は、無地
347	Ⅰ郭	開元通寶	2.4	0.7	3.1	158	裏面は、無地、No.25
348	第13号住居址	開元通寶	2.3	0.7	2.6	158	裏面は、無地
349	第29号掘立	元豊通寶	2.4	0.7	3.1	158	裏面は、無地、No.2第29号掘立の柱穴群
350	第22号土壙	治平元寶	2.3	0.7	3.5	158	裏面は、無地、No.1　第１号墓壙
351	第22号土壙	開元通寶	2.4	0.7	3.2	158	裏面は、無地、No.2　第１号墓壙
352	第22号土壙	威道元寶	2.4	0.7	3.2	158	裏面は、無地、No.3　第１号墓壙
353	第22号土壙	元豊通寶	2.4	0.7	3.3	158	裏面は、無地、No.6　第１号墓壙
354	第22号土壙	不明	2.4	0.7	3.3	158	裏面は、無地、No.4　第１号墓壙
355	第22号土壙	不明	2.4	0.7	3.3	158	裏面は、無地、No.5　第１号墓壙
356	Ⅰ郭	□□通寶	2.3	0.6	3.6	158	裏面は、無地、No.2
357	Ⅰ郭	不明	2.3	0.6	2.4	158	裏面は、無地、No.16
358	第21号掘立	不明	2.4	0.7	2.3	158	裏面は、無地、No.26
359	Ⅰ郭	朝鮮通寶	2.3	0.8	3.1	158	裏面は、無地、No.23
360	第18号掘立	不明	2.3	0.7	2.0	158	裏面は、無地、No.1
361	Ⅰ郭	不明	2.4	0.4	2.0	158	裏面は、無地、No.82
362	第６号土壙	不明	2.2	0.7	1.9	158	裏面は、無地、右下、一部欠損
363	Ⅰ郭第5号堀	寛永通寶	2.3	0.6	3.1	158	裏面は、無地、No.4
364	Ⅰ郭第5号堀	寛永通寶	2.5	0.6	2.6	158	裏面「文」の刻文有　No.36
365	Ⅰ郭	寛永通寶	2.5	0.6	4.0	158	裏面は、無地、No.12
366	Ⅰ郭	寛永通寶	2.3	0.7	2.2	158	裏面は、無地、No.28
367	Ⅰ郭	寛永通寶	2.4	0.6	2.2	158	裏面は、無地、右下、一部欠損
368	Ⅰ郭第5号堀	寛永通寶	2.5	0.6	3.5	158	裏面「文」の刻文有、No.45－2
369	Ⅰ郭第5号堀	寛永通寶	2.4	0.6	2.8	158	裏面は、無地、No.45－1
370	第47号土壙	寛永通寶	2.4	0.6	3.2	158	裏面は、無地、No.1
371	第48号掘立	不明	2.4	0.7	2.4	158	裏面は、無地
372	第４号掘立	不明	2.3	0.7	3.3	158	裏面は、無地

3．中世以降の遺構

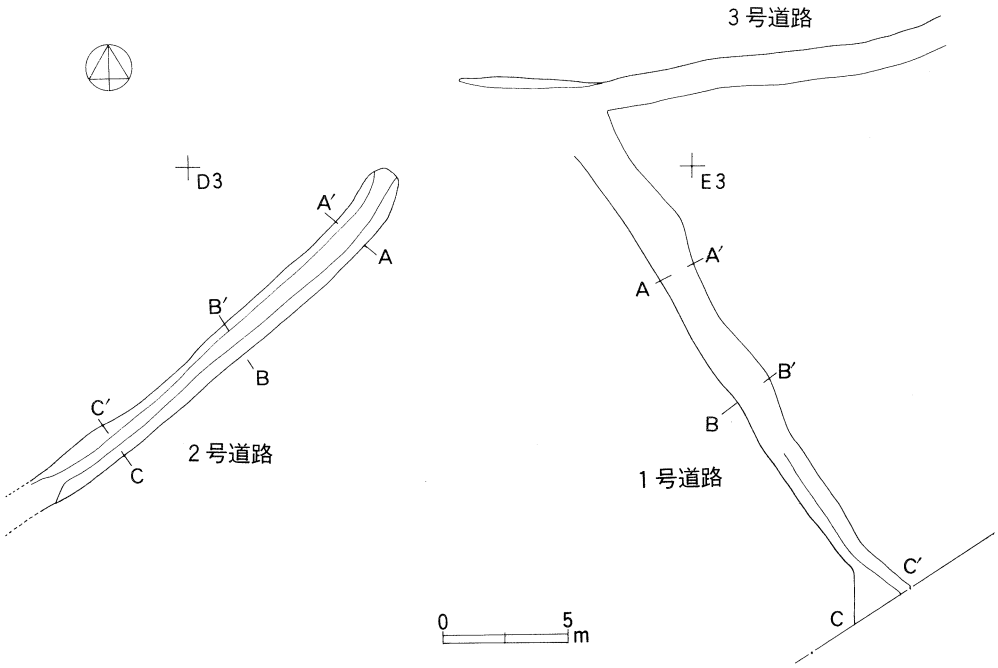
中世以降の遺構としては、具体的な時期を確定することは出来ないが３本の道路状の遺構がある。この遺構は、Ｉ郭の南西部に所在しており、Ｄ３，Ｅ３の南側であり、暗褐色土が固く踏み固められている。（第157図、図版36）

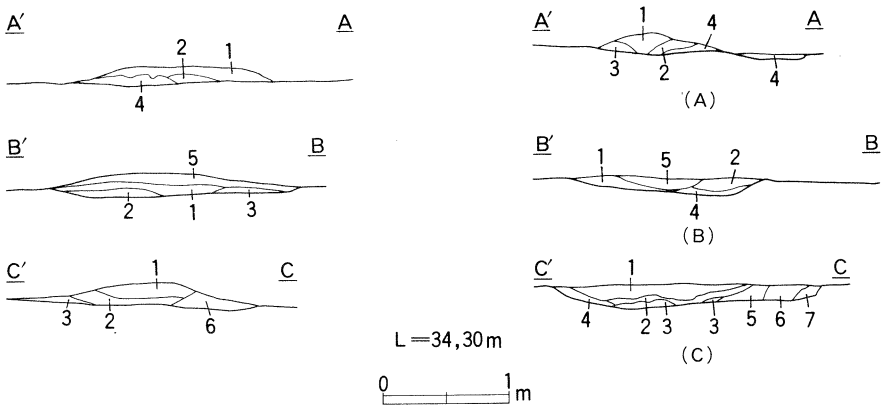
第１号道路は、Ｅ３杭の南側で南東から北西方向（Ｎ－33°－Ｗ）にかけて出来ており、北側で東西方向に伸びる第３号道路と接続しているが、南側は土層図Ｃの部分から切れている。全長は、24.0m を計測する。道路の構造は、土層図Ａの南側3.00m付近から溝状になっている。北側は、小山状の道路となっている。小山状の部分は、幅1.00m，高さ0.15mを計測する。溝状の部分は、幅が1.00～1.70mを計測し、0.10～0.20mの深さを有している。土層としては、暗褐色土や黄褐色土が道路内に堆積しているが、北側や南側でも盛土して道路を構築したものではなく、遺跡の覆土を利用した状況である。

第２号道路は、Ｄ３杭の南側で北東から南西方向（Ｎ－49°－Ｅ）にかけて出来ており、小山を呈している。全長は、19.10mを計測し、路面幅0.55～0.90m,路面基底部幅1.60～2.00m,高さ0.15～0.20mを、各々計測する。北端と南端は、消失している。土層は、暗褐色土と黄褐色土が固く踏み固められており、その状況は第１号道路と同様である。

第３号道路は、Ｅ３杭の北側で第１号道路と接続しており、東西方向に出来ている。全長では19.50m，幅1.20mを計測するが、上面はほとんど消失しており、基底部のみを残す程度である。道路の構造及び土層は、第１号、２号道路と類似する可能性がある。

この第１～３号道路は、遺跡覆土の黒褐色土上面に所在しており、路面部分は黒褐色土上位層の暗褐色土中に相当する。第１号と２号道路は、接続しない状況で確認されているが、「Ｌ」字型で正方形的なプランを有している点注目される。この遺構に伴う遺物としては、何ら出土していない。その層位関係から、近世以降の可能性を有している。





2号道路土層凡例

1. 暗褐色土層　しまり良、ローム粒子、土器粒子、炭化物粒子を含む
2. 暗褐色土層　しまり不良、ローム粒子を含む
3. 暗黄褐色土層　ロームブロックを含む
4. 黄褐色土層　ハードロームを中心とした層
5. 暗褐色土層　1層よりローム粒子を含む、しまり良
6. 暗褐色土層　しまり不良、ローム粒子を含む

※踏み固められている

1号道路土層凡例(A・B)

1. 暗褐色土層　しまり良、ローム粒、ロームブロック、炭化粒子、土器粒子を含む
2. 暗褐色土層　しまり良、ロームブロックを含む
3. 暗褐色土層　しまり不良、ロームブロックを含む
4. 黄褐色土層　しまり良
5. 暗褐色土層　しまり良、ローム粒子を含む

同土層凡例(C)

1. 暗褐色土層　ロームブロック、ローム粒、粘土小ブロックを含む、しまり良
2. 暗褐色土層　ロームブロック、ローム粒子、炭化粒、粘土ブロックを含む、しまり不良
3. 暗褐色土層　暗褐色土が混入している
4. 暗褐色土層　ロームブロック、炭化粒を含む
5. 暗褐色土層　ロームブロック、ローム粒、粘土粒、炭化粒を含む
6. 暗褐色土層　ロームブロック、炭化粒を含む
7. 暗褐色土層　ロームブロック、土器粒、ローム粒を含む

第157図　第1・2号道路状遺構実測図

V. 中世以前の遺構と遺物

当古屋敷遺跡で、中世の城館址が出現する以前の遺構としては、古墳時代から平安時代までの住居址と、遺構は確認出来なかったが、縄文時代の遺物が出土している。住居址は、全部で34軒確認されているが、Ⅰ郭とⅡ郭に位置する住居址は、中世城館址築城時に一部か半分を破壊されている住居址が多く、破壊を受けていない住居址は4軒（Ⅳ郭と北東部）のみである。

第94表　住居址一覧表1

住居址No.	東西径(m)	南北径(m)	深さ(m)	方　位	形　状	柱穴	カ マ ド	貯蔵穴	備　考
第1号住居址	4.72	8.61		N－50°－E	楕円形	13			
第2号住居址	7.50	6.20	0.40	N－46°－W	正方形	5			
第3号住居址	7.50	10.10	0.09	N－25°－W	長方形	2	北壁中央		
第4号住居址	6.30	7.00	0.25	N－ 8°－W	長方形	4	北壁中央		
第5号住居址	5.50	4.50	0.22	N－15°－E	正方形	4			
第6号住居址	3.20	3.40	0.12	N－ 8°－E	正方形	5			
第7号住居址	4.75	4.85	0.54	N－47°－E	正方形	4	北壁中央		
第8号住居址	2.40	4.50	0.05	N－40°－W		3			
第9号住居址	3.70	4.05	0.22	N－85°－E	長方形	6	西壁中央		
第10号住居址	4.20	3.90	0.27	N－30°－W	長方形	8	北壁中央		
第11号住居址	2.28	2.30	0.22	N－ 0°－E	正方形	5	北壁中央		
第12号住居址	3.50	3.45	0.70	N－ 5°－E	隅丸方形	4	北壁中央		
第13号住居址	5.55	5.85	0.30	N－37°－W	不整方形	6			
第14号住居址									カマドのみ
第15号住居址	3.05	4.60	0.15	N－17°－W	不整方形	4	北壁中央		
第16号住居址	6.12	6.00	0.10	N－30°－W	正方形	5	北壁中央		
第17号住居址	4.20	4.50	0.40	N－ 6°－E	不整方形	4	北壁中央		
第18号住居址	7.90	7.90	0.25	N－10°－W	隅丸方形	5	北壁中央		
第19号住居址	2.75	3.50	0.15	N－11°－E	長方形	3	北壁中央		
第20号住居址	3.50	3.50	0.76	N－14°－E	隅丸方形	3	北壁中央		
第21号住居址	5.02	5.00	0.43	N－18°－W	隅丸方形	5	北壁中央		
第22号住居址	4.15	4.23	0.72	N－29°－W	隅丸方形	4	北壁中央		
第23号住居址	4.05	4.40	0.80	N－14°－W	隅丸方形	5	北壁中央		
第24号住居址	2.25	2.45	0.40	N－75°－W	隅丸長方形	1			
第25号住居址	3.00	2.68	0.46	N－25°－E	隅丸方形	1	北壁中央		
第26号住居址	3.82	3.85	0.50	N－17°－E	隅丸方形	4	北壁中央		

第94表　住居址一覧表２

住居址No.	東西径(m)	南北径(m)	深さ(m)	方位	形状	柱穴	カマド	貯蔵穴	備考
第27号住居址	5.08	4.50	0.13	N－ 0°－E	方形	5	北壁中央		
第28号住居址	5.05	4.58	0.20～0.30	N－ 8°－E	長方形	6	北壁中央		
第29号住居址	5.96	5.85	0.60	N－35°－W	隅丸方形	5	北壁中央		
第30号住居址	4.80	4.10	0.60	N－21°－E	隅丸方形	5	北壁中央		
第31号住居址	5.40	5.35	0.67	N－17°－E	隅丸方形	5	北壁中央		
第32号住居址	3.00	3.00	0.53	N－27°－E	隅丸方形	0	北壁中央		
第33号住居址	4.35	4.50	0.46	N－25°－E	隅丸方形	4	北壁中央		
第34号住居址	2.45	2.80	0.43	N－25°－W	長方形	0			

１．住居址（第158～212図、第94－１・２表、図版37・46・54・55）

第１号住居址（第158図）

本住居址は、Ｉ郭の中央西側に位置している。大きさは、東西径4.72m、南北径8.61mを計測し、楕円形状を呈している。方位は、Ｎ－50°－Ｅである。床面は、しっかりした貼床であるが壁は確認されなかった。柱穴は、全部で13本確認されたが、規則性を持った柱穴配置ではない。カマドや炉址は、認められなかったし、本址に結び付く柱穴は確認されなかった。また本址は、第　号堀上面に所在するため、中世の遺構と判断される。

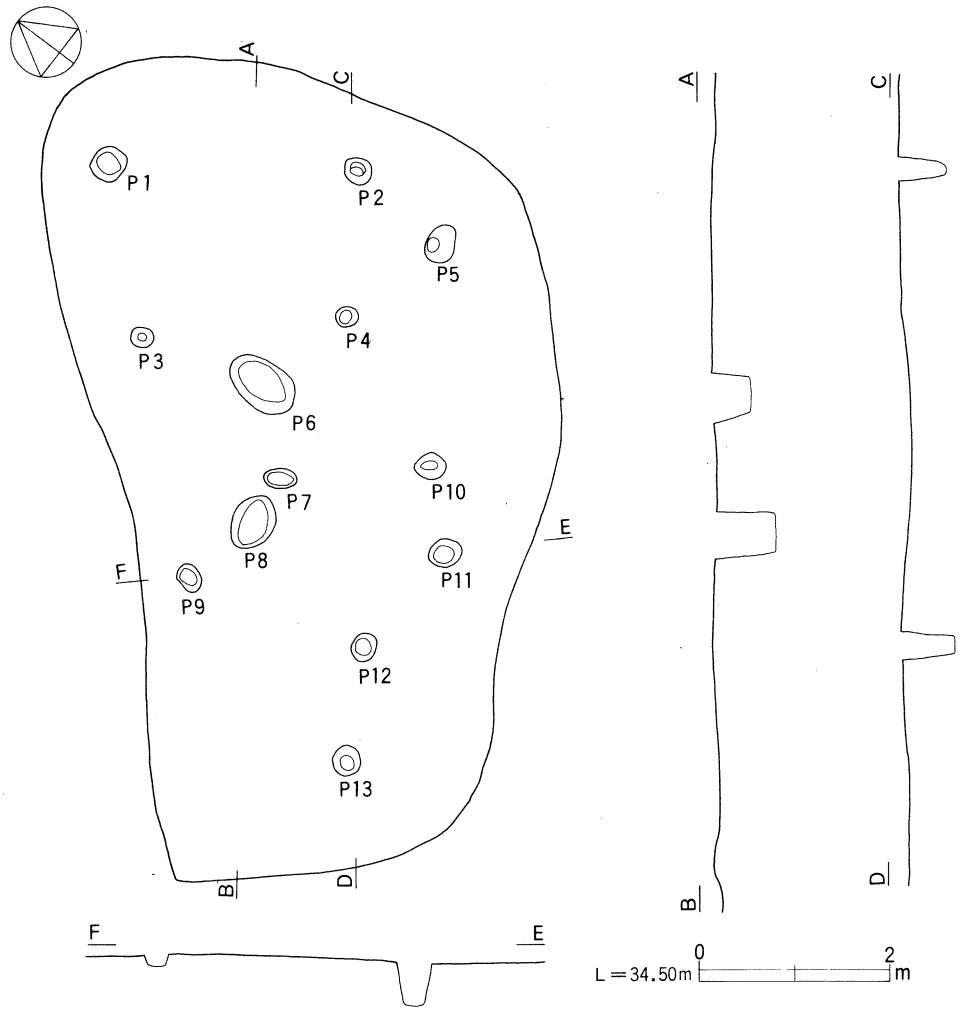
第２号住居址（第159・160図、第95表１・２）

本址は、Ｉ郭の北西部に位置し、住居址の北側と南西部は堀３と堀に切られている。確認部分での大きさは、東西径7.50m、南北径6.20m、深さ0.40mを計測し、正方形状を呈する住居址と判断される。方位は、Ｎ－46°－Ｗである。

床は、しっかりした貼床であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝は全周している。柱穴は、各コーナー付近に４本とＰ３の東側に１本の５本確認されている。カマドは、第３号堀により北壁同様破壊されている。

土層は、暗褐色土、黒色土、黄褐色土がレンズ状に堆積しており、暗褐色土が６層に、黒色土が２層に、黄褐色土が２層に各々細分される。黄褐色土は、ロームが分解したものである。

出土遺物は、土師器坏、甕、甑、須恵器杯、手捏土器、土玉などが検出されている。第160図No１～11は、土師坏である。No１，５，８，10の４点は、床面上３～４cmの所から検出されてい

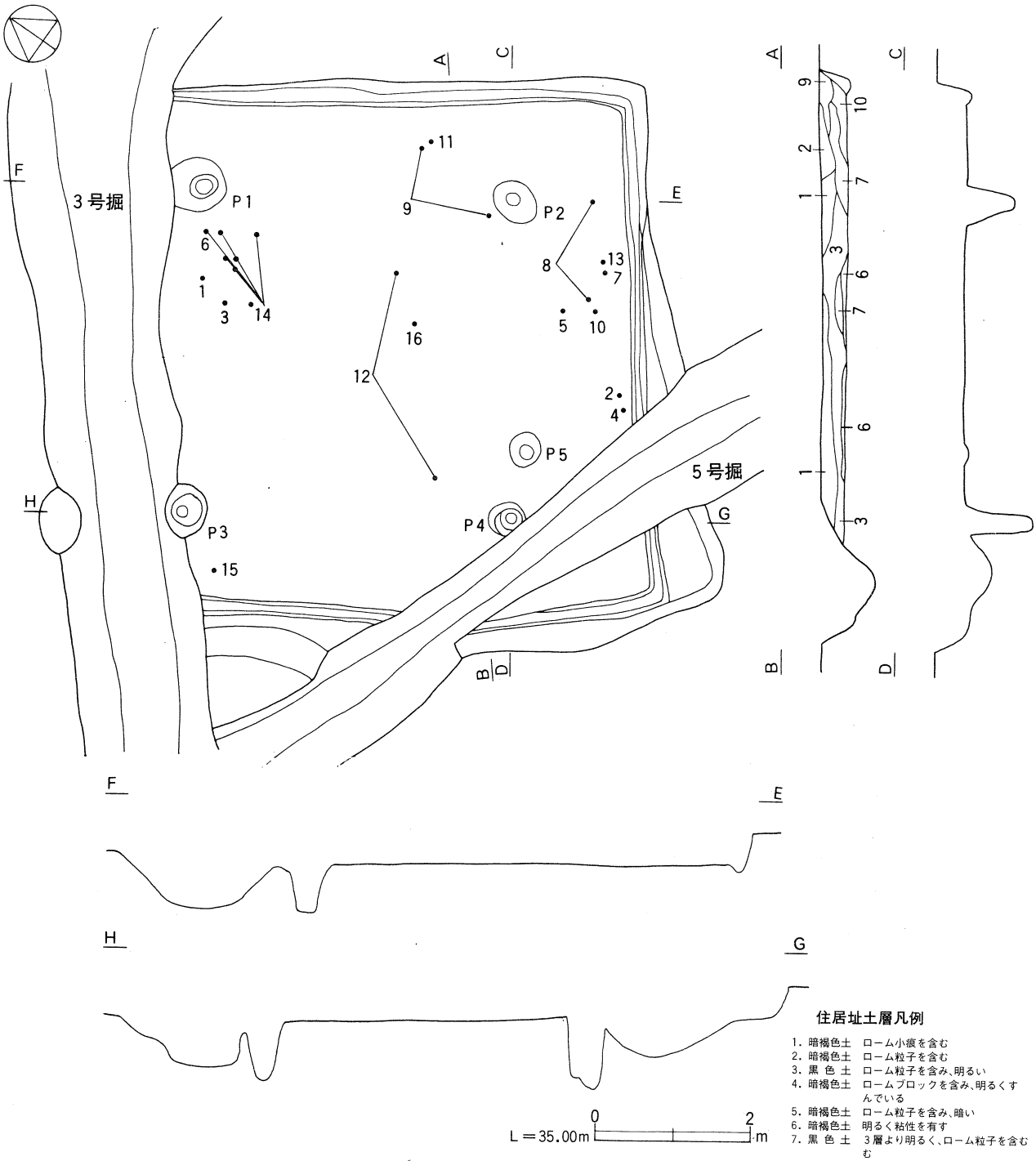


第158図　第１号住居址実測図

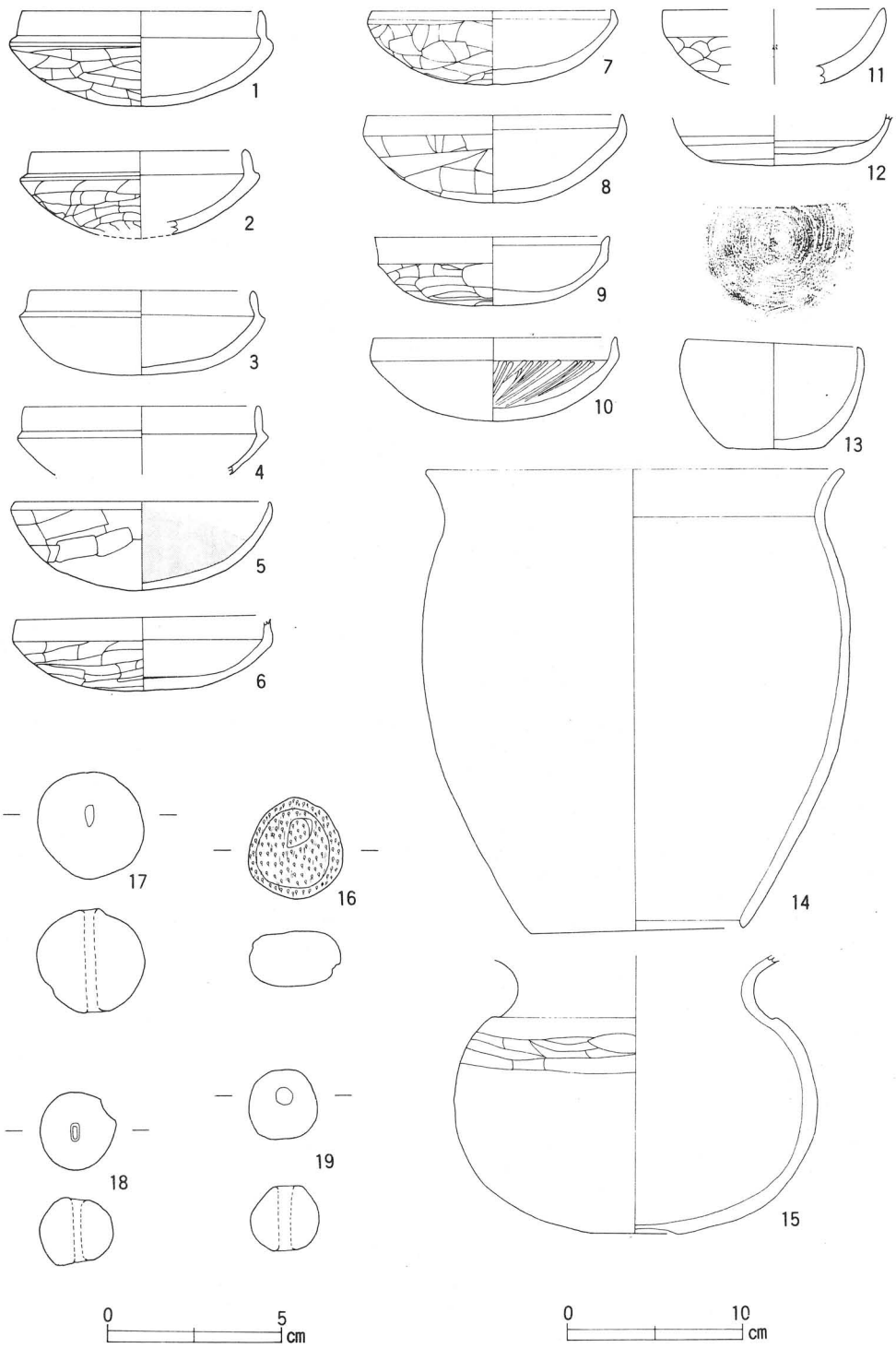
ることから、本址に結び付く遺物と判断される。他の坏は、床面上９cm以上の所から検出されている。No12は、須恵器坏で1／4程度の破片で床面上20.5cmの所より検出されている。No13は、手捏土器で体部を一部欠損しており、床面上10.0cmの所より検出されている。No14は、土師器の甑で体部を1／4程度欠損しており、床面上8.0cmの所より検出されている。No15は、土師器広口甕である。器面に煤が付着しており、床面上１～９cmの所より検出されている。このNo14,15は、出土レベルから本址に結び付く遺物と判断される。

これ以外では、No16は軽石で床面より検出され、No17～19は土玉である。土玉は、床面上13.0cmの所から検出されいる。

これらの遺物から、本址は古墳時代後半に位置する住居址と判断される。



第159図　第２号住居址実測図



第160図　第２号住居址出土遺物実測図

第95表　第２号住居址出土遺物一覧表１

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第160図 No.1	土師器 坏	A　13.7 B　5.4 D　15.0	完	体部は、内傾している。陵は、丸みを有ししっかりしている。口縁部は、垂直に立ち上がる	口縁部は横位のヘラナデ、体部は、ヘラ削り後ヘラナデ、内面は、ヘラナデ	長石粒、石英粒、 密 良好 明茶褐色	＋４
第160図 No.2	土師器 坏	A　12.2 B　5.0 D　13.7	底部欠損	体部は、内傾している。陵は、丸みを有している。口縁部は、やや内傾ぎみに立ち上がる。	口縁部は、横位ヘラナデ体部は、ヘラナデ 内面は、ヘラナデ	密 良好 黒色	内面磨滅大 ＋９
第160図 No.3	土師器 坏	A　12.8 B　4.8 D　14.1		底部は、やや平底化している。体部は、内傾ぎみ陵は、しっかりしている。口縁部は、内傾している。	口縁部は、横位ヘラナデ 体部と内面は、ヘラナデ	密 暗茶褐色	内外とも磨滅 一括接合資料
第160図 No.4	土師器 坏	A　13.5 B　3.9 D　14.4	1／2	体部は、内傾ぎみ。陵は、しっかりしている。口縁部は直立	口縁部は横位ヘラナデ 体部と内面はヘラナデ	密 良好 暗褐色	体部下半以上を欠く ＋18
第160図 No.5	土師器 坏	A　14.7 最大径．15.1 B　5.1	1／2	体部は、内傾しながら口縁部に到る。口縁部は、やや内傾している。	口縁部は、横位ヘラナデ、体部上半は、ヘラ削り後ヘラナデ、下半はヘラナデ	砂粒、密 良好 暗茶褐色	口縁部内面に煤付着 ＋３
第160図 No.6	土師器 坏	A　14.5 B　4.2 D　14.9	完	底部は、平底化しており、陵は線は消失し、口縁部はやや内傾ぎみ	口縁部ヘラナデ 体部はヘラ削り後にヘラナデ	密 良好 黒色（内墨）	口縁部一部欠損 口縁部内面黒 ＋13
第160図 No.7	土師器 坏	A　13.7 B　4.2 D　14.2	完	体部は、内傾しながら立ち上がり、陵線は消失し、口縁部は内傾している。	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後にヘラナデ、黒色処理	密 良好 内部黒色	口縁部一部欠損 ＋10
第160図 No.8	土師器 坏	A　14.6 B　5.0 D　15.1	3／4	体部は、内傾ぎみに立ち上がり、陵線はなく口線部は直立	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後にヘラナデ	密 良好 内外黒色	体部～口縁部にかけ¼欠 ＋４
第160図 No.9	土師器 坏	A　13.6 B　3.9 D　13.1	1／2	底部は、平底ぎみで肥厚、口縁部は、やや内傾ぎみで直立、口縁内面に低く陵線を有す	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後にヘラナデ	小石　密 良好 暗褐色、黒色	体部下半欠損 ＋21
第160図 No.10	土師器 坏	A　13.9 B　4.8 D　14.2		体部は、内傾ぎみに立ち上がり、陵線は痕跡を残す、口縁部は直立している。	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラナデ	雲母粒、石英粒 良好 黒色	口縁部2／3欠損 表面磨滅大 ＋５
第160図 No.11	土師器 坏	A　12.7 B　4.2	1／2	体部は、内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は外傾	口縁部ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ	密 良好 暗褐色	体部1／2と底部欠損 ＋25
第160図 No.12	須恵器 坏	B　2.9 C　8.8	1／4	底部は平底で内面削り出す、体部は内傾ぎみに立ち上がっている。	口縁部回転ヘラナデ 体部回転ヘラ削り 底部回転糸切り	石英粒含、灰褐色 良好 灰褐色	＋20.5

第95表　第２号住居址出土遺物一覧表２

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第160図 No.13	手捏 土器	A 9.8×10.0 B 5.8× 6.2	完	底部は、水平で体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや内傾		砂粒、密 良好 暗褐色	表面全体が磨滅 体部一部欠損 ＋10
第160図 No.14	土師器 甕	A (23.8) B 26.5 C 12.2	3／4	口縁部は緩やかに外傾し、体部は内傾している。	口縁部手ナデ体部右下りの削り、ヘラナデ、底部手持ちヘラ削り内面ナデ	雲母、砂 良好 茶褐色	口縁一部残 体部3／4残 ＋8
第160図 No.15	土師器 小型壷 (広口)	B 15.8 C 5.4		底部は小さく内傾しており体部は球体をなる。頸部は内傾し、口縁部は外湾する	口縁部ヘラナデ 体部端整なヘラナデ	緻密 良好 暗褐色	表一部磨滅 口唇部～体部の一部欠損 表に煤一部付着 ＋７～９
第160図 No.16	軽　石	径 5.3×5.0×3.2					25ｇ 床直
第160図 No.17	土　玉	径 3.1×2.9×0.9	完			粗 良好 暗褐色	25g ＋13
160図 No.18	土　玉	径 2.3×2.1×1.9 孔 0.5×0.2				砂粒 良好 茶褐色	10g ＋13
第160図 No.19	土　玉	径 2.0×1.9×1.8 孔 0.5	完			緻密 良好 明褐色	10ｇ

第３号住居址　（第161図）

本址は、Ｉ郭の南西部に位置しているが、東側と南側は破壊されている。確認面での大きさは東西径7.50m、南北径10.10m、深さ0.09mを計測し、長方形状を呈するものと判断される。方位は、Ｎ－25°－Ｗである。

床面は、しっかりした貼床であるが、柱穴から壁にかけては柔弱となっている。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は認められなかった。柱穴は、西側で２本確認されたのみである。貯蔵穴は、確認されなかった。

土層は、暗褐色土と黒褐色土が堆積している。カマドは、北壁中央部に位置しているが、東側は住居址同様消失している。大きさは、長さ1.61m、幅1.14m、高さ0.11mを計測する。燃焼部は、カマドの中央よりやや北側に位置し、床面より９cm程度下がっている。この部分は、良く焼けているためロームも分解している。煙道部は、燃焼部より５cm程度上位面に位置し平坦面を成している。袖は、砂質粘土を用いて構築されている。

出土遺物は、住居址とカマド内より土師器坏、甕などの破片が検出されたが、図示可能な遺物は検出されなかった。これらの遺物から、本址は古墳時代後半の住居址と判断される。

第４号住居址（第162図）

本址は、Ｉ郭の北西部に位置しており、第　号堀に住居址の南西部を切られている。確認面での大きさは、東西径6.30m（推定）、南北径7.00m、深さ0.25mを計測し、長方形状を呈している。方位は、Ｎ－８°－Ｗである。

床面は、比較的しっかりした貼床で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、北西壁以外全周しており、幅0.18m、深さ0.07mを計測する。柱穴は３本確認されたのみである。貯蔵穴は、カマドの西側に位置している。大きさは、東西径0.85m、南北径0.70m、深さ0.69mを計測し、不整長方形状を呈している。

土層は、黄褐色土、暗褐色土、暗茶褐色土、黒褐色土が堆積しており、暗茶褐色土が６層に細分される。また、第３層の暗茶褐色土、第４層の黒褐色土、第５，７層の暗茶褐色土は、焼土粒子や炭化物粒子を含んでいる。貯蔵穴内の土層は、暗褐色土、暗赤褐色土、暗黄褐色土が堆積しており、第１層と第５層の暗褐色土は焼土粒子を含んでいる。

カマドは、北壁中央部付近に位置するものと判断される。大きさは、長さ1.40m、幅1.40m、高さ0.15mを計測する。燃焼部は、カマド中央部の南側に相当し、床面から２cm程度下がっている。この部分はロームが良く分解している。煙道部は、燃焼部より５cm高くなった後、壁外

へ0.20m突出する。煙道下位面は緩やかに立ち上がっている。カマド内に、焼土層は見られないが第11層の暗赤褐色土層が、これに相当するようである。

出土遺物としては、住居址内より土師器坏、甕、紡錘車片、土玉などが検出されているが、その多くは破片であり、図示したのは土師器坏（第166図No１）、紡錘車片（同図No２）、土玉（同図No３）の３点のみである。No１は、床直で、No２、３は床面上６cmの所より検出されている。また、北東コーナー部の炭化材と貯蔵穴内覆土層に焼土が混入していることから、焼失住居（廃棄後）と判断される。

本住居址は、その遺物から古墳時代後半に位置する住居址と判断される。

第５号住居址（第163～165図、第96表１・２、第97表）

本址は、Ｉ郭の中央西側に位置し、第４号堀に北東部を掘り切られている。確認面での大きさは、東西径5.50m、南北径4.50m、深さ0.22mを計測し、正方形状を呈するものと推定される。方位は、Ｎ－15°－Ｅと推定される。

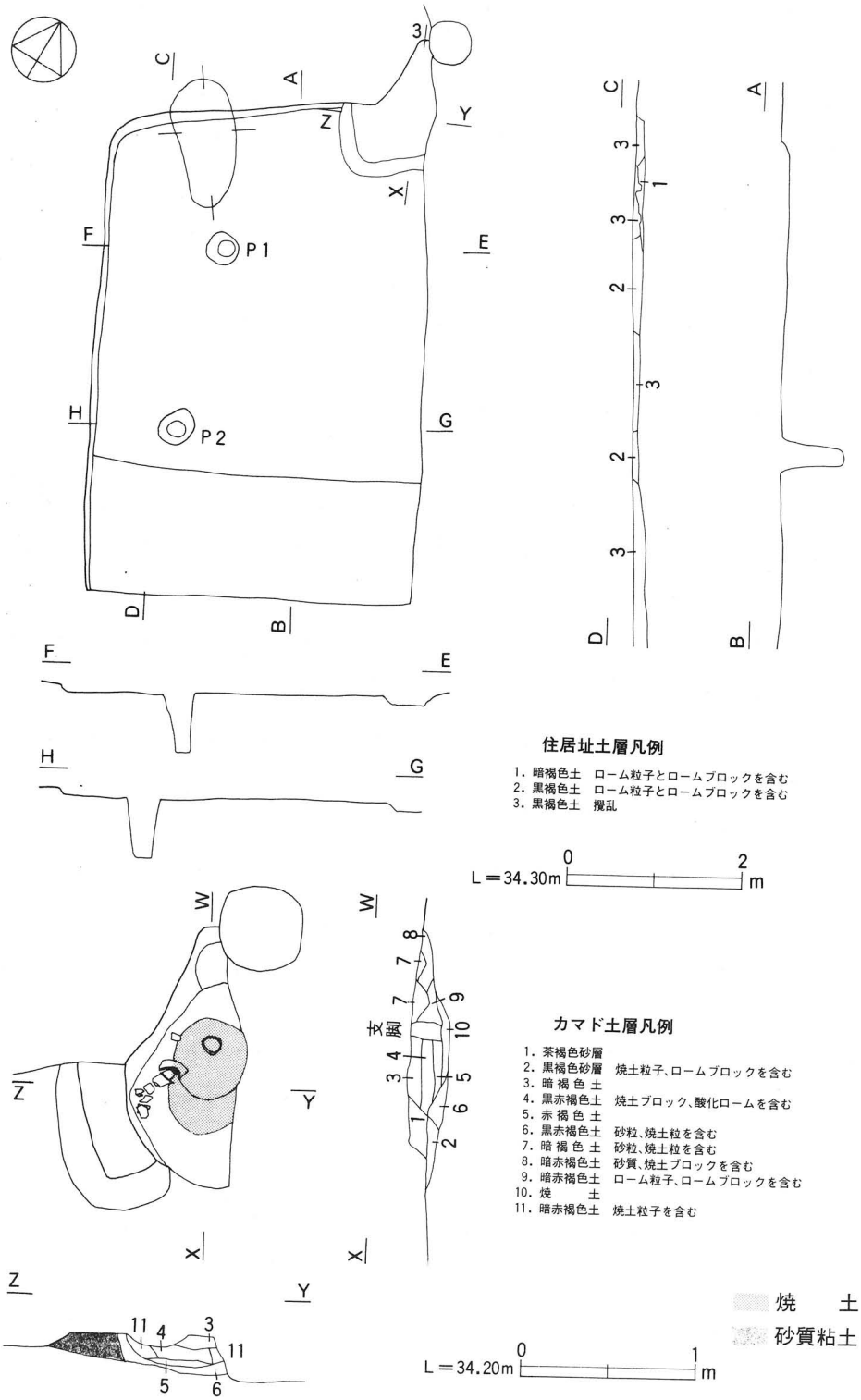
床面は、しっかりした貼床であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、確認部分では全周しており、幅0.20～0.30m、深さ0.04～0.07mを計測する。柱穴は、４本確認されている。カマドは、第　号堀に破壊されているが、中央北側で第　号堀南壁上面に焼土域が所在していることからこの焼土域がカマド燃焼部と判断される。大きさは、東西径1.15m、南北径0.60mを計測する。貯蔵穴は、確認されなかった。

住居址の覆土は暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土が堆積しており、黒褐色土が４層に細分される。これらの土層は、ローム粒子やローム小ブロックを含んでいる。

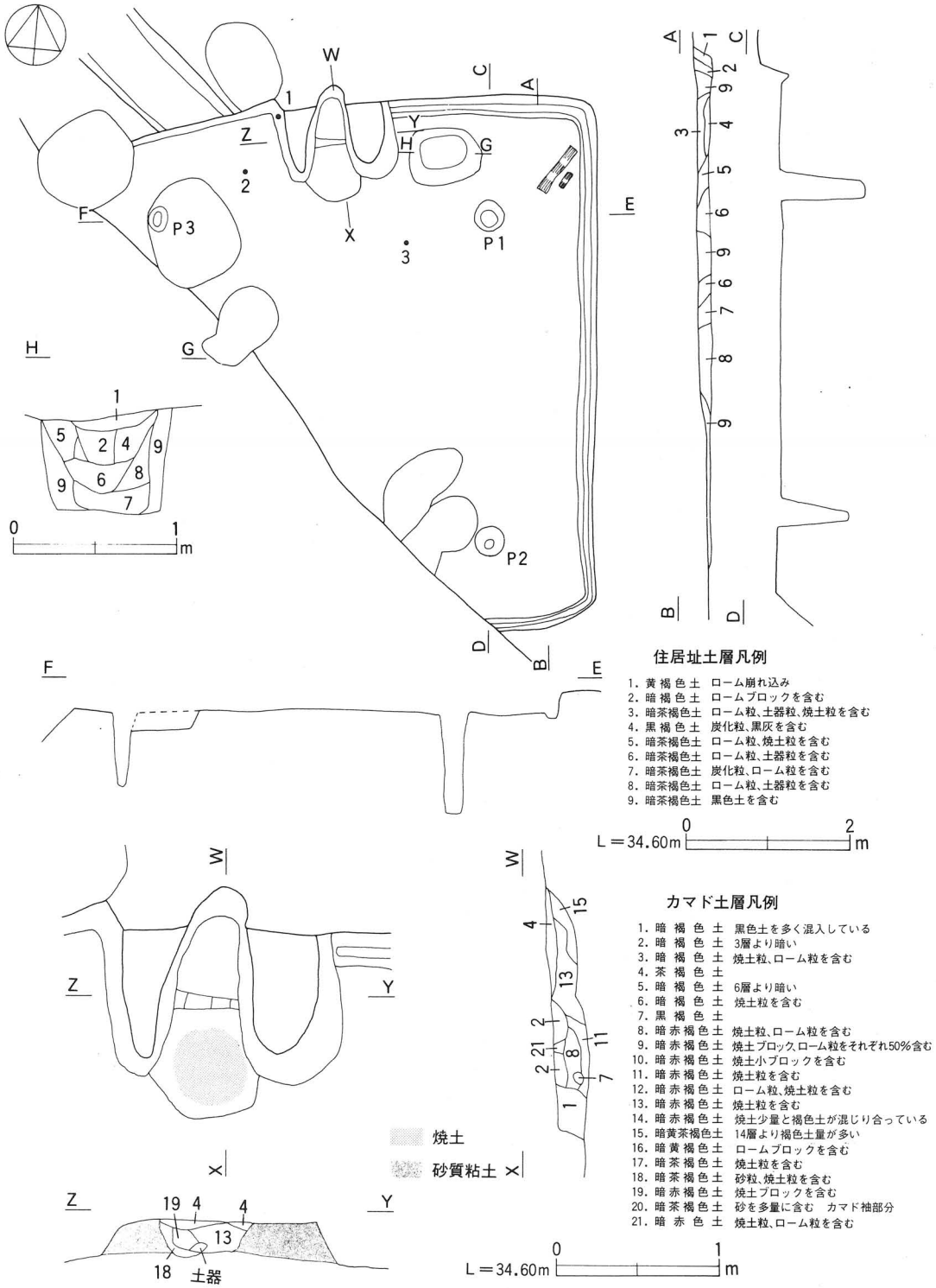
焼土域は、良く焼けており焼土層には、砂、灰を含んでいる。焼土下のローム層は、良く分解している。このことから、前述のようにカマド燃焼部と判断される。

出土遺物としては、住居址内より土師器坏、甕、土玉、カワラケなどが検出されている。土師器坏と甕は、破片のみで図示不能である。第166図No４は、床面上９cmより検出されたカワラケで中世品である。同図No２は、床面上13cmより検出された須恵器甕片である。同図No６は、砥石であり、No７～19までは土玉である。これらの諸遺物は、住居址の南側に集中している。

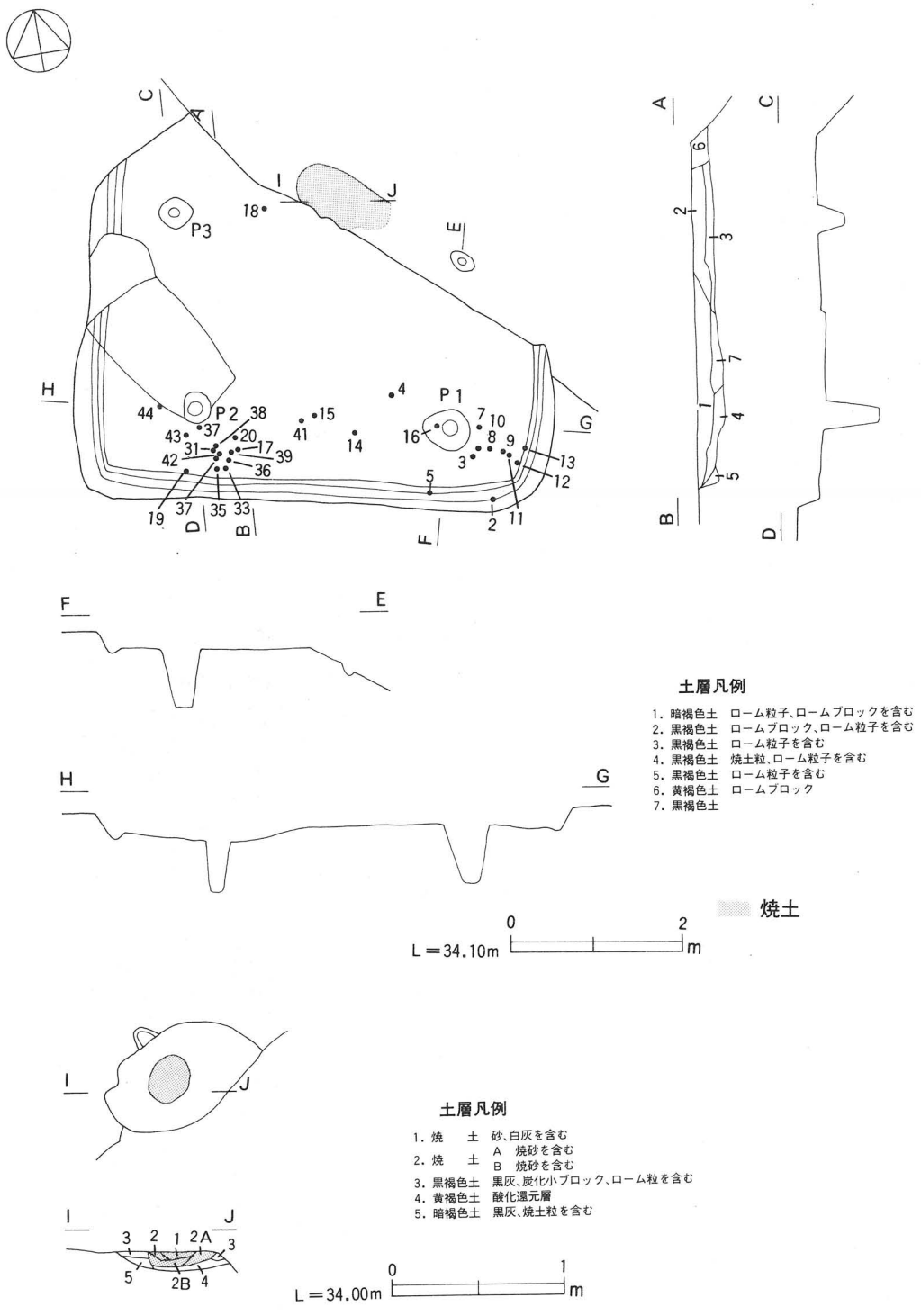
本住居址の時期は、出土遺物から古墳時代後半に位置している。また、住居址の西側には第１号地下式倉庫が、本址を掘り切っている。



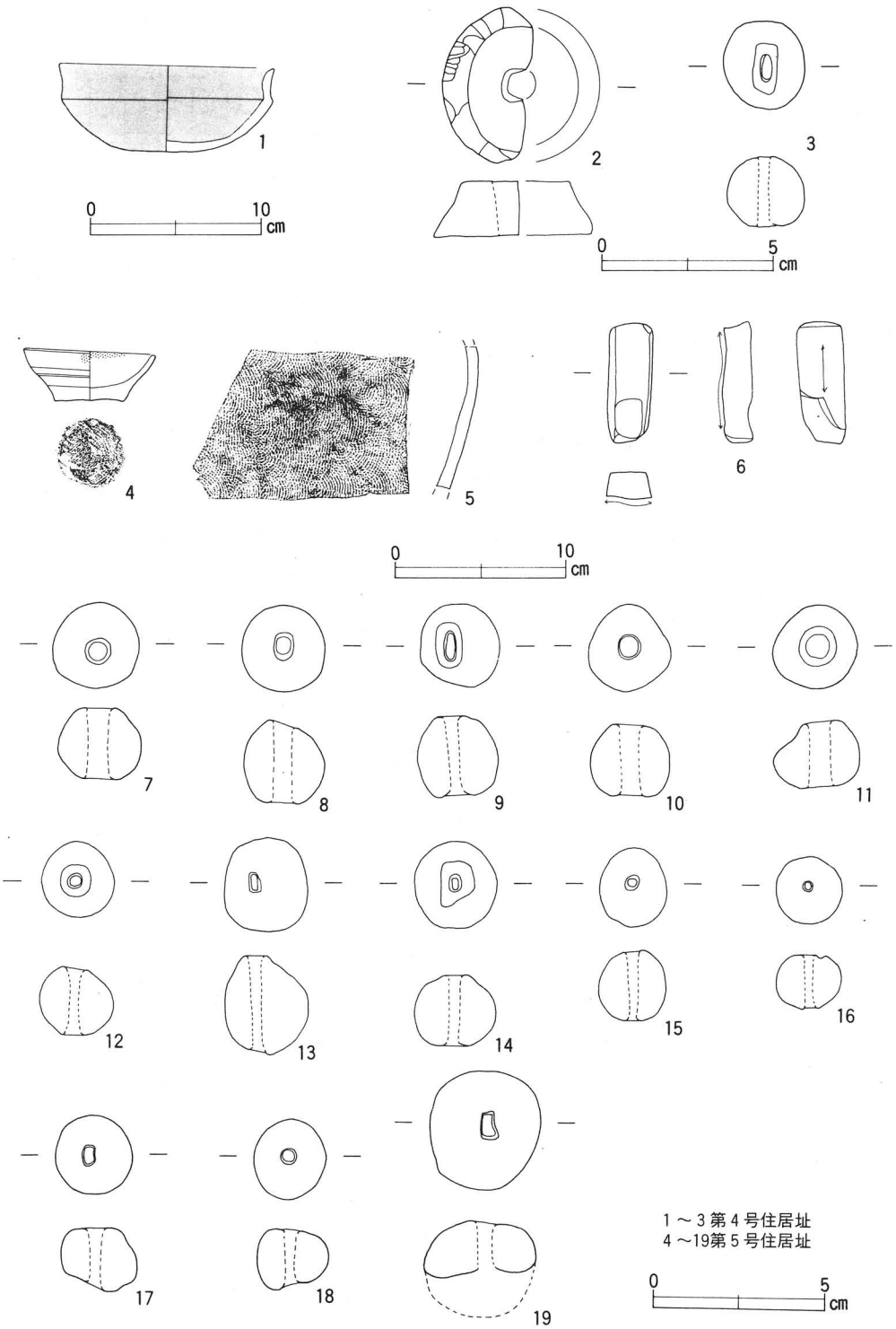
第161図　第３号住居址実測図



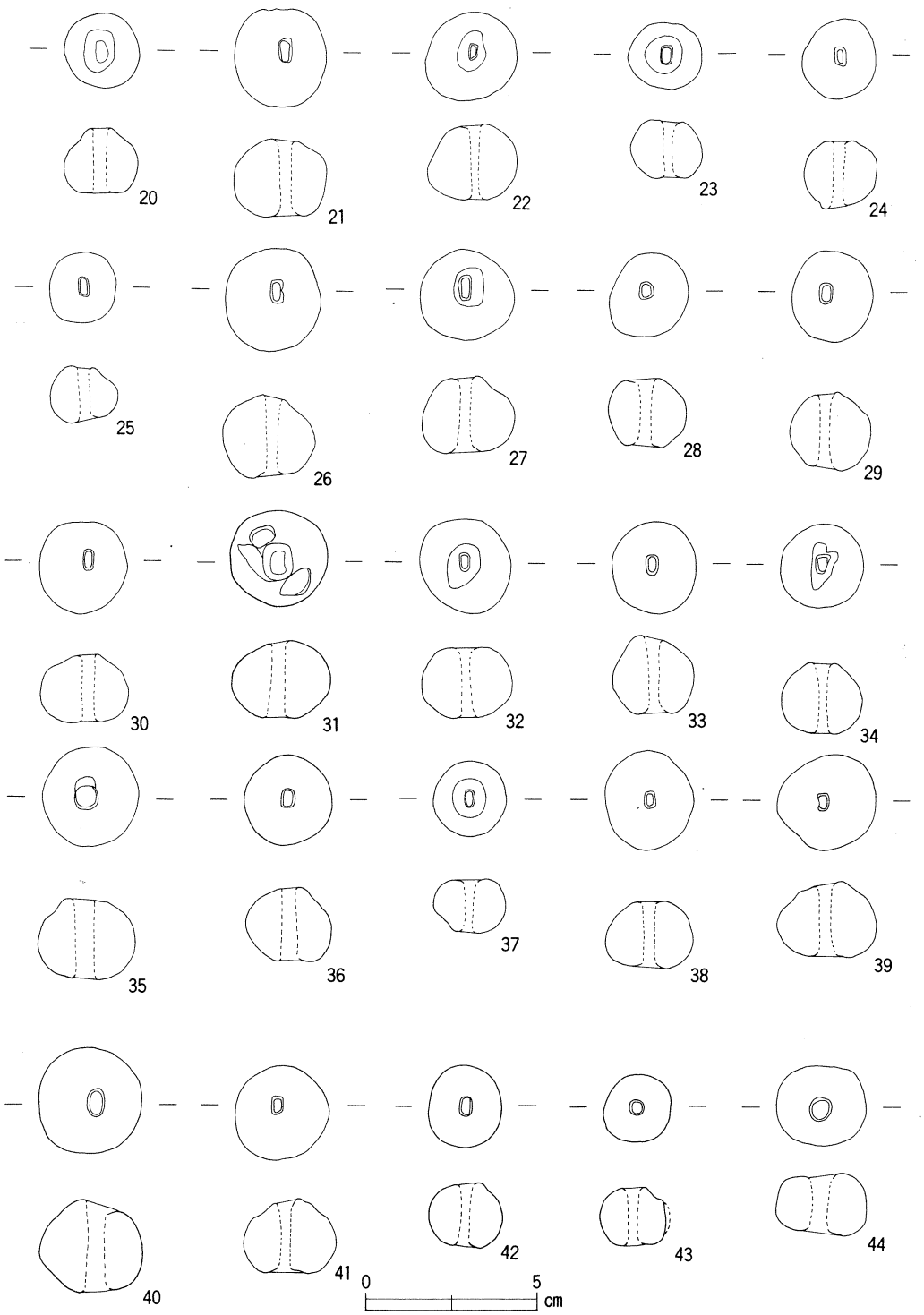
第162図　第4号住居址実測図



第163図　第５号住居址実測図



第164図　第4、5号住居址出土遺物実測図



第165図　第５号住居址出土遺物実測図

第96表　第4. 5号住居址出土遺物一覧表 1

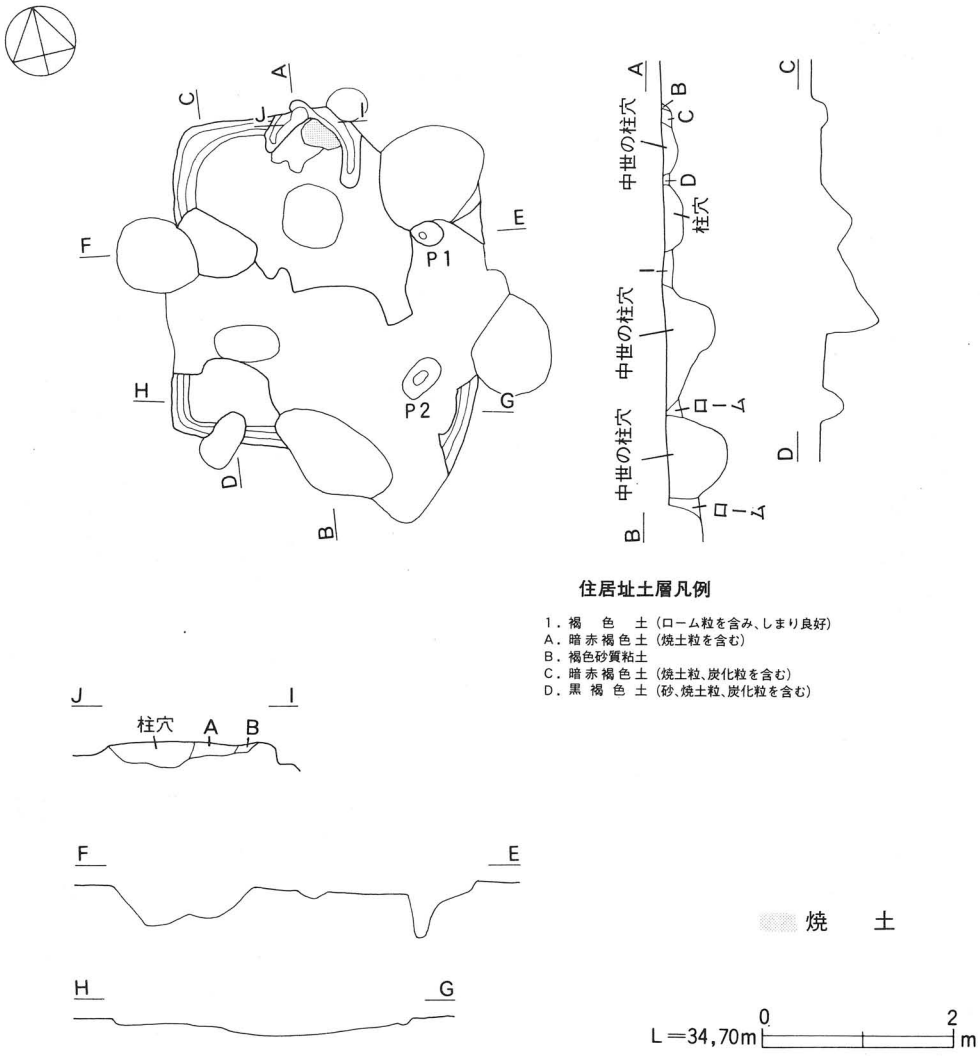
挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第164図 No.1	土師 坏	A　12.7 B　5.0×4.9 C　3.5 D　12.4	2／3	底部は小さく平底で、体部は内傾ぎみに外傾し陵線は低く、口縁部は外湾	口縁部横位ヘラナデ、体部ヘラ削り後ヘラミガキ、底部ヘラ削り後ヘラナデ	小石、長石、石英 砂粒、粗 良好 赤褐色＝朱彩	第4号住No.1 内外赤彩 床直
第164図 No.2	紡錘車 片	上径（3.2） 下径（4.6） B　1.6 孔径　0.9×0.9	1／2	1／2程度で、側面に整型痕を残す			第4号住No.2 滑石 ＋ 6 20 g
第164図 No.3	土　玉	径 2.6×2.4×2.1 孔 0.8×0.3	完			砂、長石 良好 暗褐色	第4号住No.3 ＋ 6 10 g
第164図 No.4	カワラケ	A　7.7 B　2.5～3.0 C　4.0	完	底部は、水平でやや突出し体部はやや内傾ぎみに外傾、口縁部は水平	表全面回転ヘラナデ 底部糸切り、口縁部は回転ヘラ削り	小石、砂粒 良好 明褐色	口縁部に煤付着 第5号住No.1 ＋ 9
第164図 No.5	須恵器 甕		片	内傾する体部	体部表面はヘラナデ 体部内面は円形文	長石粒 灰褐色	第5号住No.2 ＋13
第164図 No.6	砥　石	長　7.0 上巾　2.0 下巾　2.7 厚　1.5		上下面と右側面を使用		砂岩	第5号住No.3 一括接合資料
第164図 No.7	土　玉	径 2.5×2.5×2.1 孔　0.6	完			長石、石英、雲母 良好 暗褐色	第5号住No.4 10 g ＋10
第164図 No.8	土　玉	径 2.5×2.4×2.3 孔 0.7×0.6	完			雲母、砂粒、石英 良好 暗褐色	第5号住No.5 20 g ＋13
第164図 No.9	土　玉	径 2.4×2.4×0.3 孔　0.9×0.4	完			長石、雲母、砂粒 良好 暗茶褐色	表面磨滅 第5号住No.6 15 g ＋13
第164図 No.10	土　玉	径 2.5×2.4×2.1 孔　0.9	完			雲母、長石、砂 良好 明褐色	第5号住No.7 20 g ＋13
第164図 No.11	土　玉	径 2.5×2.5×1.9 孔　0.7	完			石英、砂粒 良好 暗褐色	第5号住No.8 15 g ＋12
第164図 No.12	土　玉	径 2.2×2.1×2.0 孔　0.4	完			緻密 良好 暗褐色	第5号住No.9 10 g ＋12
第164図 No.13	土　玉	径 2.8×2.8×2.4 孔　0.4×0.6	完			砂粒 良好 明黒褐色	第5号住No.10 20 g ＋ 2
164図 No.14	土　玉	径 2.6×2.4×2.0 孔　0.5×0.4	完			長石粒、砂粒 良好 明茶褐色	第5号住No.11 20 g ＋ 2

第96表　第4. 5号住居址出土遺物一覧表 2

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第164図 No.15	土　玉	径 2.3×2.0×2.0 孔　0.5×0.4	完			砂粒 良好 明茶褐色	第5号住No.12 10 g +11
第164図 No.16	土　玉	径 2.0×1.9×1.6 孔　0.3	完			砂粒 良好 黒褐色	第5号住No.13 10 g +34
第164図 No.17	土　玉	径 2.3×2.3×1.9 孔　0.6×0.4	完			小石、砂粒、粗 良好 暗褐色	第5号住No.14 15 g +19
第164図 No.18	土　玉	径 2.3×2.1×1.7 孔　0.5	完			小石、雲母、長石粒 良好 黒色	第5号住No.15 10 g +41
第164図 No.19	土　玉	径 3.5×3.5×3.2 孔　0.8×0.4	1／2			砂粒、粗 良好 暗褐色	第5号住No.16 10 g +13
第165図 No.20	土　玉	径 2.2×2.2×1.9 孔　0.6×0.4	完			石英、砂粒 良好 暗褐色	第5号住No.17 +20 10 g
第165図 No.21	土　玉	径 2.9×2.8×2.7 孔　0.7×0.4	完			砂粒 良好 暗褐色	第5号住No.18 +15 20 g
第165図 No.22	土　玉	径 2.8×2.5×2.2 孔　0.5×0.3	完			長石、雲母、砂粒 良好 暗褐色	第5号住No.19 +15 20 g
第165図 No.23	土　玉	径 2.2×1.9×1.7 孔　0.6×0.4	完			長石、石英 良好 暗褐色	第5号住No.20 +15 10 g
第165図 No.24	土　玉	径 2.9×2.3×2.1 孔　0.6×0.3	完			長石粒、砂粒 良好 暗褐色	第5号住No.21 +15 10 g
第165図 No.25	土　玉	径 2.1×1.9×1.6 孔　0.6×0.3	完			長石、砂粒 良好 暗褐色	第5号住No.22 +15 15 g
第165図 No.26	土　玉	径 3.0×2.7×2.4 孔　0.7×0.4	完			砂粒 良好 暗褐色	第5号住No.23 +15 20 g
第165図 No.27	土　玉	径 2.7×2.6×2.2 孔　0.9×0.4	完			長石、砂粒 良 暗褐色	第5号住No.24 +15 15 g
第165図 No.28	土　玉	径 2.4×2.3×2.1 孔　0.5×0.4	一部欠			緻密 良好 暗褐色	第5号住No.25 15 g +15
第165図 No.29	土　玉	径 2.7×2.4×2.2 孔　0.6×0.4	完			長石、砂粒、緻密 良好 暗褐色	第5号住No.26 15 g +15

第97表　第5号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第165図 No.30	土　玉	径 2.7×2.5×2.0 孔　0.6×0.3	完			砂粒 良好 暗褐色	第5号住No.27 +15 20 g
第165図 No.31	土　玉	径 2.8×2.8×2.3 孔　0.3×0.6	完			長石、石英 良好 暗褐色	第5号住No.28 +15 15 g
第165図 No.32	土　玉	径 3.0×3.6×2.1 孔　0.3×0.5	完			小石、砂 暗褐色	第5号住No.29 +15 25 g
第165図 No.33	土　玉	径 2.7×2.4×2.2 孔　0.6×2.4	完			長石、砂粒 良好 明褐色	第5号住No.30 +15 15 g
第165図 No.34	土　玉	径 2.4×2.4×2.0 孔　0.6×0.3	完			砂粒 良好 暗褐色	第5号住No.31 +15 15 g
第165図 No.35	土　玉	径 2.9×2.8×2.3 孔　0.7	完			砂粒 良好 暗茶褐色	第5号住No.32 +12 20 g
第165図 No.36	土　玉	径 2.7×2.5×2.2 孔　0.6×0.4	完			雲母、石英、砂粒 良好 暗褐色	第5号住No.33 +12 20 g
第165図 No.37	土　玉	径 2.2×2.1×1.6 孔　0.5×0.3	完			長石、砂粒 良好 明茶褐色	第5号住No.34 + 5 10 g
第165図 No.38	土　玉	径 2.9×2.6×2.0 孔　0.5×0.3	完			砂粒 良好 茶褐色	第5号住No.35 + 8 20 g
第165図 No.39	土　玉	径 2.9×2.9×2.2 孔　0.5×0.3	完			雲母、長石粒 良好 暗褐色	第5号住No.36 +17 20 g
第165図 No.40	土　玉	径 3.1×2.9×2.7 孔　0.8×0.5	完			石英、雲母、砂 良好 暗褐色	第5号住No.37 + 8 25 g
第165図 No.41	土　玉	径 2.8×2.7×2.1 孔　0.5×0.3	完			砂粒 良好 明褐色	第5号住No.38 + 7 15 g
第165図 No.42	土　玉	径 2.4×2.1×1.9 孔　0.6×0.4	完			小石、長石粒 良好 暗褐色	第5号住No.39 +20 10 g
第165図 No.43	土　玉	径 2.0×2.0×1.7 孔　0.5×0.4	一部欠			小石、砂粒 良好 黒色	第5号住No.40 床直　10 g
第165図 No.44	土　玉	径 2.6×2.4×1.7 孔　0.7×0.6	完			長石、石英、砂 良好 暗褐色	第5号住No.41 +16 20 g



第166図　第６号住居址実測図

第６号住居址（第166図）

本址は、Ｉ郭の北西部で第34、50号建物址に大部分を破壊されている。確認部分での大きさは、東西径3.20m、南北径3.40m、深さ0.12mを計測し、正方形状を呈している。方位は、Ｎ－８°－Ｅである。

床面は、比較的しっかりした貼床であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、カマドの部分以外全周しているようである。柱穴は、Ｐ１，２の２本確認されたのみである。カマドは北壁中央部に位置しているが、焚口と煙道は破壊されており、両袖と燃焼部を残す程度である。

燃焼部は、良く焼けており、焼土がしっかり残っている。暗赤褐色土が、これに相当する。

住居址の覆土は、暗褐色土がローム粒子を含みながら堆積しているのみである。出土遺物としては、土師器坏の小破片がごく少量検出されたのみで、図示可能な遺物は検出されなかった。本址の時期としては、出土遺物から奈良時代の住居址と判断される。

第7号住居址　（第167・168図、第98表）

本址は、I郭の南西部で南側土塁北側に位置しており、東西径4.75m、南北径4.85m、深さは南側で0.54m、カマド付近で0.15mを計測する。方位は、N－47°－Eである。本址は、I郭南西部にある浅い谷に面し、谷側にカマドを有するため北側が浅くなっており、正方形をなす。

床面は、柱穴内がしっかりした貼床で、柱穴から壁にかけては柔弱な床面となっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマドと貯蔵穴の部分を除き全周しており、幅0.20m、深さ0.04～0.06mを計測する。柱穴は、各コーナー付近で4本確認されている。

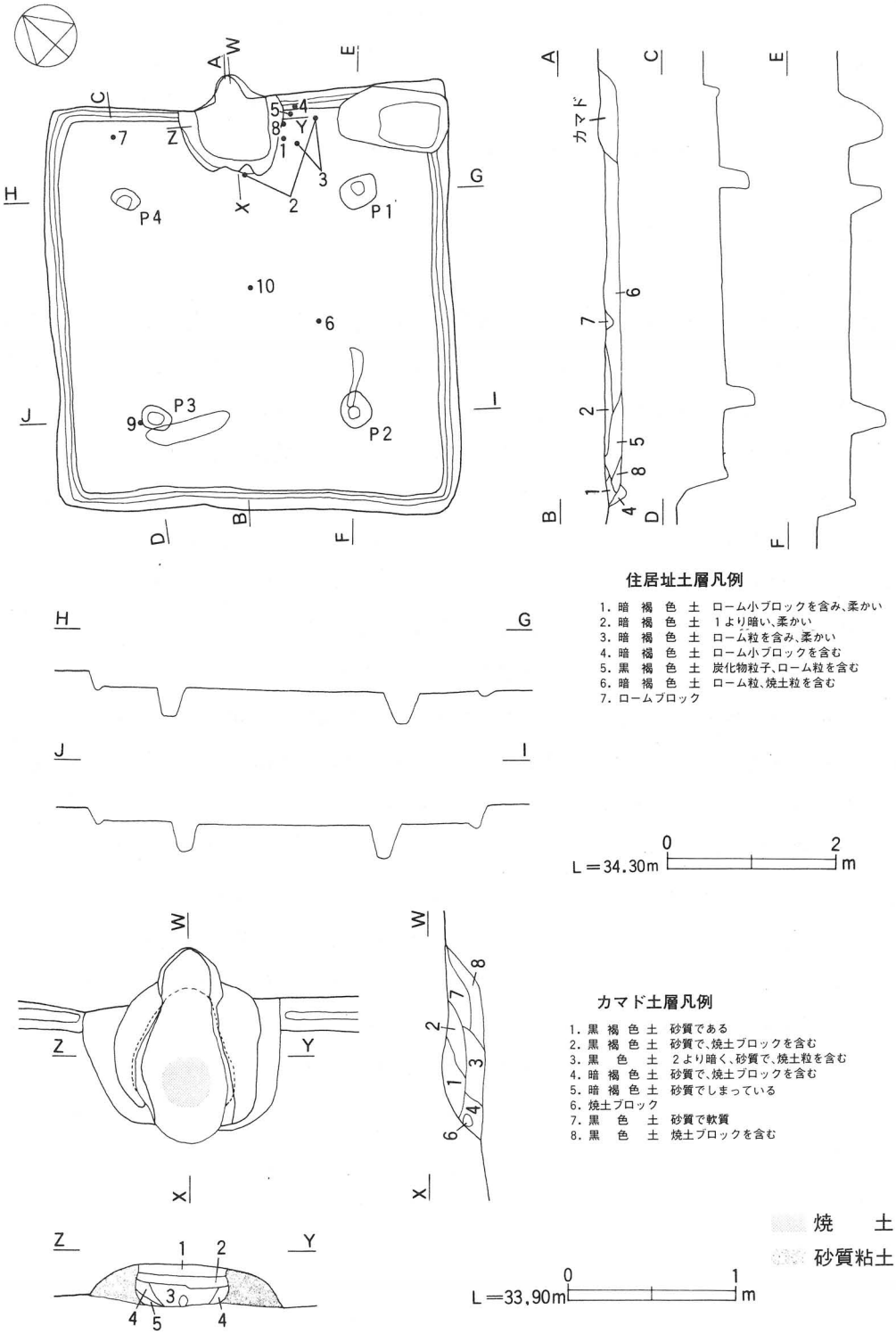
貯蔵穴は、住居址の北東コーナーに掘り込まれており、東西径1.30m、南北径0.73m、深さは0.69mを計測し、隅丸長方形状を呈している。底面は、ほぼ平坦であり壁は、北壁、南壁、東壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、西壁は斜めに掘り込まれている。

住居址の覆土は、暗褐色土と黒褐色土が堆積しており、暗褐色土が5層に細分される。これらの土層は、ローム小ブロックやローム粒子を含んでいる。また、貯蔵穴内には黒色土、黒褐色土、黄褐色土が、ローム粒子を含みながらレンズ状に堆積している。

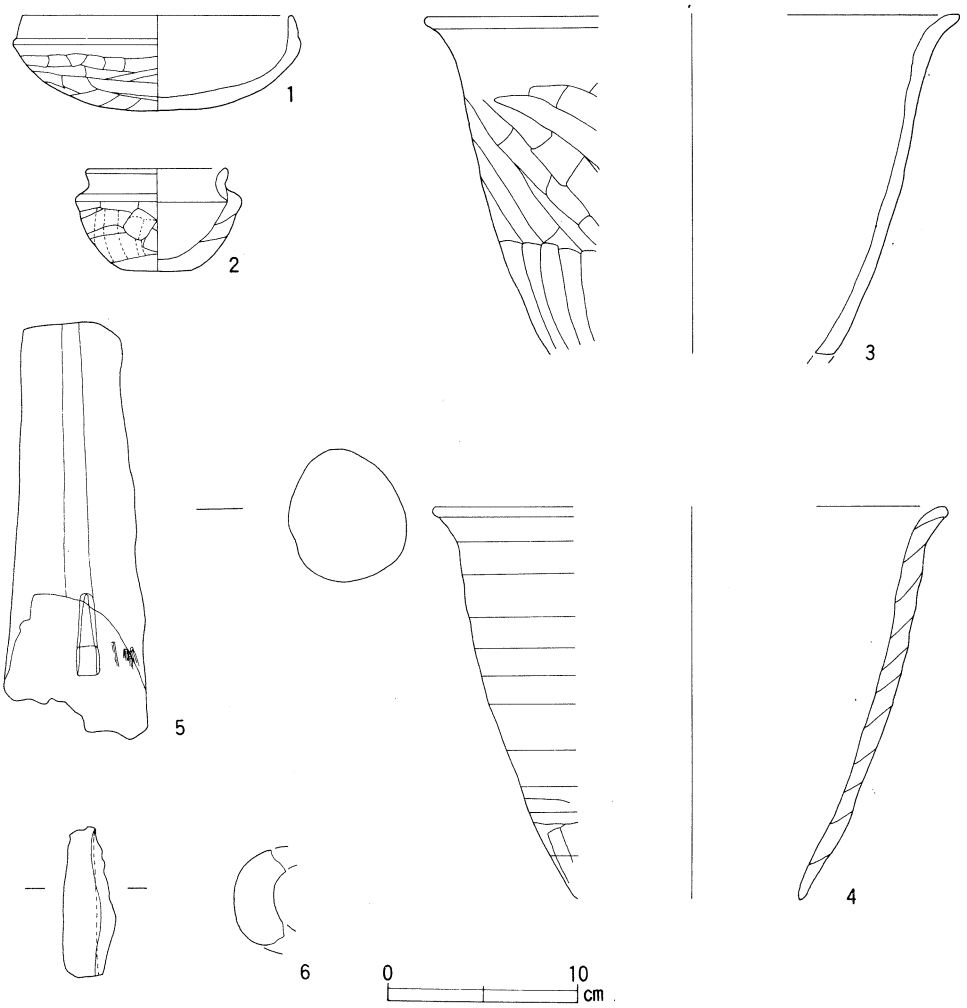
カマドは、北壁中央部に位置しており、長さ1.15m、幅1.15m、高さ0.25mを計測している。燃焼部はカマドの中央南側に位置し床面とほぼ同じ高さである。焼土は、カマドで確認されなかったが、3層に焼土粒子を含んでいる。燃焼部下のローム面は、あまり焼けていない。

出土遺物は、土師器坏、甕、壷、羽口、支脚、土玉などが検出されている。出土位置としてはカマド東側に集中しているようである。第170図が、本址の出土遺物である。No 1は、土師器坏で床面より検出され、No 6は羽口小片で床面上22cmの所より検出されている。No 3，4は土師器甑片である。No 7は、床面から検出された土製紡錘車の完型品である。No 8～10の3点は、土玉の完型品である。

出土遺物から本址の時期は、古墳時代後半に位置するようである。



第167図　第７号住居址実測図



第168図　第７号住居址出土遺物実測図

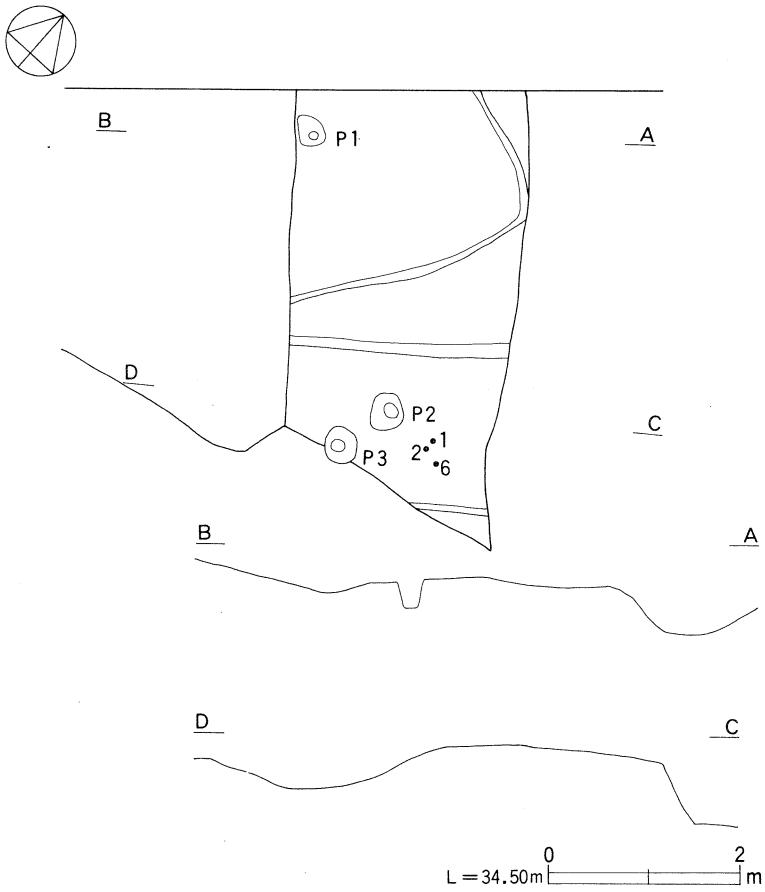
第98表　第７号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第168図 No.1	土師器 坏	A　14.2 B　5.0	完	体部は内傾ぎみに立ち上がり、低い陵線に到る。口縁部は、やや内傾ぎみで口唇部は水平	口縁部ヘラナデ 体部横位ヘラ削り 縦位ヘラ削り	小石、砂粒 良好 黒褐色、赤褐色化	床直
第168図 No.2	土師器 壷	A　7.2 B　5.4 C　4.0×3.7	2／3	底部は水平で体部は直線的に外傾、口縁部は内傾後外湾している。	口縁部ヘラナデ 体部縦位ヘラ削り、横位ヘラナデ底部ヘラ削り	小石、石英、砂粒 良好 暗茶褐色	手捏土器 ＋20
第168図 No.3	土師器 甑	A　28.0 B　17.7	1／5	体部は、内傾ぎみに外傾、口縁部は、外湾する。	口縁部横位ヘラナデ 体部右下りのヘラ削り後ヘラナデ、縦位ヘラ削り	長石、石英、砂粒 良好 暗褐色	＋ 6
第168図 No.4	土師器 甑	A　27.0 B　20.7 C　12.0	1／6	体部は、内傾ぎみに外傾、口縁部は、外湾している。	口縁部ヘラナデ 体部右下りのヘラ削 後ヘラナデ	長石、石英、雲母 良好 暗褐色一部黒色	＋ 6
第168図 No.5	支脚	高　21.5 巾　6.1 厚　6.8 軸　1.0		楕円形を呈しており下部に軸痕を有す。		粗 良好 赤褐色	下部欠損 ＋ 7
第168図 No.6	羽口片	長　7.9 孔　4.0	1／4	上下と中央以上を欠く隅丸方形状を呈している。		小石、雲母 良好 灰褐色、淡赤褐色	＋22
第168図 No.7	土　製 紡錘車	上径　2.5×3.0 下径　4.9×4.8 孔　0.6	完	台形状をなすが、側面は丸く造り出している。		長石、石英 良好（硬質） 暗褐色	床直
第168図 No.8	土　玉	径 2.7×2.3×2.3 孔　0.6	完			砂粒 良好 茶褐色	＋ 6 20ｇ
第168図 No.9	土　玉	径 2.6×2.4×2.3 孔　0.6	完			長石、石英、粗い 良好 茶褐色	床直 20ｇ
第168図 No.10	土　玉	径 3.4×3.2×3.0 孔　0.6×0.3	完			砂粒 良好 暗褐色	＋17 35ｇ

第８号住居址（第169図）

本址は、Ｉ郭の北西部で土塁Ｃの下に位置するが、東、西、南を第２号堀と３号堀に切られている。確認面での大きさは、東西径2.40m、南北径4.50m、深さ0.05mを計測する。方位は、Ｎ－40°－Ｗである。

床面は、しっかりした貼床で壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝、貯蔵穴、カマドは確認されなかった。柱穴は、３本確認されたのみである。出土遺物は、きわめて少なく土師器杯、



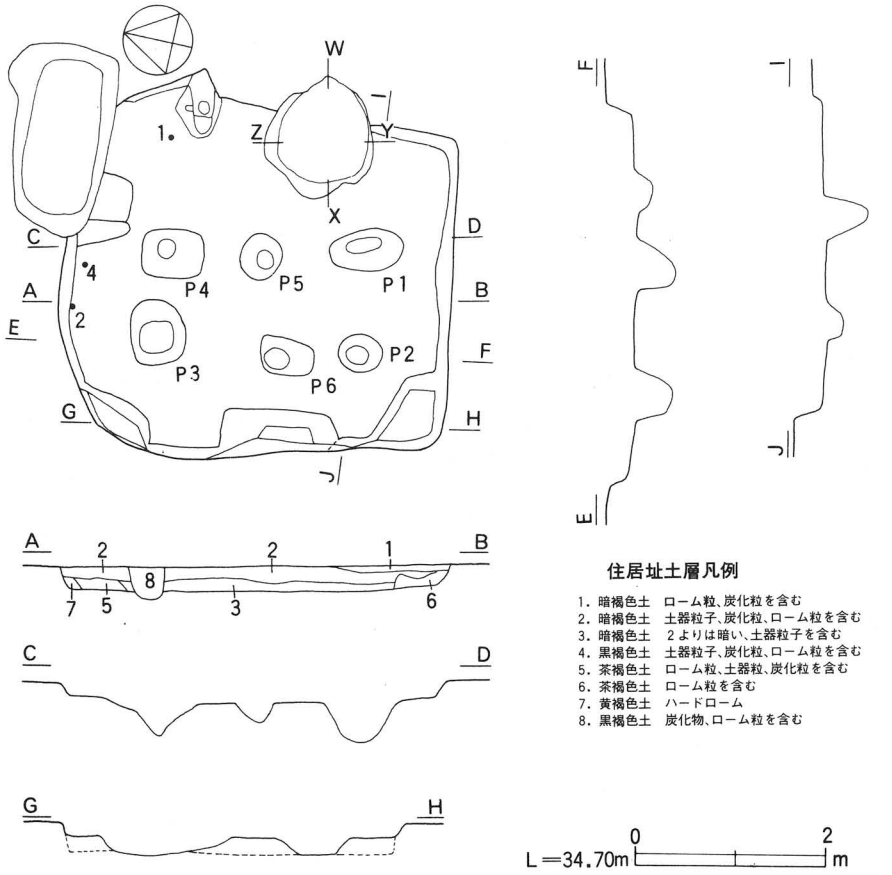
第169図　第８号住居址実測図

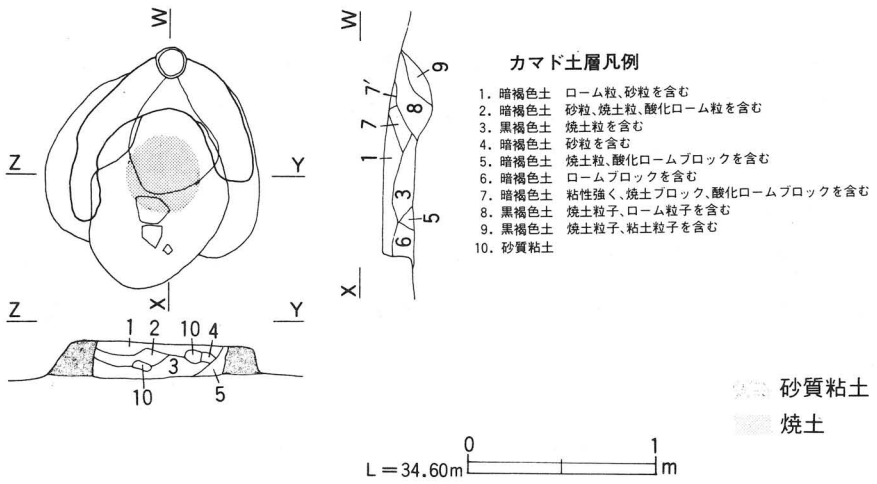
甕などが検出されたが、甕はNo６のみ図示可能な遺物で他は検出されてない。No１，２の２点は重なった状況で検出している。２点は、土師器杯は床面上10㎝の所から検出されている。No３，４，５の３点は、土師器坏で床面上10～15cmの所より検出された接合資料である。No６は、土師甕底部片である。

また、本址の北側には東西径2.20m以上、南北径3.00m以上で方形状をなす落ち込みがあるがこれは住居址であるか、土塁基底部の削平であるか断定することは出来ない。土層は、黒色土と黒褐色土が堆積している。

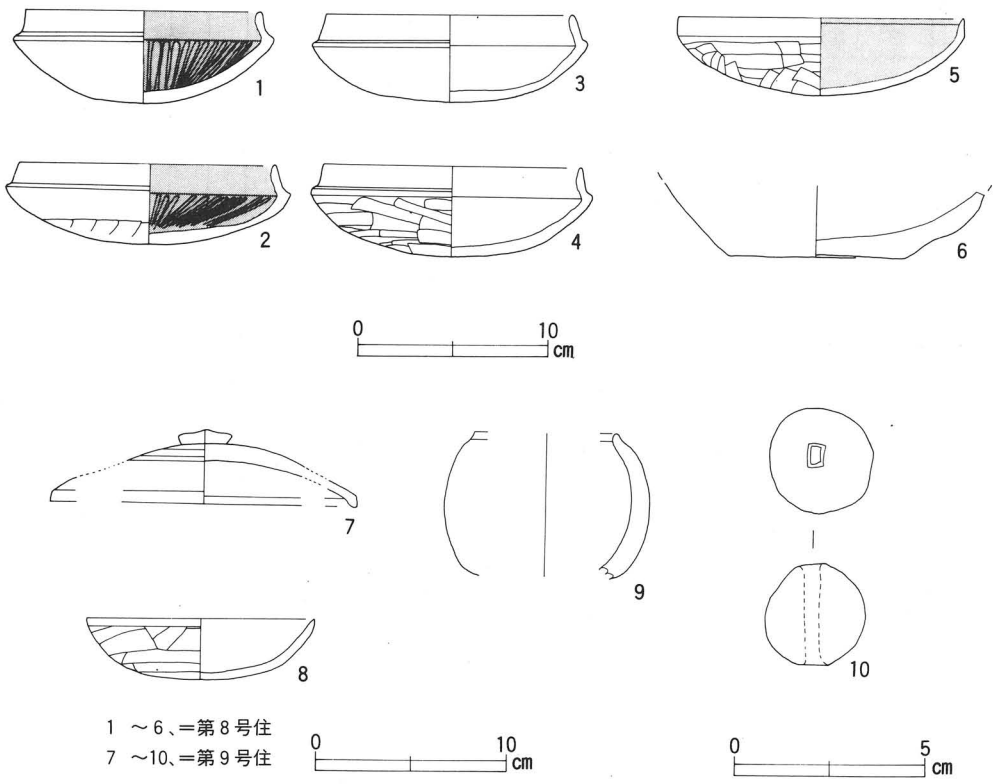
第９号住居址（第170・171図、表99表）

本址は、Ｉ郭の北東部中央に位置しており、中世の建物址や土壙と重複している。大きさは、





第170図　第９号住居址実測図



第171図　第8、9号住居址出土遺物実測図

東西径3.70m、南北径4.05m、深さ0.22mを計測し長方形状を呈している。方位は、N－85°－Eでほぼ東向きの住居址である。

床面は、しっかりした貼床であるが壁は、比較的柔弱である。壁溝は、確認出来なかった。柱穴は、中世建物址の柱穴が掘り込まれているため、本址に結び付く柱穴は確認出来なかった。本址の西壁部分は、北西コーナー、中央部、南西コーナーに張り出しを有している。高さは、床面から南西部が12cm、中央部が15cm、南西部が7cmを計測し、中央部のみが粘土を用いて構築している。

出土遺物は、土師器坏、甕、碗、須恵器坏蓋、土玉などが検出されているが、土玉以外全て破片である。第173図No7は、須恵器坏蓋片であり、No8は土師器坏である。No9は、土師器碗である。この3点は、床面上7～8cmの所から検出されており、本址に結び付く遺物と判断される。

カマドは、東壁中央南側に設けられており、長さ1.27m、幅1.10m、高さ0.15mを計測する。

第99表　第8・9号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第171図 No.1	土　師 坏	A　12.4 B　4.9 D　13.8	2／3	体部は、内傾しながら立ち上がり明確な陵に到る。口縁部は、内傾し、やや肥厚、陵は丸い。	口縁部は、横位のヘラナデで体部はヘラ削り、ヘラナデ、体部内面黒色処理、内面ナデ	緻密 良好 明茶褐色	第8号住No.1 一部磨滅 内面黒色
第171図 No.2	土師器 坏	A　13.6 B　4.2 D　15.0	完	体部は、内傾しながら明確な陵に到る。口縁部は、やや外湾ぎみに内傾する。陵は鋭い	口縁部ヘラナデ、体部横位ヘラナデ、体部内面黒色処理、ヘラナデ	雲母粒、緻密 良好 黒褐色	第8号住No.2 体部中央以下 磨滅 ＋ 8
第171図 No.3	土師器 坏	A　13.0 B　4.5 D　14.5	1／2	体部は、内傾ぎみに立ち上がり、陵に到る。陵は丸く、口縁部は、直線的に内傾する。	口縁部ヘラナデとヘラ削り 体部ヘラ削り後ヘラナデ	緻密 良好 明暗褐色で一部黒色	一括接合資料 第8号住No.3 ＋ 5
第171図 No.4	土師器 坏	A　13.6 B　4.7 C　14.9	1／2	体部は、内傾ぎみに立ち上がり、陵に到る。陵は丸く、口縁部は、外湾ぎみに内傾	口縁部ヘラナデ、ヘラ削り 体部ヘラ削後ヘラナデ	小石、砂粒 良好 淡黒褐色	一括接合資料 第8号住No.4
第171図 No.5	土師器 坏	A　15.0 B　4.1 B　4.1	1／3(欠)	体部は、内傾ぎみに立ち上がり、口縁部に到る。陵は無く、口縁部は直立	口縁部横位ヘラナデ 体部横位ヘラナデ 磨滅している。	密 良好 黒色（墨）	一括接合資料 内面黒色処理 第8号住No.5
第171図 No.6	土師器 甕	B　3.8 C　9.1×9.6	底部片	底部は、やや内傾ぎみで体部は内傾ぎみに外傾している。	底部は、ナデ 体部は、ヘラナデ	石英、砂粒、小石 良好 暗茶褐色	底面と体部が 一部磨滅 第8号住No.6
第171図 No.7	須恵器 坏蓋	A　16.0 B　3.9	1／3	体部は内傾で、口縁部は直立している。宝珠は、貼り付け	体部は、回転ヘラ削りとヘラナデ、口縁部は回転ヘラナデ	緻密 良好 灰褐色	第9号住No.1 宝珠径2.8×0.7 ＋ 7
第171図 No.8	土師器 坏	A　11.9 B　3.2	1／3	底部は、丸味を有し体部は直線的に外傾、口線部は鋭く削り出す	口縁部は、ヘラ削り 体部手持ヘラ削り後ヘラナデ、内面ヘラナデ	小石、雲母、砂粒 良好 明褐色	第9号住No.2 ＋ 8
第171図 No.9	土師器 碗	A　6.6 B　7.6	1／2 底部欠	底部を欠き、体部は球形をなし、口縁部は低く直立している。	体部は、ヘラ削り、ヘラナデ、口縁部はヘラナデ	小石、長石、石英 良好 暗褐色	第9号住No.3 内外磨滅 一括接合資料
第171図 No.10	土　玉	径 2.8×2.8×2.7 孔　0.7×0.5	完			緻密 良好 明褐色	第9号住No.4 ＋ 6 20ｇ

カマド内には、しっかりした焼土層はないが、第3層の黒褐色土（焼土粒子を多く含む）が燃焼部に相当するようである。煙道は、その先端が壁外へ0.45m突出しており、燃焼部から煙道出口へは0.09m下がってから、先端に至っている。カマド内からは、土師器甕片が3点検出されている。

本址の覆土は、暗褐色土、黒褐色土、茶褐色土、ロームブロックなどが堆積しており、暗褐色土は3層に、茶褐色土は2層に細分される。

出土遺物等から本址は、奈良時代に位置する住居址と判断される。

第10号住居址　（第172・173、第100表）

本址は、Ⅰ郭の中央北側で、第12号溝東側中央部付近に位置し、第11、16号住居址及び第13、57号土壙、そしてⅠ部北東部建物址郡などと重複している。前後関係は、本址が第16号居住址を切り、第11号住居址に切られている。土壙と建物址郡は、中世である。

本址の大きさは、東西径4.20m、南北径3.90m、深さ0.27mを計測し、長方形状を呈している。床面は、柱穴内はしっかりした貼床で、柱穴から壁にかけては比較的柔弱な床面となっている。壁溝は、カマド以外は全周しているようであり、柱穴はＰ１、３、４、５、６、の５柱穴が、本址に結び付く柱穴と判断される。貯蔵穴は、確認されなかった。方位は、Ｎ－30°－Ｗである。

土層は、暗褐色土が堆積しており、12層に細分される。堆積状況は、レンズ状堆積の範囲に含まれる状況と判断される。第13～18層は、中世建物址の柱穴土層である。

出土遺物としては、土師器坏、甕、鉄鏃、土玉などが、カマド周辺と住居址の南側に集中するようだが、No.２の坏と土玉が完型品として出土している。No.１は、土師器坏で床面より出土しているが、接合資料である。No.２は、住居址の中央部床面より出土した土師器坏で完型品である。No.３は、土師器甕で床面上5.5cmより出土しており、No４は鉄鏃先端部片ではほぼ床面よりの出土である。No５～14は土玉である。No６、８、12の３点は、床面と床面上３cmの所から出土しており、他は10cm以上の所から出土している。

カマドは、住居址の北壁中央付近に位置するが、北側を第13号土壙により破壊されている。確認部分での大きさは、長さ1.85m、幅1.78m、高さ0.25mを計測する。燃焼部は第３、４層の暗褐色土（焼土、炭化物、灰を含む）がこれに相当し、床面より６cm程度下がっている。煙道部は、土壙により破壊されている。第９、10層は、旧カマド（第16号住）の土層である。

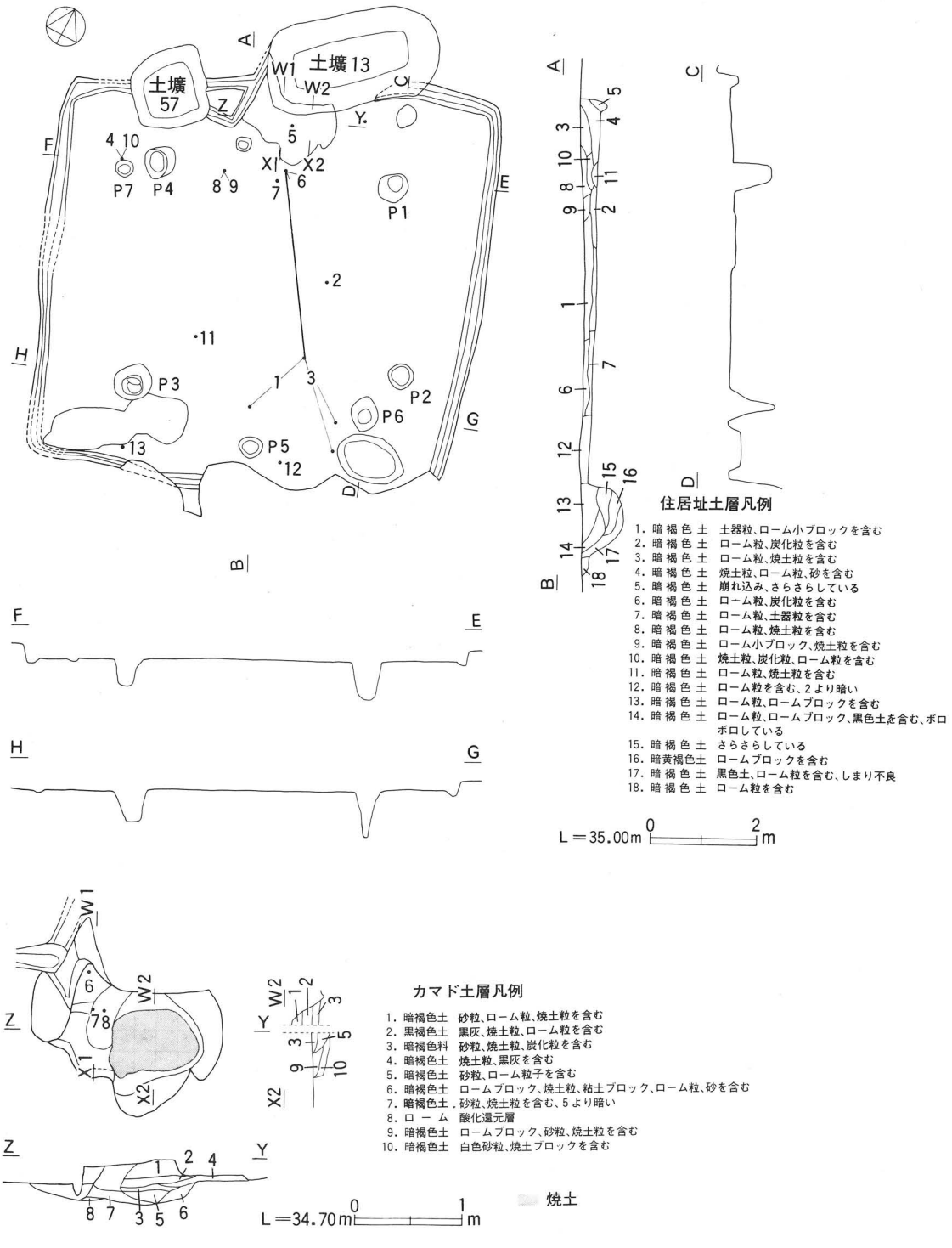
本址の時期は、出土遺物から奈良時代の住居址と判断される。

第11号住居址　（第174・175図、第101表）

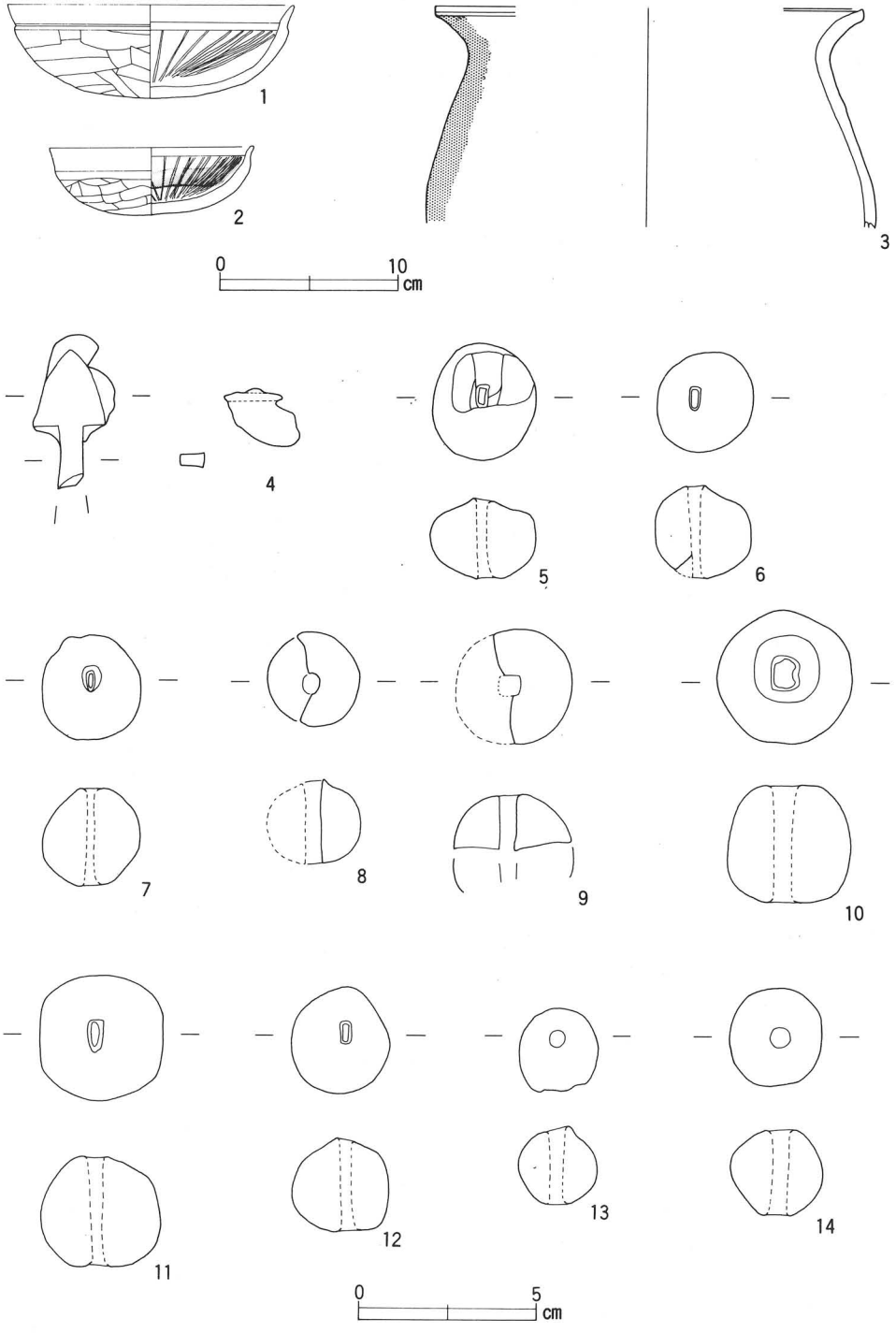
本址は、Ⅰ郭の中央北側で、第10号住居址と重複している。また、第13、57号土壙や中世建物址の柱穴が８～９本掘り込まれている。

本址の大きさは、東西径2.28m、南北径2.30m、深さ0.22mを計測し、正方形状を呈している。床面は、柱穴内はしっかりした貼床であるが、柱穴から壁にかけては比較的柔弱な床である。壁溝は、カマド以外全周しており、柱穴はＰ１～４までの４本が本址に結び付く柱穴と判断される。本址の方位は、Ｎ－０°－Ｅでほぼ真北を向いている。

土層は、暗褐色土が中心で５層に細分されるが、西側では一部黒色土と黒褐色土がローム粒子



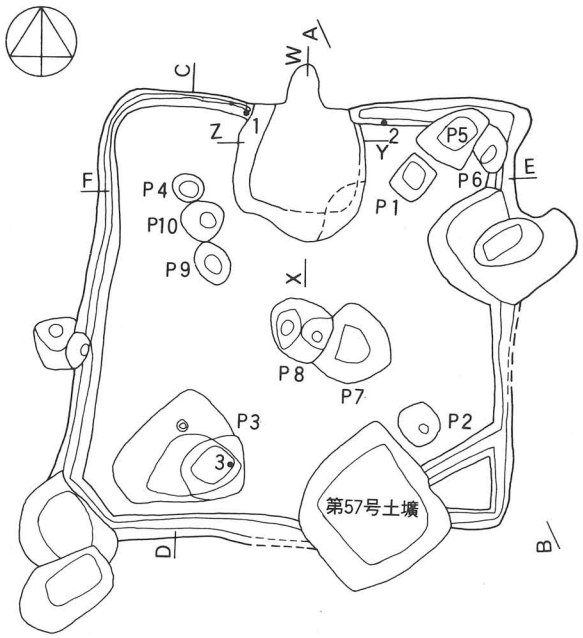
第172図　第10号住居址実測図

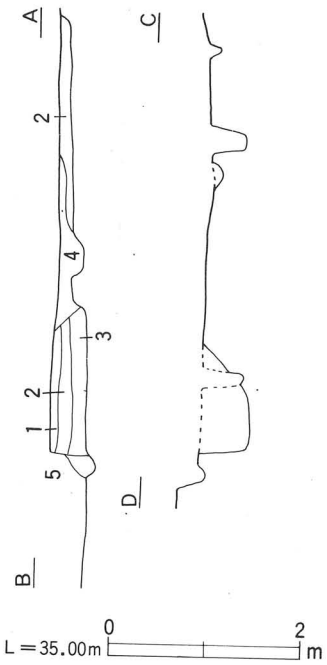


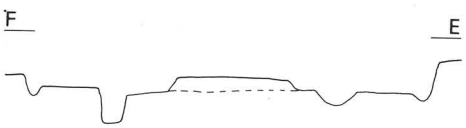
第173図　第10号住居址出土遺物実測図

第100表　第10号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第173図 No.1	土師器 坏	A　16.0 B　5.2 D　15.2	2／3	底部は、丸味を消し、体部は外傾し、陵は低くなっている。口縁部は直線的に外傾	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ、内面ヘラ磨き	長石、石英、砂粒 良好 暗褐色(一部赤褐)	No.1 器面一部磨滅 粗い胎土 床直
第173図 No.2	土師器 坏	A　11.5 B　3.8 D　11.0	完	底部は丸味を有し、体部は内傾ぎみに外傾、陵は痕跡のみで、口縁部はやや外傾	口縁部横位ヘラナデ 体部縦横ヘラ削り後ヘラナデ	長石、砂粒 良好 暗褐色	No.2 床直 体部下位煤付着 緻密な胎土
第173図 No.3	土師器 甕片	A　24.0 C　12.1	1／5	体部は、内傾しており口縁部は大きく外傾し口唇部内面やや直立ぎみ	体部は、ヘラ削りとヘラナデ、口縁部はヘラ削り、ヘラナデ	小石、長石、石英 良好 暗褐色	No.3 体部に煤付着 接合資料 ＋5.5
第173図 No.4	鉄鏃	長　2.1 巾　2.1 厚　0.3	片	茎部を欠き、先端部のである。先端は、三角形をなしている。			No.4 ＋ 1
第173図 No.5	土　玉	径 2.9×3.3×2.3 孔　0.6×0.3	完			小石、長石、石英 砂粒粗い　良好 暗褐色	No.5 20 g ＋11
第173図 No.6	土　玉	径 2.7×2.8×2.6 孔　0.3×0.7				密 良好 暗褐色	No.6 カマド内 20 g 床直
第173図 No.7	土　玉	径 2.8×2.9×2.8 孔　0.2×0.6	完			密 良好 暗褐色	No.7 カマド内 25 g　＋11
第173図 No.8	土　玉	径 2.6×2.7×2.4 孔　0.5	1／2			密 良好 暗褐色	No.8 カマド内 10 g 床直
第173図 No.9	土　玉	径　3.2 孔　0.6×0.5	1／4			密 良好 明褐色	No.9 10 g ＋11
第173図 No.10	土　玉	径 3.8×3.7×3.3 孔　0.7×1.0	完			小石、長石、石英 砂粒粗い　良好 暗褐色	No.10 45 g ＋11
第173図 No.11	土　玉	径 3.5×3.4×3.1 孔　0.9×0.5	完			砂粒、粗い 良好 黒褐色	No.11 40 g ＋11
第173図 No.12	土　玉	径 2.7×3.0×2.6 孔　0.6×0.4	完			小石、長石、粗い 良好 暗褐色	No.12 20 g ＋ 3
第173図 No.13	土　玉	径 2.2×2.3×2.2 孔　0.4×0.5	完			小石、砂粒、長石 良好 暗褐色	No.13 20 g ＋27
第173図 No.14	土　玉	径 2.7×2.6×2.4 孔　0.6	完			粗い 良好 暗褐色	No.14 20 g

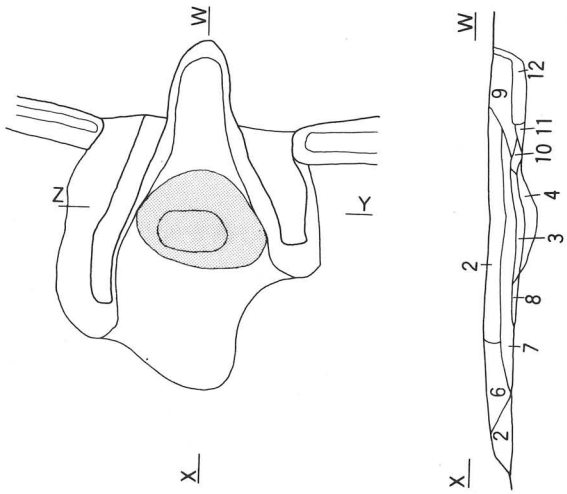






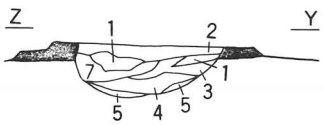
住居址土層凡例

1. 暗褐色土　ローム粒子を含む
2. 暗褐色土　1より暗い、ローム粒子を含む
3. 暗褐色土　2より暗い、ローム粒子を含む
4. 暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを含む
5. 暗褐色土　崩れ込み、さらさらしている



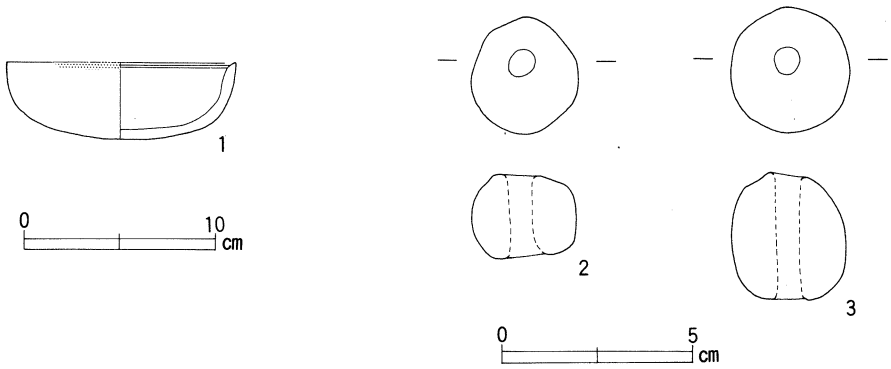
カマド土層凡例

1. 焼　　土　砂を含む
2. 白色粘土
3. 暗褐色土　砂粒、焼土粒を含む
4. 焼　　土　ロームブロックを含む→酸化還元層
5. ロ　ー　ム　酸化還元層
6. 暗褐色土　ローム粒子を含む
7. 暗茶褐色土　砂粒、焼土、炭化物を含む
8. 黒　色　灰
9. 黒　色　砂　煙道で焼土粒子を含む
10. 暗褐色砂　焼土粒子を含む
11. 暗褐色土　ロームブロックを含む
12. 暗褐色砂　焼土粒子、炭化粒を含む



焼土
砂質粘土
L＝34.60m
0
1
m

第174図　第11号住居址実測図



第175図　第11号住居址出土遺物実測図

第101表　第11号住居址出土遺物一覧表

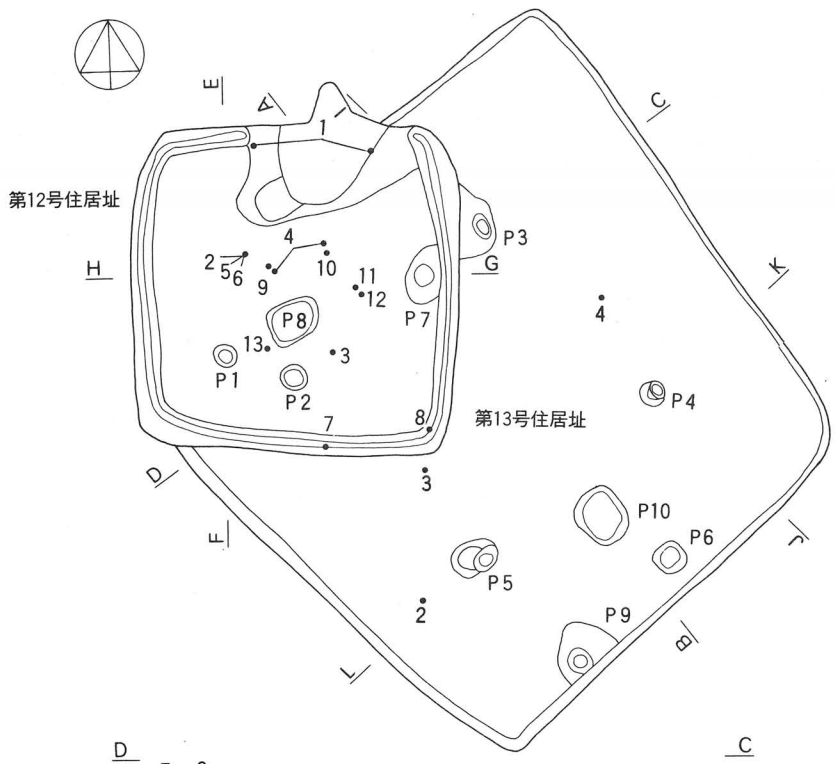
挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第175図 No.1	土師器 坏	A　12.0 B　3.9	2／3	底部は、丸底で体部は内傾ぎみに直立する。口縁部は、削り出す	口縁部ヘラナデ 体部ヘラナデ 口縁部内面ヘラ削り	小石、砂粒 良好 暗褐色	No.1 口唇部一部煤付着、緻密な胎土 表内磨滅 床直
第175図 No.2	土　玉	径 3.0×2.8×2.2 孔　0.7×0.5	完			長石、石英、砂粒 良好 暗茶褐色	No.2 35ｇ ＋10
第175図 No.3	土　玉	径 3.3×3.1×3.4 孔　0.7	完			小石、長石、砂粒 良好 暗茶褐色	No.3 20ｇ ＋16

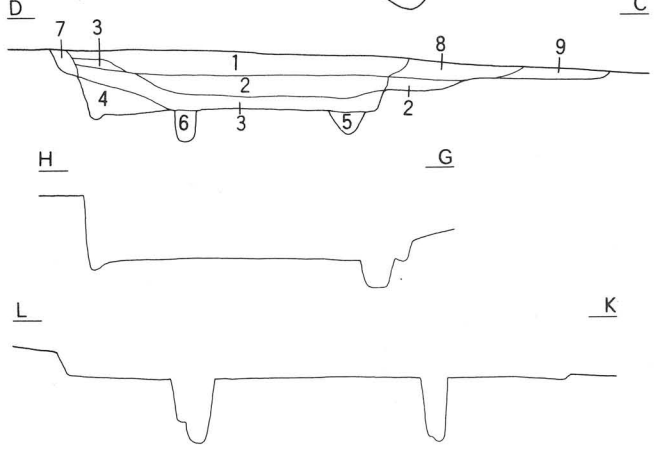
を含みながら堆積している。

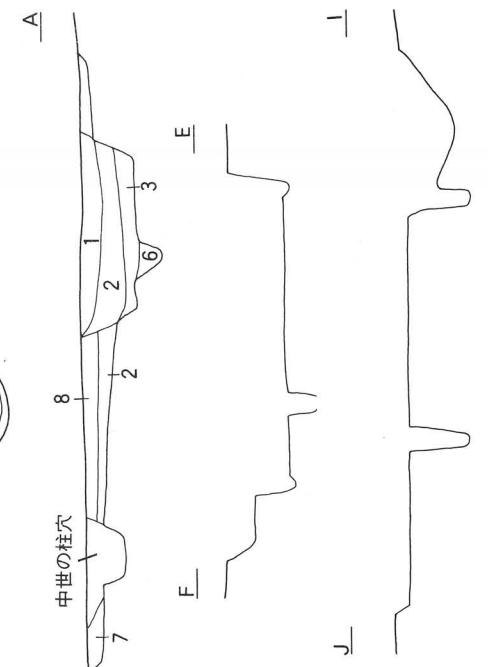
カマドは、北壁のほぼ中央部に位置しており、長さ1.85m、幅1.40m、高さ0.10mを計測し、煙道先端は壁から0.42mほど突出してる。焚口から煙道部までが、床面とはぼ同一面上に位置している。燃焼部は、カマドの中央部に位置し8㎝程度下がっており、この部分に焼土（第4層）が厚く堆積しており、焼土下のローム層も良く分解している。煙道部は、第12層がこれに相当する。燃焼部から、北側へ0.55m延びた後ほぼ垂直に立ち上がっている。袖は、砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物は、土師器坏、甕、土玉などが出土しているが、完型品は土玉のみである。甕は、体部の破片のみである。図示したのは、坏（第177図、No１）、土玉（第177図、No２、３）のみである。No１は、床面より出土しており、No２、３は床面上10～16㎝の所より出土している。

本址の時期は、奈良時代～平安時代にかけての住居址と判断される。



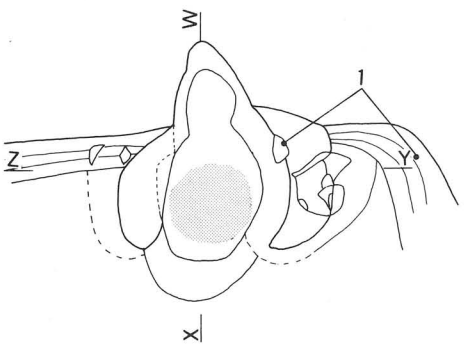


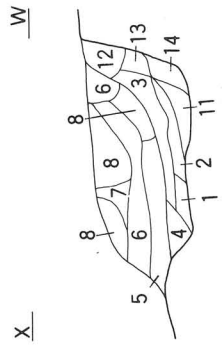


住居址土層凡例

1. 暗褐色土　ローム粒、土器粒、黒色土粒を含む
2. 暗褐色土　ローム粒、ローム小ブロックを含む
3. 暗褐色土　ローム小ブロックを含む
4. 暗褐色土　ローム ブロックを含む
5. 黒褐色土　13号住柱穴
6. 黒褐色土　12号住柱穴
7. 褐 色 土　土器粒を含む
8. 黒 色 土
9. 褐 色 土　ローム粒を含む

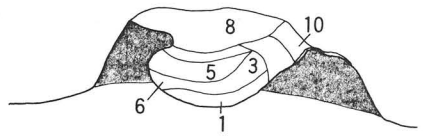
L＝35.20m　0　2　m





カマド土層凡例

1. 焼　　土
2. 黒褐色土　焼土粒子を含む
3. 黒褐色土　焼土粒子を含む
4. 黒褐色土　焼土粒子を含む
5. 暗褐色土　ロームブロック、焼土粒子を含む
6. 暗褐色土　焼土粒子を含む
7. 暗褐色土　粘土質で6より暗い
8. 粘　　土　黄色砂質粘土で、ロームブロック、黒色土粒を含む
9. 暗褐色土　粘土質で袖をなす
10. 暗褐色土　粘土粒子を含み、袖をなす
11. 黒 色 灰　灰、砂を含む
12. 暗褐色土　粘土粒、ローム粒を含む
13. 暗褐色土　褐色土、ロームを含む
14. 暗褐色土　褐色土ブロックを含む、13より暗い



L＝35.00m　0　2　m

焼土
砂質粘土

第176図　第12、13号住居址実測図

第12号住居址（第176・178図、第102表）

本址は、Ⅰ郭の中央北側に位置しており、第13号住居址を掘り切っている。大きさは、東西径3.50m、南北径3.45m、深さ0.70mを計測し、隅丸方形状を呈している。方位は、N－5°－Eであるため、ほぼ真北を向いているものと判断される。

床面は、中央部はしっかりした貼床であるが、壁溝付近は比較的柔弱である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマド以外全周している。幅は、0.22～0.25mで深さが0.07mを計測する。柱穴は、Ｐ１以外本址に結び付く柱穴は確認出来なかった。カマドは、北壁中央東側に位置している。

土層は、暗褐色土が４層に細分されながらレンズ状に堆積しており、中央部には黒色土が堆積している。

カマドは、北壁の中央東側に位置しており、保存状況は比較的良好である。大きさは、長さが1.35m、幅1.35m、高さ0.45mを計測し、煙道部先端は壁から0.45m突出している。燃焼部は、カマドの中央南側に位置し床面より11㎝下がっており、焼土層の堆積が見られる。焼土層の先端には、灰層（第11層）が堆積している。煙道部は、はぼ垂直に立ち上がり暗褐色土（第12～14層）が堆積している。焼土下のローム層は、良く分解している。裾は、黄白色砂質粘土、白色砂質粘土を用いて構築している。

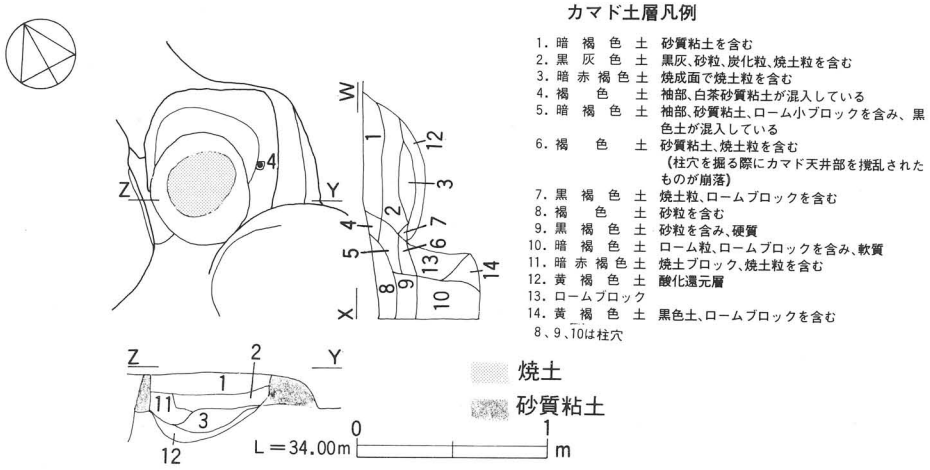
出土遺物としては、カマドの両側と中央部から集中して土師器坏、甕、高坏脚、土玉などが出土し、カマド内から土師器甕が出土しているが、床面出土遺物は無く床面上８㎝の所より出土した土師器坏（第180図、No３）が最深部出土遺物であり、この次が床面上10㎝より出土したNo２、６（第180図、No２、４、６）があるのみで、他は全てこの上位から出土している。この事から、これらの遺物は本住居址廃棄後まもなくして流入したものと判断される。第180図No１は土師器坏の完型品で、床面上23㎝の所より出土し、No４は甕で床面上37㎝より、No７、８は土師器高坏脚でNo８は、上の坏に対し裾の小さな器型となっている。No９～13は、土玉である。

出土遺物から、本址は奈良時代に位置する住居址と判断される。

第13号住居址（第176・179図、第103表）

本址は、Ⅰ郭の中央北側で第12号住居址に北西部を掘り切られている。大きさは、東西径5.55m、南北径5.85m、深さ0.30mを計測し、不整方形状を呈している。方位は、N－37°－Wである。

床面は、比較的柔弱な直床であり壁は、ほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は認められない。カマドは第12号住居址により消失している。柱穴は、全部で７本確認されたがＰ２～６の５柱穴



第177図　第14号住居址実測図

が本址に結び付く柱穴と判断される。Ｐ５は、建替がある。

土層は、褐色土と黒色土が堆積しており、褐色土が２層に細分される。この土層は、ほぼレンズ状に堆積しているものと判断される。

出土遺物としては、土師器坏、甕、土玉などが出土しているが、数量的には比較的少量で、第181図No14～16の３点が図示可能な遺物である。No14、15は、床面上５～６㎝の所より出土しており、No16は床面より出土している。

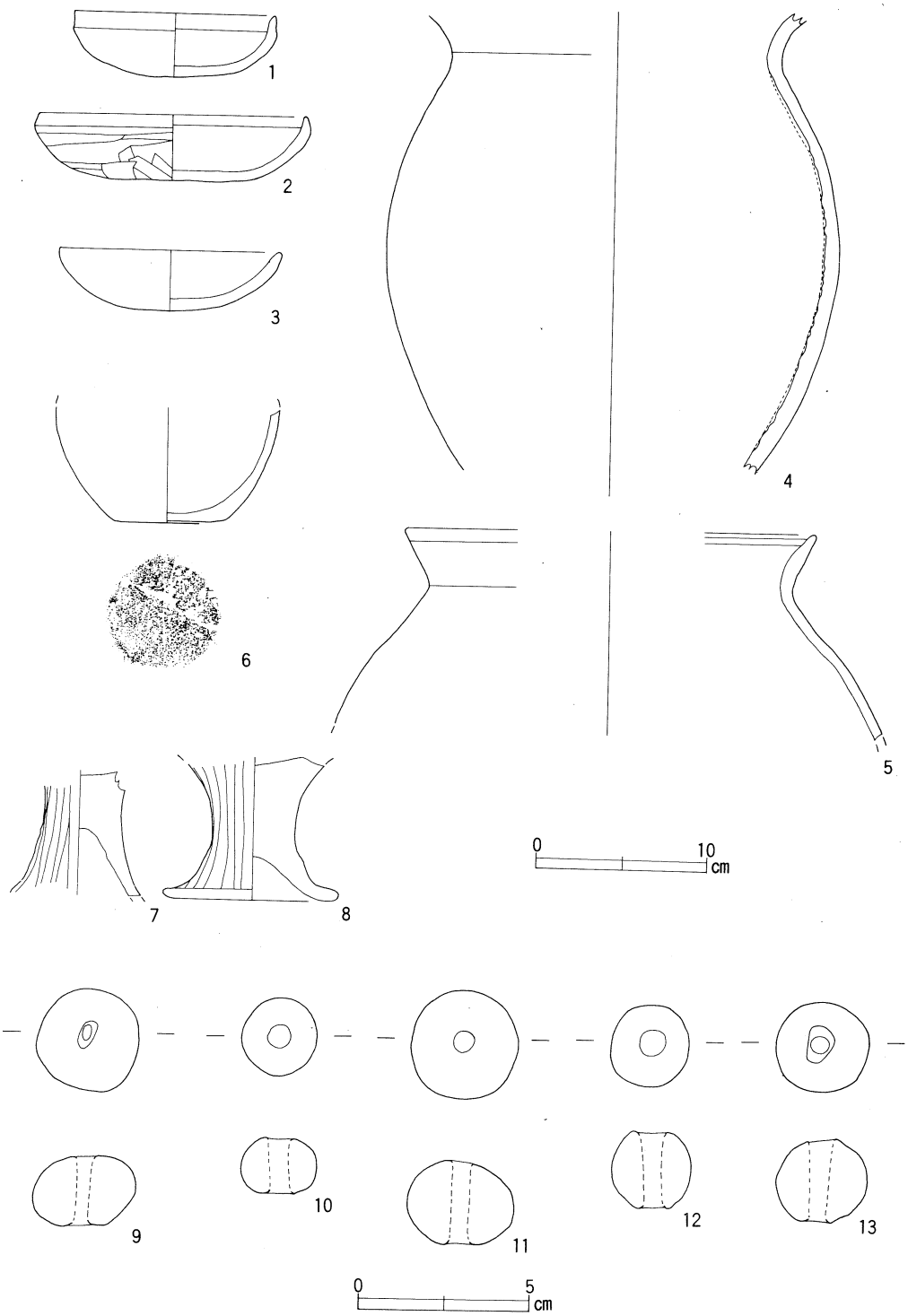
本址の時期は、出土遺物より奈良時代の住居址と判断される。

第14号住居址（第177・179図、第103表）

本址は、Ｉ郭の北東部建物址郡内に位置しているため、遺構のほとんどが破壊され、カマドが遺存した程度である。カマドそのものも、上面、煙道部は消失している。

大きさは、長さ1.80m、幅1.00m、高さ0.37mを計測する。燃焼部は、上面より0.27m下位に位置し良く焼けており、下位のローム層は良く分解している。袖は、白色砂質粘土と砂質暗褐色土を用いて構築している。

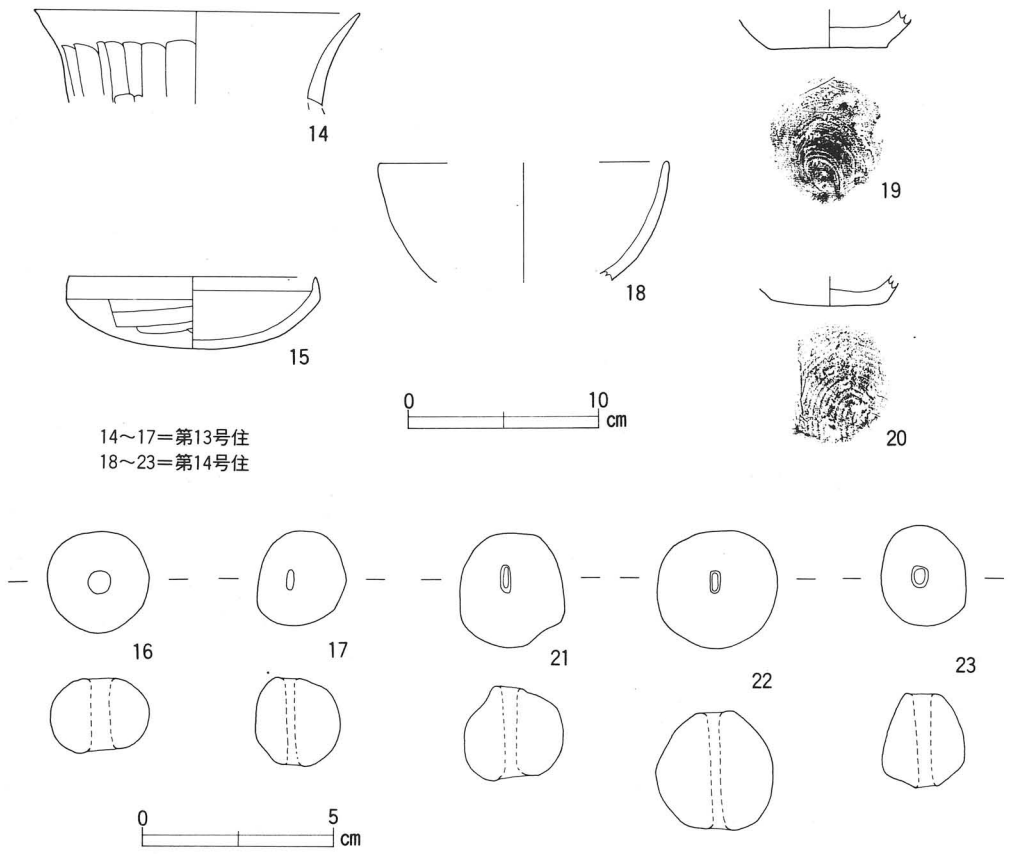
出土遺物としては、カマド付近より少量の土師器坏片、甕片、土玉、中世品が少量出土した程度である。第181図には、中世品と土玉を図示したが、坏や甕は小破片であることから図示不能である。土師器から、本址は奈良時代以降の住居址と推定される。



第178図　第12号住居址出土遺物実測図

第102表　第12号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第178図 No.1	土師器 坏	A　11.8 B　3.6 D　12.0	完	底部は、平底ぎみで体部は、内傾ぎみに立ち上がり、陵は低くなっている。口縁部は直立	口縁部横位ヘラナデ 体部内外ヘラナデ	緻密 良好 淡黒色	No.1 ＋23
第178図 No.2	土師器 坏	A　15.6 B　3.9 D　16.0	1／4	底部は平底で、体部は内傾ぎみに外傾し、口縁部は直線的に内傾	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ　内面ヘラナデ	緻密 良好 黒褐色	No.2 内外一部磨滅 ＋10
第178図 No.3	土師器 坏	A　13.0 B　3.5	1／3	体部から口縁部にかけ、内傾している。	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラナデ	小石、長石、石英 砂粒、良好 淡黒色	No.3 内外磨滅 ＋ 8
第178図 No.4	土師器 甕	B　27.0 胴径 26.3	1／3	体部は、内傾しながら立ち上がり、口縁部は外湾	口縁部回転横位ヘラナデ、体部縦位のヘラナデ、端整	石英、小石、雲母粒 長石粒、粗い 良好 暗褐色	No.4 内外磨滅で内面著しい。 ＋37
第178図 No.5	土師器 甕	A　24.0 B　12.0	1／3	体部は、内傾しながら立ち上がり、口縁部は直線的に外傾	口縁部、体部ともヘラナデ、口縁部内面ヘラ削り	小石、石英、雲母、 粗い、良好 暗褐色	No.5 ＋10
第178図 No.6	土師器 碗	B　6.7 C　6.3 胴径　13.2	1／2	底部は、内傾でやや薄い器肉、体部は内傾しながら立ち上がる。	体部は、ヘラ削り、ヘラナデ、内面ナデ	小石、砂粒 良好 暗茶褐色	No.6 底部木葉痕 粗い胎土　＋10
第178図 No.7	土師器 高坏 脚部	B　7.3		緩やかに外反している。	表面は、縦位ヘラ削り、ナデ、内面は、ヘラナデ	小石、砂粒 良好 暗褐色	No.7 ＋35
第178図 No.8	土師器 高坏 脚部	B　7.8 C　10.4		脚上面は大きく外反し脚下面は小さく外反し裾部は小さく外開き	縦位のヘラ削り後ヘラナデ、内面はヘラナデ	雲母、長石、石英の各粒でやや粗い 良好 暗褐色	No.8 ＋13
第178図 No.9	土　玉	径 3.0×3.0×2.0 孔　0.3×0.5	完			密 良好 淡黄褐色	No.9 ＋40 20 g
第178図 No.10	土　玉	径 2.2×2.3×1.7 孔　0.7	完			密 良好	No.10 ＋40
第178図 No.11	土　玉	径 3.1×3.2×2.4 孔　0.5	完			密 良好 暗褐色	No.11 ＋57 25 g
第178図 No.12	土　玉	径 2.4×2.3×2.2 孔　0.7	完			長石粒 良好 暗茶褐色	No.12 ＋57 20 g
第178図 No.13	土　玉	孔 2.7×2.6×2.5 孔　0.5	完			砂粒 良好 暗茶褐色	No.13 ＋56 20 g



第179図　第13、14号住居址出土遺物実測図

第103表　第13・14号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第179図 No.14	土師器	A　17.0 B　4.9		体部欠損している 頸部から口縁部緩やかに外湾している。	口縁部位ヘラナデ　頸部表は縦位ヘラ削り、内面ヘラナデ	粗 良好 暗褐色	第13号住No.1 +5
第179図 No.15	土師器 坏	A　13.0 B　3.7 C　13.3	2／3	底部は水平ぎみで体部は内傾ぎみに立ち上がり陵はなし口縁部は内傾ぎみに直立	口縁部横位ヘラナデ 体部は内外ヘラナデ	小石、長石粒、粗い石英粒 悪	第13号住No.2 +6
第179図 No.16	土　玉	径 2.7×1.9 孔　0.5				粗 良好 暗褐色	第13号住No.3 床直 15 g
第179図 No.17	土　玉	径 2.3×3.5×3.4 孔　0.5×0.2	完			密 良好 茶褐色	第13号住No.4 +24 15 g
第179図 No.18	茶碗片	A　15.0 B　6.1		体部は内傾ぎみに立ち上がり口縁部は水平	体部は回転ヘラ削り後施釉している 釉は薄く淡緑色	灰白色 淡緑色	第14号住No.1 中世品 一括接合資料
第179図 No.19	カワラケ	B　2.0 C　6.3		底部は水平ぎみでやや突出し体部は内傾ぎみに外傾する。	体部内外面ヘラナデ底部回転糸切り	密 良好 表　暗褐色 内　黒色	体部上半欠損 流入品で城址関係遺物 第14号住No.2
第179図 No.20	カワラケ	B　6.2 C　1.6		底部は、やや外湾ぎみであり内面は削出しで中央肥厚体部は内傾ぎみ	体部内外面ヘラナデ底部回転糸切り	石英粒、長石粒 良好 茶褐色	体部上部欠損 流入品で城址関係遺物 一括接合資料 第14号住No.3
第179図 No.21	土　玉	径 3.0×2.7×2.5 孔　0.7×0.3	完			雲母、長石粒 良好 暗褐色	第14号住No.4 一括接合資料 20 g
第179図 No.22	土　玉	径 3.1×3.2×3.1 孔　0.6×0.3	完			長石粒、石英粒粗い、雲母粒 良好 明褐色、一部黒色	第14号住No.5 一括接合資料 30 g
第179図 No.23	土　玉	径 2.6×2.3×2.5 孔　0.5×0.6	完			密 良好 明褐色	第14号住No.6 一括接合資料 15 g

第15号住居址（第180・184図、第104表１・２）

本址は、Ｉ郭の北東部で第５号堀に東側を掘り切られ、南側は一部撹乱を受けている。大きさは、東西径3.05m、南北径4.60m、深さ0.15mを計測し、不整方形状を呈するものと推定される。方位としては、Ｎ－17°－Ｗである。なお、本址は土塁口の下位に位置する。

床面は、柱穴内はしっかりした貼床であるが、柱穴から壁にかけては比較的柔弱である。壁は

ほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝は幅0.25～0.30m、深さ0.06～0.10mの大きさで掘り込まれているが、カマドと北西コーナー付近には掘り込まれておらず、南側は壁とともに消失している。柱穴は、Ｐ１～４まで４本確認した。また、西壁の一部は第９号住居址カマドにより切られており、Ｐ４には焼土が流入している。

土層は、黒色土、黄褐色土、黒褐色土が堆積しており、黒褐色土が４層に黄褐色土が５層に細分される。第１層の赤褐色土は、第９号住居址のカマド土層である。また、本址は土塁口の下位に位置するため、比較的しまっている。

カマドは、上面を破壊されている。大きさは、長さ1.10m、幅1.00m、高さ0.15mを計測する。燃焼部は、カマド中央部に位置している。焼土層は、認められなかったが第２層が燃焼部に相当する部分と判断され、床面より２～３㎝下がっている。下位のローム層は、あまり分解していない。袖は、白色砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物としては、土師坏片、甕片、須恵器坏片などが出土しているが、土玉以外は全て破片である。第186図、No１は、土師器坏でＰ４内より出土しており、同図No２は須恵器坏片で床面上15㎝の所より出土している。同図、No10の土玉は、完型品であるが覆土上層より出土している。

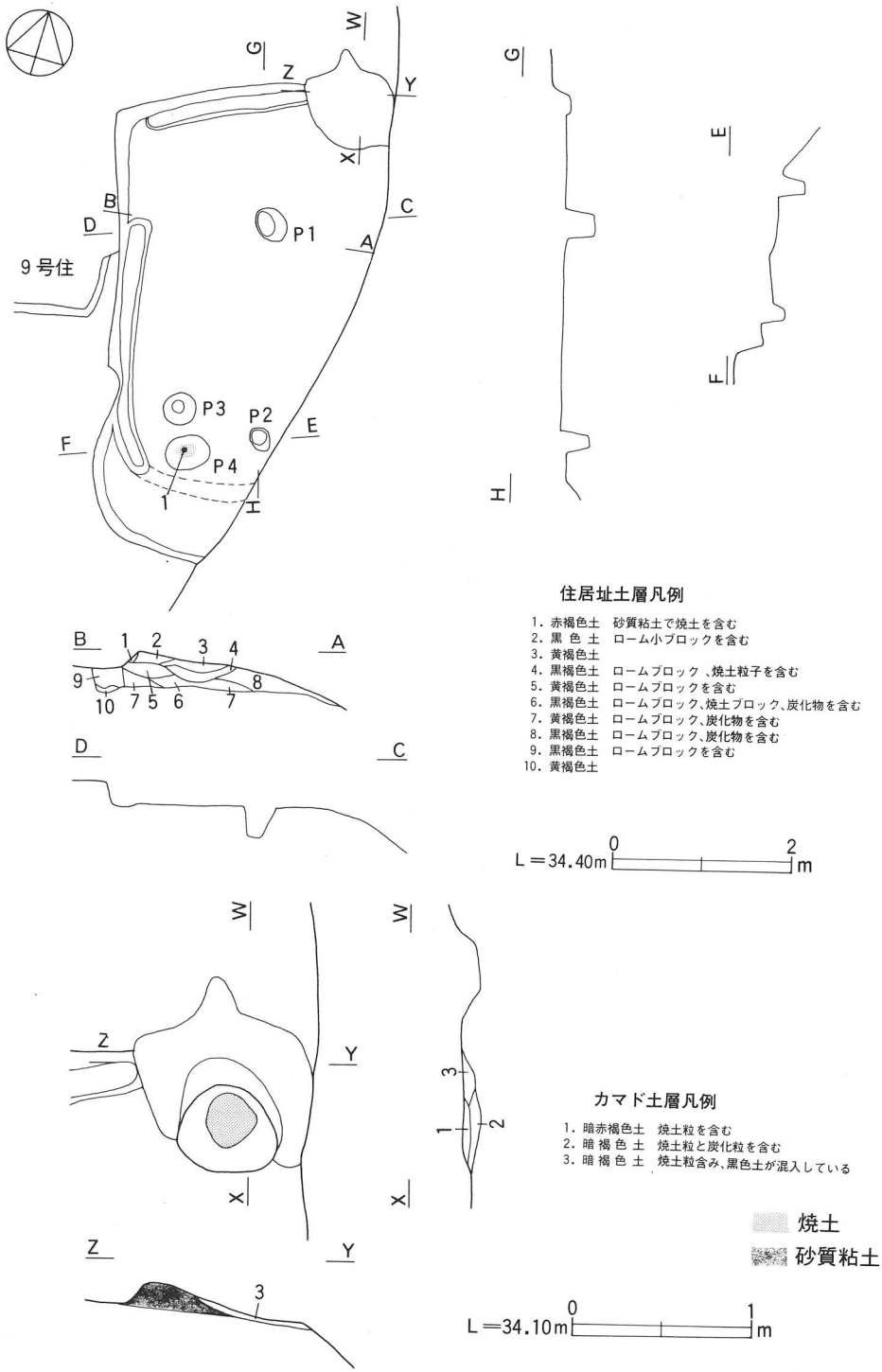
第16号住居址（第181・184図、第104表１・２）

本址は、Ｉ郭の中央北側で第10号住居址の下位で確認された住居址で、北西壁と西壁は確認出来なかった。大きさは、推定東西径6.12m、南北径6.00m、深さ0.10mを計測し、正方形状を呈している。方位は、Ｎ－30°－Ｗである。

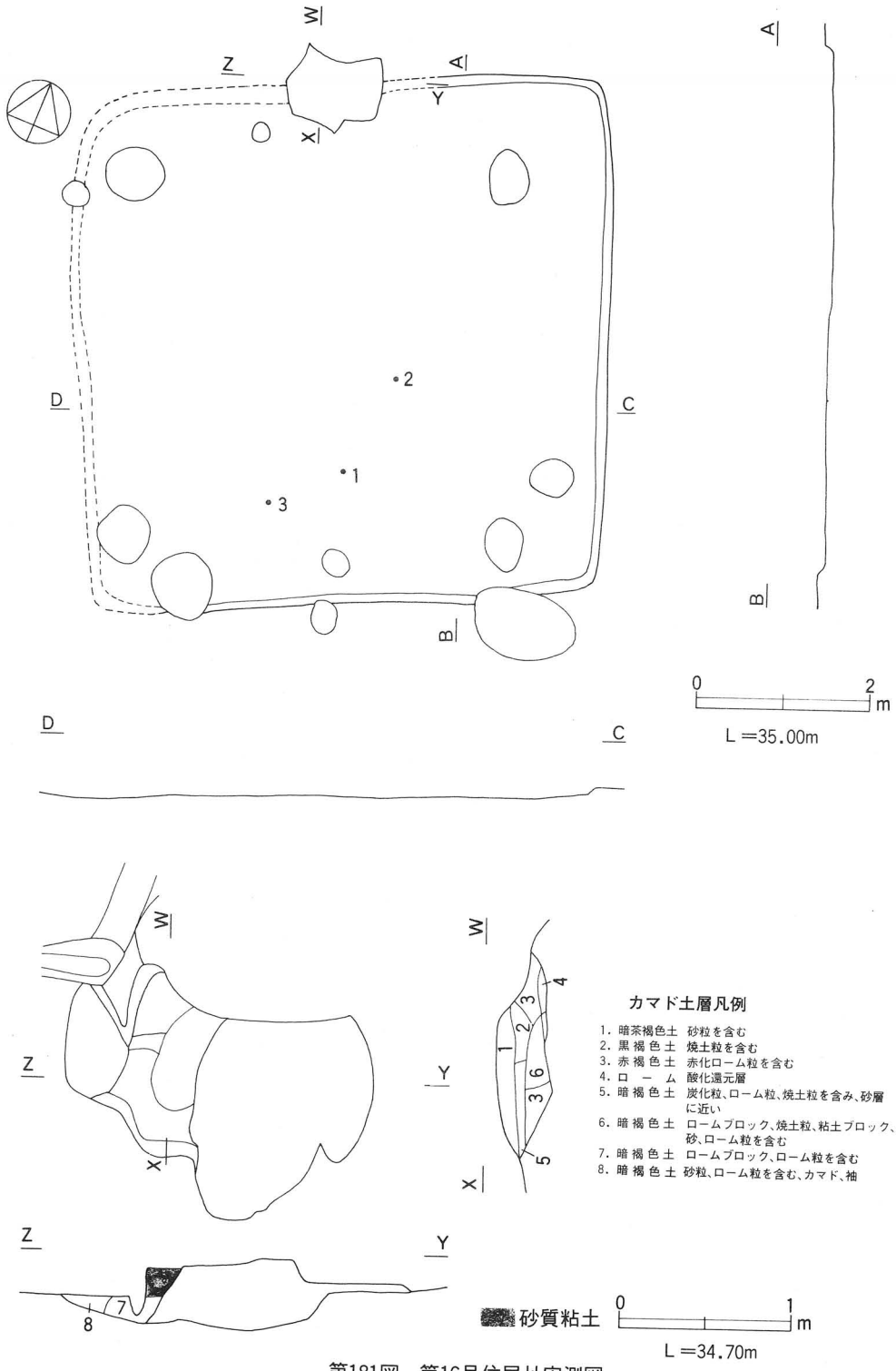
床面は、直床で中央部はしっかりしているが、壁付近では柔弱となっている。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝と柱穴は、確認出来なかった。カマドは、北壁の中央部に位置している。住居址内の覆土は、黒褐色土と黒色土がロームブロックを含みながら堆積しており、第10号住居址の貼床となっているため、固くしまっている。

カマドは、北側中央部に位置しているが、東側は第10号住居址カマドに、北側は第13号土壙に各々破壊されているため、中央部より左側が遺存しているのみである。燃焼部は、床面から0.20m程度下がっている。焼土層は、確認されないが第３層がこれに相当するようである。袖は、砂質粘土を用いて構築されている。

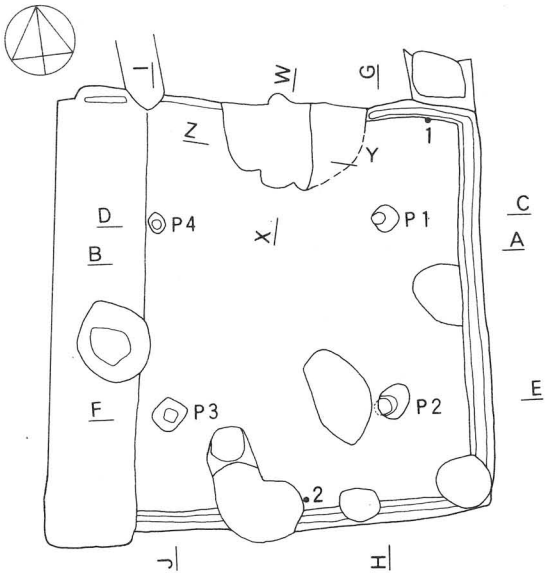
出土遺物としては、きわめて少なく土師器甕、坏、須恵器壷などが出土した程度である。No１、２は、床面より出土した土師器甕（第186図、No３、４）であり、No３は床面より出土した須恵器壷である。

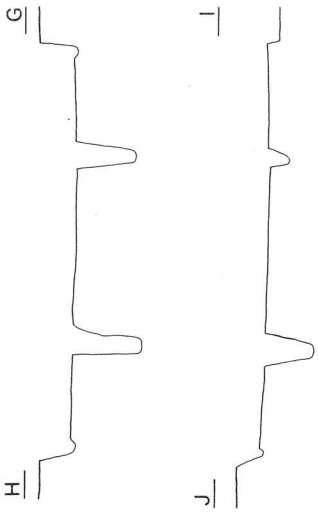


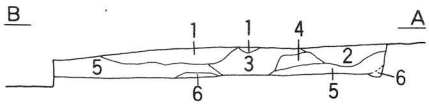
第180図　第15号住居址実測図

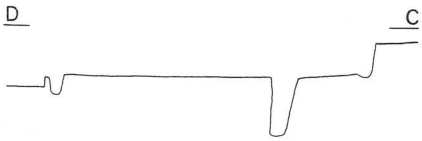


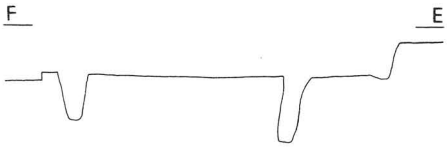
第181図　第16号住居址実測図





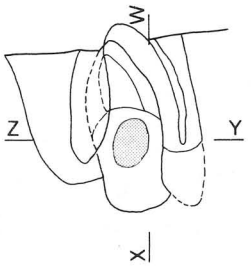


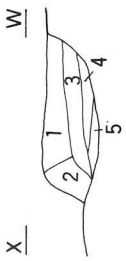




住居址土層凡例

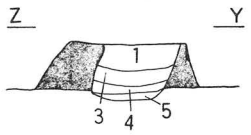
1. 褐　色　土　ローム粒を含む
2. 黒褐色土　ローム粒を含む
3. 黒褐色土　ローム粒、土器粒を含む
4. 暗褐色土　ローム粒、土器粒を含む
5. 暗褐色土　ローム粒を含む
6. 暗黄褐色土





カマド土層凡例

1. 茶褐色土　粘土質で砂粒を含む
2. 暗褐色土　粘土質で砂粒を含む
3. 黒 色 土　砂粒、ローム粒、焼土粒を含む
4. 暗褐色土　ローム粒と焼土粒を含む
5. 暗褐色土　ローム粒を含む



焼土
砂質粘土

第182図　第17号住居址実測図

これらの出土遺物から、本址は奈良時代に位置する住居址と判断される。

第17号住居址（第182・184図、第104表１・２）

本址は、Ｉ郭の中央北側に位置し、中世の建物址、溝などと重複している。大きさは、東西径4.20m、南北径4.50m、深さ0.40mを計測し、不整方形状を呈している。方位は、Ｎ－６°－Ｅである。

床は、しっかりした貼床で壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、カマドと北西壁部分以外は全周しており、幅0.20m、深さ0.03～0.05ｍを計測する。柱穴は、Ｐ１～Ｐ４までの４本が本址に結び付く柱穴と判断される。カマドは、北壁中央部に位置している。

土層は、褐色土、黒褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土が堆積しており、黒褐色土と暗褐色土が各２層に細分される。これらの土層は、ほぼレンズ状に堆積している。

カマドは、北壁中央部に位置し、東側は破壊されている。大きさは、長さ1.00m、幅0.95m、高さ0.23mを計測する。煙道部の先端は、壁外へ0.15m程度突出している。燃焼部は、カマドの中央南側に位置しているが、焼土層は認められず第３層の黒色土と第４層の暗褐色土が、これに相当する部分と判断される。煙道部は、斜めに立ち上がっており、燃焼部は床面より８㎝程度下がっている。袖は、白色砂質粘土と砂質の暗褐色土を用いて構築している。

出土遺物としては、土師器坏片、甕片、高坏脚部片、土玉などが出土した程度で、図示可能な遺物としては、第186図、No５、11の２点のみである。No５は、高坏脚部片で床面上10㎝の所より出土しており、No11は土玉で床面より出土している。

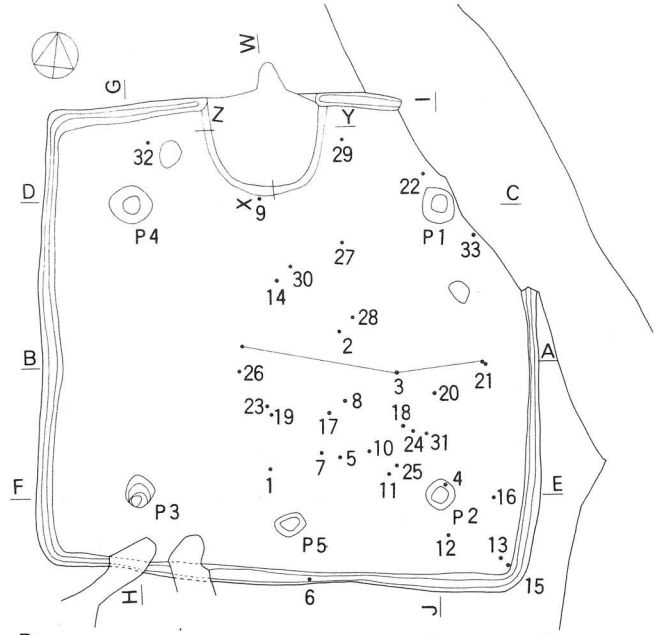
本址の時期は、出土遺物より古墳時代後半に位置するようである。

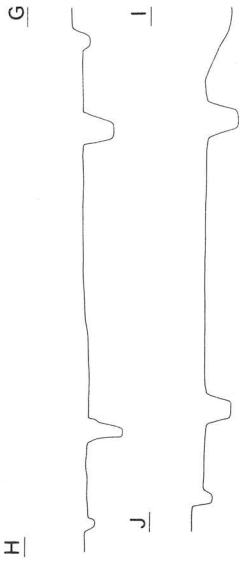
第18号住居址（第183～185図、第104表１～４）

本址は、Ｉ郭の中央部に位置しており、北東部を第４号堀に切られている。大きさは、東西径7.90m、南北径7.90m、深さ0.25mを計測し隅丸方形状を呈する。方位は、Ｎ－10°－Ｗである。

床面は、柱穴内はしっかりした貼床であり、柱穴から壁にかけては比較的柔弱な貼床となっている。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマド以外全周しているようで幅0.12～0.25m、深さ0.10m程度を計測する、柱穴は、Ｐ１～Ｐ５まで５本確認されＰ３は、建替が認められる。カマドは、北壁中央西側に位置している。

土層は、暗褐色土層が中心で12層に細分される。第６～８層は、砂、白色粘土等を含んでいることから、カマドの土層と判断される。これらの土層は、ほぼレンズ状に堆積している。

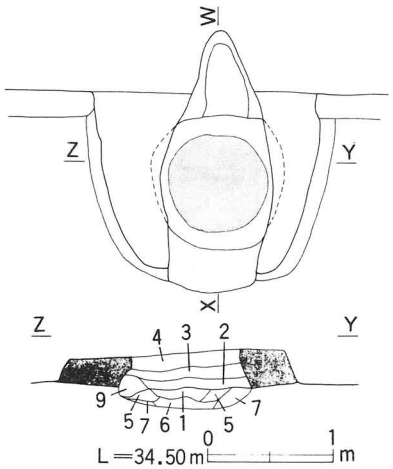


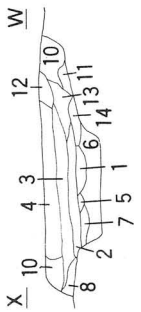


住居址土層凡例

1. 暗褐色土　ローム粒を含む
2. 暗褐色土　ロームブロック、焼土粒を含む
3. 暗褐色土　ローム粒 、焼土粒を含む
4. 暗褐色土　土器粒を含む
5. 黒暗褐色土　ローム粒 、焼土粒を含む
6. 暗褐色土　ローム粒 、焼土粒を含む
7. 暗褐色土　ローム粒を含む
8. 暗黄褐色土　ローム粒を含む

L＝35.00m　0　2　m



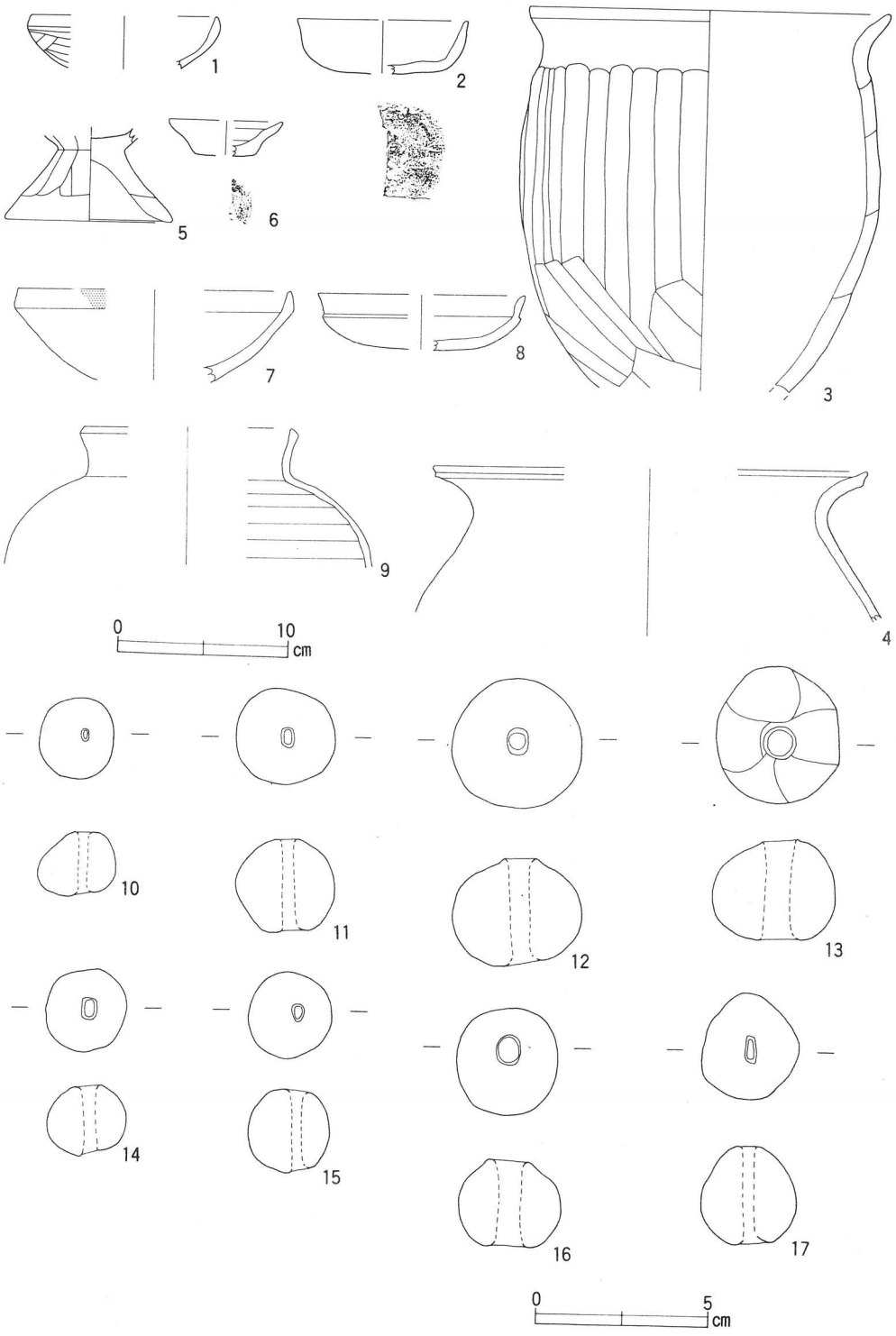


カマド土層凡例

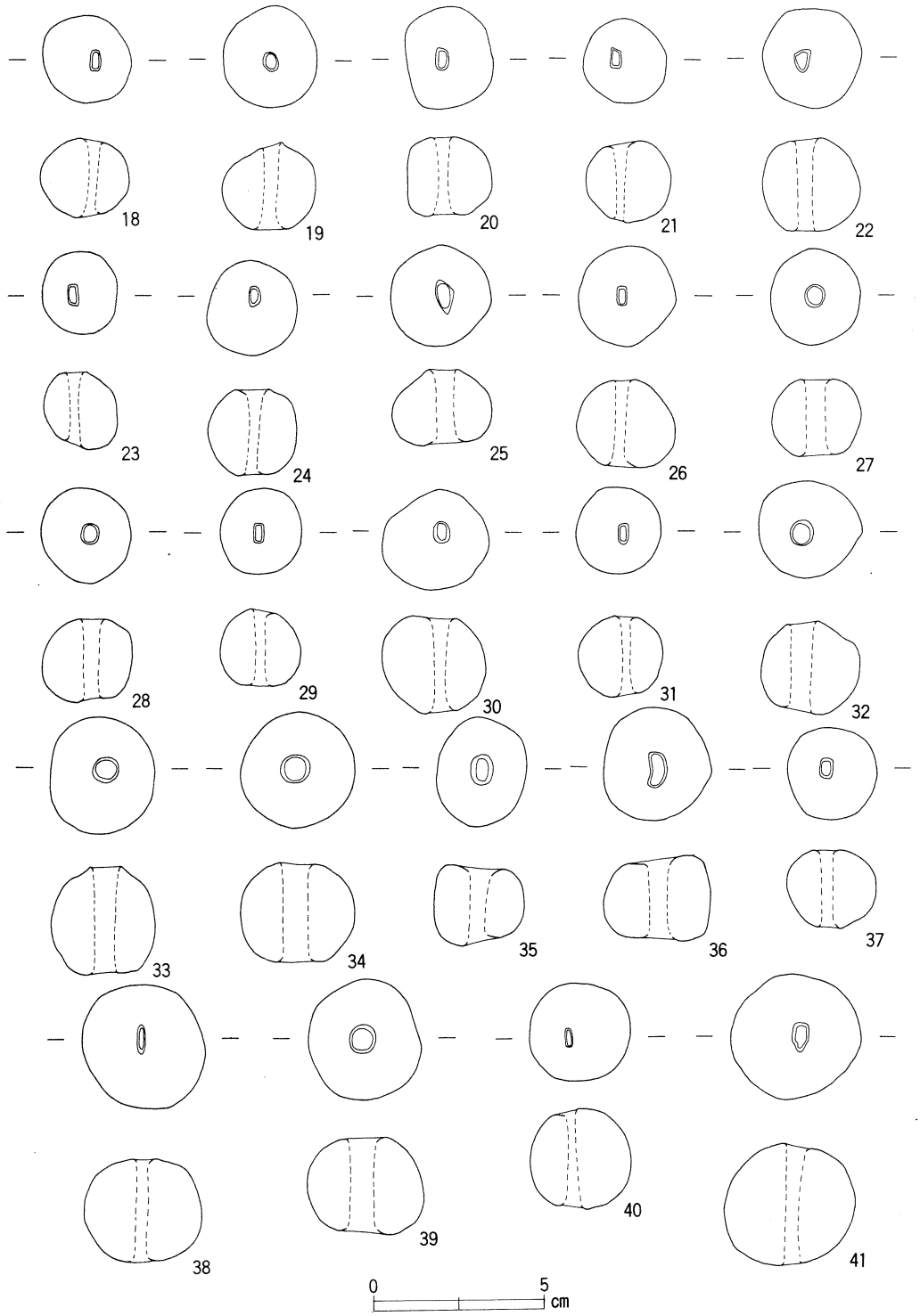
1. 焼　　土
2. 黒　色　土　焼土、ロームブロックを含む
3. 暗褐色土　砂質で粘土粒子を含む
4. 粘　　土　砂質である
5. 黒褐色土　粘土ブロックを含む
6. 暗褐色土　粘土粒子を含む
7. 暗褐色土　粘土ブロック、砂質粘土を含む
8. 黒褐色土　砂質粘土を含む
9. 暗褐色土　砂質粘土ブロック 、ロームブロックを含む
10. 黒褐色土　砂質粘土ブロック主体で炭化小ブロックを含む
11. 暗褐色土　茶色の砂質粘土である
12. 白色粘土　炭化粒、ローム粒を含む
13. 暗褐色土　焼土小ブロック、炭化小ブロック、白色粘土を含む
14. 暗赤褐色土　焼土小ブロックを含み、砂質粘土主体である

焼土
砂質粘土

第183図　第18号住居址実測図



第184図　第15、16、17、18号住居址出土遺物実測図



第185図　第18号住居址出土遺物実測図

カマドは、北壁中央西側に位置しており、長さ2.08m、幅1.95m、高さ0.25mを計測し、煙道先端は壁外へ0.50m突出しており、比較的長い煙道を有している。燃焼部は、カマド内中央部に位置し、床面より0.20m程度掘り下げてから暗褐色土（第6層）で埋めた後、この上面を火床面としており焼土（第1層）の堆積が見られたが、第6層の暗褐色土はあまり分解していない。第2層の黒色土、第3層の暗褐色土の部分は燃焼部に相当する部分で、第10～14層の部分は煙道部に相当し、黒褐色土、暗褐色土、暗赤褐色土、粘土が堆積している。袖と上面は、白色砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物は、土師器坏、甕、須恵器坏、土玉、カワラケなどが出土しており、土玉が30点と多量に出土している。これ以外は、数量こそ多いが破片が中心で図示出来たのは第186図No6～8の3点程度である。No6は、カワラケ片で床面上2cmの所より出土しており、No7、8は土師器坏で床面上2～9cmの所より出土している。第186図No12～17と、第187図は土玉である。

出土遺物から本址は、奈良時代に位置する住居址と判断される。

第104表　第15. 16. 17. 18号住居址出土遺物一覧表1

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第184図 No.1	土師器 坏　片	A　11.0 B　3.1 D　11.2	1／4	体部は内傾しており、陵はなく肥厚、口縁部は直立	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り、内面ヘラナデ	長石粒 良好 黒褐色	第15号住No.1 体部下半欠損 一括接合資料
第184図 No.2	須恵器 坏　片	A　10.0 B　3.1 C　6.5	1／5	底部は、湾曲しており、体部は直線的に外傾する。	底部は、ヘラ切り、ヘラナデ体部は、回転ヘラナデで、体部下部はヘラ削り	長石含 良好 灰褐色	第15号住No.2 一括接合資料
第184図 No.3	土師器 甕	A　20.8 B　22.1 D　20.8		体部は、内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は内傾後外傾、口唇部は直立ぎみ	口縁部横位ヘラナデ 体部上半は縦位のヘラ削り下半は右下りのヘラ削り	長石、石英、雲母 良好 暗茶褐色	第16号住No.1 底部欠損、体部下半磨滅 床直
第184図 No.4	土師器 甕　片	A　25.1 B　8.5	1／4	体部は、直線的に内傾しており、口縁部は大きく外湾、口唇部はつまみ出し	体部はヘラ削り、ヘラナデ口縁部は、ヘラナデ	石英、長石粒、雲母粒 良好 赤褐色	第16号住No.2 体部下半を欠損する。床直
第184図 No.5	土師器 高　坏 脚　部	A　9.6 B　5.4		坏部は、内傾ぎみ、脚部は直線的に外反している。	上部縦位のヘラ削り 下部横位ヘラナデ 脚部内面ヘラナデ	緻密 良好 暗褐色	第17号住No.1 坏部内面黒色処理 ＋10
第184図 No.6	カワ ラケ	A　6.7 B　2.0 C　3.5	1／4	底部は、水平で、体部は湾曲しながら外傾、口縁部は鋭く削り出す	底部は、回転糸切り 体部は、ヘラナデで口縁部はヘラ削り	長石、雲母、砂粒 良好 暗褐色	第18号住No.1 城址関係遺物 ＋2
第184図 No.7	土師器 坏	A　16.0 B　5.2 D　16.2	1／5	体部は、内傾ぎみに外傾し、陵は無くなり、口縁部は直立している。	口縁部は、横位ヘラナデ体部は、ヘラ削り、ヘラナデ体部内面、ヘラナデ	石英、雲母粒、密 良好 暗褐色	第18号住No.2 口縁部一部煤付着体部著しく磨滅　＋2

第104表　第15. 16. 17. 18号住居址出土遺物一覧表 2

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第184図 No.8	土師器 坏	A　12.0 B　3.3 D　11.5	1／4	底部～体部は内傾ぎみで陵線はしっかりしている。口縁部は、やや外傾している。	表面と内面の磨滅が著しく整形不明	小石、砂粒 良好 暗褐色	第18号住No.3 ＋ 9
第184図 No.9	須恵 短頸壷	A　12.7 B　2.9 頸径　12.0	1／6	体部は、内傾しており頸部は、直立ぎみにやや外傾、口縁部は斜めに削り出す	体部は、回転ヘラナデ頸部は、回転ヘラナデ口縁部は、回転ヘラ削り	長石粒、灰褐色 良好 淡緑釉	第16号住No.3 床直 自然釉有 一括接合資料
第184図 No.10	土　玉	径 2.4×2.2×1.9 孔　0.3×0.3	完			密 良好 明褐色	第15号住No.3 ＋ 6
第184図 No.11	土　玉	径 2.9×2.8×2.7 孔　0.6×0.4	完			密 良好 淡赤褐色	第17号住No.2 ＋ 2 25 g
第184図 No.12	土　玉	径 3.8×3.1 孔　0.8×0.6	完			長石　雲母 良好 暗褐色	第18号住No.4 ＋20 40 g
第184図 No.13	土　玉	径 4.0×3.6×2.9 孔　1.0	完			粗（雲母、長石、石英） 良好 暗褐色	第18号住No.5 ＋ 3 40 g
第184図 No.14	土　玉	径 2.4×2.3×2.1 孔　0.6×0.4	完			密 普通 暗褐色	第18号住No.6 床直 10 g
第184図 No.15	土　玉	径 2.5×2.5×2.4 孔　0.5×0.4	完			粗 良好 茶褐色	第18号住No.7 ＋ 6 15 g
第184図 No.16	土　玉	径 3.2×2.9×2.6 孔　0.9×0.7	完			長石、石英粒、砂粒粗 良好 暗黒色	第18号住No.8 床直 25 g
第184図 No.17	土　玉	径 3.1×2.7×2.8 孔　0.7×0.3	完			小石、石英、長石 普通 暗褐色	第18号住No.9 床直 25 g
第185図 No.18	土　玉	径 2.6×2.3 孔　0.6×0.3	完			粗（長石、石英の粒）普通 暗褐色	第18号住No.10 ＋14 20 g
第185図 No.19	土　玉	径 3.0×2.8×2.6	ほぼ完			砂粒、密 良好 茶褐色	第18号住No.11 ＋ 8 20 g
第185図 No.20	土　玉	径 3.0×2.5×2.3	完			密 良好	第18号住No.12 ＋ 4
第185図 No.21	土　玉	径 2.5×2.4 孔　0.6×0.4	完			砂粒、密 良好 明褐色	第18号住No.13 ＋ 5 15 g

第104表　第15. 16. 17. 18号住居址出土遺物一覧表 3

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第185図 No.22	土　玉	径 2.9×2.7 孔 0.7×0.5	完			粗 普通 茶褐色	第18号住No.14 ＋ 7 20 g
第185図 No.23	土　玉	径 2.4×2.2×2.3 孔 0.6×0.3	完			砂粒　密 良好 明褐色	第18号住No.15 ＋15 10 g
第185図 No.24	土　玉	径 2.8×2.7×2.5 孔 0.6×0.3	完			雲母、長石、砂粒 良好 明茶褐色	第18号住No.16 ＋13 20 g
第185図 No.25	土　玉	径 3.0×2.9×2.2 孔 0.7×0.5	完			密 普通 暗褐色	第18号住No.17 ＋ 2 20 g
第185図 No.26	土　玉	径 3.0×2.8×2.6 孔 0.5×0.3	一部欠			石英、長石、砂粒 粗　良好 明茶褐色	第18号住No.18 ＋ 1 20 g
第185図 No.27	土　玉	径 2.9×2.1×2.2 孔 0.6×0.7	完			粗 良好 暗褐色	第18号住No.19 ＋ 7 20 g
第185図 No.28	土　玉	径 2.8×2.7×2.5 孔 0.6	完			砂粒密 良好 暗褐色	第18号住No.20 ＋ 4 20 g
第185図 No.29	土　玉	径 2.5×2.4×2.3 孔 0.6×0.3	完			砂粒、小石 良好 茶褐色	第18号住No.21 ＋14 10 g
第185図 No.30	土　玉	径 3.1×3.0×3.0	完			粗 良好	第18号住No.22 ＋ 2
第185図 No.31	土　玉	径 2.6×2.5×2.4 孔 0.6×0.3	完			粗 普通 茶褐色	第18号住No.23 ＋ 5 15 g
第185図 No.32	土　玉	径 3.0×2.9×2.8 孔 0.7	一部欠			石英粒、長石粒 良好 暗褐色	第18号住No.24 床直 20 g
第185図 No.33	土　玉	径 3.5×3.1×3.2 孔 0.8	完			密 良好 暗茶褐色	第18号住No.25 床直 35 g
第185図 No.34	土　玉	径 3.4×2.9 孔 0.9	完			粗 良好 暗褐色	第18号住No.26 床直 30 g
第185図 No.35	土　玉	径 3.3×2.2×2.4 孔 0.8×0.7	完			小石、砂、粗 普通 明黒色	第18号住No.27 ＋15 20 g
第185図 No.36	土　玉	径 3.4×3.1×2.5 孔 1.0×0.5	完			密 良好 明褐色	第18号住No.28 ＋10 30 g
第185図 No.37	土　玉	径 2.8×2.6×2.3 孔 0.6×0.4	完			密 普通 明黄褐色	第18号住No.29 ＋16 20 g

第104表　第15. 16. 17. 18号住居址出土遺物一覧表４

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第185図 No.38	土　玉	径 3.7×3.1 孔 0.8×0.3	完			密 良好 明褐色	第18号住No.30 +50 45ｇ
第185図 No.39	土　玉	径 3.6×3.3×2.9 孔 0.8	完			粗(小石､砂粒多い) 良好 暗茶褐色	第18号住No.31 +10 30ｇ
第185図 No.40	土　玉	径 2.9×3.0 孔 0.6×0.3	完			密 良好 明褐色	第18号住No.32 床直 30ｇ
第185図 No.41	土　玉	径 3.8×3.7 孔 0.7×0.5	完			密 良好 暗褐色	第18号住No.33 床直 50ｇ

第19号住居址（第186・187図、第105表）

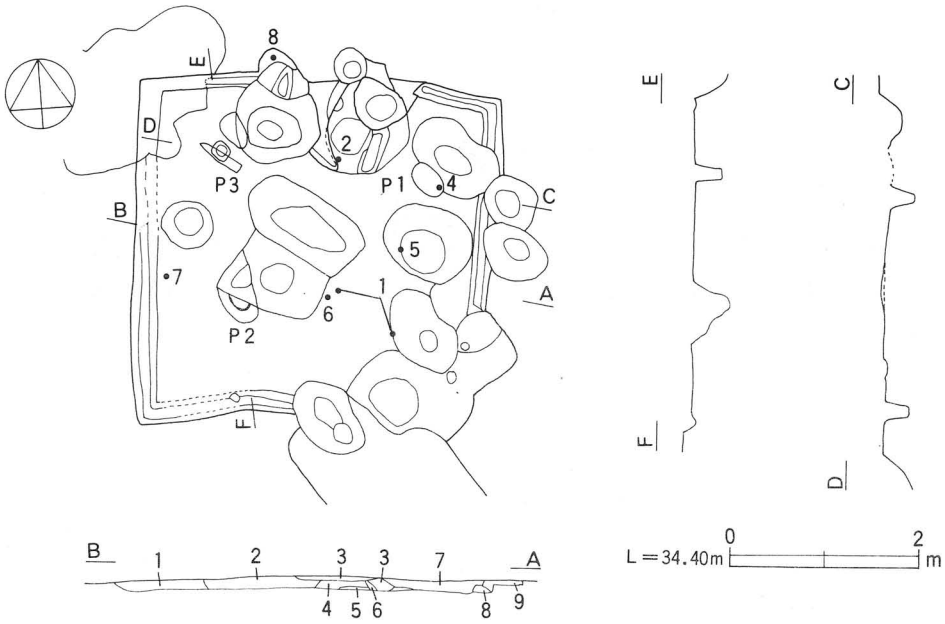
本址は、Ｉ郭の南東部に位置し、中世の建物址と重複しているため、住居址の½程度を破壊されている。大きさは、東西径2.75m、南北径3.50m、深さ0.15mを計測し、長方形状を呈している。方位は、Ｎ－11°－Ｅである。

床面は、中央部はしっかりした貼床であるが、柱穴から壁にかけては比較的柔弱な床面である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマド以外全周しているものと判断される。柱穴は３本（Ｐ１～３）確認されたが、本来は４本であったと推定される。カマドは、北壁の中央東側に位置している。

土層は、暗褐色土が堆積しており、４層に細分される。また第２層は、中世建物址の柱穴であり、第３、７層は中世面である。

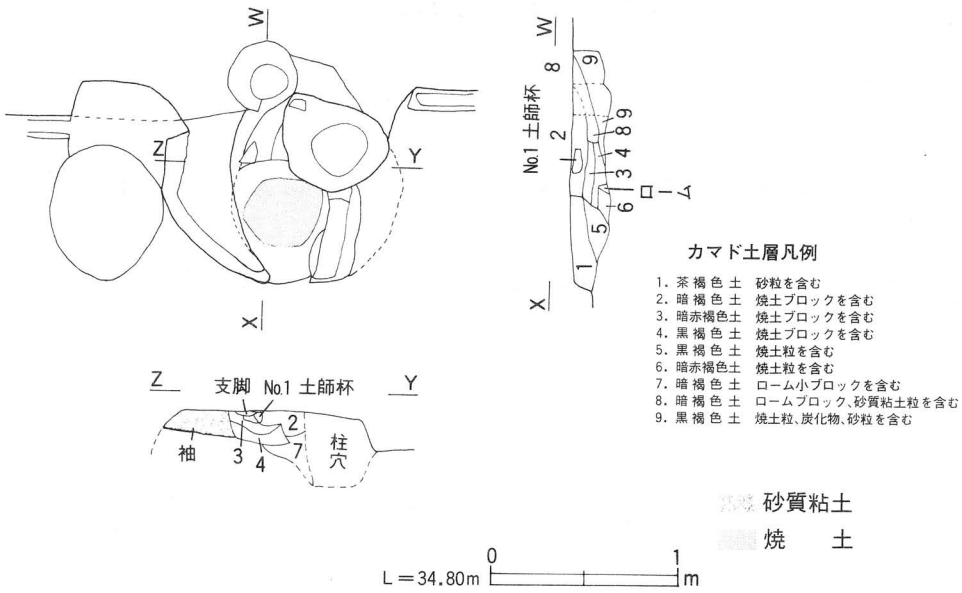
カマドは、北壁中央東側に位置しているが、中世の建物址により一部を破壊されている。大きさは、長さ1.20m、幅1.25m、高さ0.15mを計測する。燃焼部は、カマドの中央南側に位置し、床面より0.10m程度下がっている。この部分のローム面は、あまり分解していない。カマド内には焼土層の堆積はなく、第３、６層の暗赤褐色土と第４層の黒褐色土が燃焼部に相当するものと判断される。煙道部は、燃焼部からやや立ち上がり、ほぼ平坦面を形成しており、先端部は垂直に掘り込まれている。袖と上面は、砂質粘土で構築されている。

出土遺物としては、住居址内より土師器坏、甕、坩、須恵器坏、同蓋、土玉、手捏土器などが出土し、カマド内から土師器坏、土玉が出土している。カマド出土の坏は、図示出来なかった。図示した遺物は、第189図に示した８点である。No１は、須恵器坏蓋で床面上10cmの所より出土



土層凡例

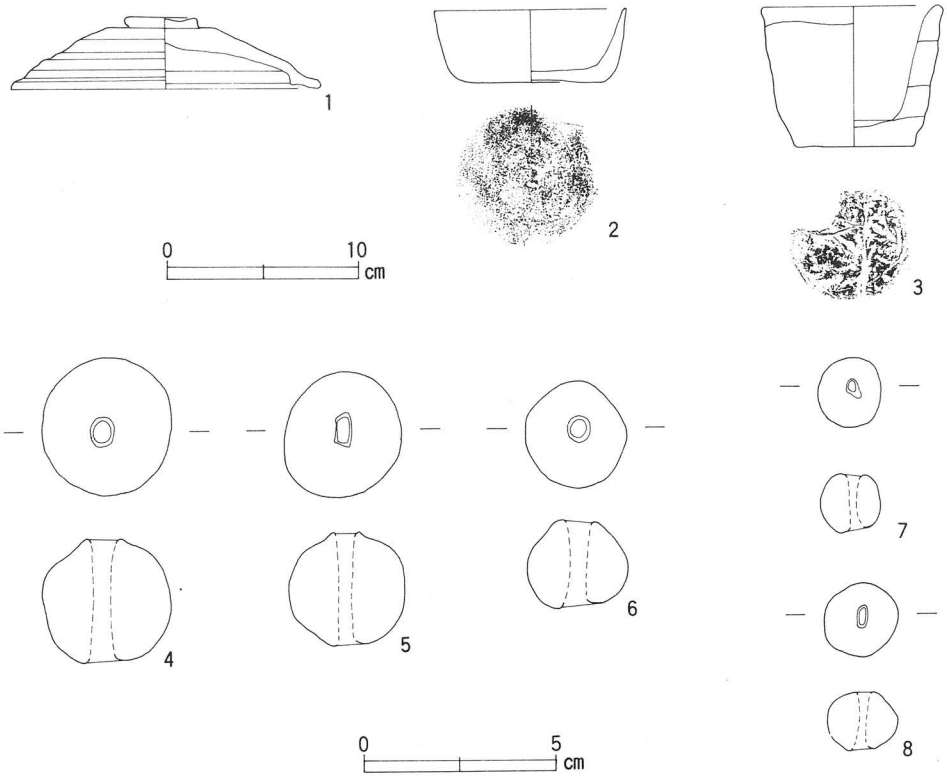
1. 暗褐色土　(住居址の覆土)ローム粒を含む
2. 暗褐色土　柱穴の覆土である
3. 暗褐色土　中世面である
4. 暗褐色土　(住居址の覆土)焼土粒を含む
5. 暗褐色土　(住居址の覆土)ロームブロックを含み、床面である
6. 褐 色 土　中世面である
7. 暗褐色土　炭化粒を含む
8. 褐 色 土　住居址の壁面である
9. 暗褐色土　柱穴の覆土



カマド土層凡例

1. 茶褐色土　砂粒を含む
2. 暗褐色土　焼土ブロックを含む
3. 暗赤褐色土　焼土ブロックを含む
4. 黒褐色土　焼土ブロックを含む
5. 黒褐色土　焼土粒を含む
6. 暗赤褐色土　焼土粒を含む
7. 暗褐色土　ローム小ブロックを含む
8. 暗褐色土　ロームブロック、砂質粘土粒を含む
9. 黒褐色土　焼土粒、炭化物、砂粒を含む

第186図　第19号住居址実測図



第187図　第19号住居址出土遺物実測図

しており、No 2 は須恵器坏で床面上21㎝の所より出土している。No 3 は、手捏土器で接合資料であり、No 4 ～ 8 は土玉である。

本址の時期は、遺物などから古墳時代後半に位置する住居址と判断される。

第105表　第19号住居址出土遺物一覧表

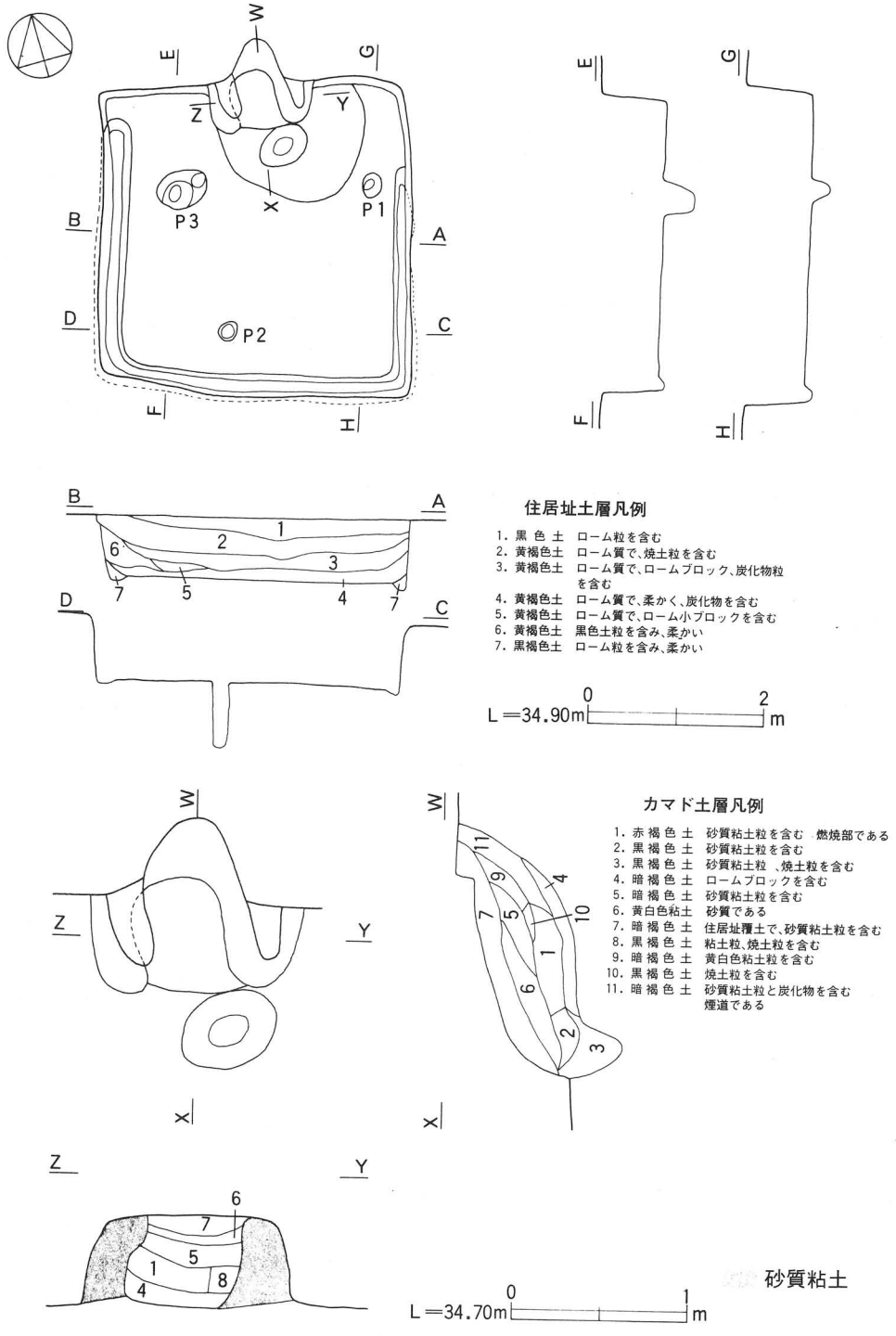
挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第187図 No.1	須恵器 坏蓋	A　16.2 B　3.7 宝珠　3.8×0.5	ほぼ 完	体部は、直線的に外反口縁部は、大きく外開きで内面は、削り出す。	体部上半は、回転ヘラ削りで下半は、回転ヘラナデ、内面は回転ヘラナデ	小石、長石、石英 良好 灰褐色	口縁部一部欠 +10.5
第187図 No.2	須恵器 坏	A　10.0 B　3.8 C　6.5	2／3	底部は、やや内傾しており体部は直線的にやや外傾	底部は、回転ヘラ切り、ヘラナデ、体部は内外回転ヘラナデ	長石、石英、雲母 良好 灰褐色	口縁部～体部にかけ一部欠 体部はナデのみ 内面磨滅 +21
第187図 No.3	手　捏	A　9.6 B　7.3 C　6.3	2／3	底部は水平で、体部は直線的に外傾し、口縁部はやや外反	口縁部横位ヘラナデ 体部内外面手ナデ	砂粒、粗い 良好 暗褐色	一括接合資料 底部1／5程度欠 口～部一体2／3程度欠 底部木葉痕
第187図 No.4	土　玉	径 3.4×3.6×3.2 孔　0.8×0.6	完			小石、長石粒、石英粒 良好 暗褐色	40 g −32
第187図 No.5	土　玉	径 3.3×3.1×3.0 孔　0.8×0.4	完			砂粒、密 良好 暗褐色	30 g −46
第187図 No.6	土　玉	径 2.8×2.6×2.3 孔　0.7×0.6	完			長石、石英、雲母 普通 暗茶褐色	20 g + 8
第187図 No.7	土　玉	径 1.8×1.7×1.6 孔　0.4	完			緻密 良好 暗褐色	+11
第187図 No.8	土　玉	径 1.9×1.6 孔　0.6×0.3	完			緻密 良好 暗褐色	10 g + 9

第20号住居址（第188図）

本址は、Ⅲ郭に位置しており、東西径3.50m、南北径3.50m、深さ0.76mを計測し、隅丸方形状を呈している。方位は、N－14°－Eである。

床面は、柔弱な貼床であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁は、カマドと北東部及び北西部以外は全周しており、0.05m～0.07m程度オーバーハングしている。壁溝の大きさは、幅0.20m～0.30m、深さ0.03m～0.04m程度を計測する。柱穴は3本確認されたのみである。カマドは、北壁中央部に位置している。

土層は、黒色土、黄褐色土、黒褐色土、茶褐色土、暗褐色土がレンズ状に堆積しており、黄褐色土が7層に、暗褐色土が2層に細分される。土層の堆積状況から、本址は廃棄後埋められた住



第188図　第20号住居址実測図

居址と判断される。

カマドは、北壁中央部に位置しているが、焚口部分は破壊され消滅している。燃焼部は、カマド底面に暗褐色土（第４層）で火床面を構築したのみ、この上面に燃焼部を設けている。第１層の赤褐色土が、これに相当する。煙道部は、第11層の暗褐色土がこれに相当し、緩やかに立ち上がっている。カマドの手前には、灰落しの為であろうかPit状の遺構があり、黒褐色土（第３層）が堆積している。袖と上面は、砂質黄白色粘土、砂質暗褐色土を用いて構築しているが、柔弱な粘土である。大きさは、長さ1.42m、幅1.20m、高さ0.52mで、壁外へ0.46m突出している。

出土遺物は、土師器坏と甕の小破片がごく少量出土したのみで、図示可能な遺物は出土していない。小破片であるが、坏と甕から本址は奈良時代に位置する住居址と判断される。

第21号住居址（第189・190図、第106表１・２）

本址は、Ⅲ郭に位置しており、東西径5.02m、南北径5.00m、深さ0.43mを計測し、隅丸方形をなしているが、東壁と南壁がやや湾曲している。方位は、Ｎ－18°－Ｗである。

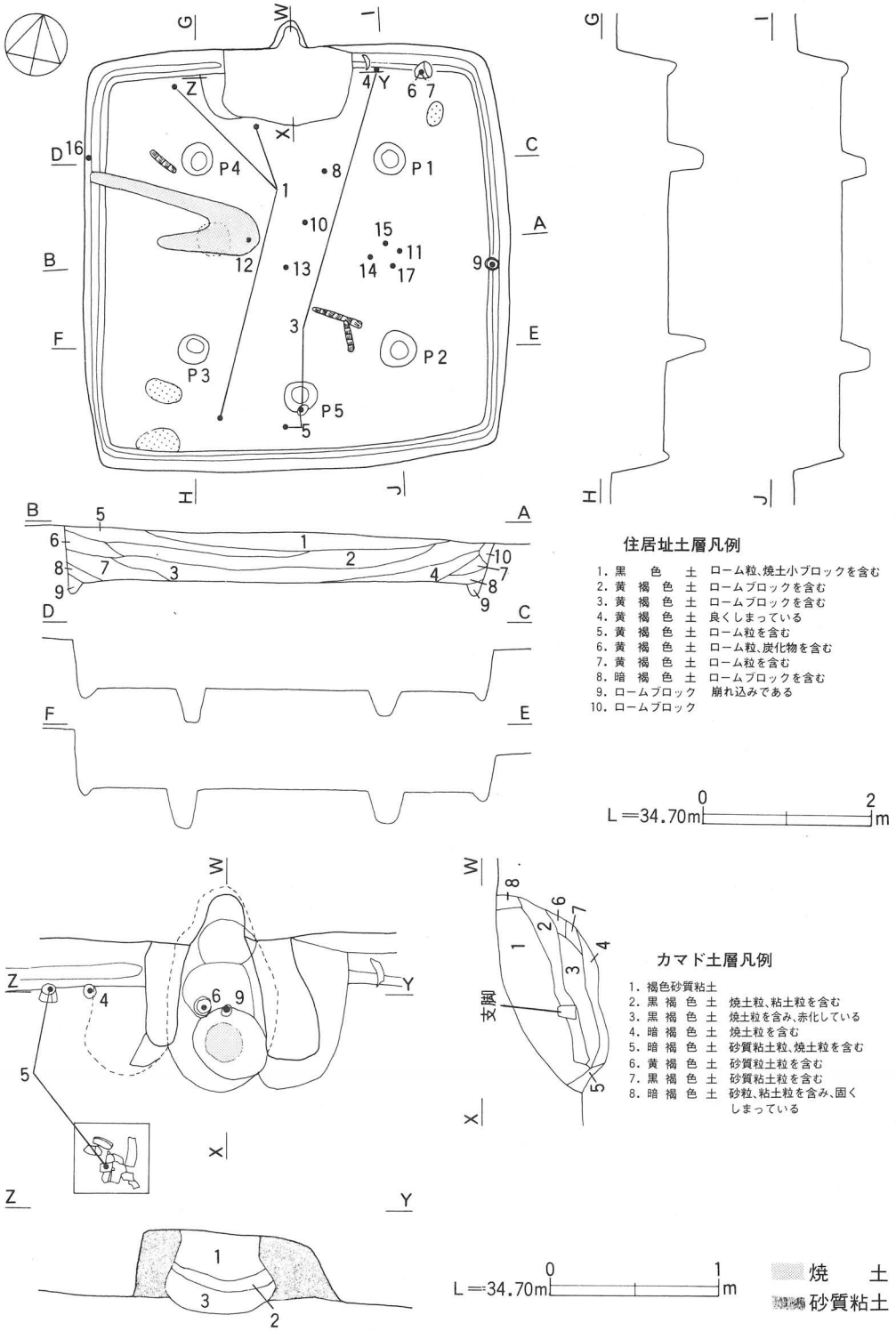
床面は、柱穴内がしっかりした貼床であるものの、柱穴から壁にかけては比較的柔弱である。壁は、はぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマド以外は全周しており、幅0.25m、深さ0.04～0.09mを計測する。柱穴は５本確認された。カマドは、北壁中央部に位置している。また、西側中央の床面が、一部焼けている。

土層は、黒色土、黄褐色土、暗褐色土、ローム＝ブロックがレンズ状に堆積しており、土層の堆積状況から本址は廃棄後まもなく埋められた状況を示している。

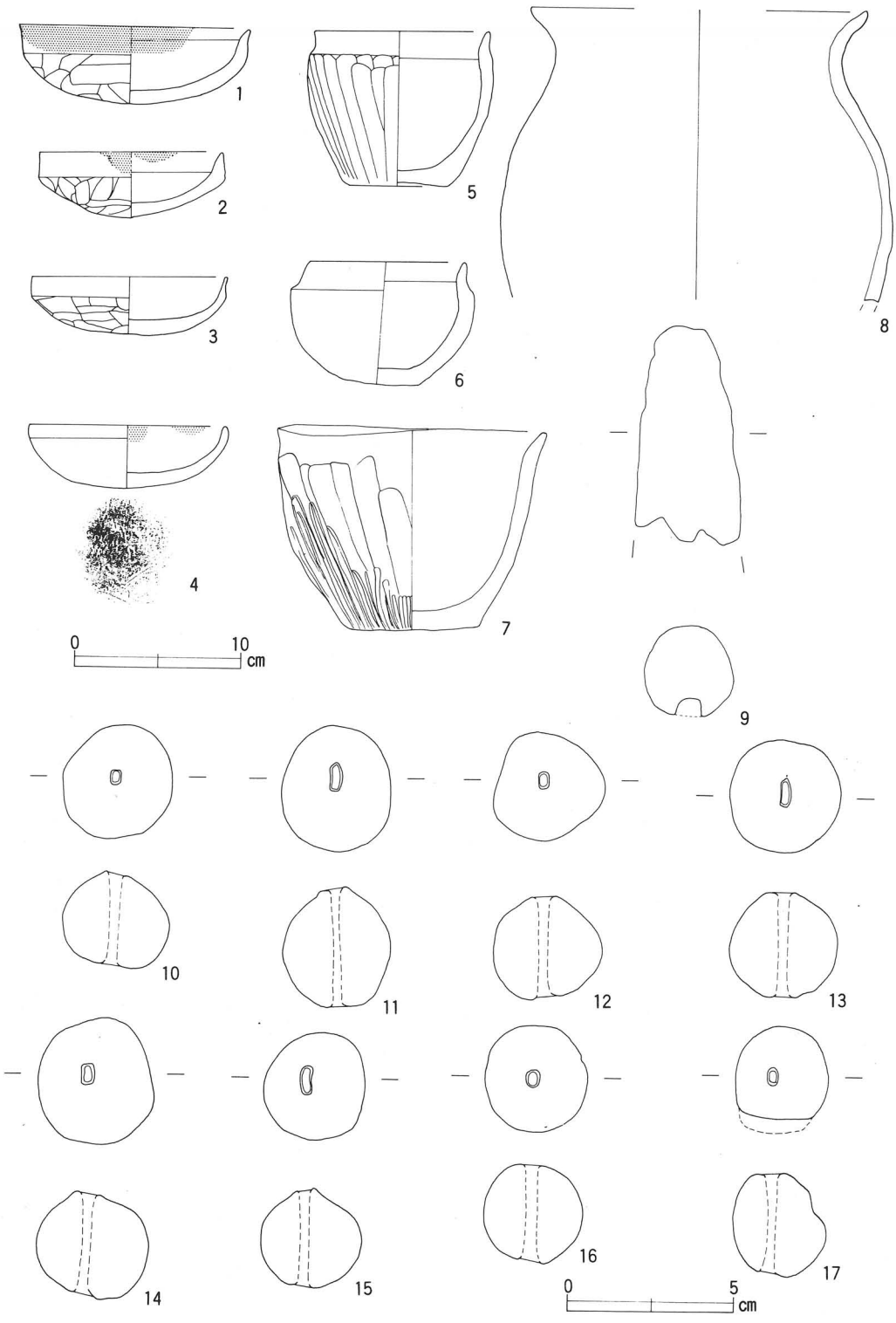
カマドは、北壁中央部に位置しており、長さ1.21m、幅1.20m、高さ0.40mを計測し、煙道先端は壁外へ0.30m程度突出している。また、西側の袖は一部破壊されている。燃焼部は、カマドの南側に位置するが焼土はあまり認められない。この部分は、床面より0.17m下がっている。第２～４層が、焼土を含んでいるため燃焼部と判断される。火床面のローム層は、あまり分解していない。煙道部は、火床部より一度平坦面を形成した後緩やかに立ち上がっている。

出土遺物は、住居址のほぼ全域から土師器坏、甕、碗、土玉、支脚片などが出土している。数量的には、比較的多量である。No１～４は、土師器坏で床面と床面上４～６㎝の所より出土しており、No３は接合資料であるが一部はＰ５内に落ち込んでいる。No５は、Ｐ５と南壁付近で床面より出土している。No７は、完型品であるが床面上15㎝の所より出土しいる。甕はNo８が床面上16㎝の所より出土している。No10～17は、土玉で床面上８～30㎝の所より出土している。また、中央南側には床面上14㎝の所に炭化材と、西壁から中央部にかけ、焼土が堆積している。

本址の時期は、出土遺物から奈良時代に位置する住居址と判断される。



第189図　第21号住居址実測図



第190図　第21号住居址出土遺物実測図

第106表　第21号住居址出土遺物一覧表１

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第190図 No.1	土師器 坏	A　13.9×14.2 B　4.6 D　13.5×14.2		体部は、内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は直立後に外反している。楕円形をなす。	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ	緻密 良好 暗褐色	口～体にかけ1／8欠損、口唇部一部煤付着 床直
第190図 No.2	土師器 坏	A　10.9×10.5 B　3.9 D　11.0×10.4	完	体部は、内傾ぎみでに外傾しており、口縁部は直立している。楕円形を有す	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ	緻密 良好 暗褐色	口唇部に一部煤付着 ＋6
第190図 No.4	土師器 坏	A　12.0 B　3.7 D　12.0	1／4	体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部はやや内傾底部外面に「手」印有	内外面ヘラナデ	小石、砂粒 良好 暗茶褐色	口縁内面煤付着 ＋4
第190図 No.5	碗	A　10.6×9.9 B　9.3×9.1 C　6.3×5.7 E　11.0×10.6	完	底部は、内傾しており体部は内傾ぎみに外傾しており、口縁部はやや外反	口縁部手ナデ 体部縦位ヘラ削り 底部ヘラ削り	長石粒、砂粒 良好 暗茶褐色	体部一部欠 全体に遍平な造り 床直
第190図 No.6	碗	A　9.3×8.7 B　1.5×7.0 C　4.5 D　11.5×10.3	完	底部は、平底ぎみで体部は内傾ぎみに外傾し、口縁部は内傾後直立	口縁部、内面手ナデ 体部磨滅大	小石、砂粒、粗 普通 暗茶褐色	湾曲しており、体部～底部にかけ器面は、著しく磨滅 ＋14.5
第190図 No.7	甕	A　16.2×14.3 C　8.0	完	底部は、やや外湾しており体部は直線的に外傾し、口縁部は外反する。	体部上部は横位ヘラ削り中部縦位ヘラ削り、縦位ヘラナデ、底部ヘラ削り	緻密 良好 暗褐色	全体に遍平な造り ＋15.0
第190図 No.8	甕　片	A　.20.0 B　17.5	1／4	体部は、内傾しており、口縁部は内傾後外傾	口縁部、体部、内外面ともヘラナデ	長石、石英、砂粒 良好 暗褐色	＋16.0
第190図 No.9	支脚片	長　13.0 巾　6.4×3.0 厚　(6.5)×4.0		全体的に楕円形をなす		粗 良好 暗赤褐色	下部欠損 ＋14.5
第190図 No.10	土　玉	径 3.4×3.3×2.9 孔　0.5×0.4	完			緻密 良好 暗褐色	30ｇ ＋11
第190図 No.11	土　玉	径 3.8×3.3×3.7 孔　0.8×0.4	完			緻密 良好 暗褐色	40ｇ ＋30
第190図 No.12	土　玉	径 3.3×3.2×3.1 孔　0.5×0.3	完			緻密 良好 暗褐色	30ｇ ＋4
第190図 No.13	土　玉	径 3.3×3.1 孔　0.9×0.3	完			緻密 良好 暗褐色	35ｇ ＋8
第190図 No.14	土　玉	径 3.8×3.5×3.2 孔　0.6×0.4	完			緻密 良好 明褐色	40ｇ ＋23

第106表　第21号住居址出土遺物一覧表 2

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第190図 No.15	土　玉	径 3.3×3.0×3.0 孔 0.8×0.3	完			緻密 良好 暗褐色	30 g +25
第190図 No.16	土　玉	径 3.2×3.0×3.0 孔 0.5×0.4	完			緻密 良好 暗茶褐色	30 g +50
第190図 No.17	土　玉	径 2.8×2.8×3.1 (3.3) 孔 0.5×0.4	一部欠			砂 良好 明褐色	25 g +30

第22号住居址（第191・193図、第107表）

本址は、Ⅲ郭に位置しており、東西径4.15m、南北径4.23m、深さ0.72mを計測し、隅丸方形状を呈している。方位は、N－29°－Wである。

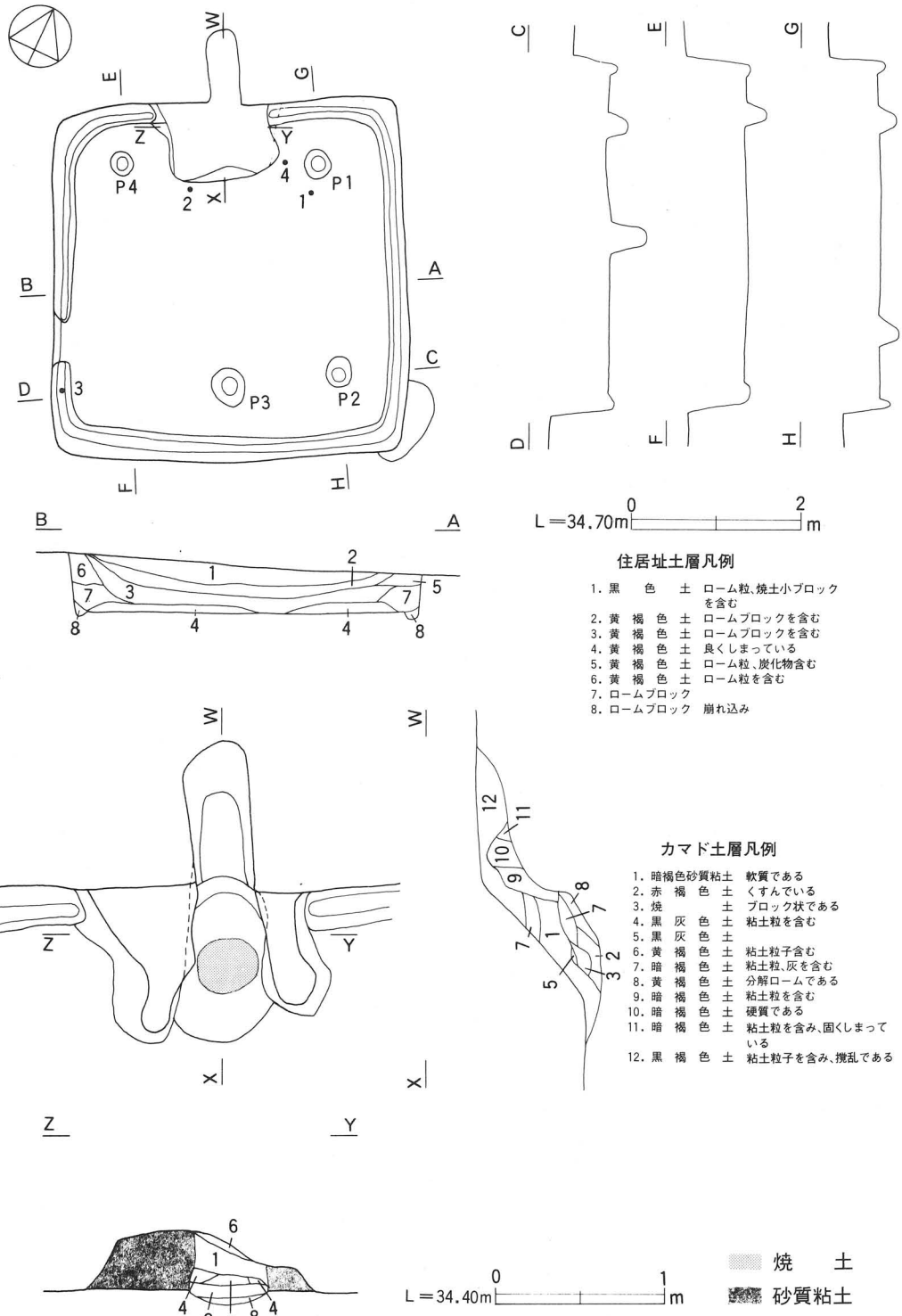
床面は、柔弱な貼床で壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、カマドと西壁南側の一部以外全周している。柱穴は、4本確認されたが、南西コーナー部で柱穴は確認できなかった。カマドは、北壁中央部に位置している。

土層は、黒色土、黄褐色土、ローム＝ブロックが堆積しており、黄褐色土が5層に細分される。これらの土層は、ほぼレンズ状に堆積しているが、廃棄後に埋められたものと判断される。

カマドは、北壁中央部に位置しており、長さ1.80m、幅1.40m、高さ0.35mを計測する。煙道は、壁外へ0.85m突出し長い煙道を形成している。カマドの南側は、破壊されている。このため焚口は、消失しており燃焼部と火床部は、中央部で確認された。燃焼部は、赤褐色土（第2層）焼土（第3層）、暗褐色土（第7層）がこれに相当する。第3層の焼土は、ブロック状をなすことから上壁と判断され、第2層の赤褐色土が燃焼部であろうし、下位と前方のローム層は良く分解している。火床部は、床面から0.10m程度下位面に位置する。煙道部は、火床面より約0.40m程度立ち上がってから約0.50m程度突出した後、緩やかに立ち上がっている。

出土遺物は、土師器坏、甕、土玉などが出土しているが、数量的には比較的少量で図示出来たのは第195図、No1～4の4点のみである。No1は、床面より出土した土師器坏であり、No2は、床面上5cmの所より出土した土師器甕で、No4、5は土玉である。

出土遺物から、本址は奈良時代に位置する住居址と判断される。



第191図　第22号住居址実測図

第23号住居址（第192～195図、第108表１～３）

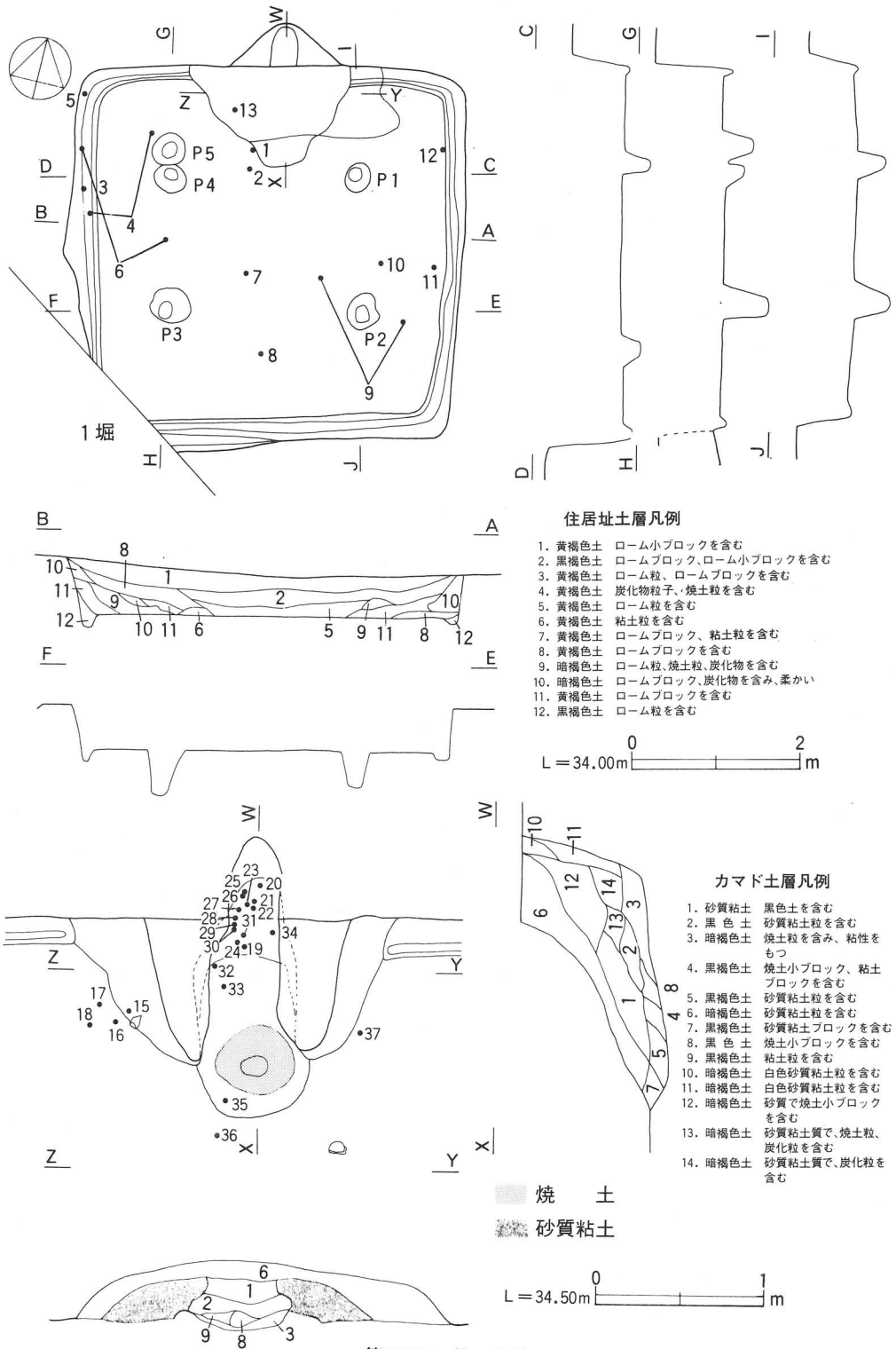
本址は、Ⅲ郭に位置し南西コーナー部は１堀に掘り切られている。大きさは、東西径4.65m、南北径4.40m、深さ0.80mを計測し、隅丸方形状を呈している。方位は、N－14°－Wである。

床面は、柱穴内側はしっかりした貼床であるが、柱穴外側から壁にかけては比較的柔弱な貼床である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマド以外全周しているものと判断される。また、南壁西側は南側へ0.25m程度拡張されている。柱穴は、５本確認されたが、Ｐ２，３はやや北側に寄っており、Ｐ４は建替と判断される。カマドは、北壁中央部に位置しており、煙道は壁外へ0.52m突出している。

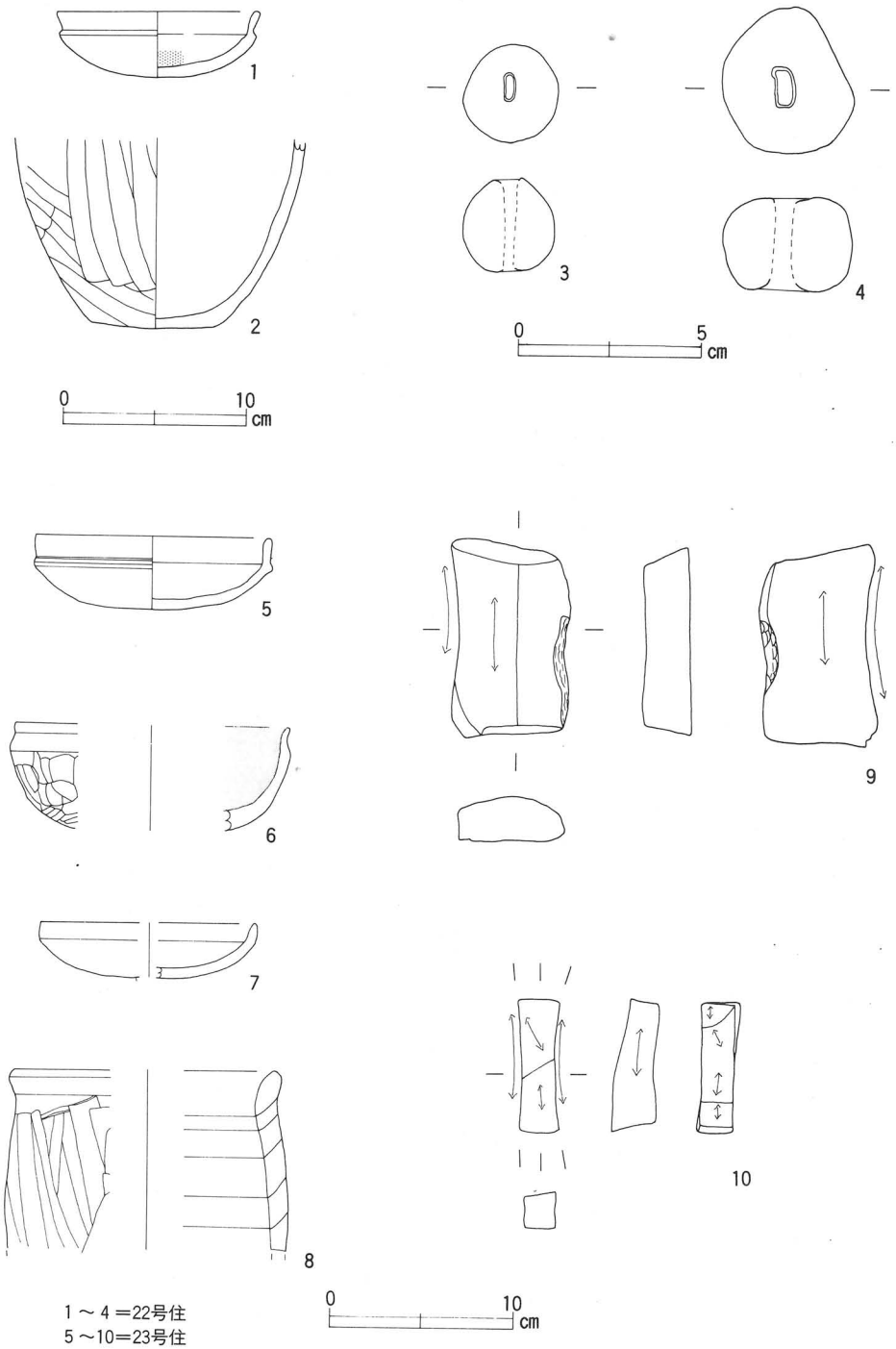
土層は、黄褐色土、黒褐色土、暗褐色土が堆積しており、黄褐色土が８層に暗褐色土が２層に各々細分される。これらの土層は、ほぼレンズ状に堆積しており、本住居址廃棄後埋められた状況を呈している。

カマドは、北壁中央部に位置しており、長さ1.68m、幅1.80m、高さ0.25mを計測する。焚口は、燃焼部の手前で第７層（黒褐色土）がこれに相当し、燃焼部は床面から0.10m下げ火床面としこの上面の第４、５、８層（黒褐色土、黒色土）が燃焼部に相当するが、焼土層はなく第８層の黒色土が、焼土ブロックを少量含む程度である。火床部は、あまり分解していない。煙道部は床面と同一面で、0.45m突出してからほぼ垂直に立ち上がっている。袖は、砂質粘土を用いている。

出土遺物は、土師器坏、甕、土玉、砥石などが出土しているが、土玉以外は破片が中心である。第195図、No５は、土師器坏で床面上７㎝の所より出土し、No６は土師器坏片で床面から出土している。No８は、土師器甕片で床面より出土している。No７は、土師器坏で床面上47㎝の所より出土している。No９、10は、砥石である。No９は、床面より出土しNo10は床面上65㎝の所より出土している。第196～197図は、全て土玉であるが、カマド内で燃焼部より煙道部にかけて合計18点の土玉が出土している。このことは、当古屋敷遺跡の全住居址には見られない点である。



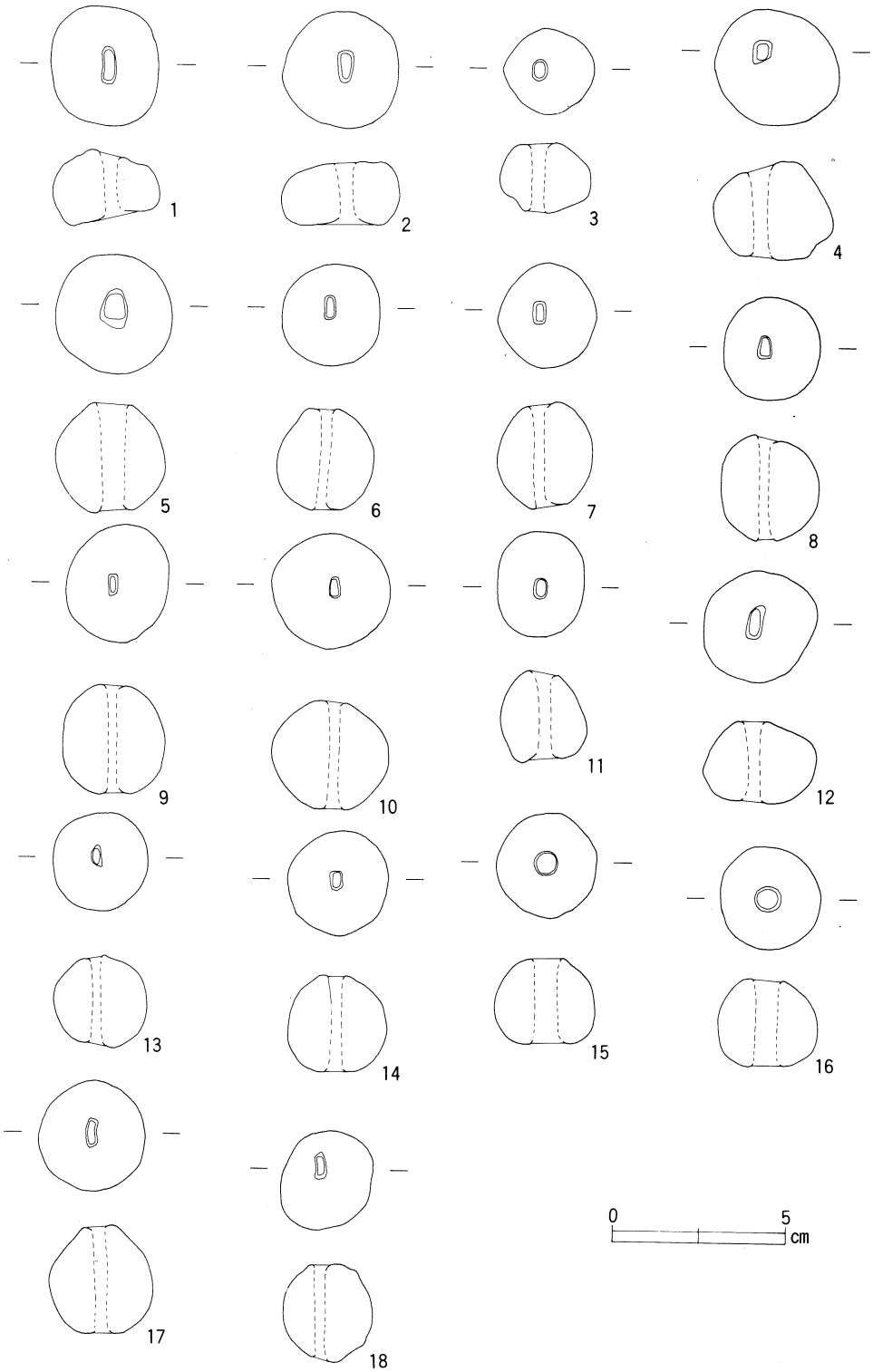
第192図　第23号住居址実測図



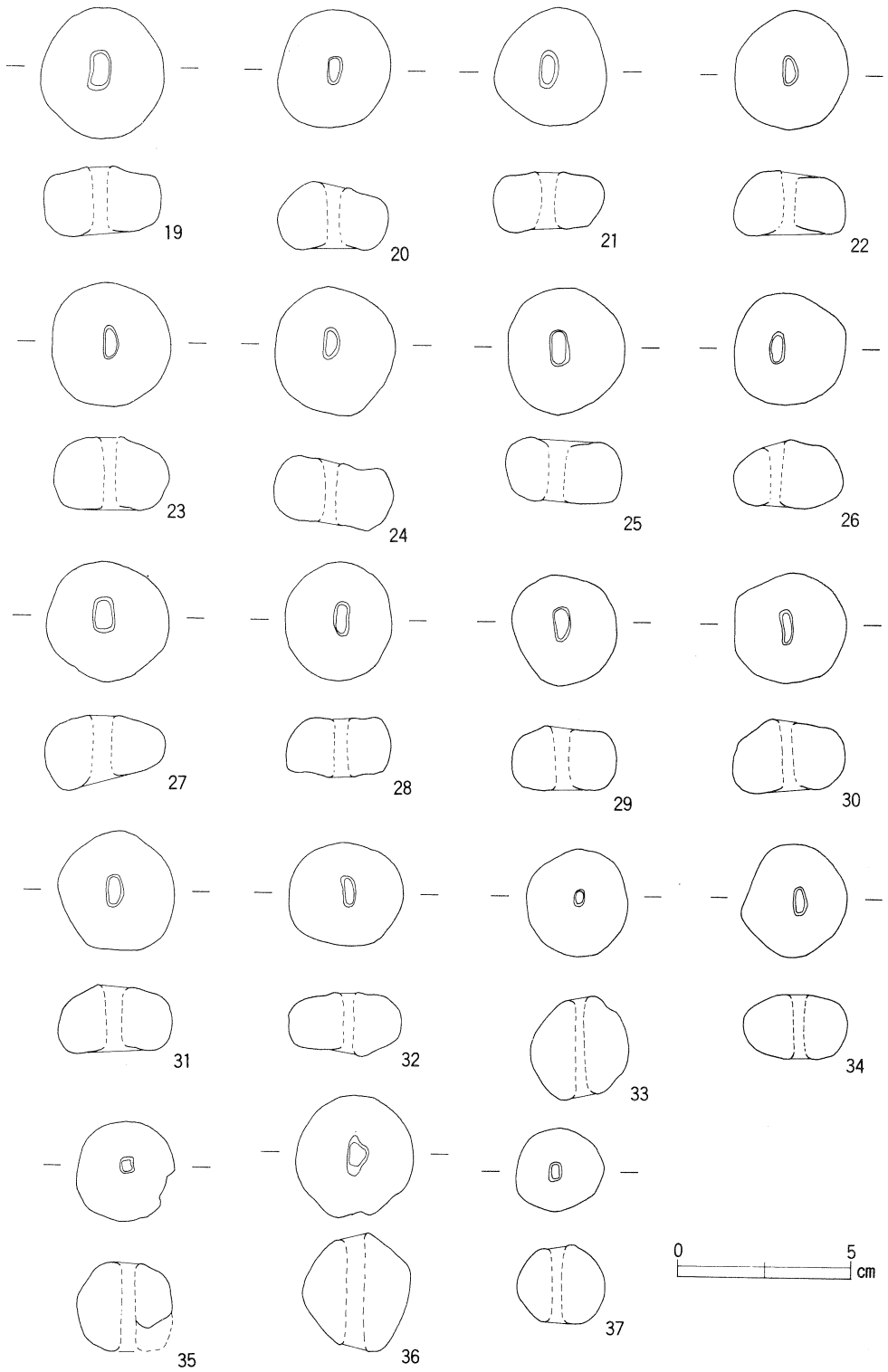
第193図　第22、23号住居址出土遺物実測図

第107表　第22．23号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第193図 No.1	坏	A　11.1 B　3.5 D　10.8	1／3	体部は、内傾しながら立ち上がり、陵線はしっかりしている。	口縁部回転ヘラナデ 体部内外面ともヘラナデ	緻密 良好 暗褐色	第22号住No.1 内面一部煤付着 床直
第193図 No.2	土師器 甕片	B　10.3 C　6.8		底部は、内湾ぎみで、体部は内傾ぎみに外傾する。体部下半は1／2欠	体部縦位ヘラ削り後 底部ヘラナデ後削り ヘラナデ、内面ナデ	雲母、長石、石英 黒色 良好	第22号住No.2 ＋5
第193図 No.3	土　玉	径 2.7×2.6×2.5 孔　0.8×0.4	完			緻密 良好 暗褐色	第22号住No.3 ＋4 30ｇ
第193図 No.4	土　玉	径 0.4×3.5×2.6 孔　1.1×0.6	完			緻密 良好 暗褐色	第22号住No.4 ＋18.5 20ｇ
第193図 No.5	土師器 坏	A　(13.0) B　4.0 D　13.1	1／4	体部は、内傾ぎみで、陵線はしっかりしている。口縁部は、直立である。	口縁部ヘラナデ、 体部ヘラ削り後ヘラナデ、内面ヘラナデ	緻密 良好 暗褐色	第23号住No.1 ＋7
第193図 No.6	土師器 坏片	A　(15.1) B　5.6 D　15.4	1／4	体部は内傾ぎみで陵線はなく、口縁部は薄く外反している。	口縁部横位ヘラナデ 体部縦位ヘラ削り後ナデ	緻密 普通 暗褐色	第23号住No.2 内面黒色処理 床直 二次火力を受ける
第193図 No.7	土師器 坏	A　(11.8) B　3.0 D　12.0	1／4	底部は、平底化しており体部は内傾ぎみに外傾し、口縁部は直立している。	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ、ヘラミガキ	緻密 良好 暗褐色	第23号住No.3 ＋47
第193図 No.8	土師 壺片	A　(15.0) B　9.7	1／3	体部は、やや内傾し、口縁部は、肥厚で外反している。	口縁部横位ヘラナデ 体部縦位ヘラ削り	長石粒、石英粒 良好 暗褐色	第23号住No.4 内外は磨滅 床直
第193図 No.9	砥　石	径 11.1×6.0×2.3		四面を使用し、左側面を良く使用している。			第23号住No.5 泥岩質 床直
第193図 No.10	砥　石	径 7.3×1.8×2.0		両端を欠損し、三面を使用、右側面に加工痕を有す			第23号住No.6 ＋65



第194図　第23号住居址出土遺物実測図①



第195図　第23号住居址出土遺物実測図②

第108表　第23号住居址出土遺物一覧表 1

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第194図 No.1	土　玉	径 3.5×3.1×2.2 孔 1.1×0.4	完			小石、砂粒 良好 暗褐色	第23号住No.7 20 g +13
第194図 No.2	土　玉	径 3.4×1.8 孔 1.0×0.5	完			砂粒 普通 明褐色	第23号住No.8 20 g +15
第194図 No.3	土　玉	径 2.6×2.1×2.0 孔 0.6×0.5	完			密 良好 茶褐色	第23号住No.9 10 g +14
第194図 No.4	土　玉	径 3.5×3.4×2.8 孔 0.6	完			密 良好 明褐色	第23号住No.10 30 g + 8
第194図 No.5	土　玉	径 3.5×3.4×3.1 孔 1.2×0.7	完			長石、石英、雲母 良好 暗褐色	第23号住No.11 30 g + 9
第194図 No.6	土　玉	径 2.9×2.8×2.9 孔 0.7×0.3	完			長石、石英 良好 暗褐色	第23号住No.12 25 g + 8
第194図 No.7	土　玉	径 3.1×2.8×3.0 孔 0.7×0.4	完			砂粒 良好 明褐色	第23号住No.13 25 g + 9
第194図 No.8	土　玉	径 2.9×2.8×3.1 孔 0.7×0.4	完			長石、石英、砂粒 良好 茶褐色	No.23号住No.14 30 g +10
第194図 No.9	土　玉	径 3.4×3.0×3.2 孔 0.6×0.3	完			砂粒 良好 暗茶褐色	第23号住No.15 30 g +11
第194図 No.10	土　玉	径 3.4×3.3×3.2 孔 0.6×0.3	完			長石、砂粒 良好 暗褐色	第23号住No.16 35 g +12
第194図 No.11	土　玉	径 3.0×2.5×2.6 孔 0.6×0.4	完			密 良好 暗褐色	第23号住No.17 20 g +11
第194図 No.12	土　玉	径 3.3×3.2×2.4 孔 1.0×0.5	完			密 良好 暗褐色	第23号住No.18 25 g 床直
第194図 No.13	土　玉	径 2.9×2.7×2.7 孔 0.6×0.3	完			密 良好 暗褐色	第23号住No.19 20 g +13
第194図 No.14	土　玉	径 3.0×2.9×2.8 孔 0.5×0.4	完			密 良好 橙褐色	第23号住No.20 25 g + 9
第194図 No.15	土　玉	径 3,0×2.9×2.5 孔 0.7	完			長石粒、石英粒 普通 淡黒褐色	第23号住No.21 25 g + 7

第108表　第23号住居址出土遺物一覧表 2

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第194図 No.16	土　玉	径 3.0×2.8×2.6 孔　0.8	完			密 良好 茶褐色	第23号住No.22 20 g ＋ 9
第194図 No.17	土　玉	径 3.2×3.1×3.2 孔　0.8×0.3	完			長石、石英粒 良好 茶褐色	第23号住No.23 30 g ＋ 5
第194図 No.18	土　玉	径 2.9×2.6×2.8 孔　0.7×0.4	完			砂粒 良好 黒褐色	第23号住No.24 20 g ＋ 6
第195図 No.19	土　玉	径 3.8×3.5×2.0 孔　1.1×0.6	完			密 良好 淡暗褐色	第23号住No.25 ＋11　20 g 煤付着
第195図 No.20	土　玉	径 3.5×3.2×2.0	完			密 良好	第23号住No.26 20 g 床直
第195図 No.21	土　玉	径 3.5×3.2×1.7 孔　1.6×0.5	完			密 良好 明褐色	第23号住No.27 30 g ＋ 12
第195図 No.22	土　玉	径 3.4×3.3×1.8 孔　0.9×2.5	完			密 良好 暗褐色	第23号住No.28 20 g ＋14
第195図 No.23	土　玉	径 3.6×3.5×2.1 孔　1.0×0.5	完			密 普通 暗褐色	第23号住No.29 30 g ＋ 8
第195図 No.24	土　玉	径 3.8×3.5×1.8 孔　0.9×0.5	完			密 良好 淡明褐色	第23号住No.30 25 g ＋ 9
第195図 No.25	土　玉	径 3.7×3.4×1.8 孔　1.0×0.6	完			密 普通 明褐色	第23号住No.31 20 g ＋ 8
第195図 No.26	土　玉	径 3.2×3.2×2.0 孔　1.0×0.5	完			密 良好 淡明褐色	第23号住No.32 20 g ＋ 9
第195図 No.27	土　玉	径 3.6×3.5×2.1 孔　1.0×0.6	完			密 良好 淡明褐色	第23号住No.33 25 g ＋10
第195図 No.28	土　玉	径 3.5×3.1×1.7 孔　1.0×0.4	完			砂粒 良好 明褐色	第23号住No.34 20 g ＋11
第195図 No.29	土　玉	径 3.2×3.0×1.9 孔　1.0×0.5	完			密 普通 暗褐色	第23号住No.35 20 g ＋12
第195図 No.30	土　玉	径 3.2×3.2×2.1 孔　1.0×0.3	完			密 普通 明褐色	第23号住No.36 20 g ＋11

第108表　第23号住居址出土遺物一覧表３

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第195図 No.31	土　玉	径 3.5×3.4×2.0 孔　1.0×0.5	完			小石、砂粒 良好 暗褐色	第23号住No.37 20ｇ 床直
第195図 No.32	土　玉	径 3.3×3.0×1.9 孔　0.9×0.4	完			砂粒 良好 明褐色	第23号住No.38 20ｇ ＋13
第195図 No.33	土　玉	径 3.1×3.0×3.0 孔　0.5×0.3	一部欠			粗（砂粒） 良好 茶褐色	第23号住No.39 25ｇ ＋ 9
第195図 No.34	土　玉	径 3.3×3.0×1.9 孔　0.8×0.4	完			砂粒 普通 暗褐色	第23号住No.40 20ｇ ＋ 5
第195図 No.35	土　玉	径 2.9×2.9×2.6 孔　0.5	一部欠			粗（砂粒） 普通 明褐色	第23号住No.41 20ｇ ＋ 5
第195図 No.36	土　玉	径 3.6×3.4×3.5 孔　1.2×0.6	完			密 良好 明褐色	第23号住No.42 30ｇ ＋ 5
第195図 No.37	土　玉	径 2.5×2.4×2.3 孔　0.5×0.4	完			砂粒密 良好 橙褐色	第23号住No.43 15ｇ ＋ 5

第24号住居址（第196・198図、第109表）

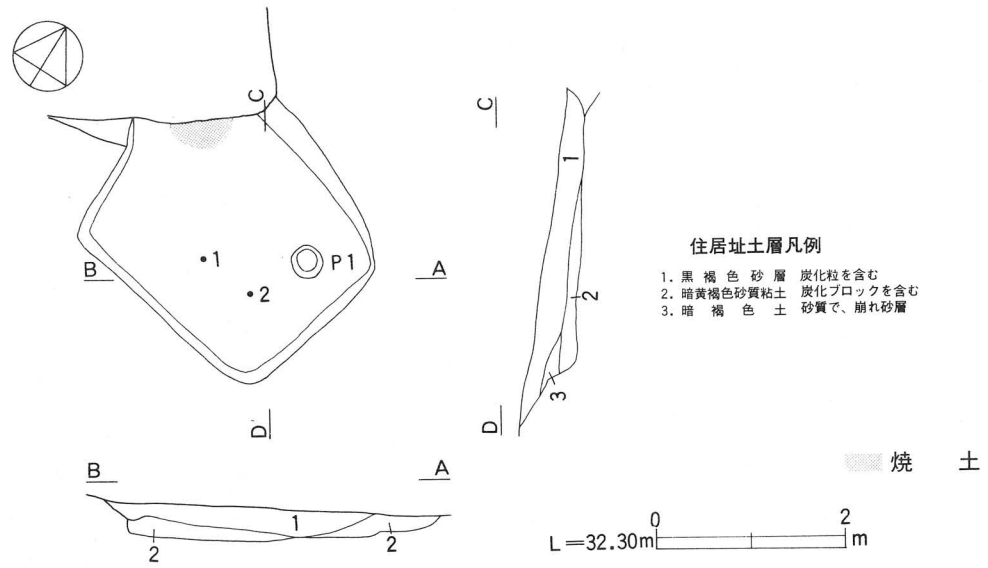
本址は、Ｉ郭から北東部へ小さく突出した舌状台地の南側平坦部西側に位置している。大きさは、東西径2.75m、南北径2.45m、深さ0.40mを計測し、隅丸長方形状を呈している。西側は、谷に接しているため確認できなかった。方位は、Ｎ－75°－Ｗである。

床面は、砂質粘土層で良くしまっており、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、掘り込まれておらず、柱穴は１本確認されたのみである。

土層は、黒褐色土、暗黄褐色土、暗褐色土が堆積しており、３層とも砂質である。これらの土層は、南側と東側から流入したようである。

カマドは、確認されなかったが、西壁の中央西側に焼土域が所在することから、この焼土がカマドに相当する部分と判断される。袖は、不明である。

出土遺物は、土師器坏片、甕片、須恵器壷片、土玉片などが出土しているが、非常に少量で図示出来たのは第200図、No１、２の２点程度である。No１は、須恵器壷底部片で床面上10cmの所



第196図　第24号住居址実測図

より出土し、No 2 は土師器甕片で床面上 6 ㎝の所より出土している。

本址の時期は、出土遺物から平安時代に位置する住居址と判断される。

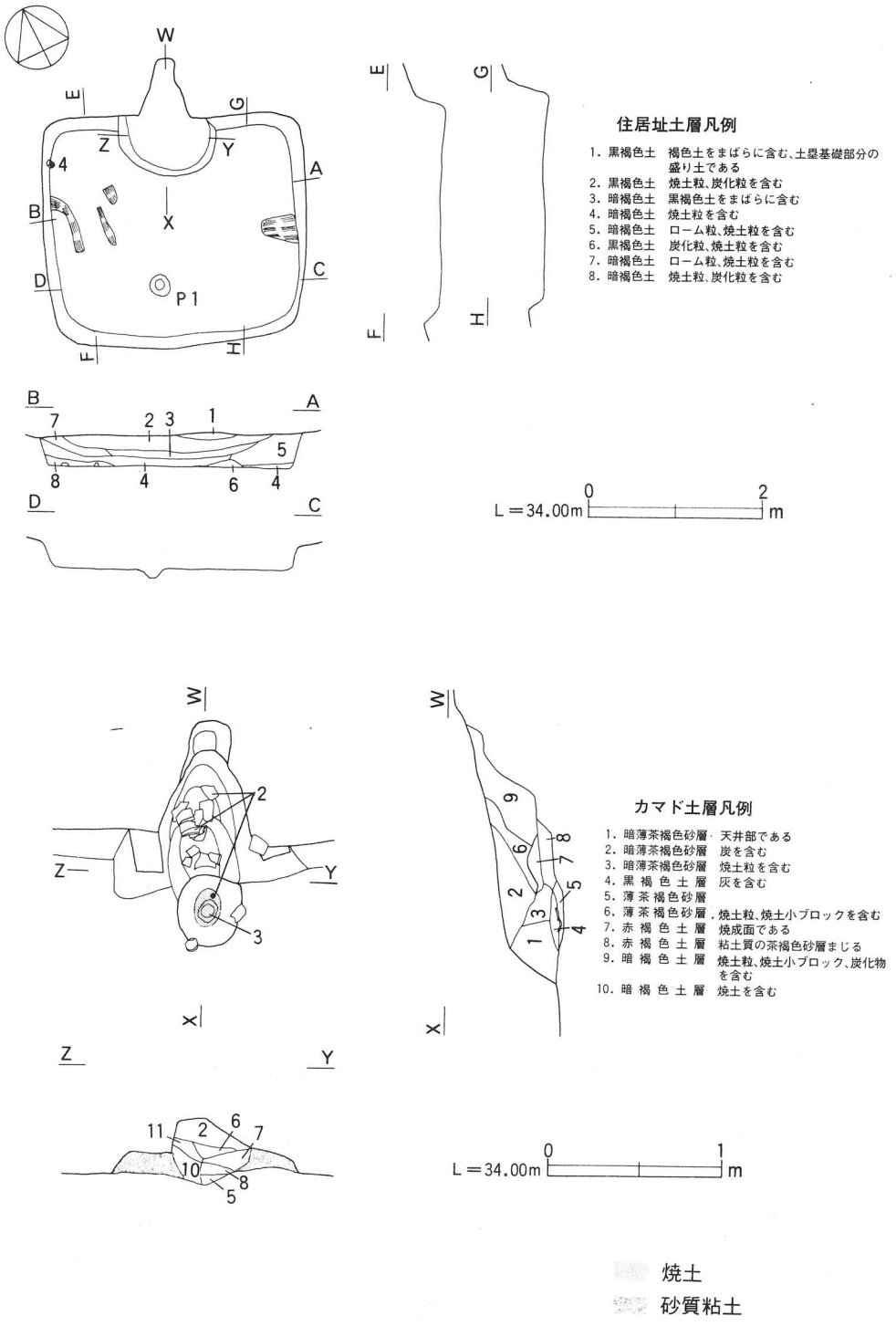
第25号住居址（第197・198図、第109表）

本址は、Ⅰ郭の南東部に位置している。大きさは、東西径3.00m、南北径2.68m、深さ0.46mを計測し、隅丸方形状を呈している。方位は、N－25°－Eである。

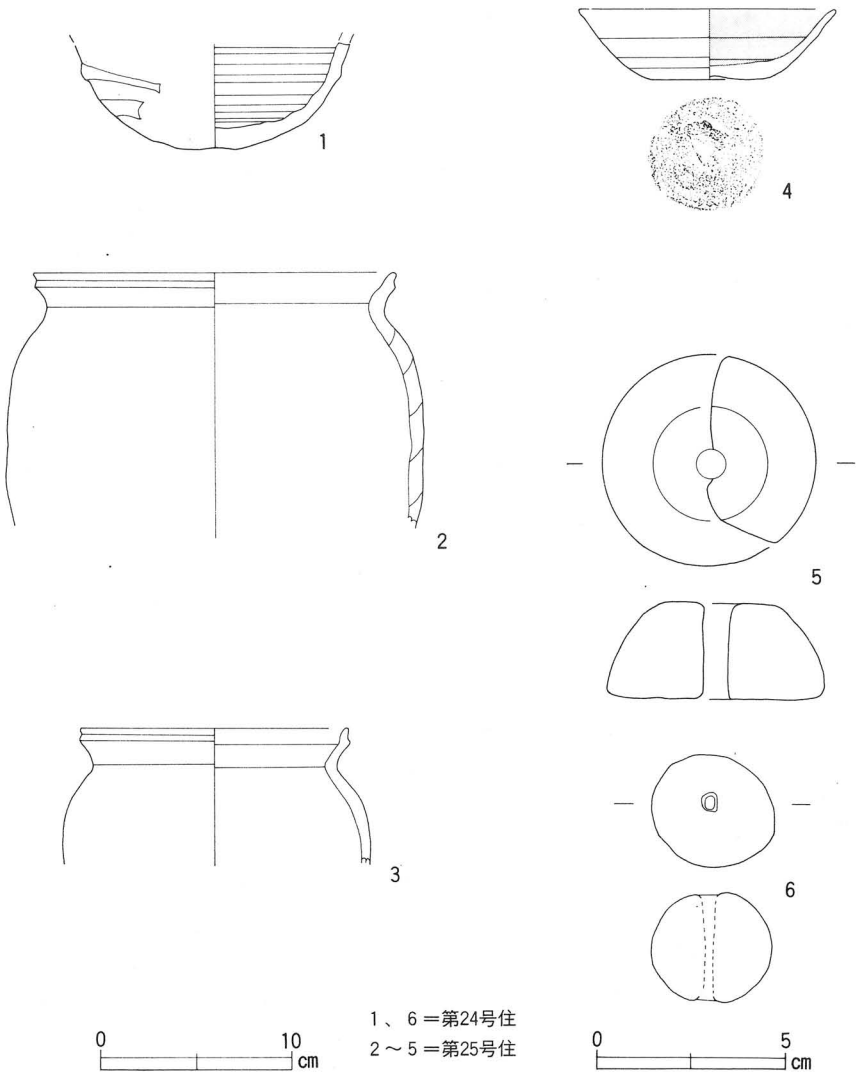
床面は、貼床で比較的しっかりしており、壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、柔弱な壁である。壁溝は、掘り込まれておらず、柱穴は南側で 1 本確認されたのみである。カマドは、北壁中央に位置している。

土層は、黒褐色土、暗褐色土がレンズ状に堆積しており、黒褐色土が 3 層に、暗褐色土が 5 層に細分される。第 1 層は、土塁基底部をなす土層であり、第 2 層以下が本址の覆土である。各土層（3 層を除く）は、焼土粒子や炭化物を含み、床面にも炭化材が所在するものの床面は焼けていないことから、本住居址廃棄後によるものと判断される。

カマドは、北壁中央部に位置しているが、中世城郭築城（造改築）時に上面等が、破壊されている。長さ1.30m、幅1.12m、高さ0.32mを計測し、壁外へ0.65m突出している。焚口部分は、



第197図　第25号住居址実測図



第198図　第24、25号住居址出土遺物実測図

消失しており、燃焼部は第4層（黒褐色土）と第7層（赤褐色土）の部分と判断される。燃焼部下位面は、床面より一度0.05m下がってから床面と同レベルとしてから、テラスを造りながら煙道先端部に至る。この部分に、第5層と第8層で燃焼部下位層を形成しているが、ほとんど分解していない。煙道先端は、壁外へ0.65m突出しており，比較的長い煙道となっている。袖と上面は、砂質粘土を用いている。

出土遺物としては、住居址内より土師器坏片、甕片、土玉、紡錘車が出土して、カマド内からは土師器坏、甕が出土している。これらの出土遺物で、図示出来たのは第200図、No 2 ～ 5 の 4 点のみである。第200図 No 2 、3 は、土師器甕でカマド内より出土しており、No 4 は土師器坏でカマド内より出土している。No 5 は、土製紡錘車で床面上10cmの所より出土している。

出土遺物から本址は平安時代に位置する住居址と判断される。

第109表　第24、25号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第198図 No.1	須恵器 壺　片	B　5.3	体部 1/8程度	体部は、球形を呈し、体部表面に自然釉有	体部は回転ヘラ削り後にナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ	長石 良好 灰褐色	第24号住No.1 +10
第198図 No.2	土師器 甕　片	A　19.0 B　13.4	口縁1/3 体部1/2	体部は、上半と下半が内傾で中央は直立、頸部内傾で口縁部外傾、口唇部つまみ出し	口縁部回転ヘラ削り 横位ヘラナデ 体部右下りヘラナデ	長石粒、石英粒 良好 赤褐色	第24号住No.1 +6
第198図 No.3	土師器 小型 甕片	A　14.7 B　7.1	1／2	体部は内傾しており、頸部は内傾し、口縁部は外反、口唇部は直立ぎみ	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラナデ	長石粒、雲母粒 良好 暗赤褐色	第24号住No.2 +50
第198図 No.4	土師器 坏	A　13.6 B　3.8 C　6.0	完	底部は内傾し、体部は直線的に外傾し、口縁部はやや外反	体部回転ヘラナデ 下部手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り	長石、石英、砂粒 良好 淡黒褐色	第25号住No.3 カマド内出土 内面黒色処理 床直
第198図 No.5	土製 紡錘車 片	上径　(2.9) 下径　(5.6) 高　2.5 孔　(0.7)	1／2	台形状をなす。側面は緩やかな曲線をなす。		緻密 良好 暗褐色	第25号住No.4 土製 床直
第198図 No.6	土　玉	径 2.9×3.3×2.9 孔　0.5×0.4	完			緻密 良好 暗褐色	第24号住No.2 25 g +30

第26号住居址（第199・202図、第110表）

本址は、Ｉ郭は南東部に位置しており、煙道の先端は第25号住に切られ東壁南側は、消失している。また、本址Ｉ郭南東部土塁下に位置している。大きさは、東西径3.82m、南北径3.85m、深さ0.50mを計測し、隅丸方形状を呈している。方位は、Ｎ－17°－Ｅである。

床面は、貼床であるが柔弱であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、カマド以外全周しているものと判断され、幅0.18～0.30m、深さ0.10m程度を計測する。柱穴は、対角線上に

4本確認された。カマドは、北壁中央東側に位置している。

土層は、黒褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土がレンズ状に堆積しているものの、第1層黒褐色土は土塁基底部が土層であり、第2～5層が本址の覆土である。

カマドは，北壁中央東側に位置し、長さ1.50m、幅1.32m、高さ0.32mを計測する。焚口は、床面より0.12m下げており、この上面で第4層（黒褐色土）が燃焼部に相当するものの、焼土の堆積もなくローム面もほとんど分解していない。煙道部は、第9、10層がこれに相当し、焚口部より緩やかに高くなり、第4層先端で0.02m下がってからほぼ垂直に立ち上がっている。袖と上面は、白色砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物としては、土師器坏片、甕片、須恵器杯片、紡錘車、土玉などが出土しているが、図示出来たのは紡錘車と土玉のみで、坏や甕は小破片である。第204図、No1は、滑石製紡錘車で体部中央に溝を刻しており、床面上4㎝の所より出土している。同図、No2～8は、土玉である。

坏や甕より、本址は平安時代に位置する住居址と判断される。

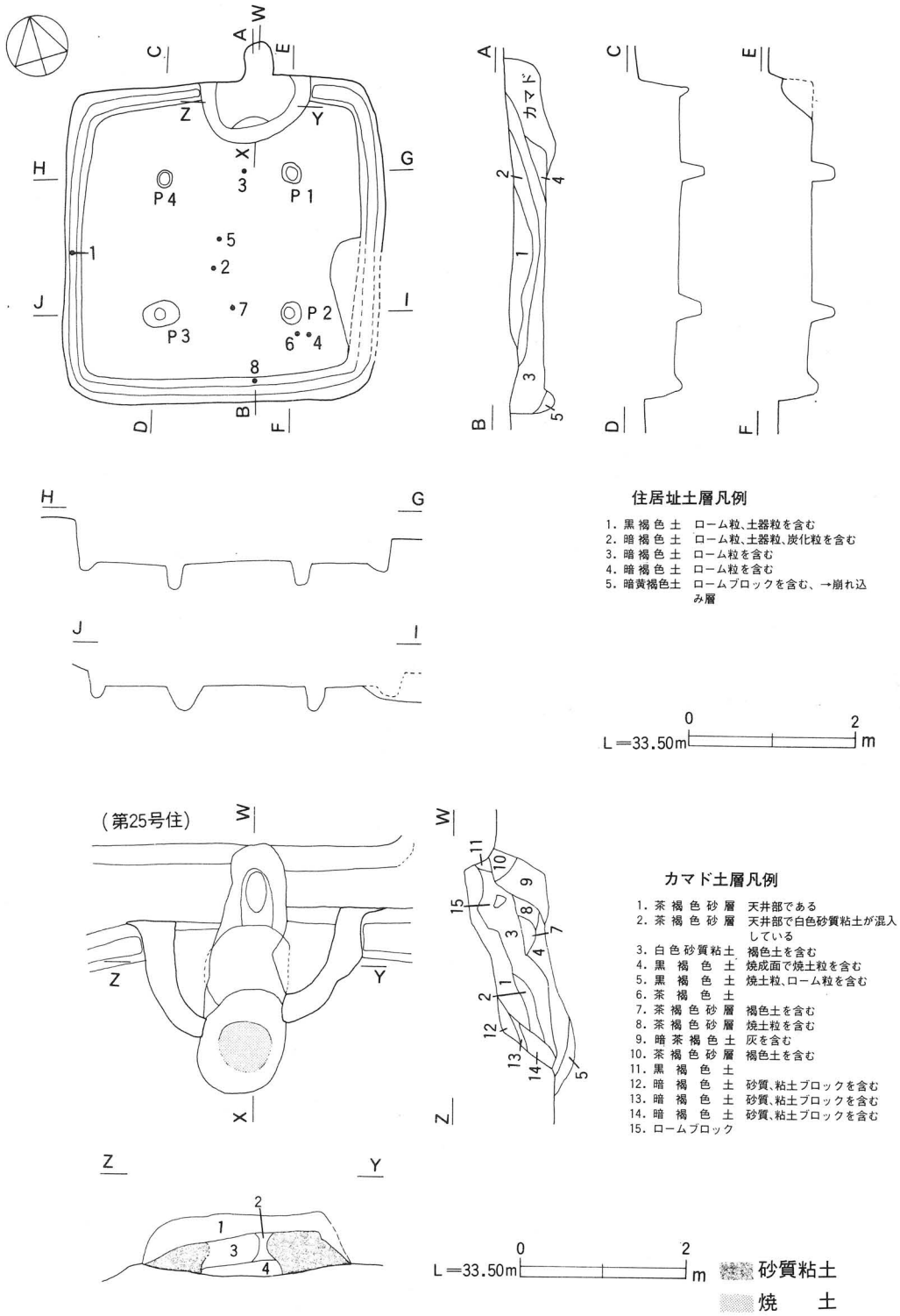
第27号住居址（第200・202・203図、第110、111表1・2）

本址は、I郭の中央西側に位置し、中世の建物址柱穴に一部を掘り切られている。大きさは、東西径5.08m、南北径4.50m、深さ0.13mを計測し、東西に長い長方形状を呈している。方位はN－0°－Eである。東壁は、西壁より0.40m程度長くなっている。また、西壁と南東コーナー部には、中世の土壙が掘り込まれている。

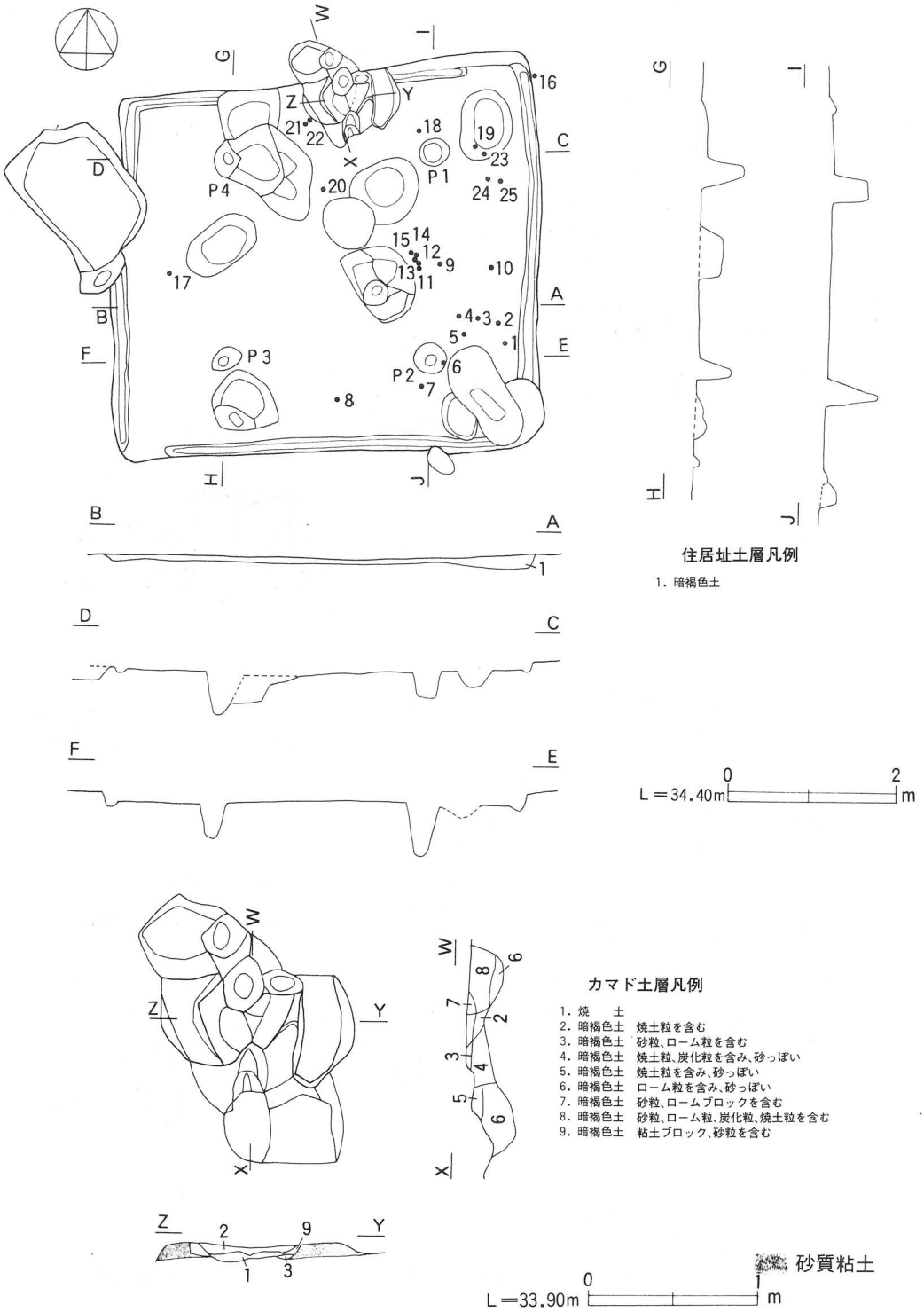
床面は、しっかりした貼床であり、壁ははぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、カマドと北東及び南西コーナー部以外は全周しているものと判断される。柱穴は、4本確認された。カマドは北壁中央部に位置しているが、中世時にその大部分を破壊している。また、住居址の中央北側には、0.65m×0.60m×0.06mの規模で粘土が貼られているが、中世の建物址等に結び付く粘土と判断される。

土層は、1層で暗褐色土が堆積している。カマドは、北壁中央部に位置しているが、中世の柱穴による破壊を受けている。確認部での大きさは、長さ0.80m、幅1.15m、高さ0.09mを計測する。焚口と煙道部先端は、消失している。燃焼部は、第1層の焼土と第4層の暗褐色土がこれに相当する。燃焼部下のロームは、ほとんど分解していない。袖は、白色砂質粘土を用いて構築している。

出土遺物は、土師器甕、坏片、支脚片、土玉などが出土しているが、図示出来たのは土師器甕支脚、土玉のみで、坏は全て小破片である。第204図No9は、土師器甕で床面上2㎝の所より出



第199図　第26号住居址実測図



第200図　第27号住居址実測図

土し、同図No10は支脚片である。第205図は、土玉であり床面と床面上5㎝の所から出土している。

本址の時期は、出土遺物から奈良時代に位置する住居址と判断される。

第28号住居址（第201・202図、第110表）

本址は、Ⅰ郭から北東方向に細長く突出した台地上で、Ⅰ郭から5ｍ程度下がった平坦部で砂層中で確認されている。大きさは、東西径5.05m、南北径4.58m、深さ0.20～0.30mを計測する。これは、西側が斜面部で高くなっており、柱穴部分（西側）から平坦面となっていることに起因する。方位は、Ｎ－8°－Ｅで長方形状を呈している。

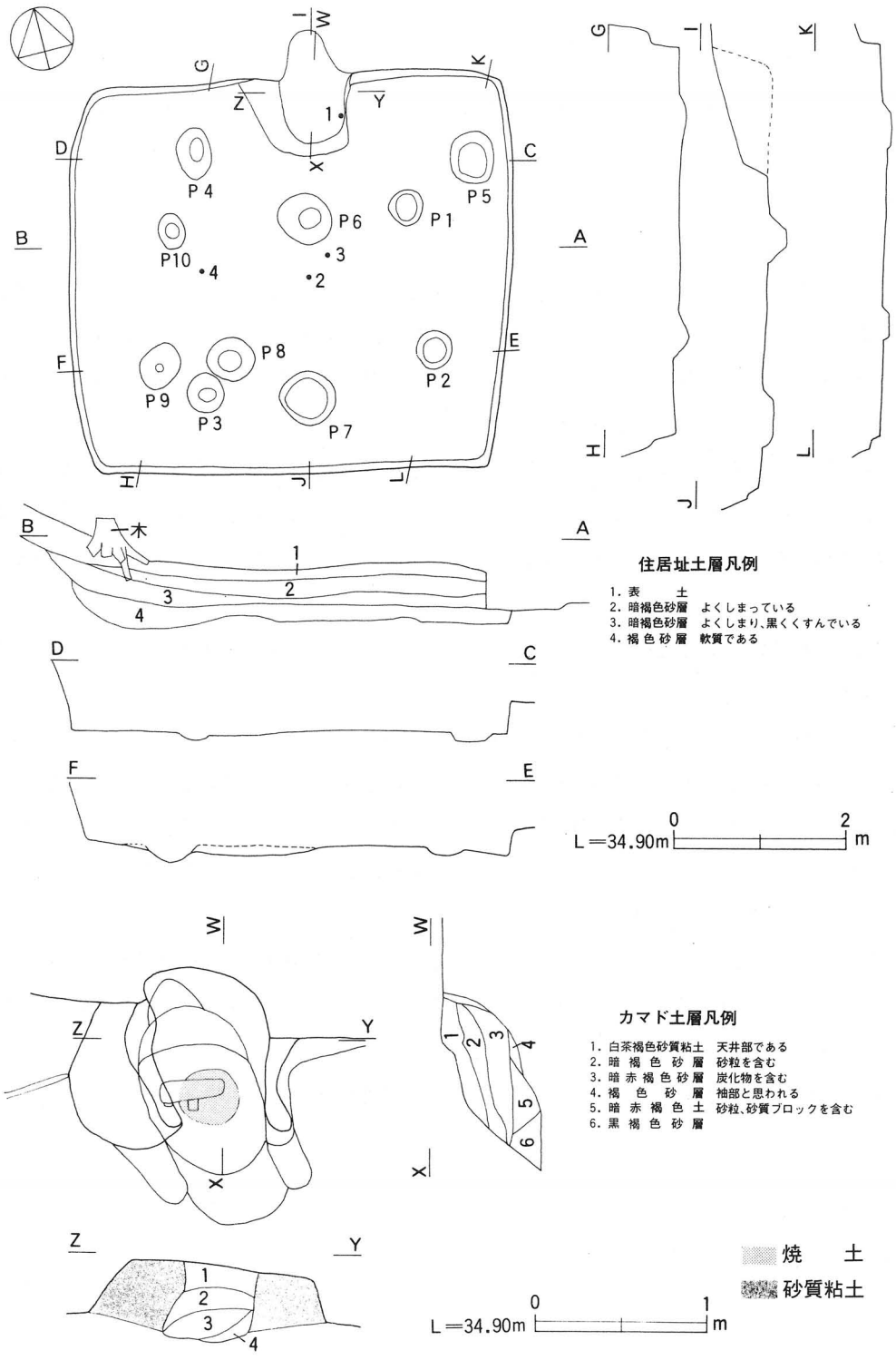
床面は、砂層であるが比較的しまっており、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、確認できなかった。柱穴は合計10本確認されたがＰ1～4が主柱穴と判断される。4柱穴とも、非常に浅い柱穴である。他の柱穴は、建替等によるものであろう。カマドは、北壁中央部に位置している。

土層は、1層で軟質の暗褐色砂層が堆積しており、西方から流入した状況を呈している。住居址上面の土層も、砂層である。

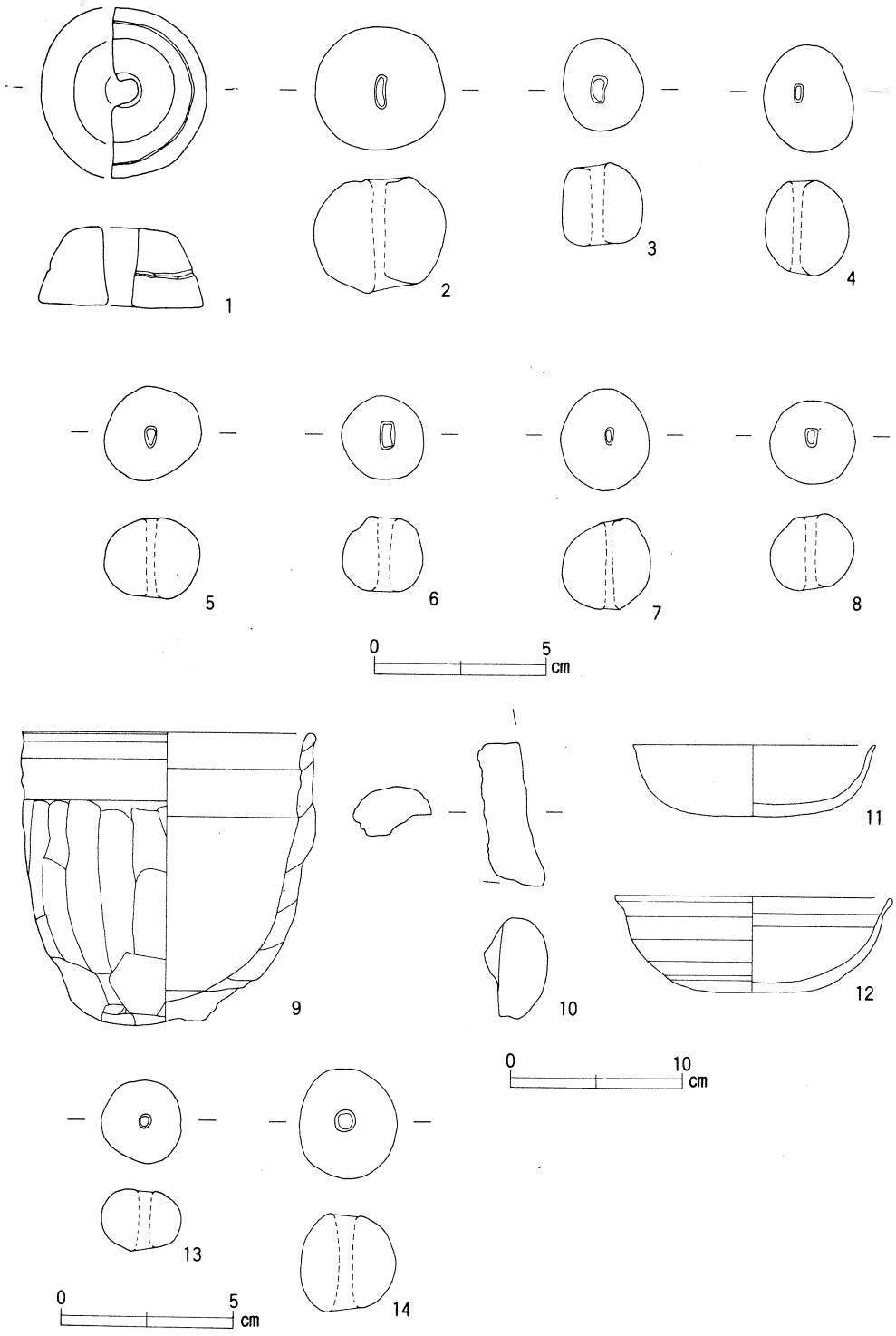
カマドは、北壁中央部に位置し、長さ1.45m、幅1.30m、高さ0.30mを計測する。火床部は、カマド中央部に位置し、床面とほぼ同じ高さで、暗赤褐色土が堆積している。下位の砂層は、あまり焼けていない。燃焼部は、第3層の暗赤褐色土が堆積している。煙道部は、火床面より0.10m程度高くなってから、壁外へ0.20m突出し、ほぼ垂直に立ち上がっている。袖と上面は、砂質粘土で構築しているが、柔弱である。

出土遺物は、土師器坏、甕、土玉などが出土しているが、第204図No11～14以外は破片である。同図No11は、土師器坏で床面より出土しており、同図No12は土師器坏で床面より出土している。同図No13、14は、土玉で床面よりの出土である。

本址の時期は、出土遺物から平安時代に位置する住居址である。



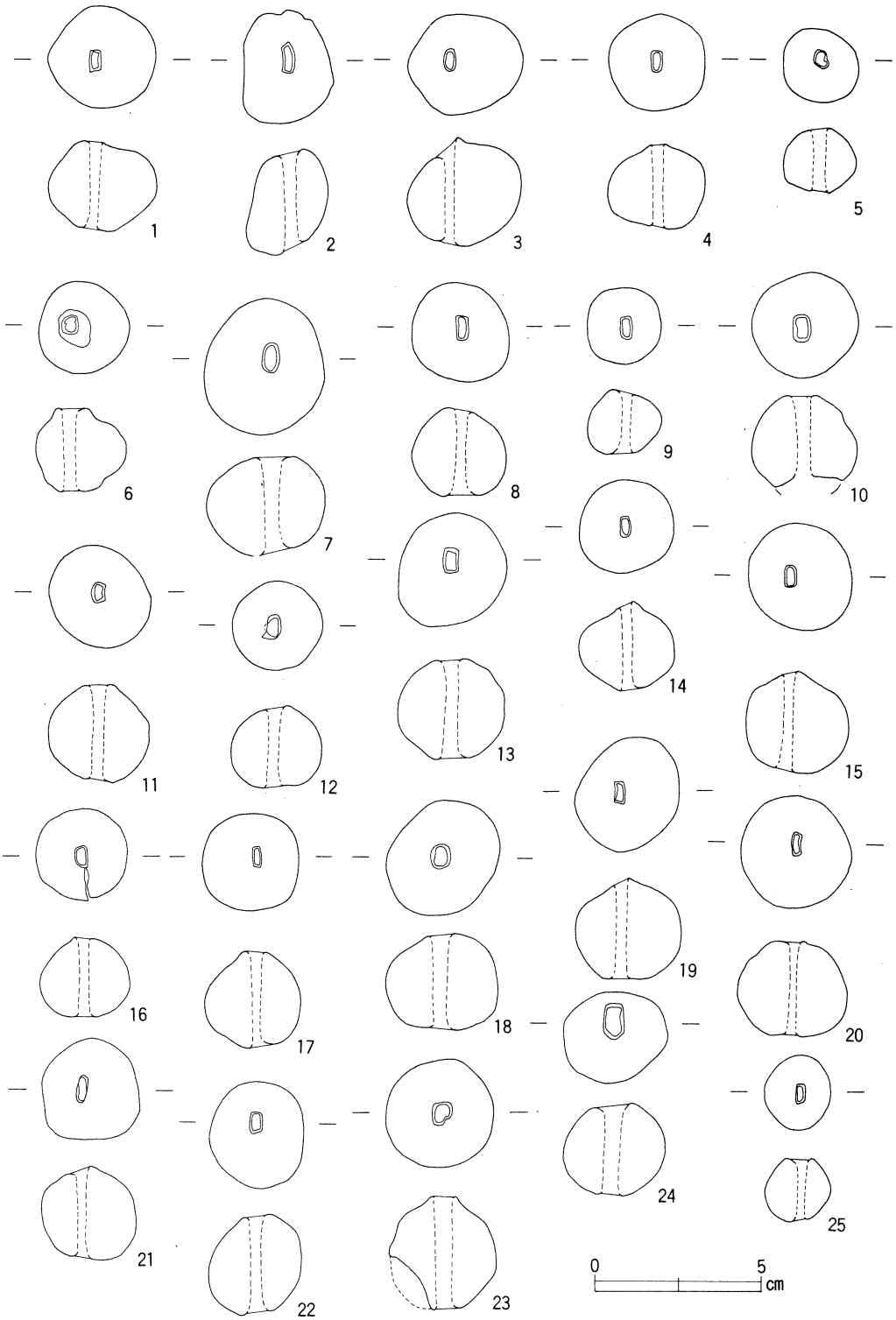
第201図　第28号住居址実測図



第202図　第26、27、28号住居址出土遺物実測図

第110表　第26、27号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第202図 No.1	滑石製 紡錘車片	上径　3.0 下径　4.9 B　2.2 孔　1.0×0.7	1／2	台形状をなすが、不整円形状をなしている。側面に、刻み込み有		滑石製	第26号住No.1 40 g ＋ 4
第202図 No.2	土　玉	径 3.8×3.1×3.3 孔　1.0×0.3	完			長石、石英、粗 良好 明茶褐色	第26号住No.2 45 g ＋25
第202図 No.3	土　玉	径 2.3×2.7×2.4 孔　0.8×0.4	完			砂粒 普通 明褐色	第26号住No.3 15 g ＋20
第202図 No.4	土　玉	径 3.1×2.6×2.7 孔　0.5×0.3	完			長石粒、雲母粒 良好 暗茶褐色	第26号住No.4 25 g ＋12
第202図 No.5	土　玉	径 2.8×2.7×2.3 孔　0.6×0.4	完			密 良好 暗褐色	第26号住No.5 20 g ＋ 2
第202図 No.6	土　玉	径 2.4×2.2 孔　0.8×0.4	完			密 良好 暗褐色	第26号住No.6 15 g ＋18
第202図 No.7	土　玉	径 2.9×2.6×2.6 孔　0.5×0.3	完			長石粒、砂粒 良好 茶褐色	第26号住No.7 20 g ＋23
No.201図 No.8	土　玉	径　2.4×2.2 孔　0.5×0.4	完			砂粒 良好 暗褐色	第26号住No.8 15 g ＋ 3
第202図 No.9	土師器 甕	A　17.1 B　17.0 C　6.5	2／3	体部は、直線的に外傾し、口縁部は直立ぎみ	口縁部横位ヘラナデ 体部縦位ヘラ削り 底部ヘラ削り、内ナデ	長石、石英、雲母粗い 普通 明黒色	第27号住No.1 ＋2
第202図 No.10	支脚片	長　8.3 巾　2.5	片	楕円形をなしている。		小石、長石、砂粒 良好 明褐色	第27号住No.2
第202図 No.11	土師器 坏	A　14.0 B　4.1 C　5.0	体部 1／6	底部は、水平で体部下半は、内傾ぎみに外傾で、体部は直立、口縁部はやや外傾	口縁部横位ヘラナデ 底部ヘラ削り ナデ、内面ナデ	小石、長石、石英、粗い 良好 明褐色	第28号住No.1 床直
第202図 No.12	土師器 坏	A　16.0 C　5.0	体～口にかけ1/3残	底部は水平で、体部は内は外傾している。	回転ヘラナデ 内面ヘラナデ	小石、長石、雲母、粗い 淡赤褐色	第28号住No.2 表面磨滅 床直
第202図 No.13	土　玉	径 2.4×2.3×1.8 孔　0.4	完			密 良好 明褐色	第28号住No.3 10 g 床直
第202図 No.14	土　玉	径 3.2×2.8×2.8 孔　0.6	完			長石、石英、砂粒 普通 茶褐色	第28号住No.4 25 g 床直



第203図　第27号住居址出土遺物実測図

第111表　第27号住居址出土遺物一覧表 1

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第203図 No.1	土　玉	径 3.3×3.1×2.5 孔　0.7×0.3	完			石英、砂粒 良好 暗褐色	第27号住No.3 25 g 床直
第203図 No.2	土　玉	径 3.4×2.6×2.8 孔　0.9×0.4	完			長石、石英粒 良好 明茶褐色	第27号住No.4 30 g 床直
第203図 No.3	土　玉	径 3.4×3.2×3.0 孔　0.7×0.4	完			長石、石英 良好 暗褐色	第27号住No.5 30 g 床直
第203図 No.4	土　玉	径 2.9×2.9×2.6 孔　0.7×0.3	完			密 良好 淡茶褐色	第27号住No.6 20 g 2床直
第203図 No.5	土　玉	径 2.3×2.3×1.9 孔　0.6×0.5	完			長石、石英 良好 暗褐色	第27号住No.7 10 g 床直
第203図 No.6	土　玉	径 2.8×2.7×2.5 孔　0.6×0.5	完			雲母、長石粒 良好 暗褐色	第27号住No.8 20 g 床直
第203図 No.7	土　玉	径 4.1×3.7×0.3 孔　0.9×0.5	完			小石、長石、石英 普通 淡黒褐色	第27号住No.9 40 g 床直
第203図 No.8	土　玉	径 3.0×2.9×2.6 孔　0.8×0.4	完			長石、石英、粗 良好 暗褐色	第27号住No.10 20 g 床直
第203図 No.9	土　玉	径 2.3×2.2×2.0 孔　0.7×0.4	完			密 良好 暗褐色	第27号住No.11 10 g ＋ 5
第203図 No.10	土　玉	径 3.2×2.7 孔　0.8×0.6	下欠			密 良好 暗褐色	第27号住No.12 20 g 床直
第203図 No.11	土　玉	径 3.1×3.0×2.9 孔　0.6×0.4	完			密 良好 暗褐色	第27号住No.13 25 g 床直
第203図 No.12	土　玉	径 2.7×2.7×2.4 孔　0.7×0.4	完			密 良好 明茶褐色	第27号住No.14 20 g 床直
第203図 No.13	土　玉	径 3.4×3.3×3.0 孔　0.8×0.4	完			小石、長石、砂粒 良好 明褐色	第27号住No.15 30 g 床直
第203図 No.14	土　玉	径 2.8×2.7 孔　0.6×0.3	完			砂粒 良好 明褐色	第27号住No.16 20 g 床直
第203図 No.15	土　玉	径 3.2×3.1×3.1 孔　0.6×0.3	完			長石粒、石英粒 良好 暗褐色	第27号住No.17 30 g 床直

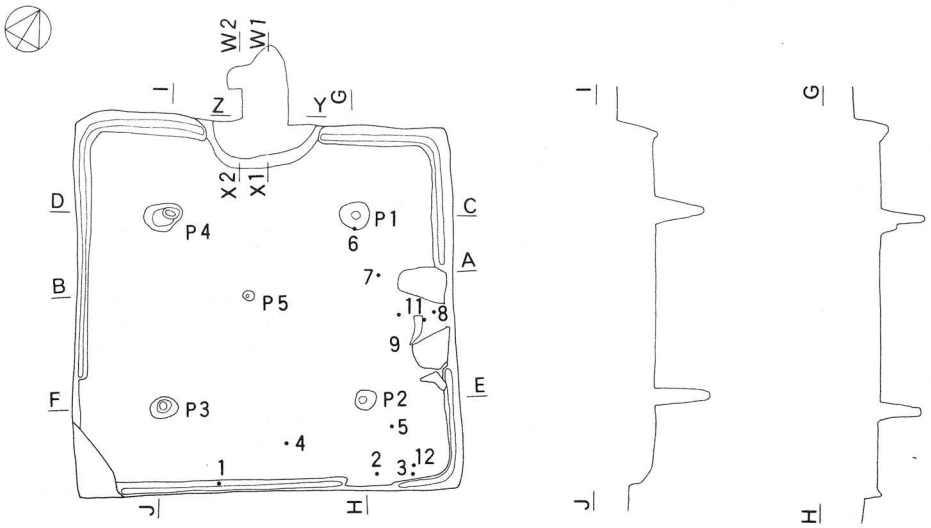
第111表　第27号住居址出土遺物一覧表２

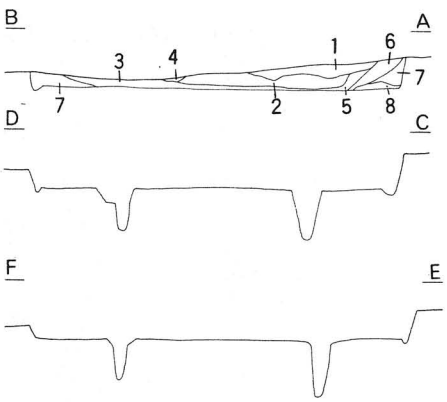
挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第203図 No.16	土　玉	径 2.8×2.4 孔 0.7×0.4	完			密 良好 暗褐色	第27号住No.18 20ｇ 床直
第203図 No.17	土　玉	径 3.0×2.9×3.0 孔 0.6×0.3	完			砂粒 良好 暗褐色	第27号住No.19 25ｇ 床直
第203図 No.18	土　玉	径 3.4×2.9 孔 0.6	完			長石、石英、砂粒 普通 暗褐色	第27号住No.20 30ｇ 床直
第203図 No.19	土　玉	径 3.5×3.2×3.0 孔 0.7×0.3	完			砂粒 良好 暗褐色	第27号住No.21 30ｇ 床直
第203図 No.20	土　玉	径 3.4×3.3×2.8 孔 0.7×0.3	完			密 良好 暗褐色	第27号住No.22 30ｇ ＋２
第203図 No.21	土　玉	径 3.0×2.9×2.8 孔 0.8×0.3	完			長石粒、石英粒 普通 暗褐色	第27号住No.23 25ｇ 床直
第203図 No.22	土　玉	径 3.2×2.8×3.0 孔 0.7×0.4	完			砂粒 普通 暗褐色	第27号住No.24 25ｇ 床直
第203図 No.23	土　玉	径 3.3×3.2×3.4 孔 0.7×0.6	一部欠			密 良好 暗褐色	第27号住No.25 30ｇ ＋10
第203図 No.24	土　玉	径 3.2×2.8×2.7 孔 1.1×0.6	完			密 良好 茶褐色	第27号住No.26 20ｇ 床直
第203図 No.25	土　玉	径 2.3×2.0×1.8 孔 0.6×0.3	完			密 良好 暗褐色	第27号住No.27 10ｇ ＋７

第29号住居址（第204・205図、第112表）

本址は、Ⅱ郭の中央南東部に位置し、東西径5.96m、南北径5.85m、深さ0.60mを計測し、隅丸方形状を呈している。方位は、N－35°－Wである。南西部は、第10、11堀などの中世城址関係遺構により破壊され、東側より0.30m程度低くなっている。

床面は、柱穴内はしっかりした貼床であるが、壁付近は比較的柔弱な床である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマド、南西コーナー、南壁東側、東壁中央部以外は、幅0.15～0.30m、深さ0.06～0.09mの規模で掘り込まれている。柱穴は５本確認されている。Ｐ４は建替

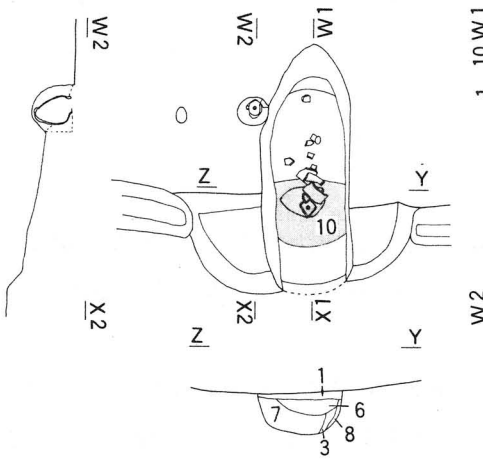


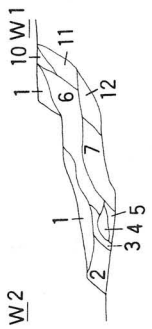


住居址土層凡例

1. 黒褐色土　ローム粒と焼土粒を含む
2. 黒褐色土　ローム粒と焼土粒、炭化粒を含む
3. 黒褐色土　2よりローム粒を多く含む
4. 黒褐色土　焼土粒を含む
5. 暗褐色土　しまり良く、ローム粒を含む
6. 黒褐色土　しまり良く、ローム粒を含む
7. 暗黄褐色土　ロームが崩れ込んだ層と考えられる
8. 暗黄褐色土　焼土粒を含む
9. 暗黄褐色土　砂粒を含む
10. 暗黄褐色土　焼土ブロックと黒色土を含む

L＝35.00m　0　2　m





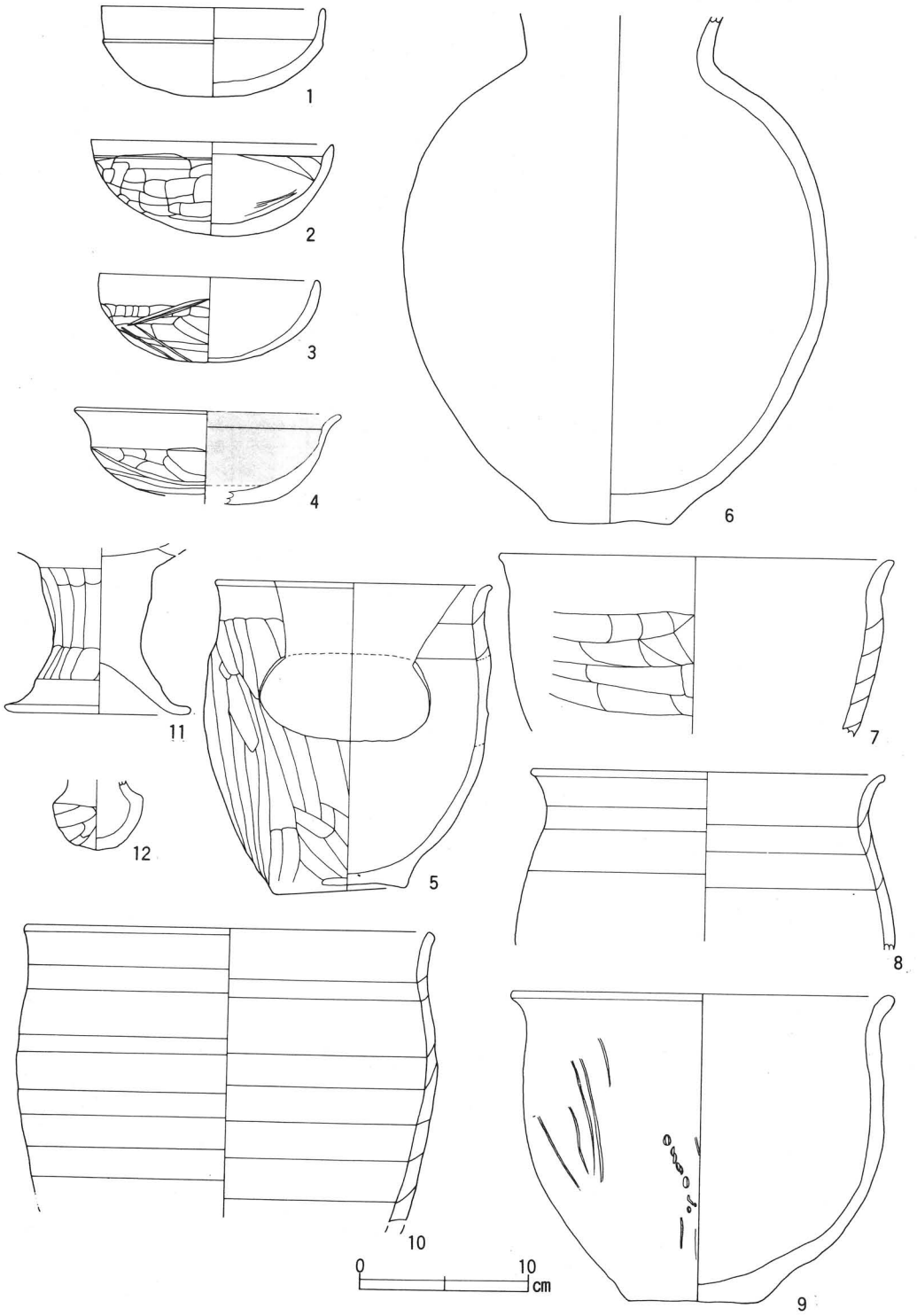
カマド土層凡例

1. 暗褐色土　黒の割合が多く、砂質粘土で焼土粒を含む
2. 暗褐色土　砂粒を含む
3. 暗褐色土　砂粒、ローム粒、焼土粒を含む
4. 暗褐色土　若干赤褐色であり、砂粒、焼土粒を含む
5. 暗赤褐色土　焼土粒を含む
6. 暗赤褐色土　半焼土化ローム粒を含む
7. 暗褐色土　若干赤褐色であり、砂粒、焼土粒、ローム粒を含む
8. 暗褐色土　砂質粘土主体である
9. 暗褐色土　カマド袖である
10. 暗褐色土　砂質粘土である
11. 暗褐色土　6よりくすんでいる
12. 暗褐色土　7よりくすんでいる

焼土

L＝34.70m　0　1　m

第204図　第29号住居址実測図



第205図　第29号住居址出土遺物実測図

第112表　第29号住居址出土遺物一覧表

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第205図 No.1	土師器 坏	A　13.3 B　5.3 D　13.0	ほぼ 完	体部は内傾しており、陵線は低くしっかりしており口縁部は、やや内傾ぎみに直立	内外面端整なヘラナデ、内面ナデ	長石、石英、雲母 良好 暗褐色	口縁部一部欠損 ＋10
第205図 No.2	土師器 坏	A　14.4×14.2 B　5.6	3／4	体部は、内傾ぎみに外傾しており、口縁部は内面に陵を有し外傾している。	口縁部横位手持ヘラ削り後ナデ、体部横位ヘラ削り後ナデ	長石、石英、雲母 良好 赤褐色	楕円形をなす 床直
第205図 No.3	土師器 坏	A　12.9×12.7 B　5.0	ほぼ 完	底部から体部は内傾ぎみに外傾し、底部は薄い器肉、口縁は直立、体部にヘラによる傷有	口縁部ヘラナデ 体部ヘラ削り	小石、長石、石英 良好 明茶褐色	口縁部一部欠 ＋ 5
第205図 No.4	土師器 坏	A　15.7 B　5.4	2／3	底部は水平ぎみで、体部は内傾ぎみに外傾し、口縁部は大きく外反している。	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削後ヘラナデ、内面ナデ	長石、石英 普通 暗褐色	内面、赤彩 ＋ 9
第205図 No.5	土師器 甕	A　17.0×15.5 B　18.5×17.9 C　8.0×8.2	ほぼ 完	底部は、内傾し体部下半は内傾ぎみに外傾し、上半は内傾する。口縁部は直立、体部に孔を有す	口縁部横位ヘラナデ 体部縦位のヘラ削り後ナデ、底部ヘラ削り後ナデ	小石、石英、砂粒 普通 暗褐色	孔径10.0×5.0 口縁一部欠 ＋ 6
第205図 No.6	土師器 甕	底径　7.5×7.3 B　30.0	完	底部は水平で、体部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁部は外傾している。	体部はヘラ削り、ヘラナデ、内面はヘラナデ	長石、石英、砂 良好 暗褐色	磨滅著しく復元不能 カマド左側
第205図 No.7	土師器 (甑)	A　23.3×23 B　10.5		口縁部は外反しており体部は直線的に内傾 甑片か	口縁部横位ヘラナデ 体部横位ヘラ削り後、ヘラナデ	長石粒、石英粒、雲母粒 良好 淡赤褐色	内外剥離 ＋ 6
第205図 No.8	土師器 甕口縁片	A　(21.0) B　10.4		口縁部は外反し、口唇部はつまみ出し、体部は、内傾ぎみに外反している。	口縁部横位ヘラナデ 摘み出し 体部ヘラナデ	長石、石英、雲母の細粒 良好 暗褐色	体部中央以下欠損 ＋32
第205図 No.9	土師器 甕	A　(22.9) B　18.2 C　7.5×7.2	1／5	底部は、水平でやや突出し、体部は内傾ぎみに外傾し、上半で内傾、口縁部は外反	口縁部横位ヘラナデ 体部縦位ヘラナデ	長石、雲母、砂粒 良好 黒色	体部下半磨滅 口縁1／6、体部1／3残 体部に籾圧痕有 ＋23
第205図 No.10	土師器 甑片	A　(22.0) B　17.0	2／3	口縁部は、やや外反し体部は外反後内傾している。	口縁部はヘラナデ 体部はヘラ削り後ヘラナデ	長石、石英、砂粒 良好 暗褐色	体部下半欠 ＋27
第205図 No.11	土師器 高坏	B　9.4 C　(11.0)		脚部下半より上半を大きく造り、裾部は小さい、裾下半は外反	脚部ヘラ削り 裾部ヘラナデ 底部ナデ	石英粒、砂粒 普通 淡赤褐色	＋47
第205図 No.12	土師器 壺	B　4.1 D　5.3		体部は内傾ぎみに立ち上がり、頸部は内傾している。	口縁部より陵にかけてヘラナデ、内面ナデ 体部ヘラ削り後ナデ	小石、砂粒 良好 暗褐色	口唇部欠損 合子である 床直

があり、Ｐ５は、住居址の中央部に掘り込まれている。カマドは、北壁中央に位置している。

土層は、黒褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土がほぼレンズ状に堆積しており、黒褐色土が５層に、暗黄褐色土が４層に細分される。

カマドは、北壁中央部に位置し、長さ2.00m、幅1.75m、高さ0.55mを計測する。火床部は、カマドの中央部に位置し、床面より0.05m程度下がっており、下位のローム面は比較的良く焼けている。燃焼部は、火床部上面の第３～５層がこれに相当し、焼土の堆積は見られない。煙道部は火床面から床面とほぼ同じ高さを形成した後、斜めに立ち上がっている。煙道先端は、住居址北壁より1.25m程度突出し、長い煙道を形成している。また、煙道の左側（西側）には、甕が１点埋設されているが、体部上半以上は細かく割れている。

出土遺物は、土師器坏、甕、高坏脚部、手捏等が出土しているが、図示出来たのは第207図に示した程度である。No１～４は、土師器坏である。No２が床面より出土し、No１、３、４は床面上５～10cmの所より出土している。No５は、土師器甕で床面上６cmより出土しており、体部の中央から上半にかけて、縦５cm、横10cmで楕円形をなす孔が穿たれている。No６は、カマド煙道部西側に埋設されている甕で、復元推定実測である。No７は、床面上６cmの所より出土した甑片であり、No８は、床面上32cmの所より出土した甕片である。No９は、床上面23cmの所より出土した甕で、体部には傷と籾状の圧痕がある。No10は床面上27cmの所より出土した甑片と判断される。No11は、土師器高坏脚部片で床面上47cmより出土しており、裾部の開きが小さくなっている。No12は、壷のミニチュアである。

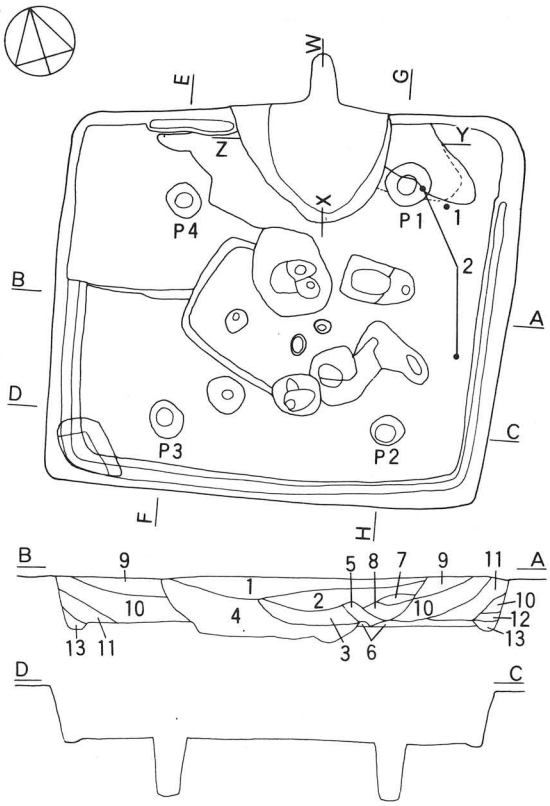
本址の時期は、古墳時代から奈良時代にかけての住居址と判断される。

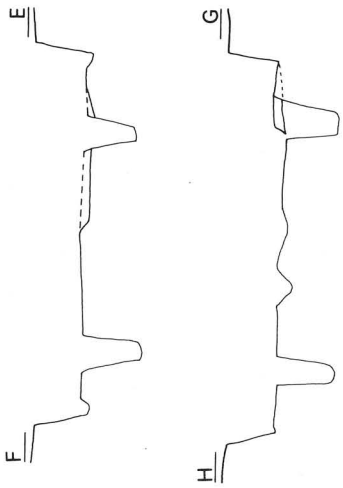
第30号住居址（第206・208図、第113表１・２）

本址は、Ⅱ郭の中央北側に位置しており、東西径4.80m、南北径4.10m、深さ0.60mを計測し隅丸長方形状をなしている。方位は、Ｎ－21°－Ｅである。また、本址は中央部を撹乱されている。　床面は、柱穴内がしっかりした貼床であるものの、壁付近は比較的柔弱な貼床となっている。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマド、北東コーナー、西壁北側以外では幅0.25～0.35m、深さ0.02～0.07mの規模で掘り込まれている。柱穴は、４本（Ｐ１～４）確認され、カマドは北壁の中央部からやや東側に位置している。

土層は、黒褐色土、黄褐色土、暗褐色土がレンズ状に堆積しており、黒褐色土が３層に、黄褐色土が２層に細分される。第６、９～13層が、本址の覆土で、第１～５、７、８層が撹乱層である。

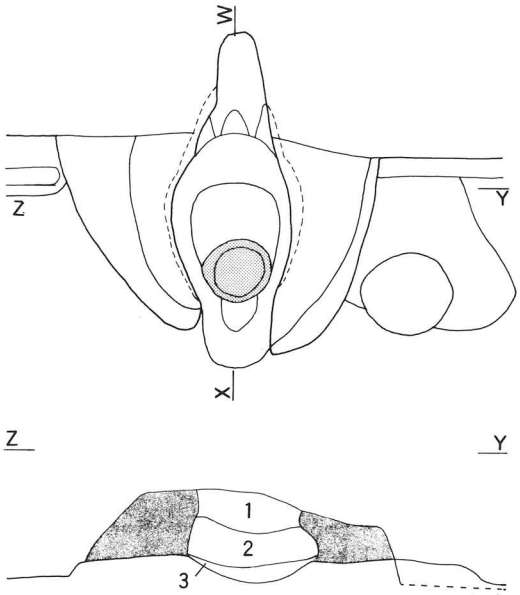
カマドは、北壁中央やや東側に位置し、長さ1.77m、幅1.70m、高さ0.24mを計測する。火床

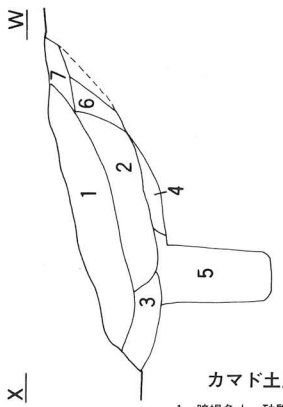




住居址土層凡例

1. 黒褐色土　ローム、ロームブロックを含む
2. 黒 色 土　ローム粒を含む
3. 黒 色 土　ローム粒を含む
4. 黒褐色土　ローム粒子、ロームブロックを含む
5. 黒褐色土　ローム粒を含む
6. 黒褐色土　ローム粒を含む
7. 黒褐色土　ロームブロックを含む
8. 黒褐色土　2層より暗い
9. 黒褐色土　ローム粒子を含む
10. 黄褐色土　ロームブロックを含む
11. 黄褐色土　10層より暗くロームブロックを含む
12. 黒褐色土　ローム粒子を含む
13. 暗褐色土　ローム粒子を含む





カマド土層凡例

1. 暗褐色土　砂質、焼土小ブロックを含む
2. 暗褐色土　砂質、赤褐化、焼土ブロックを含む
3. 暗褐色土　砂質で焼土粒を含む
4. 黄褐色土　焼土粒を含み、赤褐化している
5. 暗褐色土　ローム粒を含む
6. 黄褐色土　砂質、炭化粒を含む
7. 黄褐色土　砂質、焼土粒を含む

砂質粘土
焼土

第206図　第30号住居址実測図

部は、カマドの中央部に位置し、第4層がこれに相当し、燃焼部は焼土ブロックを含む第2層が相当する。第3層の暗褐色土は、焚口である。煙道部は、火床部より緩やかに立ち上がっており、住居址北壁より0.54m突出している。また、火床部の手前には深さ0.55mで円形をなすPit状の遺構が掘り込まれている。カマド内に、焼土層は確認されなかった。

出土遺物は、土師坏、甕、須恵器坏、蓋などが出土しているが、図示出来たのは第210図No1、2、6の3点程度である。No1は、須恵器坏で床面上15cmより出土している。No2は須恵器坏蓋で床面上20cmより出土している。No3は、土師器坏で床面上12cmの所より出土しており、底面内面は転用硯として使用されている。これらの遺物は、覆土内からの出土であり、底面からは何ら出土してなかった。

本址の時期は、出土遺物が本址廃棄後流入と判断されることから、本址は奈良時代に位置する住居址と判断される。

第31号住居址（第207・208図、第113表1・2）

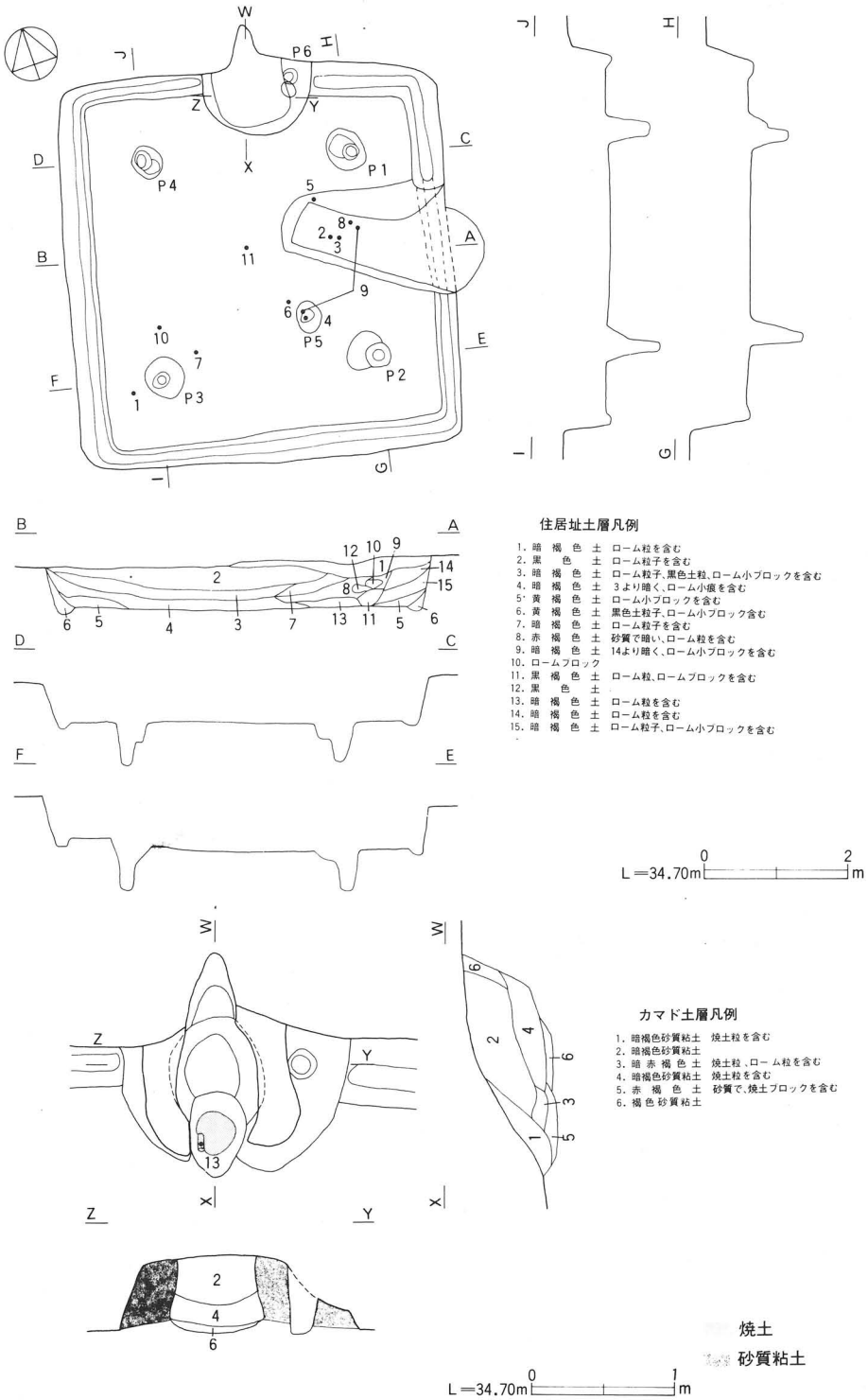
本址は、Ⅱ郭の中央北側に位置しており、東西径5.40m、南北径5.35m、深さ0.67mを計測し隅丸方形状を呈している。方位は、N－17°－Eである。

床面は、しっかりした貼床であり、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は、カマド以外全周しており、幅0.18～0.28m、深さ0.06～0.08mを計測する。柱穴は、4本確認され、P1、4は建替が認められる。カマドは、北壁中央部に位置している。また、東壁中央部は厚く、砂質粘土が堆積している。

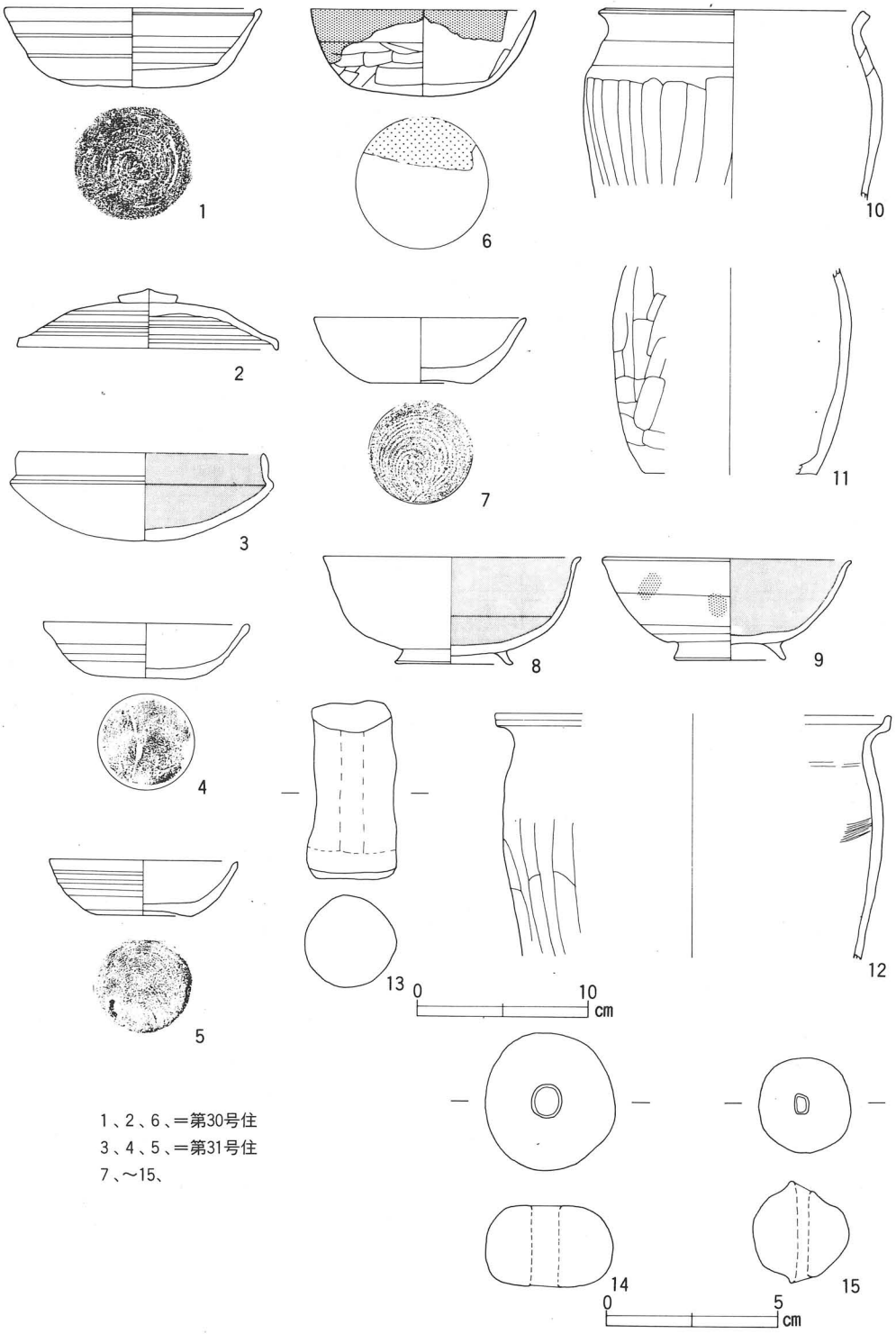
土層は、暗褐色土、黒色土、黄褐色土が堆積しており、暗褐色土が4層に、黄褐色土が2層に細分される。これらの土層は、ほぼレンズ状に堆積している。東側の砂質粘土の部分は、暗褐色土、ロームブロック、黒褐色土、暗褐色土より出来ており、暗褐色土が砂質粘土である。焼土や灰層はなく、カマドではない。

カマドは、北壁中央部に位置しており、長さ1.55m、幅1.60m、高さ0.45mを計測する。焚口は、火床部の手前（南側）で砂質粘土（第1層）が堆積しており、火床部はカマドの中央南側で赤褐色土（第5層）があり、この第5層と上面の第3層が燃焼部に相当する。煙道部は、下位に砂質粘土を埋めて底面を構築しており、第4層が煙道部に相当し先端部は、壁外へ0.40m程度突出している。裾と上面は、白色砂質粘土で構築している。また、東側裾は柱穴（中世）により一部を破壊されている。

出土遺物は、土師器坏、甕、土玉、支脚などが出土している。第210図No3は、土師器坏で床面上12cmより出土し、内黒の坏で古墳時代にはいる。同図No4、5、7は土師器坏である。No



第207図　第31号住居址実測図



1、2、6、＝第30号住
3、4、5、＝第31号住
7、～15、

第208図　第30、31号住居址出土遺物実測図

第113表　第30．31号住居址出土遺物一覧表１

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第208図 No.1	須恵器 坏	A　15.0 B　4.6 C6.0	完	底部は肥厚であり、体部は直線的に外傾、口唇部は削り出し	体部回転ヘラナデ 底部手持ヘラ削り 回転ヘラ切り後ナデ	小石、長石、石英の小痕 良好 灰褐色	第30号住No.1 ＋15
第208図 No.2	須恵器 坏蓋片	A　15.4 B　3.4 つまみ傾　3.4 つまみ高　0.7	1／4 ～ 1／5	体部上半は外反し、体部は直線的に外反、口縁部は垂直	体部上面より宝珠に自然釉有、体部回転ヘラ削り、裾部回転ヘラナデ	緻密 良好 灰褐色	第30号住No.2 ＋20
第208図 No.3	土師器 坏　片	A　14.5 B　5.2 D　15.4	1／2	体部は内傾ぎみに外傾陵はしっかりしており口縁部は直線的内傾	口縁部より陵にかけて横位ヘラナデ、体部ヘラ削り後ヘラナデ、ヘラミガキ	緻密 良好 茶褐色	第31号住No.1 内面黒色処理 ＋2
第208図 No.4	土師器 坏	A　12.0 B　3.2 C　5.4	完	底部は水平で体部は内傾ぎみに外傾し、口縁部は肥厚	体部回転ナデ。内面ナデ 底部回転糸切り、ナデ	小石、長石、雲母 良好 暗褐色	第31号住No.2 内面磨滅 ＋15
第208図 No.5	土師器 坏	A　11.1 B　3.2 C　5.5	完	底部は内傾し、体部は直線的に外傾している。	体部ナデツケ 底部手持ヘラ削り 回転糸切り	小石、長石、石英、雲母の粗　細粒 良好 暗茶褐色	第31号住No.3 内面磨滅 ＋18
第208図 No.6	土師器 坏	A　(13.2) B　5.0 C　8.0	1／4	底部外面は外反し内面は水平で、体部は中央やや肥厚で直線的に外傾している。	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後ナデ 底部ヘラ削り後ナデ	小石、長石と石英粒 良好 橙褐色	第30号住No.3 内外面煤付着 底部内面転用硯 床直
第208図 No.7	土師器 坏	A　12.4 B　3.8 C　6.0	完	底部は、内傾し体部は内傾ぎみ外傾、口縁部はやや外反	体部ヘラ削り後ヘラナデ、底部手持ヘラ削り、回転糸切り	小石、石英、砂粒粗 良好 暗褐色	第31号住No.4 床直
第208図 No.8	土師器 高台付 碗	坏径　15.0 B　6.2 高台径　6.8 高台高　1.9	2／3	坏底部は内傾し体部は直立ぎみで口縁部は外反高台部は外反する	体部回転ヘラナデ、下部手持ヘラ削り、台部ヘラナデ底部ヘラ切り、ヘラナデ	石英、雲母粒 良好	第31号住No.5 内面黒色処理 ＋17
第208図 No.9	土師器 高台付 碗	坏径　14.5 B　6.0×5.7 高台径　6.6 高台高　1.1	2／3	坏底部は、ほぼ水平で体部はやや内径ぎみに外傾し、口縁部は外反、高台部は外傾	体部回転ヘラナデ、下部回転ヘラ削り、台部ヘラナデ底部手持ヘラ切り	緻密 良好 暗褐色	第31号住No.6 内面黒色処理 ＋13
第208図 No.10	土　師 甕　片	A　15.0 B　11.0	1／2	口縁部は外傾し、体部内傾している。	口縁部横位ヘラナデ 体部縦位ヘラ削り 内面ヘラナデ	長石、石英、雲母 良好 暗褐色	第31号住No.7 ＋25
第208図 No.11	土師 小型壺	B　12.0 C　10.0	1／3	底部は、ほぼ水平で体部は内傾ぎみに直立	体部縦位ヘラ削り 下部横位ヘラ削り 内面ヘラナデ	雲母粒、石英粒、密 良好 暗褐色	第31号住No.8 ＋25
第208図 No.12	土師 甕片	A　23.0 B　14.2	1／3	口縁部は、大きく外反後口唇部は直立、体部はやや内傾ぎみに直立	口縁部より体部上位にかけ横位ヘラナデ 下半は、縦位ヘラ削り後ヘラナデ	長石、石英、雲母粒 良好 暗褐色	第31号住No.9 ＋15.5
第208図 No.13	支脚	径 10.3×5.3×5.4				長石、石英、小石 良好 赤褐色	第31号住No.10 ＋　7

第113表　第30．31号住居址出土遺物一覧表２

挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第208図 No.14	土　玉	径 4.0×3.8×2.4 孔　1.0×0.9	完			長石、砂粒 良好 暗褐色	第31号住No.11 40ｇ 床直
第208図 No.15	土　玉	径 3.0×2.8×2.6 孔　0.6×0.4	完			密 良好 暗褐色	第31号住No.12 20ｇ ＋18

７が、床面より出土している以外15cm以上の所より出土している。No８、９の２点は、高台付碗で床面上13～17cmの所より出土している。No10～12は、土師器甕で床面上15～25cmの所より出土している。No14、15は土玉である。

これらの出土遺物は、No７以外全て覆土内からの出土であるが、本址廃棄後流入と判断される。このため、本址は平安時代に位置する住居址と判断される。

第32号住居址（第209・211図、第114表）

本址は、Ⅱ郭の中央南側に位置しており、東西径3.00m、南北径3.00m、深さ0.53ｍを計測し隅丸方形状を呈している。方位は、Ｎ－27°－Ｅである。

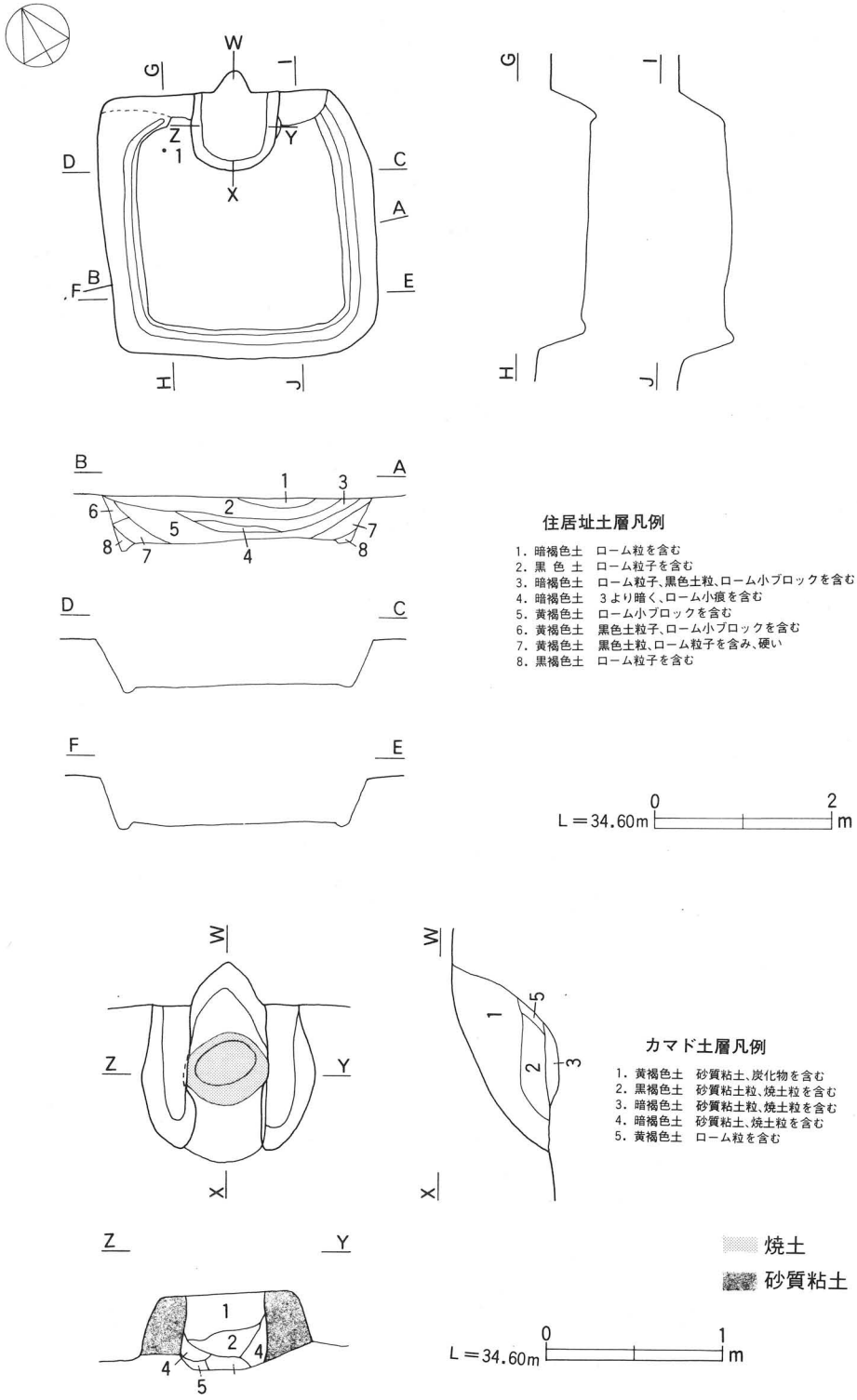
床面は、中央部がしっかりした貼床であるが、壁付近は比較的柔弱な貼床となっている。壁は斜めに掘り込まれており、壁溝はカマドとカマドの東側と西側以外全周しており、幅0.35～0.40m、深さ0.05～0.09mの規模を有している。柱穴は、掘り込まれておらず、カマドは北壁中央部に位置している。

土層は、暗褐色土、黒色土、黄褐色土、黒褐色土が、ほぼレンズ状に堆積しており、暗褐色土が３層に、黄褐色土が３層に細分される。

カマドは、北壁中央部に位置し、長さ0.63m、幅0.47ｍ、高さ0.55ｍを計測する。火床部は、カマド中央部に位置し、床面より0.05m程度下がっている。焼土の堆積はなく、第３層の暗褐色土が堆積している。燃焼部は、第３層がこれに相当するようであり、煙道部は第５層の黄褐色土が、これに相当し先端は北壁から0.24m程度突出している。

出土遺物としては、土師器坏、甕などが出土しているが、図示出来たのは第213図Ｎｏ１の甕のみである。この甕は、カマド西側で床面上21cmの所より出土している。

本址は、出土遺物から平安時代に位置する住居址と判断される。



第209図　第32号住居址実測図

第33号住居址（第210・211図、第114表）

本址は、Ⅱ郭の北西部で第７号堀にカマドと、北東部を切られている。大きさは、東西径4.35m、南北径4.50m、深さ0.46mを計測し、隅丸方形状を呈している。方位は、N－25°－Eである。

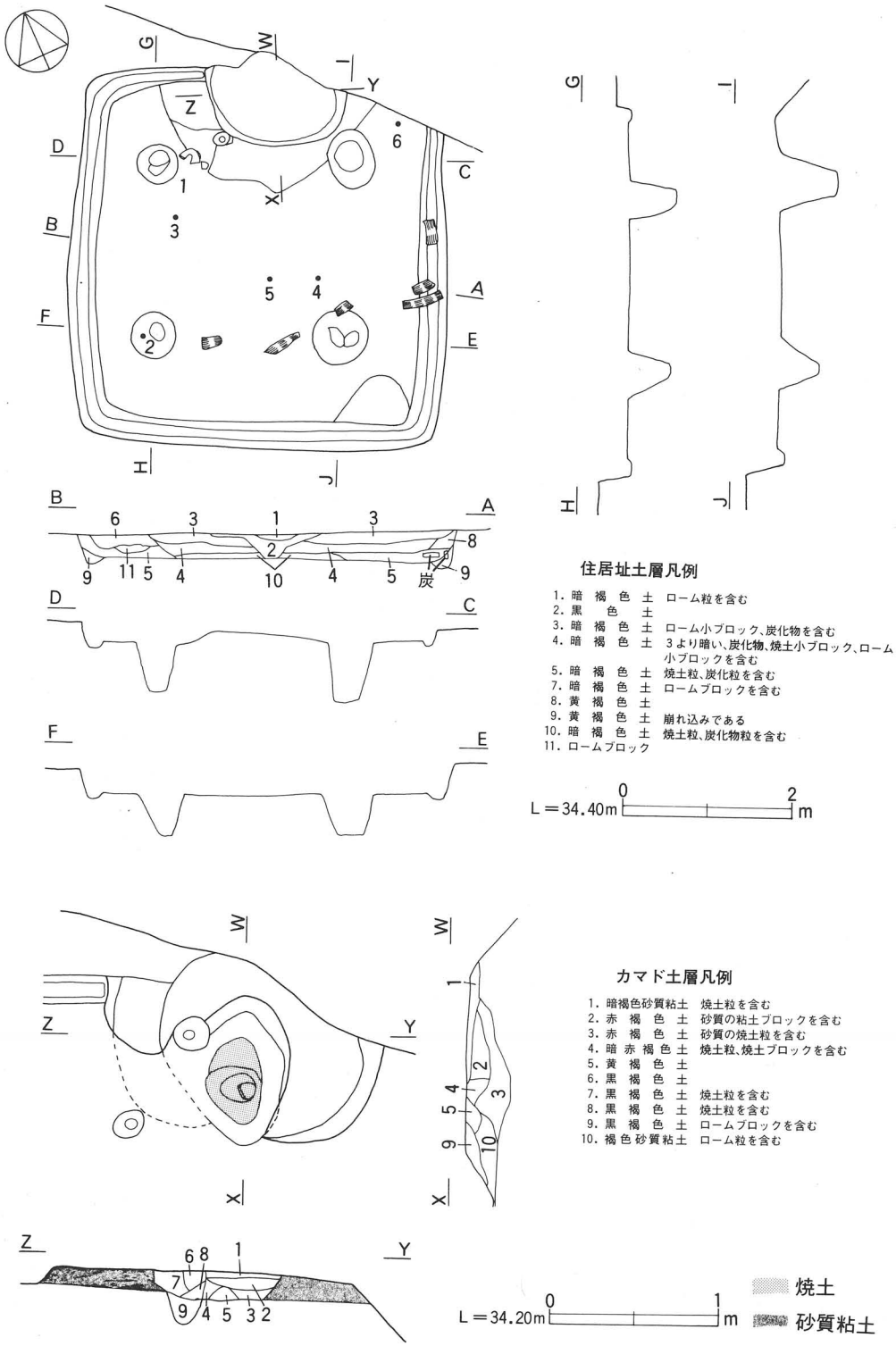
床面は、柱穴内はしっかりした貼床であるが、壁付近は比較的柔弱な貼床である。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝はカマド以外全周しているようであり。幅0.20～0.30m、深さ0.05～0.08mの規模を計測する。柱穴は、４本確認されており、Ｐ２と４は、建替が認められる。カマドは、北壁中央部に位置している。

土層は、暗褐色土、黄褐色土が堆積しており、暗褐色土が主流で６層に、黄褐色土が２層に各々細分される。第１層と２層は、中世期の柱穴であろうか。また、南東コーナーで焼土域が確認されたが、第８層の黄褐色土中に含まれる焼土である。

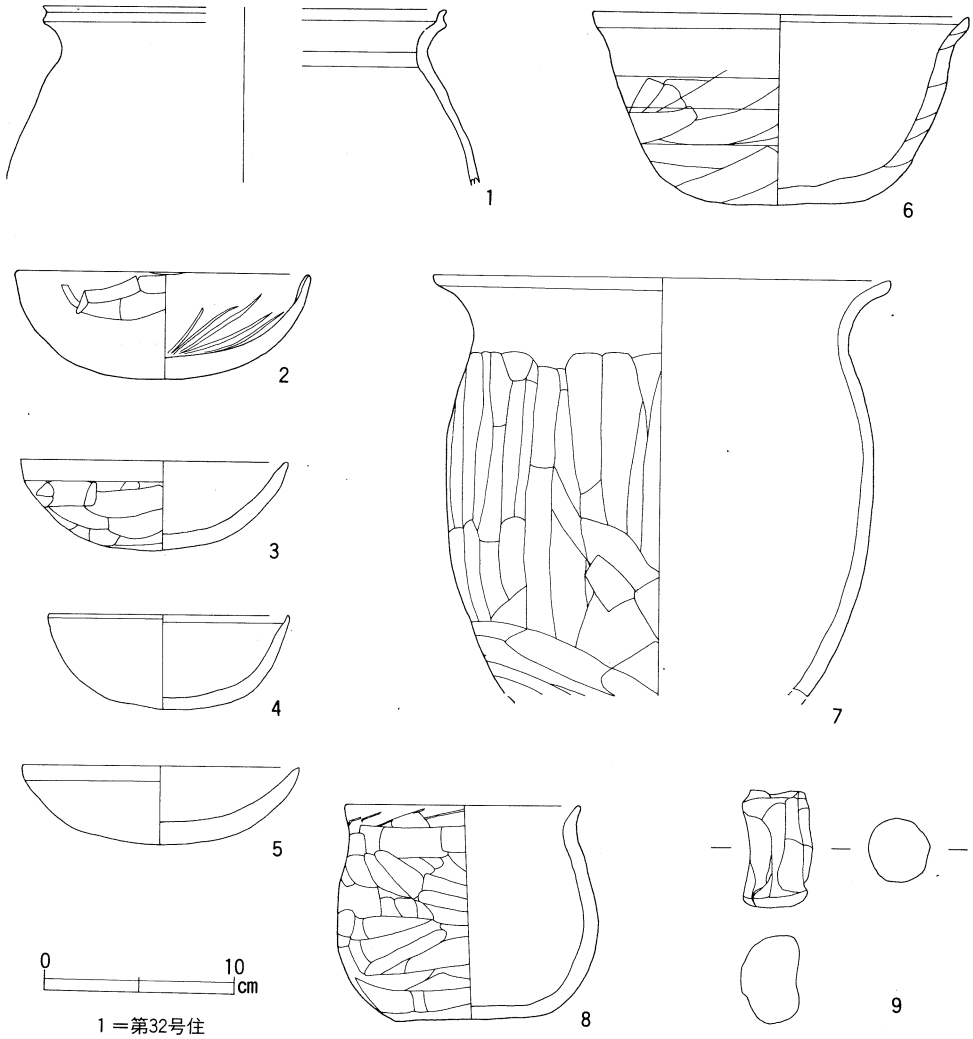
カマドは、北壁中央部に位置し第７号堀に北側先端を切られている。大きさは、長さ1.13m、幅1.65m、高さ0.20mを計測する。火床部は、カマド中央部に位置し床面より0.10m下っがている。焼土はなく赤褐色土が堆積している。カマド自体、破壊されているため燃焼部、煙道部の状況は不明な点がある。火床部の先端は、煙道部に接続しているようである。

出土遺物は、土師器坏、甕、鉢、碗、支脚などが出土している。第213図No２～９が、本址の出土遺物である。No２～５は、土師器坏である。No２は、床面より出土し、No３は、カマド内からの出土である。No４は、床面上８cmの所より出土しており、No５は床面上５cmの所より出土している。No６は、鉢で床面上６cmの所より出土している。No７は、甕で床面上５cmの所より出土している。No８は、碗で床面上５cmより出土している。No９は、支脚片である。これらの遺物以外では、住居址内から炭化材が出土しているが、床面は焼けておらず廃棄後の流入と判断される。

本址の時期は、出土遺物から奈良時代に位置する住居址と判断される。



第210図　第33号住居址実測図



1＝第32号住
2～9＝第33号住

第211図　第32、33号住居址出土遺物実測図

第114表　第32．33号住居址出土遺物一覧表

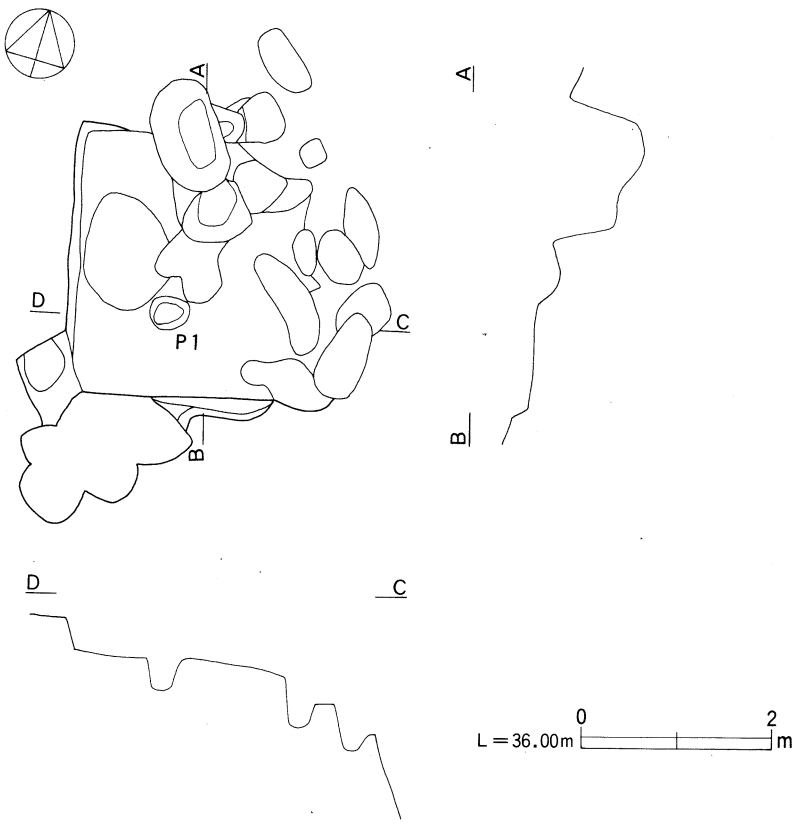
挿図No.	名　称	法量(cm)	完存率	器形の特徴	整形技法	胎土・焼成・色調	備　考
第211図 No.1	土師器 甕	A　(21.0) B　9.0	1／3	口縁部は外傾後口唇部は直立、体部はやや内傾ぎみに外傾	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラナデ 内面ヘラナデ	小石、石英、長石 良好 暗褐色	第32号住No.1 覆土内一括
第211図 No.2	土師 坏	A (15.5×14.5) B　5.6	2／3	体部は、内傾ぎみに外傾し、口縁部に削り出し有	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ、ヘラミガキ	緻密 良好 暗褐色	第33号住No.1 器面に煤付着 内面黒色処理 床直
第211図 No.3	土師器 坏	A　14.0 B　4.7	2／3	体部は内傾ぎみに外傾する	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ、ヘラミガキ	砂粒 良好 暗褐色	第33号住No.2 カマド一括
第211図 No.4	土師 坏	A　12.6×12.3 B　5.0	完	体部下半は、内傾し体部上半はやや外反ぎみ口縁部は直立ぎみ	口縁部ヘラ切り 体部ヘラ削り後ヘラナデ、内面ヘラナデ	小石、石英、砂粒 良好 明茶褐色	第33号住No.3 ＋ 8
第211図 No.5	土師質 土器 坏	A　14.5×14.0 B　4.1	完	体部は、内傾ぎみ 口縁部は直線的に外傾	口縁部ヘラ切り 体部ヘラ削り後ヘラナデ	緻密 良好 暗褐色	第33号住No.4 （中世品） ＋ 5
第211図 No.6	土　師 浅鉢型 土　器	A　19.9 B　10.0 C　8.0	完	底部は、やや外反ぎみで体部は内傾ぎみに外傾し、口縁部は外反している	口縁部横ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ、ヘラミガキ	小石、長石、石英 雲母粒 良好 暗褐色	第33号住No.5 ＋ 6
第211図 No.7	土師器 甕	径　24.1×22.5 B　21.9 D　22.4	体　部 1/3残 底部欠	口縁部は大きく外反 体部は内径ぎみに立ち上がる	口縁部ヘラナデ 体部縦位ヘラ削り後ヘラナデ右下りのヘラ削り後ヘラナデ	長石、砂粒 良好 暗褐色	第33号住No.6 ＋ 5
第211図 No.8	土師器 碗	A　12.3 B　11.5×11.0 C　8.5× 8.0	完	底部は水平で、体部は内径ぎみに外傾後直線的に内傾、口縁部は外反	口縁部横位ヘラナデ 体部ヘラ削り後ヘラナデ底部ヘラ削り後ヘラナデ	小石、砂粒 良好 黒褐色	第33号住No.7 ＋ 5
第211図 No.9	支脚片	径 6.2×3.3×13.2		楕円形状をなしている。		石英、砂粒、小石 良好 暗褐色	第33号住No.8 一括

第34号住居址（第212図）

本址は、Ⅱ郭中央部で虎口部に位置するため、その大部分を柱穴等により破壊されており、南側半分を確認したのみである。

本址の大きさは、東西径2.45m、南北径2.80m、深さ0.43mを計測する。床面は、貼床であるが、中央部はしっかりしている。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁溝は確認出来なかった。柱穴は、Ｐ１が本址に結び付く柱穴であるが、他は確認出来なかった。

出土遺物は、ほとんどなく土師器坏と甕の小破片がごく少量出土した程度であるため、時期を確定することは出来なかった。



第212図　第34号住居址実測図

2．その他の遺物

その他の遺物としては、当遺跡より出土し遺構を伴なわないか、遺構を確定出来なかったもので、縄文時代の遺物がこれに該当する。縄文時代の遺物としては、土器片の他に石鏃、敲石、打製石斧、磨製石斧などが出土している。土製品は、出土していない。

1)　縄文式土器（第213図）

縄文式土器は、全て破片で総数　点の中から23点を第215図に示した。No 1 は、2 条 1 単位の沈線を放射状に施文しており、No 2 は沈線を横位→斜位に施文している。2 点とも、口縁部片である。No 3 は、2 条 1 単位の沈線を格子状に組み、中に沈線による渦巻き（左回り）文を 2 点

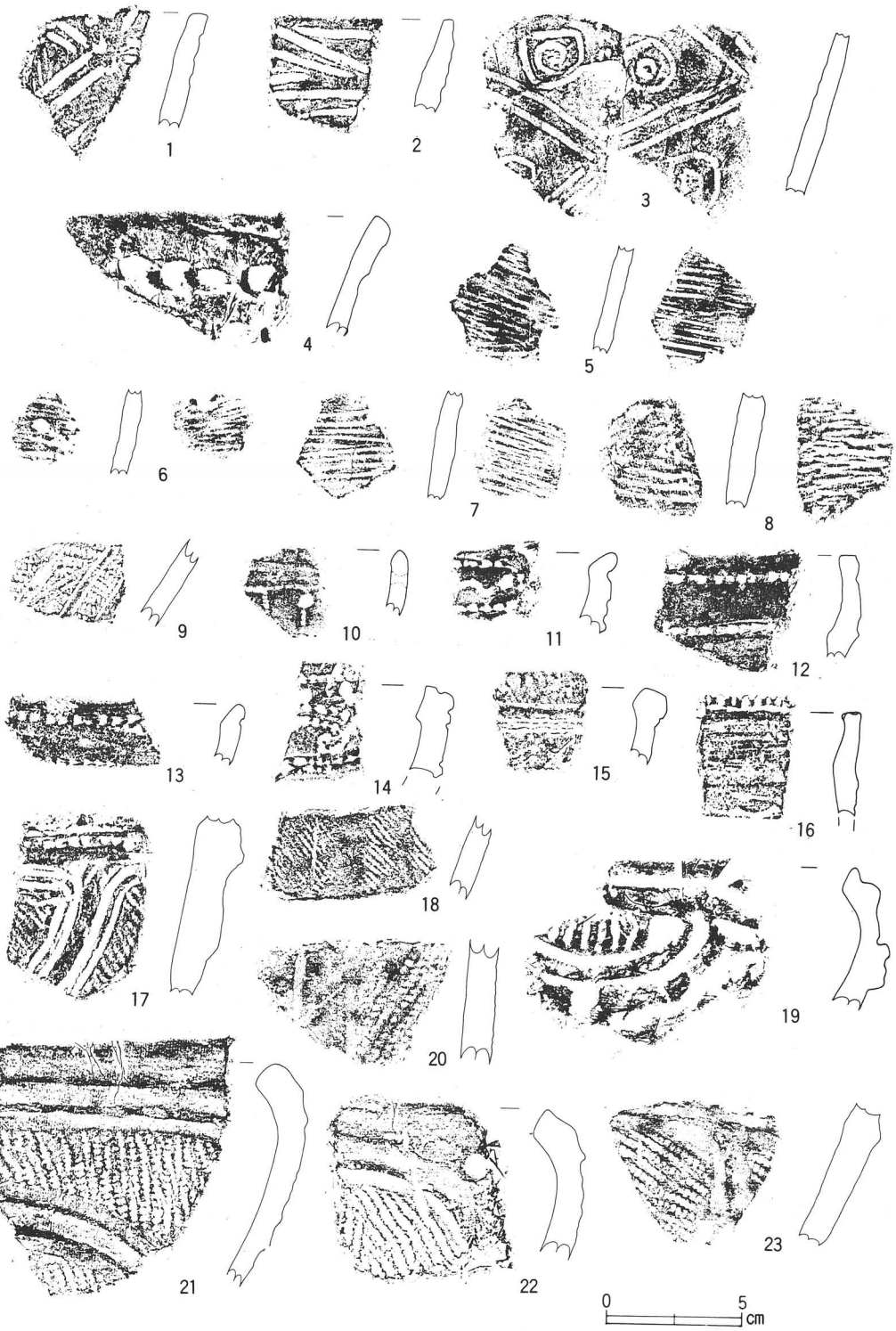
程度施文している。沈線は半載竹管である。No４は、口縁下に刺突が見られる。田戸下層式期に位置する。

No５～８までは、茅山上層式期の土器片で、胎土に植物繊維を含んでいる。土器の内外面に条痕が見られる。No９は、２本１単位の沈線内に縄文が施文されており、関山式期に位置する。No10は、口縁部片で横位と縦位に刺突が沈線状に施文されている。No11は、口縁部で低い波状口縁を呈し、低い隆帯内に刺突による区画と施文が施されている。No12は、口縁部片で２列の平行刺突文がある。No13は、波状口縁部を呈し、口縁下に２列の刺突文がある。No14は、口縁部片で、半載竹管による刺突が口唇部と口縁部に施文されている。No15は、口縁部片で口唇部が肥厚であり、口唇部下に横位の沈線（１条）と３本１単位の波状沈線が施文されている。No16は、口縁部片で口唇部には刻み込みと沈線が施文されている。No17は、大きな隆帯で上下と左右を区画し、上部では隆帯下に半載竹管による刺突があり、下部では隆帯による区画内に沈線と縄文を施文している。No18は、縄文が施文されている。No19は、口縁部片で３本の大きな隆帯が半円状にあり、口縁部の隆帯による区画内には縦位の沈線が施文されている。No10～19までは、阿玉台式期に位置する土器片である。No20～23までは、加曽利Ｅ式期に位置する。No20は、２本の縦位平行沈線とこれに区画内に縄文が施文されており、No21～No23は、低い隆帯と縄文が施文されており、縄文は隆帯による区画内に施文されている。

2)　石　器（第214～216図、図版９）

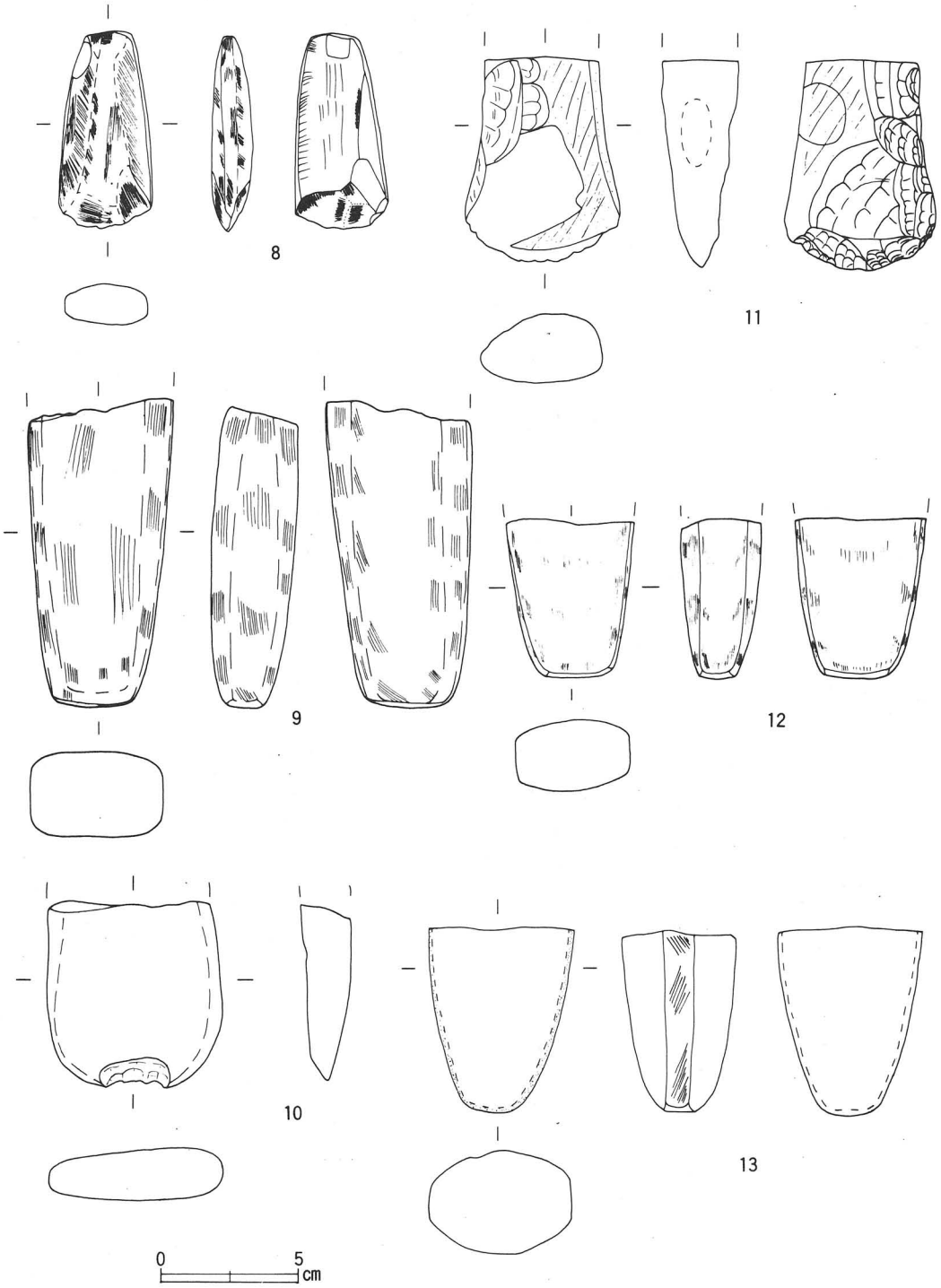
縄文時代の石器としては、総数45点出土しているが、その多くは破片であるため型態の判明するものから16点（第216～218図）を図示した。出土した石器は、打製石斧、磨製石斧、敲石、凹石、石鏃などである。出土した石器は、遺構との関連で見るならば土壙内より出土した石器が遺構に伴なう遺物の可能性を有しているのみで、その多くは遺跡覆土の第４層中及び堀、貝層、建物址等からの出土であるため、遺構と遺物の関連性を有するものはきわめて少数である。

No１（第216図）は、第９号建物址より出土した打製石斧で、片面の側面を剥離し、刃部を形成している。他の一面は、自然面がその大部分である。大きさは、10.6×6.5×2.6㎝で中央部が4.3㎝を計測する。石質は、凝灰岩であり、分銅型石斧である。No２（同図）は、片面と裏面先端の一部を剥離した打製石斧で、第４号堀内貝層より出土している。石質は、凝灰岩で大きさは11.5×4.2×2.0㎝を計測する。No３（同図）は、磨製石斧で第３号建物址より出土している。基部先端は、自然面で刃部に剥離が見られる。基部には、柄の装着痕であろうか一部磨滅している。石質は、凝灰岩で大きさは9.8×4.0×2.5㎝を計測する。No４は、第４層中より出土した石斧片である。刃部は、両面より砥ぎ出しており、身部の両側面は磨いている。石質は、凝灰岩で大き

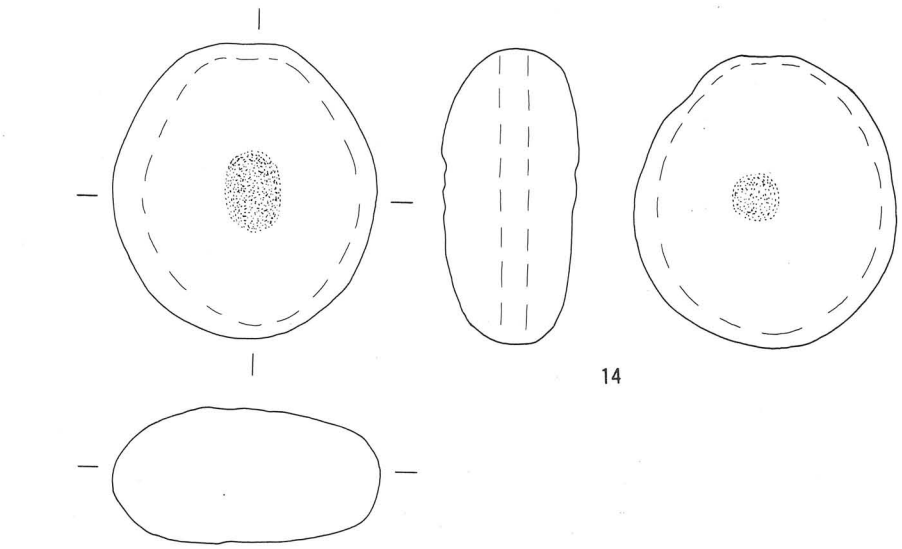


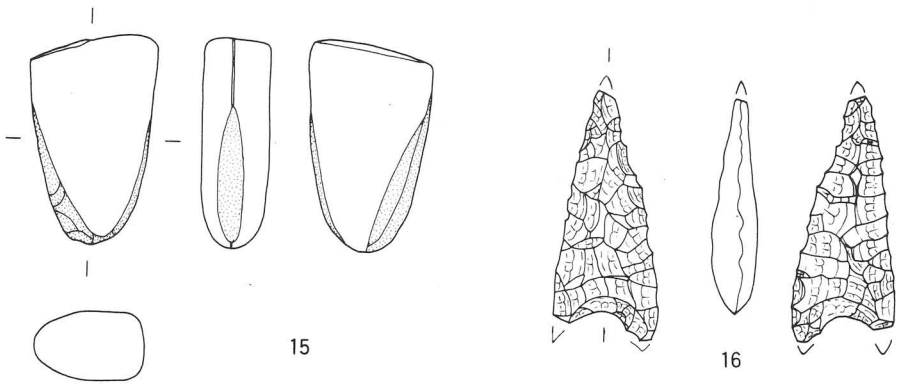
第213図　縄文式土器拓影図

第214図　石器実測図 1



第215図　石器実測図 2





第216図　石器実測図 3

さは3.3×3.3×0.6cmを計測する。No5は、I郭第4層中より出土した石器で、先端を両面より磨き刃部を形成している。基部は、剥離が見られる。刃部以外は、自然面である。大きさは5.2×2.5×0.8cmを計測する。石質は、凝灰岩である。No6は、I郭第4層中より出土した石器の先端部片で、敲石と推定される。先端は、使用により欠損であろうか剥離しており、側面は片面のみが磨かれている。大きさは、3.8×4.5×1.6cmで凝灰岩質である。No7は、I郭第4層中より出土した石器で、磨製石斧の先端部片である。刃部は、1面より付けられた片刃で良く磨かれている。側面は、良く磨かれているが、上面と下面は自然面である。大きさは、6.0×5.2×2.2cmで凝灰岩質である。

No8（第217図）は、第6号建物址より出土した磨製石斧である。刃部が、一部欠損しており、上下両面と側面は良く磨かれている。大きさは、7.1×3.1×1.5cmを計測する小型の石斧である。石質は、安山岩である。No9（同図）は、第58号土壙より出土した石器で、基部を欠損しているが、磨製で大型の敲石である。先端に使用痕があり、全面良く磨かれており、断面は長方形状を呈している。大きさは、11.4×5.0×3.1cmを計測し石質は、砂岩質である。No10（同図）は、第7号土壙より出土した石錘片である。大きさは、6.7×6.3×1.9cmを計測する。石質は、安山岩の自然石で、綱掛け部分のみを加工している。No11（同図）は、第4層中より出土した打製石斧片で中央部分で割れている。石質は、凝灰岩で刃部は片面、右側面は両面をそれぞれ剥離しているが、自然面を比較的多く残している。

No12（同図）は、第53号土壙より出土した磨製の敲石で，先端部のみの破片である。石質は安山岩で、全面良く磨かれている。先端は、磨滅している、大きさは、5.9×4.7×2.6cmを計測する。No13は、第13号建物址より出土した敲石で、先端部分の破片である。先端は、使用による磨滅があり、両側面は幅1.5cmで良く磨かれている。上面と下面は、自然面である。大きさは、6.7×5.3×3.8cmを計測する。側面の上下端部は、一部磨滅している。石質は、砂岩である。

No14（第218図）は、第25号土壙より出土した凹石である。凹部は、上面が中央部で2.8×1.8×0.1cmで楕円形状を呈しており、下部は中央部で1.6×1.5×0.1cmの円形を呈している。凹は、上下両面とも非常に浅く、凹石とするより敲石とした方が適当と思われるが、一応凹石とした。石質は、砂岩である。No15（同図）は、第12号建物址とP3より出土した敲石で、先端部分の破片である。先端部と両側面は、使用による磨滅と剥離が見られるが、上面と下面は自然面である。石質は、砂岩で大きさは6.8×4.2×2.3cmを計測する。No16は、第4層中より出土した黒曜石製の石鏃である。一部を欠損するが、ほぼ完型である。大きさは、4.2×1.7×0.7cmを計測する。

Ⅵ. 結　　び

当遺跡の調査結果については、今まで述べて来たように古墳時代から近世までの諸遺構が確認されている。古墳時代から中世にかけては、32軒の竪穴住居址があり、中世は城郭址である。近世では、道路状の遺構がこれに相当する。住居址は、古墳時代後半から奈良、平安時代にかけてで古墳時代後半の住居址が、最も多く確認されている。

中世では、中心となる時代は戦国時代後半の16世紀後半から、江戸時代前半の17世紀前半の時期が中心である。これ以前にも、1～2時期存在した事は調査結果から明らかとなっている。最も古い時期は、第4号堀に囲まれた時期で、城とするより館とした方が適当であろう。この時期から、北側→東側、西側に拡張されている。南側は、Ⅱ郭があり2時期に分かれている。Ⅱ郭の南側には、後述（別冊）になるが、いわゆる3ノ丸に相当する遺構が確認されている。よって、当遺跡は、Ⅰ郭を本丸、Ⅱ郭を2ノ丸、Ⅲ郭を3ノ丸とした直線配置の城郭となり、16世紀後半代に当遺跡が城郭としての縄張りを完成させたものと考えられる。

当遺跡と、古館、平遺跡及び山田城址との関連、当遺跡の変遷過程、内部遺構等については考察編（別冊）で述べたい。

図版１　遺跡全景

図版２　遺跡現況（Ⅰ郭土塁）

南側土塁
（虎口と堀）

南側土塁
（西側）

南側土塁
（東側）

図版３　遺跡現況

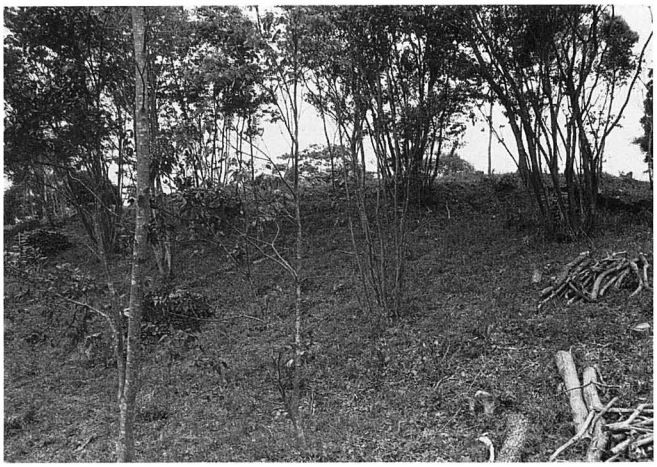
Ⅰ郭内部と北東部土塁

Ⅰ郭東側と東側土塁

Ⅰ郭北側土塁

図版４　遺跡現況（Ⅰ郭北側）

Ⅰ郭北側土塁
（北側斜面より）



Ⅰ　郭　北　側
谷頭部、土塁

Ⅰ　郭　土　塁
南側内部

図版５　遺跡現況

Ⅰ郭西側外堀

Ⅰ郭北側外堀

Ⅰ郭北東部外堀と土橋

図版６　遺跡現況

Ⅱ 郭 全 景

Ⅲ 郭 全 景

遺 跡 遠 景
（今山遺跡より）

図版７　遺構近景

Ⅰ郭北側全景

Ⅰ郭中央部全景

Ⅰ郭南側全景

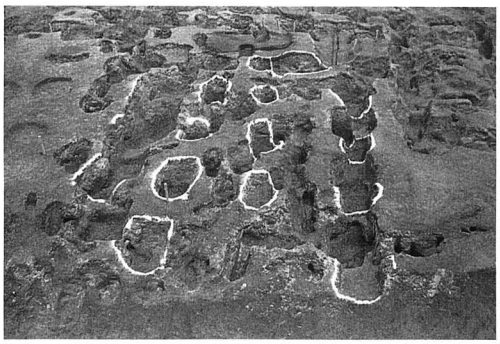
図版８　遺構近景

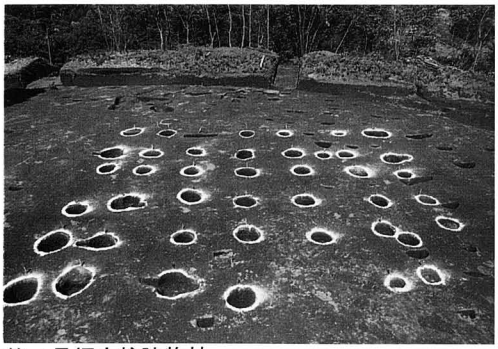
Ⅱ郭南側全景

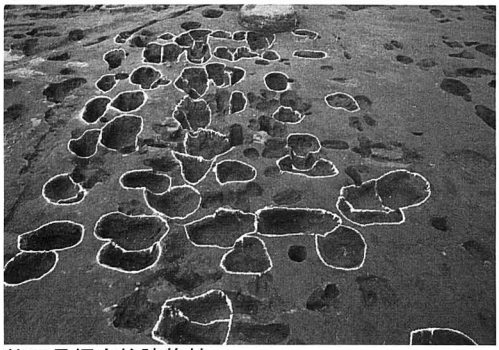
Ⅱ 郭 全 景

Ⅲ 郭 全 景

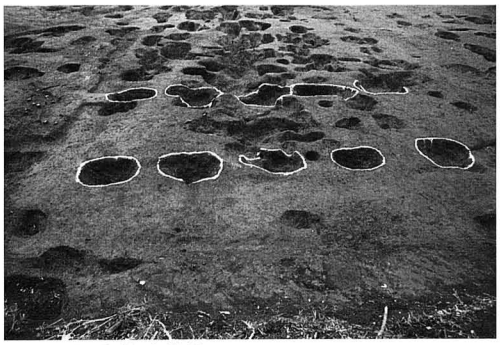
第 1 号掘立柱建物址

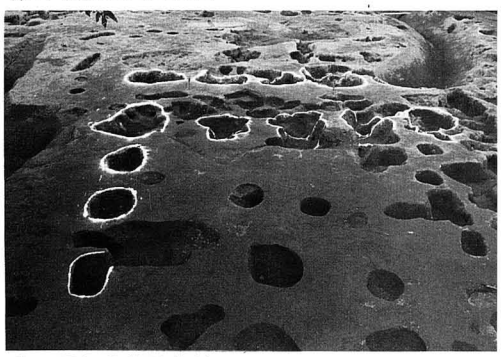

第18号掘立柱建物址


第 2 号掘立柱建物址


第30号掘立柱建物址

第17号掘立柱建物址


第36号掘立柱建物址


第 6 号掘立柱建物址

第58号掘立柱建物址

図版10　建物址２、他

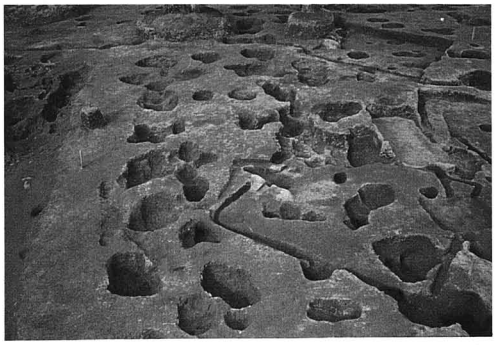
池　跡

第12 48、49号建物址

第46号建物址

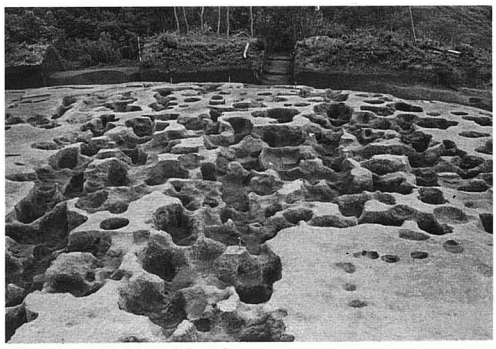
中央北側全景

第50号建物址



第22.42号建物址

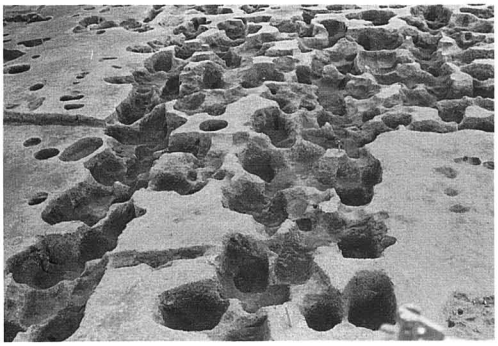
第５、12 48 49号建物址



北東部建物址群(中央)

北東部全景（中央）

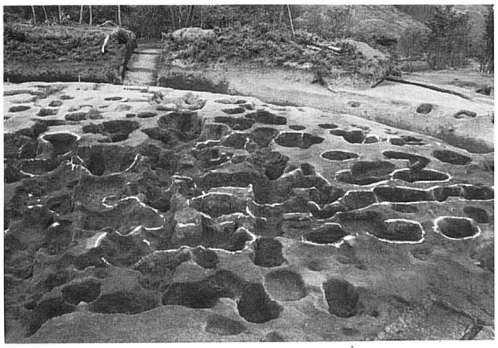
第９、10、27号建物址

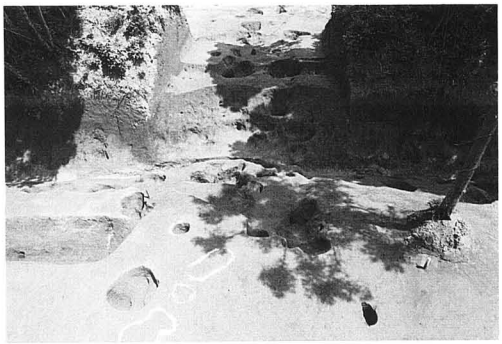

第５、20、28号建物址

第２、３号溝

第２、11、29、43号建物址

虎口１（門址）

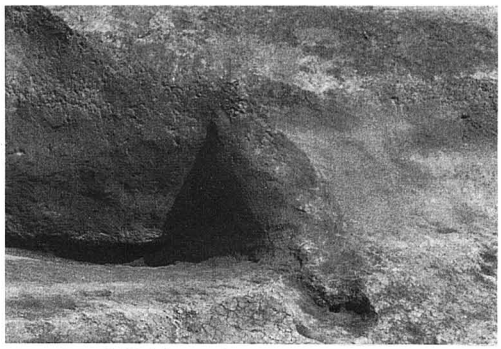

北東部東側建物址群


虎口１全景

図版12　虎　口

第４号堀内土橋（虎口５）

第１号堀北側虎口


第４号堀土橋（虎口６）

第１号堀北東虎口（虎口４）

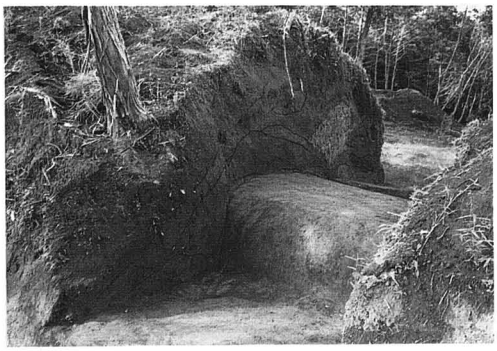
東南谷頭部虎口

北東部虎口

第５号堀土橋（虎口９）

第８号堀虎口（虎口10）

Ⅰ郭南側土塁（東側）



Ⅰ郭北側土塁

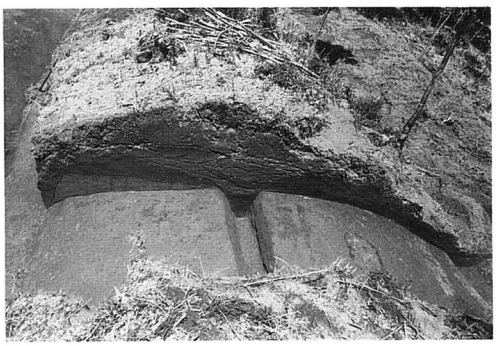
Ⅰ郭西側土塁

Ⅰ郭北側土塁

Ⅰ郭西側土塁

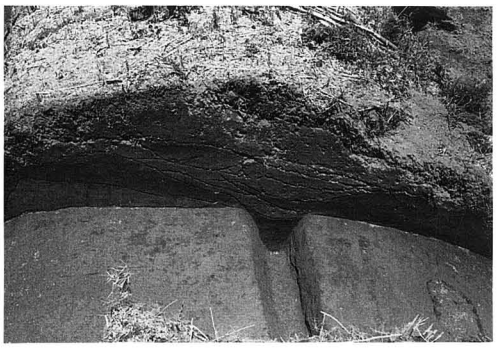
Ⅰ郭北側内土塁

Ⅰ郭北側土塁（北西部）



Ⅰ郭北側土塁

図版14　土壙・土層2

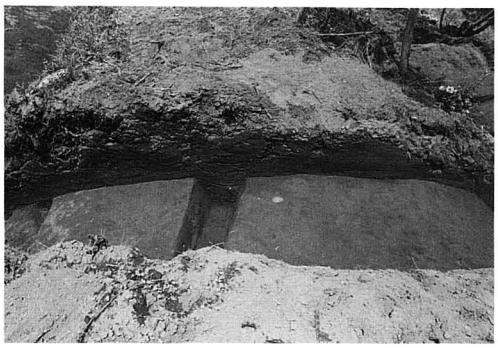


Ⅰ郭北側土壙

Ⅰ郭東側土壙

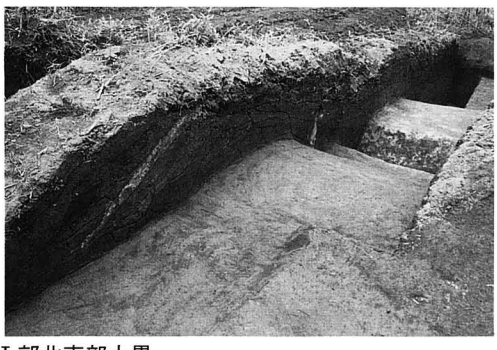
Ⅰ郭北東部土壙

Ⅱ郭西側土壙



Ⅰ郭北東部土壙

Ⅱ郭南側土壙



Ⅰ郭北東部土壙

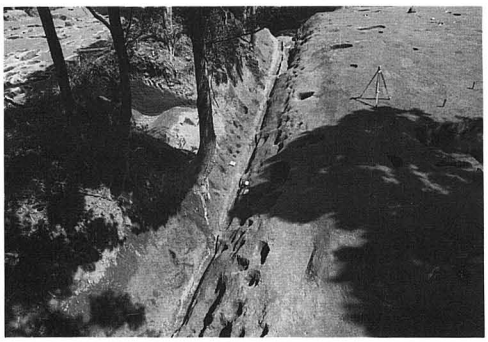
Ⅱ郭南側土壙

第1号堀南側(東)

第1号堀北西部

第1号堀南側中央部

第1号堀北側


第1号堀南側(西)

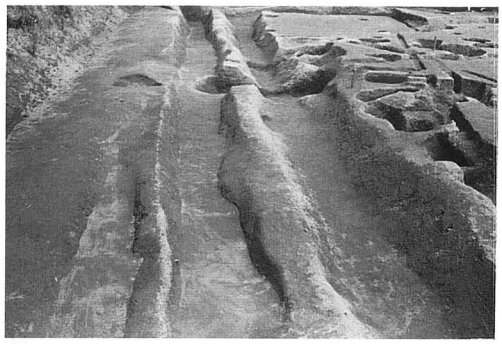
第1号堀北東部(西)

第1号堀南西コーナー部

第1号堀北東部(東)

図版16　堀2

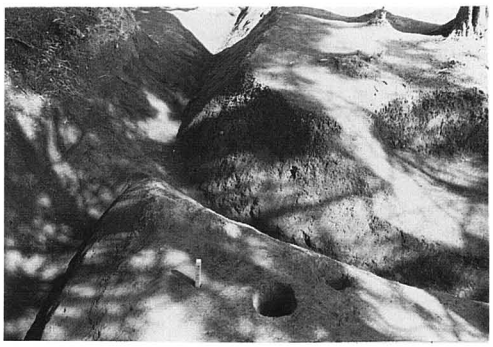
第1号堀東側(北)


第2、3号堀

第1号堀東側(南)

第2、3号堀

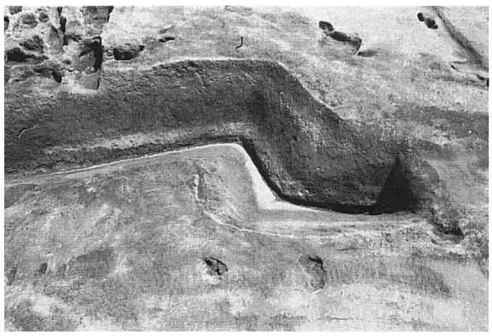
第1号堀南東コーナー


第5号堀北側コーナー部

第2、3号堀全景

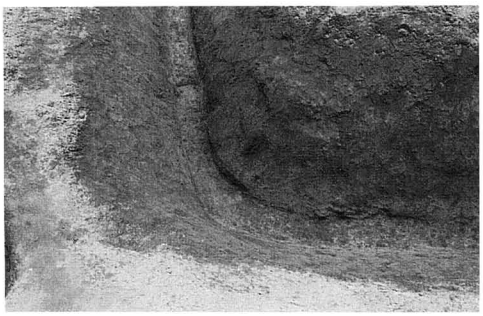
第3号堀土層

第 4 号堀西側


第 4 号堀北側中央部

第 4 号堀西側全景

第 4 号堀東側全景


第 4 号堀北西コーナー

第 4 号堀東側(北)

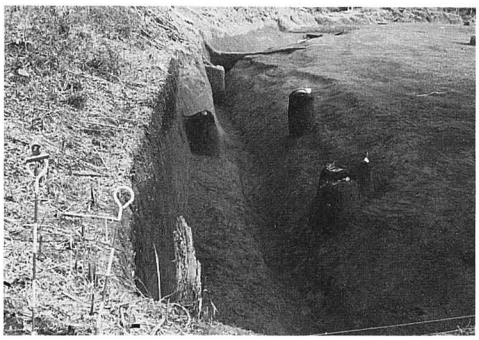
第 4 号堀北側全景(西)

第 4 号堀南東部

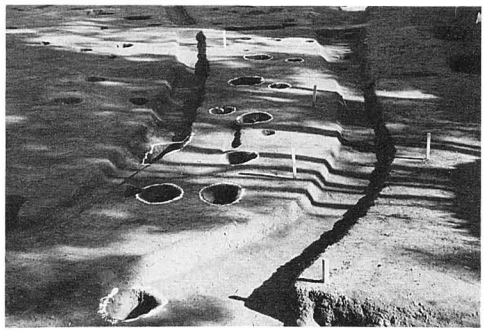
図版18　堀４、溝１

第５号堀北西側

第２、５号堀交差部

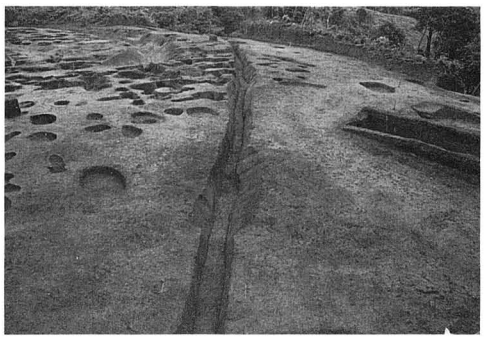


第５号堀北側



第１、２号溝

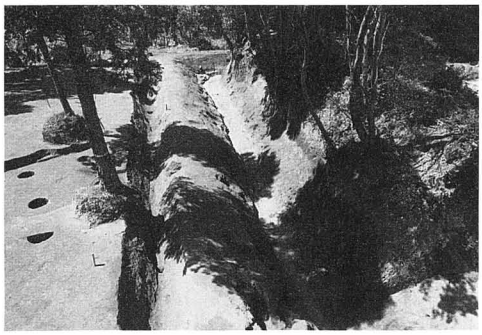
第５号堀北東側



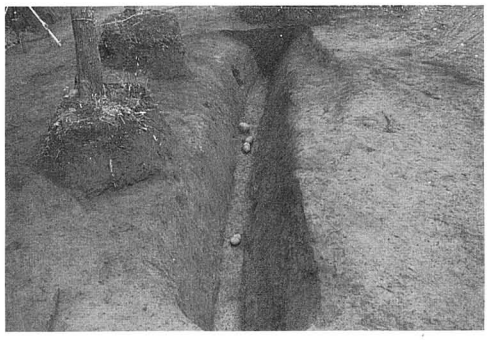
第15号溝

第５号堀東側

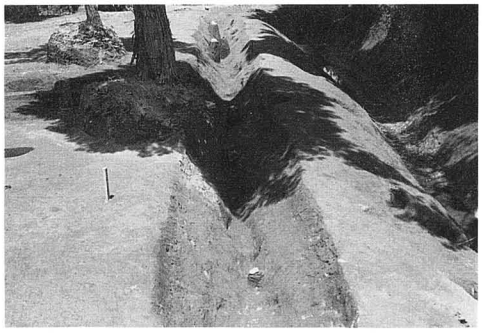
第１、３、５号溝



Ⅱ郭第７号堀全景



Ⅱ郭第８号堀西側

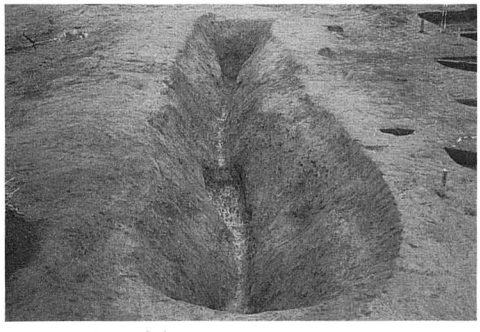


Ⅱ郭第７号堀

Ⅱ郭第８号堀西側

Ⅱ郭第８号堀全景

Ⅱ郭第９号堀西側

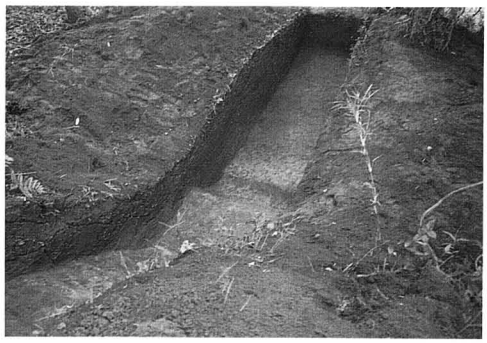


Ⅱ郭第８号堀東側

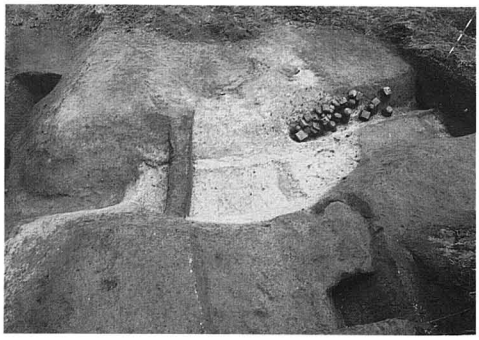
Ⅱ郭第９号堀合流部

図版20　堀６（全景・土層１）

Ⅱ郭第９、12号堀合流部



Ⅱ郭第12号堀北側



Ⅱ郭第12、13号堀中央部全景

Ⅰ郭第１号堀土層

Ⅱ郭第12号堀中央部

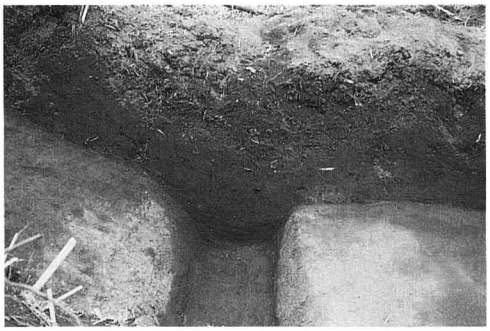
Ⅰ郭虎口１土層

Ⅱ郭第12、13号堀北側

Ⅰ郭北側虎口土層

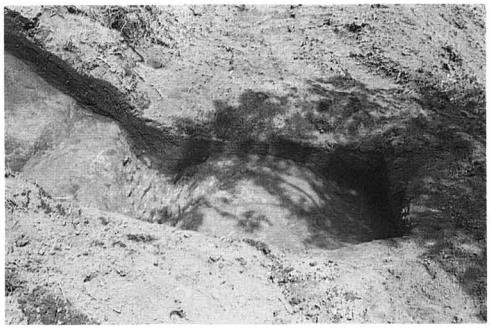
Ⅰ郭第１号堀東側

Ⅰ郭第２、３号堀



Ⅰ郭第１号堀東側

Ⅰ郭第４号堀（北）



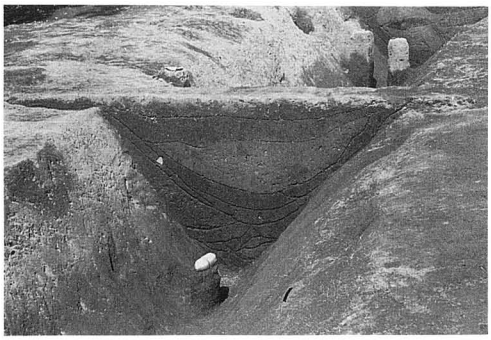
Ⅰ郭第１号堀北側

Ⅰ郭第４号堀（中央）

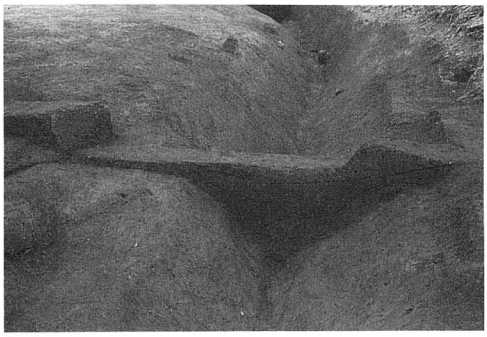
Ⅰ郭第１号堀北東部

Ⅰ郭第４号堀（西の北）

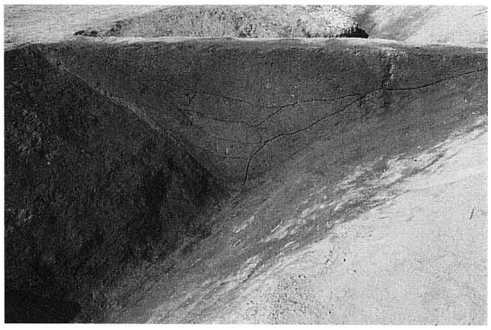
図版22　堀８、溝２（土層３）



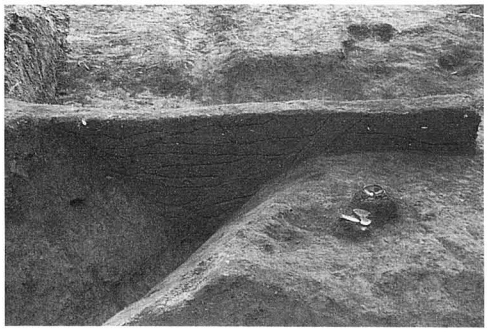
Ⅰ郭第４号堀（南）



Ⅰ郭第５号堀北東部

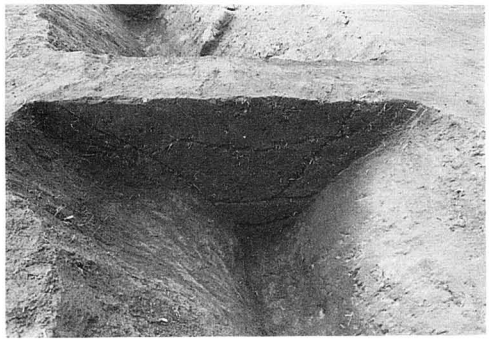


Ⅰ郭第４号堀北側



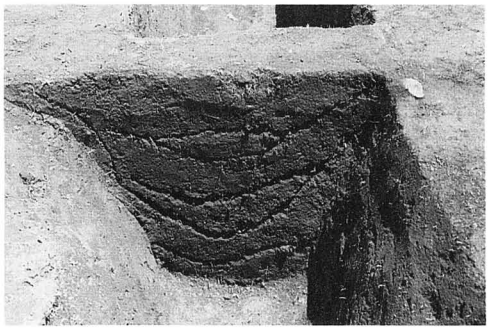
Ⅰ郭第５号堀北西部

Ⅰ郭第４号堀東側

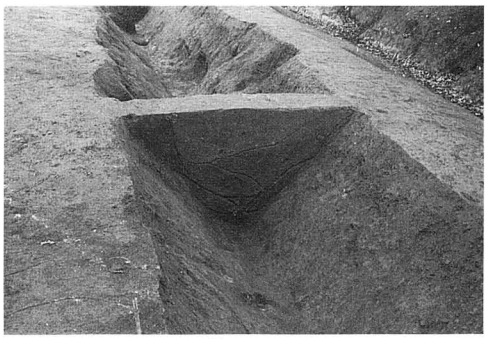


Ⅰ郭第５号堀北側

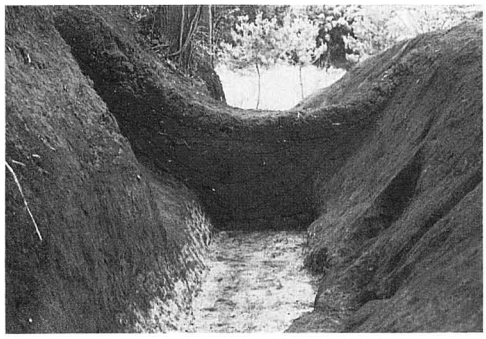
Ⅰ郭第５号堀北側



Ⅰ郭第15号堀東側



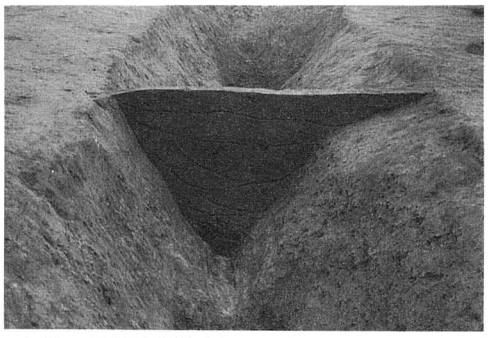
Ⅱ郭第７号堀東側土層



Ⅱ郭第９号堀中央部土層

Ⅱ郭第７号堀西側土層

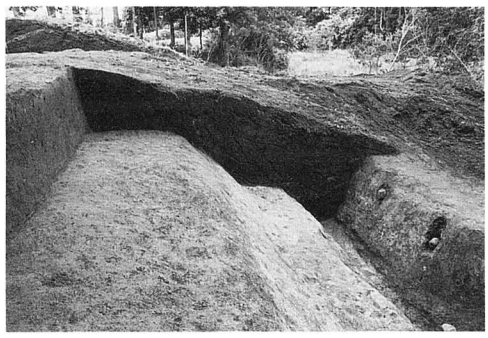
Ⅱ郭第12号堀中央部土層



Ⅱ郭第８号堀東側土層

Ⅱ郭第12号堀中央部土層

Ⅱ郭第８号堀西側土層

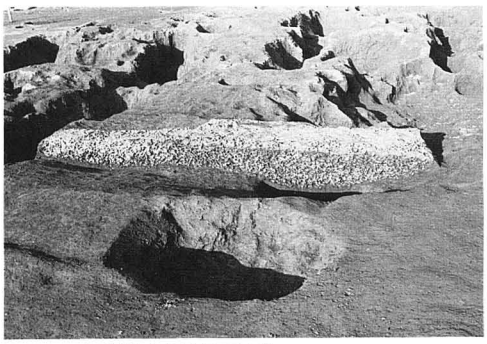


Ⅱ郭第12、13号堀土層

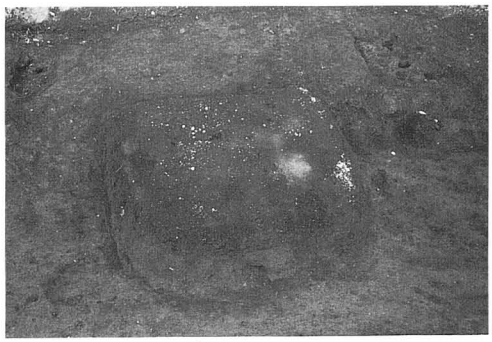
図版24　貝　層

第18号建物址内貝層（貝層５）

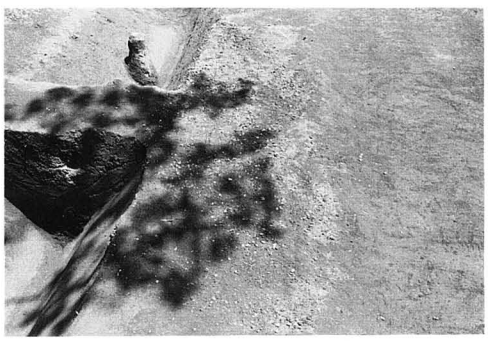
１溝北東部貝層



第18号建物址土層（貝層５）

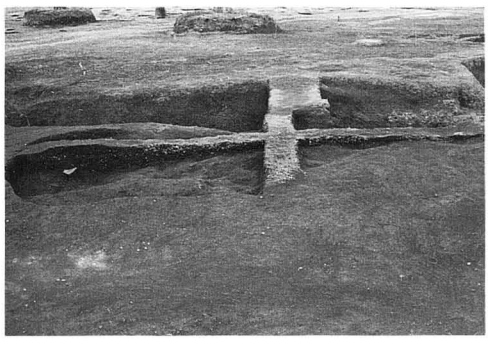


７溝内貝層（貝層７）

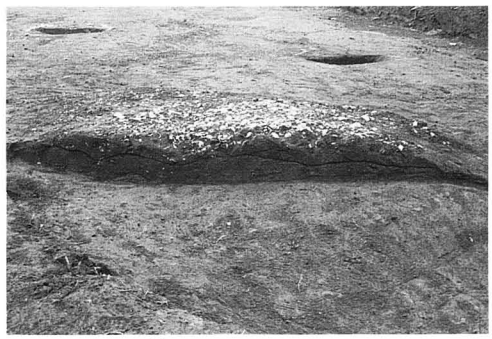


貝層３全景

南東部虎口貝層

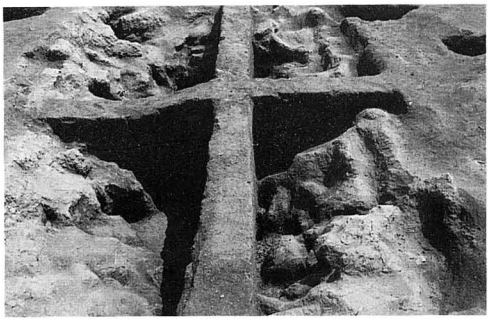


貝層３土層

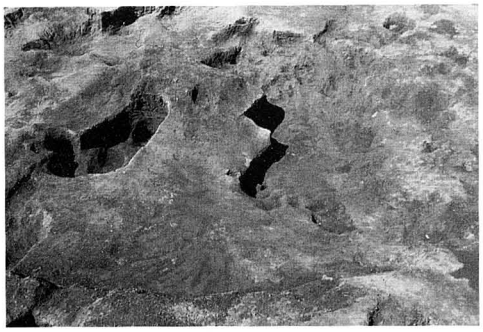


Ⅰ郭南東部貝層

第１号竪穴



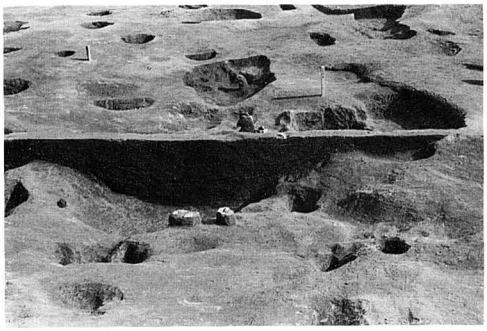
第２号製鉄址土層



第２、３号竪穴

第２号製鉄址中央部

第１号製鉄址土層

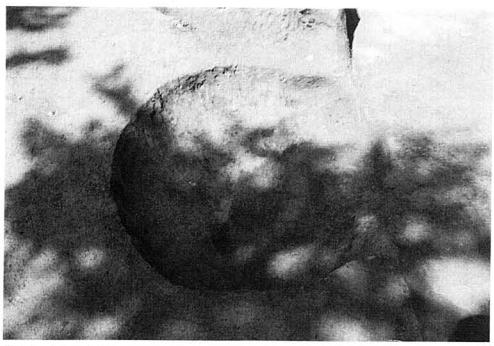


池跡土層

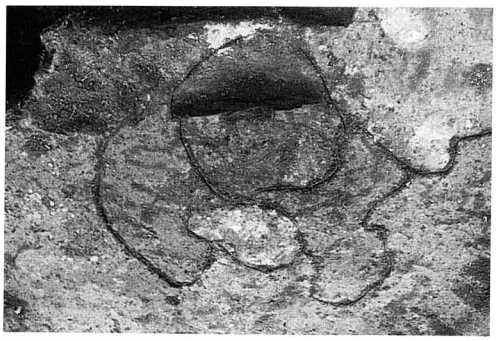
第１号製鉄址

池跡正面(中央部)

図版26　炉址


第 1 号炉址

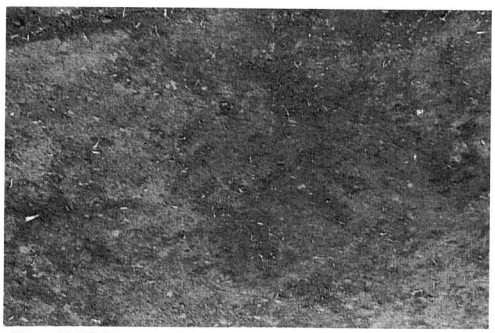
第 5 号炉址

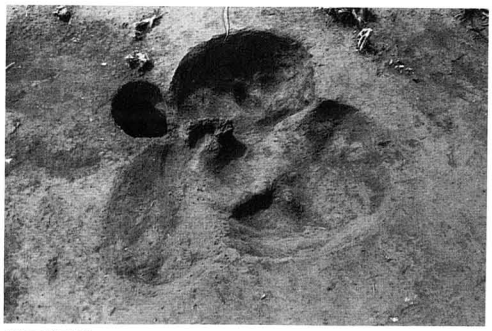

第 2 号炉址

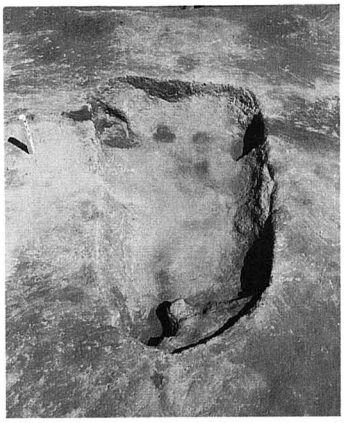
第 6 号炉址全景

第 3 号炉址

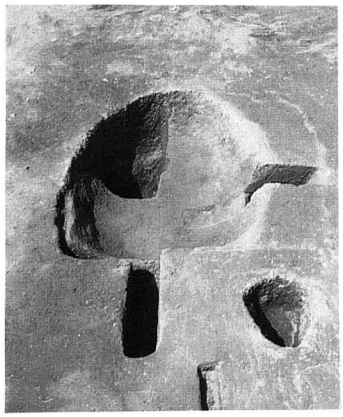
第 6 号炉址土層


第 4 号炉址


Ⅱ区炉址



1



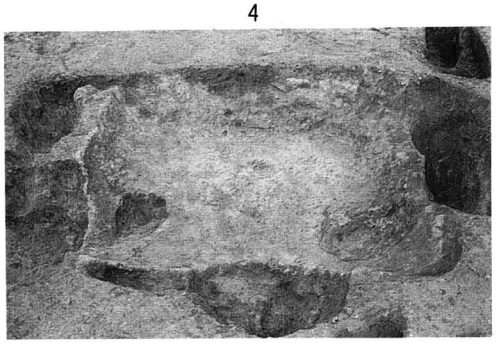
2

3

6

4

7

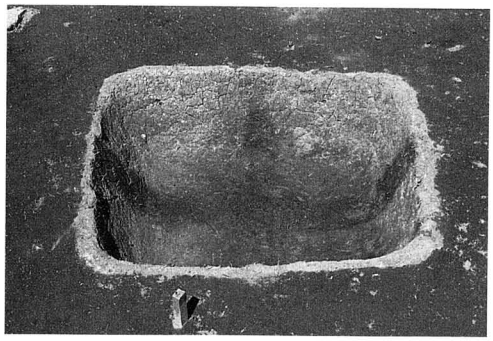


5

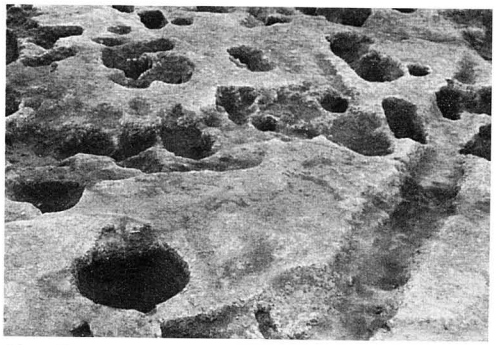
1　第１号土壙	5　第４号土壙
2　第２号土壙Ａ	6　第６号土壙
3　第２号土壙Ｂ	7　第７号土壙
4　第３、５号土壙	

図版28　土壙２

第８号土壙



第13号土壙

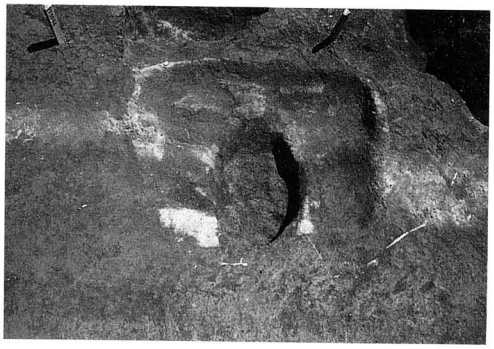


第９号土壙

第14号土壙

第10号土壙

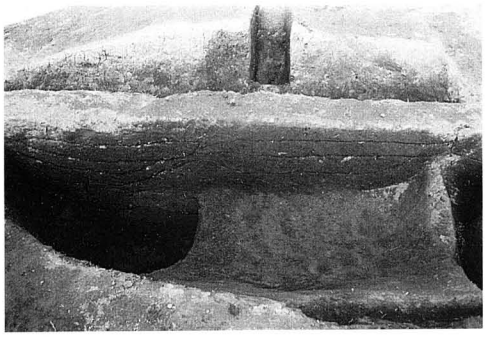
第15号土壙



第１１号土壙

第16号土壙

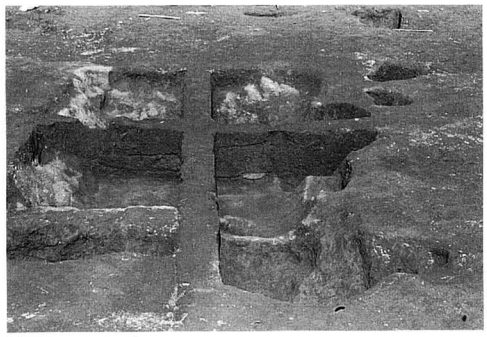
第17号土壙

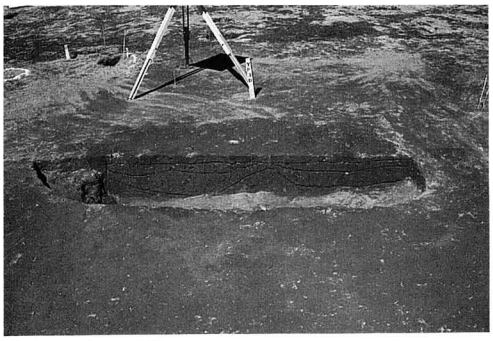

第 2 号土壙土層

第18号土壙

第 3 号土壙土層

第45 号土壙

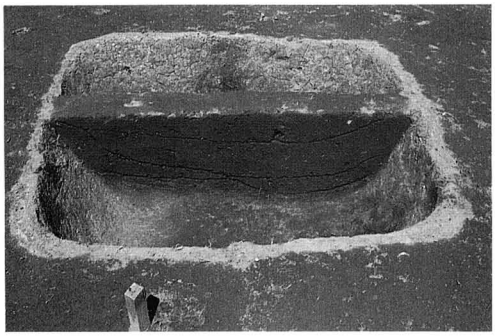

第 5 号土壙土層


第 1 号土壙土層

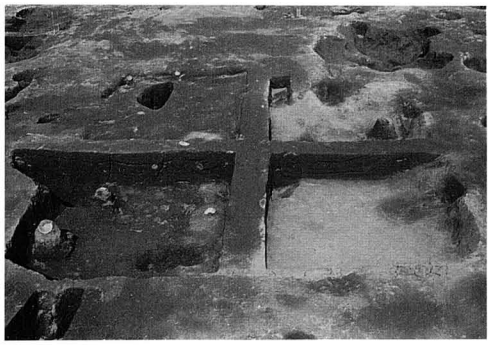
第 6 号土壙土層

図版30　土壙 4

第 7 号土壙土層

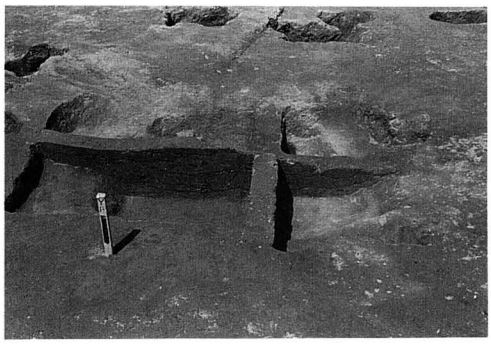


第13号土壙土層

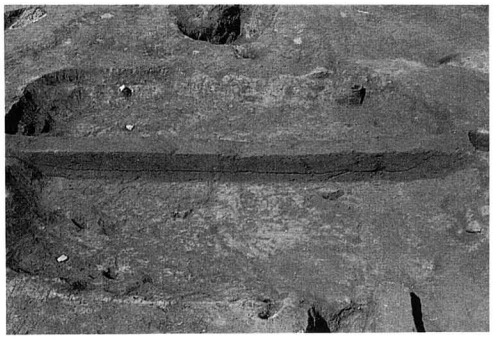


第 8 号土壙土層

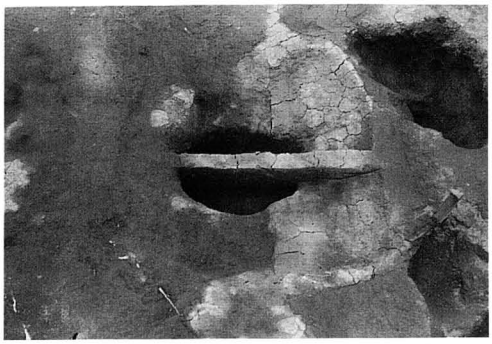
第15号土壙土層



第 9 号土壙土層



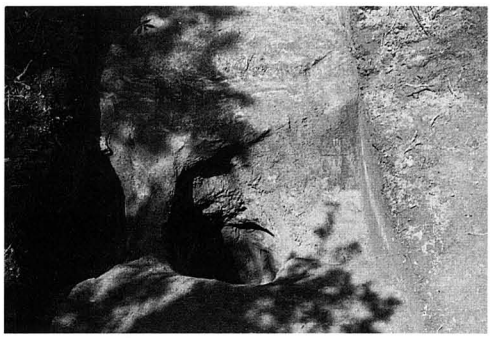
第16号土壙土層



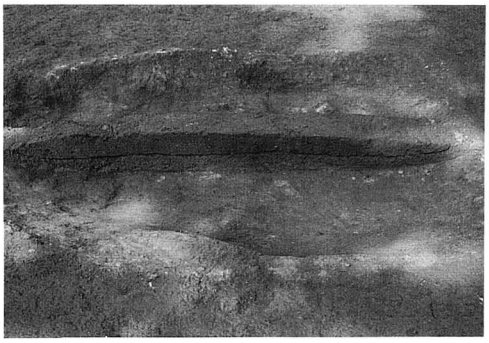
第11号土壙土層

第17号土壙土層

1

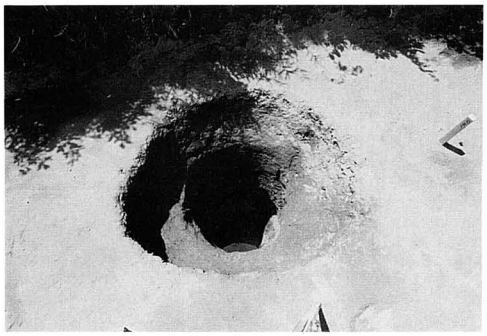


5

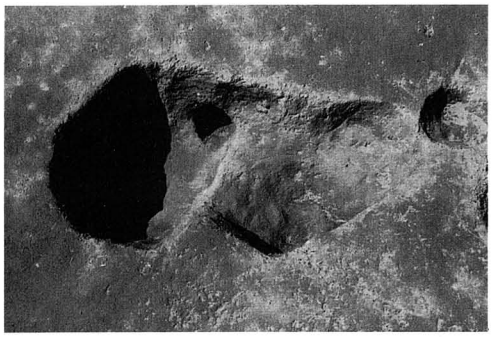


2

6



3



7

4

1	第５号土壙土層	5	（井戸３）
2	第18号土壙土層	6	第22号土壙（墓壙）
3	第20号土壙（井戸１）	7	第22号土壙
4	第21号土壙（井戸２）		

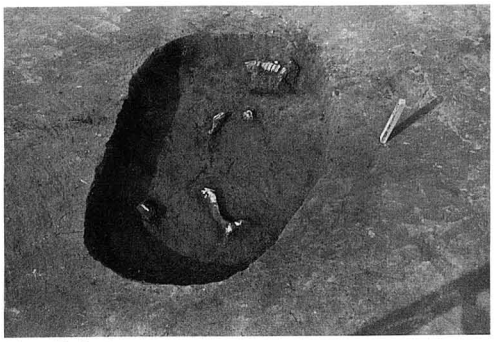
図版32　土壙 6

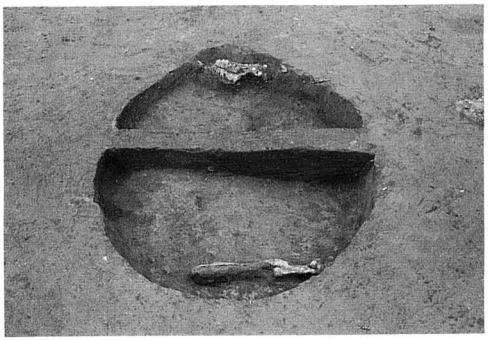
第22号土壙

第30号土壙

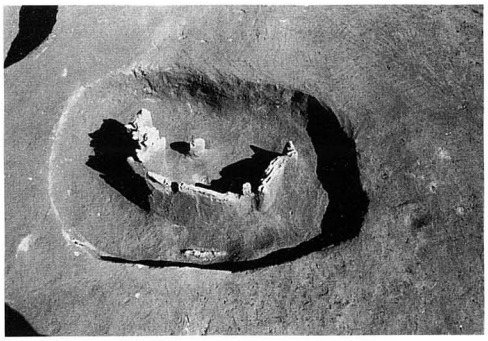
第22号土壙馬骨

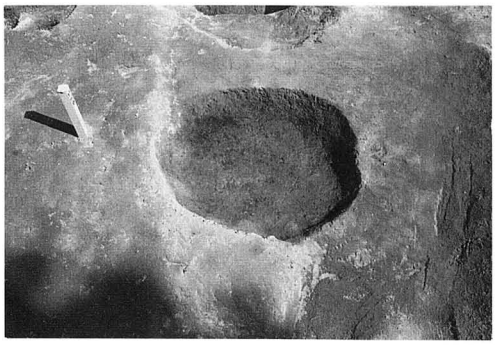
第30号土壙馬骨


第26号土壙


第60号土壙

第29号土壙


第61号土壙

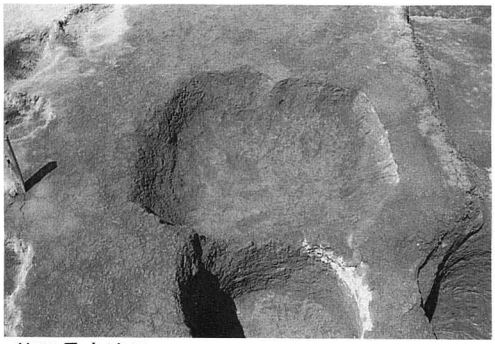

第35号土壙

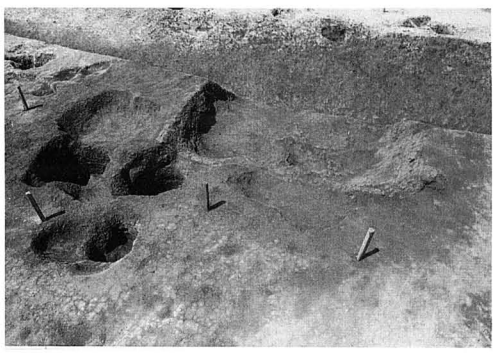
第45号土壙Ａ、Ｂ１

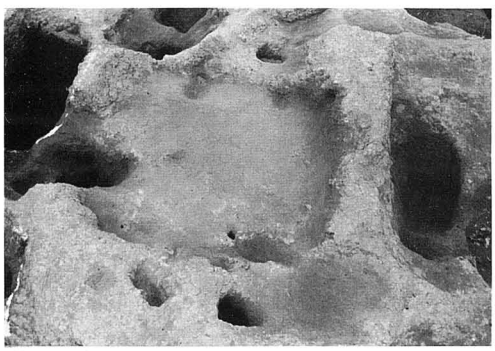
第40号土壙

第45号土壙Ａ１

第44号土壙


第45号土壙Ｂ


第45号土壙全景


第40号土壙

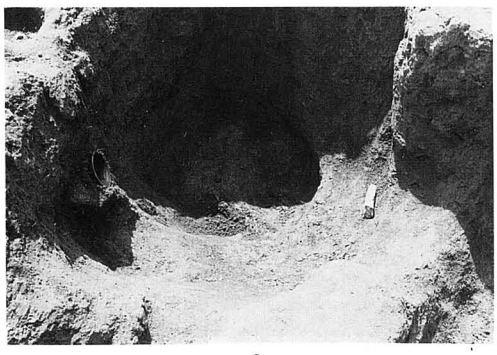
図版34　土壙 8

1

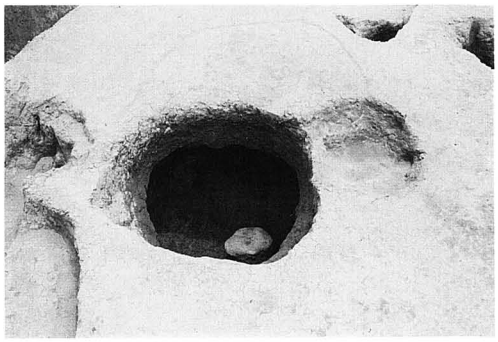
5

2

6



3



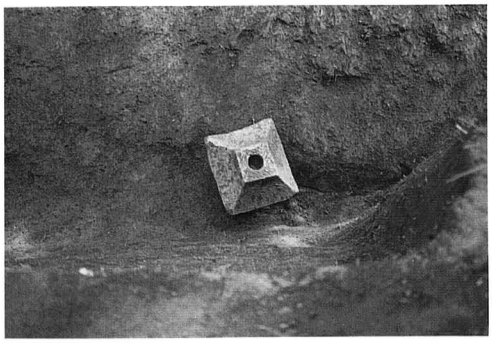
7

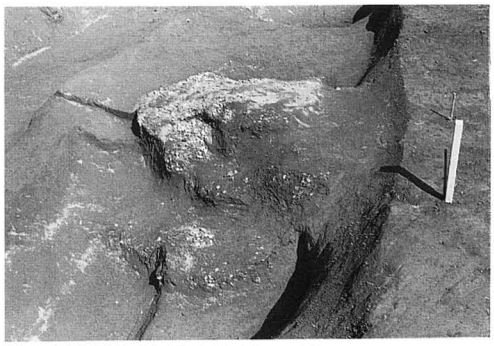
4

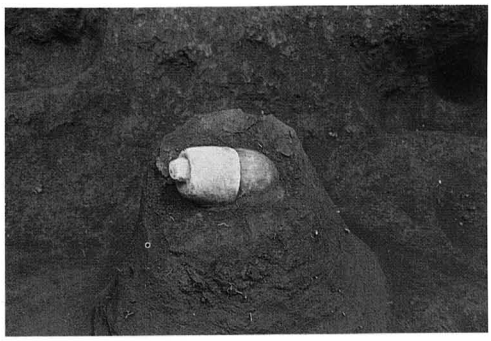
1　第36、37号土壙	5　第47号土壙
2　第42、43号土壙	6　第50、51、52号土壙
3　第46号土壙	7　地下式倉庫
4　第45号土壙	

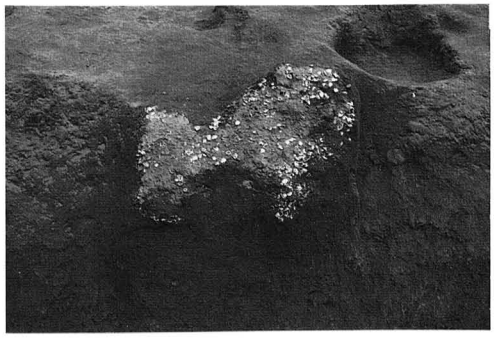
第12号堀石製品出土状況

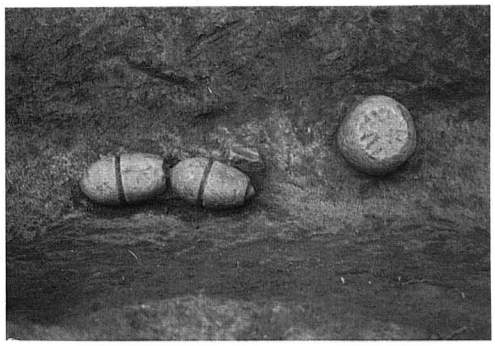
第２号堀内貝層（貝層１、２）


第７号堀五輪塔出土状況


第２号堀貝層全景（貝層１、２）

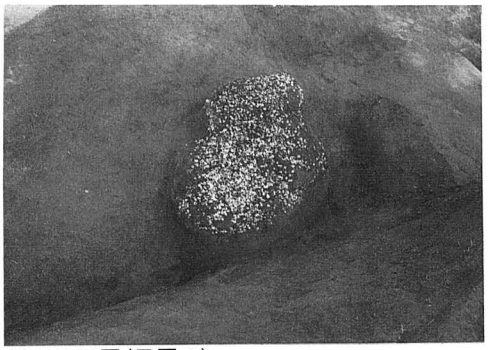

第７号堀五輪塔出土状況

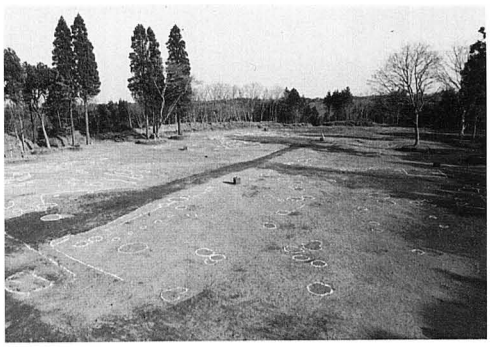

第４号堀貝層（貝層１、２）

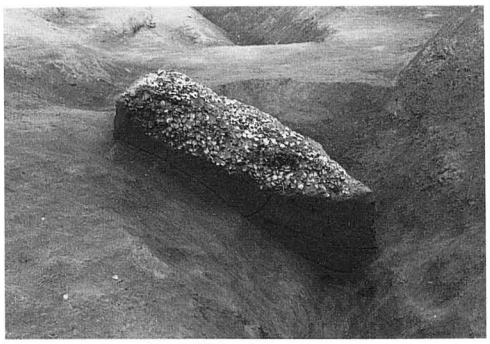

第８号堀五輪塔出土状況

第17号建物址内貝層

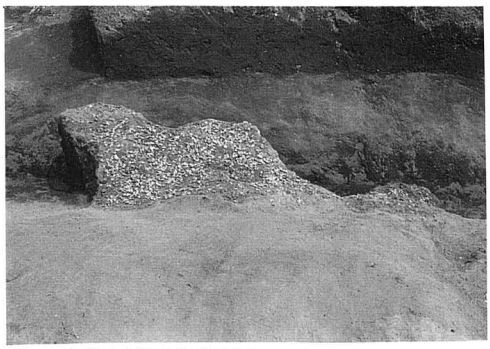
図版36　遺物出土状況２


第５号貝層（貝層４）


道 全 景

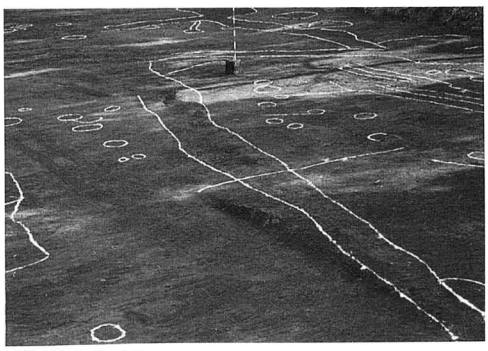

第５号堀内貝層（貝層４）

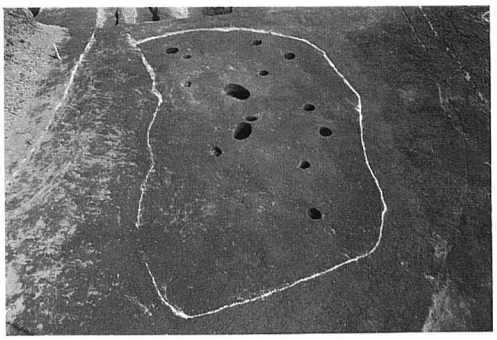
道 南 側


第７号溝内貝層（貝層７）

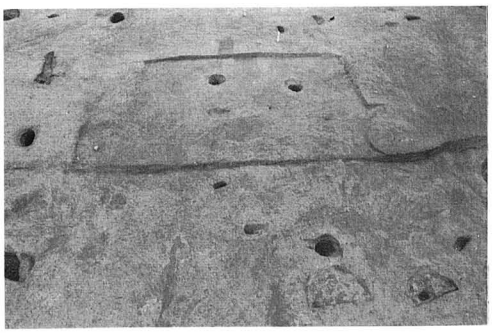
道 中 央 部

第５号堀内貝層


道 南 西 部

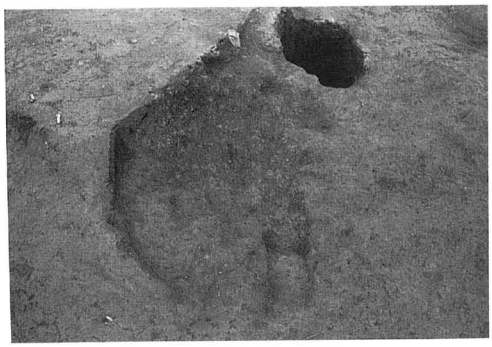


第1号住居址



第3号住居址全景

第2号住居址土層



第3号住居址カマド

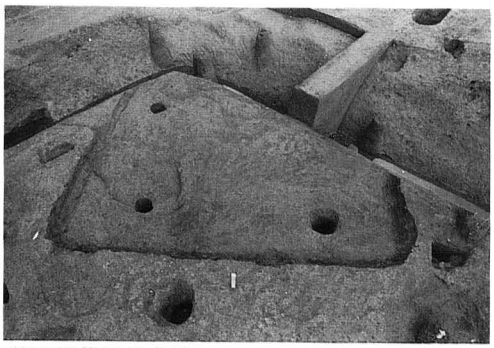
第2号住居址遺物出土状況

第4号住居址土層

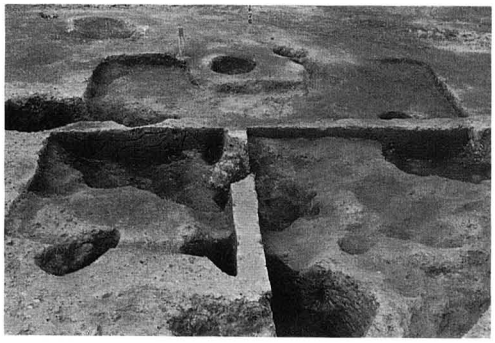
第2号住居址全景

第4号住居址遺物出土状況

図版38　住居址 2

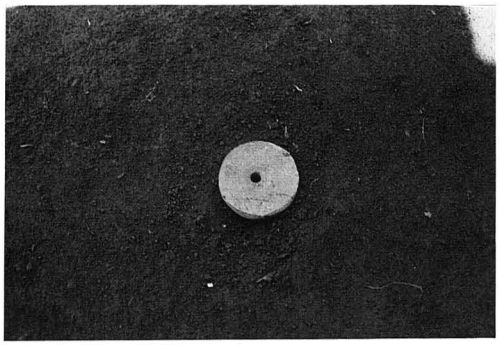

第 4 号住居址全景

第 6 号住居址全景

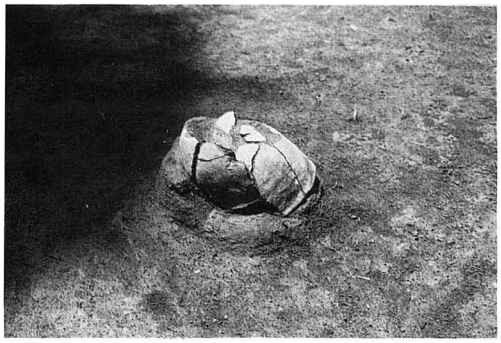

第 5 号住居址土層

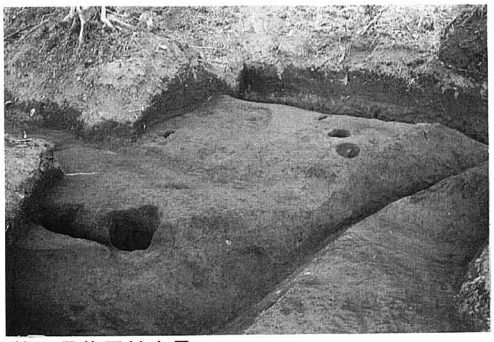
第 6 号住居址カマド

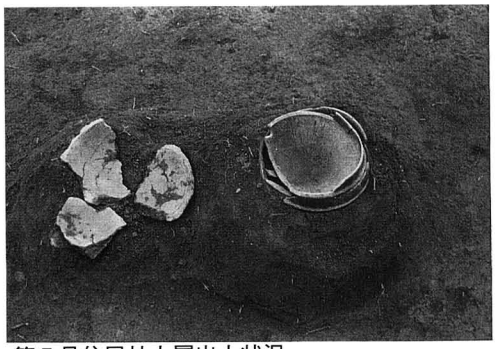
第 5 号住居址全景


第 6 号住居址紡鐘出土状況

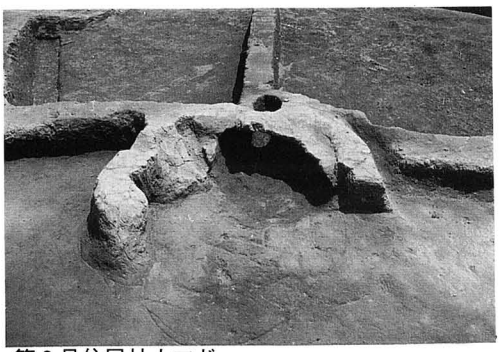
第 5 号住居址カマド


第 6 号住居址甕出土状況


第７号住居址全景


第７号住居址土層出土状況

第８号住居址土層全景


第８号住居址カマド

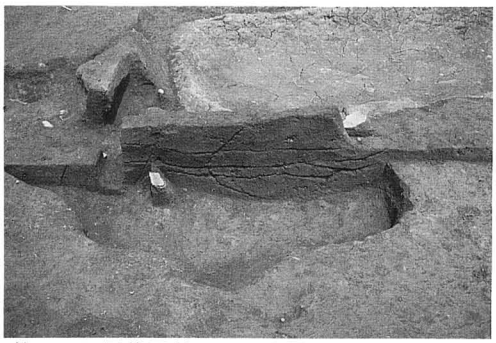
第９、10号住居址土層

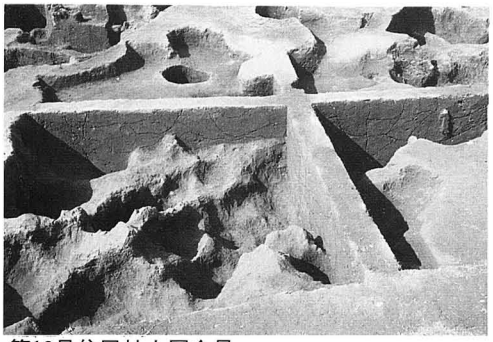
第９、10号住居址全景

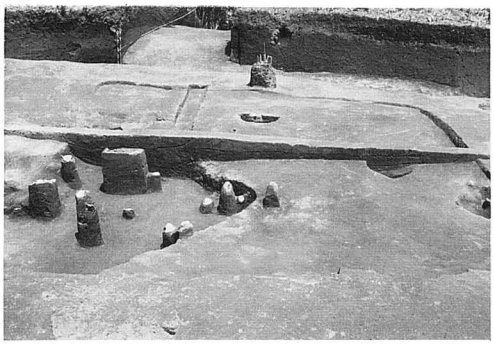
第９号住居址全景

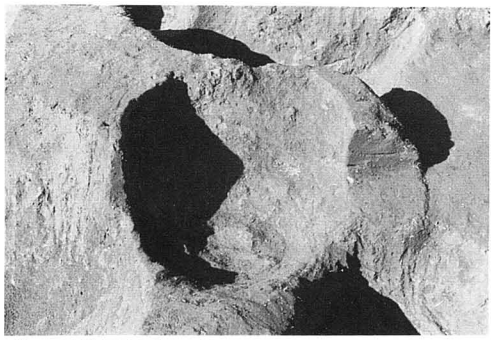
第10号住居址全景

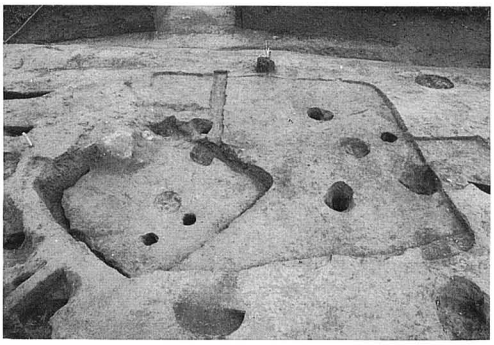
図版40　住居址４

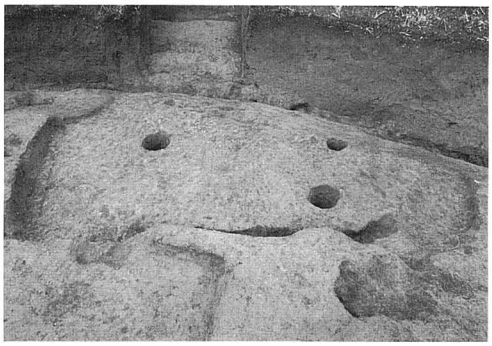

第９、10号住居址カマド土層


第13号住居址土層全景

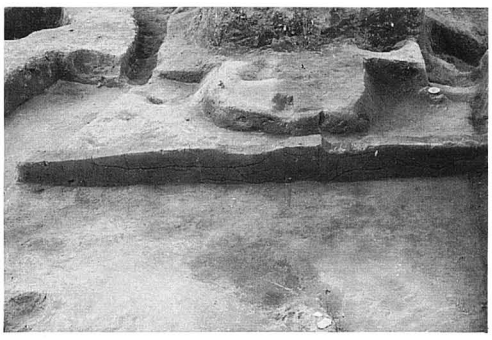

第11、12号住居址土層遺物出土状況


第13号住居址カマド

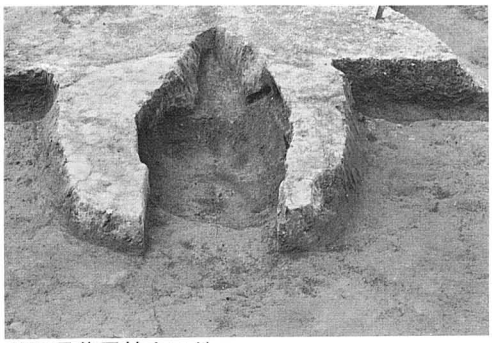

第11、12号住居址全景


第14号住居址全景

第11号住居址カマド


第15号住居址土層

第15号住居址全景


第16号住居址カマド

第15号住居址カマド

第17号住居址土層

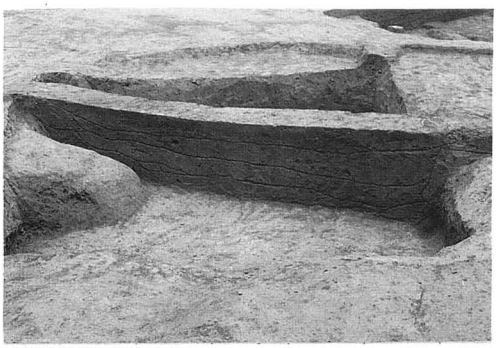
第16号住居址土層遺物出土状況

第17号住居址全景

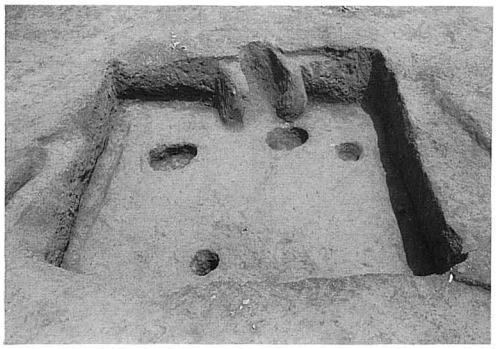
第16号住居址全景

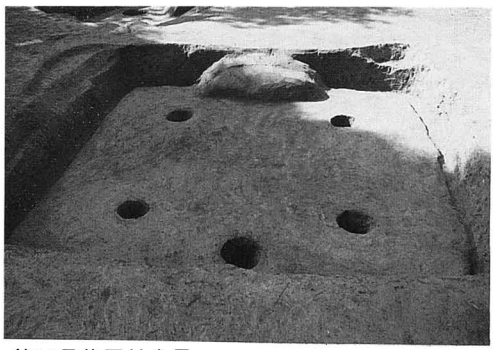
第17号住居址カマド

図版42　住居址 6

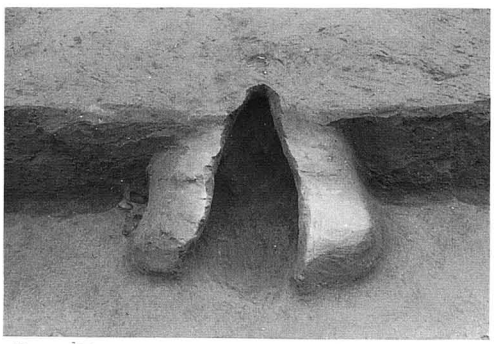

第18号住居址土層

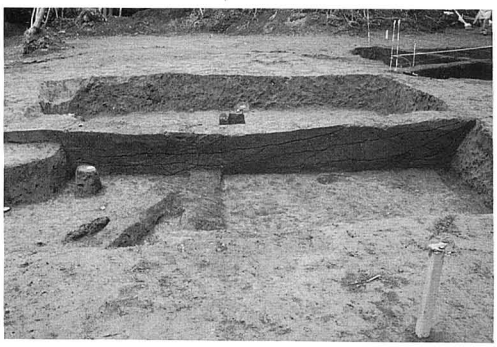
第19号住居址遺物出土状況


第18号住居址全景

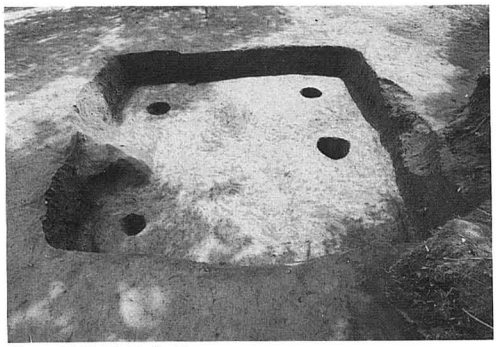

第19号住居址全景

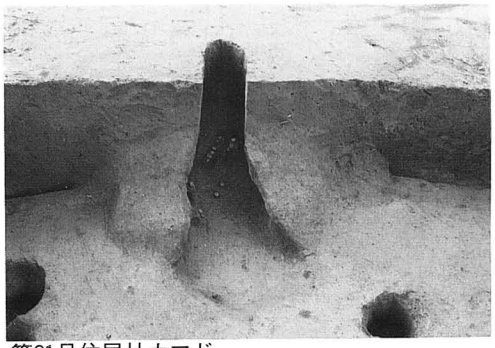
第18号住居址カマド

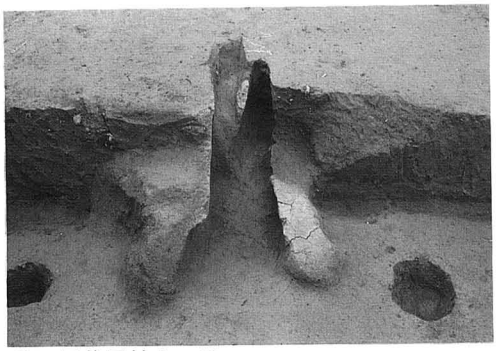

第19号住居址カマド


第19号住居址土層

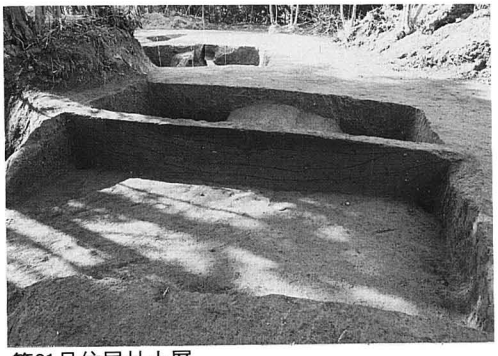
第20号住居址土層


第20号住居址全景


第21号住居址カマド


第20号住居址カマド

第22号住居址全景


第21号住居址土層

第23号住居址全景

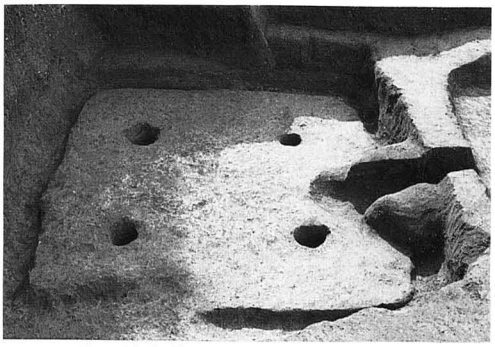
第21号住居址全景

第23号住居址カマド

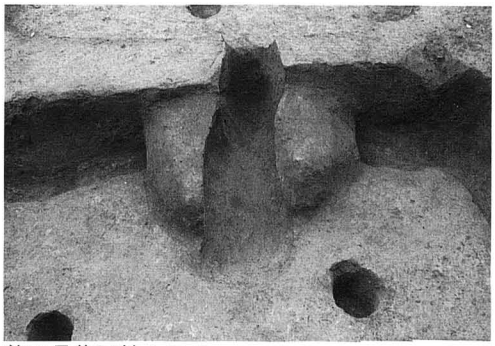
図版44　住居址８

第24号住居址土層遺物出土状況

第25号住居址カマド


第24号住居址全景

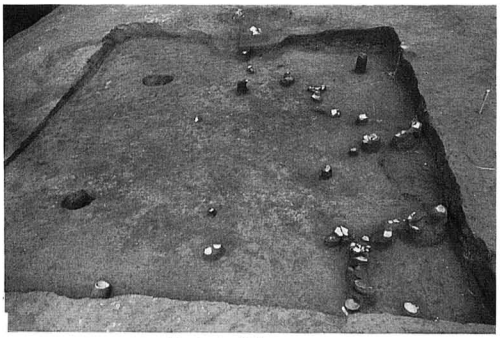
第26号住居址土層

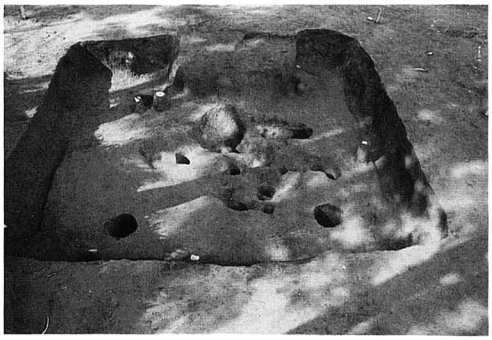

第24号住居址カマド

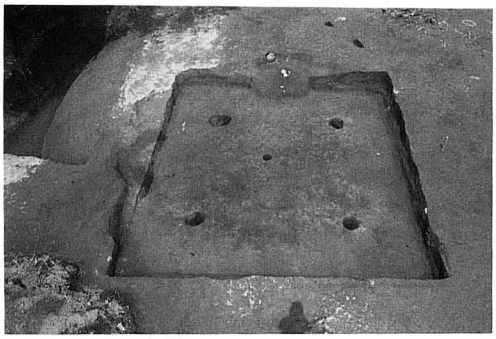
第26号住居址全景

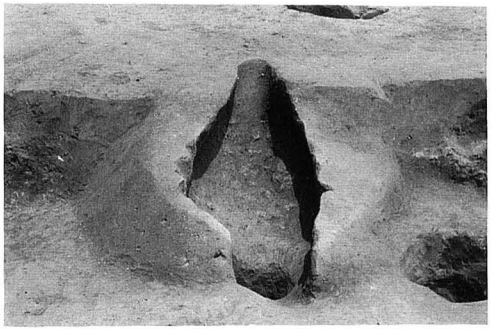
第25号住居址全景

第26号住居址カマド

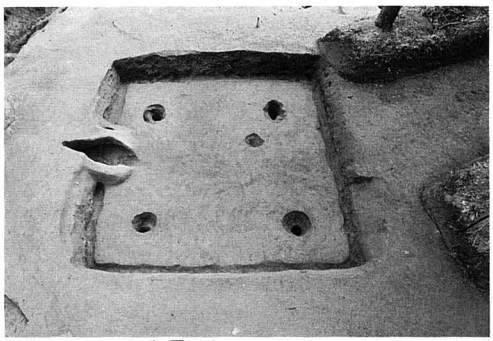

第27号住居址遺物出土状況

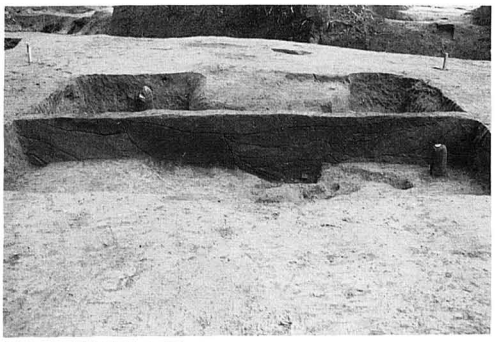

第28号住居址全景、遺物出土状況

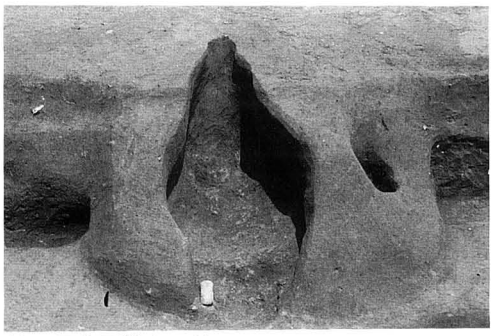

第27号住居址全景


第28号住居址カマド

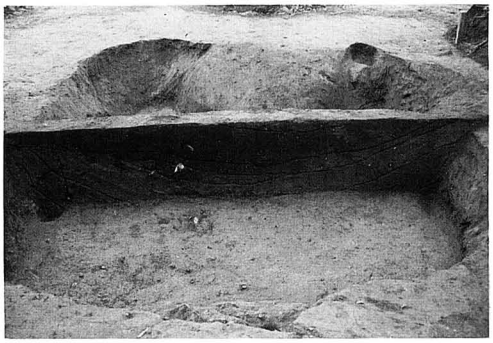
第27号住居址カマド


第29号住居址全景

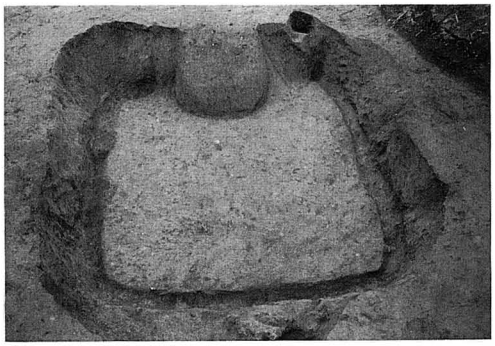

第26号住居址土層


第29号住居址カマド

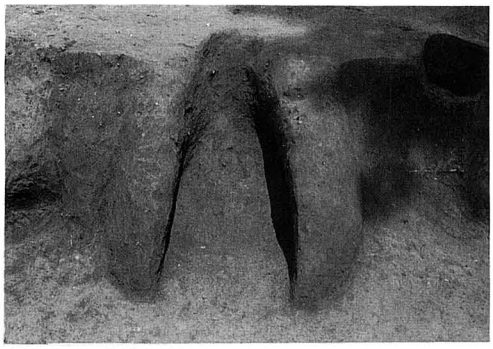
図版46　住居址10


第30号住居址土層

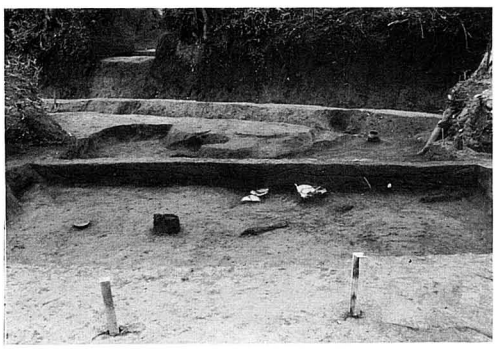
第31号住居址全景

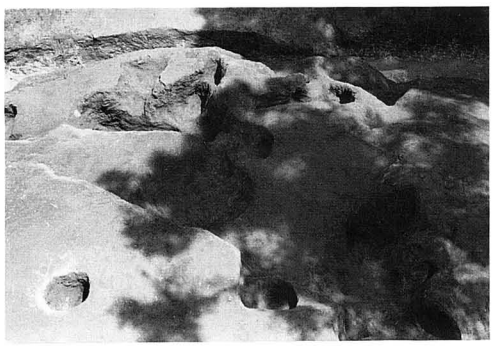

第31号住居址全景

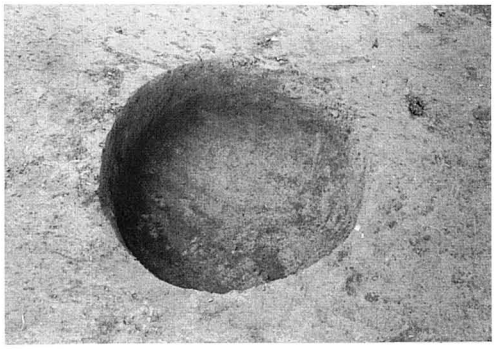
第31号住居址カマド


第３、13号住居址カマド

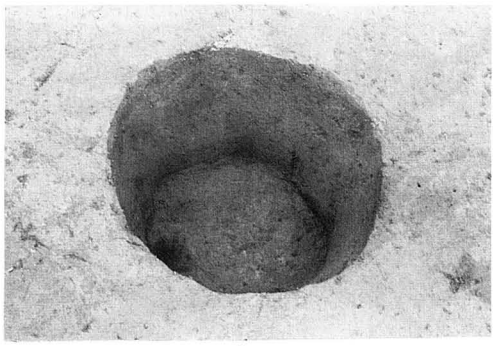
第31号住居址杯出土状況


第31号住居址土層遺物出土状況


第32号住居址全景

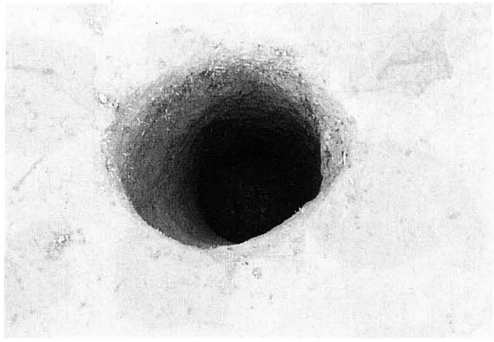


1

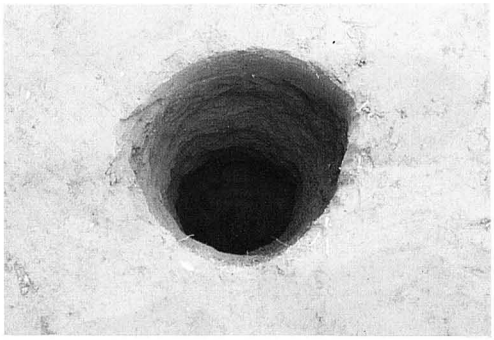


5

2

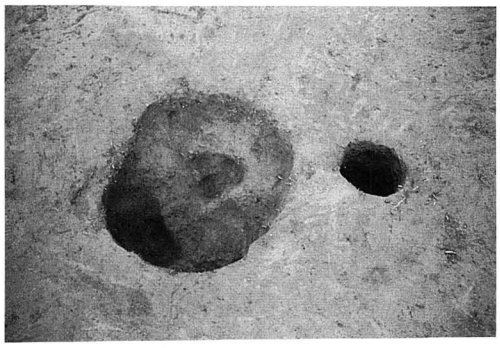


6



3

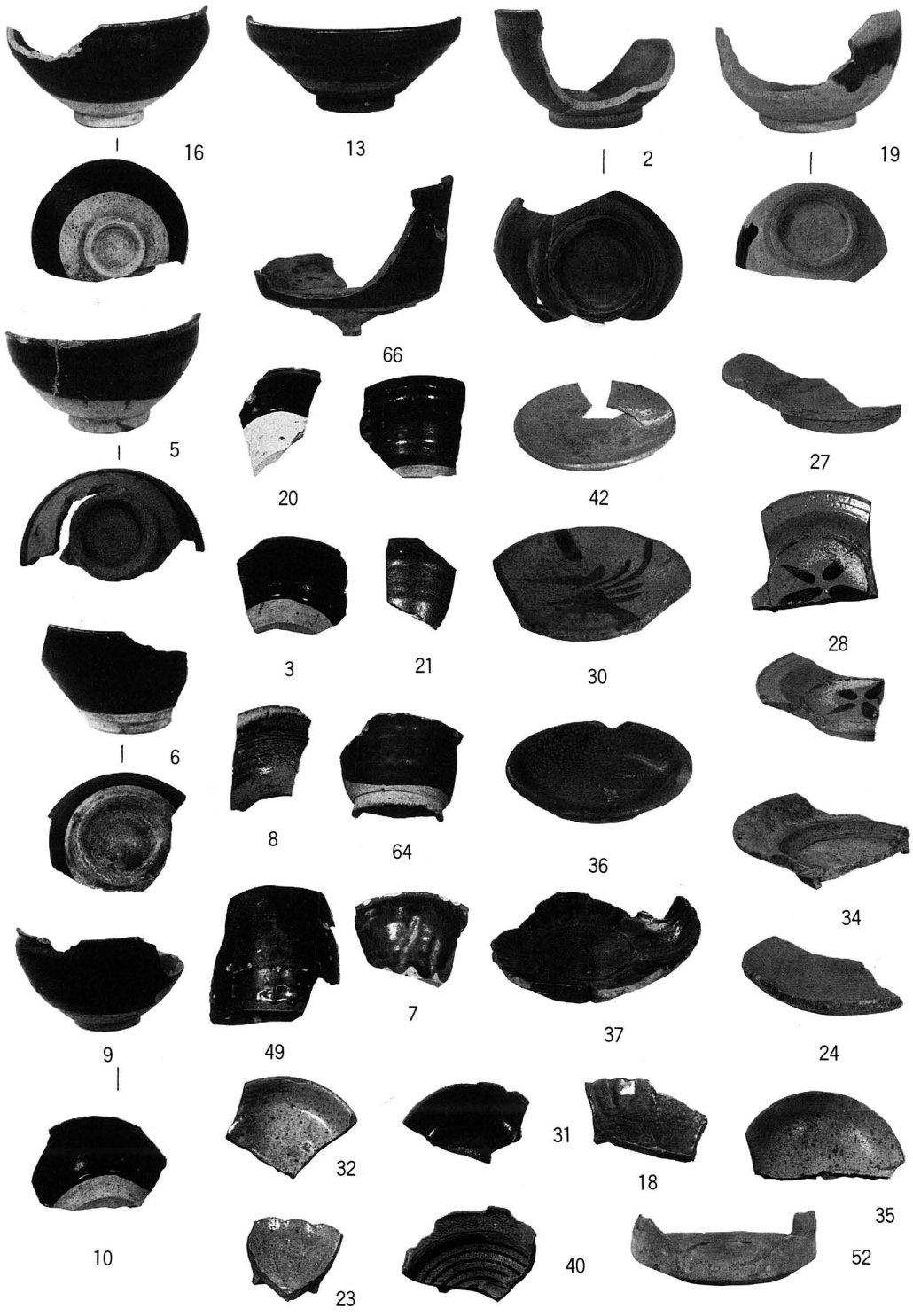
7



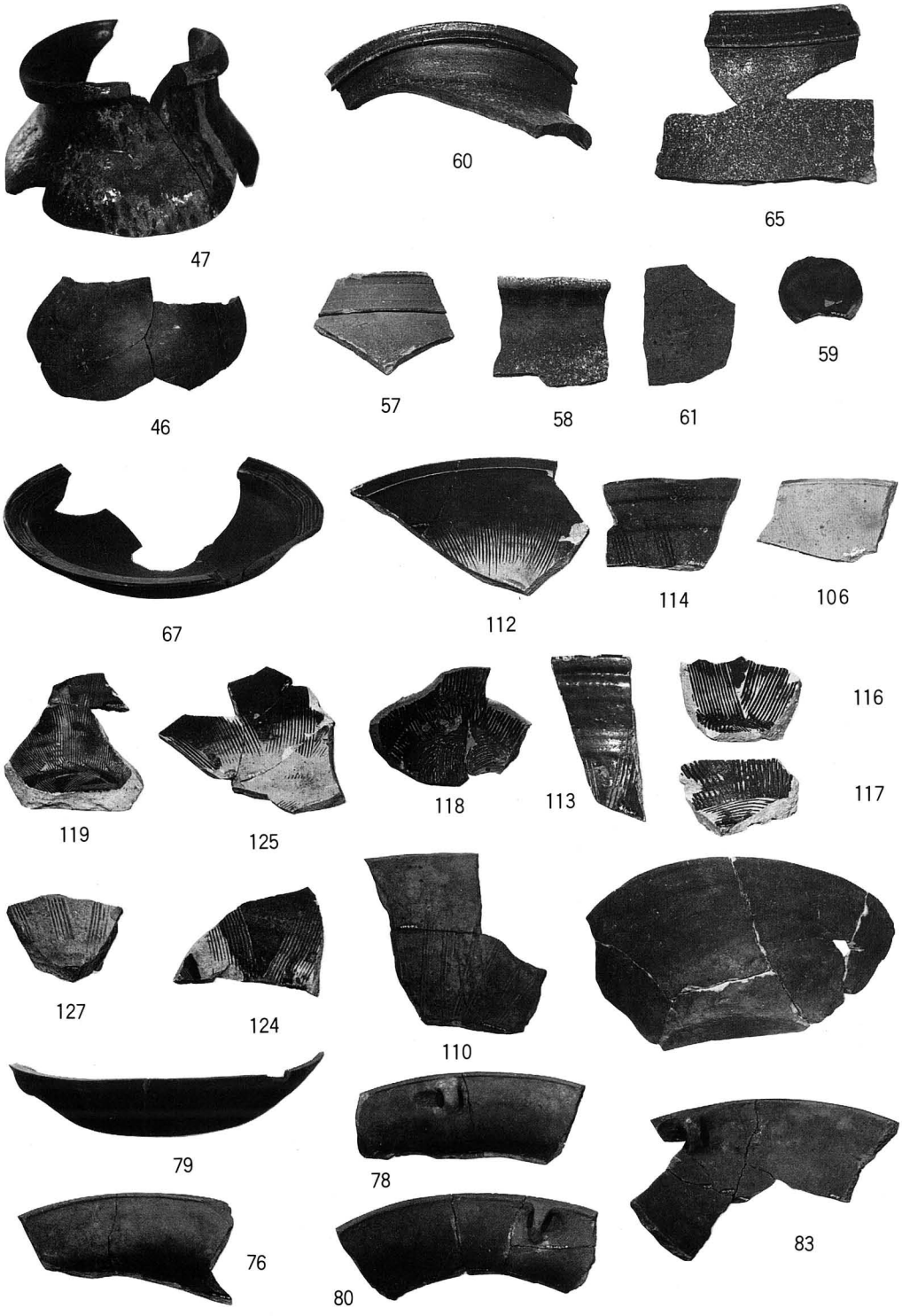
4

1　P 1 全景	5　P 5 全景
2　P 2 全景	6　P 6 全景
3　P 3 全景	7　P 7 全景
4　P 4 全景	

図版48　出土遺物１陶磁器

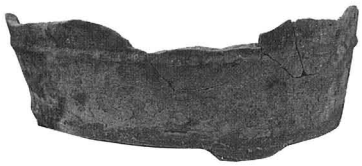


図版49　出土遺物２陶磁器、内耳



図版50　出土遺物３外耳、瓦質土器、鉄製品

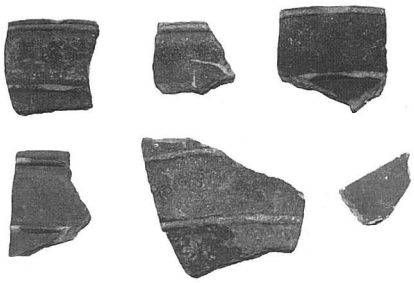
86、87



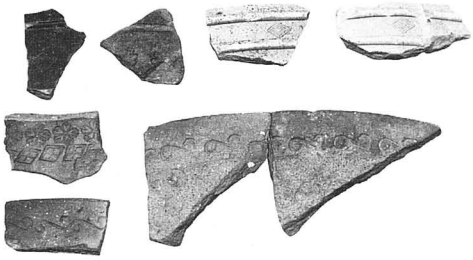
90

74

75



91～96



97～105

139

132

142

133

136

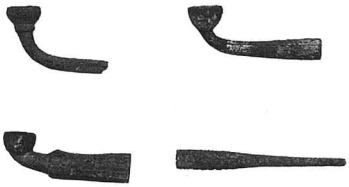
137

135

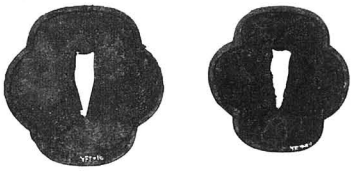
134

128

129～131



143～146



140～141

図版51　出土遺物４、カワラケ、古銭、砥石玉

150

168

169

170

171

172

173

174

183

194

195

198

199

201

262

159

160

161

162

166

182

187

188

189

190

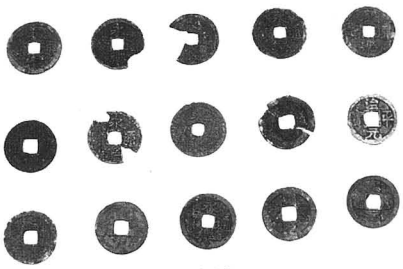
192

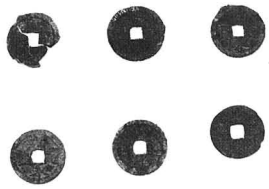
197

203

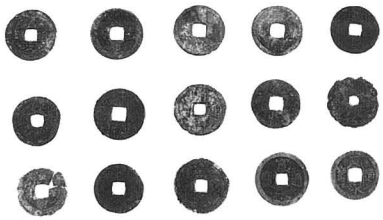
205

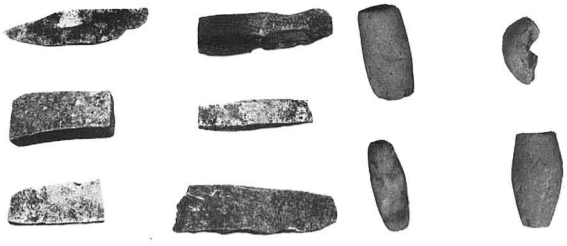
207


古銭


古銭

砥石（209～214）


古銭


砥石（217～2255 ）

土製品

図版52　出土遺物５、瓦質土器、石製品

68

69

70

274

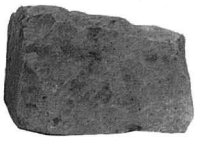
287

295

275

289

297


278

294

298

283

292

300

286

293

296

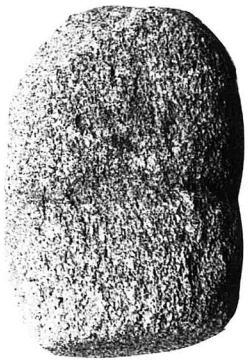
302

図版53　出土遺物６、石製品

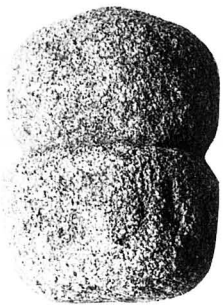
304

305

315



316



317

320

325

326

331

図版54　出土遺物７、住居址１

第２号住居址

第２号住居址

第８号住居址

第22号住居址

第29号住居址

第29号住居址

第33号住居址

第33号住居址

第２号住居址

第２号住居址

第２号住居址

第２号住居址

第２号住居址

第２号住居址

第４号住居址

第７号住居址

第８号住居址

第８号住居址

第10号住居址

第12号住居址

第19号住居址

第19号住居址

第21号住居址

第21号住居址

第30号住居址

第31号住居址

第31号住居址

第31号住居址

第31号住居址

第30号住居址

第９号住居址

第19号住居址

第30号住居址

第２号住居址

第２号住居址

第12号住居址

第21号住居址

第21号住居址

第21号住居址

第29号住居址

第29号住居址

第32号住居址

第33号住居址

第31号住居址

第31号住居址

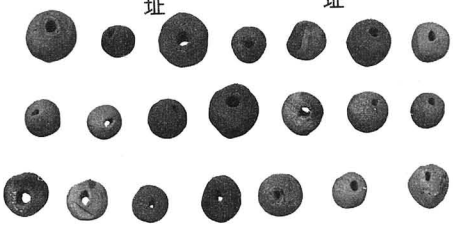
第８号住居址

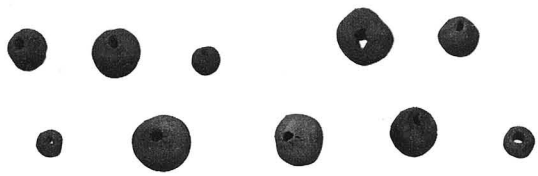
第29号住居址

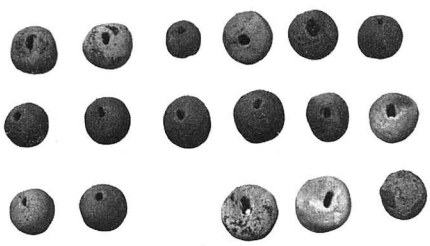
第25号住居址

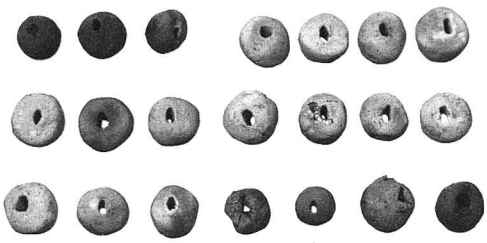
第26号住居址

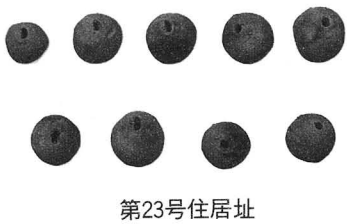
第10号住居址

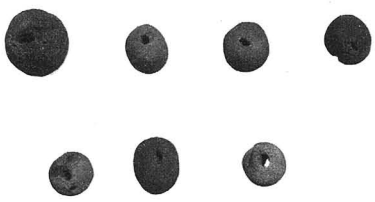

第18号住居址


第19号住居址　第22号住居址

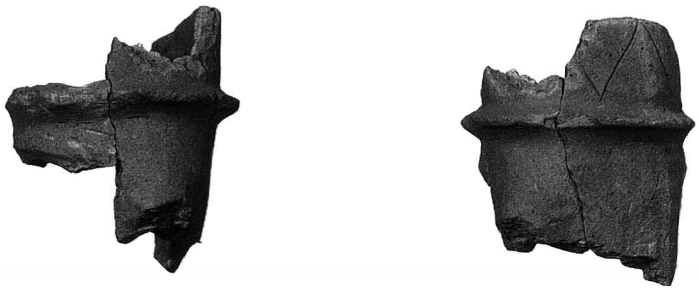

第21号住居址


第23号住居址


第23号住居址


第26号住居址

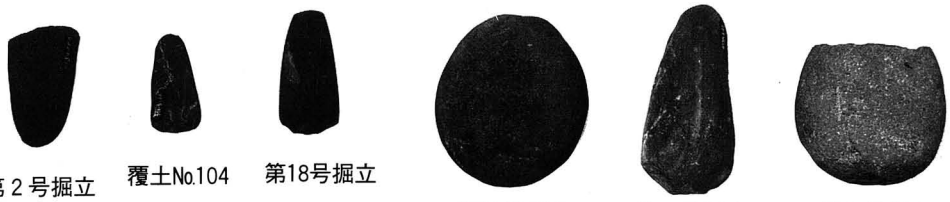
図版56　出土遺物９、埴輪、石器



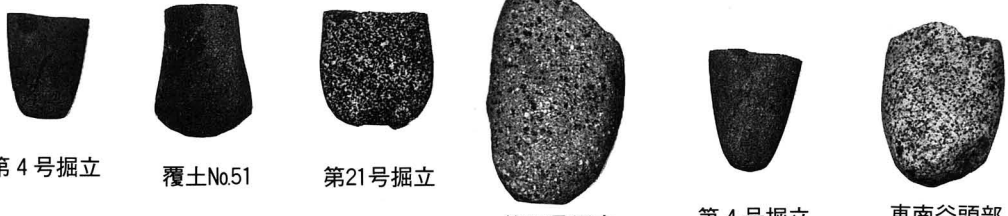
西側埋　第４号住居址、接合資料

第５号堀　第17号堀立　第４号掘立

覆土No.99　第34号掘立　覆土No.44



第２号掘立　覆土No.104　第18号掘立　第７号掘立　第４号掘立　第６号掘立



第４号掘立　覆土No.51　第21号掘立　第30号堀立　第４号掘立　東南谷頭部

覆土No.104

茨城県行方郡北浦村

古屋敷遺跡発掘調査報告書

編集発行　山田地区遺跡発掘調査会
北浦村山田2564-10
発行日　1990年3月
印　刷　株式会社 さんゆう社印刷
行方郡玉造町甲2641